

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第101集

坂戸市

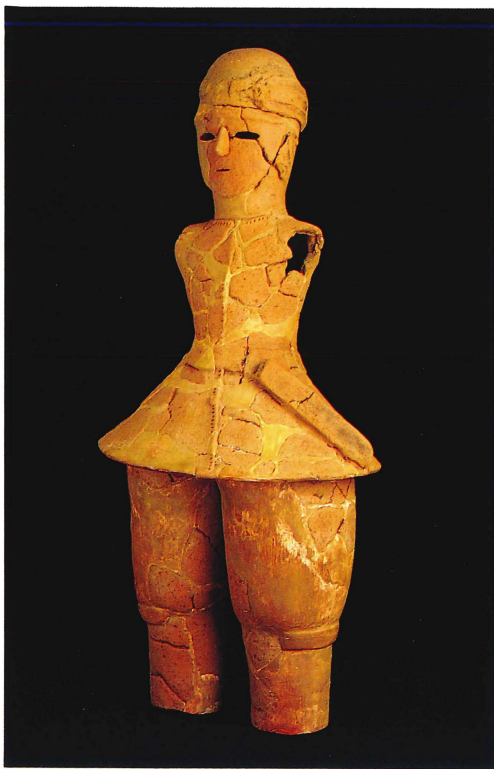
塚つかの越こし遺跡

住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

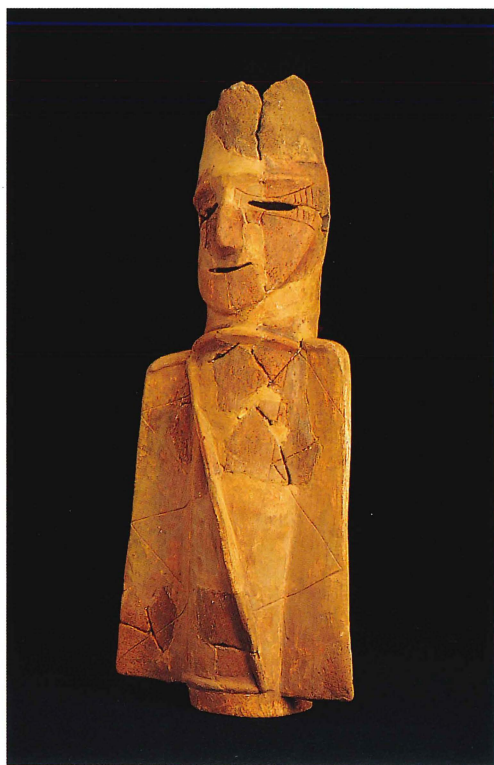
— III —

1991

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



S T 1 正装男子人物埴輪



S T 1 盾持人埴輪



Grid 青銅製神像

S R 1 青銅製五鈎杵



塚の越遺跡全景（南から）



S J 4 1（南から）

序

埼玉県坂戸市の北西部に位置する入西地区周辺は、古代より遺跡の宝庫と言われている地です。台地上には広く古墳群が分布し、越辺川北方の丘陵には関東地方でも有数の古代窯跡群の一つである南比企窯跡群、東方の鶴ヶ島町周辺には若葉台遺跡を中心とする古代の集落が広範囲にわたって確認されています。また、周辺の浅羽の地名は、平安時代の書「和名類聚鈔」にみえる入間郡麻羽（あさば）郷の地にあたるとされ、万葉集巻11に記載されている〈紅の浅羽の野らに刈るかやの 東の間も吾を忘らすな〉の浅羽の地とも伝えられています。

平安時代末期頃になると、武蔵武士の原型となる武蔵七党が興ってきます。その中の児玉党の流れをくむ入西氏や浅羽氏が活躍したのも当地周辺であるといわれています。この地には現在でも、当時の栄華を物語る土塁や板石塔婆が残され、発掘調査等によって当時の集落跡や鑄造跡、輸入された陶磁器類も在地産や東海地方の土器類とともに数多く発見されています。

一方、越辺川流域に広がる水田地帯は、古代の土地区画制度である「条里制」に由来する「入西条里」として以前より広く知られております。

時は流れて、近年の都市開発の進展はめざましいものがあります。このたび、当地にも住宅・都市整備公団の土地区画整理事業が実施されることになりました。当地に所在する埋蔵文化財に関する取扱いについては、関係各機関の協議が重ねられた結果、11箇所の遺跡について財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施してその記録を保存することになりました。

本書はそれらのうち、昭和61年度に発掘調査した塚の越遺跡の調査報告書であります。本遺跡からは、縄文時代から中世末頃に及ぶ多くの竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡などの各種遺構、土器類を主とする多くの遺物が発見され、当地の歴史的環境を解明する上で貴重な資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財保護に関する教育・普及の基礎資料として、学術資料としてご利用いただければ幸いです。

刊行にあたり、調査に関する調整をしていただいた埼玉県教育局指導部文化財保護課をはじめ、発掘調査から本書の刊行に至るまで御協力いただきました住宅・都市整備公団、同埼玉西開発事務所、坂戸市教育委員会並びに関係者各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成3年2月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 荒井修二

例 言

- 1 本書は住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業にかかる坂戸市大字小山字塚の越234他に所在する塚の越遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は埼玉県教育局文化財保護課の調整を経て、住宅・都市整備公団の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が昭和61年4月1日から昭和62年3月31日まで、報告書作成及び編集作業は平成元年4月1日から平成3年3月31日まで実施した。
- 3 発掘調査は昼間孝志・黒坂禎二・大谷 徹が、報告書作成・編集作業は昼間が担当した。本文中の遺構写真は昼間・黒坂・大谷が、写真図版は昼間が撮影した。なお、発掘調査及び整理・報告書作成・刊行の組織は本文（2頁）に示した。

坂戸入西地区土地区画整理事業関係の既刊発掘調査報告書は、下記のとおりである。

『金井遺跡』 当事業団発掘調査報告書 第86集 平成元年

『広面遺跡』 当事業団発掘調査報告書 第89集 平成2年

- 4 執筆、編集及びイラスト等は主に昼間が担当し、富田和夫、黒坂、大谷、川口 潤の協力があり、文責は文末に記した。なお、本書の監修は資料部資料整理第一課が行った。
- 5 本書に掲載した資料は、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管している。
- 6 遺跡の基準点測量及び航空写真撮影は、(株)朝日航洋に、出土土器の胎土分析は(株)第四紀地質研究所に委託した。
- 7 本書の作成にあたり、下記の方々より御教示・御協力を得た。(敬称略)

内本勝彦（堺市埋蔵文化財センター）、大江正行、木津博明（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）、梅沢太久夫、宮 昌之（埼玉県立歴史資料館）、酒井清治、林 宏一（埼玉県立博物館）、宮本長二郎（奈良国立文化財研究所）、木村浩一（浪岡町教育委員会）、坂戸市教育委員会、鳩山町教育委員会、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団資料部資料整理第一課

目 次

序	
例言	
凡例	
I 発掘調査の概要	1
(1) 調査に至るまでの経過	1
(2) 発掘調査・整理・報告書刊行事業の組織	2
II 遺跡の立地と環境	3
III 調査の経過と遺跡の概観	9
(1) 調査の経過	9
(2) 遺跡の概観	9
IV 遺構と出土遺物	13
(1) 住居跡	13
a 小結—排水溝をもつ住居について—	143
(2) 掘立柱建物跡	145
b 小結—掘立柱建物について—	157
(3) Pit 群	161
(4) 井戸跡	163
c 小結—井戸跡について—	186
(5) 溝跡	189
(6) 土壇	215
(7) 火葬墓	231
(8) 塚の越1号墳 (S T 1)	235
d 小結	250
(9) その他の遺構	251
(10) Grid	255
Summary	263
V 結語	264
(1) 出土土器について	264
(2) 塚の越遺跡出土の青銅製品について	271

挿 図 目 次

第1図	塚の越遺跡と周辺の遺跡分布図	4	第34図	S J 14遺物分布図	32
第2図	区画整理事業地内遺跡位置図	7	第35図	S J 15(下)・19(上)・20(中)	33
第3図	塚の越遺跡遺構概略図1(B区)	10	第36図	S J 20貯蔵穴	34
第4図	塚の越遺跡遺構概略図2(A区)	11	第37図	S J 15(左)・19竈	34
第5図	S J 1	13	第38図	S J 19出土遺物	35
第6図	S J 1 竈	14	第39図	S J 20出土遺物	35
第7図	S J 1 出土遺物	14	第40図	S J 15出土遺物	36
第8図	S J 2	15	第41図	S J 16	37
第9図	S J 2 竈	16	第42図	S J 16竈	38
第10図	S J 2 出土遺物	16	第43図	S J 16出土遺物	38
第11図	S J 3	17	第44図	S J 17	39
第12図	S J 3 竈	17	第45図	S J 17竈A(左)・B(右)	40
第13図	S J 3 出土遺物	18	第46図	S J 17出土遺物	40
第14図	S J 4・竈	19	第47図	S J 18出土遺物	41
第15図	S J 4 出土遺物	19	第48図	S J 18	41
第16図	S J 5	20	第49図	S J 18出土遺物	42
第17図	S J 5 出土遺物	20	第50図	S J 21炭化材出土状況	43
第18図	S J 6・10	21	第51図	S J 21	44
第19図	S J 6・10出土遺物	21	第52図	S J 21出土遺物	46
第20図	S J 7	22	第53図	S J 22	47
第21図	S J 7 竈	23	第54図	S J 22出土遺物	48
第22図	S J 7 出土遺物	23	第55図	S J 23	49
第23図	S J 8	24	第56図	S J 23出土遺物	49
第24図	S J 8 竈	25	第57図	S J 24	50
第25図	S J 8 出土遺物	25	第58図	S J 24出土遺物	51
第26図	S J 9・竈	26	第59図	S J 25	52
第27図	S J 11	27	第60図	S J 25出土遺物	53
第28図	S J 12	28	第61図	S J 26出土遺物	53
第29図	S J 12竈	29	第62図	S J 26	54
第30図	S J 13出土遺物	29	第63図	S J 27	55
第31図	S J 13	30	第64図	S J 27出土遺物(1)	56
第32図	S J 14	31	第65図	S J 27出土遺物(2)	57
第33図	S J 14出土遺物	32	第66図	S J 27出土遺物(3)	58

第67図	S J 28	60	第103図	S J 45	84
第68図	S J 28出土遺物	61	第104図	S J 46	85
第69図	S J 29	61	第105図	S J 47	86
第70図	S J 29出土遺物	62	第106図	S J 47出土遺物	86
第71図	S J 30	62	第107図	S J 48	87
第72図	S J 30出土遺物	63	第108図	S J 49	88
第73図	S J 31	64	第109図	S J 49竈	88
第74図	S J 31出土遺物	64	第110図	S J 50全体図	89
第75図	S J 32	65	第111図	S J 50	90
第76図	S J 32出土遺物	66	第112図	S J 50出土遺物	91
第77図	S J 33・竈	67	第113図	S J 50排水溝	92
第78図	S J 34	68	第114図	S J 51	93
第79図	S J 34出土遺物	69	第115図	S J 51出土遺物	94
第80図	S J 35出土遺物	69	第116図	S J 52	95
第81図	S J 35	70	第117図	S J 52出土遺物	95
第82図	S J 36(大)・37(小)	71	第118図	S J 53・54・55(下から)	96
第83図	S J 38	72	第119図	S J 53出土遺物	97
第84図	S J 39	73	第120図	S J 56全体図及び出土遺物(1)・(2)	
第85図	S J 39出土遺物	74		・(3)	97
第86図	S J 40	75	第121図	S J 56	98
第87図	S J 40出土遺物(1)	76	第122図	S J 57	99
第88図	S J 40出土遺物(2)	76	第123図	S J 57全体図	100
第89図	S J 41全体図	76	第124図	S J 57竈内土器埋設状況	102
第90図	S J 41	77	第125図	S J 57出土遺物	103
第91図	S J 41排水溝	78	第126図	S J 58	104
第92図	S J 41出土遺物(1)	78	第127図	S J 58出土遺物	105
第93図	S J 41出土遺物(2)	78	第128図	S J 59	106
第94図	S J 41出土遺物(白玉)(3)	78	第129図	S J 59出土遺物	107
第95図	S J 42全体図	79	第130図	S J 60(北竈)・72(東竈)	108
第96図	S J 42	80	第131図	S J 60・72出土遺物	109
第97図	S J 42出土遺物	81	第132図	S J 61	109
第98図	S J 43	81	第133図	S J 62	110
第99図	S J 43出土遺物	82	第134図	S J 62出土遺物	111
第100図	S J 44出土遺物	82	第135図	S J 63	111
第101図	S J 44	83	第136図	S J 63出土遺物	111
第102図	S J 45出土遺物	83	第137図	S J 63全体図	112

第138図	S J 64	113	第173図	S J 80	139
第139図	S J 64出土遺物	113	第174図	S J 80竈	140
第140図	S J 65	114	第175図	S J 80出土遺物	140
第141図	S J 66	115	第176図	S J 81	141
第142図	S J 66竈	115	第177図	S J 82	142
第143図	S J 66出土遺物	115	第178図	S J 82竈	143
第144図	S J 67排水溝	116	第179図	S J 82出土遺物	143
第145図	S J 67	117	第180図	掘立柱建物跡概略図	145
第146図	S J 67出土遺物	118	第181図	S B 1	147
第147図	S J 68・69	119	第182図	S B 2	148
第148図	S J 68出土遺物	119	第183図	S B 3	149
第149図	S J 69出土遺物	120	第184図	S B 4	150
第150図	S J 70	121	第185図	S B 5	152
第151図	S J 71	122	第186図	S B 6	153
第152図	S J 71出土遺物	123	第187図	S B 7	154
第153図	S J 73竈	123	第188図	S B 8	155
第154図	S J 73	124	第189図	S B 9	156
第155図	S J 73出土遺物	124	第190図	掘立柱建物跡出土遺物	157
第156図	S J 74	125	第191図	掘立柱建物跡・溝の位置関係図	158
第157図	S J 75	126	第192図	掘立柱建物跡変遷図(復元図)	160
第158図	S J 75竈	126	第193図	Pit 群出土遺物	161
第159図	S J 75出土遺物	126	第194図	Pit 群	162
第160図	S J 76	127	第195図	S E 1～9	164
第161図	S J 76竈	127	第196図	S E 10～19	166
第162図	S J 76出土遺物	127	第197図	S E 20～30	170
第163図	S J 77全体図及び付属土壇(左下)	128	第198図	S E 31～35	172
第164図	S J 77竈	129	第199図	S E 5・7・15・19・31・32出土遺物	174
第165図	S J 77	130	第200図	S E 3出土遺物(1)	174
第166図	S J 77出土遺物	131	第201図	S E 3出土遺物(2)	175
第167図	S J 77排水溝内土壇出土遺物	132	第202図	S E 3出土遺物(3)	176
第168図	S J 78	133	第203図	S E 6出土遺物	176
第169図	S J 78竈A(上)・B(下)	134	第204図	S E 11出土遺物	176
第170図	S J 78出土遺物	136	第205図	S E 13出土遺物	177
第171図	S J 78遺物分布図	137	第206図	S E 15出土遺物	177
第172図	S J 79	138	第207図	S E 17出土遺物(1)	178

第208図	S E 17出土遺物(2)……………	179	第241図	S D 10出土遺物……………	205
第209図	S E 17出土遺物(3)……………	179	第242図	S D 7・11・16・20……………	206
第210図	S E 18出土遺物(1)……………	179	第243図	S D 15……………	207
第211図	S E 18出土遺物(2)……………	180	第244図	S D 4・3・22……………	208
第212図	S E 18出土遺物(3)……………	181	第245図	S D 16出土遺物……………	209
第213図	S E 18出土遺物(4)……………	182	第246図	溝跡概略図(3)……………	210
第214図	S E 18出土遺物(5)(屋根形石製品) ……………	183	第247図	S D 37~40……………	211
第215図	S E 18出土遺物(6)……………	184	第248図	S D 26出土遺物……………	212
第216図	S E 18出土遺物(7)……………	184	第249図	S D 27出土遺物……………	213
第217図	S E 20出土遺物……………	184	第250図	S K 1~24……………	217
第218図	S E 23出土遺物……………	184	第251図	S K 25~46……………	218
第219図	S E 27出土遺物……………	185	第252図	S K 47~69……………	219
第220図	S E 28出土遺物……………	185	第253図	S K 70~86……………	220
第221図	S E 34出土遺物……………	186	第254図	S K 87~108……………	221
第222図	S E 35出土遺物……………	187	第255図	S K 109~132……………	222
第223図	S D 1 遺物分布図……………	190	第256図	S K 133~154……………	223
第224図	S D 1 出土遺物(1)……………	191	第257図	S K 155~175……………	224
第225図	S D 1 出土遺物(2)……………	192	第258図	S K 176~198……………	225
第226図	S D 1 出土遺物(3)……………	193	第259図	S K 199~217……………	226
第227図	S D 1 出土遺物(4)……………	195	第260図	S K 218~226……………	227
第228図	S D 1 出土遺物(5)……………	196	第261図	S K 227~247……………	228
第229図	S D 1 出土墨書土器及びヘラ記号 をもつ土器……………	197	第262図	S K 248・249……………	229
第230図	溝跡概略図(1)……………	198	第263図	土壙出土遺物(1)……………	230
第231図	S D 2 出土遺物……………	199	第264図	土壙出土遺物(2)……………	230
第232図	S D 2……………	199	第265図	S R 1……………	231
第233図	S D 4 出土遺物……………	199	第266図	S R 1 出土遺物(1)……………	231
第234図	S D 3 出土遺物……………	199	第267図	S R 1 出土遺物(2)……………	231
第235図	S D 21・5・6・16・24・10・26 ……………	200	第268図	S R 2(左)・3(右)……………	232
第236図	S D 9 a・b……………	202	第269図	S T 1 全体図……………	236
第237図	S D 9 c……………	203	第270図	S T 1 遺物出土状況図……………	237
第238図	溝跡概略図(2)……………	204	第271図	西側周溝埴輪出土状況図……………	238
第239図	S D 9・16出土遺物……………	204	第272図	正装男子人物埴輪……………	240
第240図	S D 9 出土遺物……………	205	第273図	盾持人埴輪……………	242
			第274図	人物埴輪……………	244
			第275図	女子人物埴輪・形象埴輪……………	245
			第276図	円筒埴輪・朝顔形埴輪……………	247

第277図	埴輪拓影図	248	第286図	谷地形内出土遺物(3)	259
第278図	S T 1 出土遺物	250	第287図	Grid 出土遺物(1)	260
第279図	S X 1	251	第288図	Grid 出土遺物(2)	260
第280図	S X 2 (左)・3 (右)	252	第289図	Grid 出土遺物(3)	260
第281図	S X 4 (上)・5 (下)	253	第290図	Grid 出土遺物(4)	261
第282図	埋設土器	254	第291図	I～III期の土器群	266
第283図	出土遺物	254	第292図	IV～VI期の土器群	268
第284図	谷地形内出土遺物(1)	256	第293図	鈷杵の部分名称	271
第285図	谷地形内出土遺物(2)	258			

挿図写真目次

1	善能寺古墳群	5	25	S J 21貯蔵穴付近遺物出土状況	44
2	調査風景	12	26	S J 21竈	45
3	調査風景	12	27	S J 21竈	45
4	S J 1 竈	14	28	S J 22	48
5	S J 2	16	29	S J 23	48
6	S J 3	18	30	S J 24	51
7	S J 4	18	31	S J 25	51
8	S J 7	22	32	S J 26	53
9	S J 7 遺物出土状況	22	33	S J 27遺物出土状況	55
10	S J 8	25	34	S J 27埋設炉と埋設土器	59
11	S J 8 竈	25	35	S J 27垂飾出土状況	59
12	S J 9	27	36	S J 28	59
13	S J 11	28	37	S J 29	61
14	S J 12	29	38	S J 30	63
15	S J 13	29	39	S J 31	63
16	S J 14	30	40	S J 32	66
17	S J 15・19・20	34	41	S J 32竈	66
18	S J 16竈	38	42	S J 34	69
19	S J 16	38	43	S J 35	70
20	S J 17	40	44	S J 39埋設炉と埋設土器	73
21	S J 18	40	45	S J 40	75
22	S J 21 (南から)	42	46	S J 40鉄鏝出土状況	76
23	S J 21	42	47	S J 41	77
24	S J 21炭化材出土状況 (東から)	43	48	S J 41刀子・臼玉出土状況	77

49	S J 41排水溝	78	85	S J 73竈	125
50	S J 42	80	86	S J 74	125
51	S J 44	82	87	S J 77	129
52	S J 45	84	88	S J 77竈	129
53	S J 46	85	89	S J 77竈	129
54	S J 47	86	90	S J 77付属土壇内遺物出土状況	129
55	S J 48	87	91	S J 78	135
56	S J 49	87	92	S J 78遺物出土状況	135
57	S J 50	89	93	S J 78竈	135
58	S J 50遺物出土状況	92	94	S J 78遺物出土状況	135
59	S J 51	94	95	S J 79	138
60	S J 51竈	94	96	S J 80	139
61	S J 52	95	97	S J 80貯蔵穴付近遺物出土状況	139
62	S J 53・54・55	97	98	S J 81	141
63	S J 56白玉出土状況	98	99	S J 82	142
64	S J 56（手前）	98	100	S J 41北西隅排水溝	144
65	S J 57	101	101	S J 50北東隅排水溝	144
66	S J 57竈	101	102	S B 1	146
67	S J 57竈	101	103	S B 1 柱痕	146
68	S J 57白玉出土状況	101	104	S B 2	148
69	S J 57張り出し部	101	105	S B 2—P 6内遺物出土状況	148
70	S J 58	105	106	S B 3（西から）	150
71	S J 58遺物出土状況	105	107	S B 4	150
72	S J 59	107	108	S B 5	151
73	S J 60・72	107	109	S B 6	151
74	S J 62	110	110	S B 7	154
75	S J 64	113	111	S B 8	154
76	S J 65	114	112	S B 9	156
77	S J 66	116	113	掘立柱建物群全景（北東より）	156
78	S J 67	116	114	S E 2	163
79	S J 67竈	118	115	S E 3	163
80	S J 68・69	118	116	S E 6	163
81	S J 68竈	118	117	S E 6 石臼出土状況	163
82	S J 69貯蔵穴内遺物出土状況	120	118	S E 10	168
83	S J 70	120	119	S E 11	168
84	S J 71	121	120	S E 15	168

121	S E 17遺物出土状況	168	140	S K 65	216
122	S E 18	168	141	S K 70	229
123	S E 18遺物出土状況	168	142	S K 74	229
124	S E 28	168	143	S R 1 遺物出土状況	232
125	S E 30	168	144	S R 2	232
126	S E 32遺物出土状況	173	145	S T 1 全景 (南から)	235
127	S E 35	173	146	S T 1 全景 (東から)	239
128	S E 18屋根形石製品	182	147	西側周溝埴輪集中部分(1)	239
129	S D 1 遺物出土状況	194	148	西側周溝埴輪集中部分(2)	239
130	S D 3	201	149	円筒埴輪 (No.13)	239
131	S D 9 c	201	150	円筒埴輪 (No.12)	239
132	S D 9 a	201	151	S X 1	251
133	S K 11	216	152	S X 4	252
134	S K 73	216	153	埋設土器	254
135	S K 244	216	154	調査風景	254
136	S K 165	216	155	調査風景	254
137	S K 8・9・10	216	156	谷地形内遺物出土状況	255
138	S K 174	216	157	谷地形内遺物出土状況	255
139	S K 95	216			

図版目次

図版 1

- S J 1—3・8・9
- S J 2—1
- S J 3—1
- S J 7—1・5~7

図版 2

- S J 7—8
- S J 13—1
- S J 14—1・5・6・8
- S J 15—1
- S J 16—2
- S J 21—2~4・6

図版 3

- S J 21—7・11・12

S J 22—1

- S J 24—1・2・5・6
- S J 25—1
- S J 29—2

図版 4

- S J 32—1・3
- S J 42—1
- S J 43—2
- S J 50—1・2・4・5・10・13

図版 5

- S J 50—11・18
- S J 51—1・2
- S J 57—10~12

図版 6

S J 57—1 · 4 · 5	S E 17—1 · 2
S J 58—3	S E 18—4 · 5 · 8
287—5	図版13
S J 66—3	S E 27—4
S J 67—1	S E 35—2
S J 68—1	S D 1—32 · 40 · 42 · 45 · 49 · 58 · 71 ·
S J 69—1 · 2	77 · 78 · 84
図版7	図版14
S J 27—4 他	S D 1—90
S J 39—2	S D 3—6
S J 71—4 · 5	S J 40—鉄鏝
図版8	S J 41—刀子 · 白玉
S J 73—1	S J 56—鉄鏝 · 白玉
S J 77—2 ~ 4 · 6 · 9	図版15
S J 77—排水溝内土壙 2 · 3 · 7 ~ 9	S T 1—正装男子人物埴輪
図版9	S T 1—女子人物埴輪
S J 77—排水溝内土壙14	図版16
S J 78—1 · 2 · 7 · 13 · 14 · 19	S T 1—盾持人埴輪
S J 80—3	S T 1—人物埴輪
図版10	S T 1—円筒埴輪
263—12 · 15	図版17
S E 3—4 ~ 6 · 9 · 13	209—6 ~ 8
S E 6—1	264—1 ~ 5
S E 17—3	284—6 · 10 · 20 · 32
図版11	286—57
S E 18—2 · 3 · 7	290—1 ~ 3
図版12	

土 壙 計 測 表

土壙計測表(1)…………… 232 土壙計測表(2)…………… 233 土壙計測表(3)…………… 234

遺 構 新 旧 対 照 表

住居跡 · 掘立柱建物跡 · 井戸跡 · 溝跡…………… 262

凡 例

本書に掲載した遺構図、遺物実測図等に関する説明事項は以下に示すとおりである。

- 1 遺構番号は、原則として発掘調査時のものを踏襲したが、整理作業を円滑に進めるため、主に南側の調査区を北側の調査区に付加する形で新番号に変更した。なお、新旧対照表は巻末に記した。(土壇は土壇計測表に記した)
- 2 遺構名は、以下の略号で記した部分がある。

S J…………住居跡	S B…………掘立柱建物跡	S E…………井戸跡
S K…………土壇	S T…………古墳跡	S D…………溝跡
S R…………火葬墓	S X…………その他の遺構	
- 3 土器実測図における断面及び底部付近の「一」は須恵器の場合、回転ヘラケズリの範囲を示す。ヘラケズリは実線で表現し、推定線については破線で表現し、矢印はヘラケズリやナデの方向を示した。
- 4 遺物実測図における番号は、遺物分布図・写真図版の番号と一致する。遺物分布図中の「一」は接合関係を示す。
- 5 縮尺は原則として以下に示すとおりである。

遺構は住居跡(竈含む)・掘立柱建物跡は1/60、竈は1/40、井戸跡・土壇は1/80、古墳跡・溝跡・Pit 群は任意に示した。遺物実測図は1/4を原則としているが、大形・小形の製品については任意に示した。また、遺物実測図番号付近の分数は残存率を示す。
- 6 本文中の「～」の表示は、色調を表現する場合、内面から外面にかけての移行を意味する。また、()内の数値は推定値を示す。
- 7 土層断面図及びエレベーション図におけるレベルの数値は標高を示す。
- 8 遺物実測図中のスクリーントーンは赤彩されている部分を示す。また、その他のスクリーントーンについては、各頁に記載した。
- 9 付図1・2におけるX・Y軸の数値は平面直角座標に基づく各座標値を示す。また、挿図中の各遺構にみられる矢印は、すべて座標北を示す。
- 10 遺物実測図右下の数値は、推定復元した場合に対して、現存する遺物の割合を示している。なお、1/10と表示した数値は、1/10以下を示す。
- 11 本文中に Pit としたものは柱穴を原則とするが、類似する小穴も Pit として記した。

I 発掘調査の概要

(1) 調査に至るまでの経過

首都圏における人口増加の波は著しく、全国の三分の一の人口が集中している。埼玉県ではそれに対応するため、住宅・都市整備公団等を中心に住宅対策及び地域環境整備計画が進められている。坂戸市入西（西部）地区については、住宅・都市整備公団より区画整理方式による宅地開発事業が計画された。

住宅・都市整備公団では文化庁との間で取り交わされた『住宅・都市整備公団の事業施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関する覚書』に基づき、埼玉県教育委員会へ「坂戸市入西（西部）地区における埋蔵文化財の取り扱いについて」照会した。

県教育委員会では、埋蔵文化財遺跡地名表等に基づき、昭和56年1月20日付け教文第918号を持って次のとおり回答した。

記

1. 文化財の所在

名 称	所 在 地	種 別	時 期
坂戸市№99	坂戸市大字堀込	古 墳	古墳時代後期
柵塚古墳	字桑原157		

上記の他に条里遺跡及び畑地部分に集落遺跡の所在が予想される。

2. 取り扱いについて

- (1) 開発予定地内は事前の遺跡分布調査及び必要に応じて試掘調査を実施して、遺跡の所在を確認する必要がある。
- (2) 上記の結果をもとに埋蔵文化財ができるだけ現状保存できる開発計画を策定することが望ましい。
- (3) 計画上、やむを得ず現状変更する場合は、文化財保護法第57条の3の規定により、事前に文化庁長官あて埋蔵文化財発掘通知を提出して、記録保存のための発掘調査を実施すること。
- (4) 発掘調査を実施する場合は、事前に坂戸市教育委員会及び県文化財保護課と協議すること。

住宅・都市整備公団と県教育委員会では開発予定地内に所在する遺跡の取り扱いについて協議を重ねた結果、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に委託して昭和59年度から発掘調査を実施することに決定した。

文化財保護法に基づき、住宅・都市整備公団からは埋蔵文化財発掘通知、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団からは埋蔵文化財発掘調査届が文化庁長官へ提出され、塚の越遺跡の発掘調査は、昭和61年4月1日から昭和62年3月31日まで実施した。

(2) 発掘調査・整理・報告書刊行事業の組織

1 発掘調査（昭和61年度）

主 体 者 助埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 長 井 五 郎

副 理 事 長 岩 田 明

常 務 理 事 兼 管 理 部 長 町 田 勝 義

管 理 部

主 査 関 野 栄 一

主 事 江 田 和 美

主 事 岡 野 美 智 子

主 事 福 田 浩

主 事 本 庄 朗 人

調 査 研 究 部

部 長 中 島 利 治

副 部 長 小 川 良 祐

第 二 課 長 駒 宮 史 朗

調 査 員 昼 間 孝 志

調 査 員 黒 坂 禎 二

調 査 員 大 谷 徹

2 整 理（平成元年度）

主 体 者 助埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 荒 井 修 二

副 理 事 長 百 瀬 陽 二

常 務 理 事 兼 管 理 部 長 古 市 芳 之

理 事 兼 調 査 研 究 部 長 吉 川 國 男

管 理 部

管 理 課 長 関 野 栄 一

主 事 江 田 和 美

主 事 岡 野 美 智 子

主 事 本 庄 朗 人

主 事 斉 藤 勝 秀

調 査 研 究 部

副 部 長 塩 野 博

第 四 課 長 小 久 保 徹

主 任 調 査 員 昼 間 孝 志

3 整 理・報 告 書 刊 行（平成2年度）

主 体 者 助埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 荒 井 修 二

副 理 事 長 早 川 智 明

常 務 理 事 兼 管 理 部 長 古 市 芳 之

理 事 兼 調 査 部 長 吉 川 國 男

管 理 部

管 理 課 長 関 野 栄 一

主 任 江 田 和 美

主 事 長 滝 美 智 子

主 事 本 庄 朗 人

（平成2年9月迄）

主 事 斉 藤 勝 秀

主 事 菊 池 久

（平成2年10月から）

資 料 部

部 長 栗 原 文 蔵

副 部 長 兼 資 料 整 理 第 一 課 長 増 田 逸 朗

主 任 調 査 員 昼 間 孝 志

Ⅱ 遺跡の立地と環境

塚の越遺跡は、坂戸市大字小山字塚の越234他に所在する。本遺跡は昭和61年度に発掘調査されたものである。

地理的環境

塚の越遺跡は、東武東上線北坂戸駅の南西約2.5km、越辺川と高麗川に挟まれた毛呂台地の北東部、標高35mの台地上に位置し、低地との比高差は約7mである。住宅・都市整備公団坂戸入西地区の区画整理事業に伴って調査された遺跡群の中では、最も南の高台に位置している。毛呂台地は毛呂山町東部から坂戸市西部にかけて北東方向に伸び、台地内は葛川・越辺川や高麗川の支流が縦横に流れ、これら小河川の殆どは高麗川とともに坂戸市東和田付近で越辺川に合流する。毛呂台地の南東から東には扇状地性の坂戸台地があり、毛呂台地が起伏に富んだ地形を示すのに対し、比較的緩やかな地形が広がっている。一方、毛呂台地から坂戸台地の北側から東側にかけては、越辺川や高麗川によって開析された広大な沖積地が広がっている。沖積地内には桑畑や畑地などが点在しているが、発掘調査によって台地周辺に残っている桑畑や畑地は、低地に向かって枝状に伸びる埋没した低台地であることが明らかになってきた。区画整理事業地内の低台地は、毛呂台地から北東方向に伸び、その概要は地図上からも水田の畦畔の歪みなどによっても読みとることができる。また、台地内には多くの谷が入り込んでおり、発掘調査によってその様相はより複雑であることが確認された。塚の越遺跡は東側と北側（段丘面の一段低い稲荷前遺跡との間に位置する）に大きな谷が入り、東側は緩傾斜、北側は急傾斜する。周辺は段丘面の高低を問わず湧水点が高く、発掘調査において検出された井戸なども比較的浅いものが多い。

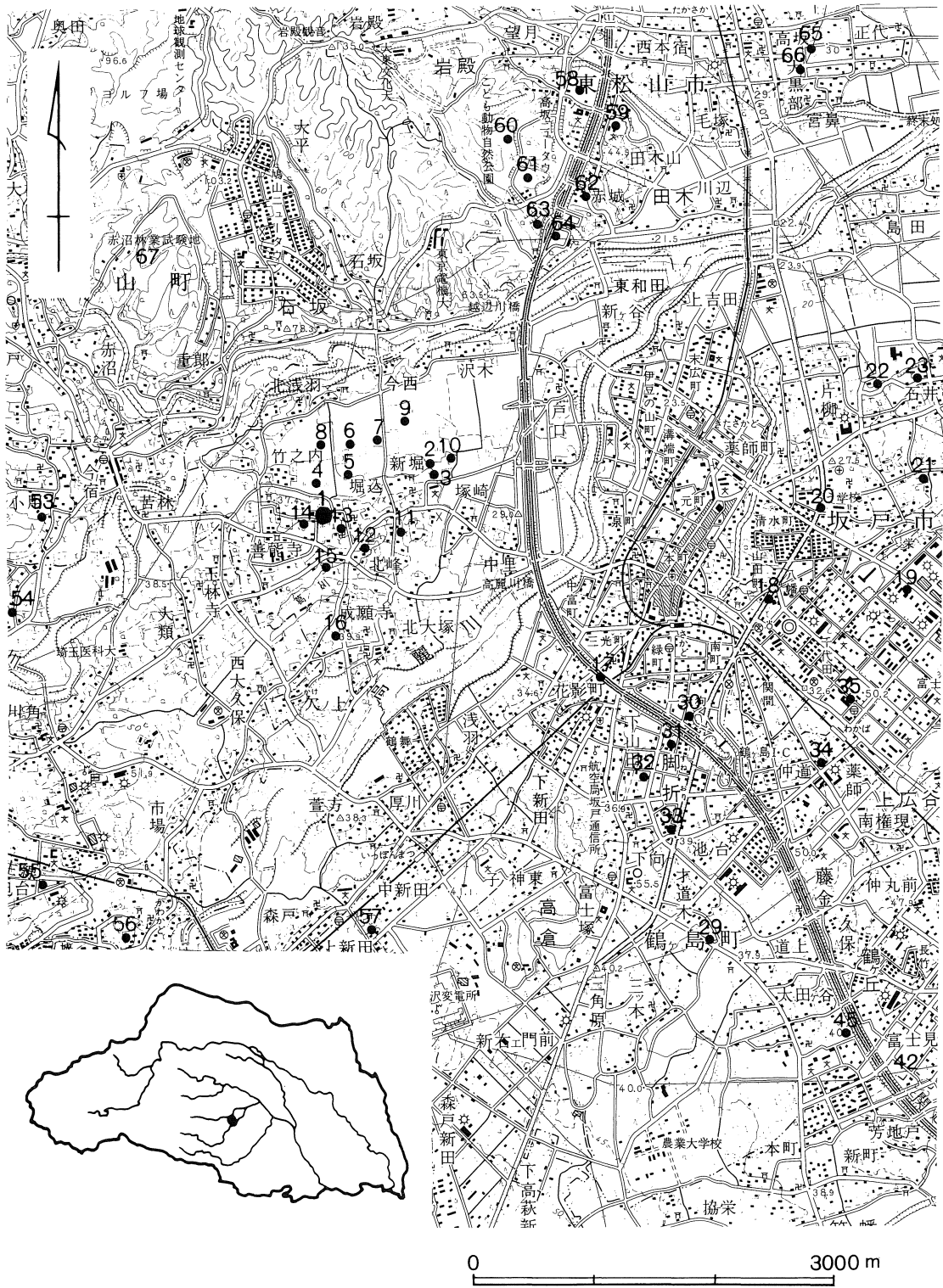
歴史的環境

塚の越遺跡を含めた区画整理事業地内の遺跡群からは、縄文時代から室町時代に至るまでの集落跡が検出されている。

縄文中期の遺跡は塚の越遺跡（加曾利EⅡ期2軒）、中耕遺跡（加曾利EⅡ期7軒—現在調査中）のほか周辺では花影遺跡（加曾利EⅡ期）、長岡遺跡（加曾利Ⅲ期）などで検出されているが、相対的に検出例は少ない。

弥生時代の遺跡は、塚の越遺跡、三福寺遺跡、附島遺跡、石井前原遺跡、新町遺跡、花影遺跡などの後期から後期末の遺跡が多い。

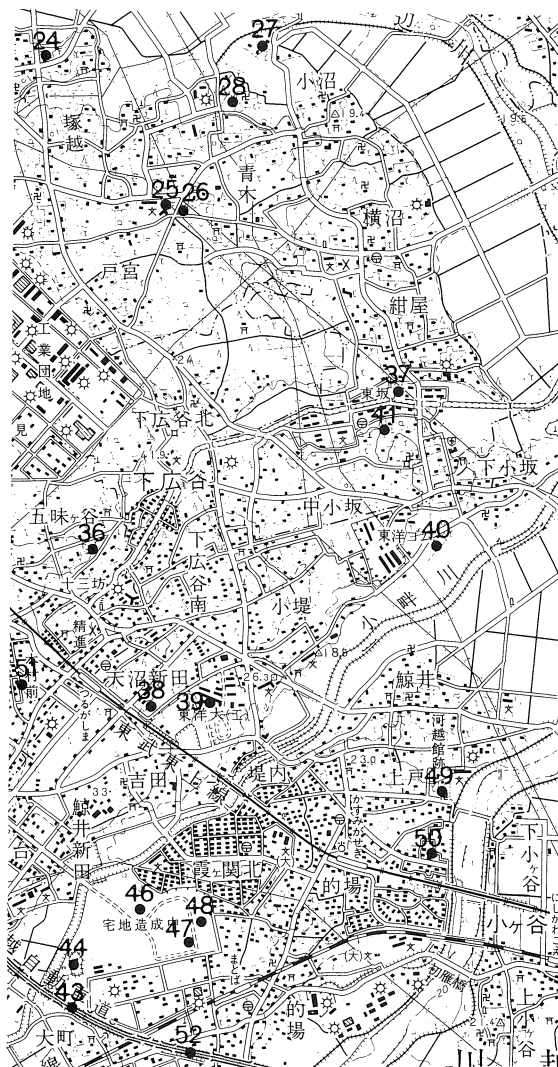
古墳時代初頭の遺跡は、稲荷前遺跡（方形周溝墓38基・住居跡15軒）、桑原遺跡（方形周溝墓2基）、広面遺跡（方形周溝墓20基）、中耕遺跡（方形周溝墓68基・住居跡76軒—現在調査中・弥生末含む）があり、前述した低台地上に100軒余りの住居跡と130基余りの方形周溝墓が存在したことが明らかになった。特に、従来より古墳とされてきた「柊塚」は南北42.6m、東西52.4mの中心的な方形周溝墓であることが確認された。周辺地域における方形周溝墓は、花影遺跡、上組Ⅱ（川越市）遺跡で散見されるが、毛呂台地上ではこの他に確認されていない。発生期の古墳についても、比企丘陵北部の塩古墳群（江南町）、吉見丘陵南端の山の根1・2号墳（吉見町）、比企丘陵南



第1図 塚の越遺跡と周辺の遺跡分布図



善能寺古墳群



- | | |
|----------------|------------|
| 1 塚の越遺跡 | 2 金井遺跡 |
| 3 金井B遺跡 | 4 稲荷前遺跡 |
| 5 田島遺跡 | 6 桑原遺跡 |
| 7 広面遺跡 | 8 棚田遺跡 |
| 9 中耕遺跡 | 10 足洗遺跡 |
| 11 大河原遺跡 | 12 中原遺跡 |
| 13 三福寺遺跡 | 14 稲荷森遺跡 |
| 15 北峰西浦遺跡 | 16 若宮遺跡 |
| 17 花影遺跡 | 18 山田遺跡 |
| 19 富士見遺跡 | 20 相撲場遺跡 |
| 21 石井前原遺跡 | 22 新町遺跡 |
| 23 石井上宿遺跡 | 24 勝呂廃寺 |
| 25 住吉中学校遺跡 | 26 宮町遺跡 |
| 27 附島遺跡 | 28 小沼堀之内遺跡 |
| 29 共栄遺跡 | 30 八幡遺跡 |
| 31 一天狗遺跡 | 32 宮田遺跡 |
| 33 雷電池遺跡 | 34 大境遺跡 |
| 35 若葉台遺跡 | 36 松原前遺跡 |
| 37 上谷遺跡 | 38 南精進遺跡 |
| 39 東洋大学工学部構内遺跡 | |
| 40 登戸遺跡 | 41 西谷ツ窯跡 |
| 42 鶴ヶ丘遺跡A-H区 | |
| 43 上組遺跡 | 44 上組Ⅱ遺跡 |
| 45 お寺山遺跡 | 46 御伊勢原遺跡 |
| 47 女堀Ⅱ遺跡 | 48 東女堀原遺跡 |
| 49 河肥氏館跡 | 50 霞ヶ関遺跡 |
| 51 在家遺跡 | 52 中組遺跡 |
| 53 小用窯跡 | 54 西戸丸山窯跡 |
| 55 旭台南遺跡 | 56 西原遺跡 |
| 57 上新田遺跡 | 58 舞台遺跡 |
| 59 田木山遺跡 | 60 根平遺跡 |
| 61 緑山遺跡 | 62 大塚原遺跡 |
| 63 立野遺跡 | 64 駒堀遺跡 |
| 65 代正寺遺跡 | 66 大西遺跡 |
| 67 鳩山窯跡群 | |

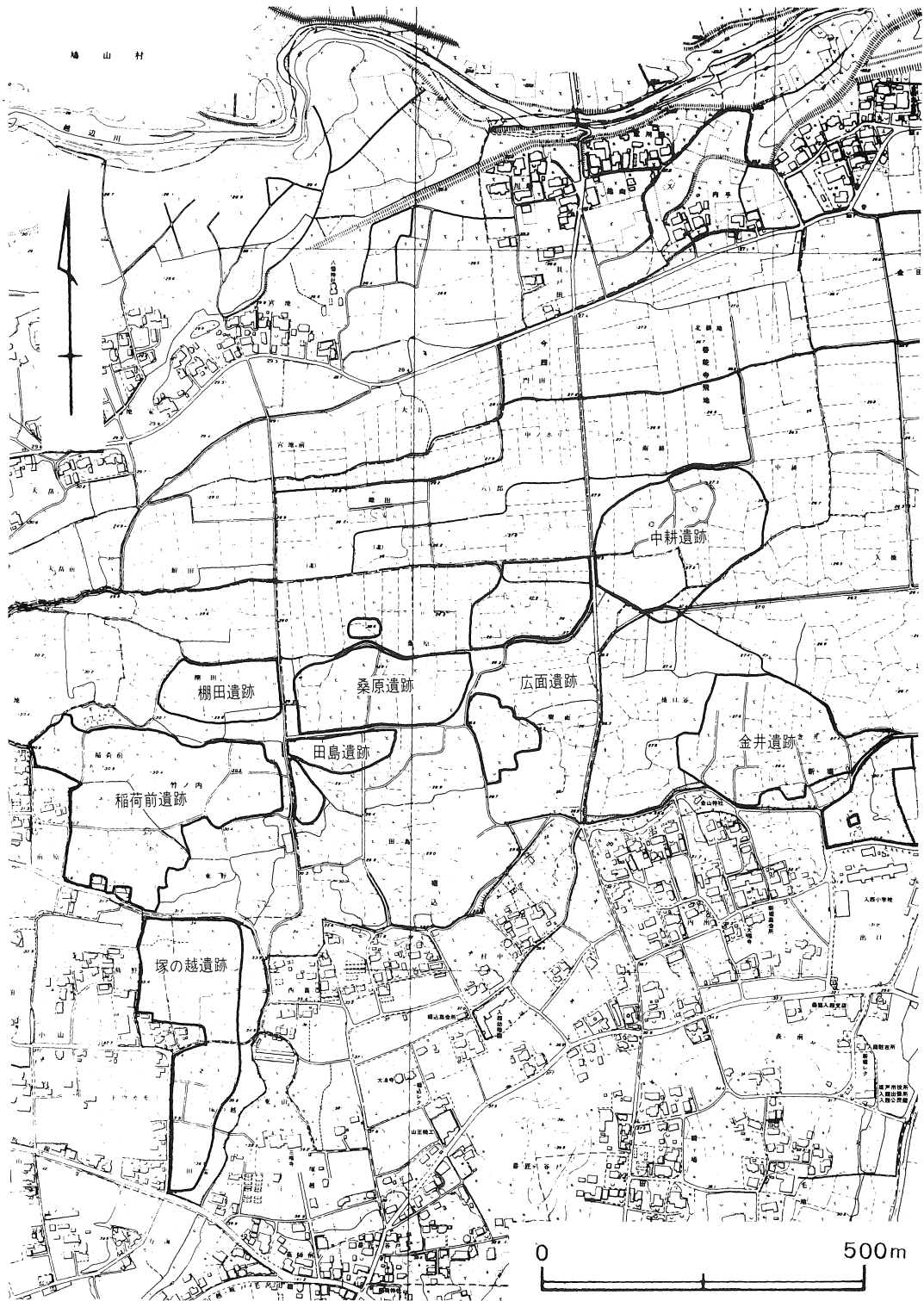
部の諏訪山29号墳（東松山市）、川越台地には三変稲荷神社古墳（川越市）が確認されているが、毛呂台地や坂戸台地では確認されていない。

代正寺遺跡（東松山市）では、弥生中期（宮ノ台期）～後期（久ヶ原期）の方形周溝墓15基、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡46軒が検出されている。

古墳時代後期になると集落跡や古墳群は、大きく増加する傾向を示す。前述した発生期の古墳群も断続的に7世紀代まで造営されるが、毛呂台地や坂戸台地周辺では6世紀後半～7世紀代にかけて最盛期をむかえる。区画整理事業地内では、棚田遺跡（6世紀前半）、桑原遺跡（6世紀中・後半）、塚の越遺跡・稲荷前遺跡・金井遺跡・足洗遺跡（7世紀前半～10世紀）というように集落が広がりを見せている。方形周溝墓の構築された遺跡では、稲荷前遺跡において後期の集落が形成され、広面遺跡や中耕遺跡ではその後の集落や墓域は形成されない。広面遺跡や中耕遺跡が低台地でも比較的低い位置に形成され、河川の氾濫等を考え合わせると、集落は次第に低地から高台に移り、生活環境の可能な地域が集落の場所として存続していったものと考えられる。周辺の遺跡では、大河原遺跡（6世紀後半～末頃）があり、住居跡4軒と7世紀中葉の古墳2基が調査されている。周辺の古墳群は越辺川周辺及び台地中央部に広がりを見せており、主なものに川角古墳群、善能寺古墳群がある。川角古墳群は1基が調査され、7世紀中葉の胴張り型石室が検出されている。善能寺古墳群は60基以上存在すると考えられ、5基以上の前方後円墳が含まれる。このうち大河原遺跡の2基を含む6基が調査され、一部については横穴式石室が確認されている。一方、勝呂廃寺周辺では、勝呂廃寺が造営される以前に7世紀前半の住居跡が構築されており、古墳群との関係を考慮すると広範囲にわたって集落が営まれていたと考えられる。上谷遺跡は6世紀前半～8世紀にかけての集落跡で、7世紀の住居跡から出土した須恵器甕は同遺跡の南西1kmに位置する西谷ツ窯跡で焼成されたものと考えられている。周辺には勝呂古墳群、新町古墳群、中小坂古墳群などの30～50基ほどの規模をもつ6世紀前半～7世紀代の古墳群が存在するが、石室の形態や遺物等については不明な点が多い。

塚の越遺跡では在地産と考えられる須恵器が住居跡から出土しているが、越辺川北岸の物見山丘陵付近には、古墳時代後期以降の生産遺跡・集落遺跡が多くみられる。桜山窯跡群は須恵器窯跡2基、埴輪窯跡17基、工房跡3基などが検出され、須恵器窯は6世紀前半の年代が与えられている。舞台遺跡では、古墳時代後期の住居跡93軒、須恵器窯跡2基が検出され、住居跡は5世紀末～7世紀初頭、窯跡は、7世紀中葉の年代が与えられている。緑山遺跡や立野遺跡では勝呂廃寺と関連をもつとみられる甗や瓦が出土している。また、田木山遺跡では7世紀後半、舞台遺跡、根平遺跡では8世紀前半の古墳がそれぞれ2基調査されている。

奈良・平安時代は南比企窯跡群の生産体制が本格化する。中でも鳩山窯跡群は41基の須恵器窯が調査され、8世紀前半～中頃、8世紀末～9世紀後半の窯跡を中心に検出された。また、須恵器に混じって瓦も出土しており、赤沼瓦窯以外の国分寺段階の瓦窯の存在も明らかになった。鳩山窯跡群（南比企窯跡群）の資料は、県内はもとより群馬県の南部、東京都の一部にまで供給が及んでおり、国を越えた領域の需要を担っていたものと考えられる。区画整理事業地内以外の主な遺跡を見ると、坂戸市から鶴ヶ島町に跨る若葉台遺跡は、住居跡100軒以上、掘立柱建物跡100棟以上が検出さ



第2図 区画整理事業地内遺跡位置図

れている。出土した須恵器の多くは鳩山産で占められるが、僅かに常陸産も確認されている。入間川に面した川越市の霞ヶ関遺跡では、7世紀末～8世紀初頭の住居群の中に鳩山産に混じって、東海産、群馬産、常陸産の須恵器、畿内産の暗文土器が出土しており、他の遺跡ではあまり例を見ない特異な供給先であることを窺わせる。坂戸市の勝呂廃寺は、7世紀後半に建立された寺院で、入間郡内では唯一の寺院である。創建期の瓦の一群の中には、南比企窯跡群の赤沼窯跡と同範のものがあり、武蔵国分寺以前の供給関係が明らかにされている。その一方では、越辺川北岸の立野遺跡や緑山遺跡では、主に勝呂廃寺の創建期にみられる技法をもつ瓦類が出土しており、その関連性も興味深い。また、越辺川のやや上流にある小用廃寺では、勝呂廃寺の創建瓦と考えられるものと同範瓦が出土している。この周辺には、いわゆる棒状子葉という直線的な子葉をもつ瓦が、赤沼窯跡を中心にすると、半径5kmの範囲に分布しており、初期の寺院の存在形態として注目される。

鎌倉・室町時代は、武士団が形成された後を受けて、鎌倉街道や寺院などにみられる板石塔婆あるいは城館跡の土塁等にその隆盛が窺われる。坂戸市周辺には、浅羽氏、粟生田氏、勝（呂）氏などが本拠地にしたとみられる浅羽城、田波目城等が知られ、毛呂台地北側の崖線に沿った堀込・小山周辺に比較的多く集中する。寺院も北浅羽の万福寺には浅羽小太夫有道行成を供養した板石塔婆が県指定文化財として保存され、塚の越遺跡の東にある三福寺には瀬戸の瓶甕や板石塔婆が残されている。区画整理事業地内の遺跡はこうした歴史的環境に隣接しており、金井遺跡（金井B遺跡含む）（註1）、塚の越遺跡、稲荷前遺跡などでは、中世の掘立柱建物跡や溝あるいは井戸が数多く検出され、在地産の土器に混じって常滑産の鉢や瓶、瀬戸美濃産の皿や碗、中国産の青磁などが出土しており、当時の交易を裏付ける好資料といえる。また、金井遺跡では、建物群とともに梵鐘や鉄鍋、仏像の鋳型などが出土し、毛呂山町の堂山下遺跡では、鎌倉街道に沿って、20棟余りの建物群が検出されるなど入西周辺における中世の生産体制や町並みが次第に解明されつつある。

註

- 1 当初、足洗遺跡として調査されていたが、中世の鋳造遺跡であることが確認された。この足洗遺跡は谷によって分割されることや字名などから、遺跡名称の変更を行い、足洗遺跡と金井遺跡（平成2年度の現地説明会では金井遺跡B区）とした。

参考文献

- 伊藤 研志 （1981）『勝呂廃寺』坂戸市教育委員会
宮 昌之 （1982）『埼玉県古代寺院跡調査報告書』「小用廃寺」「勝呂廃寺」埼玉県県史編さん室
加藤 恭朗他（1988）『坂戸市遺跡群発掘調査報告書第Ⅰ集』坂戸市教育委員会
屋間 孝志 （1989）『金井遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第86集
村田 健二 （1990）『広面遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第89集

Ⅲ 調査の経過と遺跡の概観

(1) 調査の経過

発掘調査は、昭和61年4月から始められ、昭和62年3月末日まで行われた。調査の対象となった面積は約34,000m²で、最大で南北400m、東西90mに及ぶ。調査区は台地の北側崖線付近は山林、その他は桑畑及び畑地となっており、本格的な発掘調査は樹木や桑の伐採と約40cmの表土剥ぎを行った後の5月からとなった。遺跡としては一つであるが、調査区は便宜上、東西に走る市道を境に北側をB区、南側をA区とし、A区からB区の順で調査を行った。遺跡の対象区の隅は高台にもかかわらず湧水するため、水抜き用の水路を設け、住居の一部は結果として壊してしまうこととなった。調査区には6m×6mのGridを設定し、調査を進めた。A区は住居跡10軒、古墳跡1基（前方部）などが検出され、9月末日をもって調査を終了した。B区は7月からA区と平行して調査を開始し、あわせて住居跡82軒、掘立柱建物跡9棟、井戸跡35基、溝跡43条、土壇249基、性格不明遺構4基などが検出され、翌3月末日をもって塚の越遺跡の調査をすべて終了した。

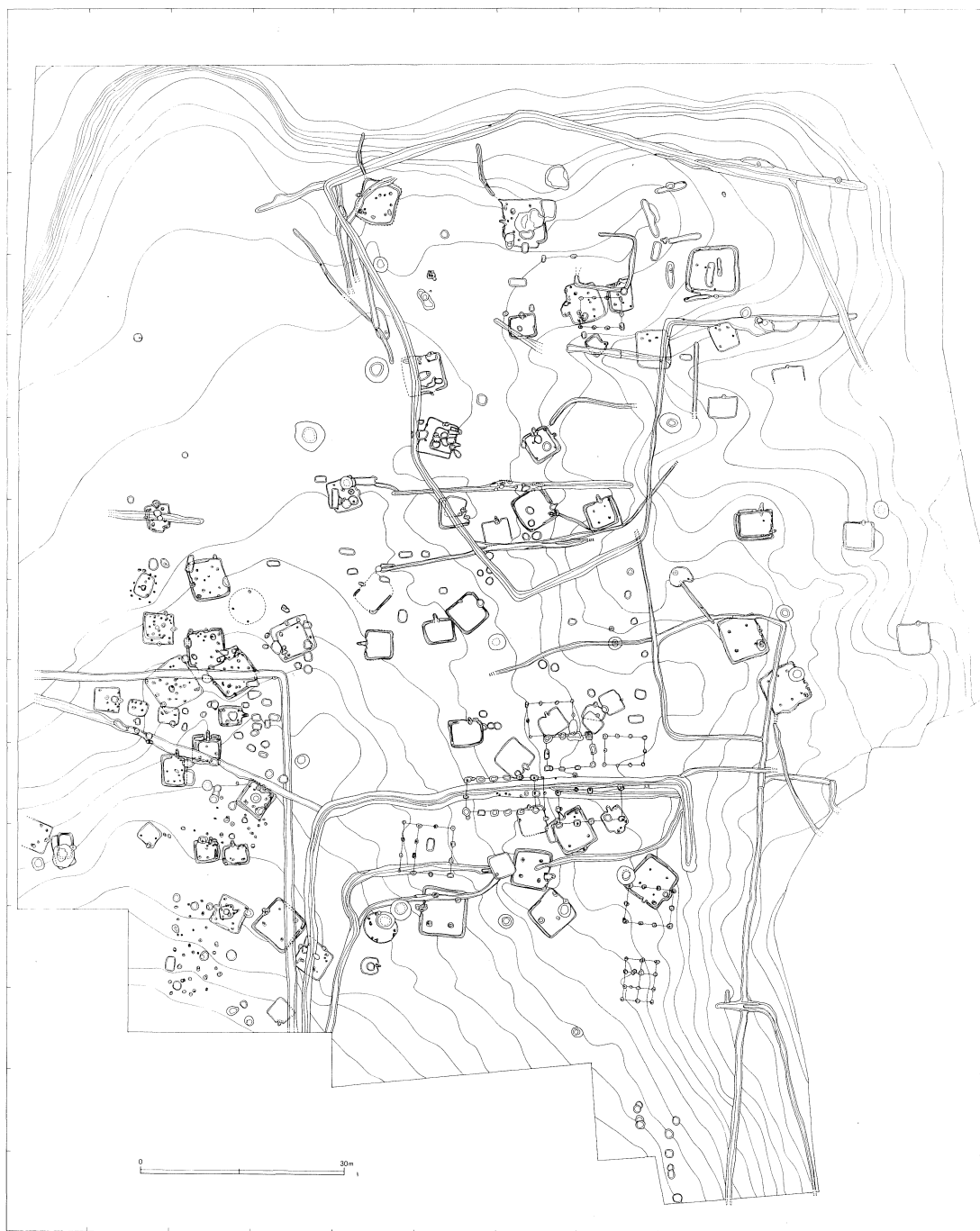
(2) 遺跡の概観

塚の越遺跡は、標高約35mの毛呂台地縁辺に位置し、他の事業地内の遺跡群とは比高差が5m～8m余りあり、一段高い段丘面に立地している。調査区内の東側は南西方向に向かって深い谷が入り込んでいる。また、調査区外出はあるが北側にも深い谷が南西方向に向かって入っており、遺跡は先端が北東方向に突き出たような形状をしている。この谷は、古墳時代後期には排水溝を持つ住居からの排水の流れ込み先となっている。しかし、金井遺跡でも見られたことであるが、8世紀後半になると次第に埋まり始め、縁辺付近には住居がつくられ、確実に百年余りを経過すると集落としての機能する範囲が広がりを見せている。

住居跡は遺構確認面から20cm程の掘り込みをもっており、掘形も差ほど大がかりではない。規模は、4.5m×5.0m前後のものが多く、大形のものはいくつか少ない。掘立柱建物跡は9棟のうち3棟が方形で1m余りの掘形をもち、総じて3間×2間の母屋を基本とする。廂持ちの建物は2棟あるが、柱掘形は主柱に比べてやや小形のものが掘られている。井戸跡は円形のもので、断面がロート状になるものが多く、大半が中世に帰属するとみられる。溝は井戸と同様に中世の所産と考えられるが、区画される場合があり、検出されなかったが建物群と組み合わせられる可能性が高い。奈良時代の溝についても同様なことはいえる。一方、台地の北側に位置する方形に区画される溝や長方形の土壇としたものの中に方形に組み合わせられるのではないかと考えられるものがある。低台地上に方形周溝墓が130基余り存在することを考慮すると、遺物こそ出土していないが、方形周溝墓の可能性も残される。他の土壇は中世以降の所産とみられる。

集落は縄文中期から平安時代まで検出されているが、中世についても井戸や区画溝が検出されたことから断続的に形成されていたものと考えられる。以下、集落を中心に各時代を概観してみる。

縄文中期（加曽利E期）の住居跡は2軒検出された。いずれも台地中央部に位置しているが、後



第3図 塚の越遺跡遺構概略図1 (B区)

世の遺構に壊されたり、掘り込みが浅かったため、確認面では住居の壁面はS J 27を除いて検出できなかった。いずれの住居も土器は埋設された状態で出土している他は小破片が周辺から出土している程度である。該期のその他の遺構は検出されていない。

弥生後期の住居跡は2軒検出されているが、1軒については遺物が図示できる資料がなく、他の



第4図 塚の越遺跡遺構概略図2 (A区)

1軒についても僅かに破片が5点である。住居は隣接して台地北側の奥まった部分に立地し、規模も比較的小形である。

弥生後期以後は、古墳時代後期まで集落は形成されない。古墳時代後期の住居は43軒検出されているが、そのうち8軒は排水溝をもつ住居跡である。また、竈の主軸方向などを考慮すると遺物の出土していない他の10軒も古墳時代後期の一群と考えられることから、遺跡の中に古墳時代後期（ここでは6世紀末～7世紀前半）の住居が占める割合は6割強になるとみられる。この時期の住居は竈の軸が北東、北西、南西などというように座標北に対して45度前後振れている特徴があるが、排水溝をもつ住居の場合は谷に面した地点に位置しており、竈の軸の振れは住居の選地と大きな関わりがあるように思われる。塚の越遺跡の立地する高台は、台地の先端にも関わらず湧水が認められ、ほぼ全時代を通して井戸は浅く、場所によっては住居の床面などでも水がしみ出すような地点もある。S J 57のように竈に三度にわたっ

て土師器甕を埋設して補強し、水の進入を防ぐ工夫をしたと考えられるものもある。また、住居内の壁溝は低面が外側に掘られており、壁材の外側に排水を通していた可能性が考えられる。排水溝は谷に向かって、住居隅に直径20cm余りの丸い穴を2m弱トンネル状に掘り、他の溝部分は露出している。遺物は相対的に少ないが、住居内のほか溝内にも認められる。他の住居については奈良時代以降の住居と大きな相違点は見られない。

南側調査区（A区）の谷部分では、集落内で使用したとみられるおびただしい量の土器（土師器）の破片が出土した。出土した土器はいずれも割れた状態で廃棄されており、祭祀等が行われた可能性がある。また、同区の北西隅からは前方後円墳（塚の越1号墳）の前方部が検出された。墳丘はすでに削平されており、周溝だけが確認された。周溝内からは人物埴輪4体、円筒埴輪、土師器坏、壺などが出土し、6世紀後半の築造と考えられる。

奈良・平安時代の集落は、住居跡25軒、掘立柱建物跡9棟、溝3条以上が検出された。奈良時代の住居はSD1で区画された地域に集中し、掘立柱建物跡は台地の縁辺付近を区画するSD3の内側に集中している。出土遺物から判断すると、住居（竪穴）と掘立柱建物と溝は微妙な時間差こそあるがほぼ同時期の遺構とすることができる。これらのことを考慮すると、ほぼ同数の住居や掘立柱建物も溝を一つの区画域として成立していたものと考えられる。また、掘立柱建物を区画するSD3の中にはSE18が存在しており、住居を区画するSD1の内に井戸が存在しない点が注目される。平安時代の住居は、竈の主軸が北を向くものが多く、SD1やSD3が埋没した後に台地の縁辺と中央部につくられている。台地の縁辺につくられた住居は、古墳時代後期には谷であった地点であるが、前記したように8世紀後半以降は谷の浅い地点は次第に埋まっていき、住居等の構築される景観が整えられていったものと考えられる。

古墳時代から平安時代に至るまで、塚の越遺跡の住居群は、7世紀代こそ重複が見られるが、相対的には重なることが少ない。特に、奈良時代（ここでは8世紀後半以降）以後は新しい時期の住居が古い住居の上につくられることはなく、むしろ意識的に避けて住居の選地をしている感さえある。これは、古い住居が完全に埋没しないで残っていたことを示唆するもので、その傍証として8世紀代の住居には人為的に埋められたような痕跡が認められない。

中世には、北側の調査区においてSD9やSD16で区画される地域が出現する。建物跡や柵列等の遺構は検出されなかったが、井戸の数の多さや常滑産、中国産の陶磁器、瓦等の出土から館跡やそれに匹敵する施設の遺構と考えられる。また、SD9の埋没後（人為的か）、表層には東西約30mにわたって石敷きの溝状遺構が構築される。石敷きは深さ約5～10cmの掘形をもっており、何らかの建物を意識してつくられたものと考えられる。



調査風景



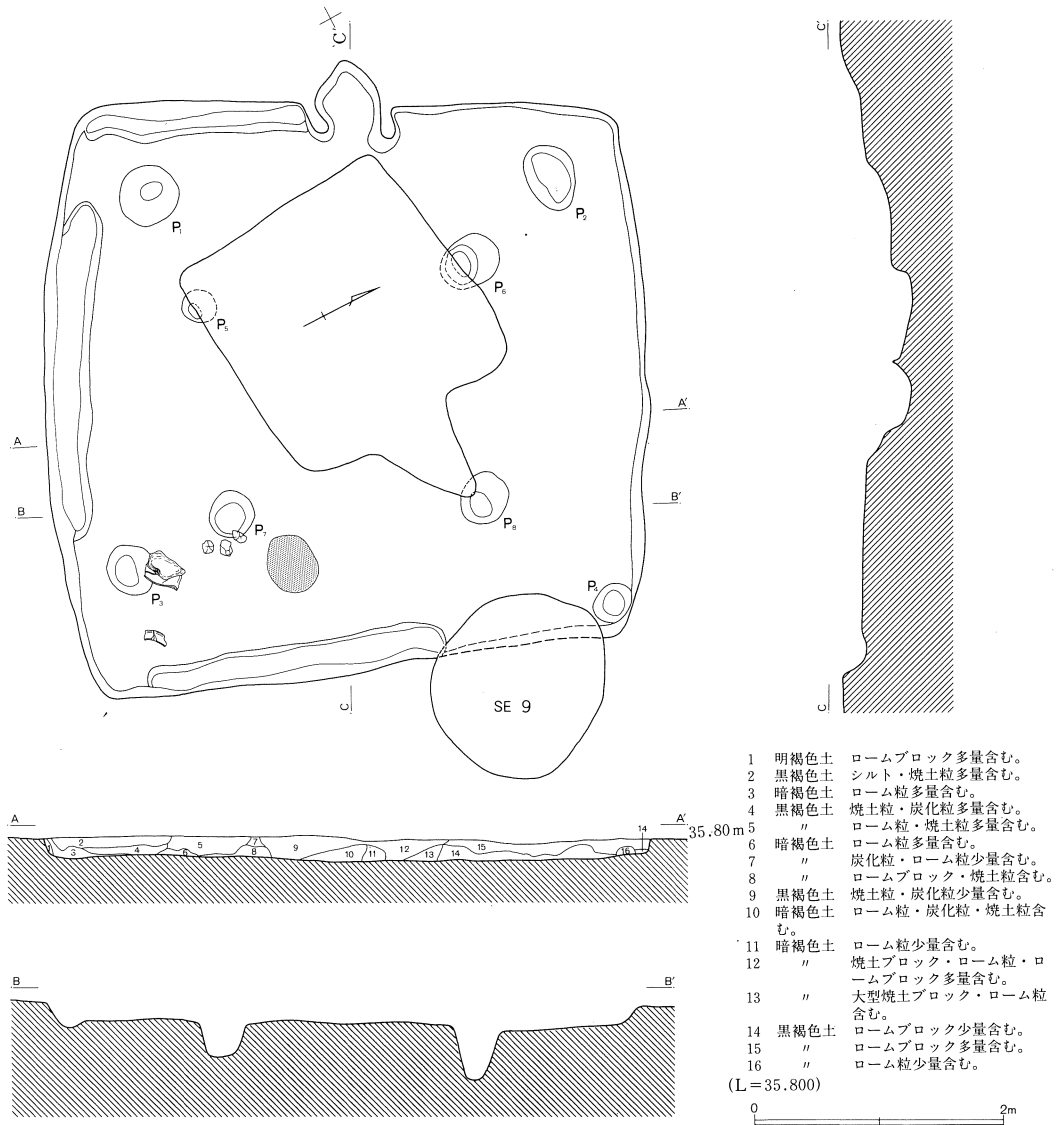
調査風景

IV 遺構と出土遺物

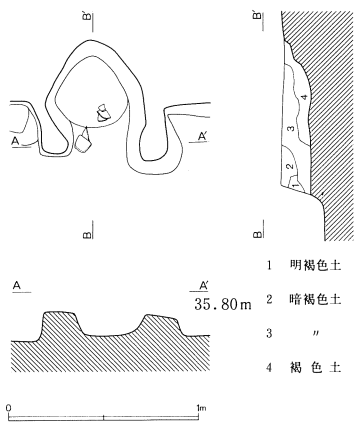
(1) 住居跡

S J 1 (第1号住居跡・第5・6図)

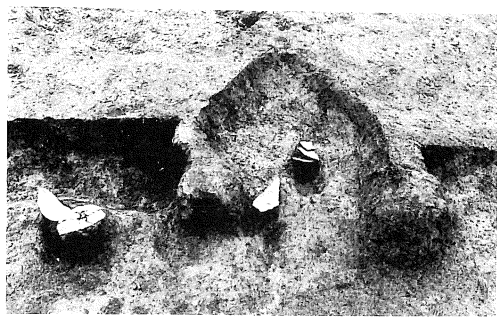
23-GGrid に位置する。住居は廃棄後、S J 5 に中央部を、S E 5 に北東部を壊される。本住居は北辺がやや短く、不整形方を呈する。覆土は暗褐色土をベースとするが、堆積の状況は不規則である。深さは約20cmで、床面は中央に向かって緩やかに傾斜するが、貼り床は認められなかった。



第5図 S J 1

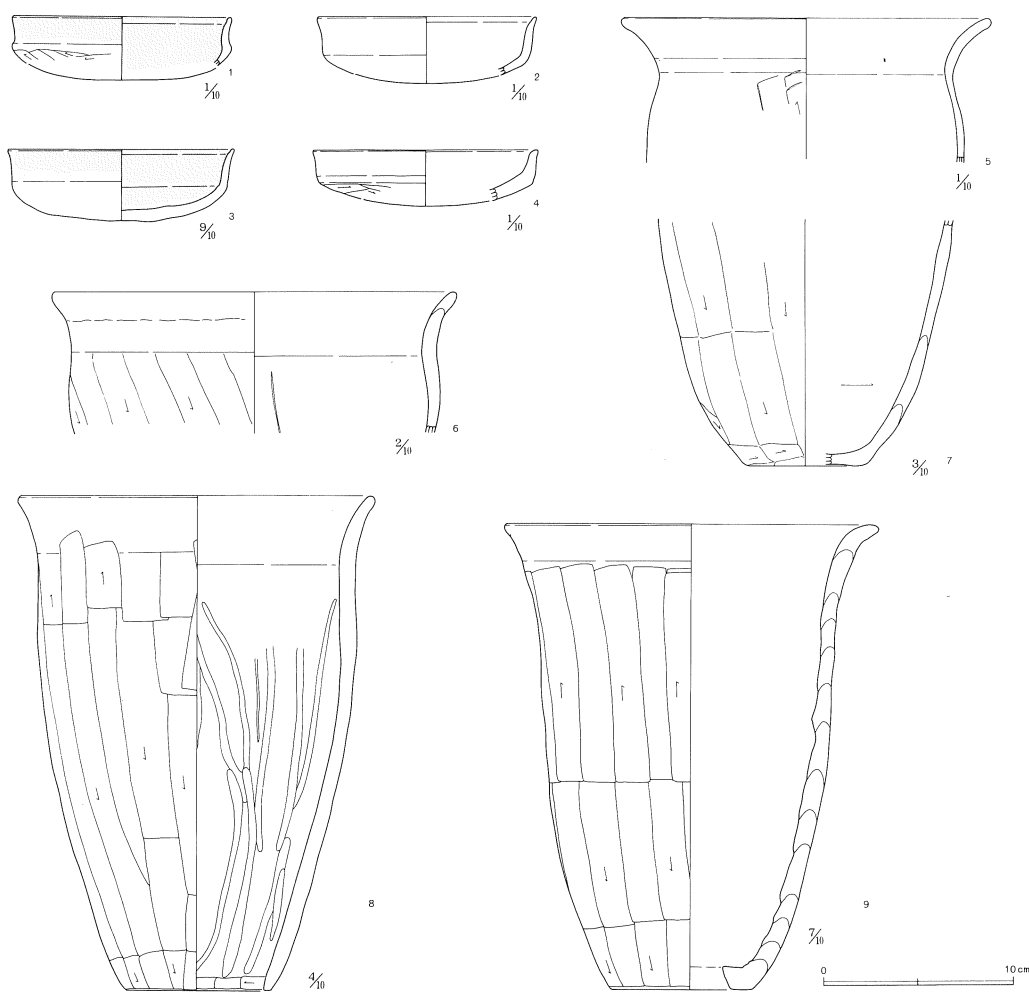


- 1 明褐色土 ロームブロック
ク含む。
- 2 暗褐色土 焼土ブロック
含む。
- 3 " 焼土粒多量含
む。
- 4 褐色土 ロームブロッ
ク含む。



S J 1 竈

第 6 図 S J 1 竈



第 7 図 S J 1 出土遺物

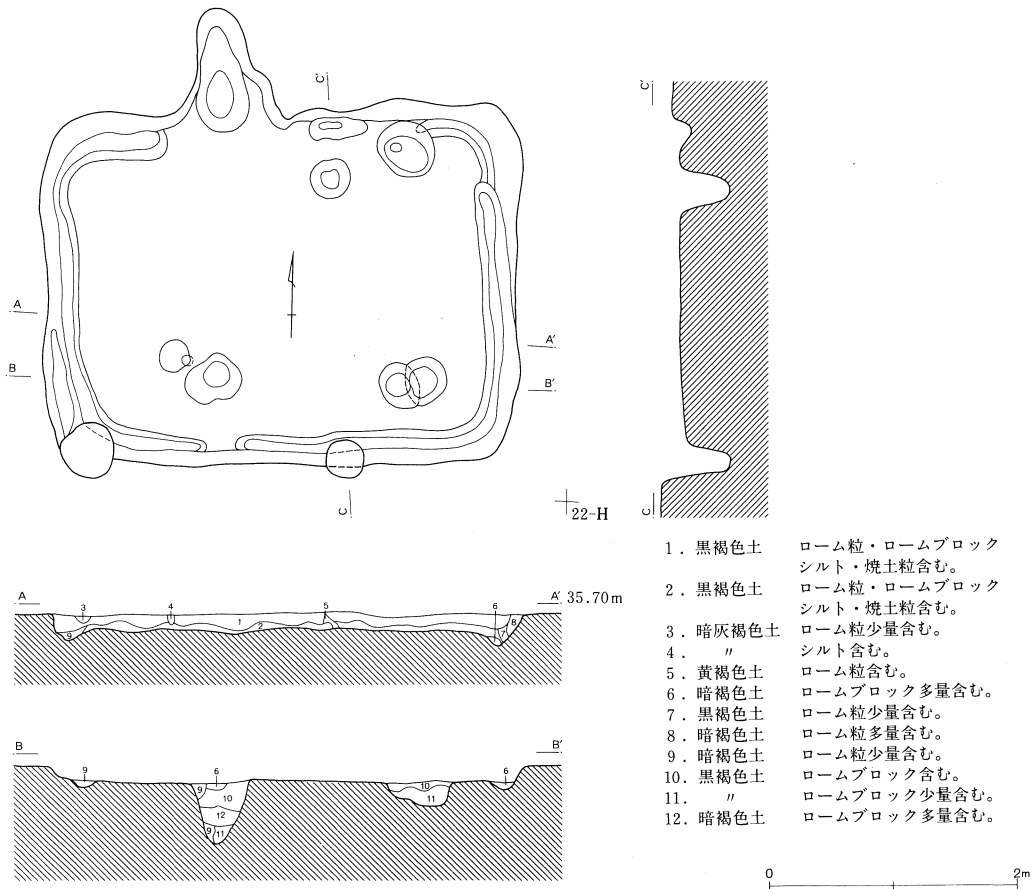
竈は西辺中央に付設され、煙道は短く、袖の残存状態は良好とはいえないが、僅かに旧状をとどめている。壁溝は住居南側に3カ所、柱穴は隅に4カ所、内側に4カ所検出された。東辺付近には焼土（スクリーントーン部分）が5mmほどの厚さで検出された。

S J 1 出土遺物（第7図）

遺物は竈付近と南東の隅付近に集中している。S J 5 付近は重複している関係でやや浮いた状態にある。1～4は土師器坏で、いずれも口径12cm弱、器高3cm強である。内面～口縁部にかけてはナデの後、赤彩される。体部はヘラケズリ。胎土には砂粒が含まれる。5～7は土師器甕の破片で、6は甕の可能性もある。口縁部は横ナデ、内面はヘラナデ、外面は縦方向にヘラケズリされる。8・9は甕で、8は南東隅より潰れた状態で出土した。口縁部は横ナデ、外面は縦のヘラケズリ、内面は縦のミガキが施される。9は底部が内側に折れ、やや厚手である。輪積痕が明瞭で、外面はヘラケズリ、内面～口縁部は横ナデ。胎土には砂粒、白色粒を含む。

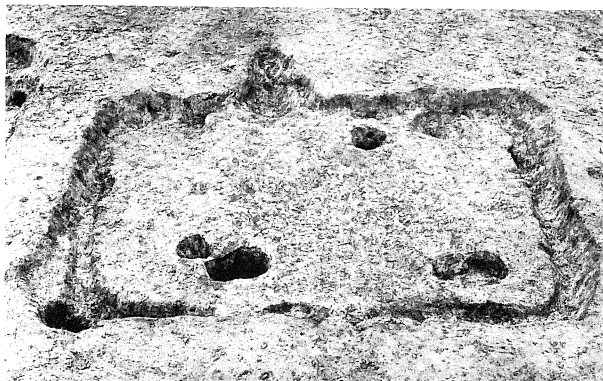
S J 2（第2号住居跡・第8・9図）

21-GGrid に位置し、S J 3 の約1m西にあたる。長方形を呈し、竈は北辺左寄りに付設され



第8図 S J 2

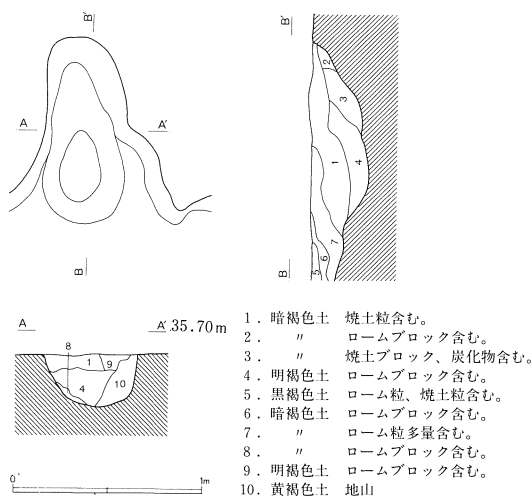
る。基本土層は、黒褐色土と暗褐色土で、少量のロームブロックが含まれる。掘り込みは約15cmで、3cm～5cmの貼床が確認された。壁溝は何度かにわたって掘り直され、部分的にきれるが、ほぼ全周する。柱穴は主柱とみられるものが2カ所、貯蔵穴は北辺右隅に検出された。竈はやや煙道が長く、燃焼部の掘り込みが深い。袖は右袖が僅かに残っていた。



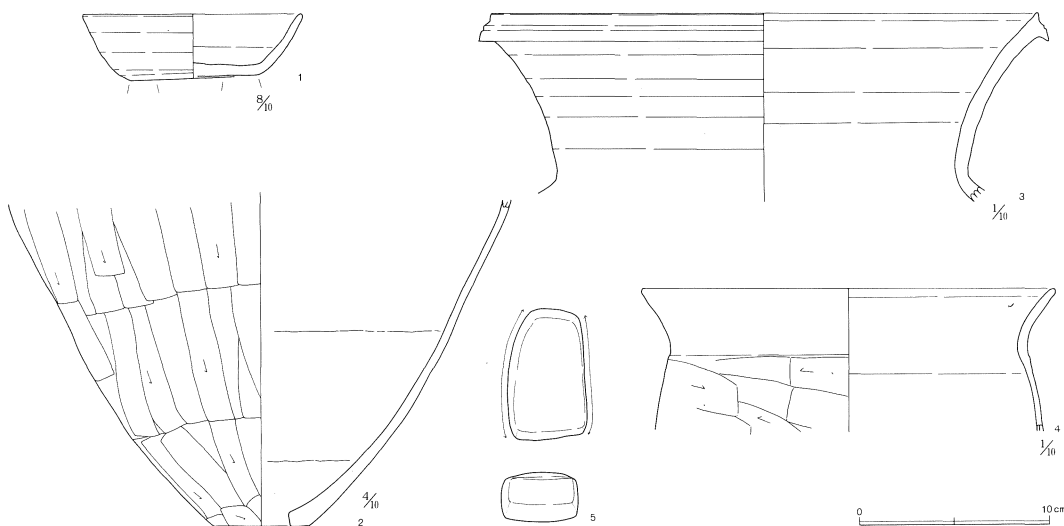
S J 2 出土遺物 (第10図)

1は須恵器坏で、口径11.6cm、器高3.4cm。内面～外面はロクロナデ、底部は回転ヘラケズリ後、周辺ヘラケズリ。2は須恵器甕の口縁部破片。いずれも砂粒、白色針状物含む。3は土師器甕、4は土師器甕の破片。3は底部内側もヘラケズリされ、内面はやや風化しているが、輪積みの痕跡をとどめている。いずれも粗い砂粒を含む。

S J 2

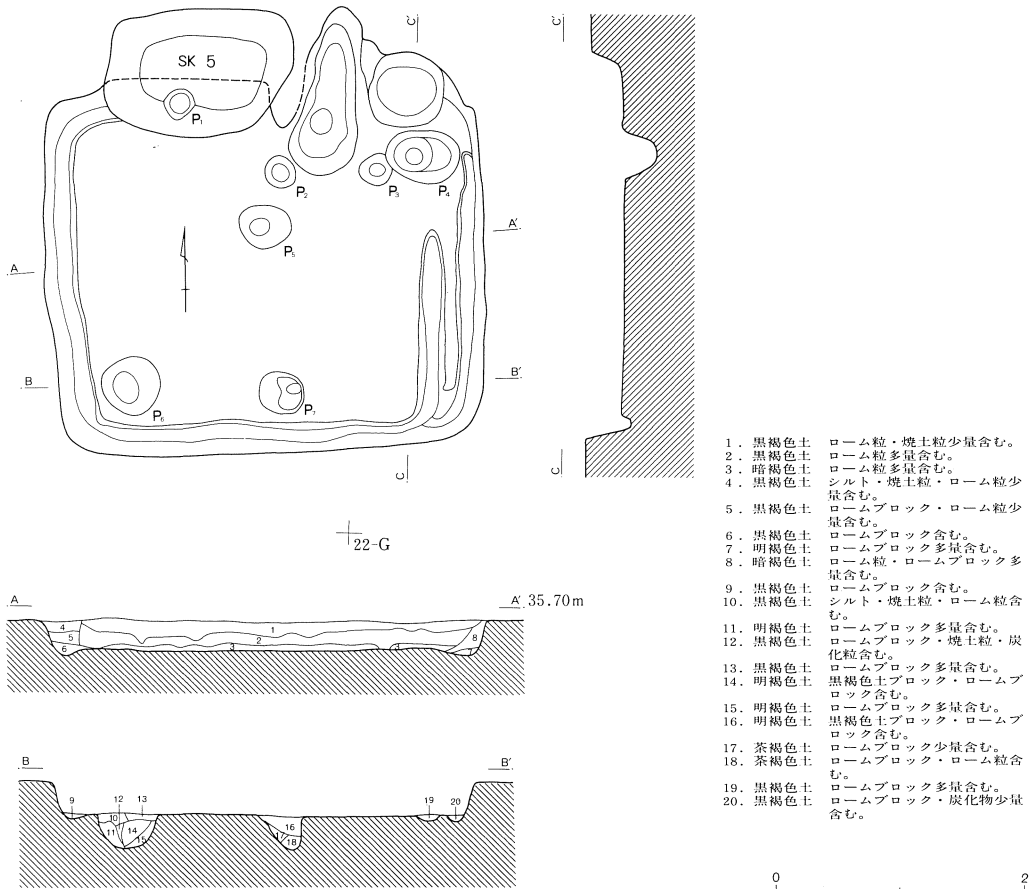


第9図 S J 2 竈



第10図 S J 2 出土遺物

S J 3 (第3号住居跡・第11・12図)



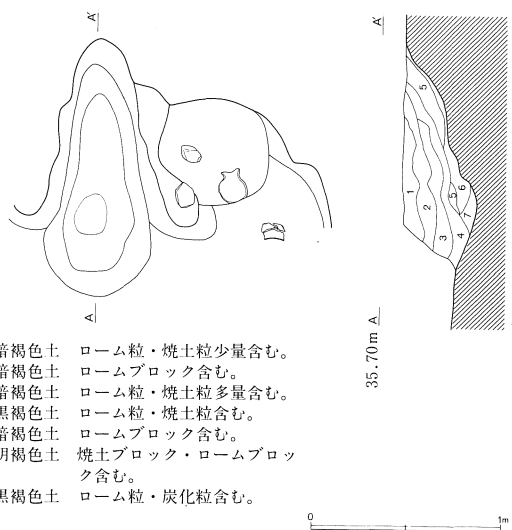
1. 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量含む。
2. 黒褐色土 ローム粒多量含む。
3. 暗褐色土 ローム粒多量含む。
4. 黒褐色土 シルト・焼土粒・ローム粒少量含む。
5. 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒少量含む。
6. 黒褐色土 ロームブロック含む。
7. 明褐色土 ロームブロック多量含む。
8. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。
9. 黒褐色土 ロームブロック含む。
10. 黒褐色土 シルト・焼土粒・ローム粒含む。
11. 明褐色土 ロームブロック多量含む。
12. 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒・炭化粒含む。
13. 黒褐色土 ロームブロック多量含む。
14. 明褐色土 黒褐色土・ロームブロック・ロームブロック含む。
15. 明褐色土 ロームブロック多量含む。
16. 明褐色土 黒褐色土・ロームブロック・ロームブロック含む。
17. 茶褐色土 ロームブロック少量含む。
18. 茶褐色土 ロームブロック・ローム粒含む。
19. 黒褐色土 ロームブロック多量含む。
20. 黒褐色土 ロームブロック・炭化物少量含む。

第11図 S J 3

21-G Grid に位置する。長方形を呈し、竈は北辺右寄りに付設される。竈の左側はSK 5に壊され、右側はやや張り出すものの住居に付属するものと考えられる。この Pit は竈の右袖を切りこみ、覆土の状態からも同時期の遺構とみられる。壁溝は底面の凹凸が目だち、一部をSK 20によって壊されるが、ほぼ全周するとみられる。また、S J 2 同様掘り直しを行っている。竈はやや煙道が長く、燃烧部の掘り込みも深い。柱穴は不規則に7基検出された。

S J 3 出土遺物 (第13図)

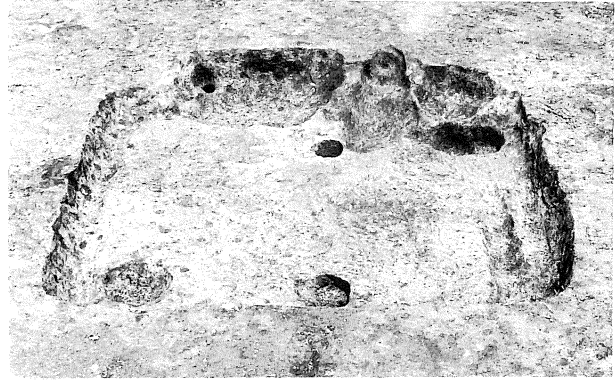
遺物は土師器・須恵器の坏、甕の小破片が出



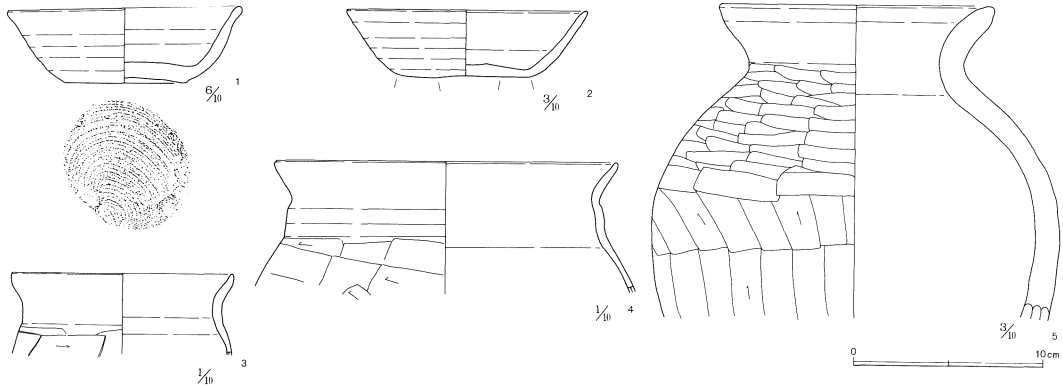
1. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量含む。
2. 暗褐色土 ロームブロック含む。
3. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒多量含む。
4. 黒褐色土 ローム粒・焼土粒含む。
5. 暗褐色土 ロームブロック含む。
6. 明褐色土 焼土ブロック・ロームブロック含む。
7. 黒褐色土 ローム粒・炭化粒含む。

第12図 S J 3 竈

土している。1・2は須恵器坏で、いずれも内外面はロクロナデ。1は口径12.4cm、器高3.8cm、底部は回転糸切り未調整、2は口径12.8cm、器高3.4cm、底部は回転糸切り後周辺ヘラケズリ。胎土は砂粒、白色針状物含む。3・4は土師器甕の口縁部破片で、「コ」の字口縁に近い形態を呈し、3は口唇部がやや内にはいる。口縁部は横ナデ、内面はともに風化しているが、外面は横方向のヘラケズリ。やや粗い砂粒を含む。5は土師器甕の破片で、内外面とも黒色を呈する。内面は細かい横ナデ、外面は上半部がやや粗い横方向のヘラミガキ、下半部は縦方向のヘラケズリ。胎土には砂粒を含む。



S J 3



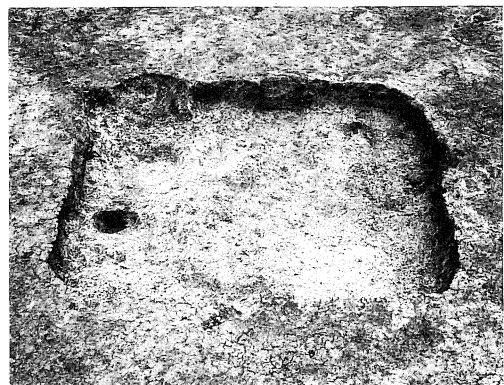
第13図 S J 3 出土遺物

S J 4 (第4号住居跡・第14図)

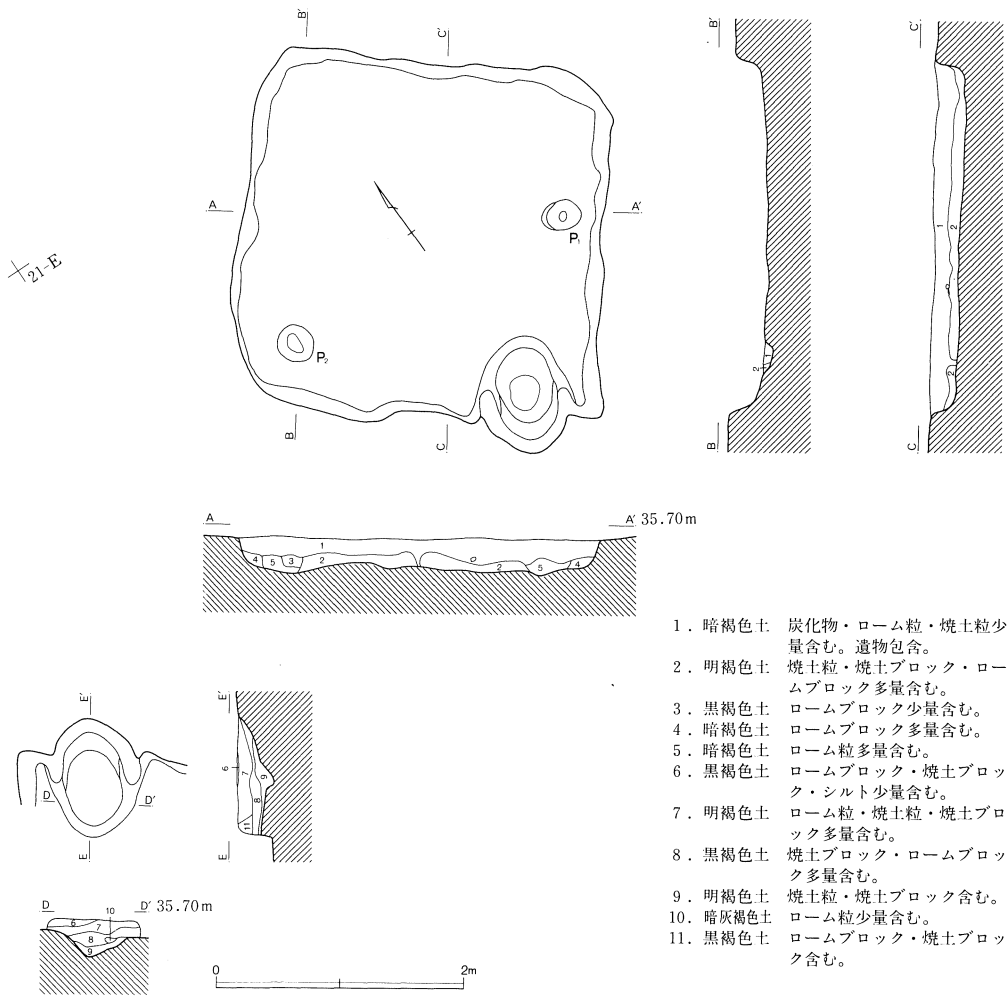
21-E Grid に位置する。ほぼ正方形を呈し、竈は南隅付近に付設される。確認面からの掘り込みは25cm余りで、暗褐色土をベースにし、ロームブロックを多量含む。床面は平坦で壁溝は持たない。竈は燃焼部中央がややくぼむ。袖は殆ど竈内部に崩れ落ちていた。Pit は2基検出された。

S J 4 出土遺物 (第15図)

1は土師器甕の胴部下半の破片で、外面は縦方向のヘラケズリ、内面はナデ。胎土には粗い砂粒、白色粒子を含む。色調は淡橙褐色。



S J 4

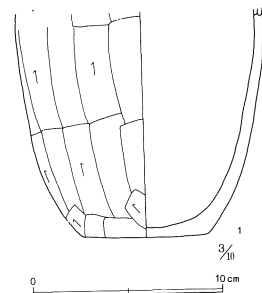


1. 暗褐色土 炭化物・ローム粒・焼土粒少量含む。遺物包含。
2. 明褐色土 焼土粒・焼土ブロック・ロームブロック多量含む。
3. 黒褐色土 ロームブロック少量含む。
4. 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
5. 暗褐色土 ローム粒多量含む。
6. 黒褐色土 ロームブロック・焼土ブロック・シルト少量含む。
7. 明褐色土 ローム粒・焼土粒・焼土ブロック多量含む。
8. 黒褐色土 焼土ブロック・ロームブロック多量含む。
9. 明褐色土 焼土粒・焼土ブロック含む。
10. 暗灰褐色土 ローム粒少量含む。
11. 黒褐色土 ロームブロック・焼土ブロック含む。

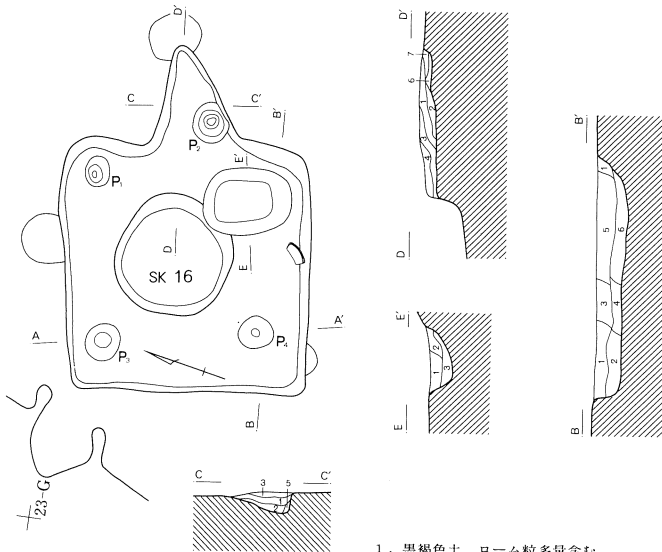
第14図 SJ4・竈

SJ5 (第5号住居跡・第16図)

23-GGrid に位置し、一辺約 2 mの方形を呈し、SJ1 の中に構築される。SJ1 の床面を約25cm掘り込んでおり、SJ1 確認面からは約45cmを測る。竈は東辺中央に付設され、煙道は住居の大きさの割には長く、焼土量も多い。Pit は住居隅と竈右袖付近に検出された。住居中央にはSK16、竈の右隅には貯蔵穴とみられる土壌が重複して掘られているが、Pit にしても住居としてはやや不自然な部分が伴う。覆土は黒褐色～暗褐色を呈し、床面には少ないが、炭化粒、多量のロームブロック、焼土ブロックが含まれる。

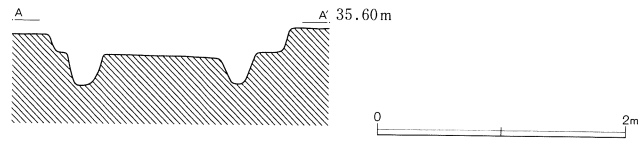


第15図 SJ4 出土遺物



- 4. 暗褐色土・ロームブロック多量含む。
- 5. 暗褐色土・ロームブロック多量含む。
- 6. 暗褐色土・ロームブロック多量含む。
- 7. 暗褐色土・ロームブロック多量含む。
- 8. 暗褐色土・ロームブロック多量含む。
- 9. 暗褐色土・ロームブロック多量含む。
- 10. 暗褐色土・ロームブロック多量含む。
- 11. 明褐色土・ロームブロック多量含む。
- 12. 暗褐色土・ロームブロック多量含む。
- 13. 明褐色土・ロームブロック多量含む。
- 14. 暗褐色土・ロームブロック多量含む。
- 15. 暗褐色土・ロームブロック多量含む。
- 16. 明褐色土・ロームブロック多量含む。

- 1. 黒褐色土・ローム粒多量含む。
- 2. 暗褐色土・ローム粒・焼土粒少量含む。
- 3. 黒褐色土・ローム粒・焼土粒少量含む。



第16図 S J 5

第17図 S J 5 出土遺物

S J 5 出土遺物 (第17図)

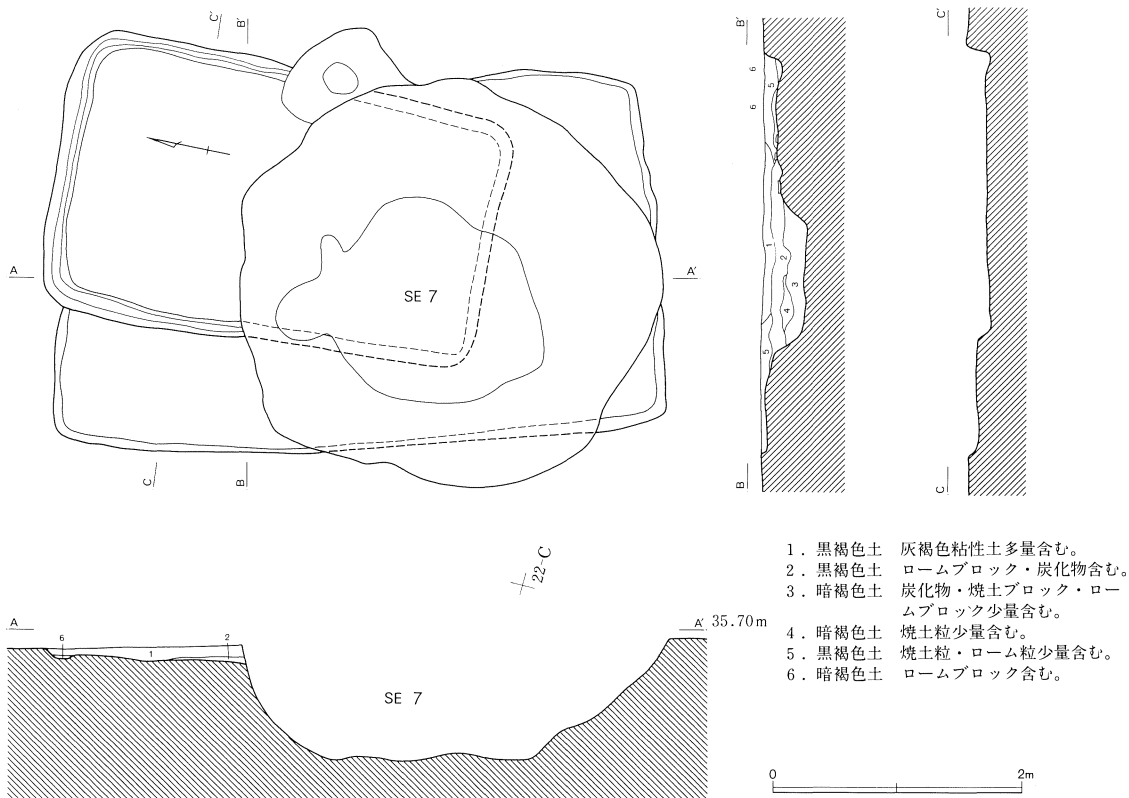
遺物は土師器甕の胴部、底部の小破片が数点出土した。1は小形甕の口縁部破片で、口縁部は横ナデ、胴部外面は横方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデ。胎土には砂粒を含む。

S J 6・10 (第6・10号住居跡・第18図)

21-CGrid に位置する。いずれも長方形を呈すると考えられ、SE 7 に壊されている。重複関係はS J 10が大形住居のS J 6に重なっているもので、S J 10は僅かに深く掘り込まれる。S J 6は長辺6m、短辺3m、深さ10cmを測る。床面は平坦で、竈や掘形はS J 10やSE 3に壊されているとみられ、検出されなかった。S J 10は長辺3.5m、短辺2.2m、深さ約15cmを測る。壁溝はSE 3に壊されているが全周すると思われる。床面は平坦である。また、東寄の床面には、焼土が数カ所にわたって検出された。竈は東辺の中央に付設されたと思われるが、攪乱によって既に原形をとどめておらず、僅かに煙道部の先端部分に焼土と炭化材が認められただけである。覆土はSE 7の埋没時の小石などが混じる暗褐色土で、ロームブロックも多量に含まれる。Pit 等は検出されなかった。

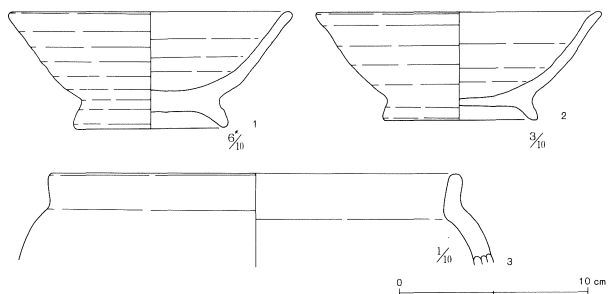
S T 6・10出土遺物 (第19図)

出土遺物は少なく、1・2はS J 6、3はS J 10の覆土中より出土した。1・2は須恵器高台坏で、淡橙褐色を呈した酸化焰焼成の土器である。1は口径15cm、器高6.2cm、2は口径16.2cm、器



第18図 S J 6・10

高5.6cmを測る。いずれも胎土に粗い砂粒、白色粒、小石を含む。3は土師器甕の口縁部破片で、全体に風化が著しい。口縁部は内外面とも横方向のナデが施される。胎土に砂粒を含む。

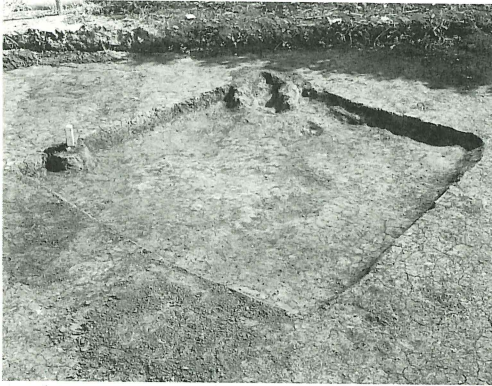


第19図 S J 6・10出土遺物

S J 7 (第7号住居跡・第20・21図)

25-HGrid に位置する。一辺3m余りの不整形を呈し、東辺隅をSD1によって壊されている。確認面からの掘り込みは約20cmで、床面は貼り床の痕跡も認められず、凹凸が目立つ。床面には竈周辺の他にも焼土が認められるが、炭化物は検出されなかった。また、壁溝はもたず、壁の立ち上がりは、部分的に未成形の部分を残す。竈は南辺隅に付設され、遺物の大半はこの付近に集中している。竈内の掘形は床面とほぼ同位置で、煙道部に至って僅かに段をもって立ち上が

る。燃焼部には焼土ブロックおよび灰白色の粘土ブロック、ロームブロックが多く混入し、少量ではあるが炭化物も認められる。袖は左側が既に一部が崩落していたが、灰白色の粘土は袖の中にも相当量認められる。竈の右袖上からも出土した遺物は、床面に置かれたように出土した土器に比べて、やや傾いて出土しており、棚や一段高い位置に置かれていたものが、住居の廃絶とともに落下したことを想定させるものがある。また、竈の支脚には長方形の自然石を用いている。覆土は黒褐



S J 7

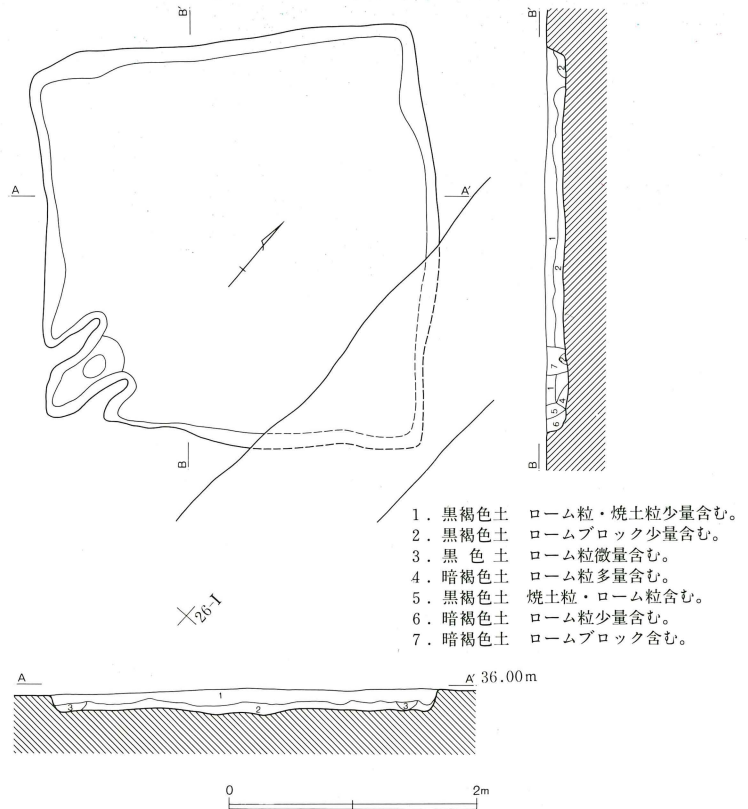


S J 7 遺物出土状況

色～暗褐色をベースにし、ロームブロック、砂粒などが比較的多く含まれる。

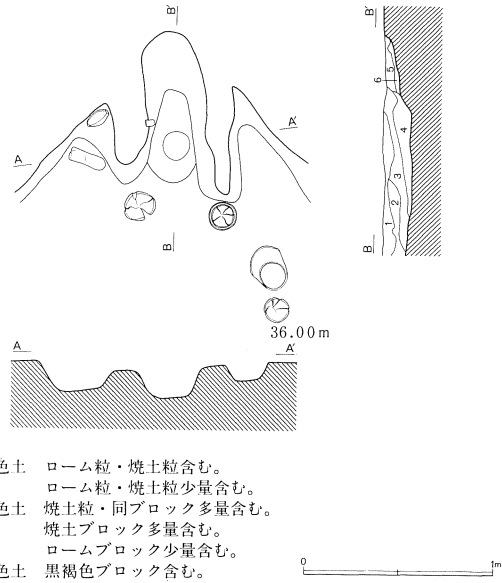
S J 7 出土遺物 (第22図)

1～7は土師器坏で、口径は13cm前後、器高は3.8cm前後と3.5cmのものがあり、1～6は内面から口縁部外面にかけては赤彩され、口唇部内側に沈線がめぐる。また、内面から口縁部外面にかけては同様に横方向のナデが加わる。1・2は口縁部がやや内湾が著しく、口唇部の「S」字の屈曲部分が短い。3～6は口縁部の立ち上がりが直立またはやや外傾し、屈曲する。7は竈右袖付近から8の坑の中に収納された状態で出土した。口縁部に比べて体部は厚い。8は須恵器坑であるが、酸化焰焼成のため淡灰褐色を呈する。底部外面はヘラケズリされるが厚く、内

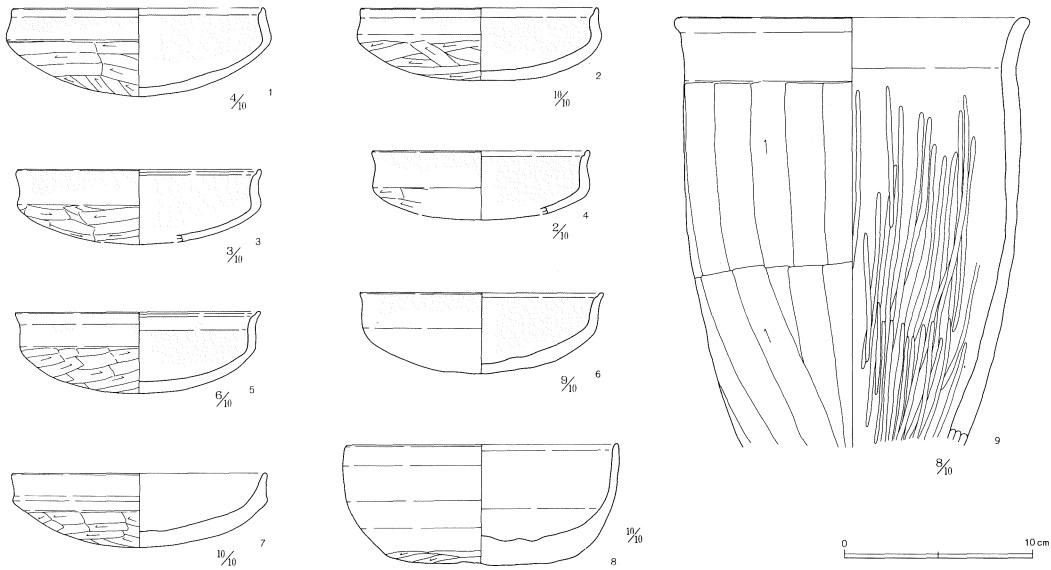


第20図 S J 7

面見込み部にロクロ痕跡を明瞭に残す。口径16 cm、器高6 cm。9は土師器甕で竈付近で倒立した状態で出土した。口径は18cm、器高は25cmを測る。外面胴部は縦方向のヘラケズリ、内面は横ナデされる。胎土には砂粒、白色粒子、8には白色針状物も含まれる。



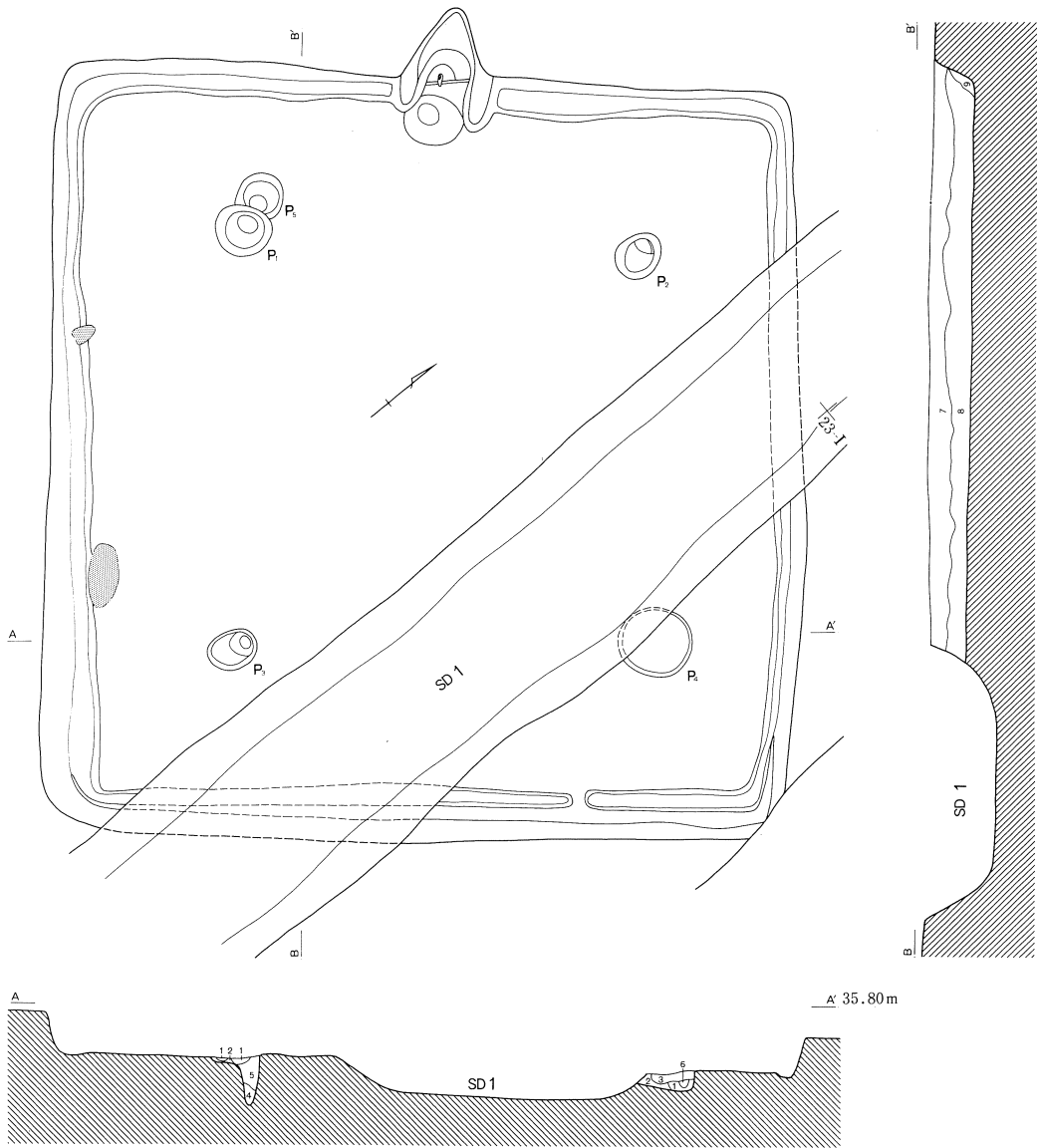
第21図 S J 7 竈



第22図 S J 7 出土遺物

S J 8 (第8号住居跡・第23・24図)

23-HGrid に位置し、中央部やや左寄りをS D 1 に壊されている。正方形を呈し、竈は北東辺中央に付設される。確認面からの掘り込みは30cm余りあり、4本の支柱穴が検出された。床面は平坦で、中央部に僅かに貼り床が認められる。壁溝は南東辺で一部切れるが、ほぼ全周する。竈は燃焼部に僅かのくぼみをもつ他は床面と同位面で、煙道部へは急激に立ち上がる。袖は左側がやや崩れていたが、遺存状態は良好で、基部はロームブロックと粘土が互層になって構築されている。ま

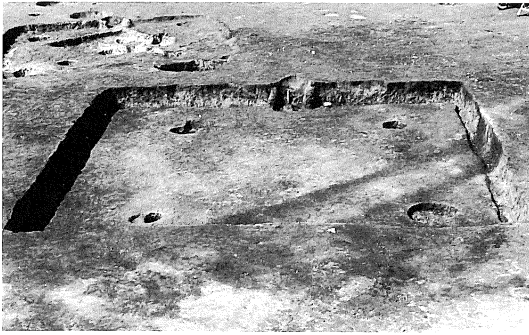


1. 暗褐色土 ローム粒・同ブロック含む。
2. 黄褐色土 黒褐色ブロック含む。
3. 暗褐色土 ロームブロック含む。
4. " 焼土粒・ローム粒含む。
5. " " "
6. 黒褐色土 ローム粒少量含む。
7. 黒褐色土 焼土粒・ローム粒多量含む。
8. " 焼土粒・炭化粒含む。
9. " 焼土粒・ローム粒含む。

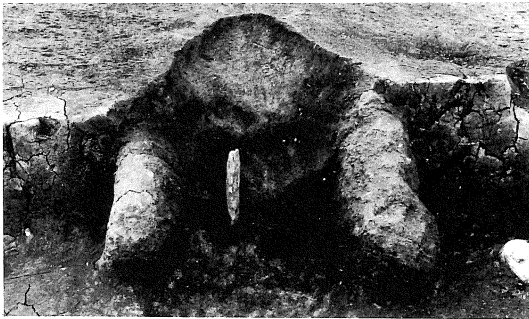


第23図 S J 8

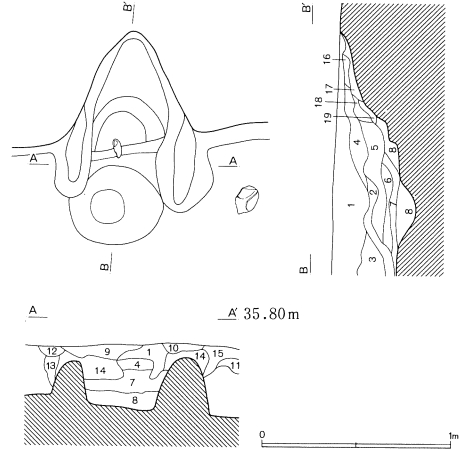
た、南側の壁溝付近では、住居が完全に埋まりきらない時点で投棄されたとみられる焼土が検出された。覆土は暗褐色を呈し、ローム粒子が含まれる。



S J 8

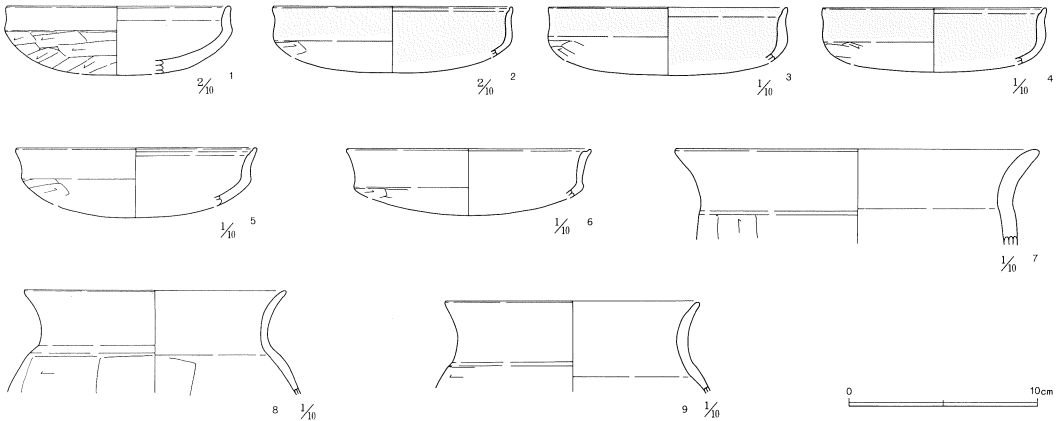


S J 8 竈



1. 暗褐色土 ロームブロック含む。
2. 暗褐色土 焼土ブロック多量含む。
3. 暗褐色土 ローム粒多量含む。
4. 赤褐色土 焼土粒多量含む。
5. 赤褐色土 焼土ブロック多量含む。
6. 暗褐色土 焼土粒含む。
7. 橙褐色土 炭化物・焼土粒含む。
8. 黒褐色土 焼土粒少量含む。
9. 黒褐色土 焼土ブロック含む。
10. 明褐色土 ロームブロック含む。
11. 暗褐色土 ロームブロック含む。
12. 黒褐色土 焼土粒含む。
13. 暗褐色土 ロームブロック含む。
14. 赤褐色土 焼土ブロック含む。
15. 暗褐色土 ロームブロック含む。
16. 暗褐色土 ロームブロック含む。
17. 明褐色土 ローム粒少量含む。
18. 暗褐色土 ロームブロック含む。
19. 明褐色土 焼土粒・ローム粒含む。

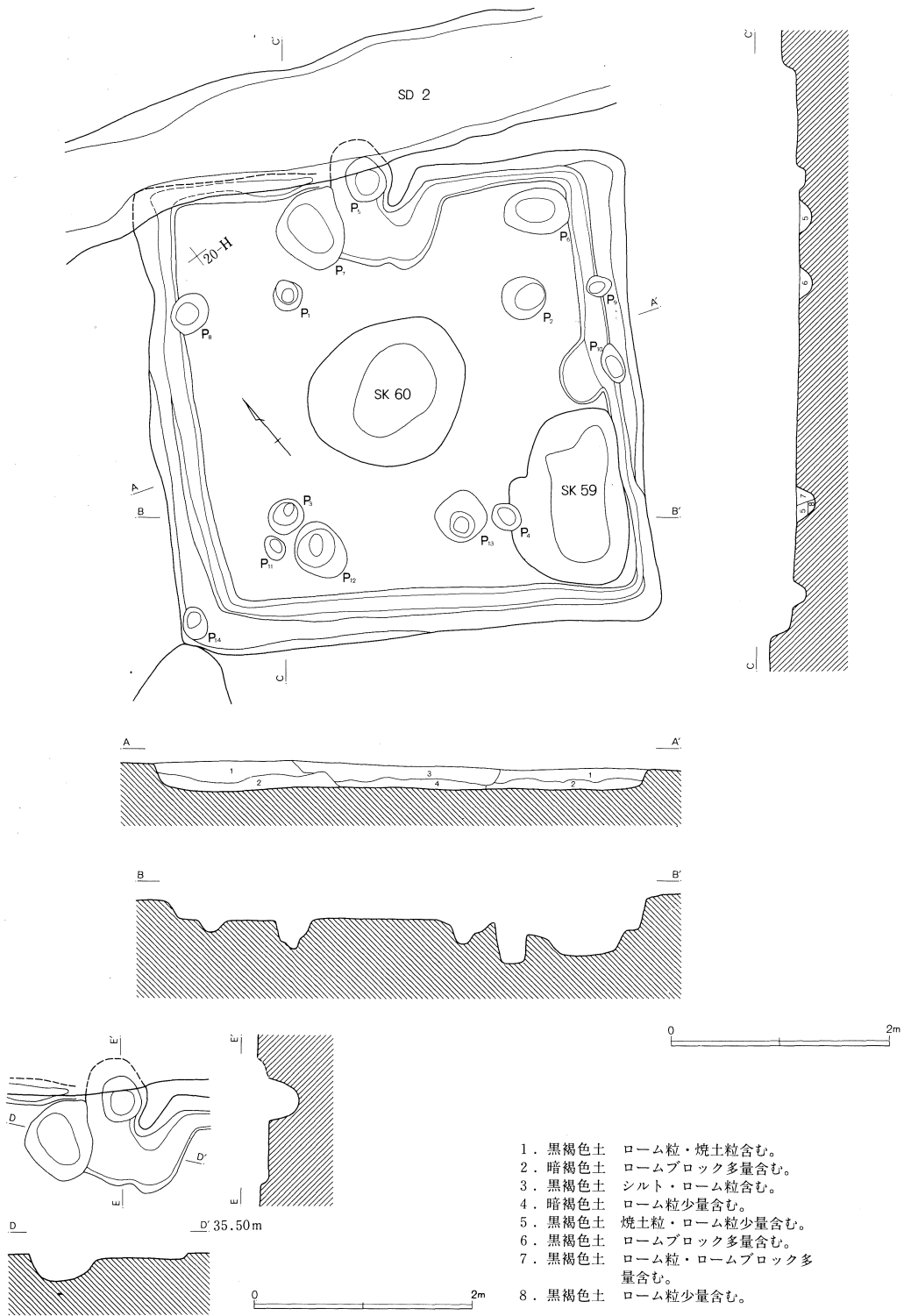
第24図 S J 8 竈



第25図 S J 8 出土遺物

S J 8 出土遺物 (第25図)

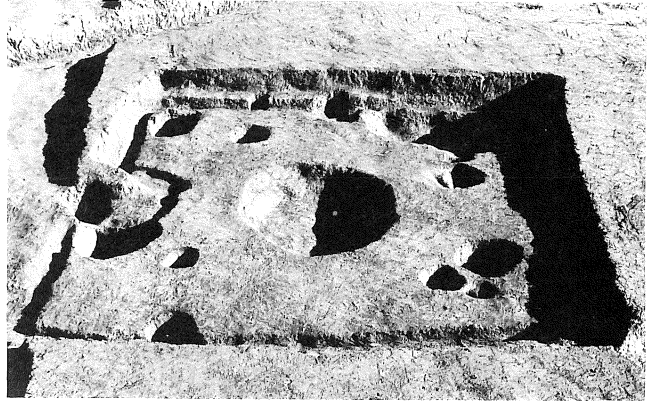
1～6は土師器坏の破片で、推定口径が12～13cm、推定器高は3.5cm前後である。1～4は内面から口縁部外面にかけて赤彩される。口唇部の内側には沈線はみられない。7は土師器甕の口縁部破片。内外面とも横ナデ。8、9は小形の土師器甕の口縁部～胴部の破片。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は横方向のヘラケズリ。いずれも胎土に砂粒を含む。



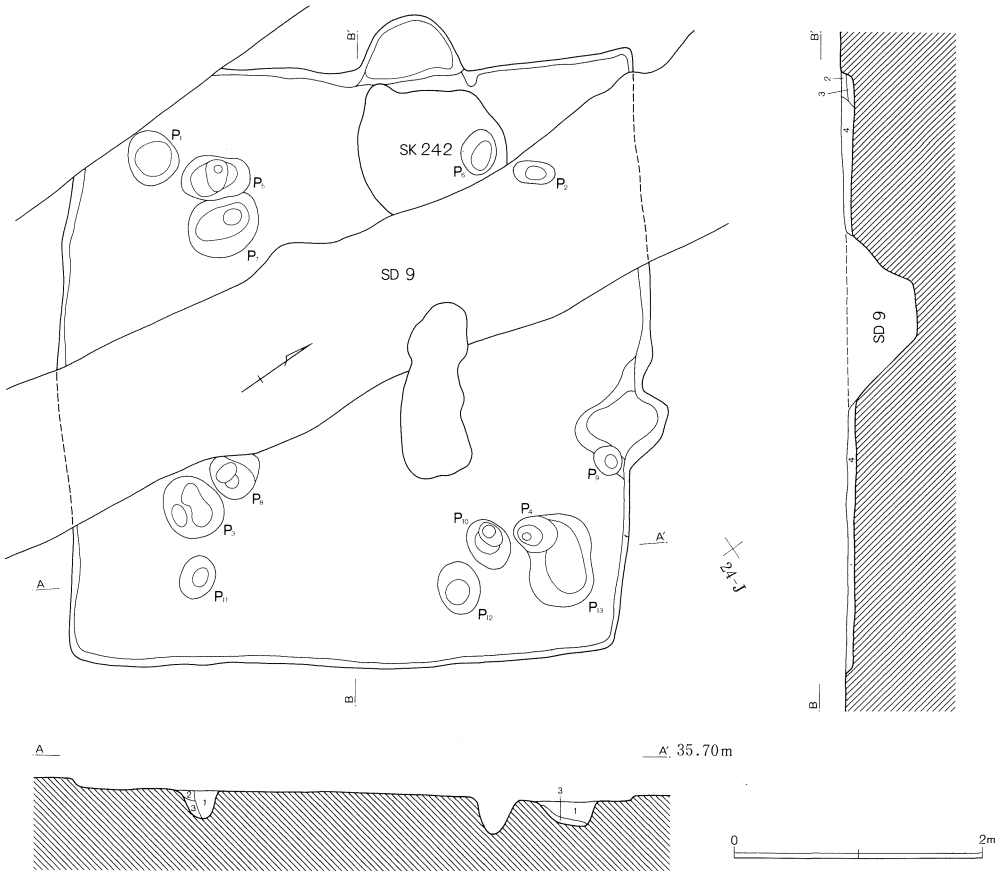
第26図 S J 9・竈

S J 9 (第9号住居跡・第26
図)

19-F~G Grid に位置し、ほ
ぼ正方形を呈し、北辺及び竈をS
D 2に、他にも土壇等によって攪
乱を受けている。確認面からの掘
り込みは25cm余り、床面は平坦で
ある。壁溝は全周し、壁との間に
テラス部分がある。遺物は土師器
坏の小破片が出土している。



S J 9

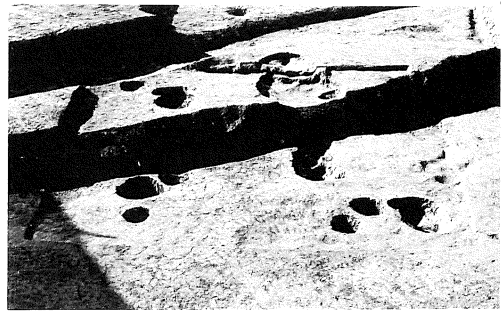


1. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒多量含む。
2. 黒褐色土 ローム粒多量含む。
3. 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多
量含む。
4. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少
量含む。

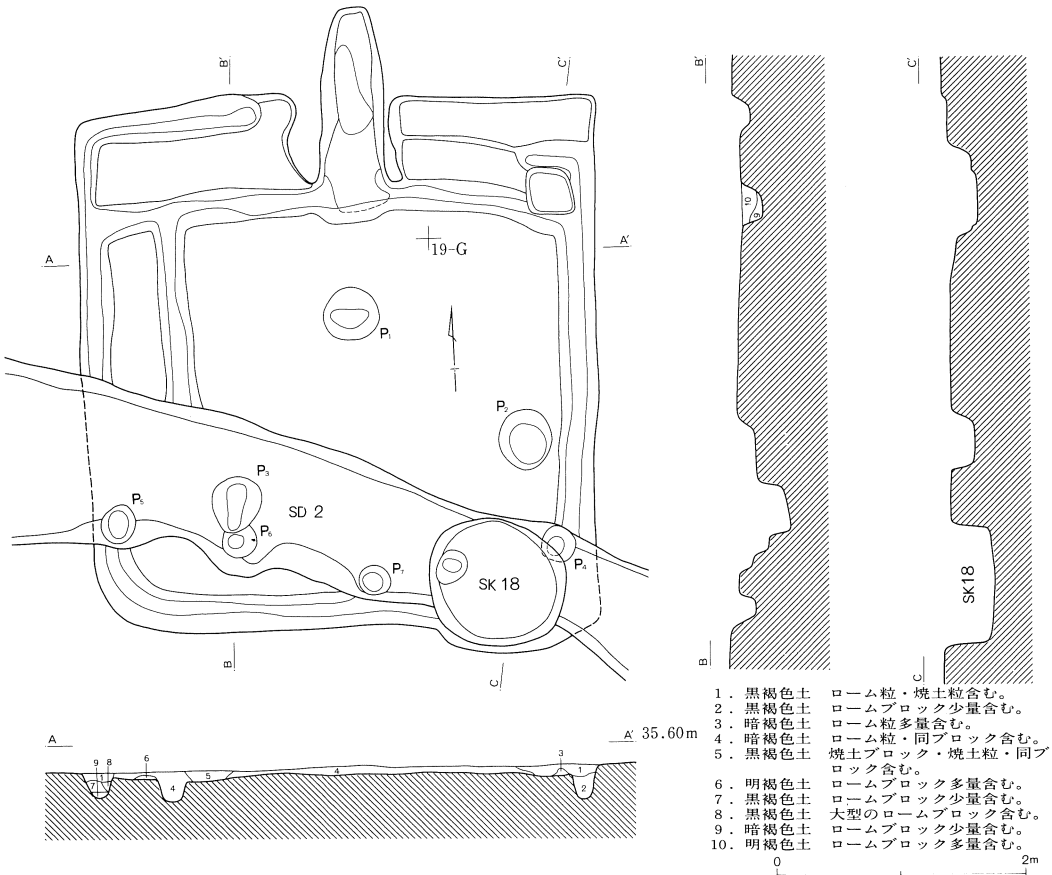
第27図 S J 11

S J 11 (第11号住居跡・第27図)

24-I Grid に位置し、中央部をSD 9、西側隅をSD 1等に壊される。ほぼ一辺4.5cmの正方形を呈し、竈は北東辺の中央やや右寄りに付設される。北西辺中央の竈状の部分は、焼土は認められるものの体積の状態が不自然であり、竈と判断しなかった。確認面からの深さは、約10cmで部分的には、確認面が床面となっている箇所もある。床面は平坦で、特に焼土、炭化材、貼り床等は認められなかった。Pit は13基検出されたが、支柱穴となるのはP 1～P 4としたPit が考えられる。他のPit については、確認面からの深さが浅いこともあり、住居のPit として掘られたものではない可能性もある。出土遺物は僅かに土師器坏や甕の小破片が数点である。覆土は暗褐色をベースに黒褐色が部分的に混入し、ローム粒、ロームブロックが多く含まれる。



S J 11



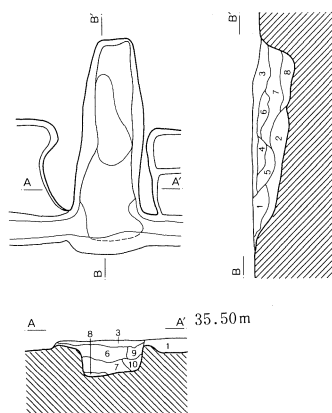
第28図 S J 12

S J 12 (第12号住居跡・第28・29図)

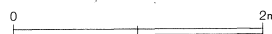
19-F Grid に位置し、中央部南半を S D 2、S K 18 に壊される。南北がやや長いが、正方形に近い平面形態を示し、竈は北辺中央に付設される。遺存状態は悪く、南半分は壁面が殆ど残っていない状態であった。床面は凹凸が目立つ。壁溝はほぼ全周するが、西側と北側は一部二重になっている。竈の焚き口部の重複関係は不明瞭である。竈は長い煙道を持ち、燃烧部付近には焼土も検出されたが、大半は残存していない。また、竈右にはテラス状の平坦面が床面より約5cmの高さに設けられている。覆土は暗褐色を呈し、大形のロームブロックが多量含まれる。遺物は土師器坏の小破片が出土している。



S J 12



1. 暗褐色土 焼土粒少量含む。
2. 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
3. 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
4. 赤褐色土 焼土ブロック多量含む。
5. 暗褐色土 焼土ブロック多量含む。
6. 暗褐色土 焼土ブロック少量含む。
7. 暗褐色土 焼土ブロック少量含む。
8. 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量含む。
9. 灰色土 灰色土ブロック含む。
10. 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒含む。



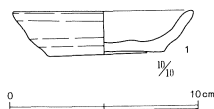
第29図 S J 12竈

S J 13 (第13号住居跡・第31図)

21-B Grid に位置する。本遺跡の最も西にあたり、一部が調査区外に入る。竈は東辺中央に付設され、焼土が掘形内に僅かに残っているだけで、袖は検出されなかった。床面は平坦で、5基の Pit が検出された。覆土はローム粒子を含む暗褐色がベースである。

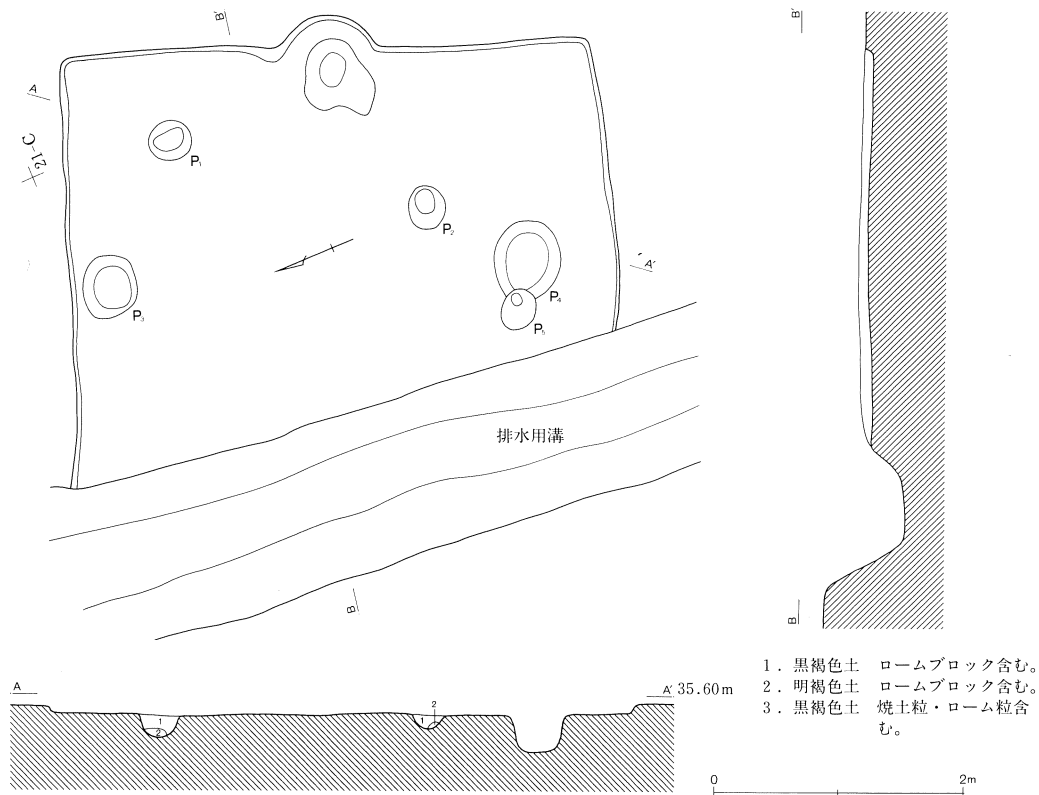
S J 13出土遺物 (第30図)

1 はかわらけの完形品で、口径9.8 cm、器高2.2 cmを測る。内面～外面はロクロナデ、底部は回転ヘラケズリ無調整。胎土に砂粒、白色針状物含む。



第30図 S J 13出土遺物

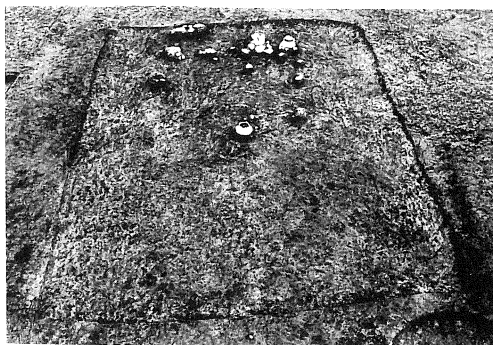
S J 13



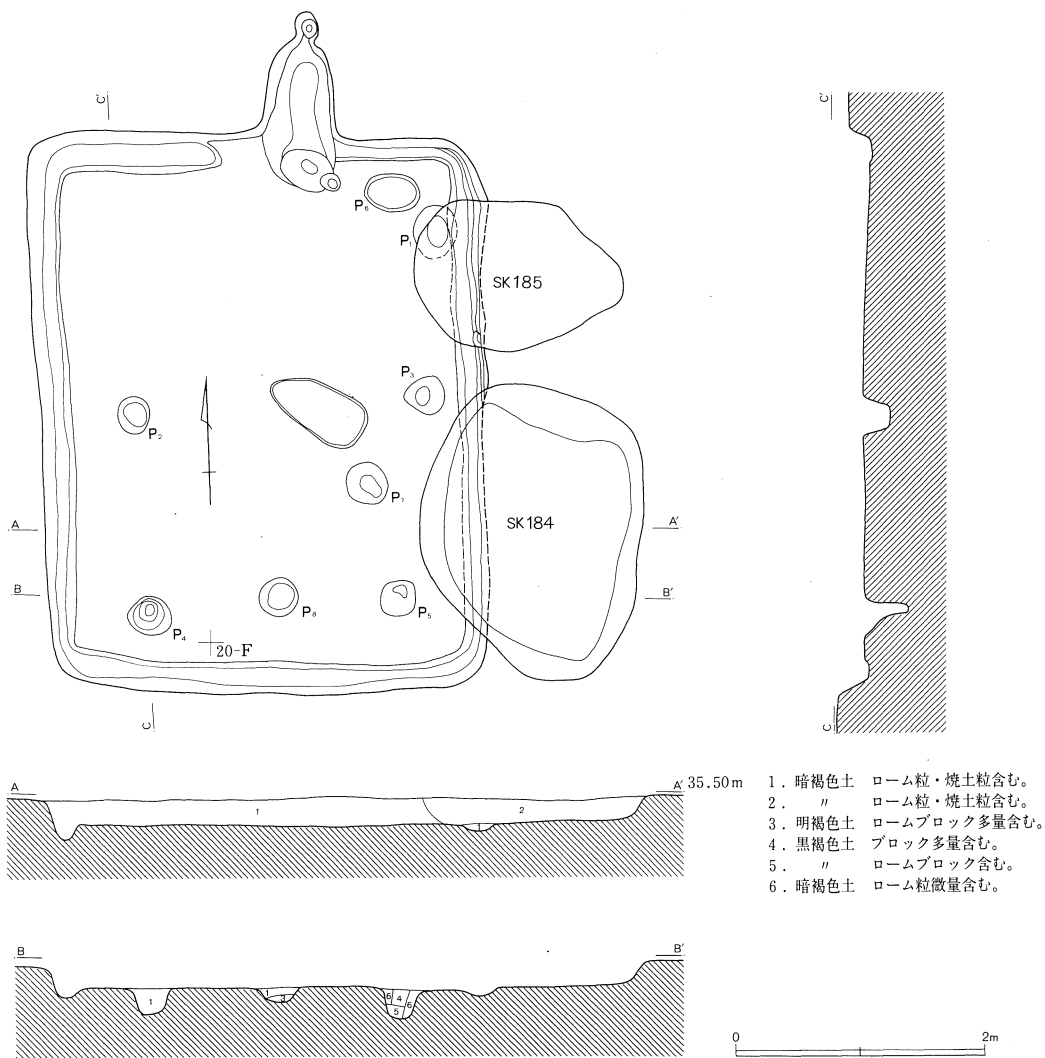
第31図 S J 13

S J 14 (第14号住居跡・第32図)

18-E・F Grid に位置し、南北がやや長い長方形を呈する。東辺をS K 184及び185に壊され、竈は北辺中央やや東寄りに付設される。掘り込みは約25cm、床面は平坦で特に貼り床等の痕跡は検出されなかった。また、微量ではあるが、床面には所々に焼土や炭化物の付着がみられた。竈は確認面付近が攪乱を受けており、既に袖はなく、遺存状態は良くない。燃焼部及び吹き口付近には、焼土や炭化材、土器などが僅かに残されている程度である。竈の右には深さ20cm程の楕円形の貯蔵穴がある。浅い壁溝は全周する。Pit は貯蔵穴を含め9基検出された。覆土は暗褐色を呈し、ローム粒、ロームブロックなどが含まれる。



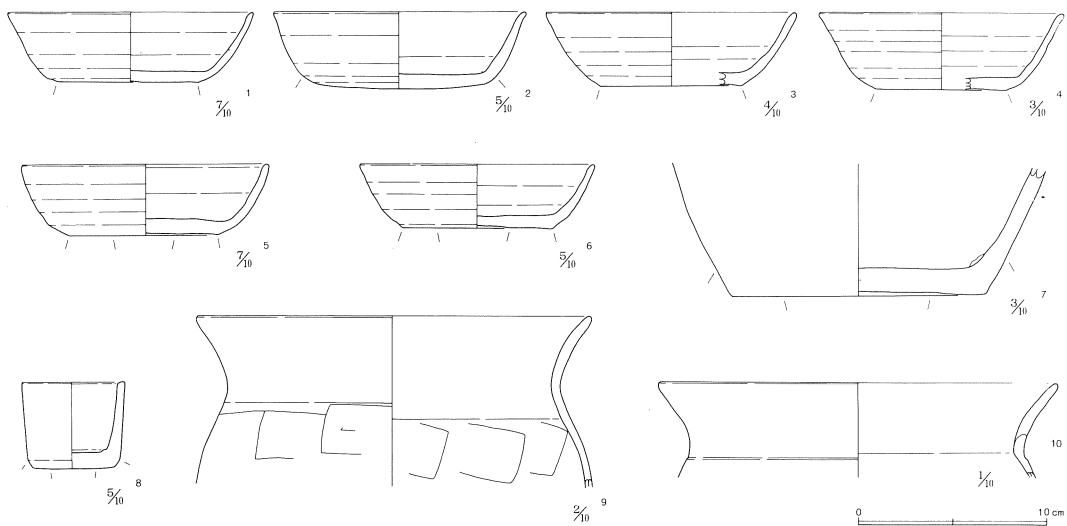
S J 14



第32図 S J 14

S J 14出土遺物 (第33・34図)

遺物は床面付近から200点余りの破片が出土した。1～6は須恵器坏で、口径13.0～13.2cm（6は12.4）、器高3.7～4cm（6は3.3）を測る。内面から体部外面にかけてはロクロナデ、底部は全面回転ヘラケズリ（5・6は回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ）。胎土には砂粒、白色粒、白色針状物含む。淡灰色～青灰色。7は須恵器壺の底部の破片である。胴部下半及び底部はヘラケズリされる。内面は横ナデ。暗青灰色。胎土には砂粒、白色針状物を含む。8は須恵器のコップ形土器で、口径5.4cm、器高4.4cmを測る。内面～外面にかけてはロクロナデ。底部～体部下端は回転ヘラケズリ。口唇部は丁寧へらで調整される。灰色。胎土に白色針状物含む。9・10は土師器甕の口縁部破片である。いずれも口縁部はやや厚く、胴部は薄くつくられる。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部外面は横方向のヘラケズリ。胎土には砂粒を含む。

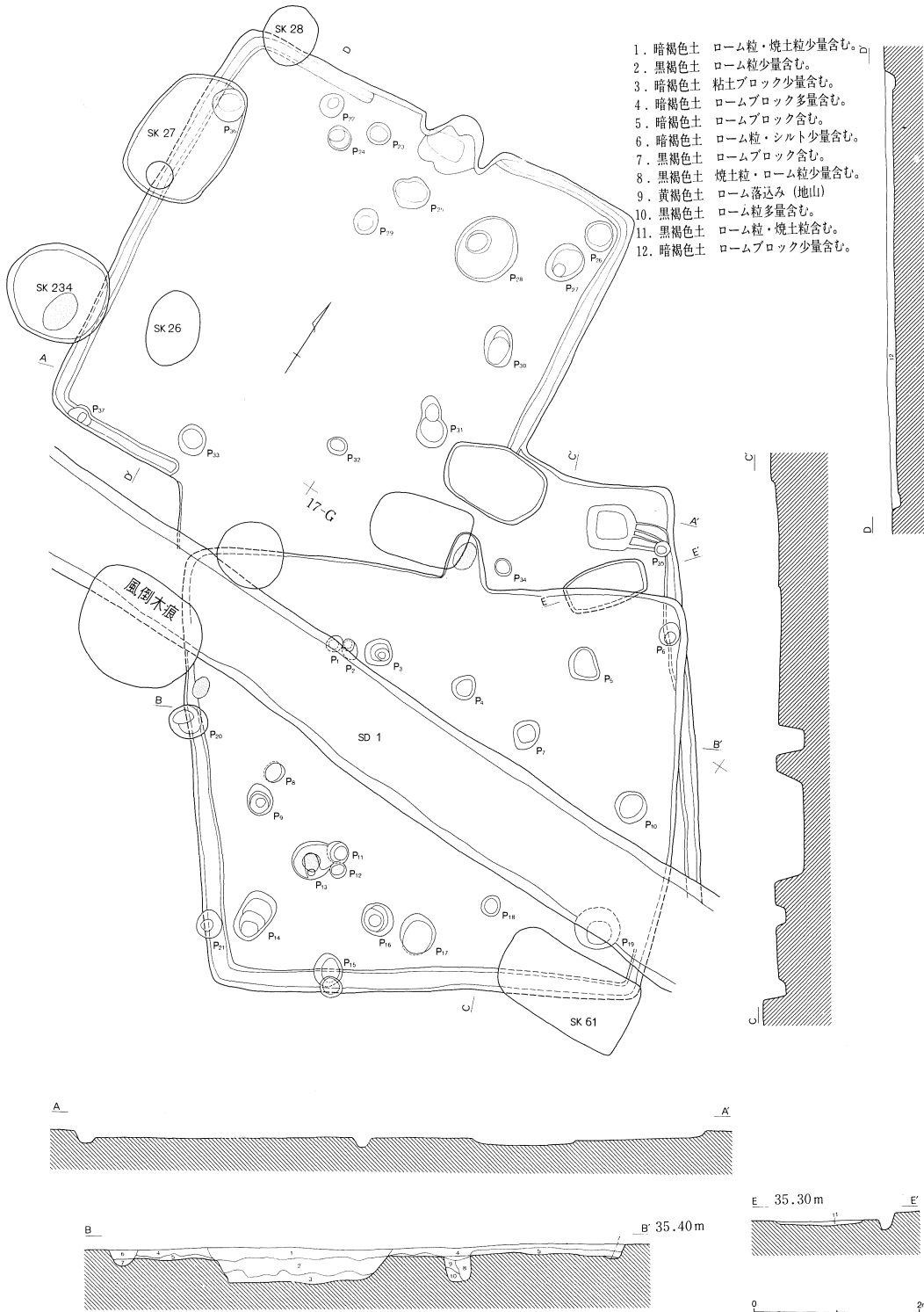


第33图 S J 14出土遺物



第34图 S J 14遺物分布图

S J 15・19・20 (第15・19・20号住居跡・第35~37図)



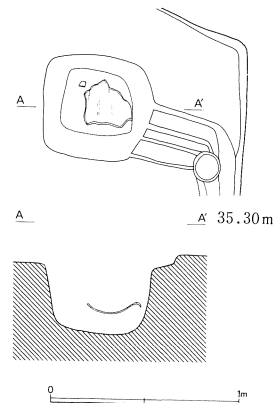
第35図 S J 15 (下)・19 (上)・20 (中)

16-F・16-G Grid に位置し、S J 15はS D 1、S K 61に、S J 19はS K 27・28等と重複する。住居間の重複関係は、S J 15とS J 19の重複関係が判然としないが、いずれの住居もS J 20を壊しており、出土遺物をみても大差ない時期に構築されたものと考えられる。S J 15は東西辺のやや長い方形を呈し、竈は北東辺の北寄りに付設される。確認面からの深さは約15cmを測り、S J 19やS J 20よりも深く掘

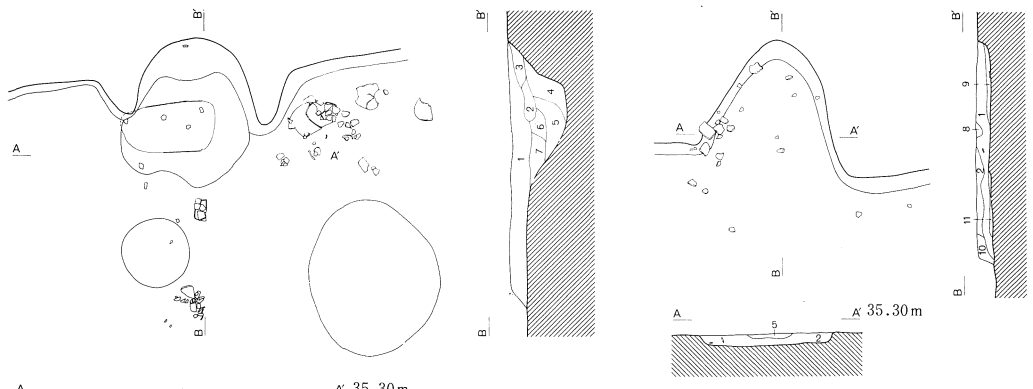


S J 15・19・20

り込まれているが、竈内に残されている焼土の大半はS J 19の床面よりも下面に集中しており、S J 20→S J 15→S J 19と変遷する可能性がある。竈は煙道が短く、燃烧部の掘形は殆ど認められず、袖は既に存在しない。床面は平坦で、18基の Pit が検出された。いずれも不規則に配置されているが、比較的隅に配置されているものが主柱になるものとみられる。壁溝は南側の隅付近に検出されたが、全周はしない。覆土は暗褐色をベースとし、ロームブロックや焼土ブロックなどが含まれる。S J 19はほぼ正方形を呈し、竈は北辺中央やや東寄りに付設される。確認面からの深さは約10cmで、壁溝は南東隅を除いてほぼ全周する。竈は煙道が短く、燃烧部の掘

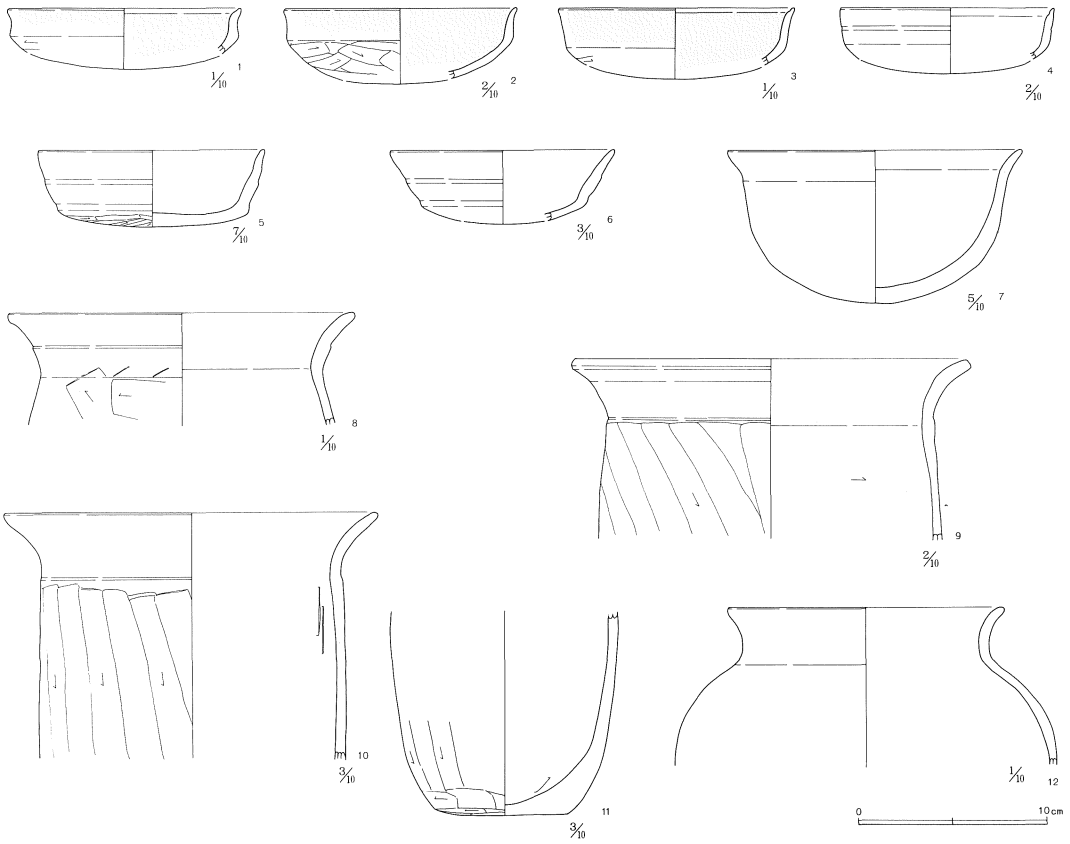


第36図 S J 20貯蔵穴

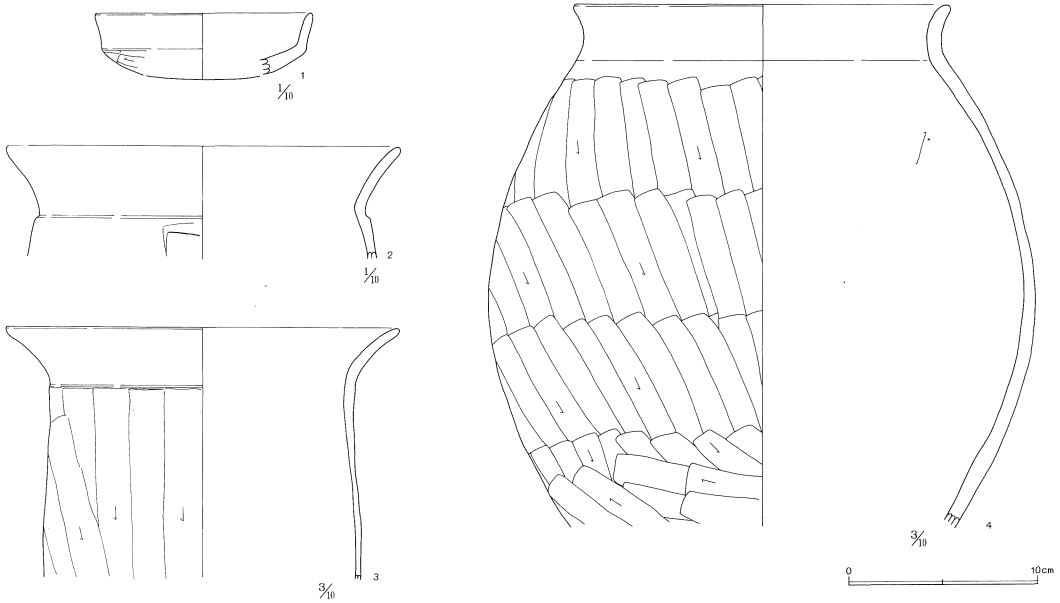


1. 暗赤褐色土 焼土粒多量含む。
2. 赤褐色土 焼土塊含む。
3. 明褐色土 ローム粒・焼土粒含む。
4. 暗灰褐色土 炭化物・ローム粒含む。
5. 暗灰褐色土 炭化粒含む。
6. 暗褐色土 焼土ブロック含む。
7. 暗褐色土 炭化物含む。
8. 黒褐色土 焼土粒・ローム粒含む。
9. 暗褐色土 炭化粒・焼土粒含む。
10. 明褐色土 ローム粒多量含む。
11. 暗褐色土 ロームブロック含む。

第37図 S J 15(左)・19竈



第38図 S J 19出土遺物



第39図 S J 20出土遺物

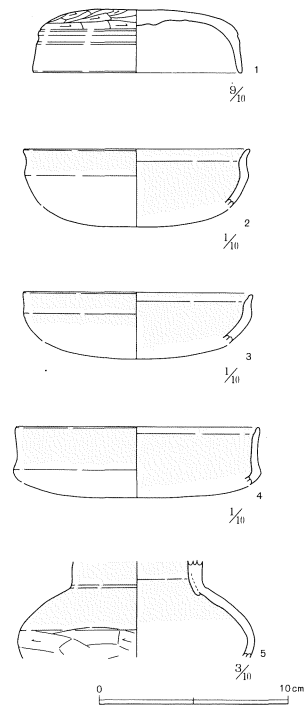
形が深い。袖は僅かに残っているが、粘土等の使用痕跡や構築状況を知る痕跡は認められなかった。床面は平坦で、部分的に焼土や炭化物が確認された。Pit は大小あわせて13基検出されたが、いずれも配置が不規則で掘り込みが浅く、屋根材を支える柱穴としては疑問が残る。覆土は暗褐色を呈し、ロームブロック等が含まれるが、S J 15よりやや明るい色調である。S J 20は北東隅部分と東側の壁溝の一部が検出された。確認面からの深さは約10cmで、S J 19と殆ど同一面である。隅の Pit は貯蔵穴とみられ、壁溝が取り付く。床面は平坦で、Pit 周辺には焼土や炭化物が認められる。覆土は暗褐色～黒褐色、細かいロームブロックや焼土粒子が含まれる。

S J 15・19・20出土遺物（第38～40図）

第40図 1～5はS J 15出土遺物である。1は須恵器蓋で、口径11cm、器高3.2cm。天井部は手持ちヘラケズリ、内面にはロクロの痕跡を明瞭に残す。胎土は砂粒、白色針状物、白色粒含む。2～4は土師器杯の破片で、推定口径12～12.8cm、器高3.8cmを測る。いずれも内面から口縁部外面にかけては赤彩される。胎土には砂粒を含む。5は小形壺の口縁部～胴部にかけての破片である。口縁部～胴部上半にかけては、赤彩される。胎土には細かい砂粒を含む。

第38図 1～12はS J 19出土遺物である。1～6は土師器杯の破片で、口径11.6～12.2cm、器高3.4～4.0cmを測る。1～4は口縁部が屈曲し、内面から口縁部外面にかけて赤彩される。体部から底部はヘラケズリ。5・6は口縁部が外側にひらく。5はやや内湾気味にひらき、口縁部に緩やかな段をもつ。底部は平底に近い形態で、ヘラケズリによって調整される。6は直線的にひらき、5と同様口縁部に緩やかな段をもつ。底部はやや丸底気味とみられる。7は小形の土師器鉢で、口径15.5cm、器高8cmを測る。内外面とも風化が著しく、調整痕は認められない。8～10は土師器甕の口縁部～胴部上半、11は胴部下半の破片である。推定口径は8が18cm、9が21.2cm、10が19.6cm、11の底径は7cmを測る。やや風化しているが、口縁部は横ナデ、胴部外面は縦～斜め方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデが施される。12は土師器壺の口縁部～胴部上半にかけての破片で、推定口径は14.8cmを測る。内外面とも風化が著しく、調整の痕跡は認められない。胎土には、砂粒及び細かい礫が含まれる。

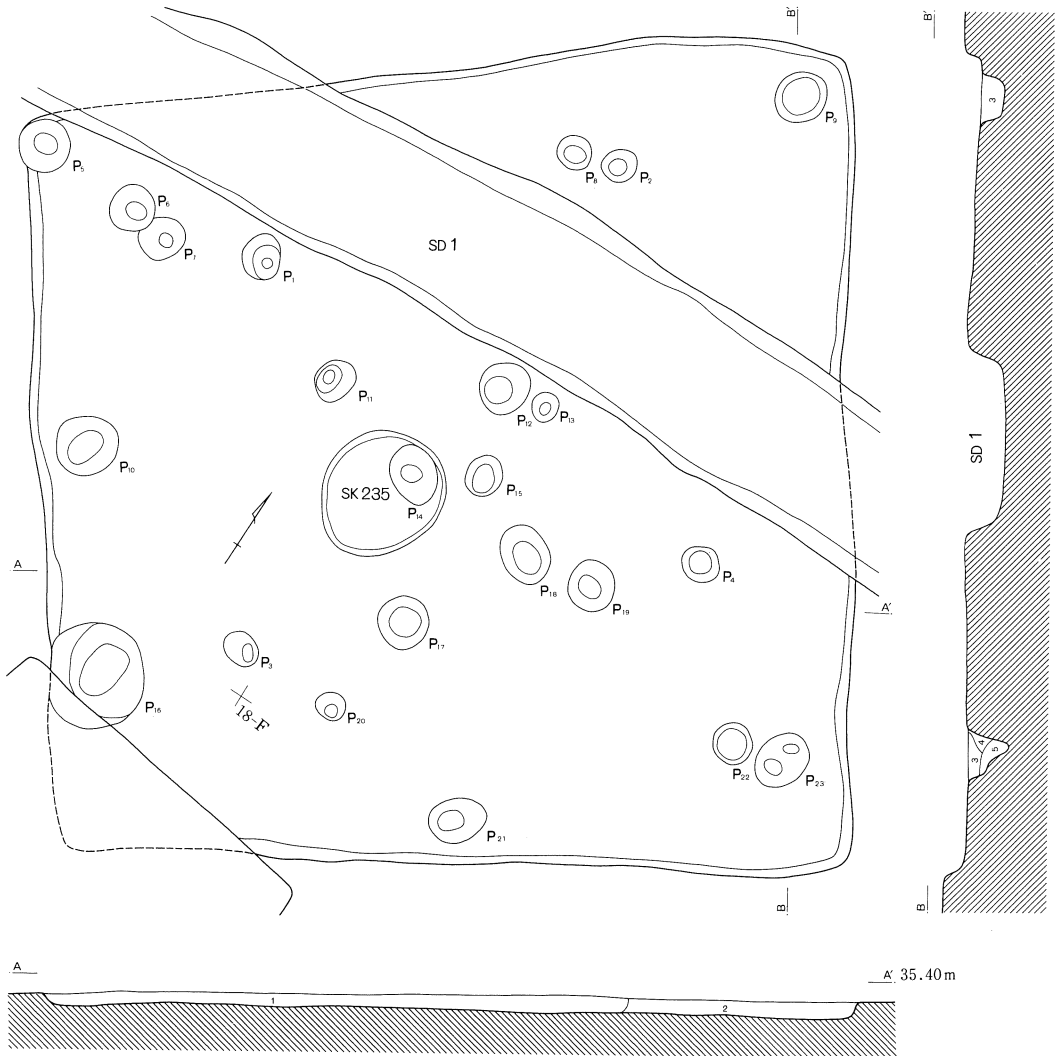
第39図 1～4はS J 20出土遺物である。1は土師器杯の破片で、推定口径11.6cm、推定器高3.5cmを測る。内面から口縁部外面にかけての赤彩は施されない。2・3は土師器甕の口縁部及び口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は横ナデ、胴部は外面が上から下へのヘラケズリ、内面は風化のため不明。推定口径は2・3とも21cm。4は土師器壺の破片で、推定口径は20cmを測る。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部は外面が上から下への細かいヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデが施される。いずれも胎土には砂粒および白色粒が含まれる。



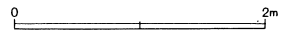
第40図 S J 15出土遺物

S J 16 (第16号住居跡・第41・42図)

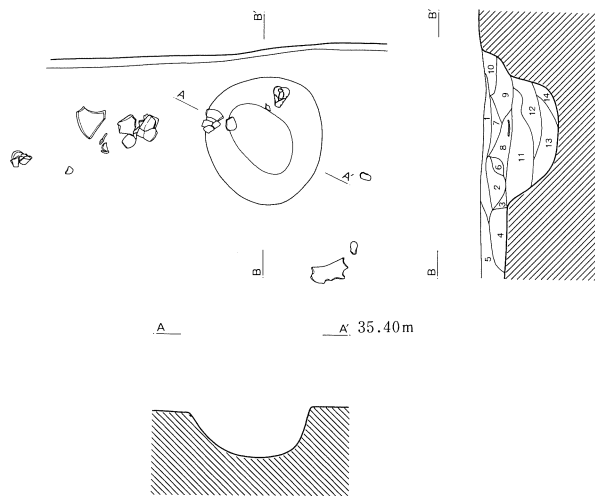
17-E・F Grid に位置し、中央部北側をSD 1に、南隅をSX 4に壊される。部分的に他の遺構と重複するもののほぼ正方形を呈するものと考えられる。確認面から床面までの深さは、約10cmを測る。床面は平坦であるが、特に張り床等の掘り込み事業や壁溝は検出されなかった。竈は南西辺中央に焼土、炭化物、灰色粘土を伴う Pit 10 があり、遺物から判断すると古墳時代後期に属すると考えられることから、この Pit は竈の燃焼部部分の可能性があり、確認面からの深さが10cm余りと浅いため、煙道部や袖部分は既に表土剥ぎの段階で削平されたものと考えられる。Pit は22基検出されたが、その配置に規則性はみられず、支柱になる柱穴はその掘形や他の重複している遺



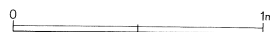
1. 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
2. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量含む。
3. 褐色土 ローム粒多量含む。
4. 黒褐色土 ローム粒含む。
5. 褐色土 ロームブロック少量含む。



第41図 S J 16



1. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量含む。
2. 赤褐色土 焼土粒・焼土ブロック多量含む。
3. 暗褐色土 焼土粒少量含む。
4. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。
5. 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
6. 暗灰褐色土 ローム粒少量含む。
7. 明褐色土 ローム粒・赤色焼土粘含む。
8. 暗赤褐色土 焼土粒・同ブロック・ローム粒・炭化粒少量含む。
9. 暗赤褐色土 焼土ブロック多量含む。
10. 暗灰赤褐色土 炭化粒微量含む。
11. 赤褐色土 焼土粒・ブロック多量含む。
12. 暗褐色土 焼土粒・ローム粒含む。
13. 暗灰褐色土 ロームブロック少量含む。
14. 暗褐色土 焼土粒・ロームブロック少量含む。

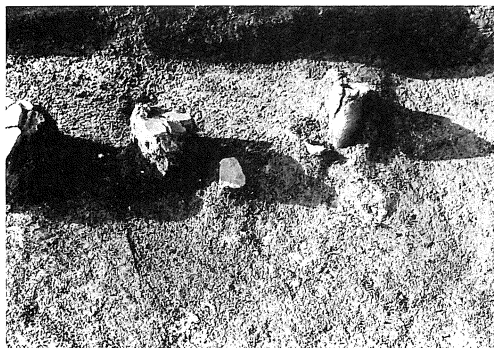


第42図 S J 16竈

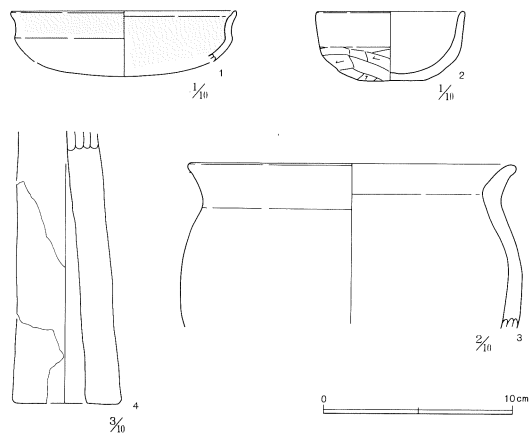
構を考慮しても不自然である。しかし、平面図に表現された Pit は単に S J 16に伴う可能性が高いということであって、必ずしも柱穴として用いられたものとは限らない。覆土は暗褐色を呈し、ロームブロック、焼土粒等が含まれる。遺物はいずれも床面から出土している。

S J 16出土遺物 (第43図)

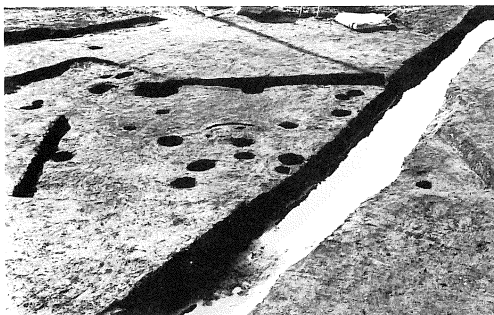
1・2は土師器坏の破片で、1は推定口径12cm、推定器高3.4cm、2は口径8cm、器高3.6cmを測る。2は器面の凹凸が目立ち、体部から底部のヘラケズリも雑である。3は土師器甕の破片で、内外面とも風化が著しい。推定口径は17.2cm。4が土製の支脚の破片で、内外面ともナデが施される。表面には部分的に赤彩の痕跡が認められる。胎土には砂粒、白色粒が含まれる。



S J 16竈



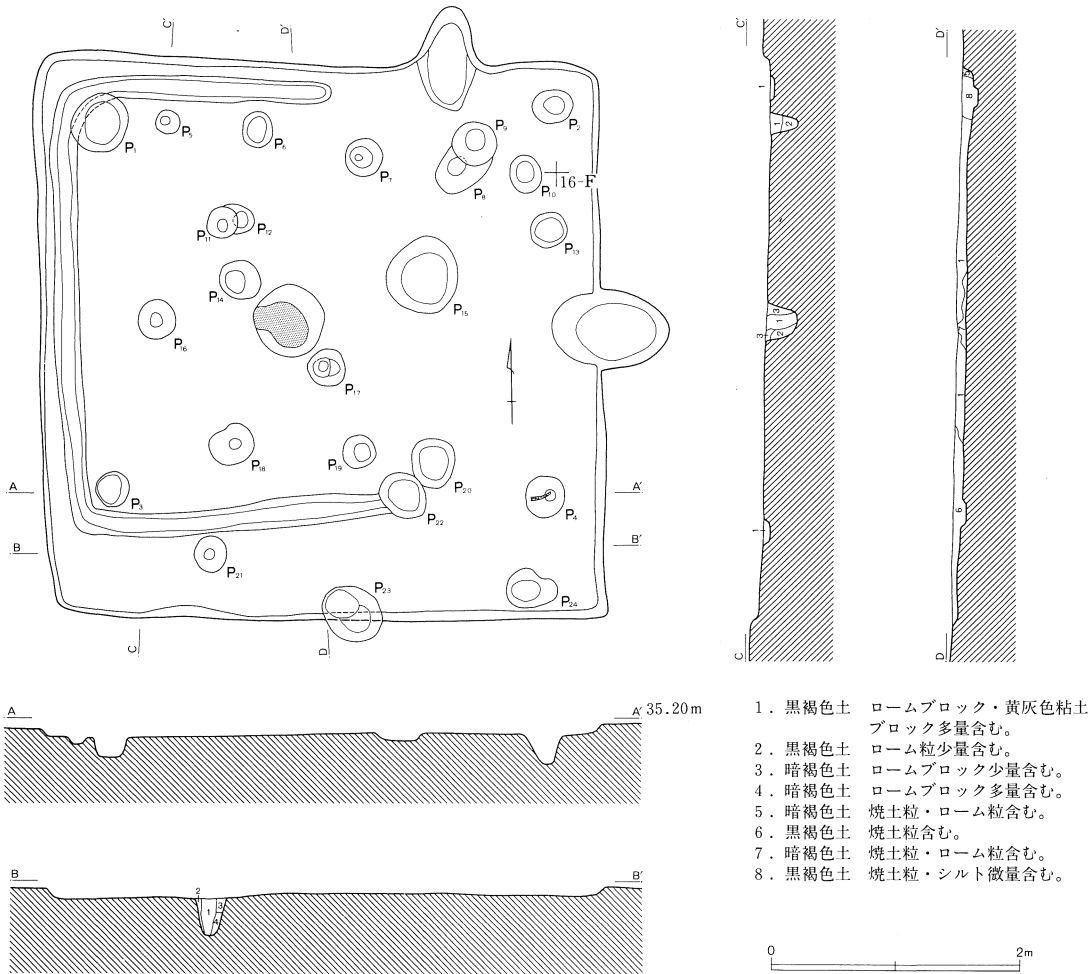
第43図 S J 16出土遺物



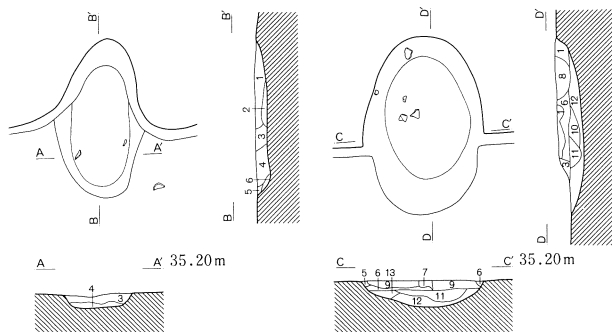
S J 16

S J 17 (第17号住居跡・第44・45図)

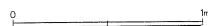
16-E Grid に位置している。正方形に近い平面形態を示し、竈は北辺東寄り(A)と東辺中央(B)に付設される。確認面から床面までの深さは5 cm余りで、部分的には床面が露出しているような状態であった。床面はやや凹凸が目立ち、高低差のある箇所では3~4 cmに達する。二つの竈は似たような形態を示しており、断面観察ではその先後関係を見分けることはできなかった。竈Aは燃焼部の掘り込みが浅く、焼土量も少ない。これに対して、竈(B)は竈自体が竈(A)より一回り大きく、掘形も深い。また、焼土量もやや多いことや残存状態も良いことから竈(B)の方が竈(A)より後に構築されている可能性がある。Pit は25基検出されたが、Pit にも重複関係がみられることから、竈の移設に伴って住居の建て替えを行っている可能性が指摘できる。壁溝は住居の西側にみられるが、壁面に沿って掘られているのは西辺のみで、南辺は1 m余り内側で屈曲している。この溝が住居の建て替えのどの段階に該当するのかは不明であるが、少なくとも住居構造上の施設に関連しており、竈



第44図 S J 17



1. 暗褐色土 ローム粒少量含む。
2. 明褐色土 ロームブロック多量含む。
3. 暗灰褐色土 焼土粒・ローム粒含む。
4. 暗褐色土 ローム粒少量含む。
5. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒含む。
6. 暗褐色土 焼土ブロック少量含む。
7. 暗赤褐色土 焼土ブロック含む。
8. 暗赤褐色土 焼土ブロック含む。
9. 明褐色土 ロームブロック多量含む。
10. 暗褐色土 焼土粒・ローム粒含む。
11. 暗褐色土 黒褐色ブロック含む。
12. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒含む。
13. 暗褐色土 ロームブロック含む。

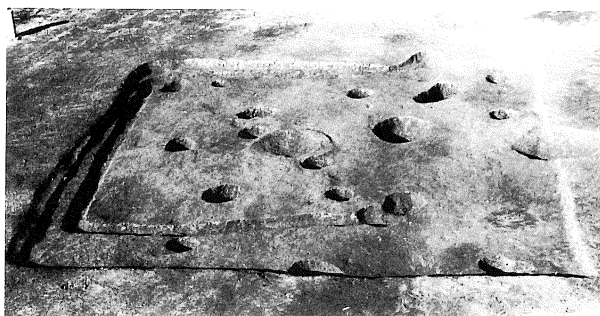


第45図 S J 17竈A(左)・B(右)

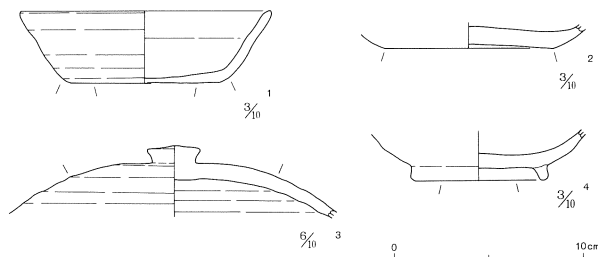
周辺と異なった空間を作り出しているものと考えられる。覆土は暗褐色を呈し、大形のロームブロックを多量含む。

S J 17出土遺物 (第46図)

いずれも須恵器で、床面より出土している。1・2は坏で、1は口径13.4cm、器高3.8cmを測り、底部調整は回転糸切り後、周辺回転ヘラケズリ。2は回転糸切り後、全面回転ヘラケズリ。3は蓋の破片で、天井部はロクロナデの後、回転ヘラケズリ。4は高台付坏の破片。底部は周辺ヘラケズリ後に高台部を接合している。いずれも胎土に砂粒、白色針状物を含む。



S J 17



第46図 S J 17出土遺物

S J 18 (第18号住居跡・48図)

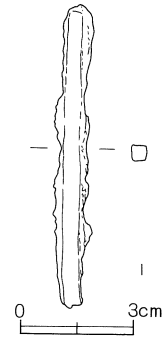
16-H・I Grid に位置し、S J 33及びS K 43・44・46と重複している。正方形を呈し、S J 33の上に構築されている。竈は北辺中央に付設され、確認面から床面までの深さが約5cmと浅く、残存する煙道部も短く、燃烧部の掘形の張り出し部によって確認できる程度である。燃烧部の掘り込みは深い、焼土量、炭化物は比較的少ない。床面は凹凸が目立ち、確認時に露出している部分も多い。また、貼り床の痕跡は認められなかった。Pit は3基検出された。覆土は暗褐色を呈し、ローム粒子が含まれる。



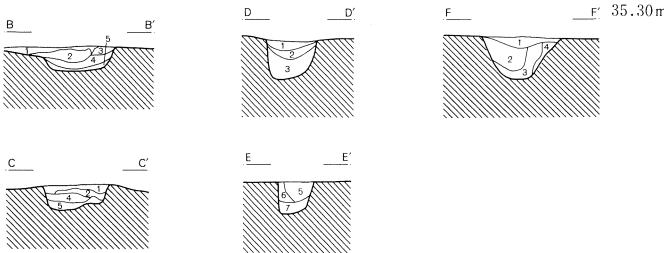
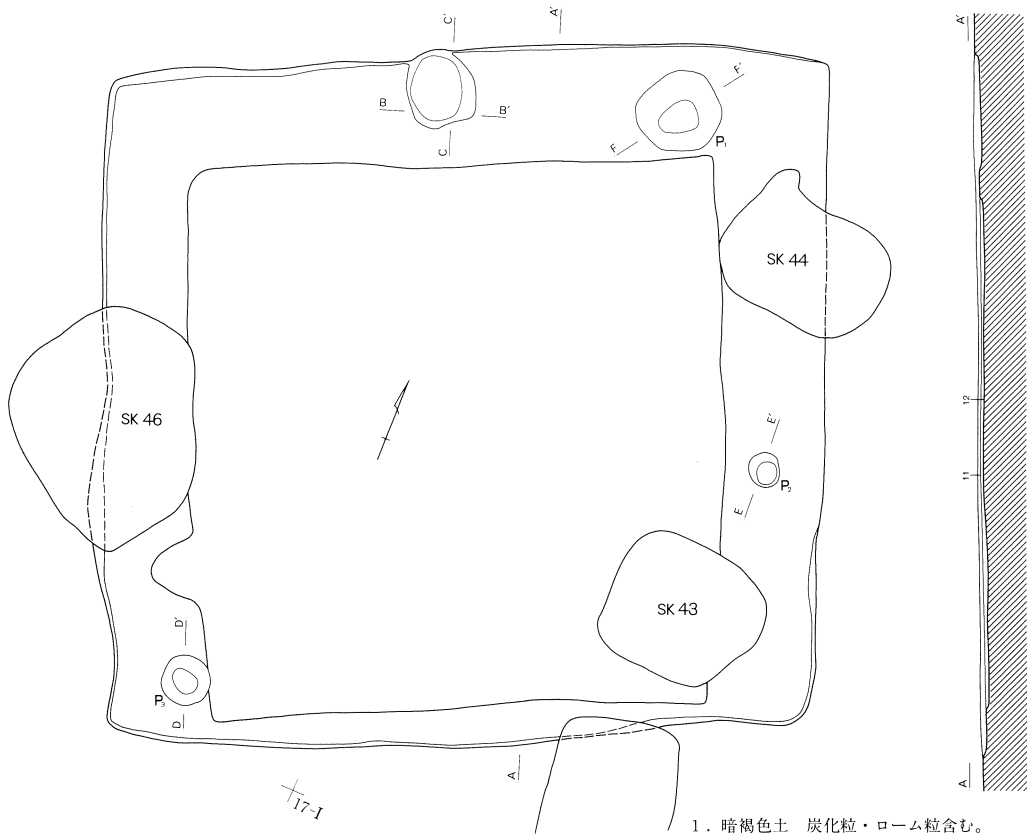
S J 18

S J 18出土遺物 (第47・49図)

遺物はいずれも床面から出土しているが、確認面から浅いことや他の遺構が重複していることから、一部は混入の可能性はある。第47図1は鉄鏝の基部の破片である。全体に錆が付着し、断面は方形を呈する。第49図1は土師器環の破片である。内面から口縁部外面にかけてはナデの後、赤彩される。体部外面はヘラケズリ。2～5は土師器甕の口縁部から胴部上半部の破片である。いずれも口縁部が短く、器肉はやや厚めである。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデが施される。胎土には粗い砂粒、細かい礫、白色粒子が含まれる。

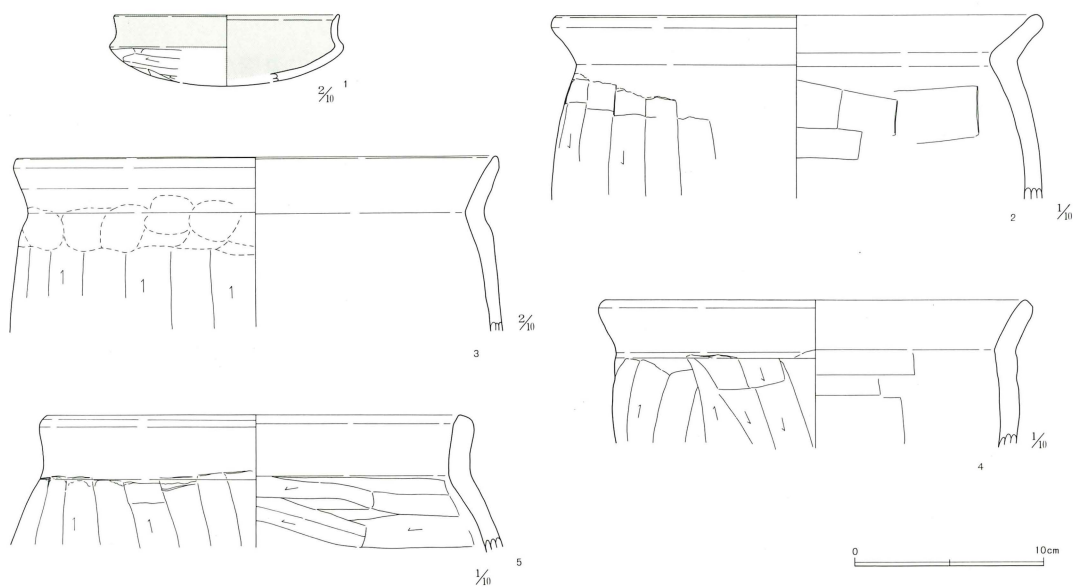


第47図 S J 18出土遺物



1. 暗褐色土 炭化粒・ローム粒含む。
2. 黒褐色土 焼土ブロック・炭化ブロック・ローム粒含む。
3. 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
4. 明褐色土 ロームブロック多量含む。
5. 明褐色土 ロームブロック多量含む。
6. 暗褐色土 ローム粒少量含む。
7. 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
8. 黒褐色土 ロームブロック・焼土含む。
9. 暗褐色土 焼土粒多量含む。
10. 黒褐色土 炭化粒・焼土粒含む。
11. 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒少量含む。
12. 黒褐色土 焼土・ローム・炭化粒含む。

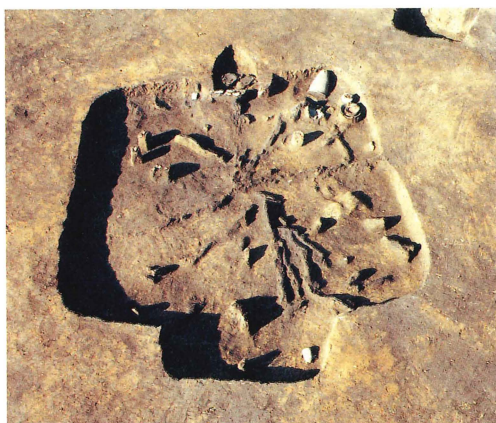
第48図 S J 18



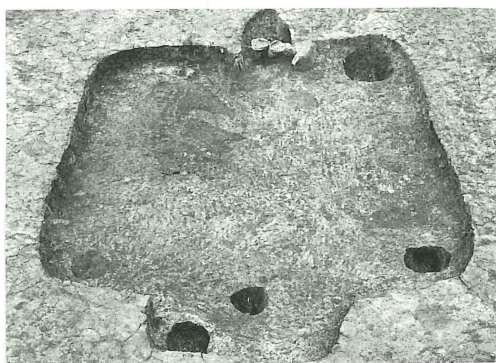
第49図 S J 18出土遺物

S J 21 (第21号住居跡・第50・51図)

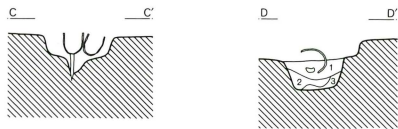
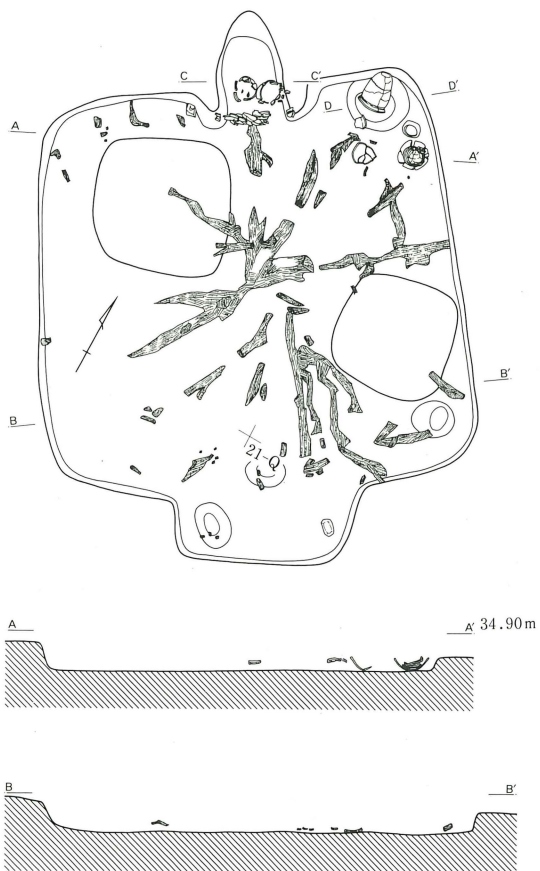
20-Q Grid に位置し、S B 4 と重複する。一辺が4 m前後の方形を呈し、竈は北西辺の中央やや北寄りに付設され、南東辺には1.5m×1mの張り出し部を辺中央にもつ。確認面から床面までの深さは20cm程で、床面は平坦であるが、やや西側に向かって下がっている。壁溝はなく、床面からの立ち上がりは約80°の傾斜角をもつ。確認時には多量の炭化物が放射状に堆積しており、周辺にみられる焼土の状況を考慮すると、この住居は焼失して廃絶したものと考えられる。これらの炭化材は直径約5～8cmで、出土状況から壁材として利用されたとは判断し難く、炭化した多くは屋根の垂木材として使用されたものと考えられる。Pit は竈右隅の貯蔵穴を除き4基検出されたが、一般的にみられる規則性を持った柱穴の位置ではない。Pit の深さは床面より25cm前後で、大きさにも大きな相違点はみられない。注目される点は度重なる精査にもかかわらず、南東の隅周辺に集中する



S J 21 (南から)



S J 21



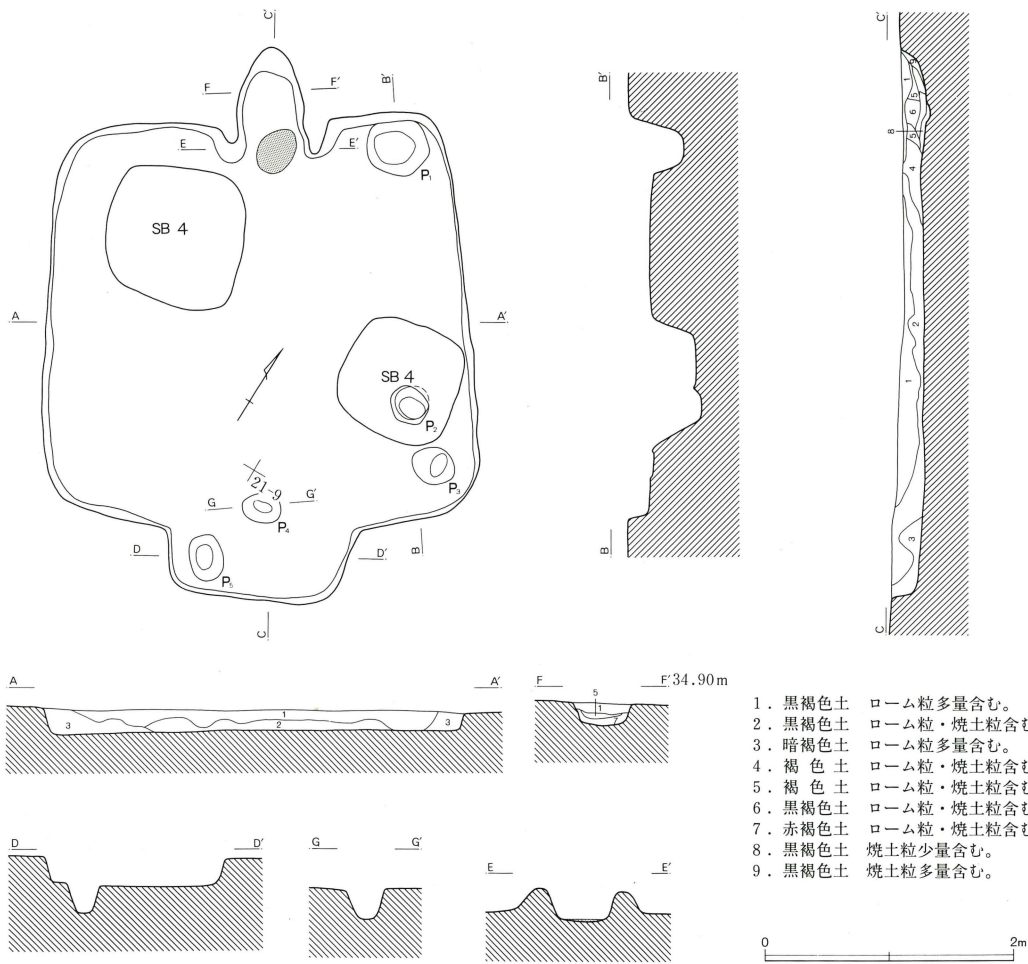
- 1. 黒褐色土 □-ム粒多量含む。
- 2. 暗褐色土 □-ム粒多量含む。
- 3. 暗褐色土 □-ム粒多量含む。



第50図 S J 21炭化材出土状況



S J 21炭化材出土状況（東から）



第51図 S J 21

ような形で Pit が検出されたことである。これだけで壁立式の住居か伏屋式の住居かを判断することは難しいが、これだけの Pit をもって住居として成り得たことにこうした建物の構造上の意味があると考えられる。竈は約80cm煙道部を持ち、確認時には甕の口縁部を欠損した2個体が片岩系の石製支脚の上に置かれた状態で出土した。甕はいずれも炭化物が付着しており、焼直直前まで使用していたことを窺わせている。燃



S J 21貯蔵穴付近遺物出土状況

焼部は厚さ3cm程の焼土の堆積がみられ、壁際にも焼土と炭化物によってその使用痕跡が認められる。袖の遺族存状態は比較的良好で、ロームブロックと黒色土や暗褐色土を使用して構築している。粘土は検出されなかった。貯蔵穴とみられる Pit は30×40cmの楕円形を呈し、深さは約30cmを測る。この Pit には棚から落下したような状態で甕は口縁部から埋没していた。また、遺物はいわゆる浮いた状態のものが少なく、周辺には須恵器の小形壺と土師器坏が土師器鉢の中に使用時のごとく、5枚重ねて出土しており、遺物の出土状況からも計画的な廃棄ではないことが裏づけられる。また、確認時に竈内の甕の口縁部が表土剥ぎの時点で欠損したことを考慮すると、あと20cm余りあれば住居の竈穴部分は成立したことになる。従って、当時の生活面と現在の地表面とは20cm余りの差とすることができ、平地式的建物を考えた場合、既に確認時に消滅している可能性が高い。覆土は黒褐色～暗褐色を呈し、ロームブロック、ローム粒子、焼土粒子などが含まれる。

S J21出土遺物（第52図）

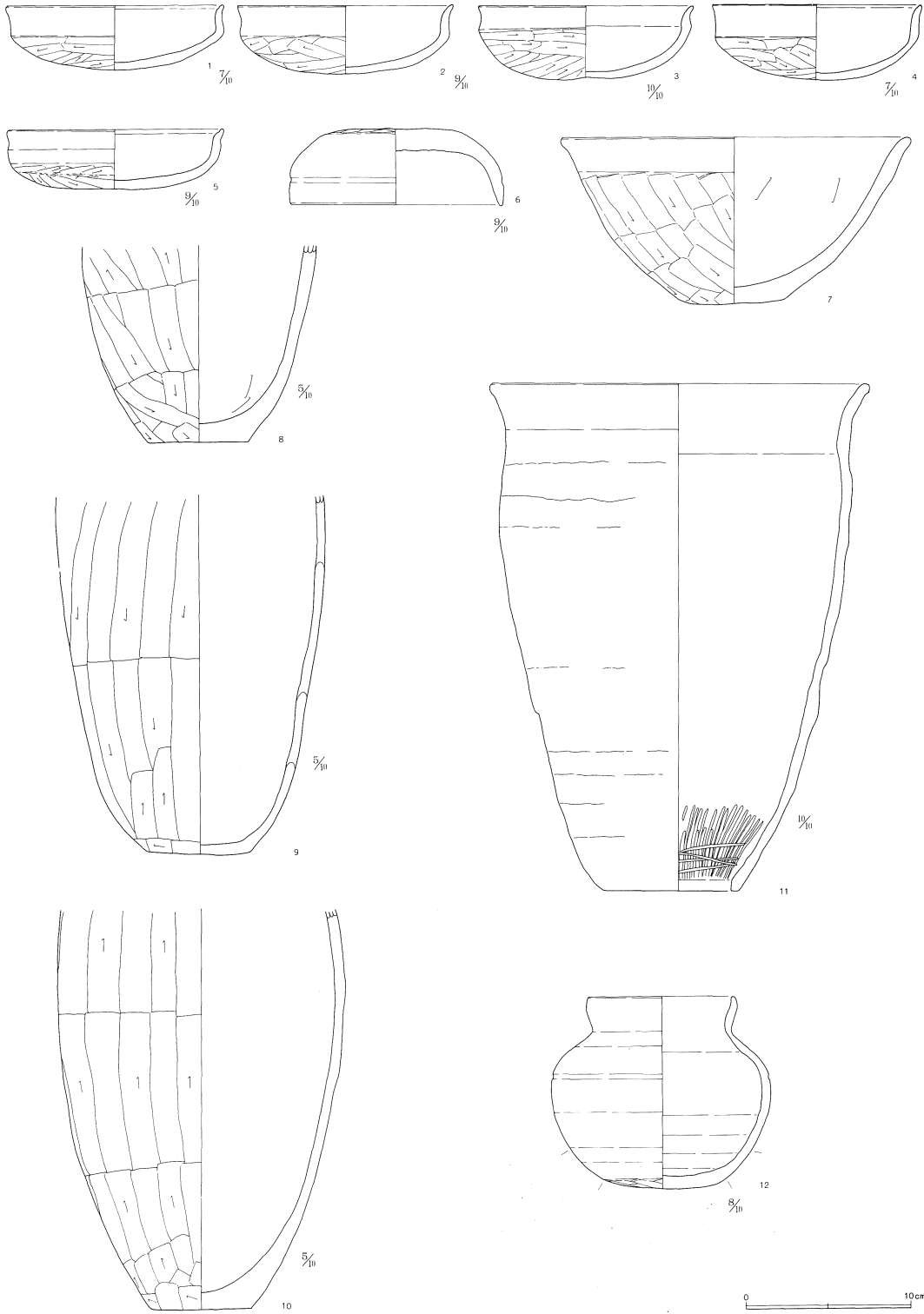
遺物は床面出土のものが多く、小破片は少ない。1～5は土師器坏で、いずれも比較的良好な資料で、内面から口縁部外面にかけて赤彩される。口唇部はいずれも屈曲が著しく、口縁部が内湾(1)、直立(2・4)、外傾(3・5)の3種類に分けることができる。口径は13～13.2cm、器高は3.8～4.2cmを測る。内面及び口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラケズリ。色調は赤褐色～淡橙褐色。6は須恵器蓋で、口径13cm、器高4.6cmを測る。天井部はヘラケズリ、他は内外面ともロクロナデされる。全体に肉厚で、口唇部はやや摩滅している。色調は淡橙褐色。7は土師器鉢で、口径21.2cm、器高10cmを測る。口円部は横ナデ、外面は上～下へ斜方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデが施される。8～10は甕の胴部下半から底部にかけての破片である。外面は縦方向のヘラケズリ、内面はあまり顕著ではないが横方向のヘラナデが施される。9には輪積痕が3ヶ所に認められる。9・10は炭化物が付着。11は土師器甕で、ほぼ完形である。口径は23cm、器高は30.3cmを測る。調整痕は不明瞭であるが、底部付近にはヘラ状工具によるナデ状の痕跡が認められる。炭化物付着。8～11は暗褐色を呈する。12は須恵器の小形壺で、口径9.1cm、器高11.7cmを測る。内外面ともロクロナデ後、底部は手持ちヘラケズリ、周辺は回転ヘラケズリが施される。胎土は須恵器は砂粒、白色針状物、土師器は粗い砂粒、小礫が含まれる。



S J 21 竈

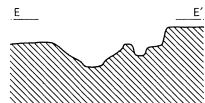
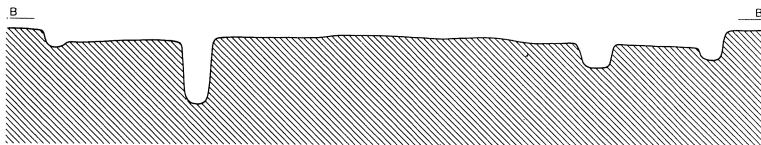
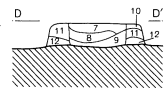
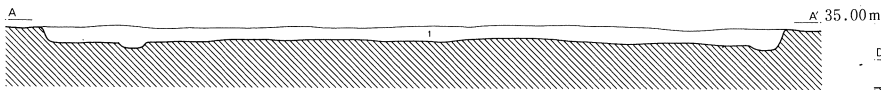
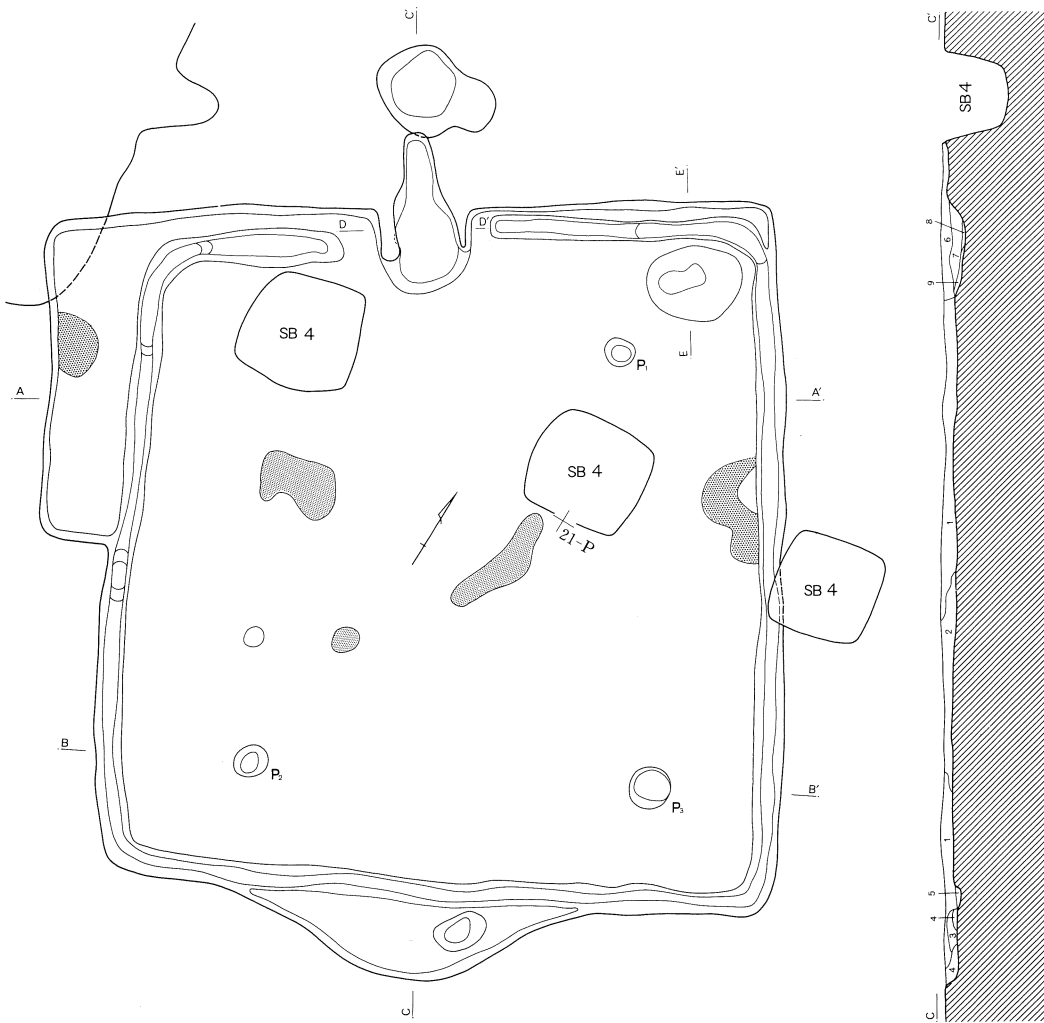


S J 21 竈



第52図 S J 21出土遺物

S J 22 (第22号住居跡・第53図)



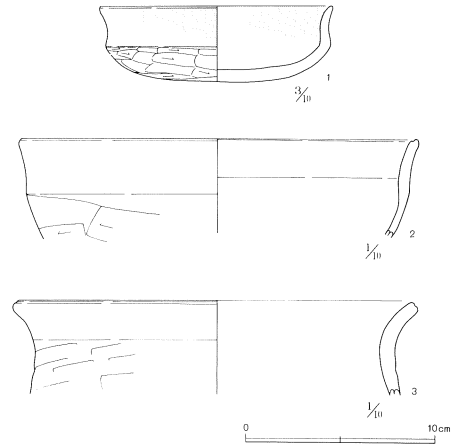
- | | | | |
|---------|--------------|----------|-----------|
| 1. 黒褐色土 | 焼土粒含む。 | 7. 褐色土 | 焼土粒多量含む。 |
| 2. 暗褐色土 | ロームブロック多量含む。 | 8. 黒褐色土 | 焼土粒少量含む。 |
| 3. 黒褐色土 | 明赤褐色焼土多量含む。 | 9. 褐色土 | ローム粒多量含む。 |
| 4. 暗褐色土 | ローム粒多量含む。 | 10. 褐色土 | 焼土粒多量含む。 |
| 5. 褐色土 | ローム粒多量含む。 | 11. 赤褐色土 | カマドソデ上部。 |
| 6. 暗褐色土 | 焼土粒多量含む。 | 12. 黒褐色土 | カマドソデ下部。 |
| | | | 内面は赤褐色化。 |

スクリーントーンは焼土



第53図 S J 22

21-PGrid 他に位置し、S J 21と同様S B 4と重複する。方形を呈するが、北西隅と南東辺中央に張り出し部をもつ。竈は北西辺中央に付設され、右隅には貯蔵穴とみられる楕円形の浅い Pit を有する。壁溝は張り出し部を除いて本来の壁溝に沿ってほぼ全周し、竈の袖付近で切れる。床面は平坦で、全域にわたって貼り床が確認された。また、床面には広範囲にわたって焼土がみられ、張り出し部には投棄された焼土も検出された。竈は比較的燃焼部に焼土が集中し、袖の上部にも赤褐色に焼けた部分を多く残す。煙道部は先端部で細くなり、浅いPit 状になる。覆土は黒褐色を呈し、ローム粒子、焼土粒子が含まれる。



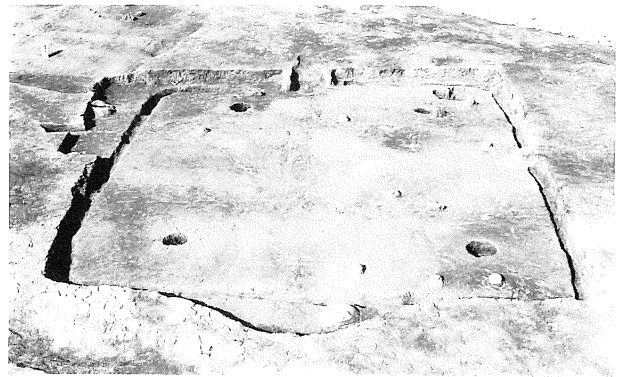
第54図 S J 22出土遺物

S J 22出土遺物（第54図）

1は土師器坏で、床面に伏せた状態で出土した。口径12.6cm、器高4cmを測り、底部はやや平底気味で、口縁部は中央部から大きく外反する。内面～口縁部は横方向のナデ後、赤彩され、体部はヘラケズリ。

2は土師器鉢の破片で、内面～口縁部は横ナデ、体部外面は斜方面のヘラケズリ。

3は甕の口縁部破片。風化のため調整不明瞭。いずれも胎土に砂粒、白色粒子を含む。



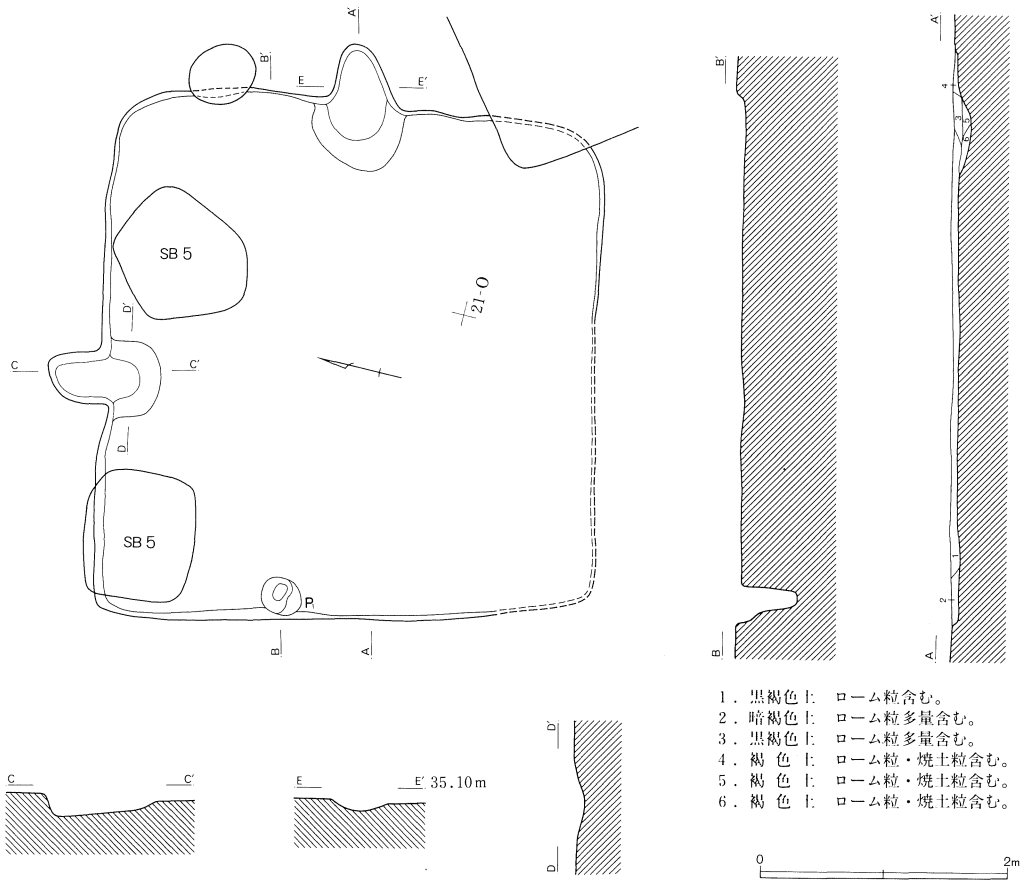
S J 22

S J 23（第23号住居跡・第55図）

20-OGrid 他に位置し、正方形を呈し、S J 22の西側張り出し部、S B 5の Pit と重複する。竈は北辺及び東辺中央に付設され、新旧は断面観察から北竈が古く、東竈が新しい。確認面から床面までの深さは5～8cm程で凹凸が目だつ。Pit や壁溝は検出されなかった。覆土は黒褐色を呈し、ロームブロックが含まれる。S B 5との重複関係については別稿で説明する。



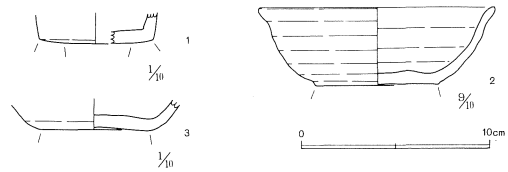
S J 23



第55図 S J 23

S J 23出土遺物 (第56図)

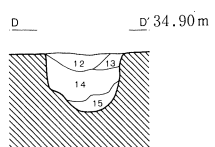
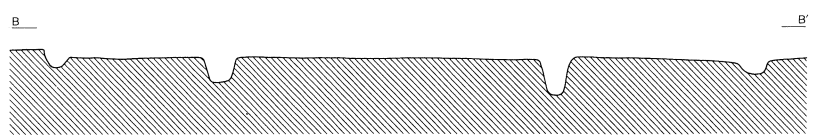
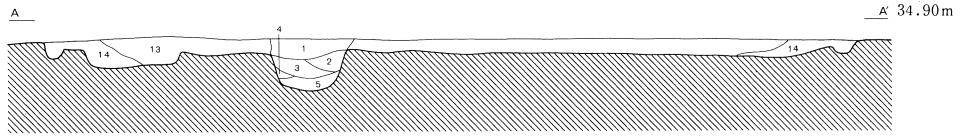
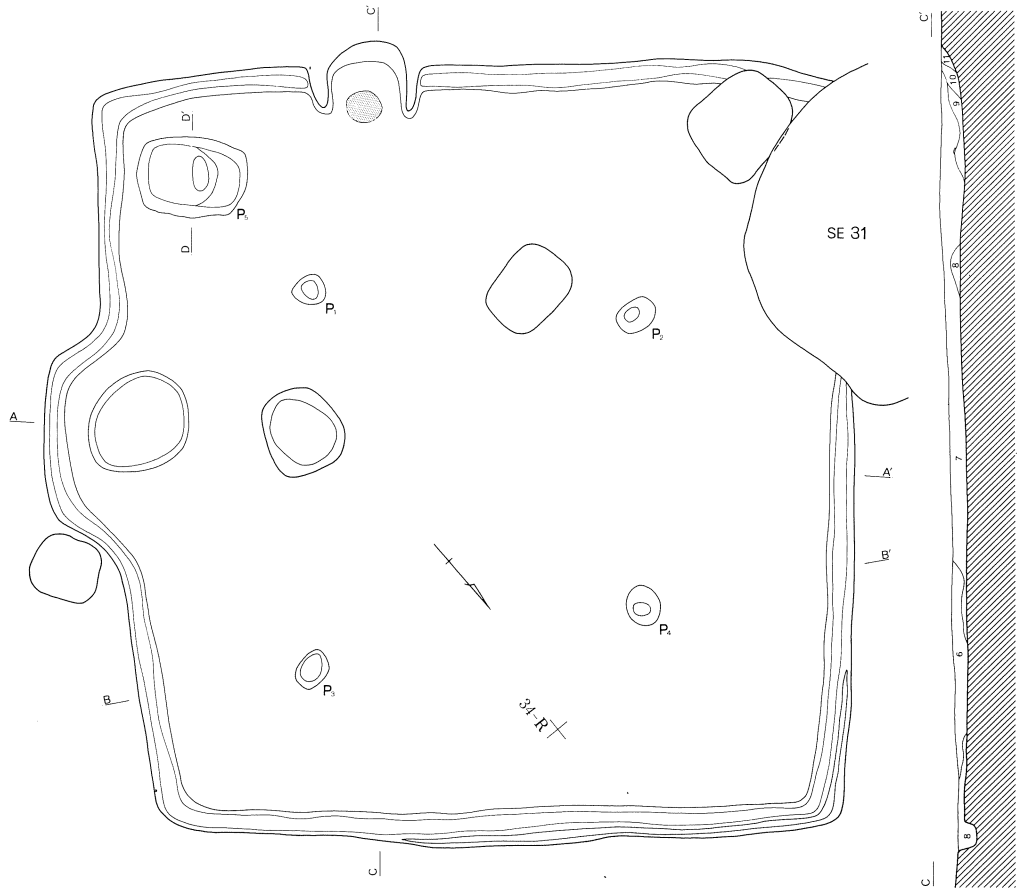
いずれも須恵器で、1はコップ形である。底部は周辺ヘラケズリされる。2・3は坏で、内外面ともロクロナデ、底部は全面回転ヘラケズリされる。胎土に白色針状物、砂粒を含む。



第56図 S J 23出土遺物

S J 24 (第24号住居跡・第57図)

22-Q・RGrid に位置し、北東隅をS E 31に、南東部をS B 2に壊される。一辺6mの方形を呈し、南東辺中央には張り出し部をもち、竈は南西辺やや南よりに付設される。燃燒部の掘り込みはなく、緩やかに短い煙道部へと立ち上がる。袖は残存状態が不良で、殆ど旧状をとどめていない。確認面から床面までの深さは15~18cmで、床面は凹凸が著しく、所々に焼土や炭化物がみられる。壁溝は張り出し部を含めて全周する。Pit は4基、貯蔵穴は南隅に隅丸長方形のものが検出された。



- | | | | |
|---------|--------------|----------|---------------|
| 1. 黒褐色土 | ローム粒・焼土粒含む。 | 9. 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒多量含む。 |
| 2. 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒含む。 | 10. 褐色土 | ローム粒・焼土粒多量含む。 |
| 3. 暗褐色土 | ローム粒多量含む。 | 11. 黒褐色土 | ロームブロック含む。 |
| 4. 黒褐色土 | | 12. 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒含む。 |
| 5. 暗褐色土 | ローム粒含む。 | 13. 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒多量含む。 |
| 6. 黒褐色土 | ローム粒・焼土粒含む。 | 14. 黒褐色土 | 焼土粒微量含む。 |
| 7. 黒褐色土 | ローム粒含む。 | 15. 黒褐色土 | ロームブロック含む。 |
| 8. 暗褐色土 | ロームブロック多量含む。 | | |

スクリーントーンは焼土



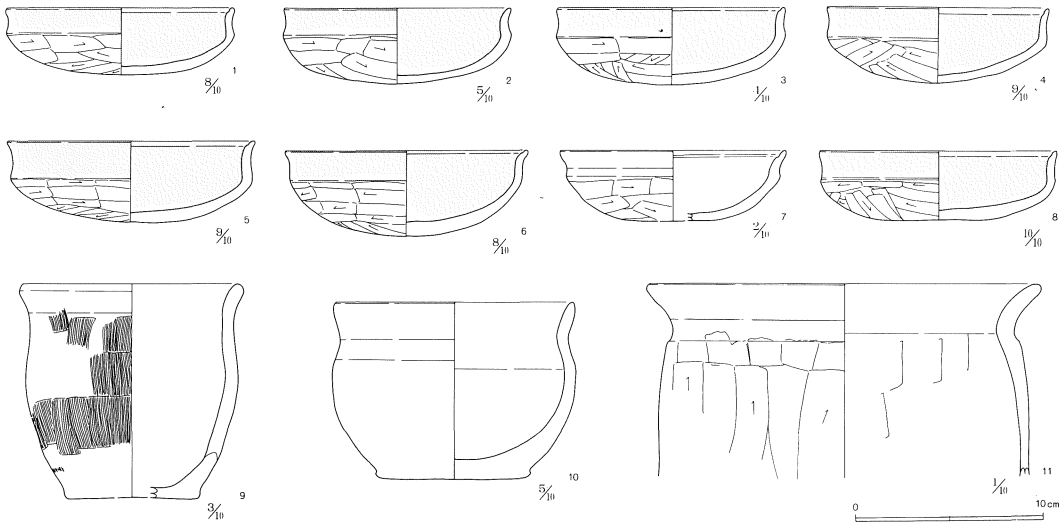
第57図 S J 24

S J 24出土遺物（第58図）

1～8は土師器坏で、いずれも床面より出土したものである。内面から口縁部は横方向のナデ、体部から底部はヘラケズリされる。また、内面から口縁部及び体部上半にかけては、赤彩が施される。口径は1～4・7が12～12.2cm、5・6・8が12.8



S J 24

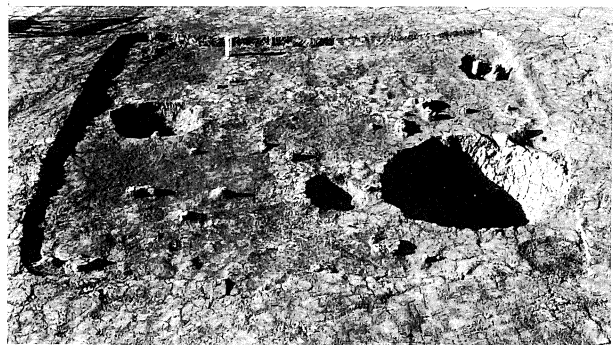


第58図 S J 24出土遺物

～13cm、器高は1・2・4・7・8が3.6cm、3は4cm、5は4.2cm、6は4.4cmを測る。口縁部の屈曲が著しく、1・3・4・7・8は口唇部内側に浅い沈線が入る。9・10は小形の甕で、9は胴部外面に刷毛目状の調整痕を残す。10は風化が著しい。口縁部はともに横ナデ。11は甕の破片で、口縁部は横ナデ、胴部外面は縦のヘラケズリ、内面は横方面のヘラナデ。胎土は砂粒、小礫を含む。

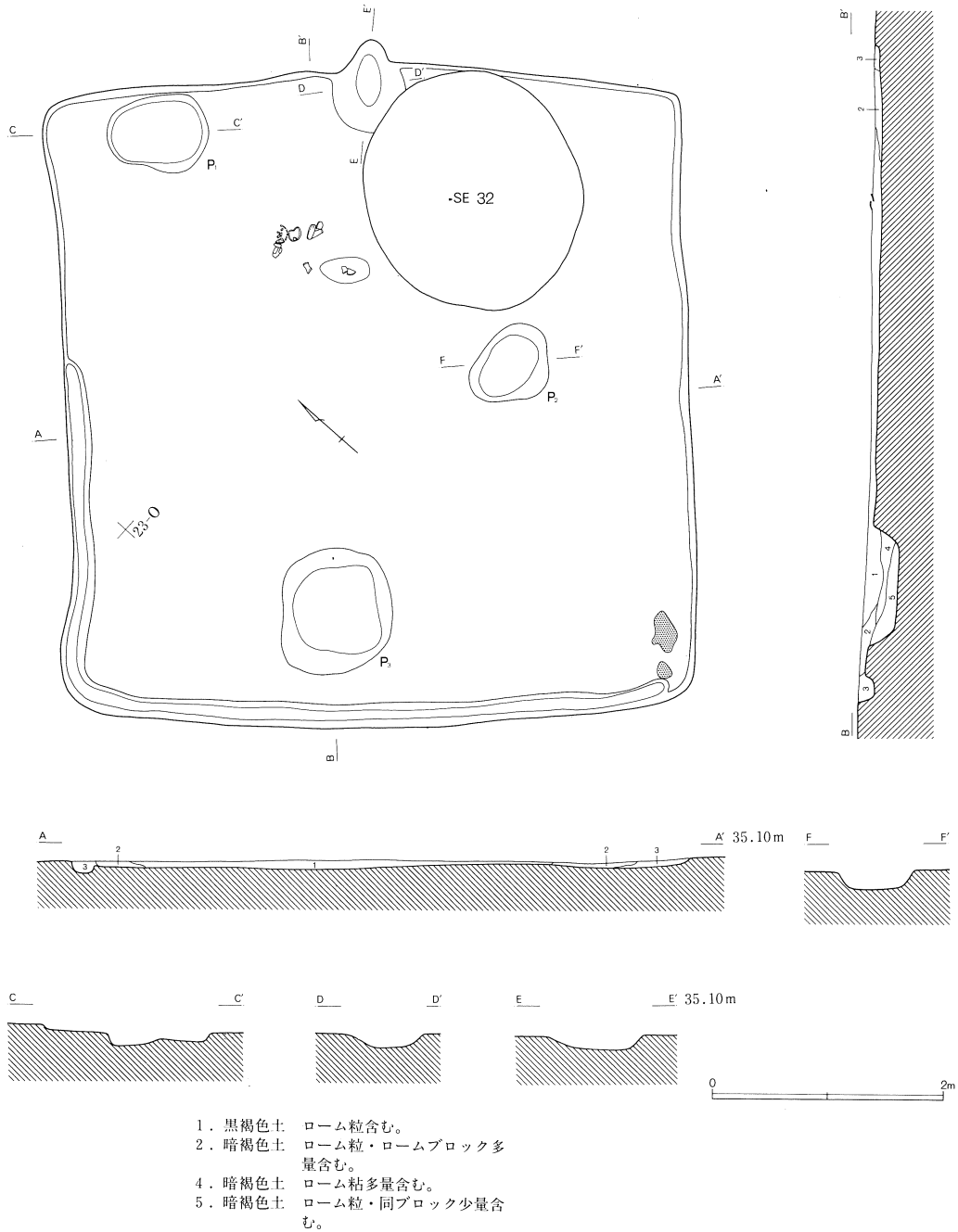
S J 25（第25号住居跡・第59図）

23-O Grid に位置し、竈の東側をS E 32に壊される。一辺5m程の正方形を呈し、竈は北東辺中央に付設される。確認面から床面までの深さは約8～10cmで、凹凸が目立つ。

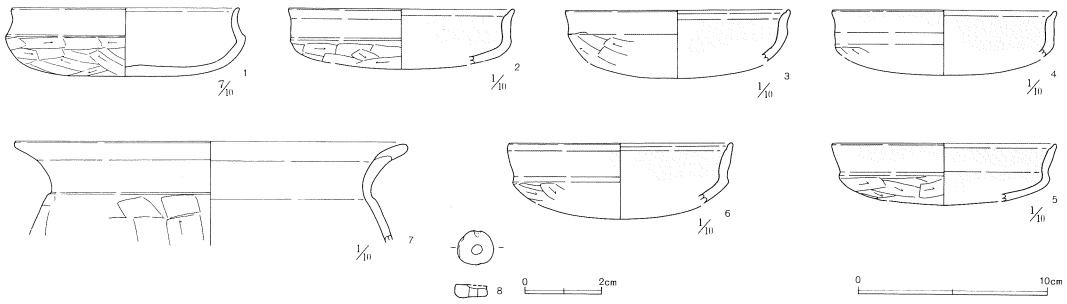


S J 25

壁溝は北西及び南西辺にみられる。竈は遺存状態が不良で、燃烧部の掘形に焼土が確認できる程度で、竈覆土の上層より臼玉が出土している。Pit は3基で検出されたが、いずれも浅く、竈の北側の Pitについては疑わしい。覆土は黒褐色を呈し、ローム粒子、焼土粒子が含まれる。



第59図 S J 25



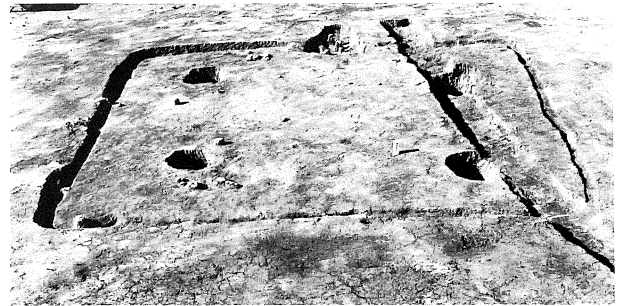
第60図 S J 25出土遺物

S J 25出土遺物（第60図）

1～6は土師器坏で、推定口径12～12.2cm、推定器高3.2～3.6cm（6は4cm）を測る。いずれも内面から口縁部にかけては赤彩される。7は甕の口縁部破片。推定口径20.6cm。胎土には砂粒を含む。

S J 26（第26号住居跡・第62図）

23-L Grid に位置し、S D 10に東側の一部を壊される。一边が6m弱のほぼ正方形を呈し、竈は西辺中央に付設される。確認面から床面までの深さは10cm程で、張り床は顕著に認められる。壁溝は全周し、竈の袖付近で止まる。竈は大部分が壊されていたが、袖（左右の落ち込み）

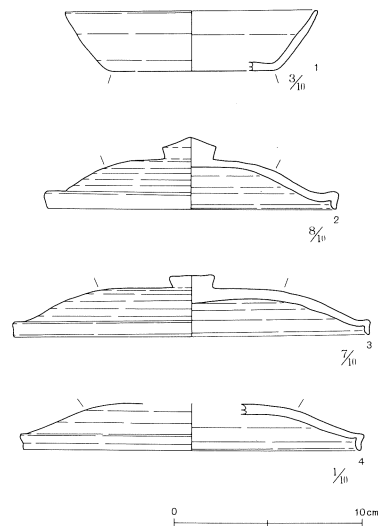


S J 26

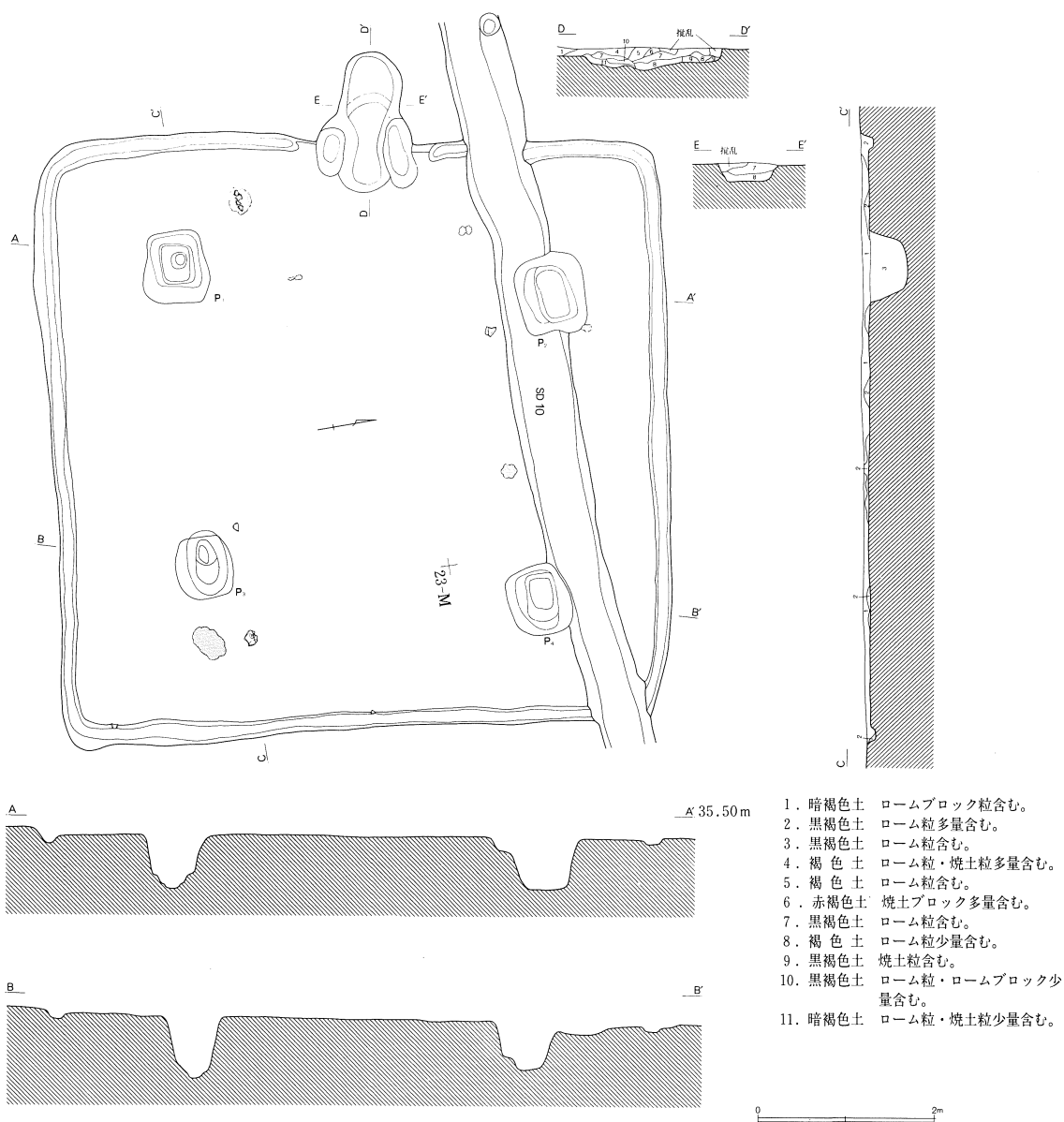
や燃焼部の掘形が検出された。袖の掘形は楕円形を呈し、その中に黒褐色土、焼土ブロックなどで積まれている。主柱になるとみられる Pit は4基検出され、いずれも柱位置が確定した後、黒褐色土とロームブロックで互層に突き固めている。覆土は黒褐色を呈し、ローム粒子が含まれる。

S J 26出土遺物（第61図）

出土遺物は極めて少ない。1は須恵器坏の破片で、推定口径13.5cm、器高3.2cmを測る。底部調整は全面回転ヘラケズリとみられる。2～4は須恵器蓋で、2は口径15.6cm、器高3.8cm、3は口径19.1cm、器高3.2cm、4は推定口径18.1cmを測る。胎土に白色針状物、砂粒を含む。色調は青灰色。



第61図 S J 26出土遺物

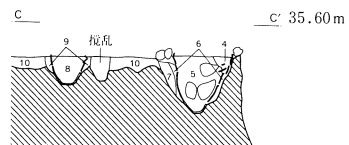
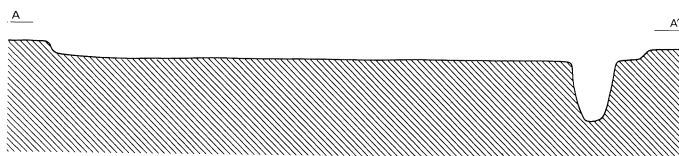
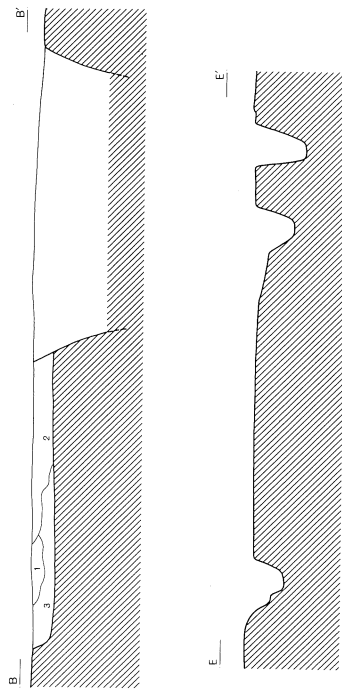
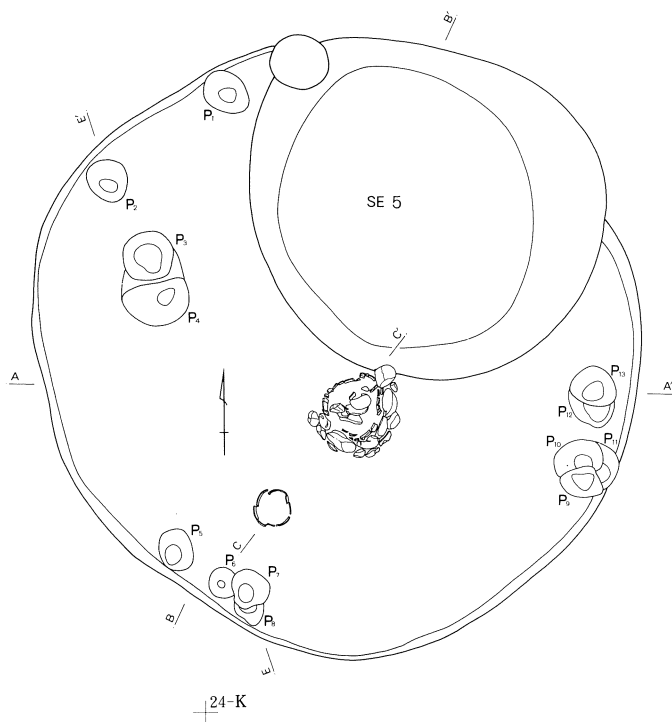


第62図 S J 26

S J 27 (第27号住居跡・第63図)

23-J・K Grid に位置し、S E 5 に北東部を壊されている。平面形態は直径約 5 m の円形を呈し、確認面から床面までの深さは約 20 cm を測る。中央に石囲の土器埋設炉を擁し、壁下に接して計 10 本の小穴が穿たれている。また、炉の南西には埋設土器の存在も確認できた。床面は地山のローム層まで達しておらず、遺物の出土位置や埋設土器などを目安とした面は約 10 cm 上層にあり、平坦である。

炉は、大形の深鉢をそのままに埋設し、床よりわずかに突出した口縁部を保護するかのように二重の石囲いをめぐらすものである。炉体土器内の覆土は炭化物が多く、土器埋置時の補填土はたび



1. 黒褐色土 ロームブロック含む。
2. 黒褐色土 ローム粒・焼土粒含む。
3. 暗褐色土 ローム粒含む。
4. 黒褐色土 焼土粒含む。
5. 黒褐色土 焼土粒・ローム粒・炭化粒含む。

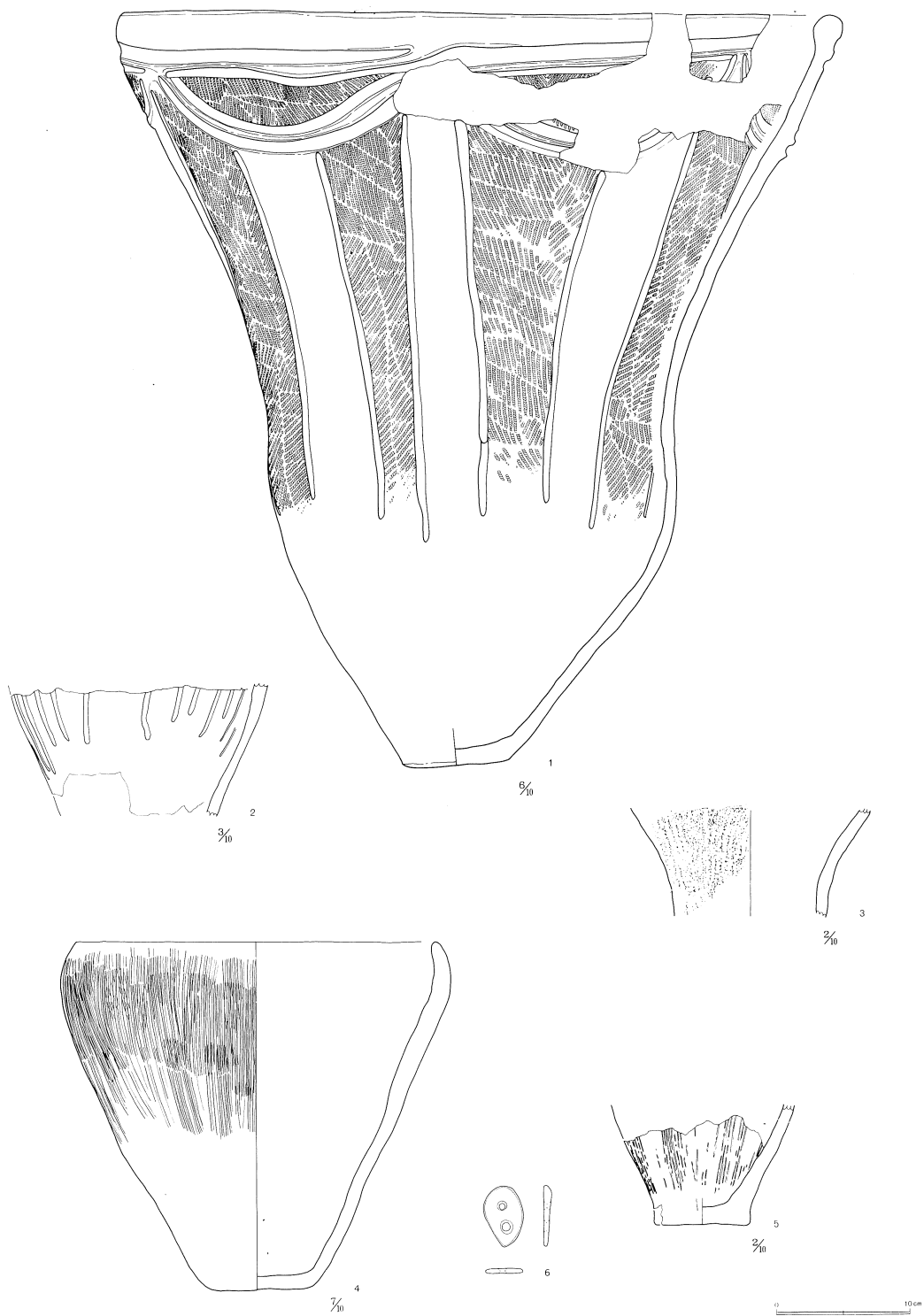
6. 褐色土 焼土粒多量含む。
7. 褐色土 ローム粒含む。
8. 黒褐色土 ローム粒少量含む。
9. 暗褐色土 ロームブロック含む。
10. 暗褐色土 ソフトローム層

第63図 S J 27

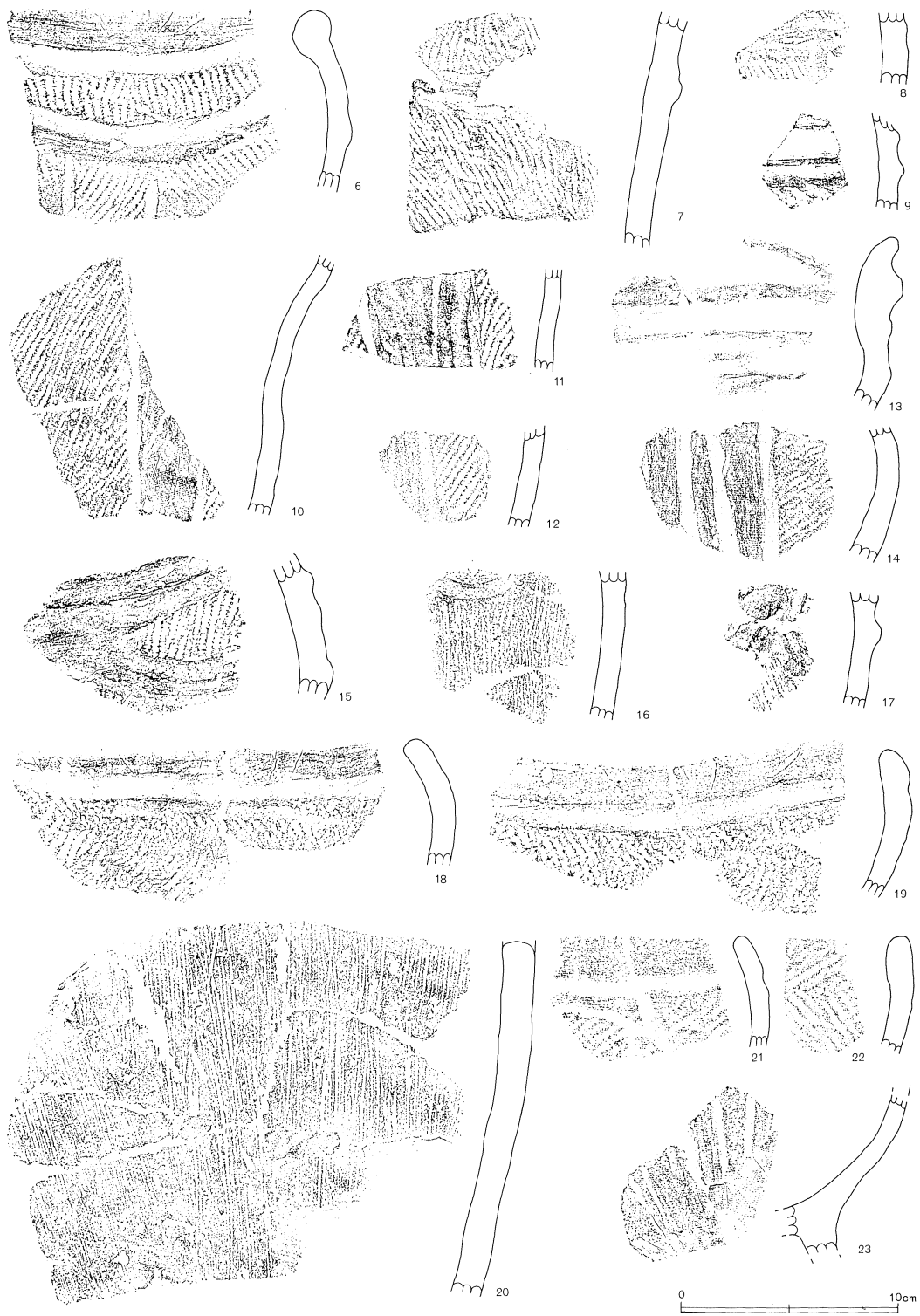
重なる加熱により、赤化している。また、埋設土器は、深鉢に切断などの加工をせず、そのままに埋め込んでいる。土器内の埋土は上層の覆土より黒色味つよく、焼土粒子を含まないなど、住居使用時にはすでに埋め戻されていた可能性が高い。加曽利E式土器の他に、礫、チャート、垂飾、剥片類が多く出土した。



S J 27遺物出土状況



第64图 S J 27出土遗物(1)

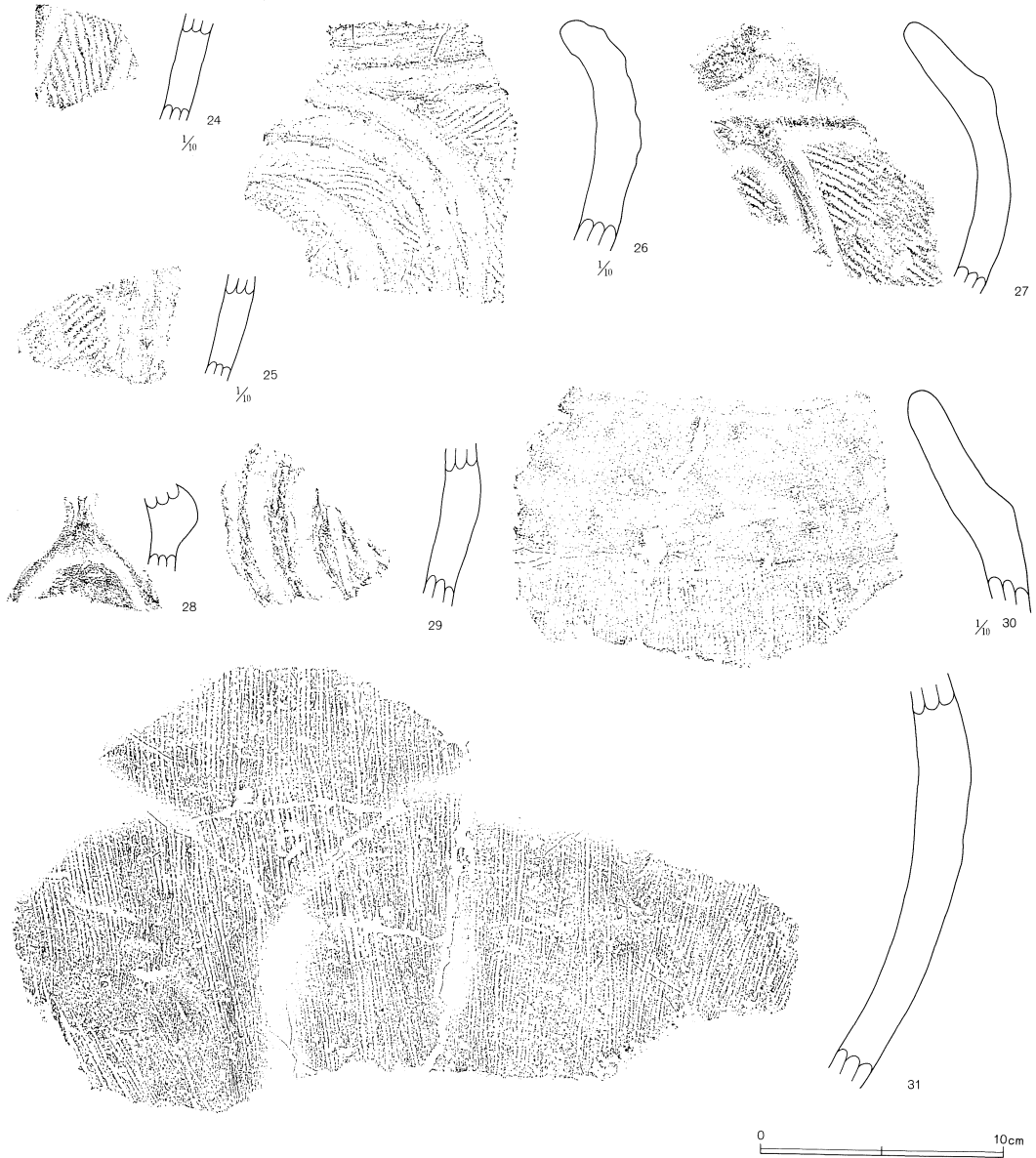


第65图 S J 27出土遺物(2)

S J 27出土遺物（第64～66図）

本住よりは、覆土中と埋設土器をあわせて天箱5箱に及ぶ遺物の出土があった。また、重複するS E 5には、本住居に帰属していたであろう多くの遺物が流入していた。そのため、それらの一部を参考資料として第66図に掲げ、あわせて説明する。

1・2・6～12・24～25は口縁部文様帯を擁するキャリパー形深鉢で、1が炉埋設土器である。同番は連弧を主題とした低隆帯をもって口縁部の構成とする。懸垂文は胴中位までしか到達せず、下位の施文は省略されている。4の条線施文の埋設土器とともに、地中に埋め込むことを念頭に製

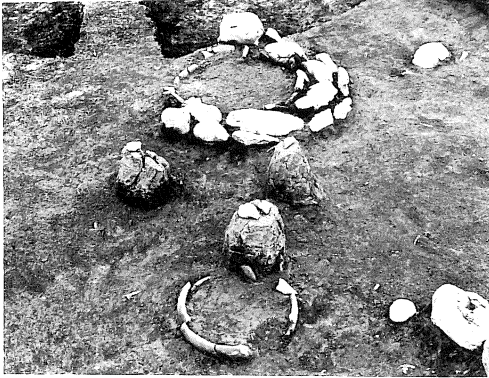


第66図 S J 27出土遺物(3)

作されたとも思える。他の土器にも共通するが、縄文も部位による施文方向の使い分けが曖昧なまま残されている。

一方、13・14・26～29は、隆帯によって上下二段の渦巻を基調とした構成をとる型の深鉢、3・18～22は縄文のみを構成の要素とした深鉢である。後者のうち、18・19・21は破片下に磨消渦巻・波状文が、22には波状文が展開する可能性も考えられる。

条線が施されるものには、深鉢と鉢の二種がある。4・5が深鉢であり、15～17は肩部に文様帯を設定する両耳壺である。また、他には、23の台付鉢がある。 (黒坂禎二)



S J 27埋設炉と埋設土器



S J 27垂飾出土状況

S J 28 (第28号住居跡・第67図)

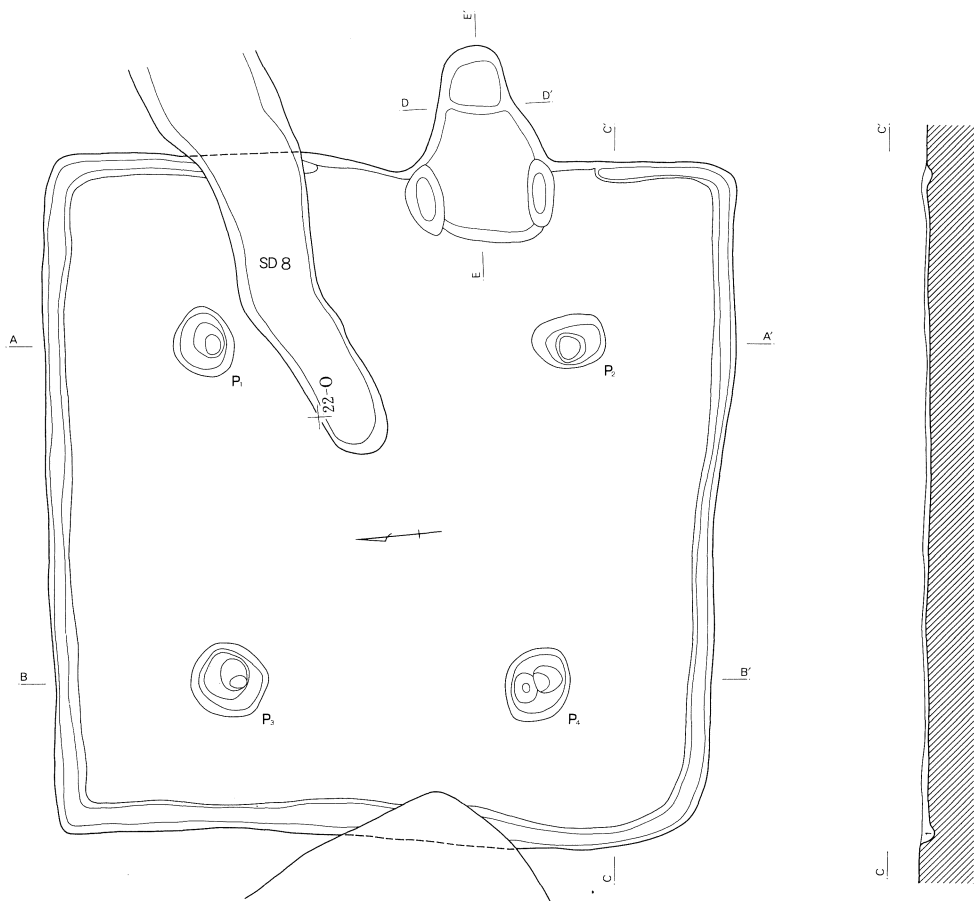
22-OGrid 他に位置し、S J 29及びS D 8と重複する。やや東西に長い方形を呈し、竈は東辺やや南寄りに付設される。住居の遺存状態は不良で、西側及び東側は確認時に床面が露出しており、出土遺物も竈周辺に多い。竈は掘形のみが残っており、袖は既になく、燃烧部に僅かに焼土が残っているにすぎなかった。床面はやや凹凸が目立ち、壁溝は全周する。Pit は壁面より1 m程入った位置に4基規則的に検出された。覆土は黒褐色～暗褐色を呈し、ロームブロックが含まれる。

S J 28出土遺物 (第68図)

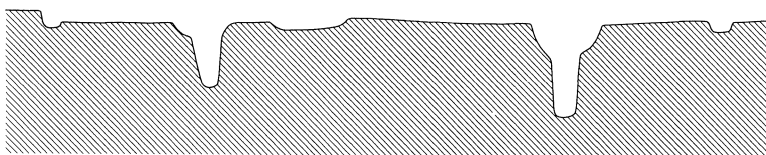
1～4は須恵器坏で、口径は13.2～13.4cm (4は13cm)、器高は3.6～4 cmを測る。内外面ともロクロナデ、底部は1・2は全面回転ヘラケズリ、3は回転糸切り後、体部下半及び底部周辺ヘラケズリ。5は須恵器碗で、口径18.6cm、器高6.8cmを測る。底部調整は回転糸切り後、回転ヘラケズリ。胎土に白色針状物を含む。色調は青灰色～灰色。



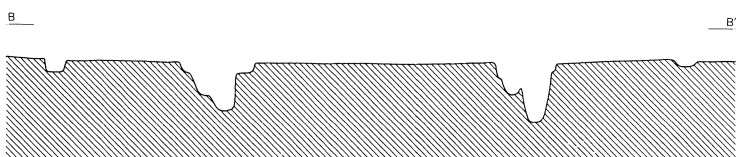
S J 28



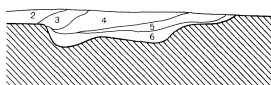
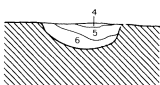
A A' 35.20m



1. 黒褐色土 ローム粒・焼土粒含む。
2. 褐色土 ローム粒・ロームブロック含む。
3. 褐色土 ローム粒・焼土粒多量含む。
4. 暗褐色土 焼土粒多量含む。
5. 暗褐色土 焼土粒・焼土ブロック含む。
6. 黒褐色土 焼土粒多量含む。

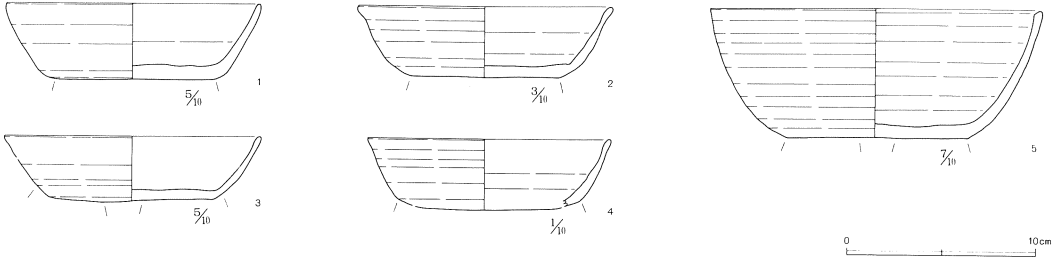


D D' E E' 35.20m



0 2m

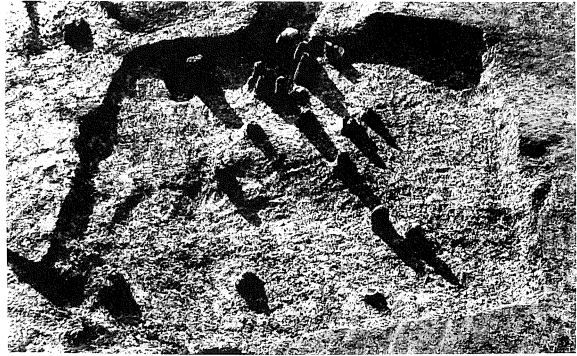
第67図 S J 28



第68図 S J 28出土遺物

S J 29 (第29号住居跡・第69図)

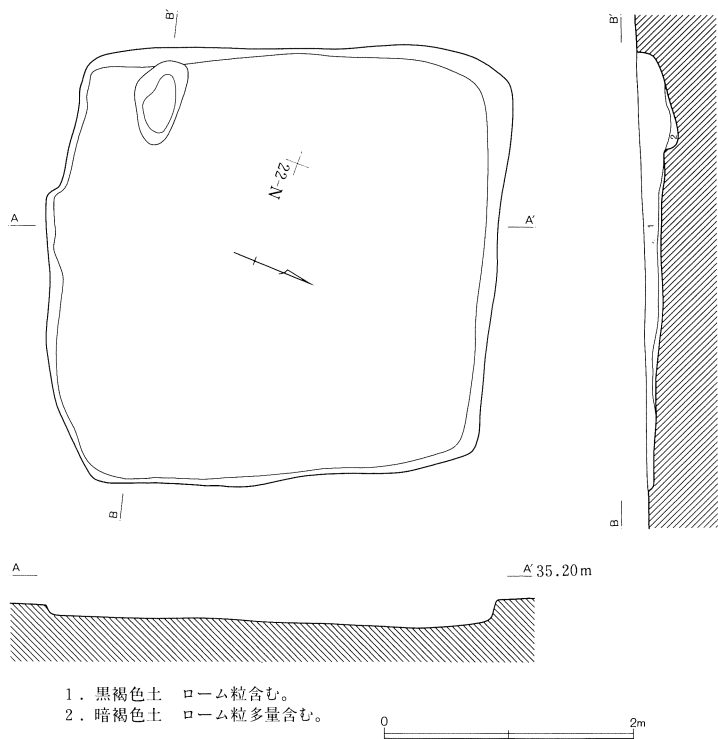
21・22-NGrid に位置し、東隅を S J 28 に壊される。図中では不明瞭であるが、S J 29 の上に S J 28 がのっているような状況である。また、S D 8 についても掘り込みが浅いため、遺構として S J 29 内に現れない。一辺が 3 m 余りの不整形を呈し、竈は南隅付近に付設される。確認面から床面までの深さは、西辺で約 20 cm、東辺で約 5 cm と東から西に傾斜している。壁溝や貼り床は検出されなかった。竈は煙道部が検出されず、燃烧部の掘形のみで、最下面に焼土層が 1 cm 程の厚さで検出された。



S J 29

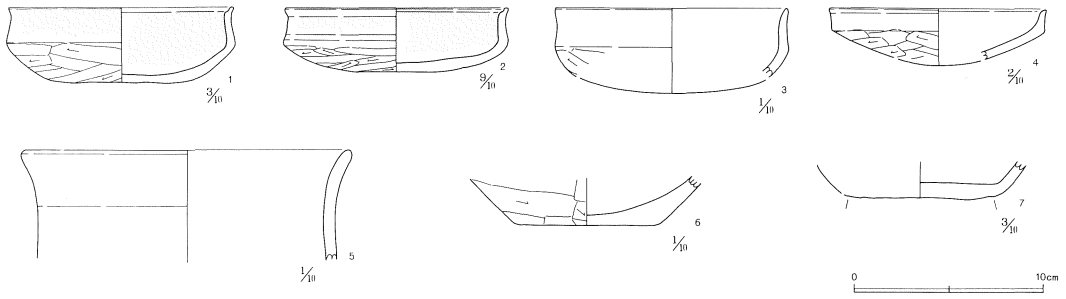
S J 29 出土遺物 (第70図)

1～4 は土師器坏で、1～3 は内面から口縁部にかけて赤彩される。内面から口縁部にかけては横方向のナデ、体部から底部はヘラケズリ。口径は 1・2 は 11.8 cm、4 は 11.4 cm を測る。5 は土師器甕の口縁部破片、6 は



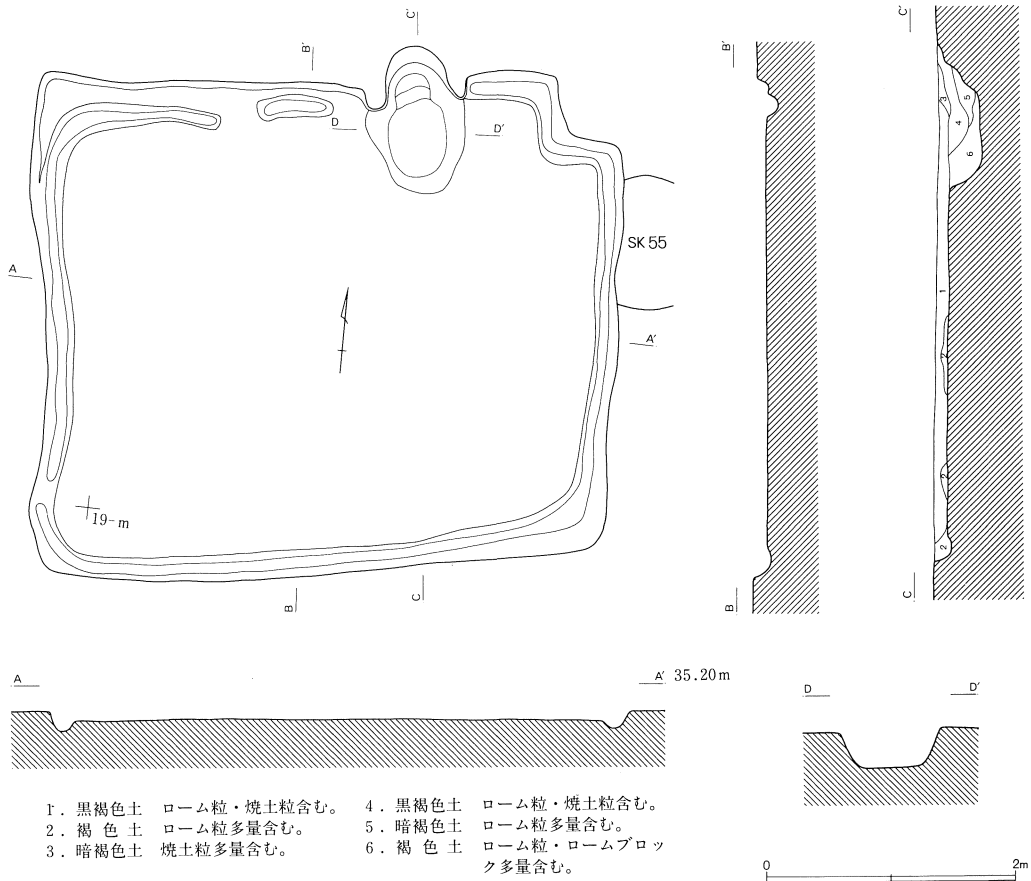
第69図 S J 29

土師器壺の破片で、5は推定口径17.5cmを測る。7は須恵器坏の底部破片で、S J 28からの混入とみられる。胎土に砂粒、小礫が含まれる。



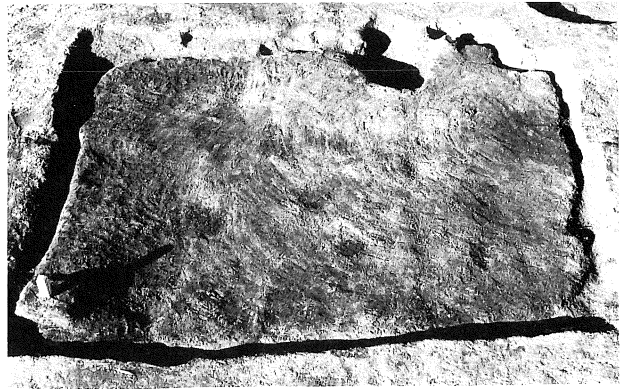
第70図 S J 29出土遺物

S J 30 (第30号住居跡・第71図)



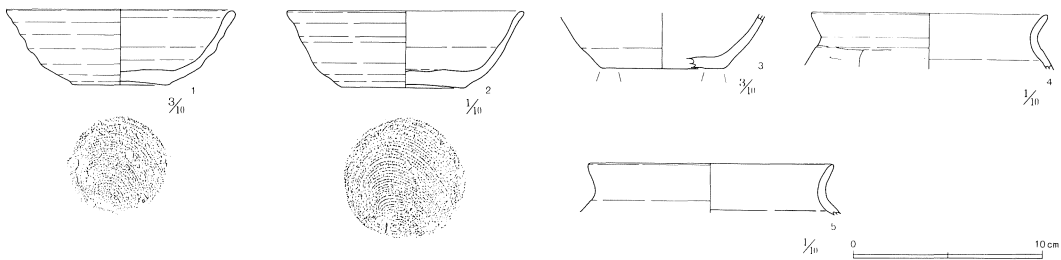
第71図 S J 30

18-MGrid 他に位置し、S K55に東壁の一部を壊される。東西に長い長方形を呈し、竈は北辺中央東寄りに付設される。竈は既に袖がなく、煙道は短く、燃烧部は深い。確認面から床面までの深さは5cm余りで、部分的には床面が露出している。壁溝はほぼ全周するが、北辺隅に括れ部をもつ。



S J 30出土遺物 (第72図)

S J 30



第72図 S J 30出土遺物

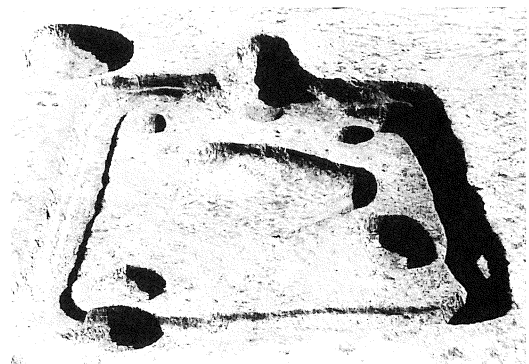
1～3は須恵器坏で、口径は1は12.3cm、2は12.6cm、器高はともに4.2cmを測る。3の底部調整は周辺回転ヘラケズリ。4・5は土師器台付甕の口縁部破片。推定口径は12.7及び12.8cm。

S J 31 (第31号住居跡・第73図)

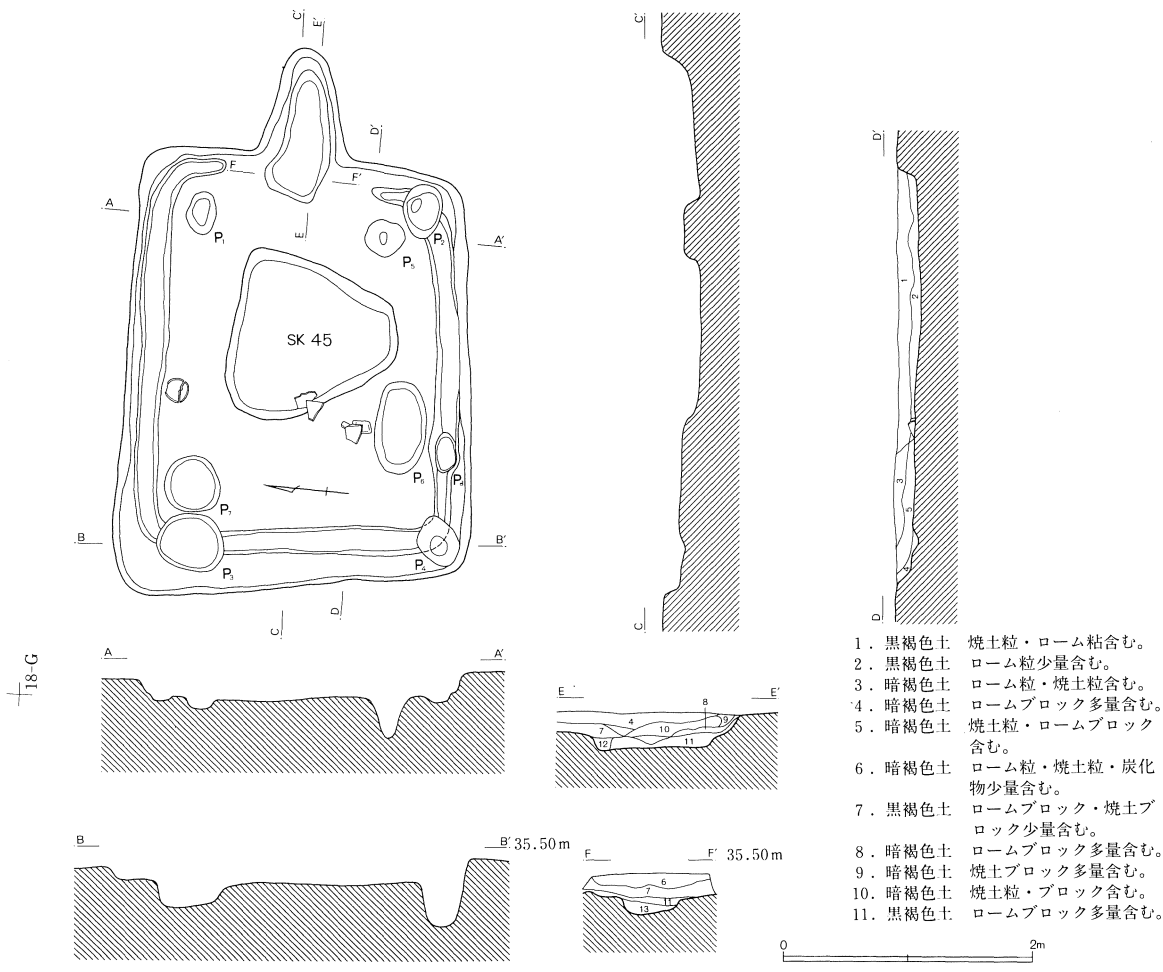
18-GGrid に位置する。東西に長い長方形を呈し、竈は東辺中央に付設される。竈の煙道部は約1mで、平坦な燃烧部から煙道部へは急角度で立ち上がる。袖は既になく、粘土等の構築材は検出されなかった。確認面から床面までの深さは、20cm余りで、床面は凹凸はみられるが、東辺を中心に貼り床が確認された。壁溝はほぼ全周し、Pit は主柱とみられるものが4基、その他に3基検出された。床面中央には竈掘形と同じ深さをもつ土壌が検出され、土器の破片が出土している。覆土は黒褐色を呈し、ロームブロックが含まれる。

S J 31出土遺物 (第74図)

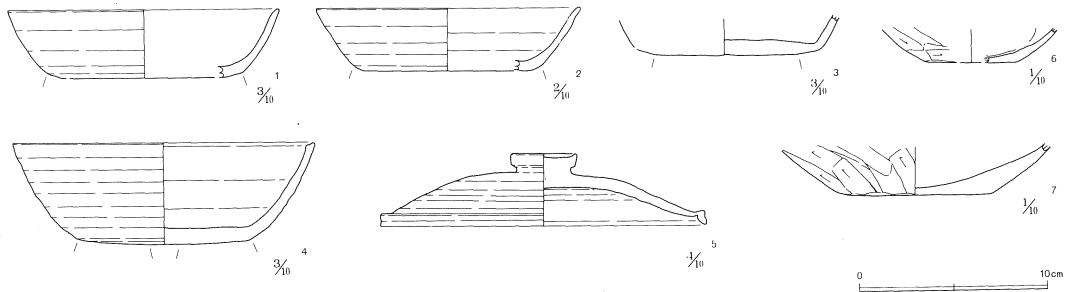
1～3は須恵器坏の破片で、内外面はロクロナデ、底部調整は全面回転ヘラケズリされるとみられる。推定口径は、1は14.4cm、2は14.2cmを測る。4は須恵器碗で、轆轤の痕跡を明瞭に残す。口径は16cm、器高は5.4



S J 31



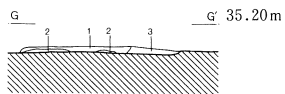
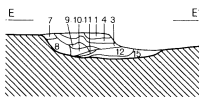
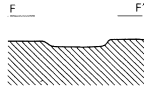
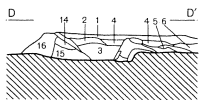
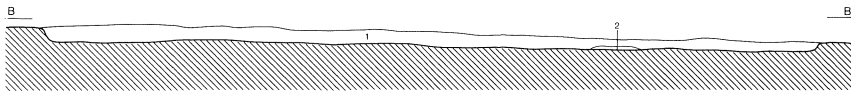
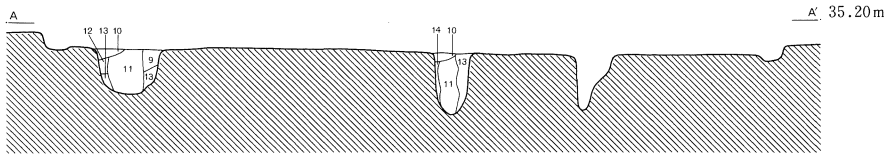
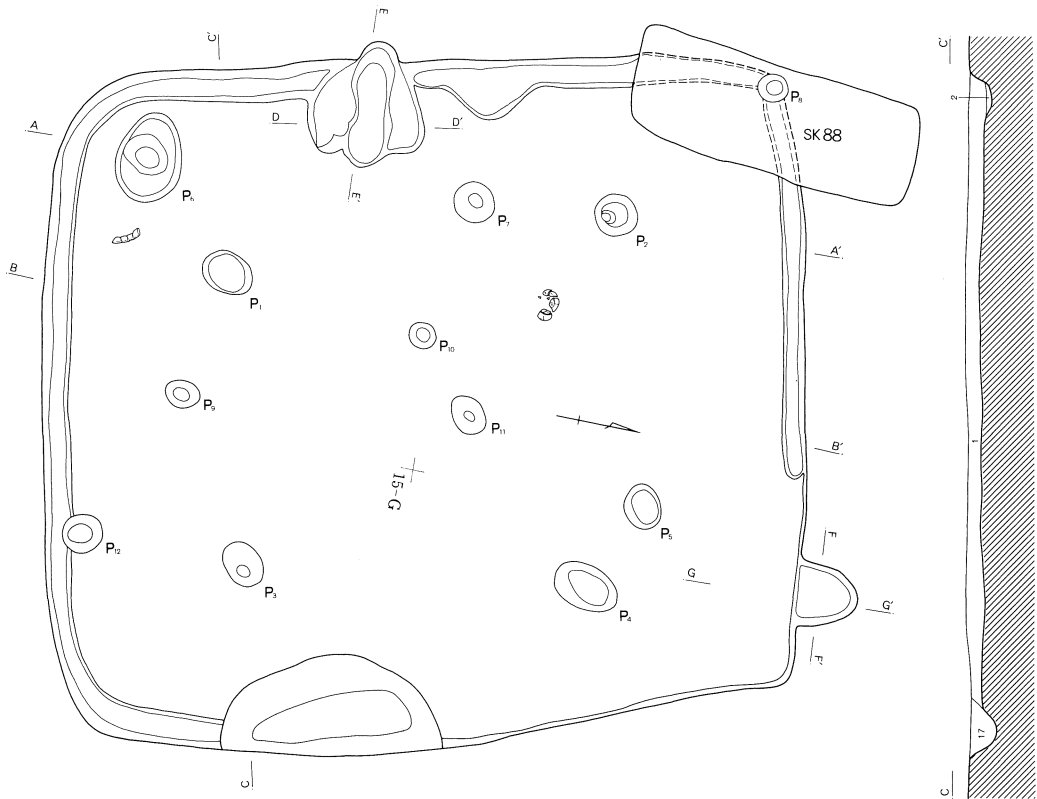
第73図 S J 31



第74図 S J 31出土遺物

cmを測り、底部は中心部を除いて大部分を周辺ヘラケズリされる。5が須恵器蓋で、口径は17.3 cm、器高は3.9cmを測る。6・7は土師器壺形土器の底部破片である。

S J 32 (第32号住居跡・第75図)

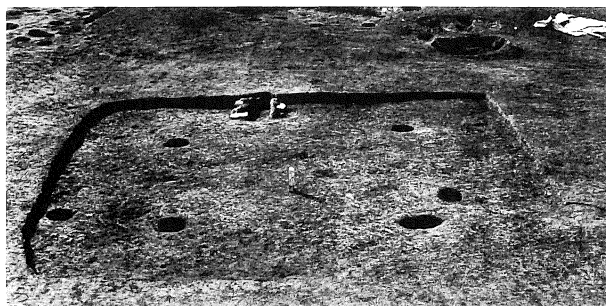


- | | | |
|-----|-------|-------------|
| 1. | 黒褐色土 | 焼土粒・炭火粒含む。 |
| 2. | 黒褐色土 | 焼土ブロック多量含む。 |
| 3. | 赤褐色土 | 焼土粒含む。 |
| 4. | 暗褐色土 | 焼土粒・炭化粒含む。 |
| 5. | 暗褐色土 | ローム粒少量含む。 |
| 6. | 暗褐色土 | ローム粒多量含む。 |
| 7. | 暗褐色土 | 焼土ブロック含む。 |
| 8. | 暗灰褐色土 | 灰色粘土ブロック含む。 |
| 9. | 暗褐色土 | 炭化粒・焼土粒含む。 |
| 10. | 明褐色土 | ロームブロック含む。 |
| 11. | 暗赤褐色土 | 焼土ブロック含む。 |
| 12. | 黒褐色土 | 炭化粒多量含む。 |
| 13. | 暗褐色土 | ロームブロック含む。 |
| 14. | 暗褐色土 | 焼土粒・ローム粒含む。 |
| 15. | 明褐色土 | ロームブロック含む。 |
| 16. | 明褐色土 | カストソデ |
| 17. | 暗褐色土 | ロームブロック含む。 |

0 2m

第75図 S J 32

15・16-FGrid に位置し、北東隅をSK88に壊される。隅丸正方形を呈し、竈は西辺やや南寄りに、貯蔵穴は南西隅に付設される。確認面から床面までの深さは10cm程で、Pit は住居に伴うとみられるものは11基検出された。竈は煙道部が短く、燃焼部からの立ち上がりは急である。袖は僅かに残っており、構築材として白色粘土が用いられている。焼土や炭化物は少ない。北辺東寄りには焼土を伴う竈状の張り出しがあるが、性格は不明である。また、壁溝の切れる東辺には土壇状の掘り込みがあり、実際には住居に伴わないとみられるが、断面観察からは先後関係は確認できなかった。



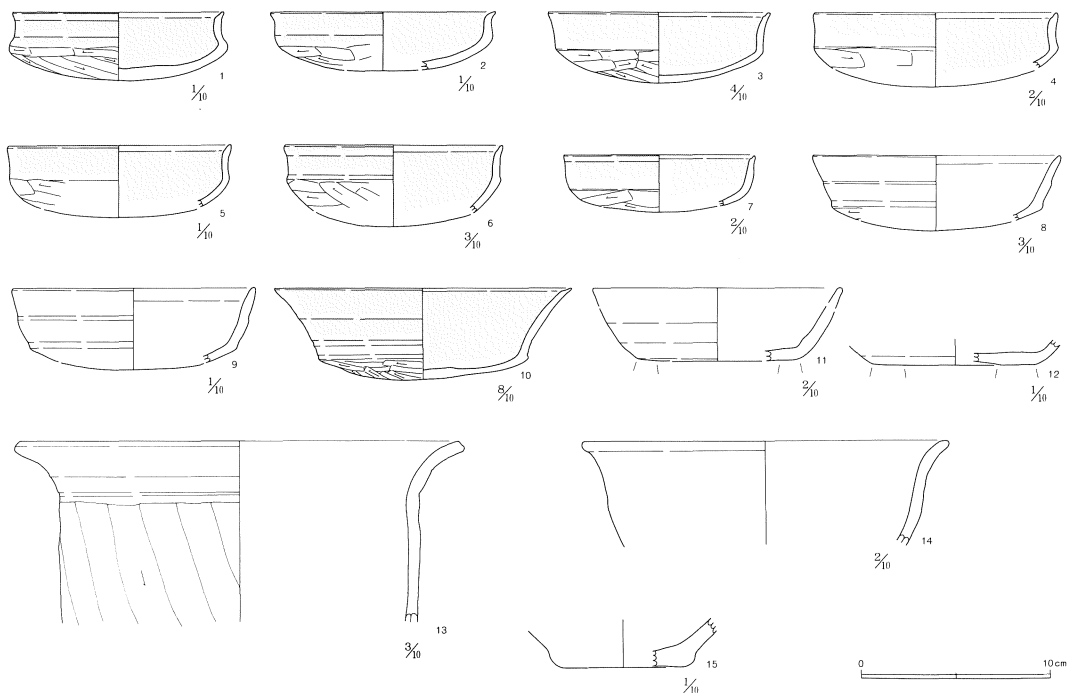
S J 32



S J 32竈

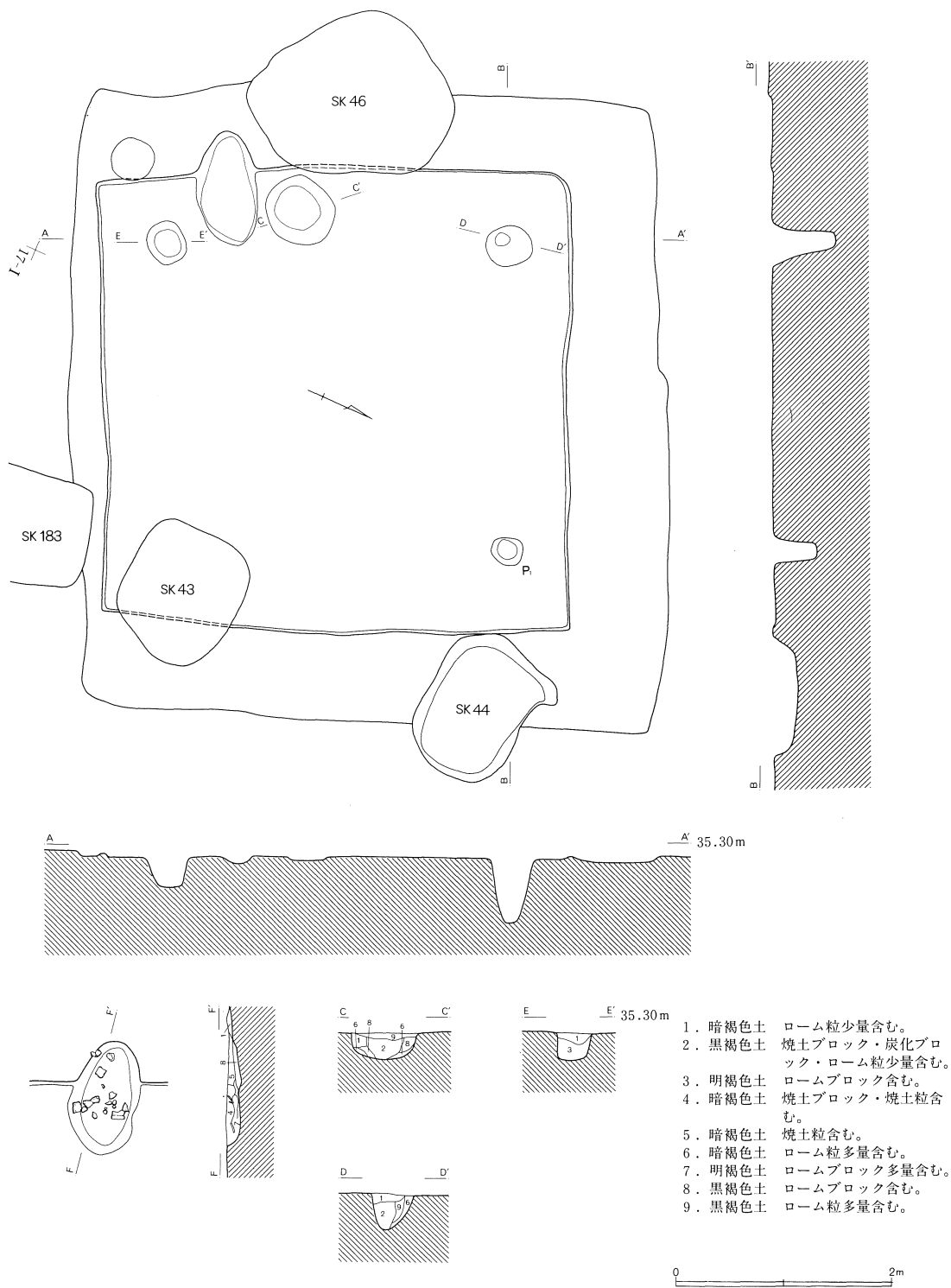
S J 32出土遺物 (第76図)

1～10はいずれも土師器杯の破片で、推定口径11.2～11.8cm (4・7・8～10を除く)を測る。4・8・9は13cm、7は10.2cm、10は15.6cmを測る。1～6は内面から口縁部にかけて赤彩が施される。11・12は須恵器杯で、混入とみられる。13は土師器甕、14は土師器鉢、15は土師器壺形土器の小破片である。



第76図 S J 32出土遺物

S J 33 (第33号住居跡・第77図)

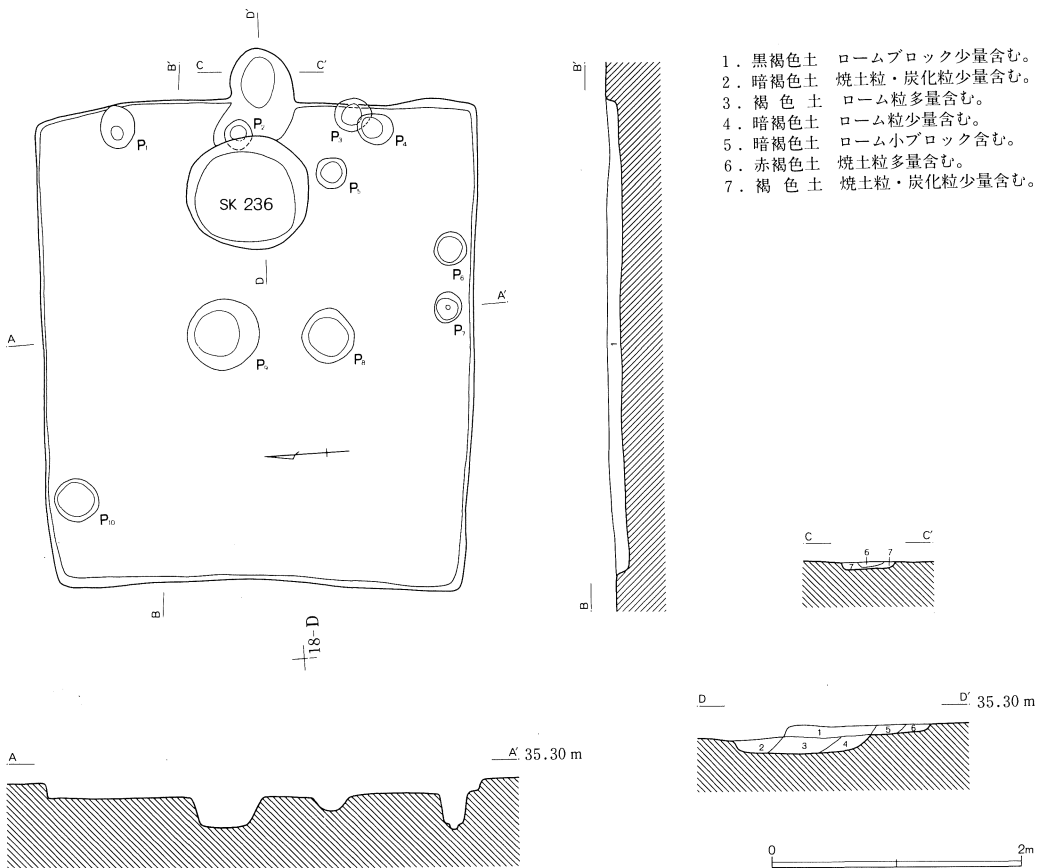


第77図 S J 33・竈

16-H・I Grid に位置し、S J 18と重複する。また、東辺をS K 43、西辺をS K 46に壊される。竈は西辺南寄りに付設されるが、既に袖はなく、燃烧部から煙道部の掘形のみが残存している。燃烧部には厚さ1 cm程の焼土とともに土師器甕の小破片が出土した。床面は凹凸が目立ち、貼り床は検出されなかった。壁溝はもたず、S J 18と重複している為か床面からの立ち上がり部分に不明瞭な部分を残す。Pit は4基で検出され、竈右寄りの円形の Pit が貯蔵穴と考えられる。Pit 1や2にみられる焼土は竈内からの混入とみられる。

S J 34 (第34号住居跡・第78図)

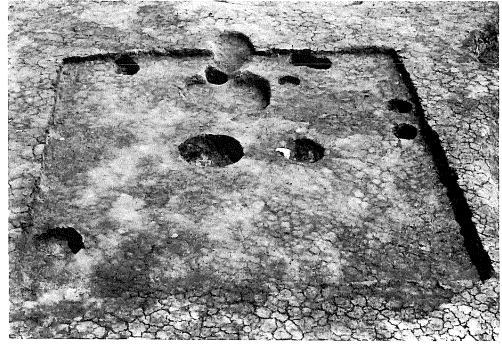
17・18-D Grid に位置する。長方形を呈し、東西方向に長い軸をもつ。竈は東辺中央に付設され、燃烧部の焚き口付近をS K 236に壊される。確認面から床面までの深さは約15cm程あり、覆土にはロームブロックを含む。床面は凹凸が目立ち、部分的に貼り床が検出された。竈は大半が原形をとどめておらず、S K 236との重複関係も土層断面からは明瞭ではない。煙道部は短く、焼土が僅かに検出された。Pit は10基検出されたが、不規則である。壁溝は存在しない。



第78図 S J 34

S J 34出土遺物（第79図）

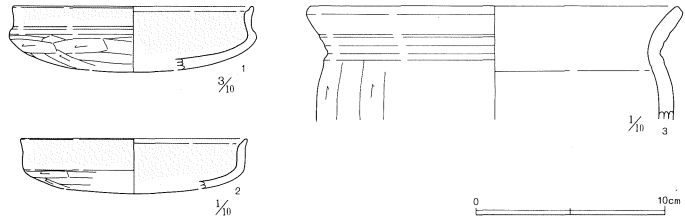
いずれも覆土中より出土した。1・2は土師器坏の破片で、推定口径は、1は12.6cm、2は11.8cmを測る。1は内面から口縁部外面にかけて赤彩される。3は甕の口縁部破片で、推定口径は20.2cm。胎土には砂粒、小礫を含む。



S J 34

S J 35（第35号住居跡・第81図）

12・13—J Grid に位置し、S E 11、15、S K 113、178、225、240等と重複し、殆ど原形をとどめていない。一辺約4.5mの不整形方を呈し、確認面から床面までの深さは約15cmを測る。床面は凹凸が目

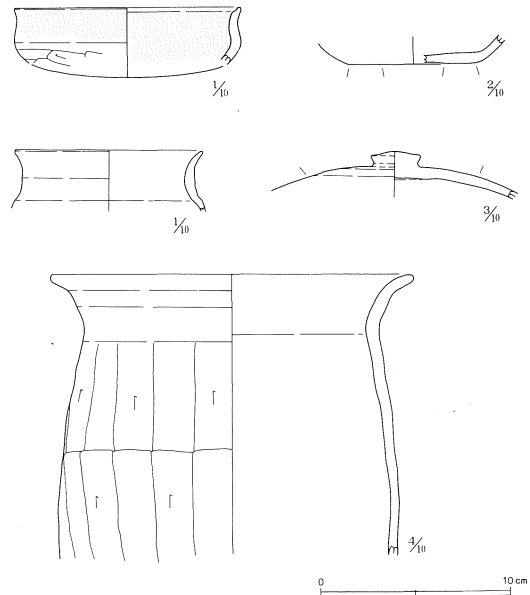


第79図 S J 34出土遺物

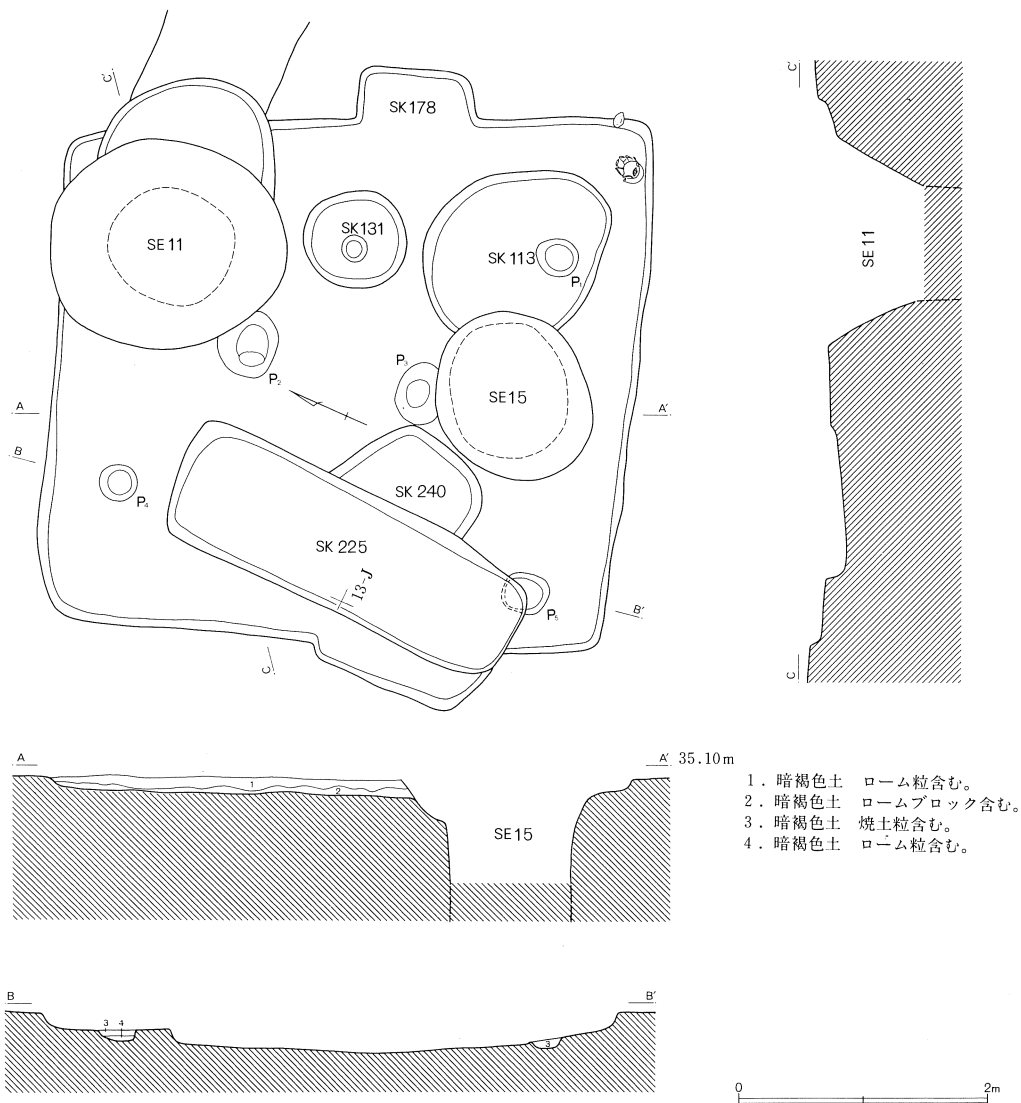
立ち、中央部に向かってやや深くなる。Pit は4基検出されたが、いずれも浅く、一部にはロームブロックや焼土粒子が含まれる。竈は該当する箇所が見あらず、焼土が出土した東辺の土壌と重複した部分に僅かに可能性が求められる。壁溝は存在せず、壁際に焼土や炭化物も見られない。また、西側に張り出た部分は、住居に伴う張り出しか土壌状の掘り込みかは断面観察からは判断できなかった。覆土は上層は黒褐色、下層は暗褐色をベースとし、ローム粒子等が含まれる。

S J 35出土遺物（第80図）

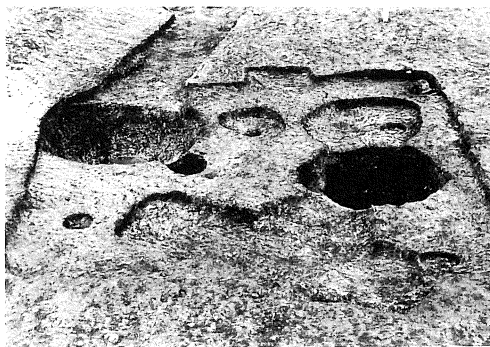
いずれも覆土中より出土した。1は土師器坏の口縁部破片で、推定口径12cm、内面から口縁部外面にかけて赤彩が施される。2は須恵器坏の底部破片、3は土師器台付甕の口縁部破片で、推定口径は10cm、4は須恵器蓋の破片。2～4は混入とみられる。5は土師器甕の口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部は横ナデ、胴部外面は縦方向のヘラケズリが施される。胎土には土師器は砂粒、小礫を含む。2・4の須恵器には砂粒の他に白色針状物を含む。



第80図 S J 35出土遺物



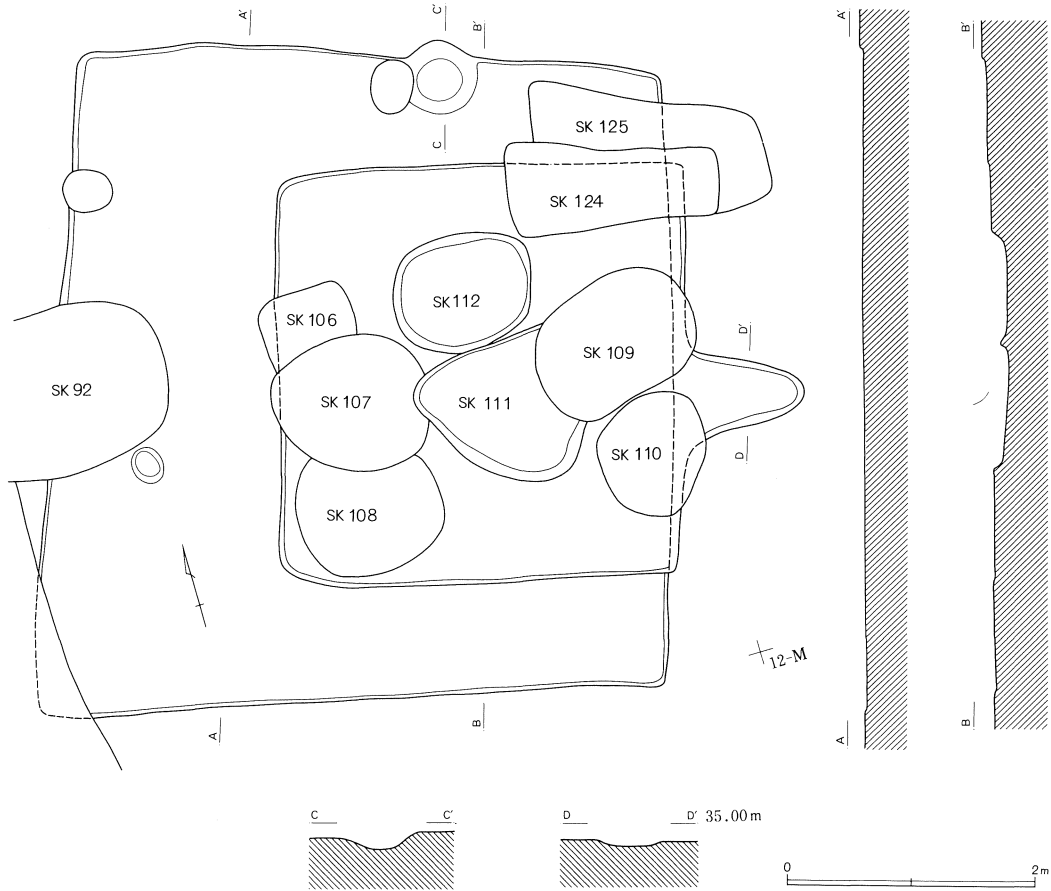
床面は他の遺構との重複によって
住居に伴う施設は不明瞭。遺物も
やや浮いた状態で出土している。



S J 35

S J 36・37 (第36・37号住居跡・第82図)

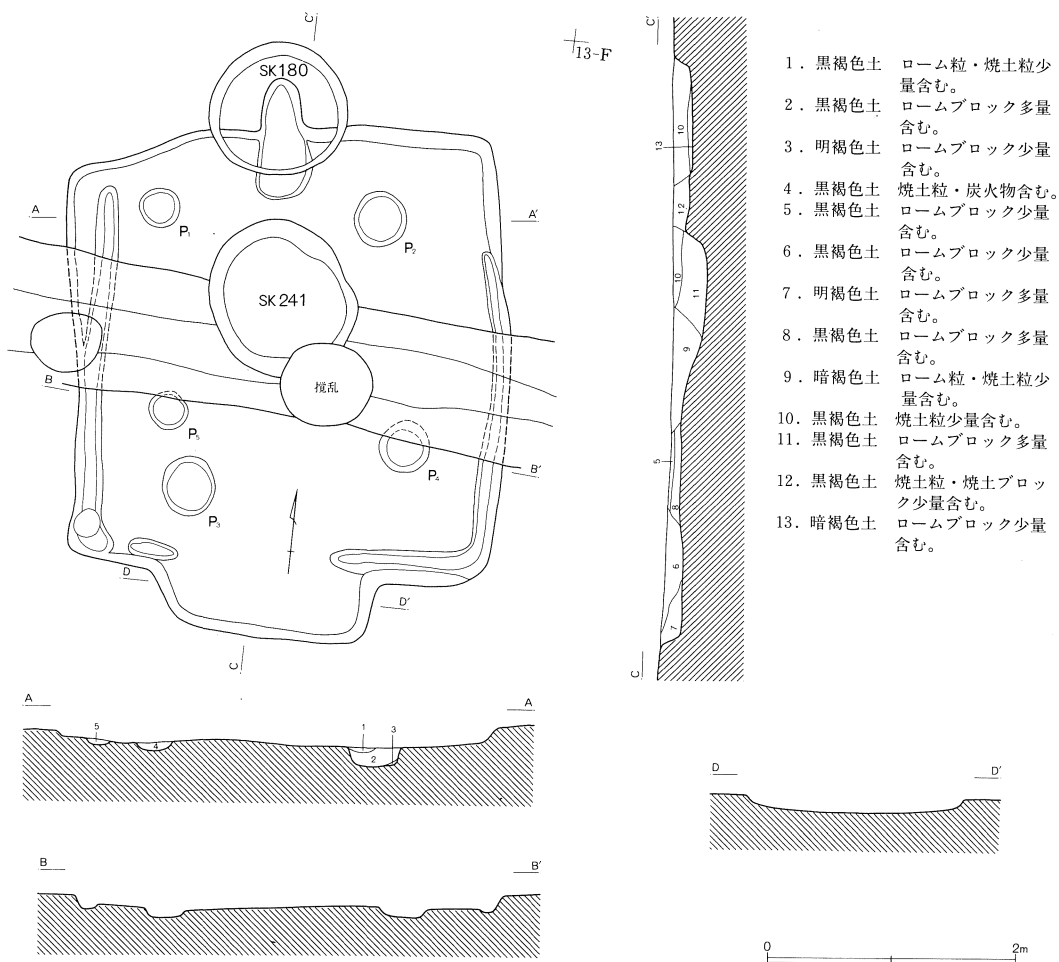
11-LGrid に位置し、大形の S J 36 の上に小形の S J 37 がのりような形で重複している。また、住居の中には多くの土壌群が構築されており、S J 37 は殆ど原形をとどめていない。S J 36 は一辺 5 m 程の不整形方を呈し、竈は北辺中央やや東寄りに付設される。竈は燃焼部に僅かに焼土ブロックが残る。床面は大部分が露出し、壁溝は存在しない。S J 37 は約 3 m 四方の正方形を呈し、竈は東辺中央に付設される。竈は約 1 m の煙道部を持つが、焼土や炭化物は殆ど検出されなかった。床面は平坦であるが、掘り込みが浅いため、S J 36 の床面と区別のつかない箇所もある。S J



第82図 S J 36 (大)・37 (小)

S J 38 (第38号住居跡・第83図)

13-EGrid に位置する。やや南北に長い不整形方を呈し、竈は北辺中央に付設される。南辺中央には張り出し部をもつ。竈は S K 180 に壊されるが、深く掘り込まれたため掘形内には多くの焼土が残っていた。壁溝は中央部を S D 11 等に壊されるが、東西辺に存在する。床面は凹凸が目立ち、貼り床は検出されなかった。遺物は出土していない。



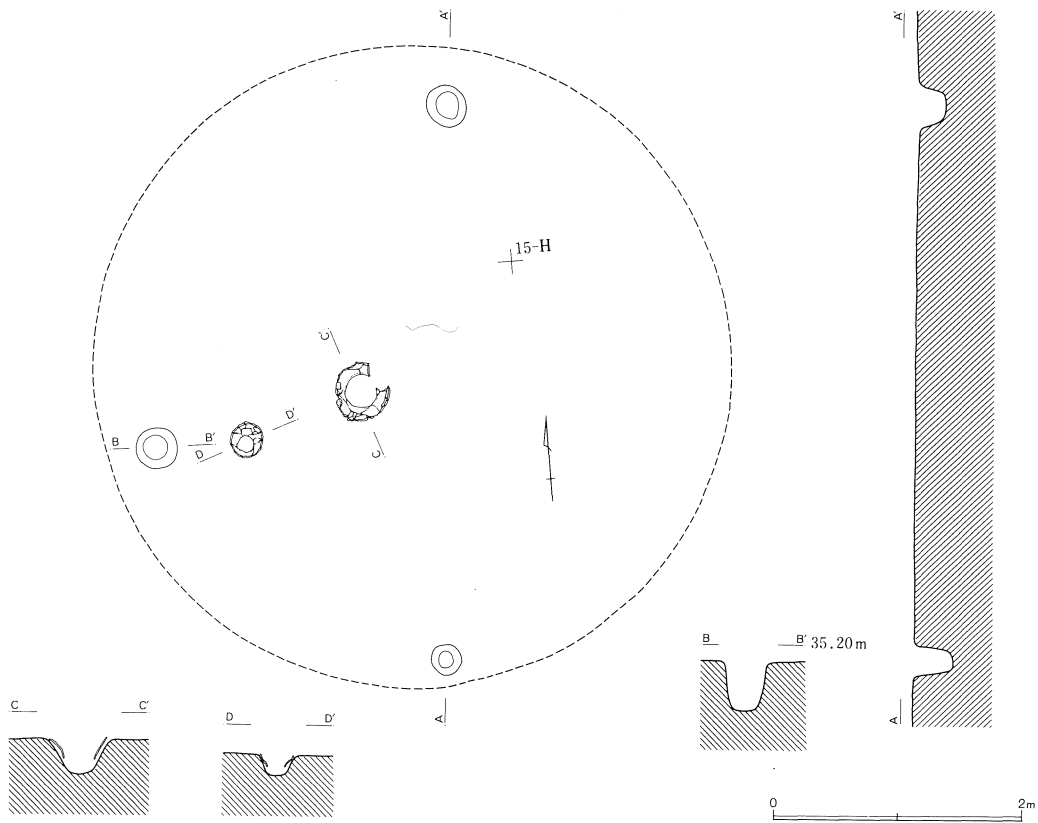
第83図 S J 38

S J 39 (第39号住居跡・第84図)

15-G Grid に位置し、検出時には既に口縁を一部欠く 2 個体の埋設土器が露出している状態であった。当然のことながら、覆土として認め得る土はなく、埋設土器以外の遺物も検出できなかったため、住居の規模は推定の域を出ない。

両埋設土器は、概ね東西をさす配置にすえられ、炉埋設と思われる東側土器を中心とした 4 m の範囲内に 3 基の Pit を検出した。小穴は近似した覆土の特徴をもつが、埋設土器に対応するものか否かの確定はできない。

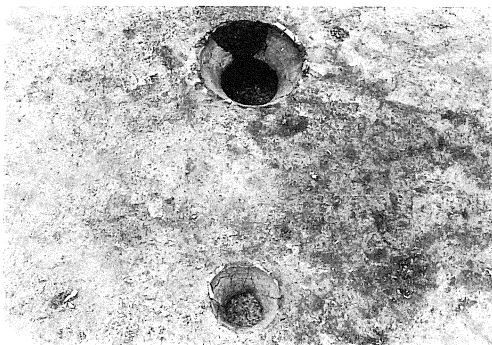
一方、東埋甕は攪乱により一部破壊され、全周はしていない。加曾利 E 系キャリパー形深鉢の胴下半を切断し、必要最小限の掘り方の中に埋め込まれている。しかし、深さは余裕をもっており、下層まで同様な焼土粒子の散布が認められる。明確な炉床は確認できず、土器内面の受熱痕も目立つものではない。また、西埋設土器も、埋置法などの特徴は東のそれと共通している。



第84図 S J 39

S J 39出土遺物（第85図）

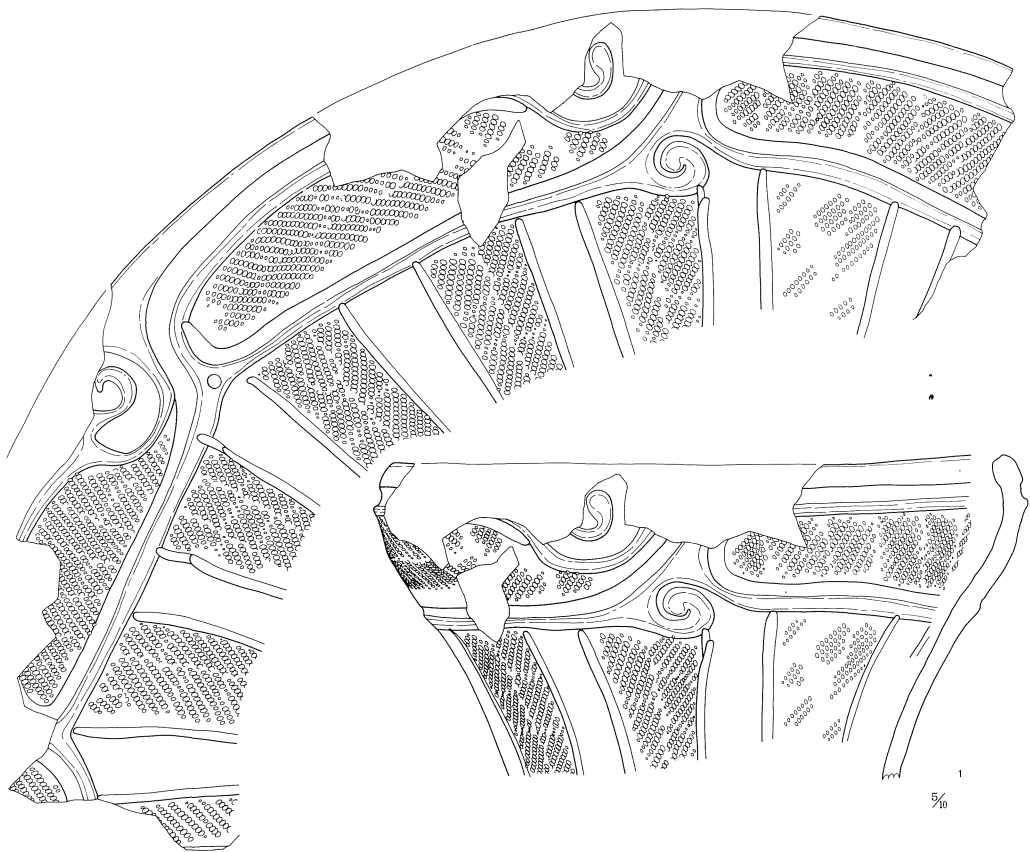
前記のごとく、2個体のみを検出である。1が東側炉埋設、2が西側埋設土器である。いずれもキャリパー形深鉢の下半部が切断されており、口縁部は表土除去時に逸してしまった部分も多い。両者ともに、口縁部文様帯は長楕円の渦巻きなどの交互配置による一般的な構成をとるが、1は隆帯による渦巻部がそれぞれに異なる趣向を凝らしている。また、口縁部文様帯内の地文縄文は、横



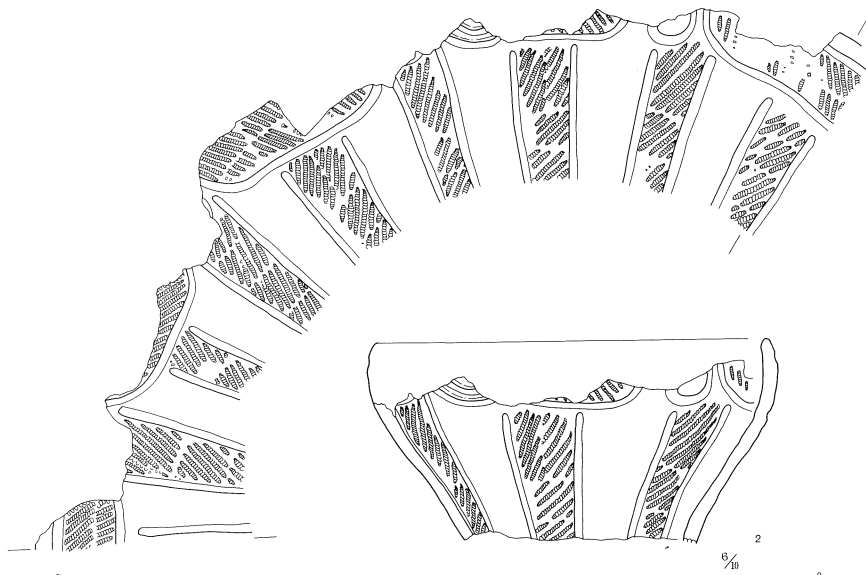
S J 39埋設炉と埋設土器

位回転施文だけでなく、縦位のそれも併用されている。この違いによってなにかの規則性を反映したものかとも考えたが、判明しなかった。

これに対し、2は渦巻ではなく、短楕円が配されているらしく、沈線のみによって文様を描きだしている。
（黒坂植二）



1
5/10



2
5/10

0 10cm

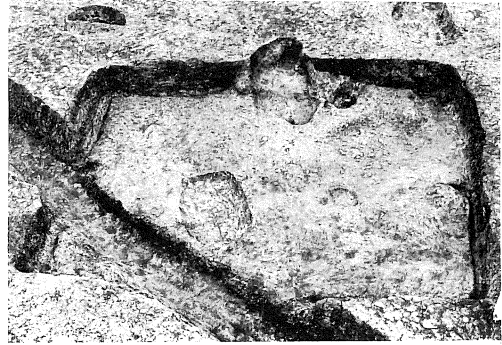
第85图 S J 39出土遗物

S J 40 (第40号住居跡・第86図)

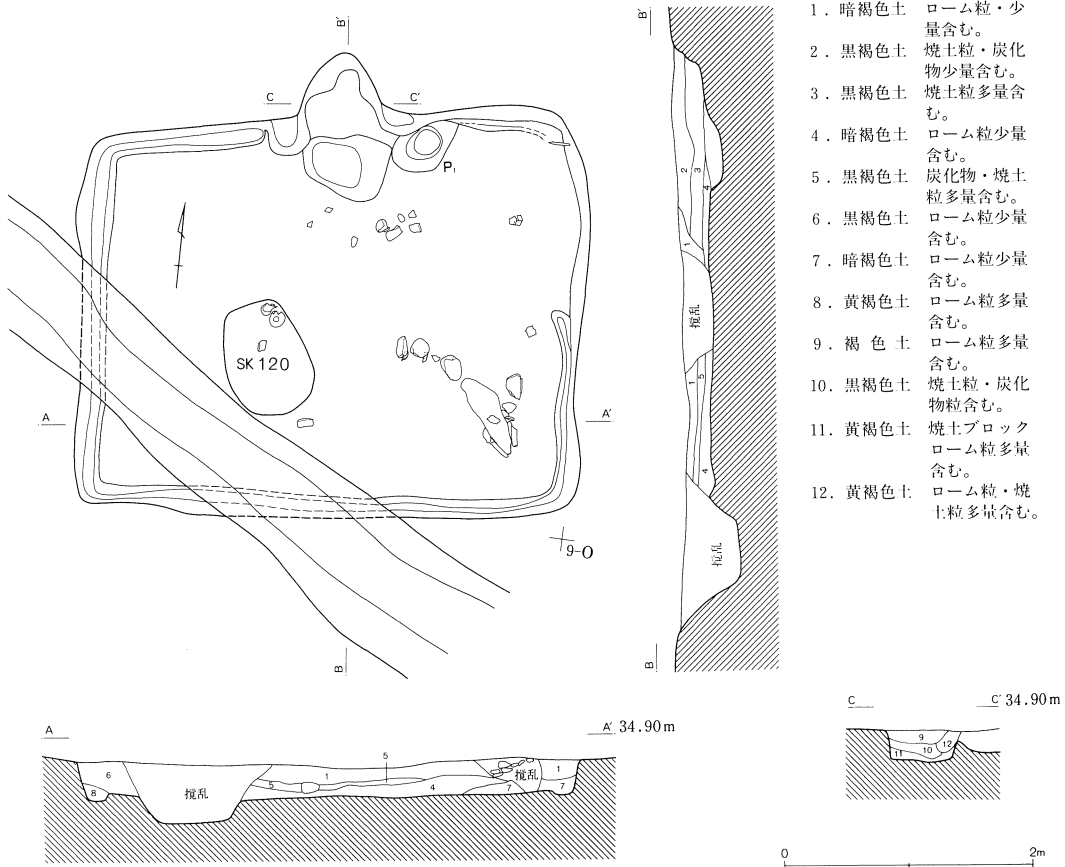
8-NGrid に位置し、南西隅付近をS D 19、S K 120に壊される。東西に長い方形を呈し、竈は北辺中央に付設される。確認面から床面までの深さは約30cmで、床面には中央部に貼り床が認められる。竈は僅かに袖が残り、灰白色粘土とローム及び黒褐色土で構築されている。燃烧部は部分的に攪乱を受けており、焼土や炭化物が浮いた状態にある。壁溝は東辺の一部を除いて全周し、溝の深さは一定せず、壁材が設置されていた可能性がある。Pit は検出されなかった。

S J 40出土遺物 (第87・88図)

第87図 1 は折れてはいるが、鉄鏃のほぼ完形品である。全長16cm、厚さは6mmである。全体に錆の進行が著しい。第88図 1・2 は土師器円で、ともに口径は10.2cmを測り、内面から口縁部外面にかけては赤彩される。3 は須恵器蓋で、口径11.2cm、器高4.8cm。内外面ともナデの

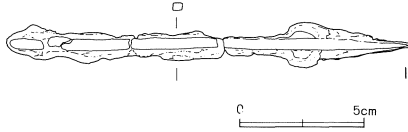


S J 40

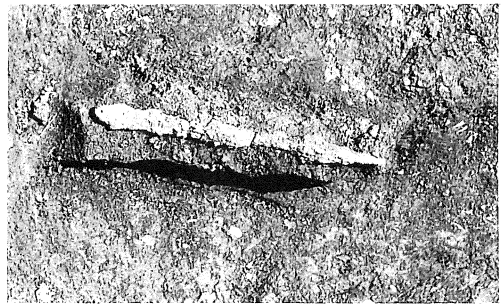


第86図 S J 40

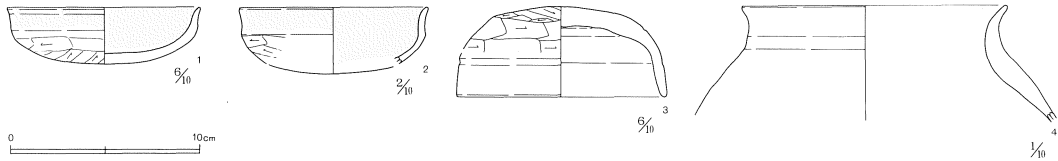
痕跡を明瞭に残す。天井部は手持ちヘラケズリされる。胎土に砂粒及び白色針状物含む。4は土師器壺形土器の口縁部破片、推定口径は14.2 cm。土師器は胎土に砂粒、小礫を含む。



第87図 S J 40出土遺物(1)



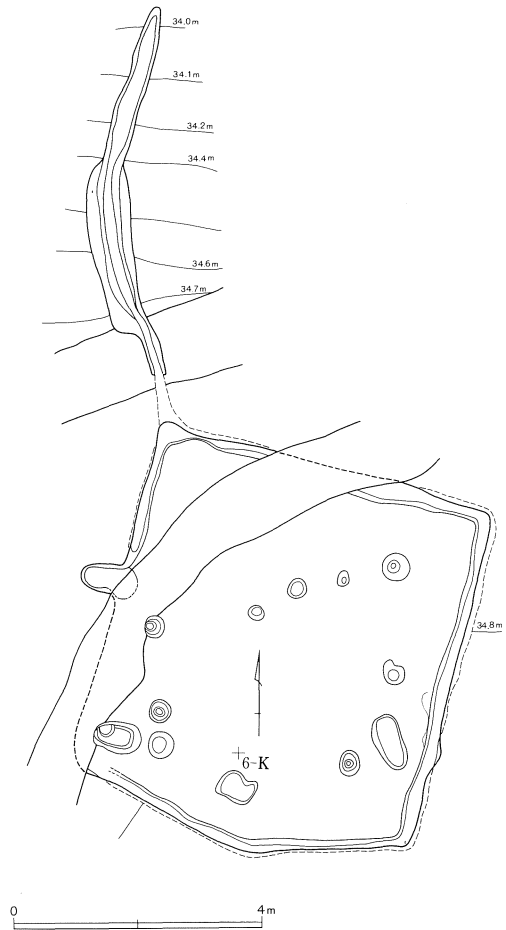
S J 40鉄鏃出土土状況



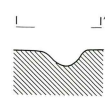
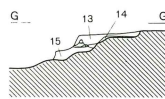
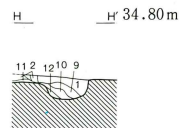
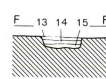
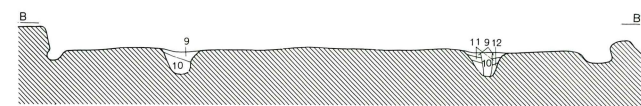
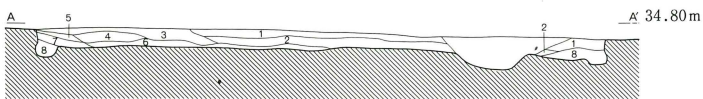
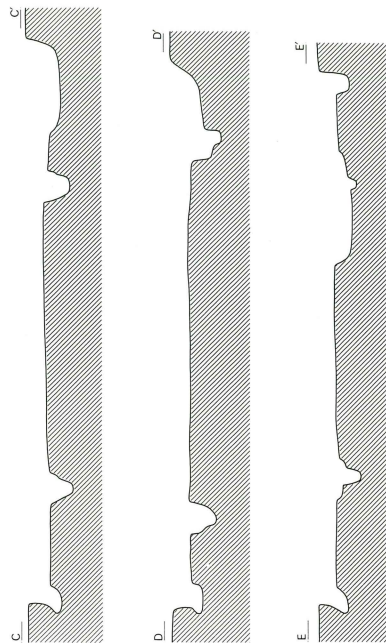
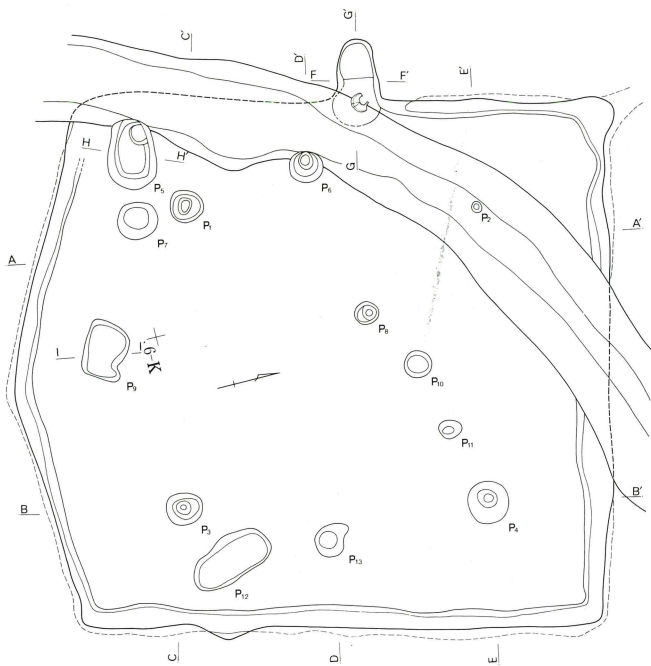
第88図 S J 40出土遺物(2)

S J 41 (第41号住居跡・第89~91図)

5-J・K Grid、台地の北側先端に位置し、北辺から西辺にかけてSD 6と重複する。方形を呈するが、南側が直線的に幾分張り出しており、変則的な五角形の様でもある。竈は西辺中央に付設されるが、燃焼部や袖はSD 6に壊されている。燃焼部から煙道部にかけては、階段状に立ち上がっており、中段の覆土中に須恵器高坏が出土している。溝に壊されているため、焼土や炭化物は少ない。確認面から床面までの深さは、20cm余りで、中心部付近は貼り床が認められ、僅かであるが北西方向に傾いている。壁溝は全周すると考えられ、壁際は外側に3~5 cmの幅で掘り込まれる。この溝は北西の隅から北側に向かって約1 mのトンネルが掘られ、露出した溝へと排出を流す仕組みになっている。Pitは1カ所がSD 6に壊され、底面のみが残存しているが、基本的に4本の主柱をもつ住居である。柱掘形については抜き取られたものもあるが、一部は版築された痕跡をとどめているものもある。貯蔵穴は南西隅に位置



第89図 S J 41全体図



- | | | | |
|---------|---------------|----------|-------------|
| 1. 褐色土 | ロール粒多量含む。 | 9. 黒褐色土 | ローム粒少量含む。 |
| 2. 暗褐色土 | 焼土粒・ローム粒含む。 | 10. 暗褐色土 | ロームブロック含む。 |
| 3. 暗褐色土 | ローム小ブロック含む。 | 11. 黒褐色土 | ローム粒・焼土粒含む。 |
| 4. 明褐色土 | ローム粒多量含む。 | 12. 黒褐色土 | ローム粒多量含む。 |
| 5. 褐色土 | ローム粒少量含む。 | 13. 褐色土 | 焼土粒少量含む。 |
| 6. 暗褐色土 | 焼土ブロック・炭化物含む。 | 14. 褐色土 | 焼土粒・炭化物含む。 |
| 7. 暗褐色土 | ローム粒少量含む。 | 15. 暗褐色土 | 焼土粒・炭化物含む。 |
| 8. 暗褐色土 | ロームブロック含む。 | | |

第90図 S J 41

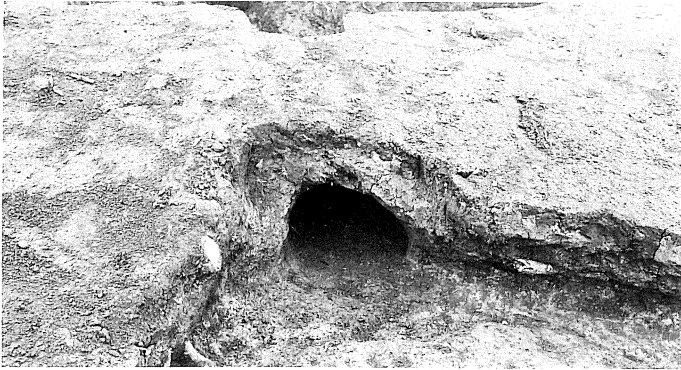
し、隅丸長方形を呈する。また、壁付近には炭化物が多い。



S J 41



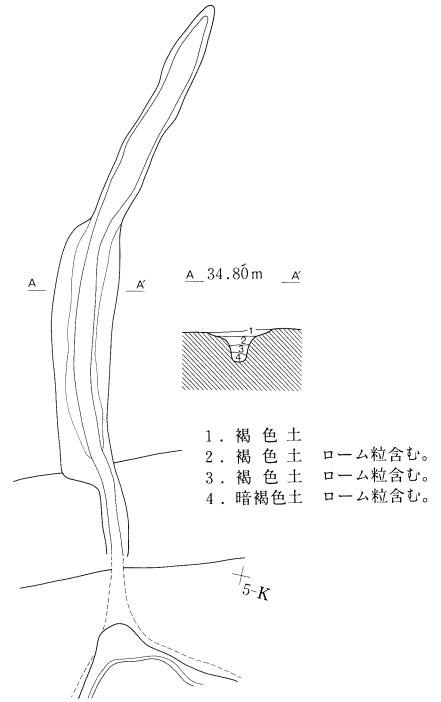
S J 41 刀子・白玉出土状況



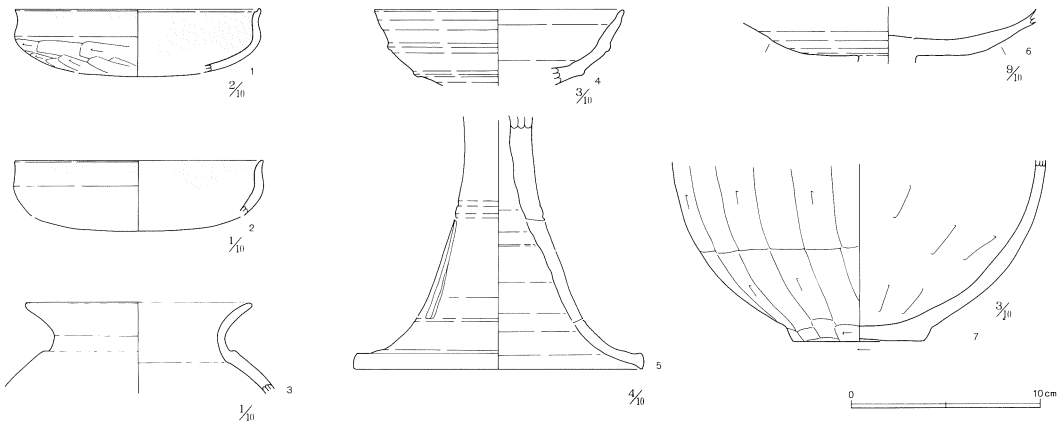
S J 41排水溝

出土遺物 (第92～94図)

第92図 1・2 は土師器坏破片で、推定口径13cm、同器高3.6cmを測る。ともに内面から口縁部にかけては赤彩される。3・7 は土師器壺形土器の破片で、3は推定口径は12cm。7の底部はヘラケズリ。4～6は須恵器高坏の破片で、4・5は同一個体かどうかは不明。4・6は坏部、5は脚部、いずれも内外面はロクロナデ。5は長脚の二段透かし。いずれも床面及び竈内より出土している。胎土には砂粒、4～6は他に白色針状物を含む。第93図1は刀子全体に錆が浸透しているが、先端部は遺存状態が良く、柄

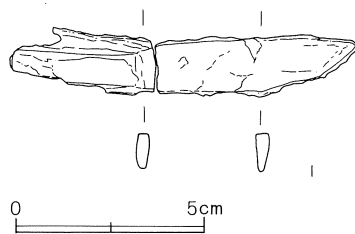


第91図 S J 41排水溝

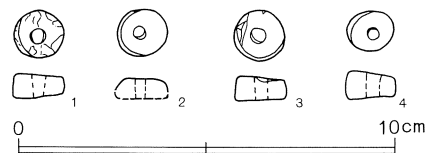


第92図 S J 41出土遺物(1)

の部分も僅かながら原形をとどめている。残存長9.3cm、幅1.5cm。壁溝内出土。第94図 1～4は



第93図 S J 41出土遺物(2)



第94図 S J 41出土遺物(白玉)(3)

滑石製の白玉で、片側に調整部分を明瞭に残す。壁溝内出土。

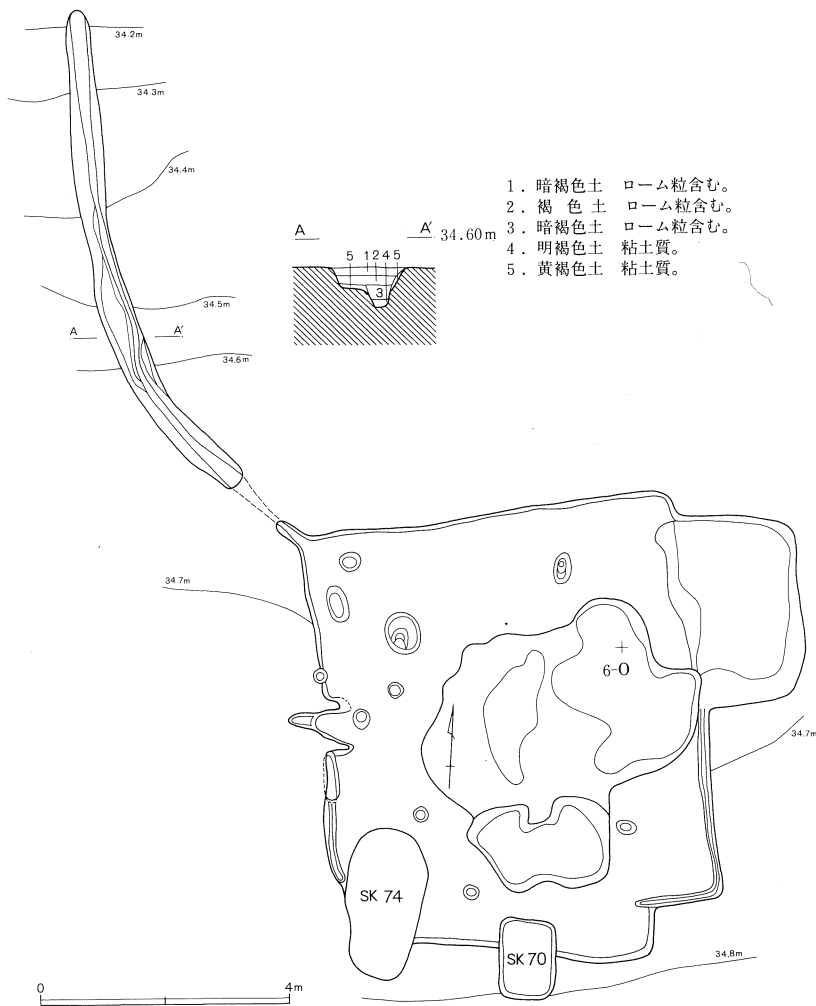
S J 42 (第42号住居跡・第95・96図)

台地の北側、6-NGrid 他に位置する。中心部が攪乱を受け、南辺はS K 70・74と重複し、遺存状態は不良である。S J 41と同様北側に排水溝をもつ住居で、東辺北寄りに方形の張り出しがあり、竈は西辺中央に付設される。竈は袖の部分を除いてほぼ原形をとどめている。燃焼部は特に掘り込みは認められず、比較的焼土の堆積は少ない。袖は灰白色の粘土が内壁に沿って検出され、一部は黒褐色土との互層になっている。燃焼部と煙道部は明瞭な段をもっており、次第に細くなる。壁溝は竈南寄りと東辺南寄りに検出されただけであるが、床面はS J 41同様北西方向に傾斜しており、機能としては大差ないものと考えられる。外側に延びる溝は約70cmのトンネル部分を持ち、露出する部分は約8mを測る。溝内の覆土の堆積は一定である。確認面から床面までの深さは10cm程で、床面には貼

り床が認められる。Pit は8基検出されたが、S J 41程規則的ではない。貼り出し部分は壁溝を壊しているような感もあるが、攪乱が及んでおりやや不明瞭である。

S J 42出土遺物 (第97図)

いずれも覆土中より出土した。1は須恵器坏身で、口径12.8cm、器高4.1cm。内外面ともロクロナデ、底部は回転ヘラケズリ。胎土に白色針状物、砂粒を含む。2は土師器坏で、口縁



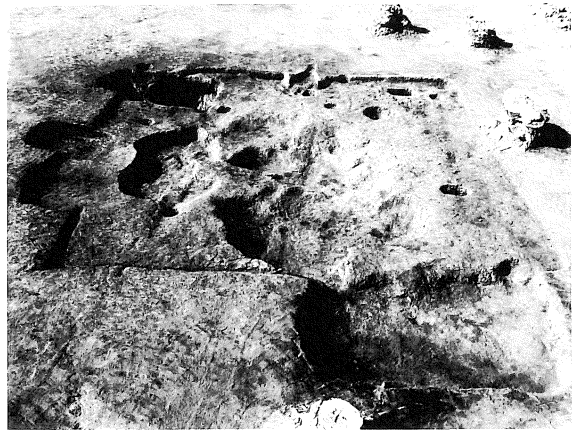
第95図 S J 42全体図



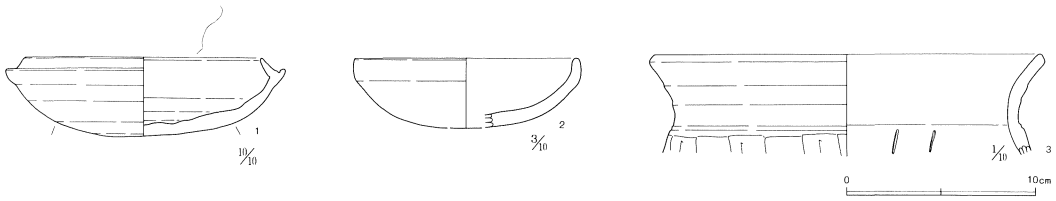
第96図 S J 42

部が内湾する。内外面とも風化が著しい。推定口径12cm、同器高3.7cm。3は土師器甕の口縁部破片。推定口径21.2cm、胎土に砂粒、小礫を含む。

住居中央の土壙状の掘り込みは攪乱で、最も深い部分は40cm程の深さがある。遺物は混入していない。



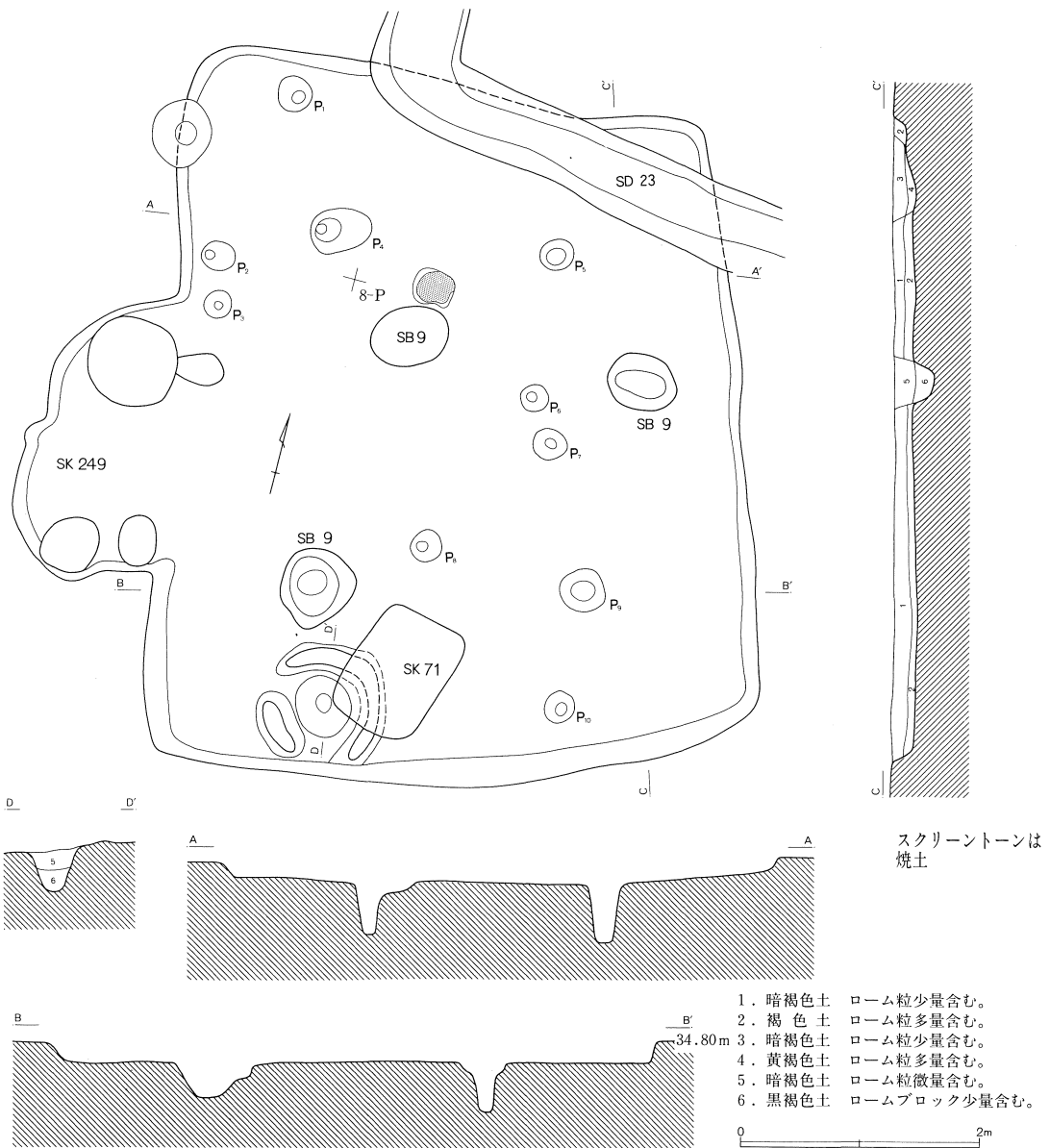
S J 42



第97図 S J 42出土遺物

S J 43 (第43号住居跡・第98図)

8-PGrid 他に位置し、西辺中央部をSK 249に、北辺の一部をSD 23に、中心部をSB 9、S



第98図 S J 43

K71に壊される。南北方向に長い隅丸長方形を呈し、炉跡は中央部北寄りに付設される。掘り込みは2 cm余りで、焼土量も少ない。確認面から床面までの深さは、15cm程で、確認時に覆土中に焼土の混入が確認されている。Pit は11基検出されたが、南壁際に検出された Pit は一部をS K71に壊されているが、周囲に堤状の高まりを有する。

S J 43出土遺物（第99図）

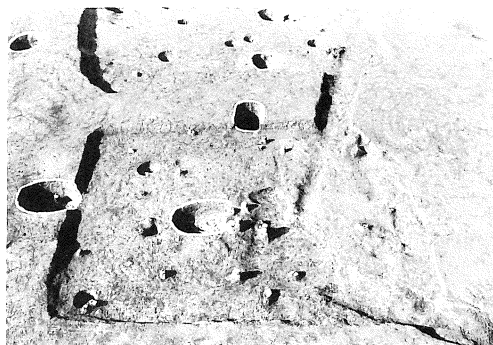
1・2は壺形土器で、1は口縁部の破片。少なくとも2段以上の連続波状文を展開する。色調は暗褐色。2は推定口径16.9cm。風化が著しく、文様構成不明。色調は淡橙褐色。

S J 44（第44号住居跡・第101図）

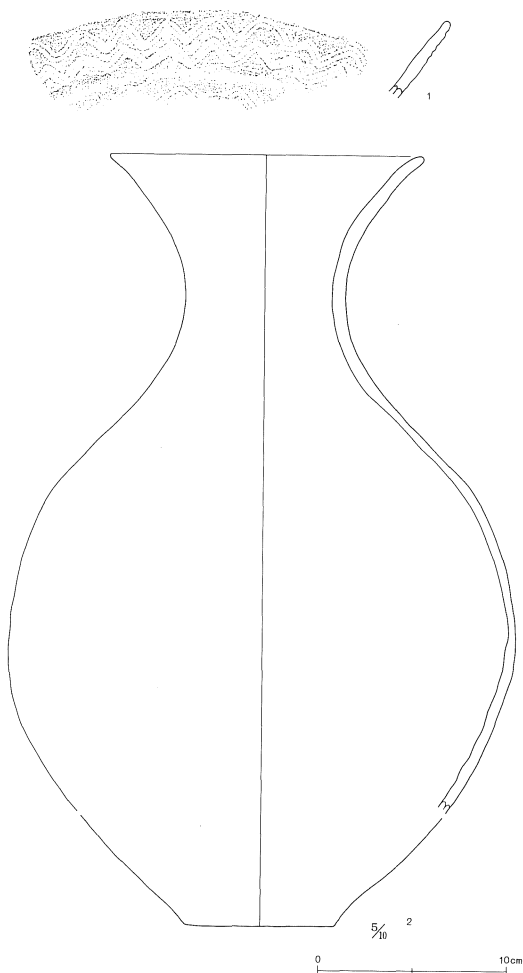
7-QGrid 他に位置する。S J 43と同様S D23、S B 9等に壊される。南北に長い長方形を呈し、竈は北辺東寄りに付設される。確認面から床面までの深さは10~15cm程あり、部分的には大がかりな貼り床が認められる。竈は煙道部を含めた周辺は、壁際に沿って床面より5 cm余りの高まりをもっている。袖の痕跡は認められず、西側では壁溝

の位置をやや内側に構築していることなどから壁溝内の水の竈内への進入を防ぐ目的の一つと考えられる。竈の左袖付近の Pit は焼土を少量伴うが、燃焼部の掘形の一部かどうかは不明。壁溝は住居の西側にみられ、壁溝内には部分的に凹凸が認められる。Pit は4基検出されたが、主柱としては位置や深

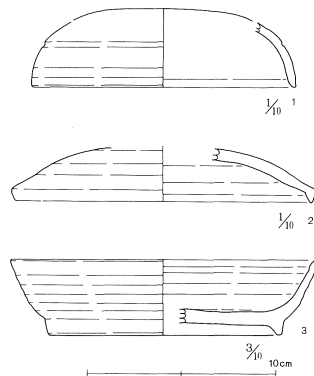
さが不自然であり、臨時的な痕跡の可能性がある。また、西側の壁溝付近の床面では2ヶ所で焼土の集中が確認された。



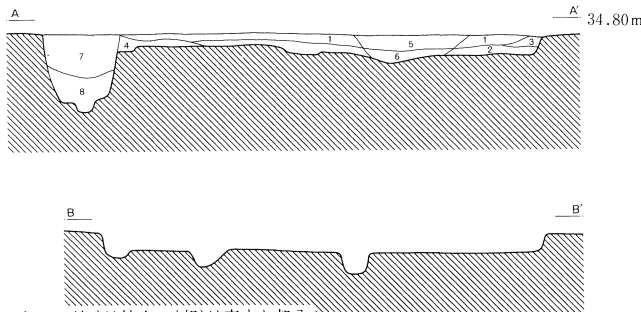
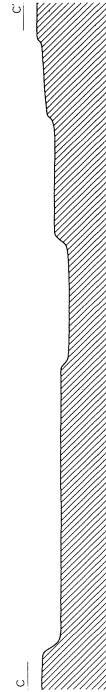
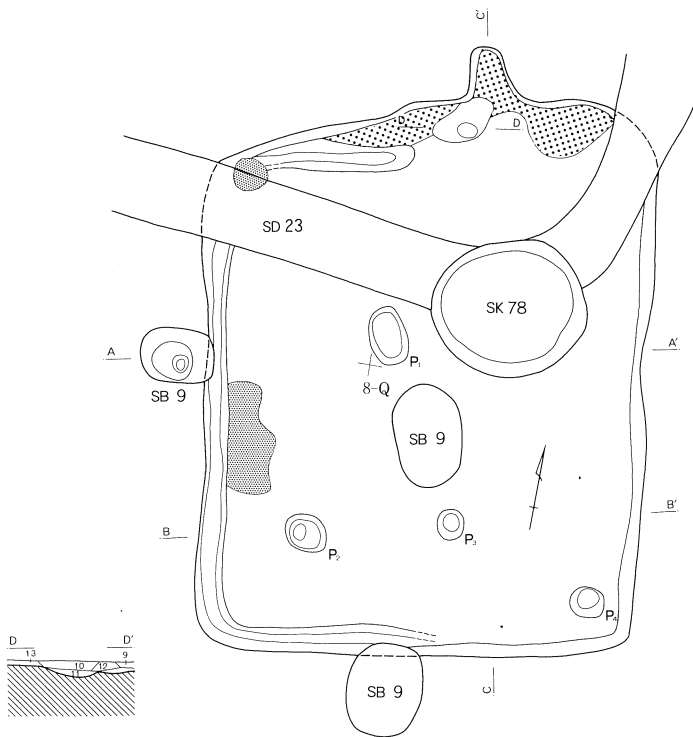
S J 44



第99図 S J 43出土遺物



第100図 S J 44出土遺物



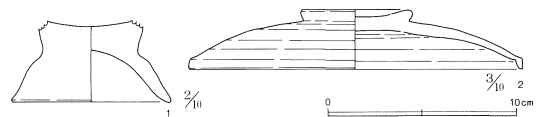
スクリーントーン(細)は焼土, (粗)は高まり部分

1. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量含む。
2. 褐色土 焼土粒・ローム粒少量含む。
3. 暗褐色土 焼土粒微量含む。
4. 赤褐色土 焼土粒・炭化物多量含む。
5. 暗褐色土 ローム粒微量含む。
6. 褐色土 ローム粒・焼土粒微量含む。
7. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒微量含む。
8. 黒褐色土 ローム粒少量含む。
9. 褐色土 焼土粒微量含む。
10. 褐色土 焼土ブロック少量含む。
11. 褐色土 ローム粒少量含む。
12. 褐色土 焼土ブロック多量含む。
13. 黄褐色土

第101図 S J 44

S J 45 (第45号住居跡・第103図)

10-L Grid 他に位置し、SD 16に西側を南北に壊される他、Pit や土壌等と重複している。確認時に床面は殆ど露出している状態であるため、SD 16と重複する部分の西側は住居の範囲が検出されなかった。床面は凹凸が目立ち、貼り床は検出されなかった。竈は北辺東寄りに付設されるが、土壌及び攪乱によって壊されており、原形をとどめていない。攪乱内には土師器の破片や焼土も検出されているが、二次的混入と考えられる。壁溝は東辺と南辺に検出され

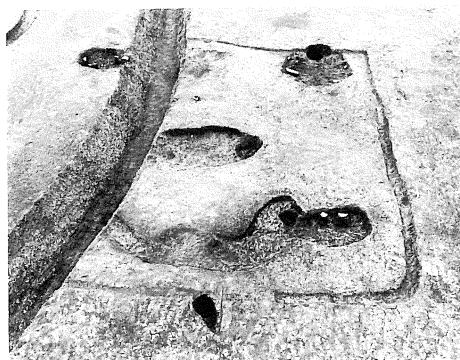


第102図 S J 45出土遺物

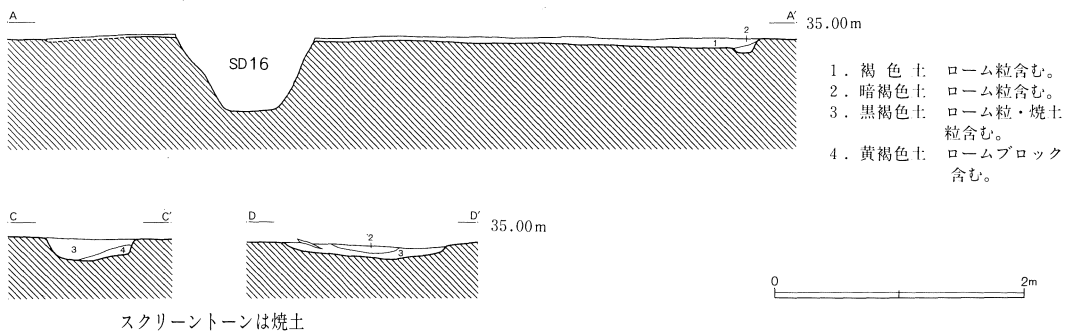
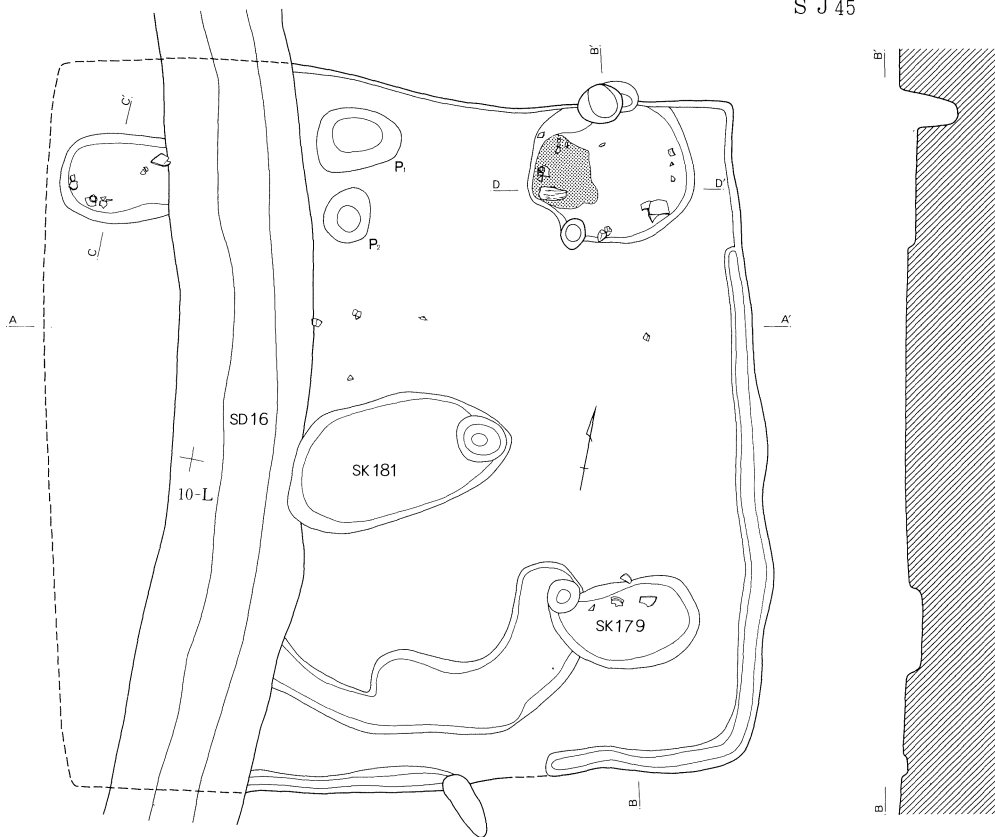
たが、床面の状況から全周しないものと考えられる。

S J 45出土遺物（第102図）

1は土師器高坏の脚部破片。内外面ともナデが施され、外面には部分的に赤彩も認められる。2は須恵器蓋で、口径13.4cm、器高3.3cm。内外面ともロクロナデ。胎土には白色針状物を含む。



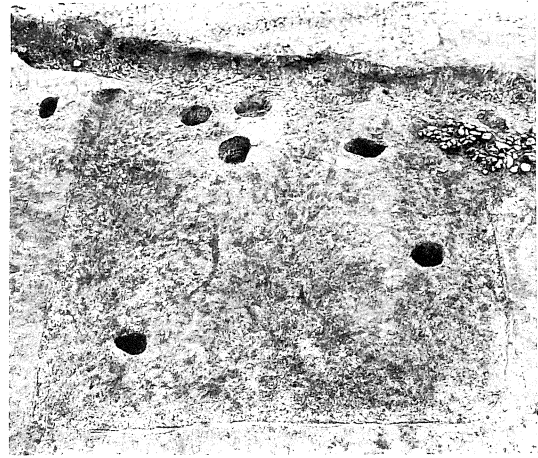
S J 45



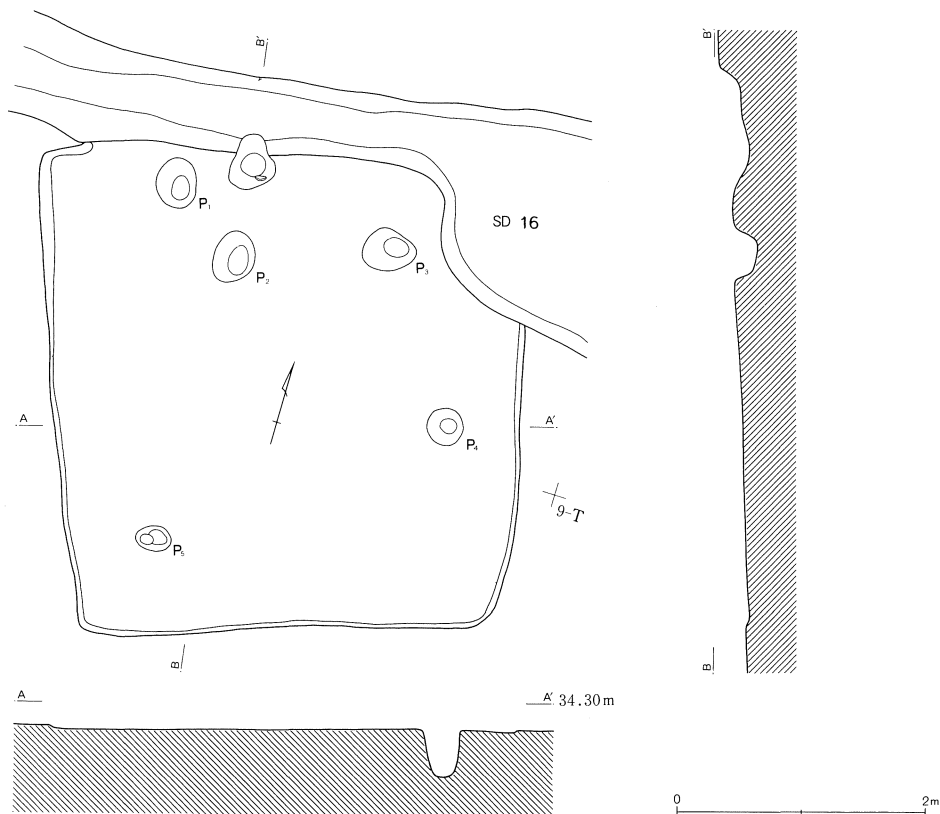
第103図 S J 45

S J 46 (第46号住居跡・第104図)

8・9-S Grid に位置し、北辺をSD16に壊される。やや南辺が短い方形を呈し、竈はSD16に大部分を壊されているが、北辺中央に付設されていることが確認された。確認面から床面までの深さは3 cm～8 cmを測り、北側から南側に向かって次第に浅くなる。床面は平坦ではあるが、貼り床は検出されなかった。また、床面には焼土や炭化物の堆積も見られなかった。既に煙道部や袖はなく、燃焼部の一部が検出された。燃焼部内には、SD16の覆土に混じって、少量の焼土、炭化物、土師器甕の小破片などが混入している。壁溝は存在せず、Pit は5基で検出された。出土遺物は竈内に混入されていた土師器甕の小破片だけである。



S J 46



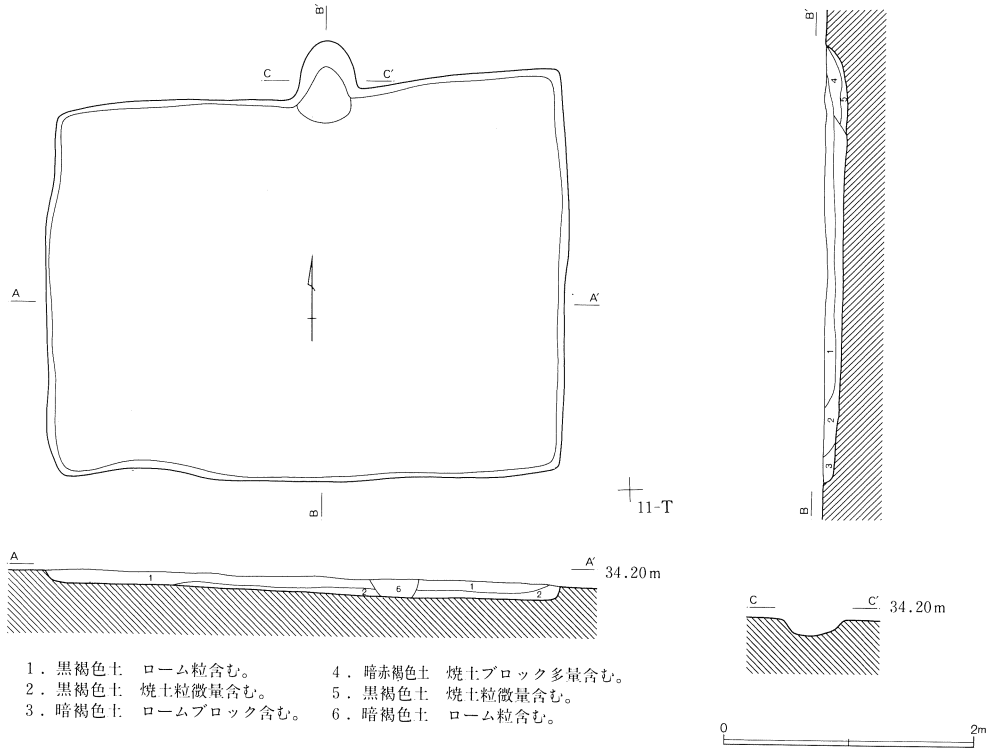
第104図 S J 46

S J 47 (第47号住居跡・第105図)

10-SGrid に位置する。方形を呈し、竈は北辺中央付近に付設される。住居は埋没した谷地形の黒褐色土中に構築され、住居覆土との境が見極めにくい。南辺については少し南に延びる可能性がある。竈は煙道部と燃焼部が残存し、僅かに焼土が検出された。壁溝や Pit は検出されなかった。

S J 47出土遺物 (第106図)

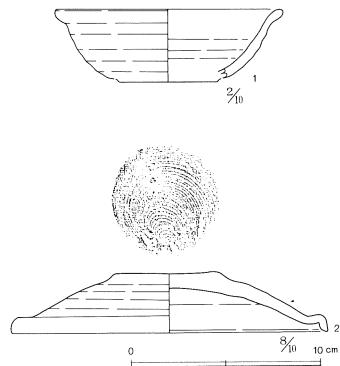
1 は須恵器杯の口縁部～体部の破片。推定口径12.2cm。2 は須恵器蓋で、口径17cm、器高3.1cm。ともに胎土には砂粒、白色針状物を含む。



第105図 S J 47



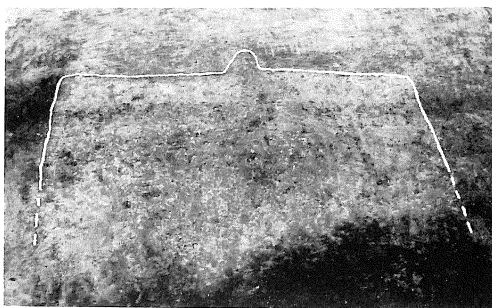
S J 47



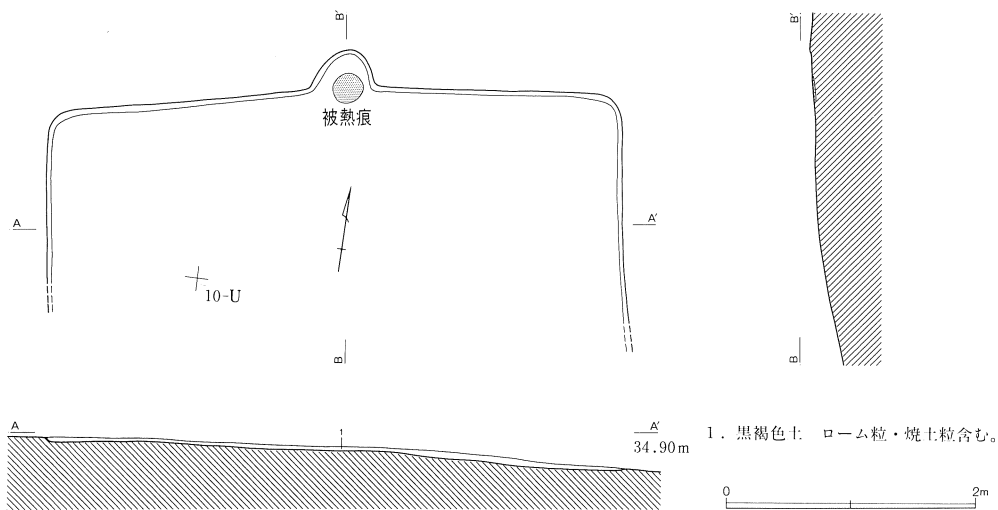
第106図 S J 47出土遺物

S J 48 (第48号住居跡・第106図)

9-UGrid 他に位置し、S J 47と同様台地斜面部から埋没した黒褐色土中の谷地形に構築されるため、住居の南半分の範囲を検出することができなかった。方形を呈すると考えられ、竈は北辺中央に付設される。袖はなく、僅かに焼土と炭化物を残す煙道部と燃焼部の一部が検出された。確認面から床面までの深さは、5 cm程で谷方向及び東方向にやや傾斜する。床面はやや凹凸が顕著で、貼り床、Pit、壁溝等は検出されなかった。また、竈部分を除いては焼土や炭化物、遺物についても検出することはできなかった。



S J 48



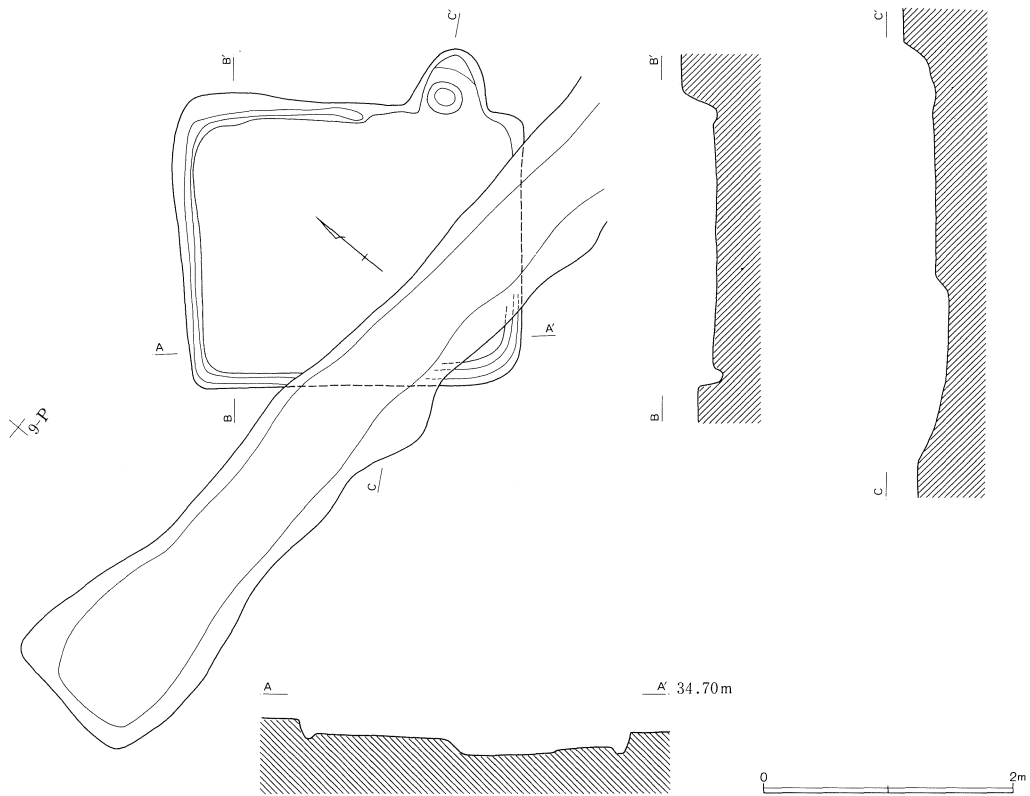
第107図 S J 48

S J 49 (第49号住居跡・第108・109図)

9-DGrid に位置し、南隅付近をS D 19に東西方向に壊される。一辺が2.5m余りの方形を呈し、竈は北東部に付設される。確認面から床面までの深さは、20~25cmを測り、北側が深く、南側がやや浅い。床面は所々に凹凸が目だが、中心部付近において貼り床が検出された。貼り床はロームブロックと黒褐色土を用いて構築されている。覆土は黒褐色色~暗褐色を呈し、大型のロームブロック、ローム粒子、焼土粒子などが含まれる。S D

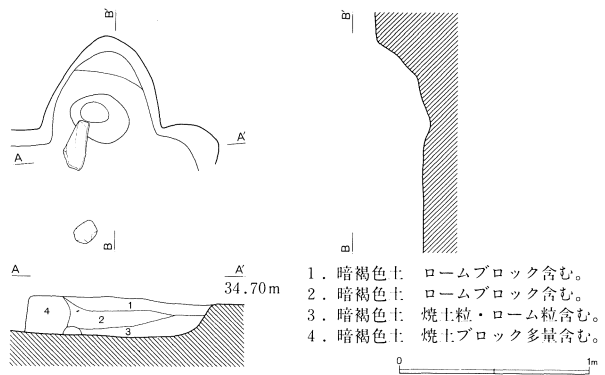


S J 49



第108図 S J 49

19と重複する他は特に攪乱等は認められないが、出土遺物はなかった。竈は住居の大きさに対して大型で、煙道部の立ち上がりは急である。燃烧部の掘り込みは浅く、底面に薄く焼土が堆積していた。袖は既に欠失しているが、周辺には灰白色の粘土ブロックが検出されており、構築材として使用していたものと考えられる。また、壁溝はS D19と重複する部分を除いては全周す



第109図 S J 49竈

1. 暗褐色土：ロームブロック含む。
2. 暗褐色土：ロームブロック含む。
3. 暗褐色土：焼土粒・ローム粒含む。
4. 暗褐色土：焼土ブロック多量含む。

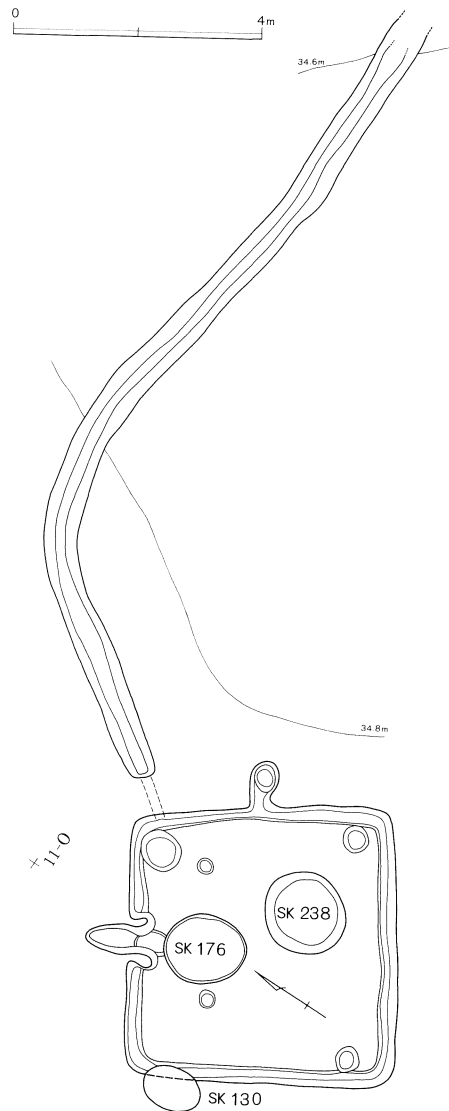
るが、竈の手前50cm程のところまで止まっている。これは竈が隅に構築され、大形の形状をもったため、袖の部分が内側にやや長く入り込んだものになったことから、採られた方法と見られる。他に Pitや貯蔵穴等は検出されなかった。

S J 50 (第50号住居跡・第110・111・113図)

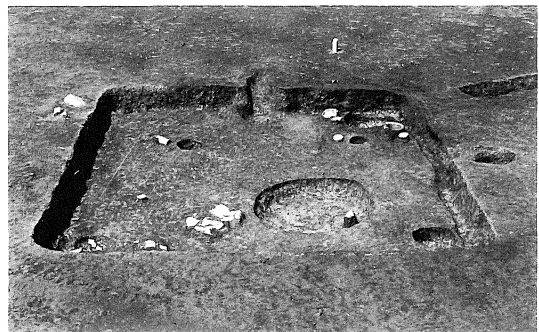
11-N・OGrid に位置し、竈は北辺中央に付設される。一辺が4.5×5mとやや小形ではあるが、S J 41等と同様の排水溝をもつ住居跡である。住居はS K 176・238に中央部をS K 130に北東部の壁際を壊され、特にS K 176は燃烧部の一部と重複し、S K 176の覆土中には焼土やロームブロック等の混入が認められる。確認面から床面までの深さは、約30cmを測り、覆土の上層は黒褐色、下層は暗褐色を基本とする。覆土中には焼土粒子、ロームブロック、白色粘土粒子等が北側の竈周辺に集中する。竈は約80cmの煙道部をもち、最深部である燃烧部の底面からは、緩やかに立ち上がる。焼土は燃烧部底面に、炭化物は燃烧部から煙道部にかけての傾斜面に比較的多く堆積している。袖は半分近くが崩壊しているが、下部は燃烧部まで及んでおり、灰白色粘土もこの付近で多く検出された。壁溝は全周し、両袖の外側で止まる。貯蔵穴は北隅に付設され、床面からの深さは約15cmである。Pit は4基検出され、貯蔵穴も含めて覆土中には焼土粒子、ローム粒子等が混入する。床面は部分的に貼り床が認められる。東辺中央から竈状にのびた部分は、覆土中に焼土を含むが、攪乱を受けている部分があり、覆土の状態も住居のものと比較すると、柔らかいため、この住居には伴わない可能性が高い。排水溝は、北隅付近より北方向にのび、次第に谷方向に向きを変えて排水が流れ込むように構築されている。確認できた溝の長さは約20mで、谷地形に向かうに従って、幅広になる。トンネルになる部分は、約60cmで、露出している溝部分の傾斜が緩やかなのに対して、排水をいち早く排出するために急傾斜をつくっている。

S J 50出土遺物 (第112図)

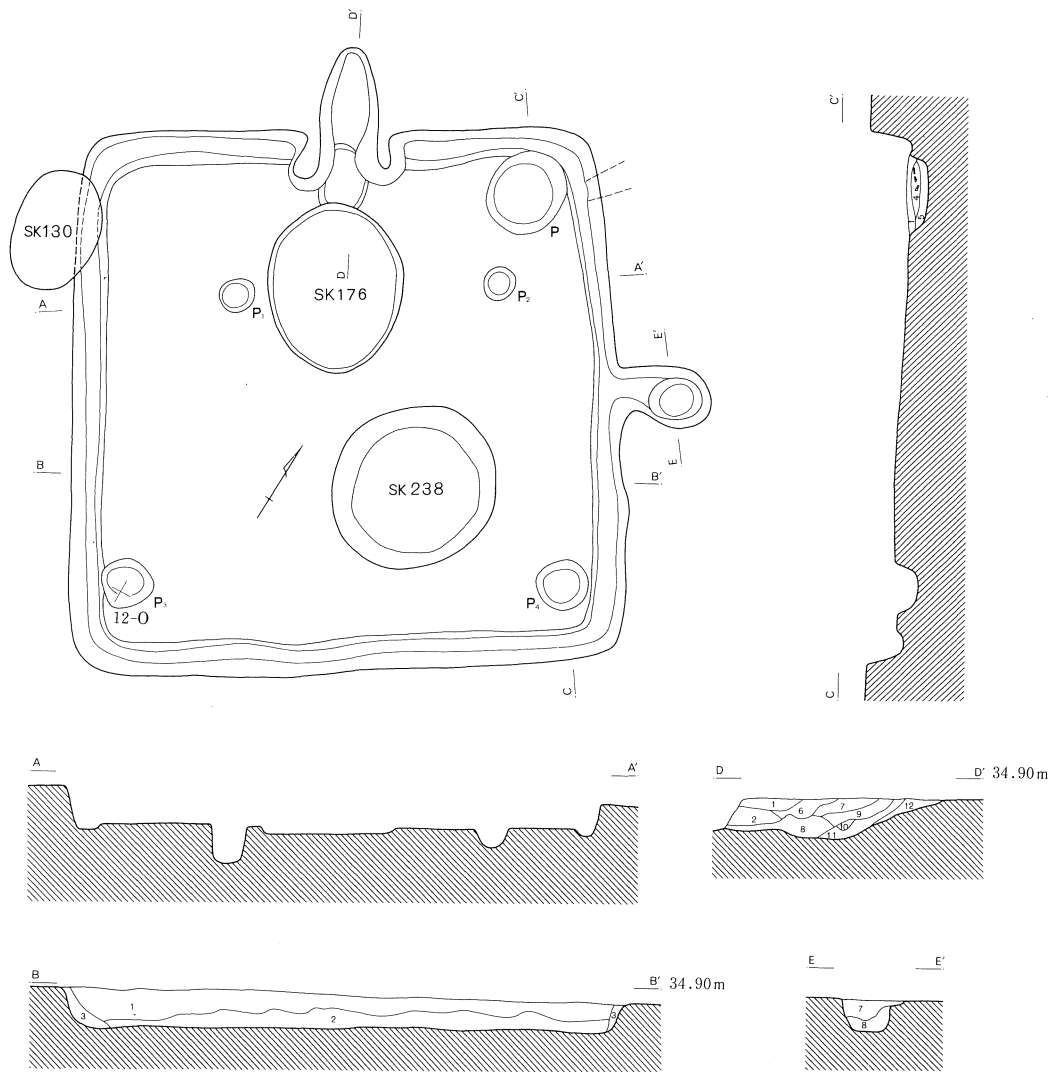
1～9は土師器坏で、いずれも内面から



第110図 S J 50全体図



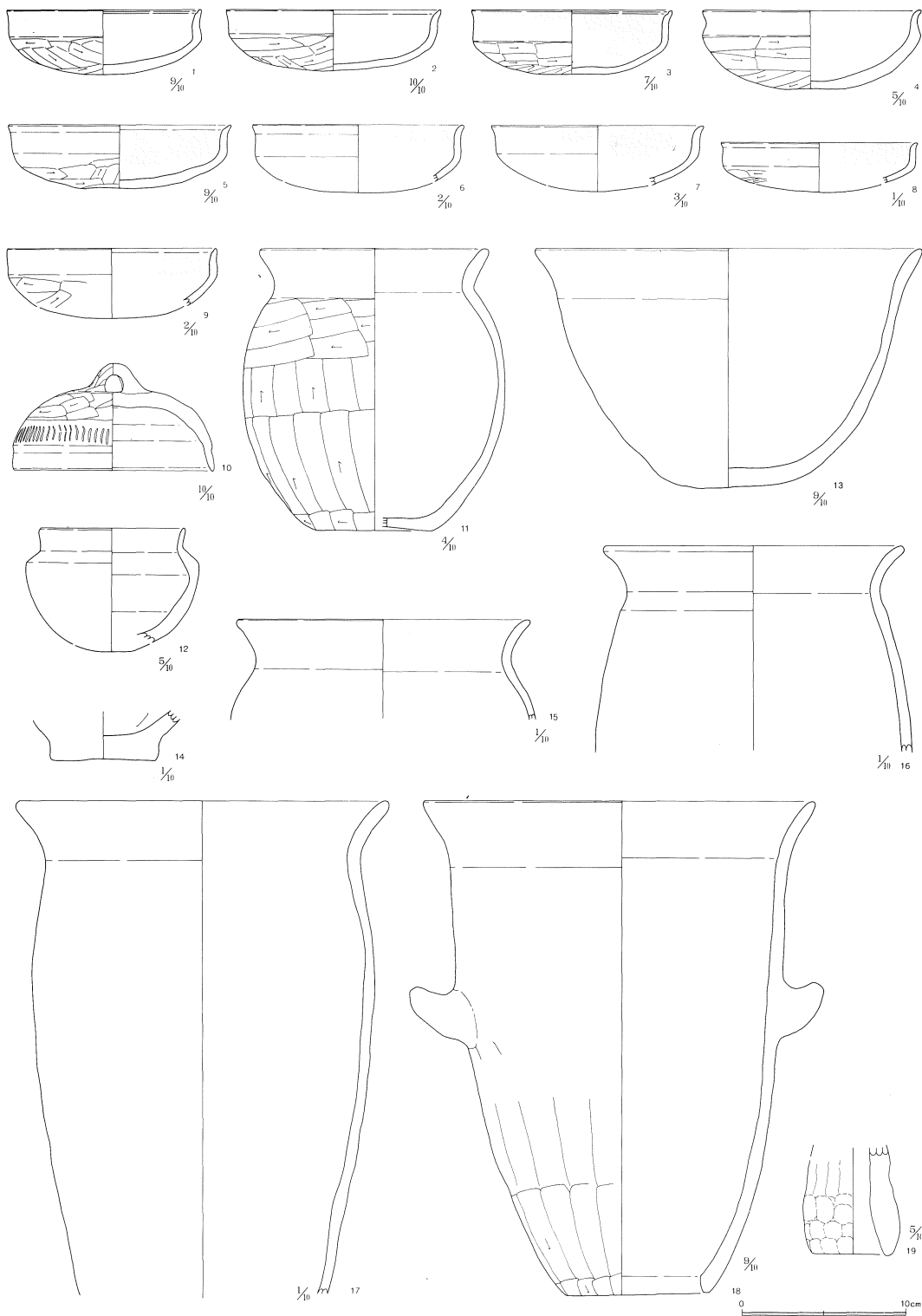
S J 50



- | | |
|-----------------------|--------------------------|
| 1. 黒褐色土 焼土粒・ローム粒少量含む。 | 7. 暗褐色土 焼土ブロック多量含む。 |
| 2. 黒褐色土 ロームブロック多量含む。 | 8. 黒褐色土 ローム粒・炭化粒含む。 |
| 3. 暗褐色土 ロームブロック多量含む。 | 9. 暗褐色土 砂粒・ローム粒・焼土粒多量含む。 |
| 4. 暗褐色土 ローム粒・炭化材含む。 | 10. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量含む。 |
| 5. 暗褐色土 ローム粒含む。 | 11. 暗褐色土 焼土粒多量含む。 |
| 6. 暗褐色土 炭化ブロック・砂粒含む。 | 12. 暗褐色土 ロームブロック多量含む。 |

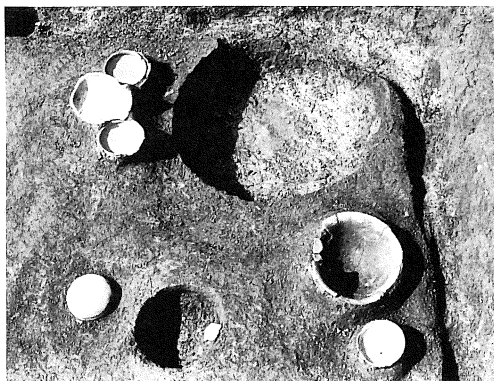
第111図 S J 50

口縁部外面にかけては、横方向及び斜方向のナデの後、赤彩が施される。体部から底部はヘラケズリ。口径は1・3・8が12~12.2cm、他は13~13.5cm、器高は4は5cm、8は3cm、他は3.8~4.1cm。胎土には砂粒、小礫を含み、色調は赤彩が明瞭に残るものは赤褐色~淡褐色、残りの状態がやや不良のものは淡赤褐色~淡褐色。10は須恵器小形壺の破片で、胴部下半から底部を欠く。口縁部はやや外傾し、肉薄である。これに対して胴部は肉厚で、粘土の接合部分を明瞭に残す。胎土には砂粒及び白色針状物を含む。色調は淡青灰色。11は土師器小形甕で、底部の一部を欠く。口径は14

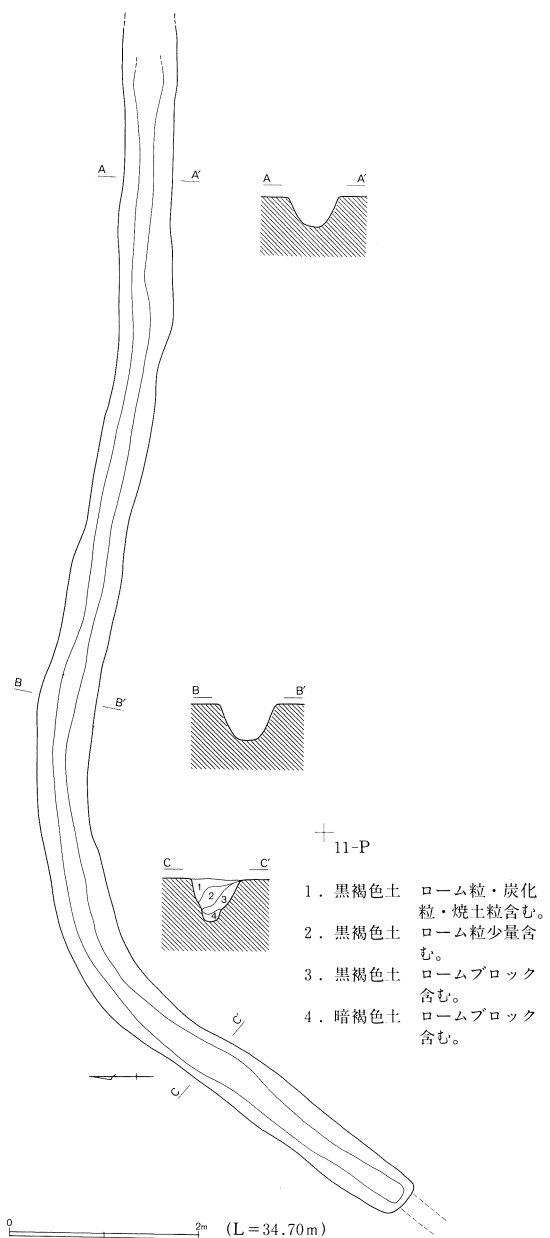


第112图 S J 50出土遺物

cm、器高は17.2cmを測る。器面にはやや風化した部分が多く見られる。口縁部と底部周辺がやや肉厚で、底部は上底となる。口縁部は横ナデ、胴部内面は横方向から斜方向のナデ、胴部外面は上半及び下端は横方向のヘラケズリ、下半は縦方向のヘラケズリ。胎土には砂粒、白色粒子、黒色粒子を含む。色調は淡橙褐色。12は土師器鉢で、器面全体が風化しており、調整痕は不明瞭である。口径は23.8cm、器高は14.5cmを測る。胎土には粗い砂粒及び小礫を多量含む。色調は淡赤褐色～橙褐色。13は小形壺あるいは小形甕の底部周辺の破片。風化が著しく、調整痕は不明瞭であるが、底部周辺は横方向のヘラケズリ、底部には木葉痕を残す。14は小形壺の底部破片。内面は横方向のヘラナデ。13・14は胎土に粗い砂粒、黒色粒子を含み、色調は淡褐色を呈する。15～17は土師器甕の破片である。口径は、15は17.8cm、16は18.4cm、17は22.6cmを測る。いずれも器面の風化が著しく、調整痕は不明瞭である。胎土には砂粒、白色粒子、小礫などを含み、色調は淡赤褐色



S J 50 遺物出土状況



第113図 S J 50排水溝

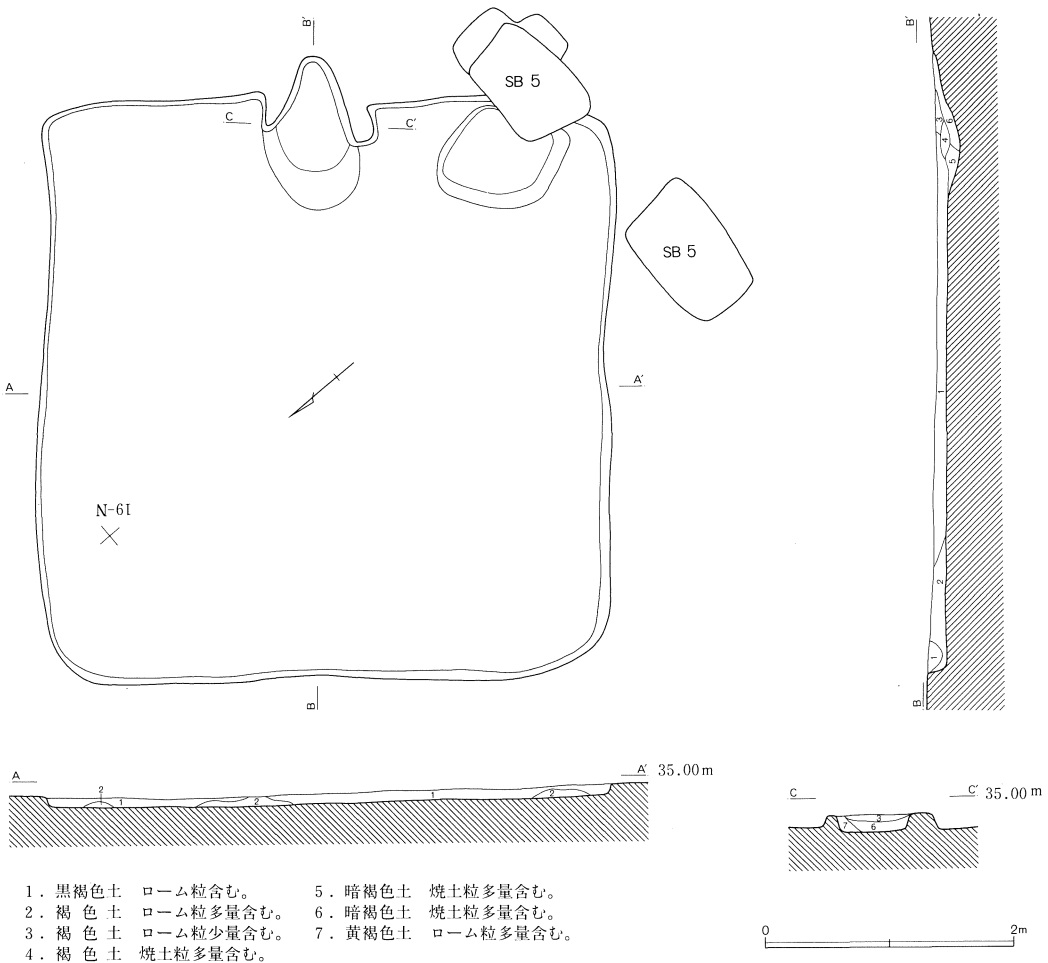
～淡橙褐色を呈する。18は土師器甕で、口径は22.5cm、底径は8cm、器高は27.8cmを測る。胴部は基本的に縦方向のヘラケズリの後、口縁部や内面と同様横方向のナデが施される。底部の円孔の部分は丁寧なヘラケズリを施す。胎土には細かい砂粒、黒色粒子を含み、色調は暗褐色～黒褐色を呈する。図示した遺物はいずれも床面から出土したもので、完形品及び遺存状態の良いものは貯蔵穴周辺に集中している。

S J 51 (第51号住居跡・第114図)

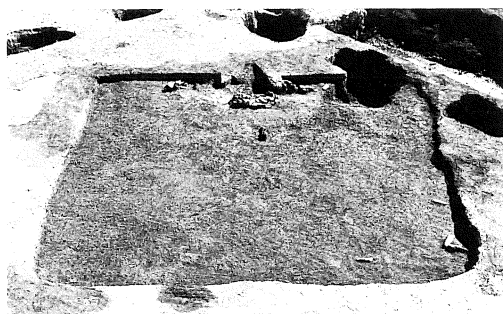
19-NGrid 他に位置し、SB 5 と南隅付近を重複する。一辺約 5 m の正方形を呈し、竈は南東辺中央に付設される。確認面から床面までの深さは、約 10 cm を測る。覆土は黒褐色の単層で、ロームブロック、ローム粒子が含まれる。床面は平坦で、貼り床、Pit 及び壁溝については検出されなかった。竈は約 60 cm の煙道部をもつが、僅かに焼土を残す燃焼部の掘り込みが浅いために煙道部との境目が不明瞭である。袖は大部分が残っていないが、特に粘土やロームブロックなどを用いて構築した形跡は認められない。貯蔵穴は竈の南寄りに位置し、SB 4-P 6 に一部を壊される。深さは 10 cm 余りで、不整形な形を呈する。覆土は住居内と同様の黒褐色系で、焼土粒子が少量含まれる。

S J 51 出土遺物 (第115図)

1・2 は土師器坏で、ともに内面から口縁部にかけては横ナデの後、赤彩される。体部から底部はヘラケズリ。1 は口径 13.2 cm、器高 3.9 cm。2 は口径 13.4 cm、器高 4.5 cm。3 は土師器小形壺で、



第114図 S J 51

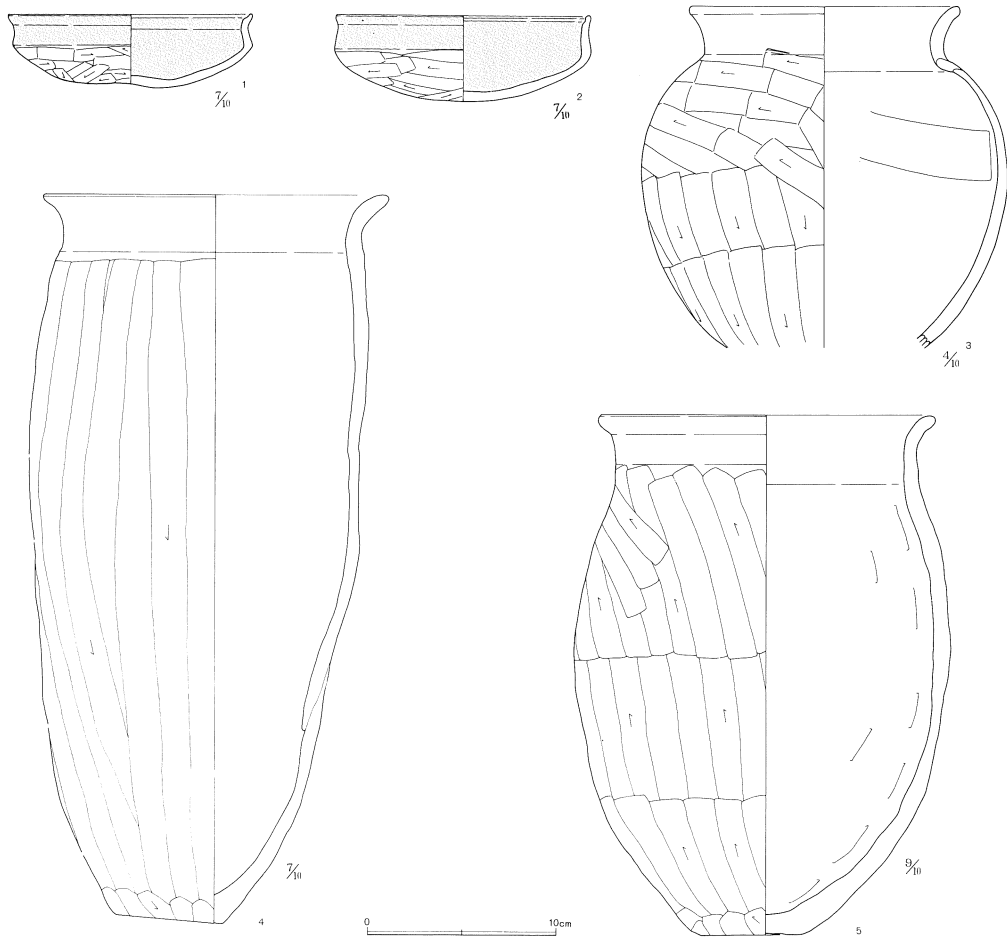


S J 51



S J 51 竈

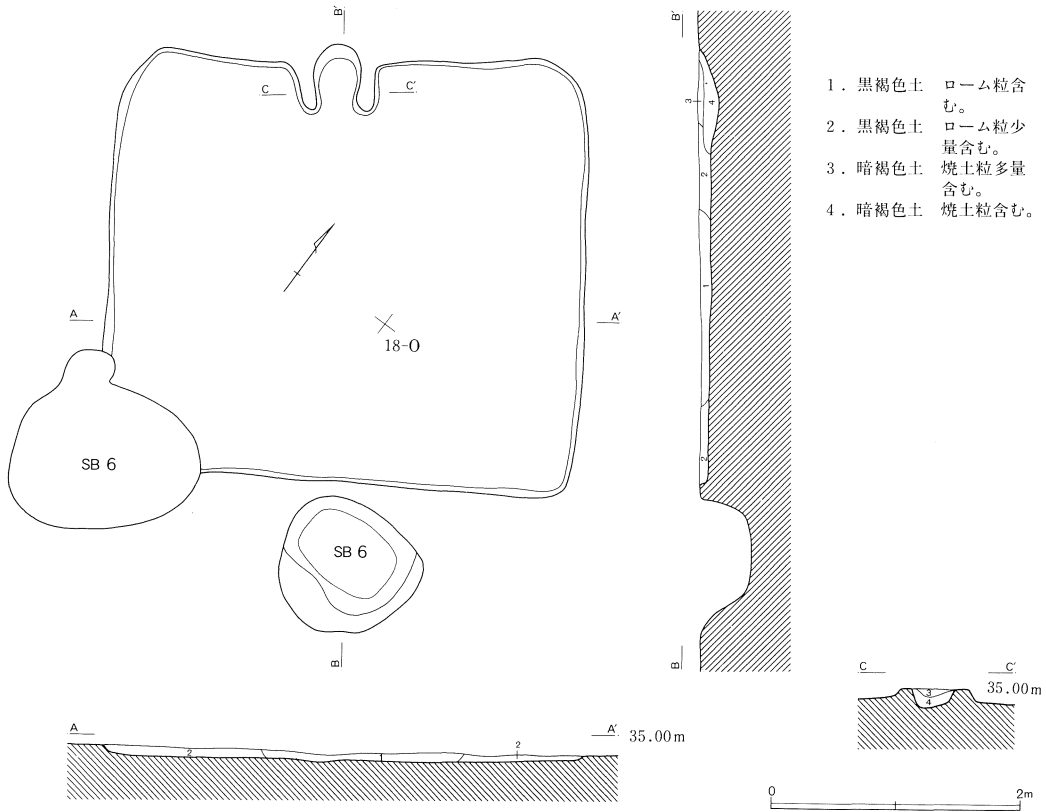
底部付近を欠く。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部は外面が縦～斜方向のヘラケズリ。内面は横方向のヘラナデ。推定口径14.4cm。4・5は土師器甕で、竈燃焼部周辺より出土している。4は口径18.4cm、器高38.4cm、底径5.8cm。5は口径18cm、器高27.2cm、底径5.6cm。ともに口縁部は横ナデ、胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデ（4は不明）。輪積み痕は明瞭に残る。胎土には砂粒、白色粒子、小礫を含む。



第115図 S J 51出土遺物

S J 52 (第52号住居跡・第116図)

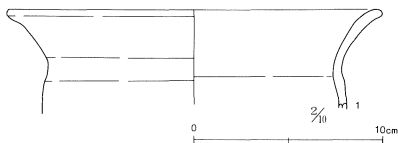
18-O Grid に位置し、S B 6 及び風倒木痕と重複する。一辺 4 m 余りの方形を呈し、竈は北西
 辺中央に付設される。竈は約40cmの煙道部を持つが、焚き口部や燃焼部は不明瞭で、焼土の堆積も
 比較的少ない。袖は残存状態が良く、ロームブロック、黒褐色土の互層で構築されている。確認面
 から床面までの深さは、約10cmである。覆土は黒褐色の単層で、ロームブロックが少量含まれる。
 床面は平坦で、貼り床、Pit、壁溝などは検出されなかった。遺物は少なく、図示できたのは竈の
 袖の芯に使用されていた土師器甕のみである。



第116図 S J 52

S J 52出土遺物 (第117図)

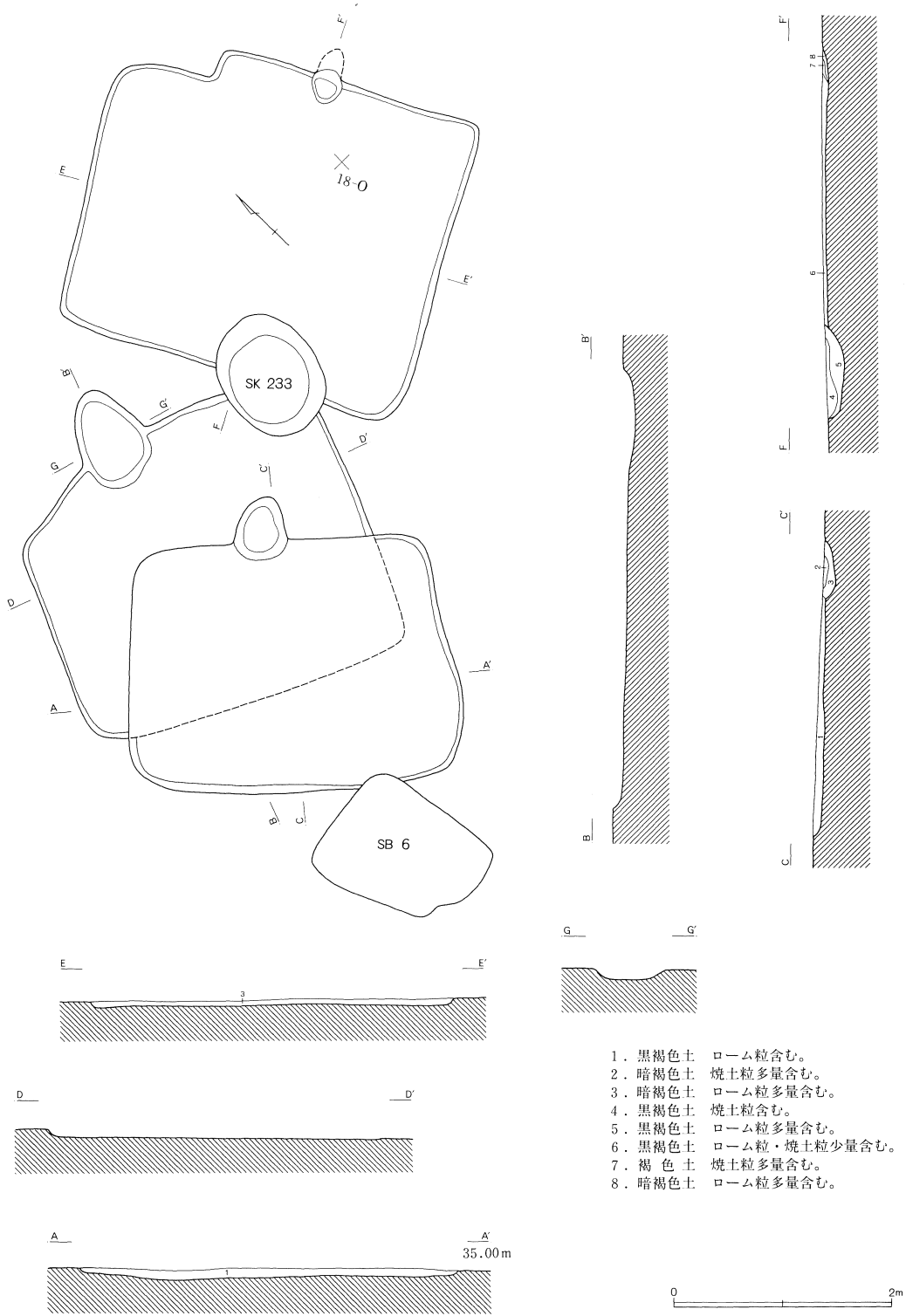
1 は土師器甕の口縁部破片。推定口径は20cm、
 内外面とも横ナデ。胎土には砂粒を含む。



第117図 S J 52出土遺物



S J 52



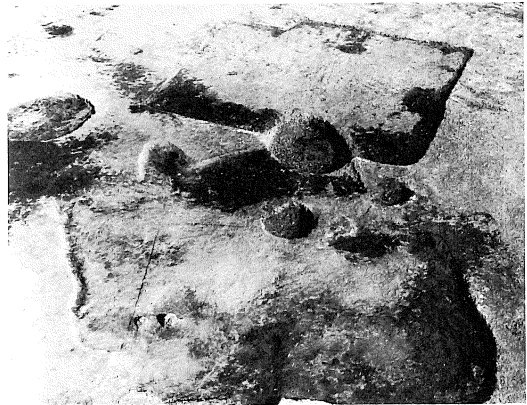
1. 黒褐色土 ローム粒含む。
2. 暗褐色土 焼土粒多量含む。
3. 暗褐色土 ローム粒多量含む。
4. 黒褐色土 焼土粒含む。
5. 黒褐色土 ローム粒多量含む。
6. 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量含む。
7. 褐色土 焼土粒多量含む。
8. 暗褐色土 ローム粒多量含む。

第118図 S J 53・54・55 (下から)

17・18-PGrid に位置し、各々重複している。いずれも一辺3.5m余りの小形の住居で、竈は北辺または北東辺中央に付設される。袖はなく、僅かに焼土の堆積を残す燃焼部と煙道部が確認できる程度である。Pit、貯蔵穴、壁溝などは検出されなかった。床面は平坦であるが、所々に黒褐色土が混じっており、一部は貼り床されている可能性がある。

S J 53出土遺物 (第119図)

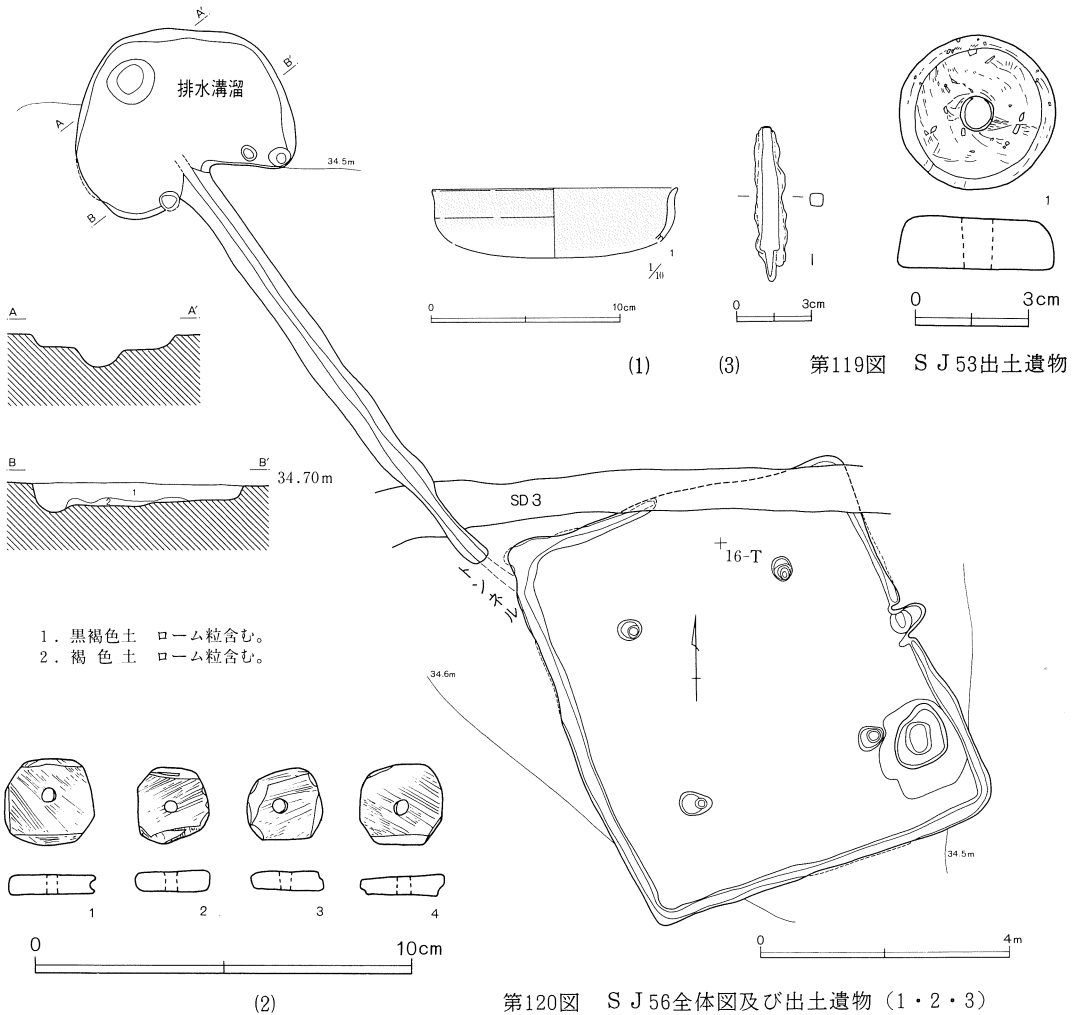
滑石製紡錘車で、内外面とも良く磨かれている。円孔は上端ほど広い。



S J 53・54・55

S J 56 (第56号住居跡・第120・121図)

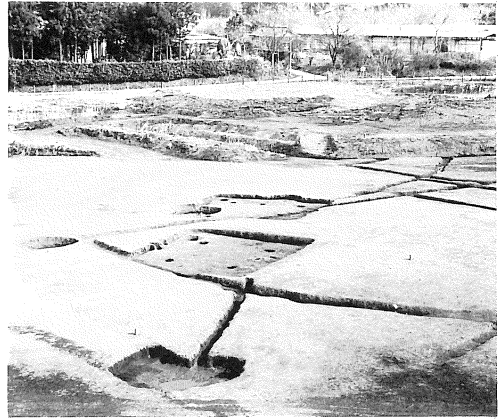
16-S・TGrid に位置し、北辺をSD 3に壊される。一辺5×6m程の方形を呈し、竈は長辺の北東辺中央に付設される。煙道部



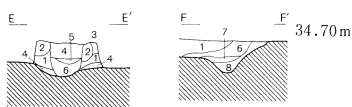
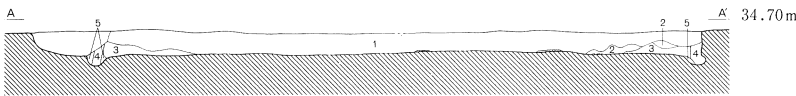
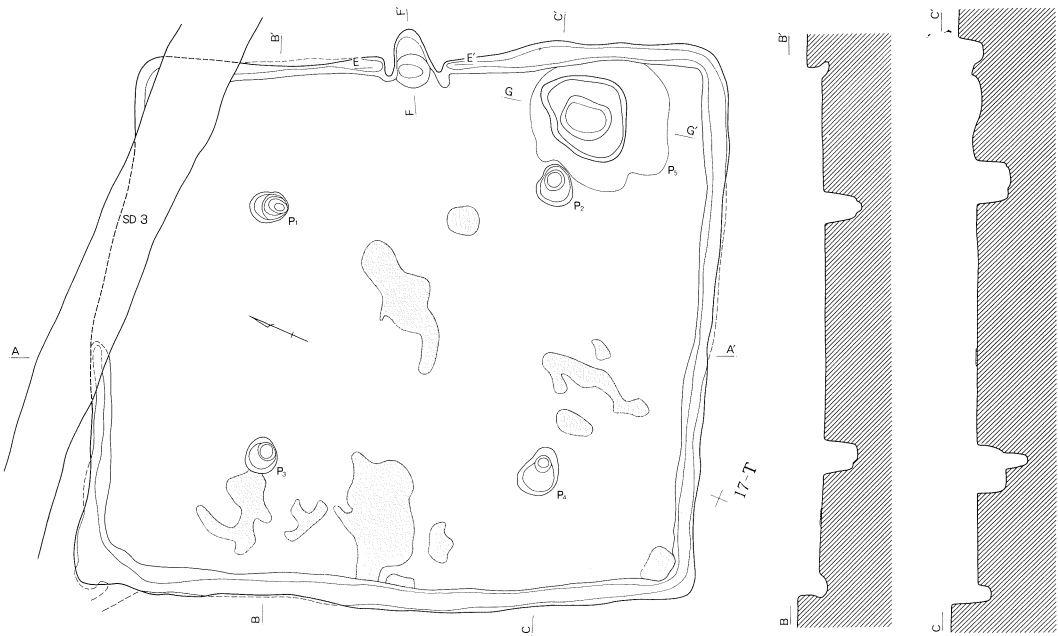
は短く、掘り込みの深い燃焼部からは急傾斜して立ち上がる。袖は構築時の粘土が明瞭に残存し、断面観察から壁溝を全周掘り込んだ後、構築していることが確認された。また、焼土の遺存状態も良好で、天井部の崩落も確認できた。床面は平坦で、部分的に貼り床も検出された。Pit は規則的



S J 56 白玉出土状況

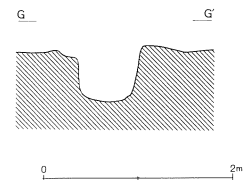


S J 56 (手前)



スクリーントーンは焼土

1. 黒褐色土 焼土粒・ローム粒少量含む。
2. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒多量含む。
3. 黒褐色土 ローム粒含む。
4. 暗褐色土 焼土粒少量含む。
5. 赤褐色土 焼土粒多量含む。
6. 暗褐色土 焼土粒多量含む。
7. 赤褐色土 焼土ブロック多量含む。
8. 暗褐色土 焼土粒多量含む。



第121図 S J 56

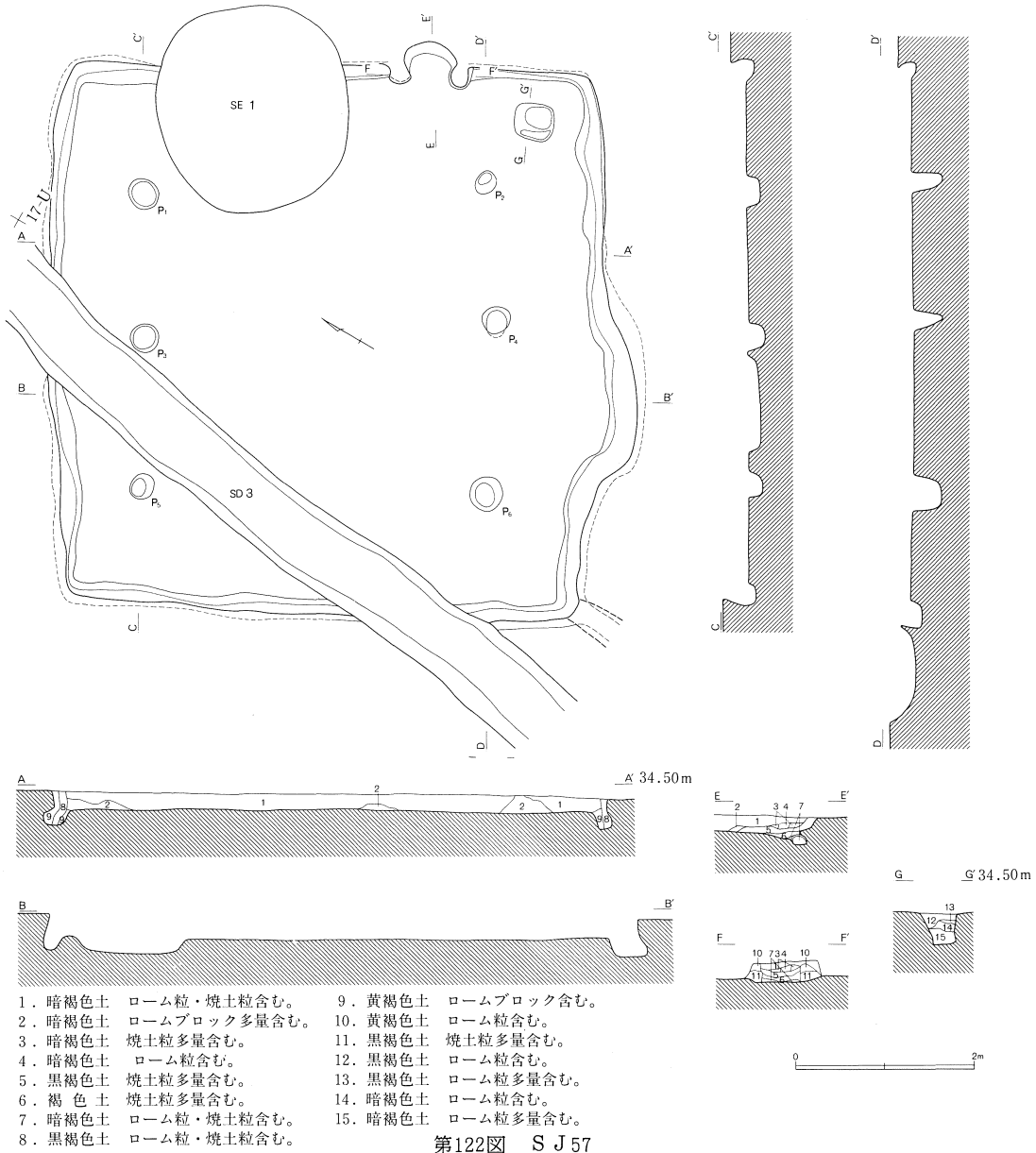
に4基検出された。貯蔵穴は大形で、南隅に二段の掘り込みをもつ。壁溝は全周し、他の排水溝同様外側にえぐりこまれている。排水溝は北西隅から谷側に掘られ、約60cmのトンネル部分（確認時）、約8mの溝部分及び土壇状の溜まり部分が検出された。

S J 56出土遺物（第120図）

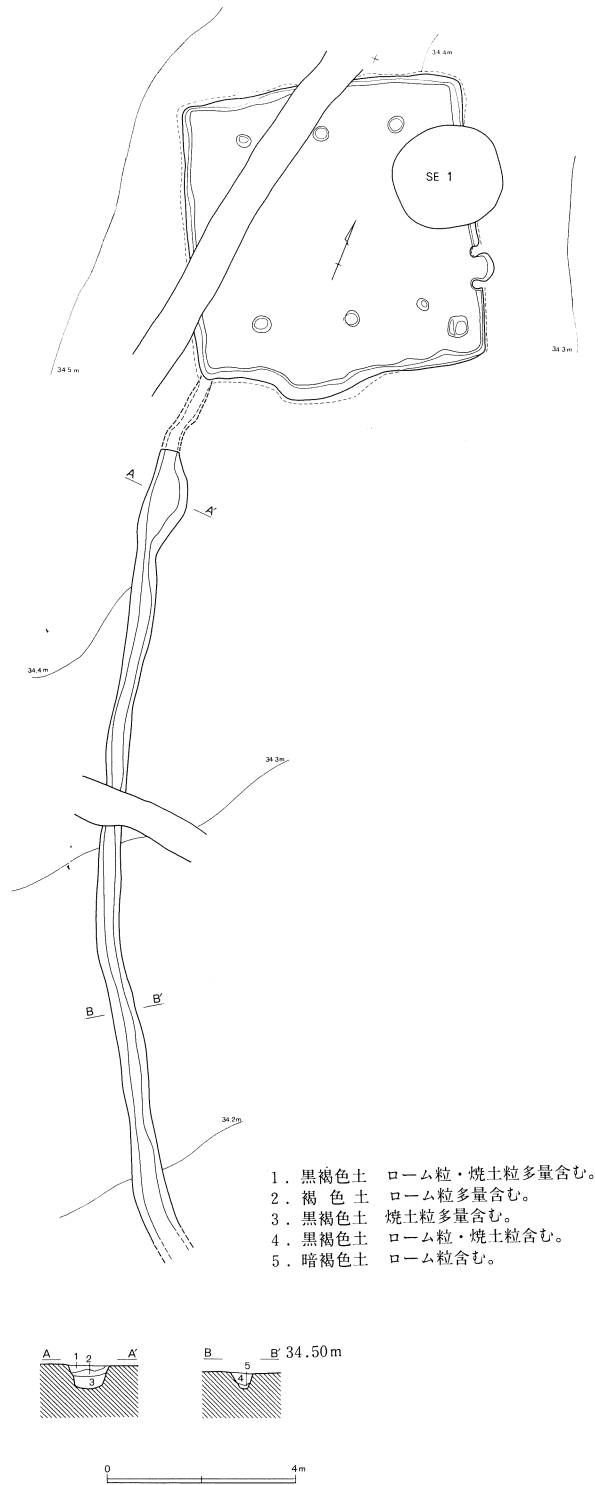
1は土師器坏の破片。推定口径13cm。赤彩は風化か。2は鉄鏝の破片で、先端部欠失。錆が著しい。3～6は滑石製の臼玉。いずれも片面に未調整部分を残す。遺物はすべて床面出土。

S J 57（第57号住居跡・第122～124図）

17-T・U Grid に位置し、北西部をS D 3に、排水溝の中央部をS D 4に、北東辺をS E 1に



壊される。一辺約6mの方形を呈し、竈は北東辺中央やや南寄りに付設され、南辺西寄りに方形の張り出し部をもつ。確認面から床面までの深さは、約20cmで、平坦な床面は貼り床が顕著に認められる。覆土は黒褐色を呈し、焼土粒子が際だって目立つ。壁溝は張り出し部を含めて全周し、溝部分は外側に大きくえぐり込まれる。壁溝内の断面には壁面に沿って確認面付近から垂直に幅約5cmの矢板状の痕跡が認められる。この痕跡はあたかも板材が打ち込まれたようになっており、壁材の痕跡の可能性がある。覆土も住居の基本層である黒褐色土よりも黒色土に近く、床面側には壁材の支えに埋め戻したとみられるロームブロックを多量に含む暗褐色土が確認できる。また、壁際には炭化物の量も多い。竈は短い煙道部と浅い掘り込みの燃焼部を持つ。袖の遺存状態が不良のため、袖の長さは確認できなかったが、袖には芯に土師器甕の破片が埋設され、灰色粘土、ロームブロック、黒色土などで構築されている。燃焼部には最大厚さ5cmにわたって焼土が堆積しているが、最下部にはロームブロック、焼土粒子を含む暗褐色の堆積土



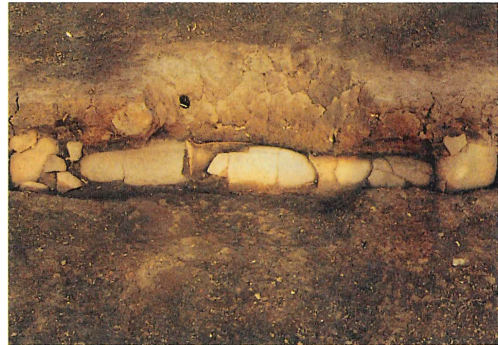
第123図 S J 57全体図



S J 57



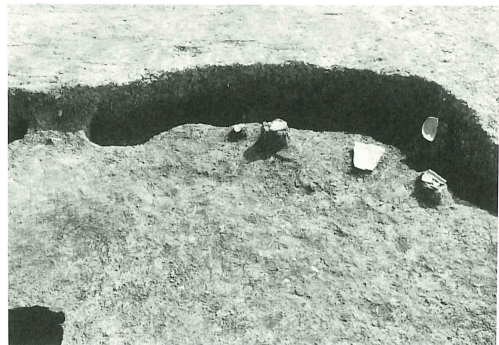
S J 57 竈



S J 57 竈

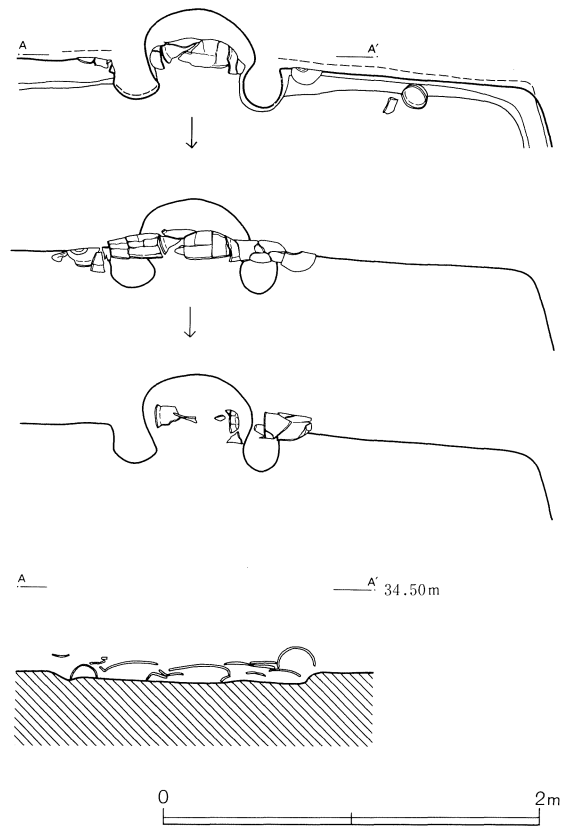


S J 57 白玉出土状況



S J 57 張り出し部

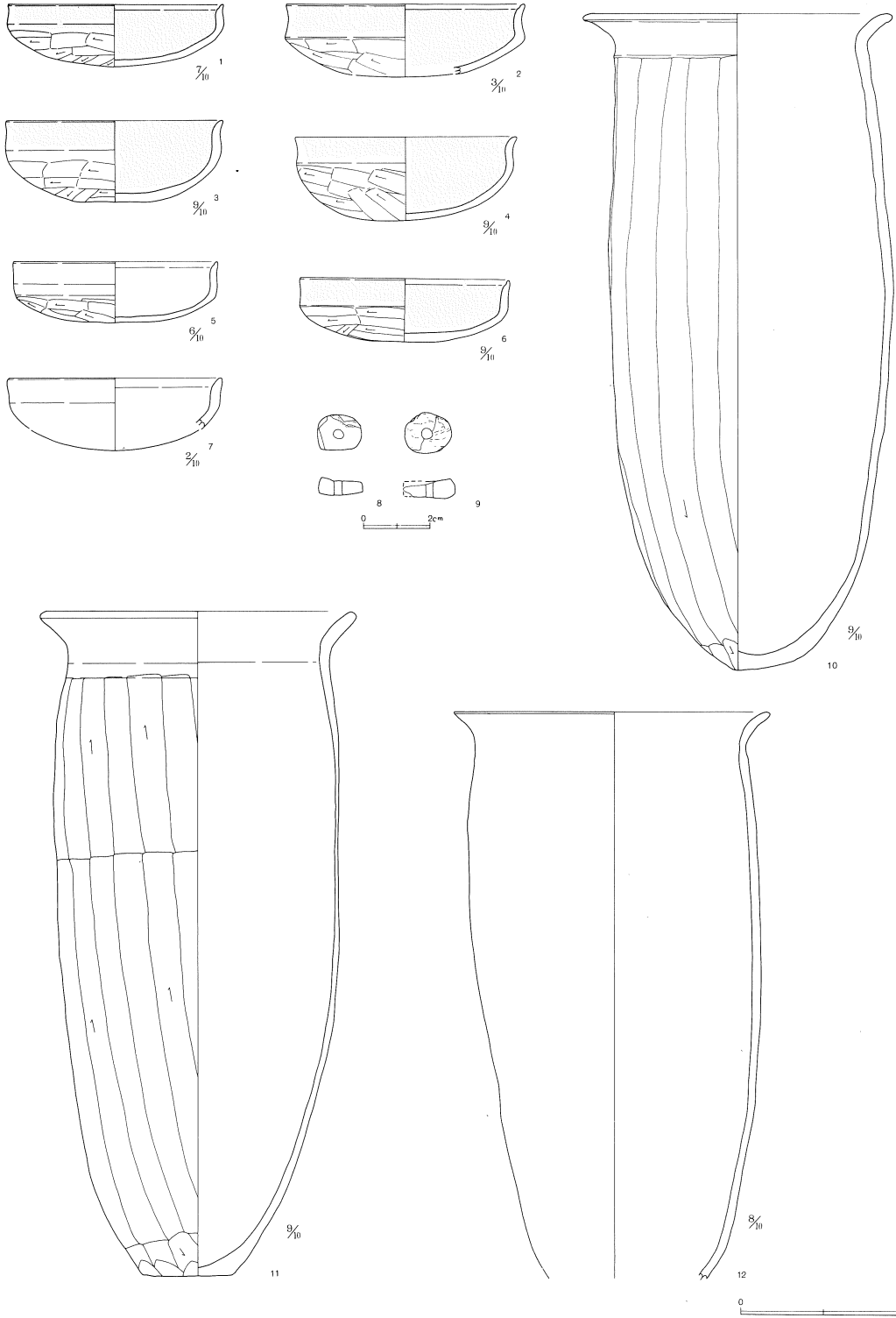
が認められる。これは竈には水の進入を防ぐために、約1.2mにわたって、袖の芯同様に土師器甕の破片を横にして埋設しているが、それにも拘らず水の進入あるいは湧き水などがあり、絶えず比較的湿った状態を招き易い状況にあったと考えられる。竈内は第124図に示したように三段階にわたって入念な土器の埋設を行っている。土師器甕の埋設している状況は、壁溝の底面より約10cmも高い位置にあり、床面と同位置になる。このため、燃烧部には多くの住居でみられるような掘り込みはみられない。主柱とみられる Pit は6基検出され、張り出し部に近い間口がやや広く採られており、出入口の可能性が指摘できる。貯蔵穴は竈右寄りに付設され、覆土上層中に焼土粒子や炭化粒子をとまなう。排水溝は南隅から谷部に向かって約20m掘られている。トンネル部分は約2mあり、S J 41程ではないが緩傾斜がつけられている。また、トンネル部分の南側はやや広がりをもっており、覆土中より住居内出土土器と同時期の土師器甕の破片が出土している。



第124図 S J 57竈内土器埋設状況

S J 57出土遺物 (第125図)

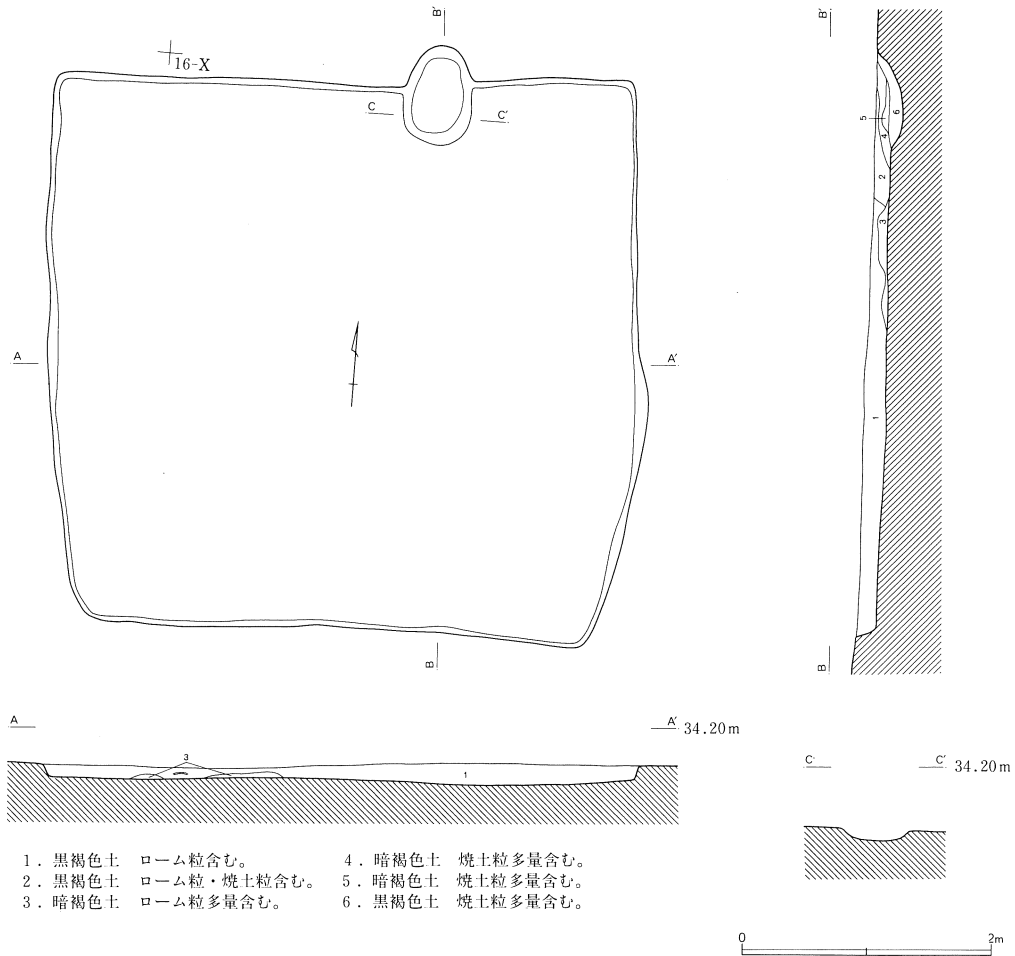
1～7は土師器坏で、いずれも床面から出土したものである。7を除き内面から口縁部外面にかけて赤彩される。体部～底部はヘラケズリ、内面及び口縁部は横ナデ。口径は1・3・4・6・7が13～13.4cm、2は14.5cm、5は12.3cm、器高は1・2・5～7は3.7～4.3cm、2・3は5cmを測る。胎土には砂粒、小礫を含む。8・9は滑石製の小形の白玉で、円孔は巧みに調整されるが、表面には未調整部分を残し、部分的に欠損している。床面出土。10～12は土師器甕で、いずれも長胴化し、口縁部の屈曲が顕著で、竈内に埋設されていたものである。埋設されていた為か器面全体は風化が著しく、口縁部の横ナデと底部のヘラケズリを除くと殆ど調整痕は認められない。口径は10は20cm、11は20.2cm、12は20.3cm、器高は10は41.2cm、11は41.8cmを測る。胎土には砂粒、黑色粒子、小礫などが含まれる。



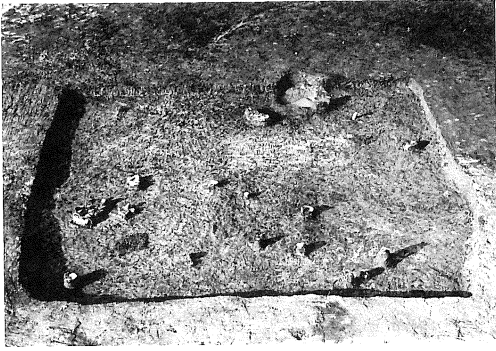
第125図 S J 57出土遺物

S J 58 (第58号住居跡・第126図)

16-X Grid、台地の東端に位置する。一辺 5 m 弱の不整形方形を呈し、竈は北辺中央やや東寄りに付設される。確認面から床面までの深さは15~20cm余りで、覆土は黒褐色を呈し、ロームブロックなどが含まれる。北半分は断面では明確に識別できないが、黒褐色の覆土の上に黒褐色が覆ったような状態がみられる。この黒褐色土が覆土と同色の上層にみられるのは、谷地形が8世紀後半以降に次第に埋没化してくるのを受けて、北東方向より土の流入があったものと考えられる。このことは北側半分における出土遺物が南側半分のものに比べて、明らかに浮いた状態で出土しており、このことを裏付けている。北側に付設される竈は、この集落の古墳時代後期の住居としては唯一である。袖はなく、燃烧部の掘形が検出された。煙道部は短く、立ち上がりは比較的急である。炭化物は検出されず、焼土も僅かに燃烧部内にみられた程度である。床面はやや凹凸が目立ち、壁溝や Pit は検出されなかった。また、床面や燃烧部の掘形内には、相当量の湿気があり、排水溝をもつ住居と何ら変わらない住まいの状況と言える。



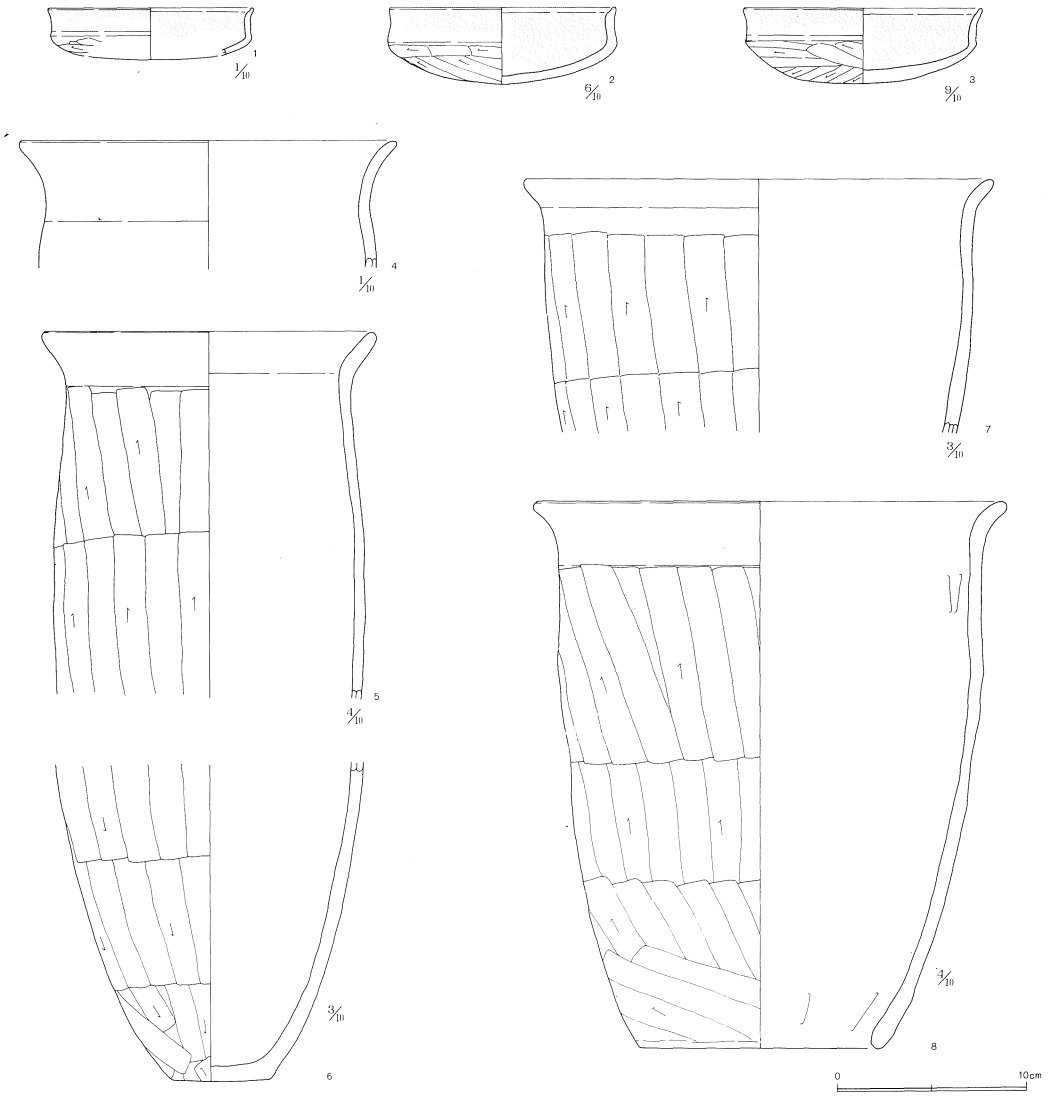
第126図 S J 58



S J 58



S J 58遺物出土状況



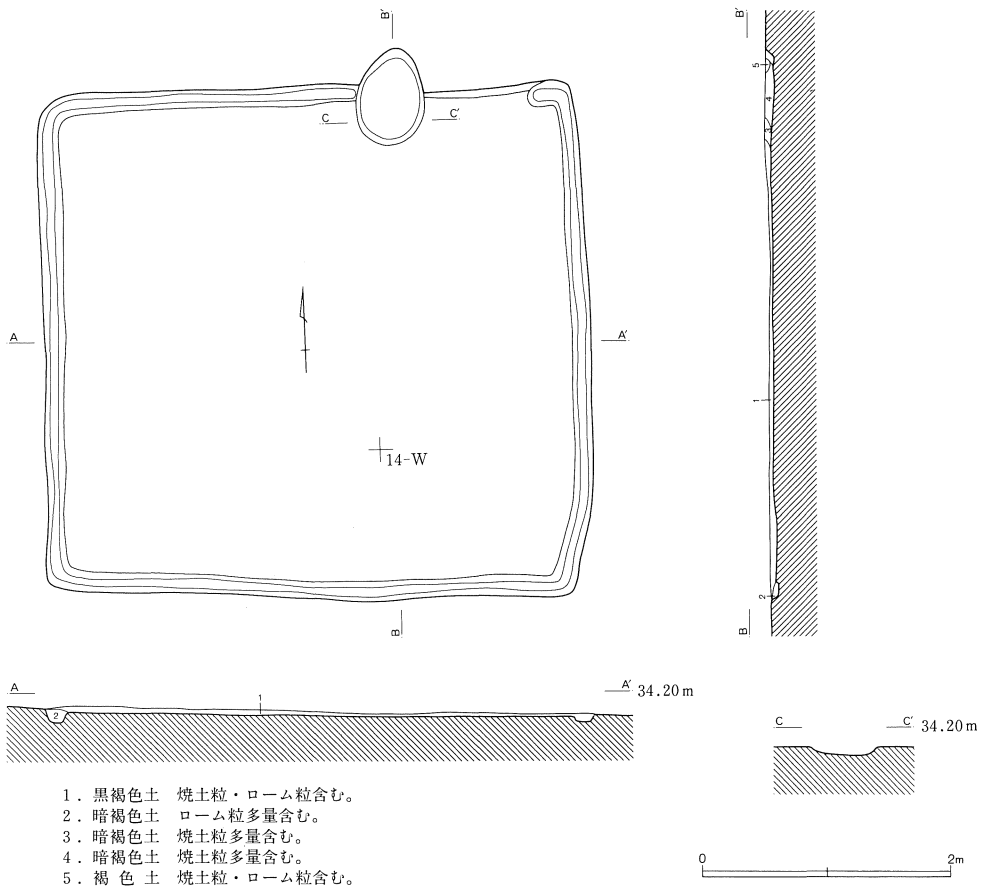
第127図 S J 58出土遺物

S J58出土遺物（第127図）

1～3が土師器坏で、いずれも内面及び口縁部は赤彩される。内面から口縁部は横方向のナデ、体部から底部はヘラケズリされる。口径は1は10.8cm、2は12cm、3は12.6cm、器高は1は2.6cm（推定値）、2・3は4cmを測る。4～6は土師器甕の破片で、推定口径は4は21cm、5は18.6cmを測る。やや風化しているが、口縁部は横ナデ、胴部から底部周辺は縦及び斜方向のヘラケズリ。7・8は土師器甕で、口径は7が25.8cm、8が26.2cm、器高30cm、円孔部12.8cmを測る。調整技法は土師器甕と同様である。胎土には砂粒、白色粒子、小礫が含まれる。色調は坏は赤褐色～淡赤褐色、甕・甑は淡橙褐色～淡褐色。

S J59（第59号住居跡・第128図）

13-VGrid 他に位置する。一辺約5mの正方形を呈し、竈は北辺中央やや東寄りに付設される。確認面から床面までの深さは5～8cmを測り、中央部には床面が露出している部分もある。床面は平坦であるが、貼り床は確認されなかった。竈は煙道部が短く、袖は検出されなかった。燃烧



第128図 S J59

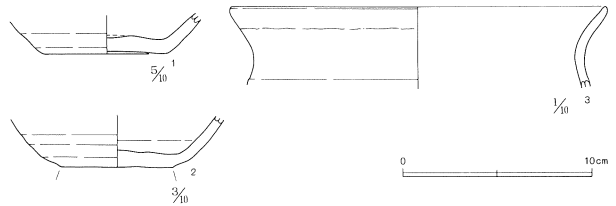
部は楕円形の掘形を呈し、僅かに焼土を残している。壁溝はほぼ全周するが、竈右側は北東隅で止まる。また、貯蔵穴、Pit は検出されなかった。

S J 59出土遺物（第129図）

1・2は須恵器坏で、ともに床面から出土したもので、体部から底部にかけての破片である。1は底径6.8cm、底部は回転糸切り未調整である。2は底径6.2cm、底部は回転ヘラケズリである。胎土には砂粒、白色針状物を含む。3は土師器甕の口縁部破片で、推定口径は21cmを測る。内外面とも横ナデが施され、胎土に砂粒、黒色粒子を含む。



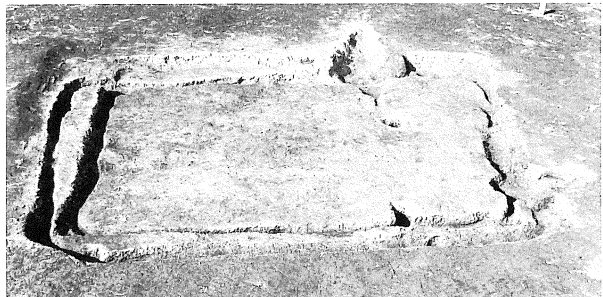
S J 59



第129図 S J 59出土遺物

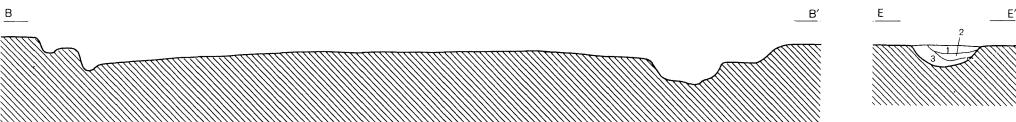
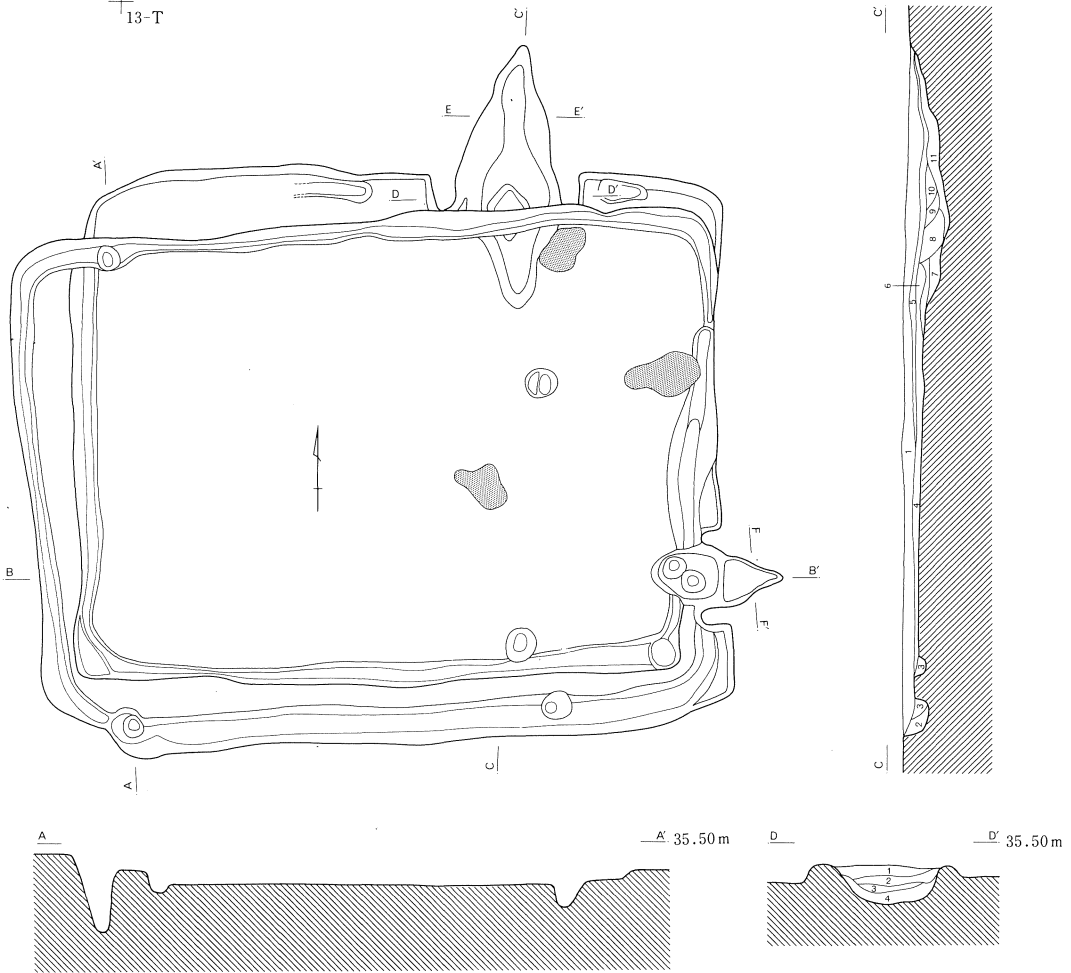
S J 60・72（第60・72号住居跡・第130図）

13-TGrid に位置する。S J 60は東西5m、南北4mの長方形を呈し、竈は北辺中央やや東寄りに付設される。S J 72はS J 60を切り込むとみられ、S J 60に対して軸が北東方向に振れる。東西5.5m、南北4mの長方形を呈し、竈は東辺南隅寄りに付設される。S J 60はS J 72に比べて掘り込みが深い。壁溝は北側が浅く、竈の西側は途中からは検出されなかった。竈は煙道部が長い大形のもので、S J 72の壁溝に燃焼部を東西に壊されると考えられるが、周辺の覆土は単一の黒褐色を呈し、先後関係はわかりにくく、断面観察による識別はできなかった。竈燃焼部底面には僅かに焼土が堆積しているが、覆土は変化が著しい。袖は僅かに残り、ロームブロック、灰色粘土などを用いて構築されている。床面は平坦で、所々に貼り床の痕跡が認められる。Pit は検出されなかった。S J 72の竈はS J 60に比べると小形で、S J 60は緩やかに立ち上がるのに対して、燃焼部から煙道部へは段をもって立ち上がる。袖は残存状態が悪い。燃焼部内には Pit が2基検出されたが、性格は不明である。床面は平坦で、貼り床が認められるが、中央部はやや高くなる。壁溝は全周するが、幅や深さが一定ではない。

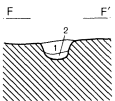


S J 60・72

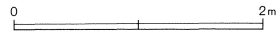
13-T



- | | | | |
|---------|-------------|----------|-----------------|
| 1. 黒褐色土 | 黄褐色土・焼土を含む。 | 8. 黄褐色土 | 黒褐色土・粘土・焼土含む。 |
| 2. 黒褐色土 | | 9. 黒褐色土 | 粘土・焼土炭含む。 |
| 3. 黒褐色土 | 黄褐色土含む。 | 10. 黒褐色土 | 粘土ブロック・焼土粒土粒含む。 |
| 4. 黒褐色土 | ややしまる。 | 11. 黒褐色土 | 焼土・炭含む。 |
| 5. 黒褐色土 | 焼土炭含む。 | 12. 黒褐色土 | 粘土粒・焼土粒含む。 |
| 6. 黒褐色土 | 粘土を含む。 | 13. 黒褐色土 | 焼土・炭含む。 |
| 7. 黄褐色土 | 黒褐色土含む。 | 14. 黒褐色土 | 黄褐色土を少量含む。 |



スクリーントーンは焼土

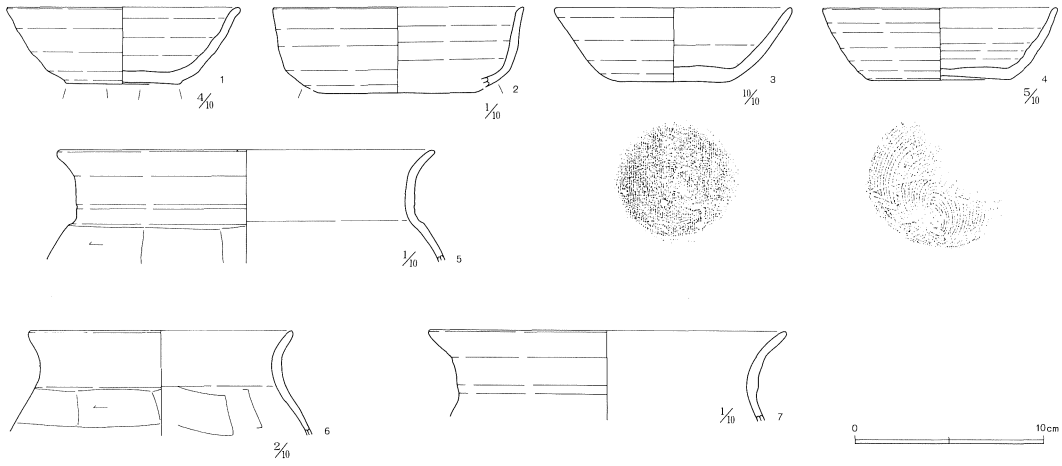


第130図 S J 60 (北竈)・72 (東竈)

S J 60・72出土遺物 (第131図)

1～4は須恵器坏で、いずれも床面付近で出土した。口径と器高は1は12cm、4cm、2は13.3cm、4.5cm、3は12.6cm、3.8cm、4は12.3cm、3.8cmを測る。胎土には砂粒、白色針状物を含む。

淡青灰色～青灰色。5～7は土師器甕の口縁部破片。5はコの字口縁を呈する。いずれも口縁部は横ナデ、胴部は横方向のヘラケズリ。内面は同ヘラナデ。胎土に粗い砂粒を多量含む。淡橙褐色。



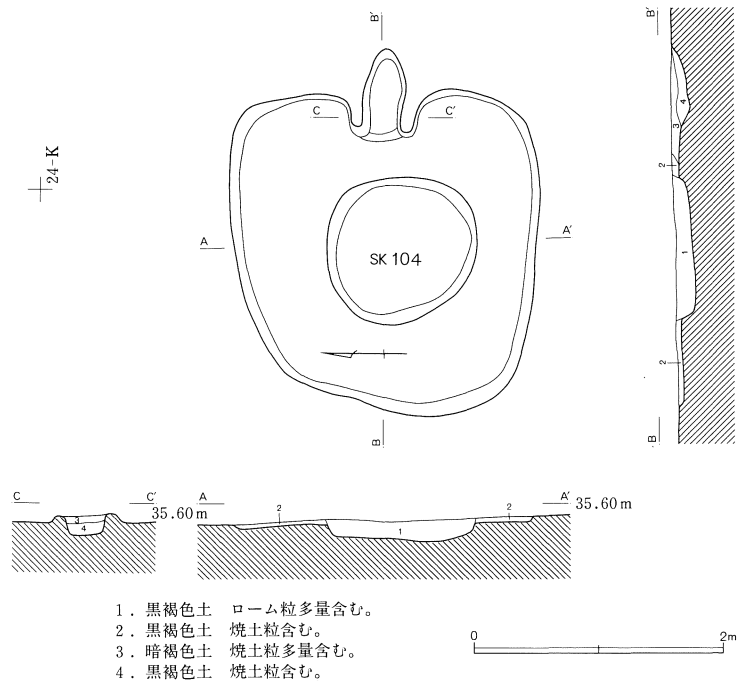
第131図 S J 60・72出土遺物

S J 61 (第61号住居跡・第132図)

24-J・KGrid に位置し、中央部をS K 104に壊される。形態は不整隅丸方形を呈し、竈は東
 辺中央に付設される。

確認面から床面までの深さは、約5 cmで、床面は凹凸が目立ち、貼り床は検出されなかった。竈は燃焼部の掘り込みが浅く、煙道部へは緩やかに立ち上がる。焼土の堆積も少量である。袖は残存状態が不良で、黒褐色の覆土と重なり、構築状況は確認できなかった。

また、壁溝、Pit、貯蔵穴などについては検出されず、遺物も出土しなかった。

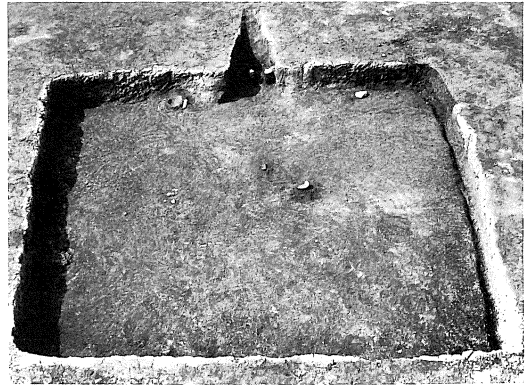


- 1. 黒褐色土 ローム粒多量含む。
- 2. 黒褐色土 焼土粒含む。
- 3. 暗褐色土 焼土粒多量含む。
- 4. 黒褐色土 焼土粒含む。

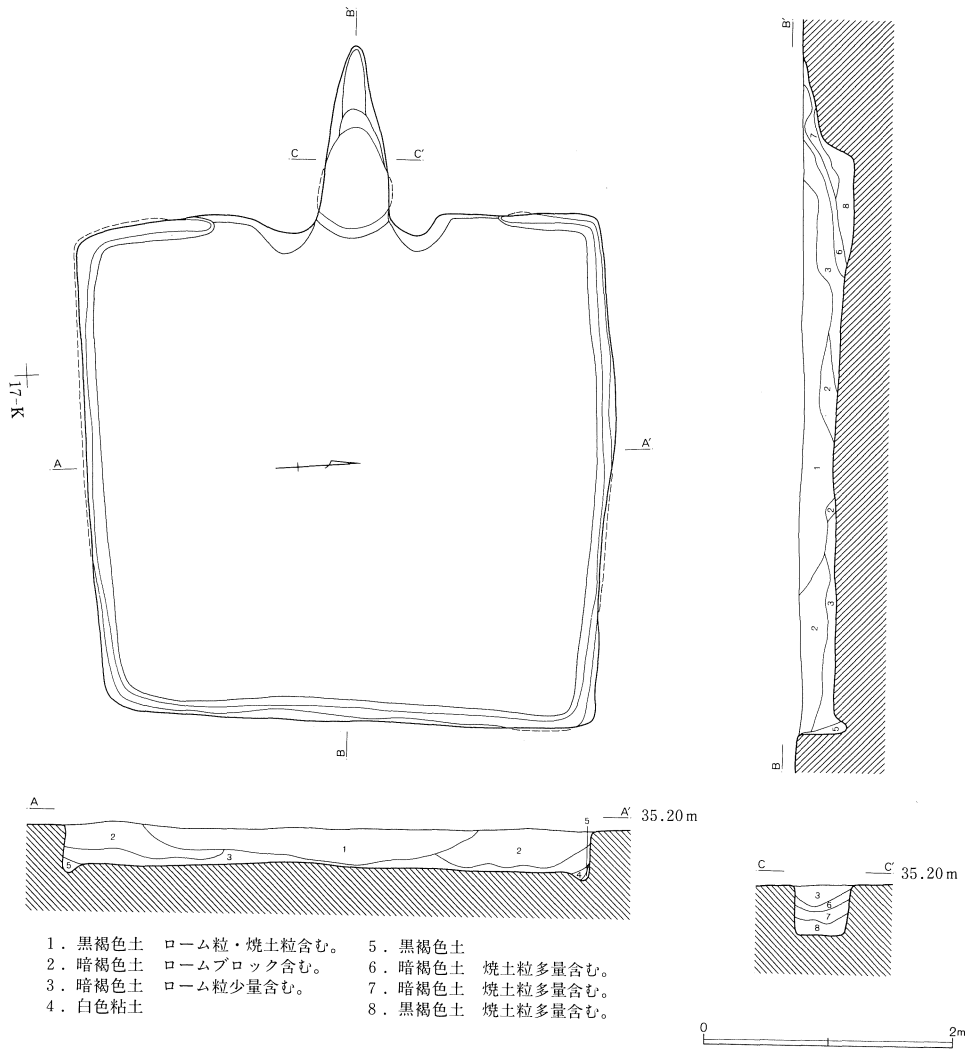
第132図 S J 61

S J 62 (第62号住居跡・第133図)

16-J・KGrid に位置する。一辺4 m余りの方形を呈し、竈は西辺中央に付設される。確認面から床面までの深さは約40cmを測り、床面はやや凹凸がある。竈は煙道部が長く、燃烧部の掘り込みは浅く、袖は殆ど残っていない。壁溝はほぼ全周し、排水溝をもつ住居のように外側に挟られる。貯蔵穴や Pit など検出されなかった。



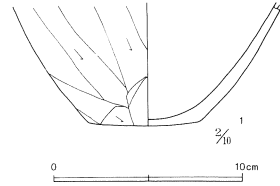
S J 62



第133図 S J 62

S J 62出土遺物 (第134図)

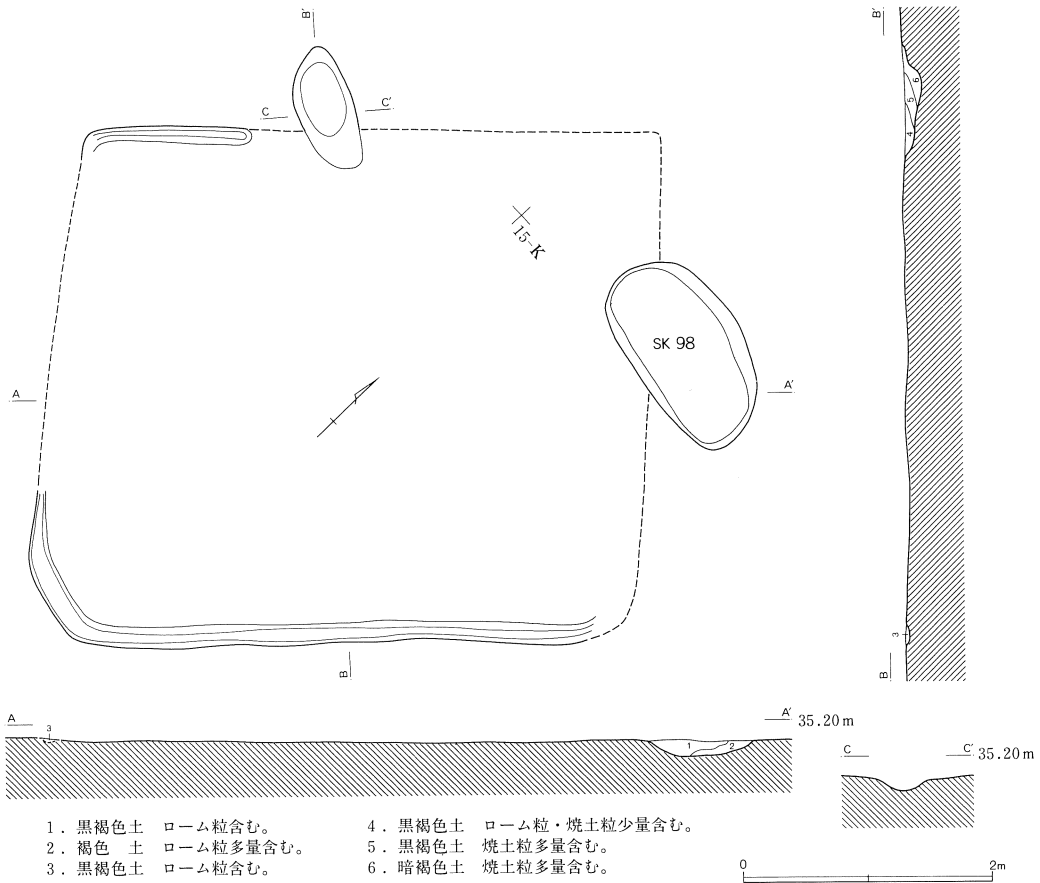
1 は土師器甕の胴部下半から底部にかけての破片。外面は斜方向のヘラケズリ、内面はナデ。胎土には砂粒、小礫を含む。淡橙褐色。この他に須恵器坏の小破片が出土している。



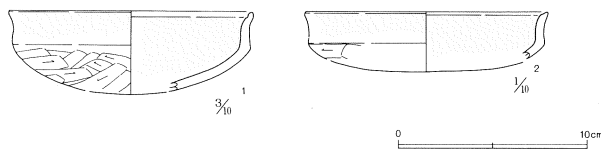
第134図 S J 62出土遺物

S J 63 (第63号住居跡・第135・137図)

15-J・KGrid 他に位置している。確認時において床面が露出しており、僅かに焼土を残す竈燃焼部の掘形と壁溝が北東及び西隅において検出されただけである。規模は4×5mの方形を呈すると考えられ、北隅付近からは東方向に向かって、約16mの排水溝をもつ。竈燃焼部の掘形は



第135図 S J 63

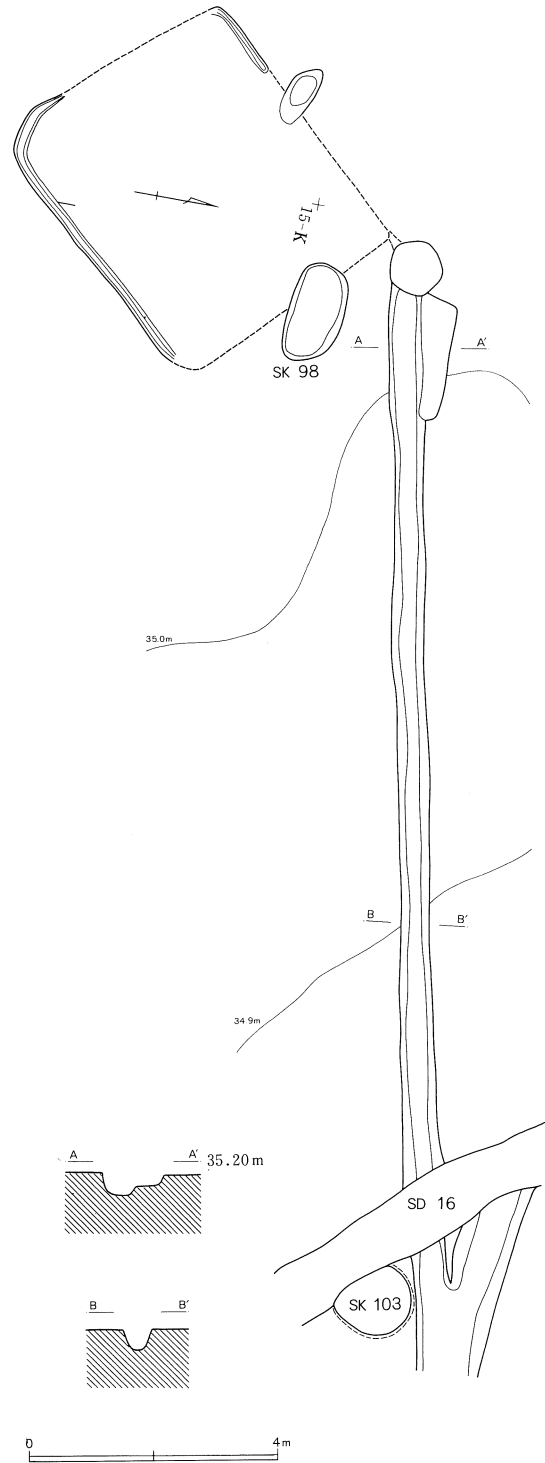


第136図 S J 63出土遺物

やや軸が北東方向に振れている。焼土は認められるが、ロームブロックや黒褐色土などの混入がみられ、残存状態は不良である。床面は凹凸があり、遺存状態が悪いこともあって貼り床は検出されなかった。住居は壁溝が全周検出されなかったことや壁面が存在しないために、排水溝への連絡口となるトンネル部分はなく、溝の底面が僅かに検出された。排水溝の部分は一段深く掘り込まれ、SD 16などと重複している。溝の幅は50~60 cm余りと他の排水溝をもつ住居に比べると広く、傾斜は緩やかである。覆土は住居の壁溝内の黒褐色よりも暗褐色に近く、大形のロームブロック、ローム粒子などが多く含まれる。また、他の遺構との重複関係が多く見られることから、中世の遺物などの小破片も混入している。

S J 63出土遺物（第136図）

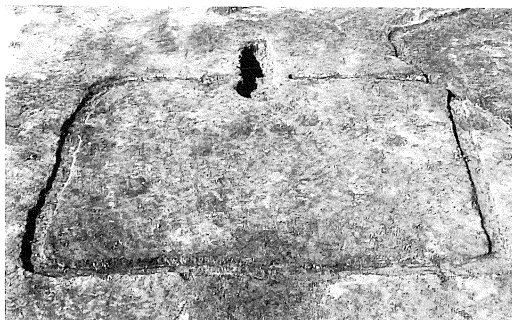
1・2は土師器坏の破片で、竈周辺の床面より出土した。ともに内面及び口縁部は横ナデが施された後、赤彩される。体部はヘラケズリ。推定口径と器高は1は13cm、4.4cm、2は13cm、3.2cmを測る。胎土には砂粒、白色粒子、黒色粒子などが含まれる。色調は淡赤褐色～淡橙褐色。



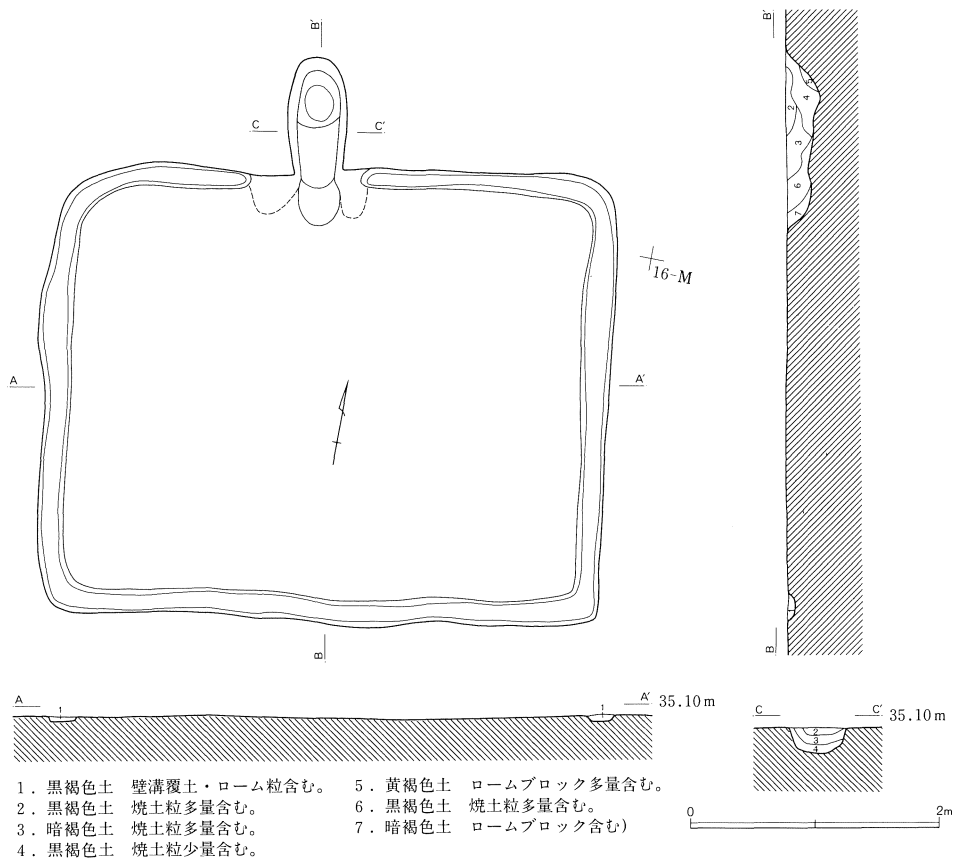
第137図 S J 63全体図

S J 64 (第64号住居跡・第138図)

16-LGrid に位置し、北東隅部分がS J 65を壊している。確認時に床面は露出しており、一部は表土剥ぎの段階で削平されている。壁溝は全周し、僅かに痕跡をとどめる竈袖の手前で止まる。竈は燃烧部に焼土を少量とどめ、煙道部への立ち上がりは急である。



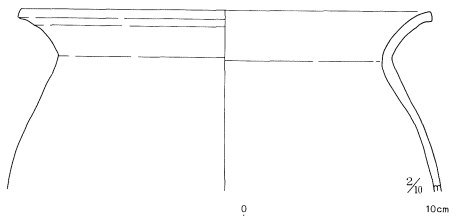
S J 64



第138図 S J 64

S J 64出土遺物 (第139図)

1 は土師器甕の破片。口径は23.4cm。口縁部は横ナデ。胎土に砂粒を含む。色調は淡橙褐色。



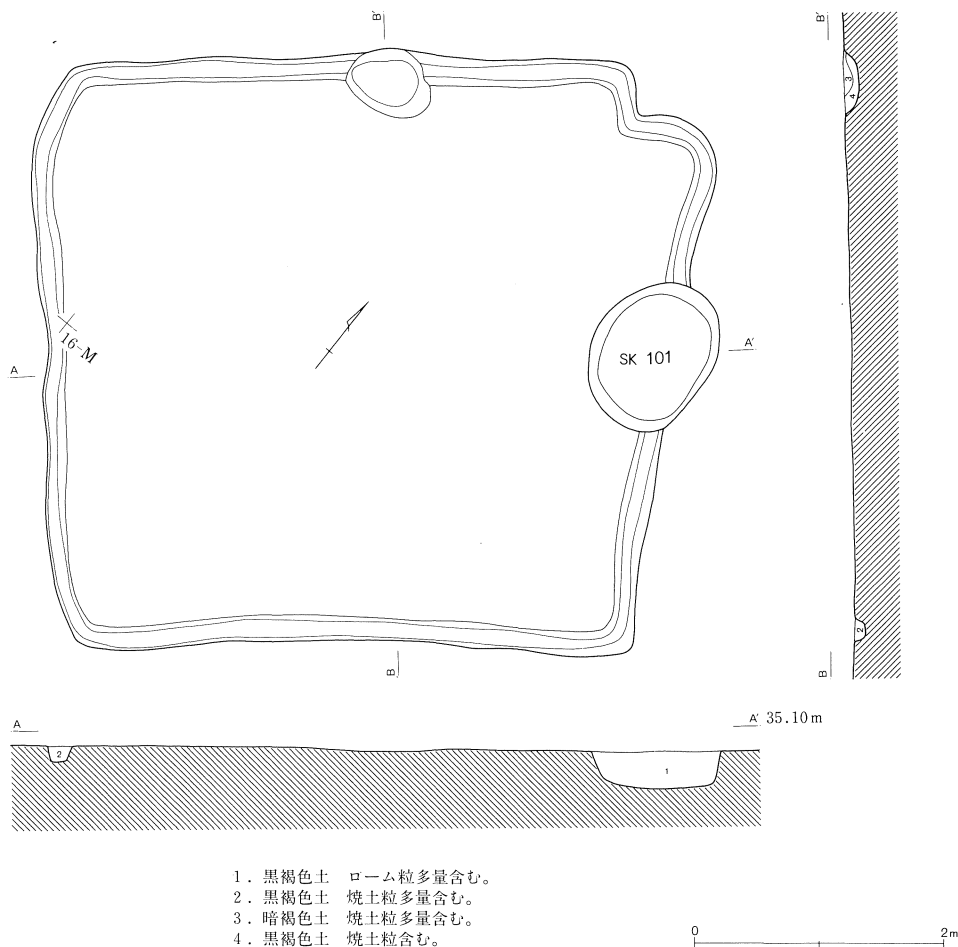
第139図 S J 64出土遺物

S J 65 (第65号住居跡・第140図)

15-MGrid 他に位置し、S J 64、S K 101と重複する。S J 64と同様、確認時に床面が露出しており、一部は表土剥ぎの段階で削られている。不整形方を呈し、竈は北西辺中央に付設され、北隅は直角に括れる部分をもつ。この周辺は一部の床面と類似する黒褐色土の堆積が厚く、攪乱を受けている可能性もある。竈は不整形円形の掘形を呈し、焼土は底面に僅かに堆積が認められた。煙道部は短く、壁外へは出ない。また、袖も検出されず、周辺には粘土や袖の痕跡をとどめるものは確認されなかった。壁溝は全周し、北東部よりも南東部のほうがやや深く掘り込まれている。貯蔵穴やPitなどは検出されなかった。遺物は出土していない。



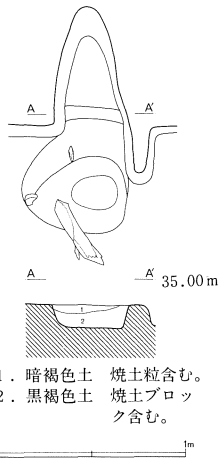
S J 65



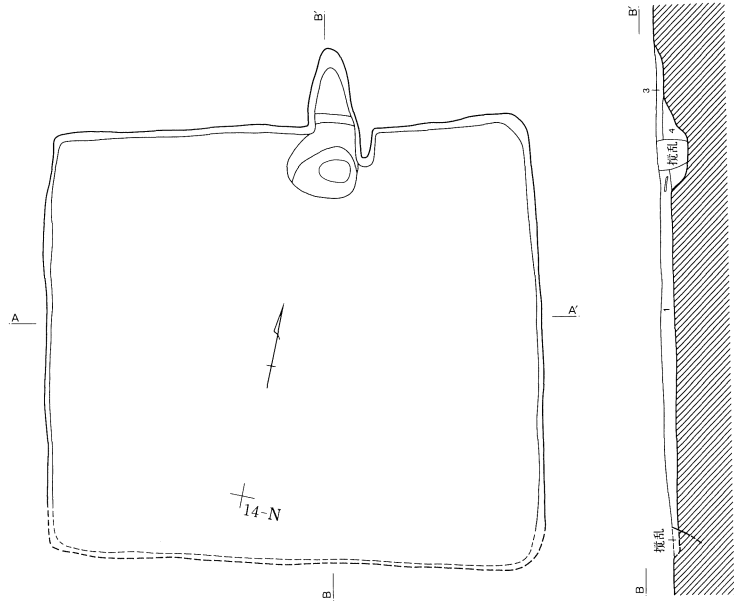
第140図 S J 65

S J 66 (第66号住居跡・第141・142図)

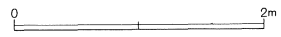
13-M・NGrid に位置し、南辺をSD12に壊される。一辺約4mの正方形を呈し、竈は北辺中央やや東寄りに付設される。確認面から床面までの深さは約15cmで、覆土中にはロームブロック、ローム粒子などが含まれる。床面は平坦であるが、貼り床は検出されなかった。竈は約80cmの煙道部を持ち、床面より10cm余り深く掘り込まれた燃焼部の掘形からは段をもって緩やかに立ち上がる。燃焼部の掘形は残存していない左袖の下まで及んでいる。残存した右袖はやや崩落しているが、粘土などの構築材も確認された。また、焚き口付近には、支脚に用いたとみ



- 1. 暗褐色土 焼土粒含む。
- 2. 黒褐色土 焼土ブロック含む。



- 1. 黒褐色土 焼土粒含む。
- 2. 暗褐色土 ローム粒含む。
- 3. 暗褐色土 焼土粒多量含む。
- 4. 暗褐色土 焼土粒多量含む。



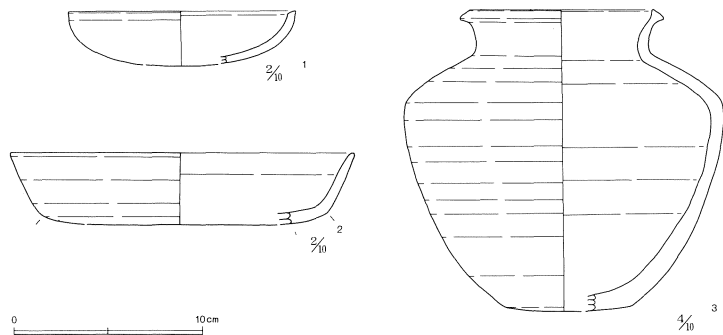
第142図 S J 66竈

第141図 S J 66

られる片岩系石材が出土した。(第139図) 一方、Pit や壁溝等は検出されなかった。

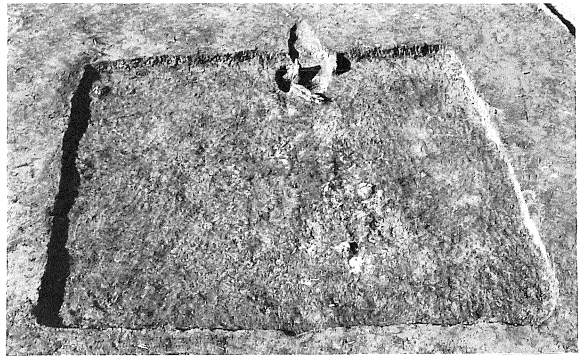
S J 66出土遺物 (第143図)

1 は土師器坏の破片で、推定口径12.1cm、同器高2.9cmを測る。



第143図 S J 66出土遺物

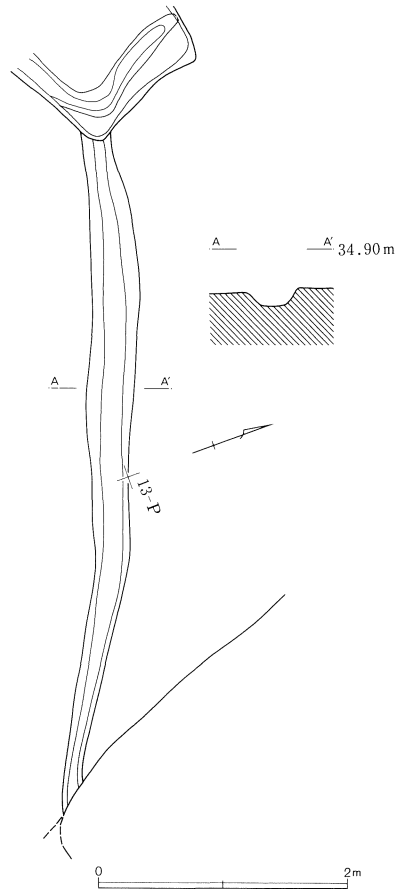
風化が著しく、調整痕は不明であるが、口唇部は鋭く面調整される。胎土に砂粒を含む。色調は淡橙褐色。2は須恵器杯の破片。内外面ともロクロナデ、底部は全面回転ヘラケズリ。推定口径17.6cm、同器高3.7cm。色調は灰色。3は須恵器小形壺で、底部を欠く。口径10.6cm、器高15.8cm。ロクロナデ痕明瞭。色調は青灰色。口縁部は横ナデ。2・3は胎土に砂粒、白色針状物、白色粒子含む。



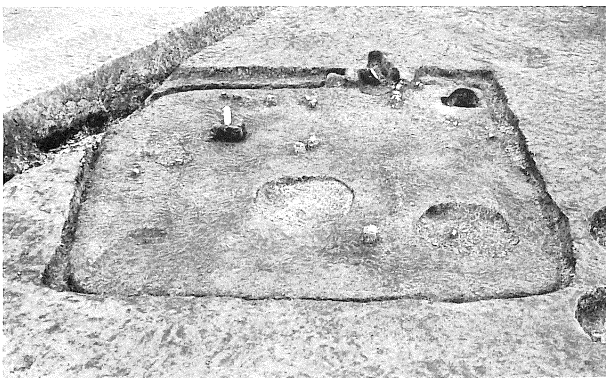
S J 66

S J 67 (第67号住居跡・第144・145図)

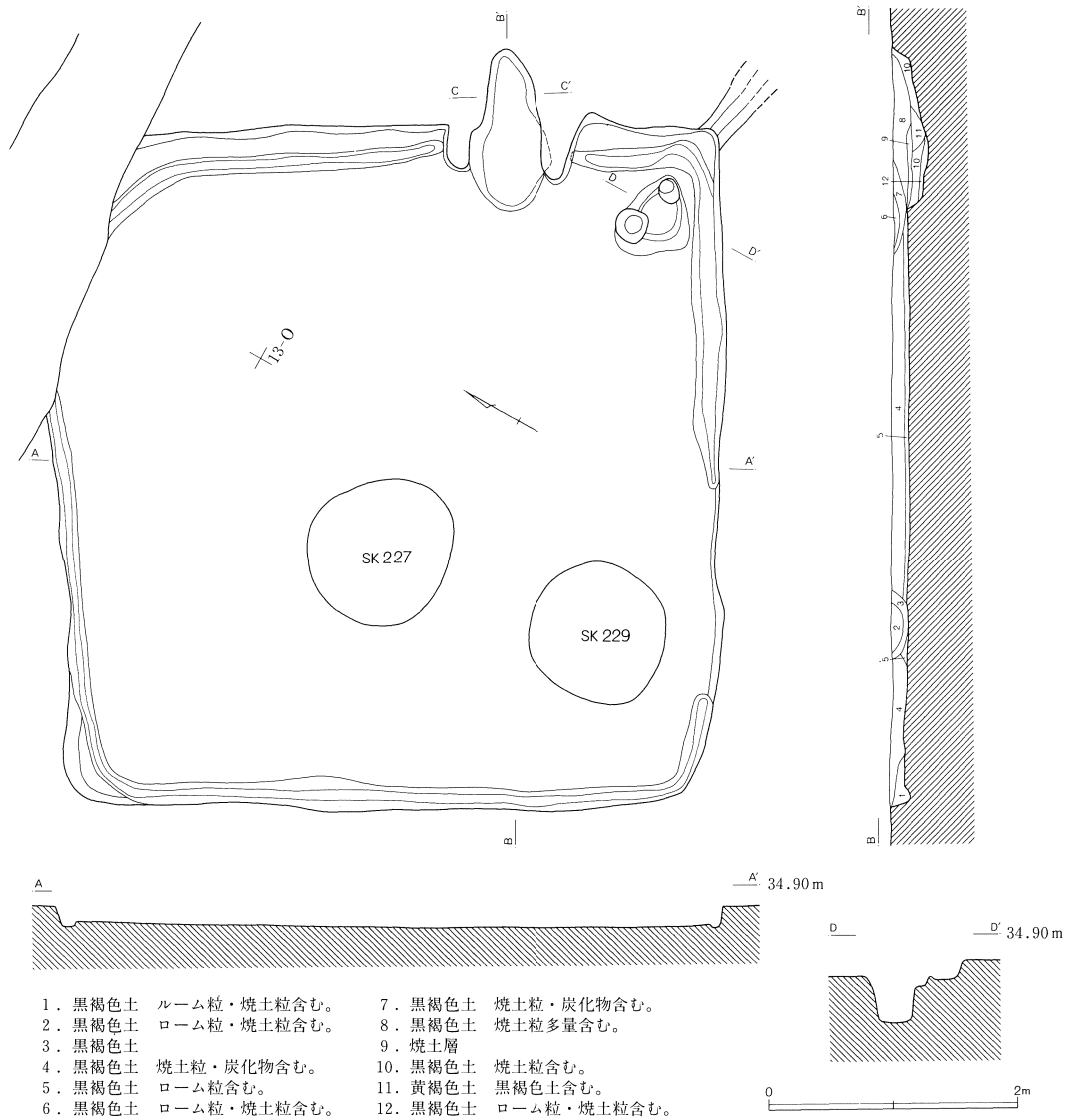
13-N・OGrid 他に位置し、住居内をS K 227、229に、北隅をS D 21に、排水溝の東側をS J 71に壊される。一辺約5mの正方形を呈し、竈は北東辺東寄りに付設される。確認面から床面までの深さは、約10cmを測る。床面は平坦であるが、竈周辺は高く、貼り床は主に中央部に見られる。竈は両袖が残存し、燃烧部内には支脚として使用されたとみられる片岩系の石材が袖の壁際に倒れかかった状態で出土した。燃烧部の掘形は床面より10cm余り深く掘られ、底面には厚さ1～3cm程の焼土が堆積していた。燃烧部はS J 66でも見られたことであるが、掘形は袖の下まで掘り込まれている。また、燃烧部内の覆土には焼土や炭化粒子に混じって、大形のロームブロックが多量に含まれており、天井部や側壁が崩落したものと考えられる。煙道部は緩やかに立ち上がり、燃烧部と同様崩落土の存在



第144図 S J 67排水溝



S J 67



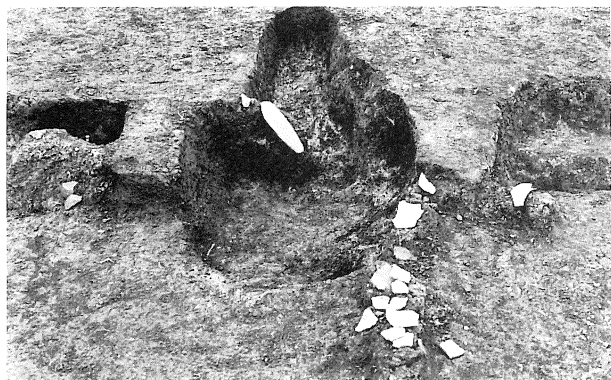
第145図 S J 67

が確認された。袖は構築材に灰色粘土、ロームブロック、黒褐色土などが使用され、袖の外側に多く見られた。壁溝は南東辺の2 m弱を除いて全周し、北側の辺ほど幅広になっている。貯蔵穴は南東隅に位置し、楕円形を呈し、約30cmの深さをもつ。覆土は黒褐色であるが、ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子が含まれる。また、2基の Pit が後に掘り込まれるが、住居に伴うかどうかは確認できなかった。排水溝は確認時より本来トンネルとなる部分が露出し、東方向に6 m余りの長さをもつとみられる。溝の幅は中間地点でやや広がるが、次第に狭くなって谷に流れ込むとみられる。覆土は黒褐色～暗褐色、ロームブロックが少量含まれる。

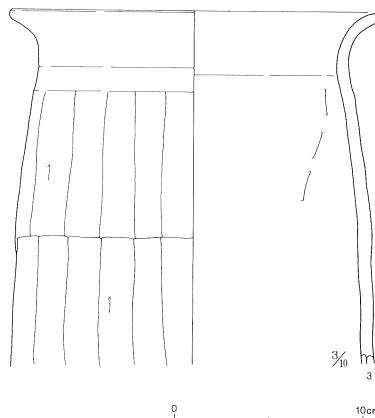
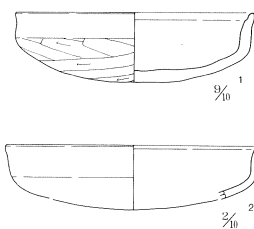
S J 67出土遺物（第146図）

1・2は土師器坏で、内面及び口縁部はナデの後、赤彩される。体部から底部はヘラケズリ。口

径と器高は1が12.6cm、3.6cm、2が13.5cm、3.5cmを測る。胎土に砂粒を含む。色調は淡赤褐色～淡橙褐色。3は土師器甕の口縁部から胴部上半の破片。口径20.7cm。口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のヘラケズリ、内面は横ヘラナデ。胎土に粗い砂粒を含む。色調は淡橙褐色。



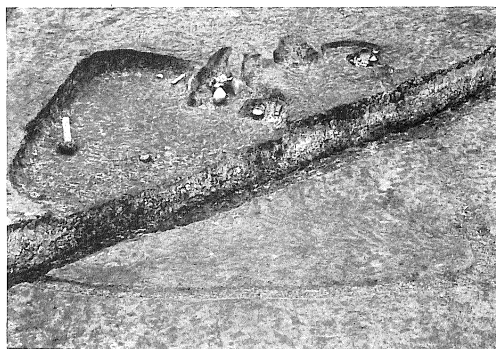
S J 67竈



第146図 S J 67出土遺物

S J 68・69（第68・69号住居跡・第147図）

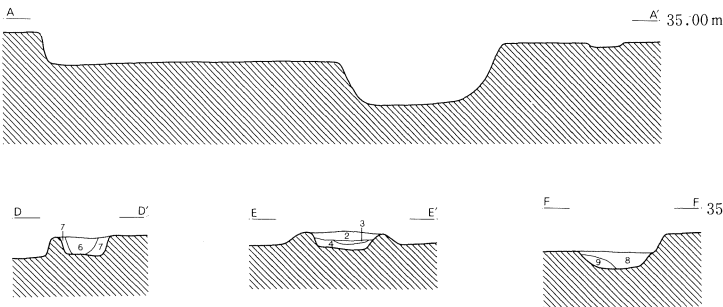
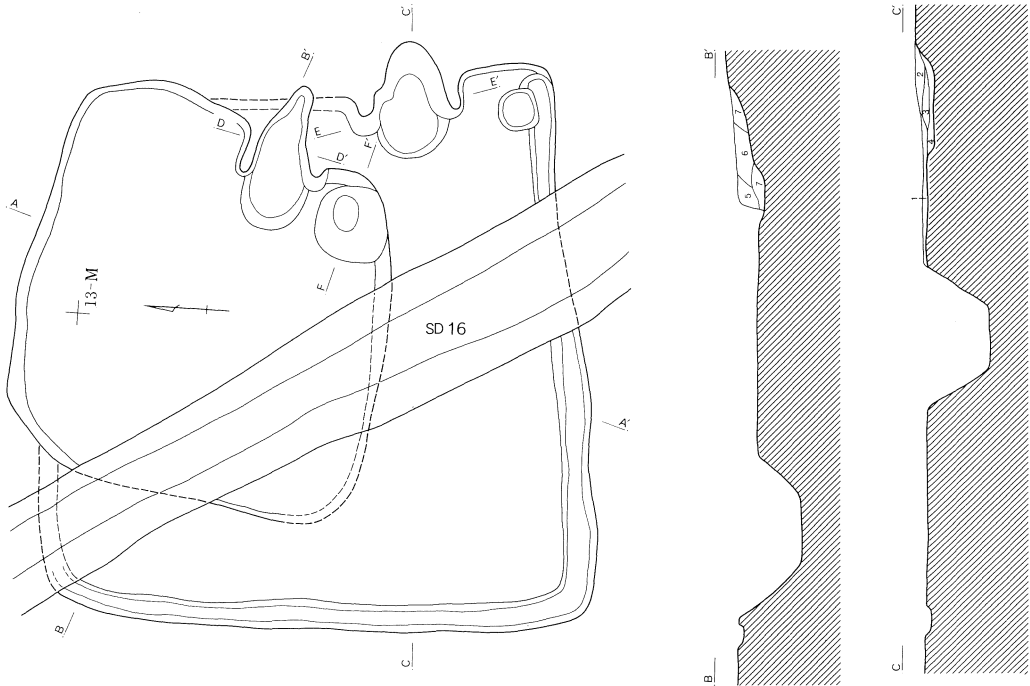
13-L・MGrid に位置し、中央部をS D 16に壊される。S J 68は年代的に古いS J 69より、深く掘り込まれるが、ともに遺存状態は良くない。S J 68は一辺3mほどの不整形を呈し、竈は東辺南寄りに付設される。南西部はS D 16に壊されるなどによって、形態がつかみにくい。床面までの深さは遺存状態の良好な北東部で約15cmを測る。竈は煙道部が長く、浅く掘り込まれた燃烧部からは緩やかに立ち上がる。竈内及び周辺からは土器や石製の支脚などが出土している。竈の右寄りに隅丸方形の貯蔵穴があり、須恵器坏（第148図1）が出土している。他に Pit や壁溝などは検出されなかった。S J 69は一辺5m余りの不整形を呈し、竈は東辺南寄りに付設される。確認面から床面までの深さは、東側で約5cm、西側では床面が露出しており、壁溝によって住居の範囲が確認



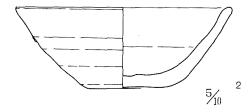
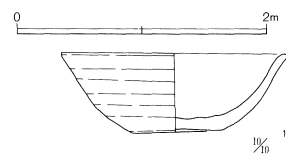
S J 68・69



S J 68竈



1. 黒褐色土 ローム粒・焼土粒含む。
2. 暗褐色土 焼土粒多量含む。
3. 暗褐色土 焼土粒多量含む。
4. 褐色土 ローム粒多量含む。
5. 黒褐色土 ローム粒・焼土粒含む。
6. 暗褐色土 焼土粒多量含む。
7. 黒褐色土 焼土粒多量含む。
8. 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量含む。
9. 暗褐色土 ローム粒含む。



第148図 S J 68出土遺物

第147図 S J 68・69

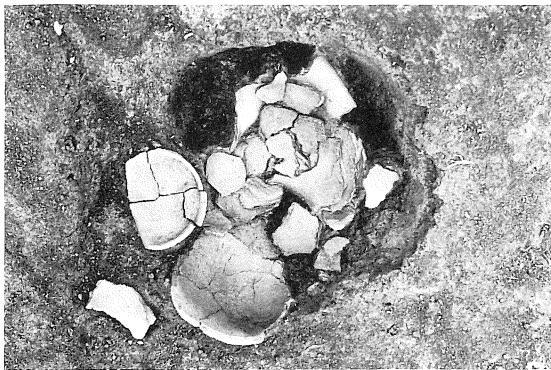
できるだけである。竈は遺存状態は良くないが、天井部の崩落や袖の構築状況は、燃焼部の覆土中の焼土ブロックや粘土の混入によって窺い知ることができる。壁溝はSD16やS J 68によって壊されているが、ほぼ全周するものと考えられる。竈の右隅の貯蔵穴からは土師器坏・甕（第149図1・2）が出土している。

S J 68出土遺物（第148図）

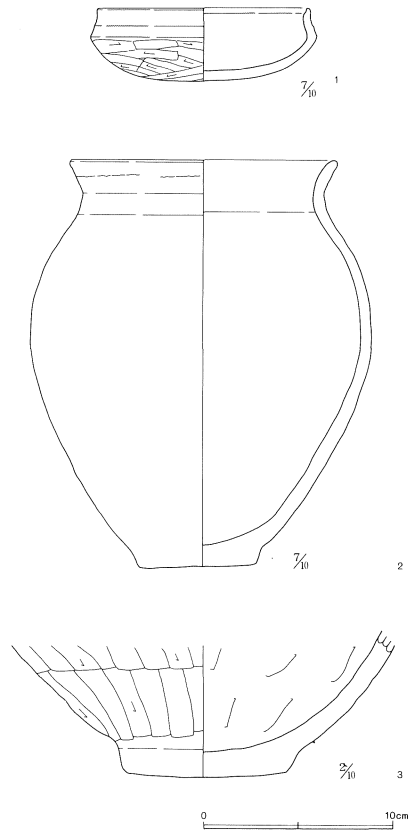
1・2須恵器坏で、1は貯蔵穴、2は竈より出土した。口径及び器高は1は11.9cm、4cm、2は11.8cm、4.2cmを測る。ともに内外面はロクロナデ、底部は回転糸切り未調整。胎土に砂粒、白色針状物を含む。色調は青灰色～淡青灰色。

S J 69出土遺物（第149図）

1は土師器坏で、内面及び口縁部は横ナデ後赤彩される。体部～底部はヘラケズリ。口径11.4cm、器高3.7cm。2は土師器甕で、内外面ともナデ。口径14.2cm、器高22.5cm。3は土師器壺の底部周辺の破片。いずれも胎土に砂粒、小礫を含む。色調は、1は淡赤褐色、2・3は淡橙褐色。



S J 69貯蔵穴内出土遺物状況



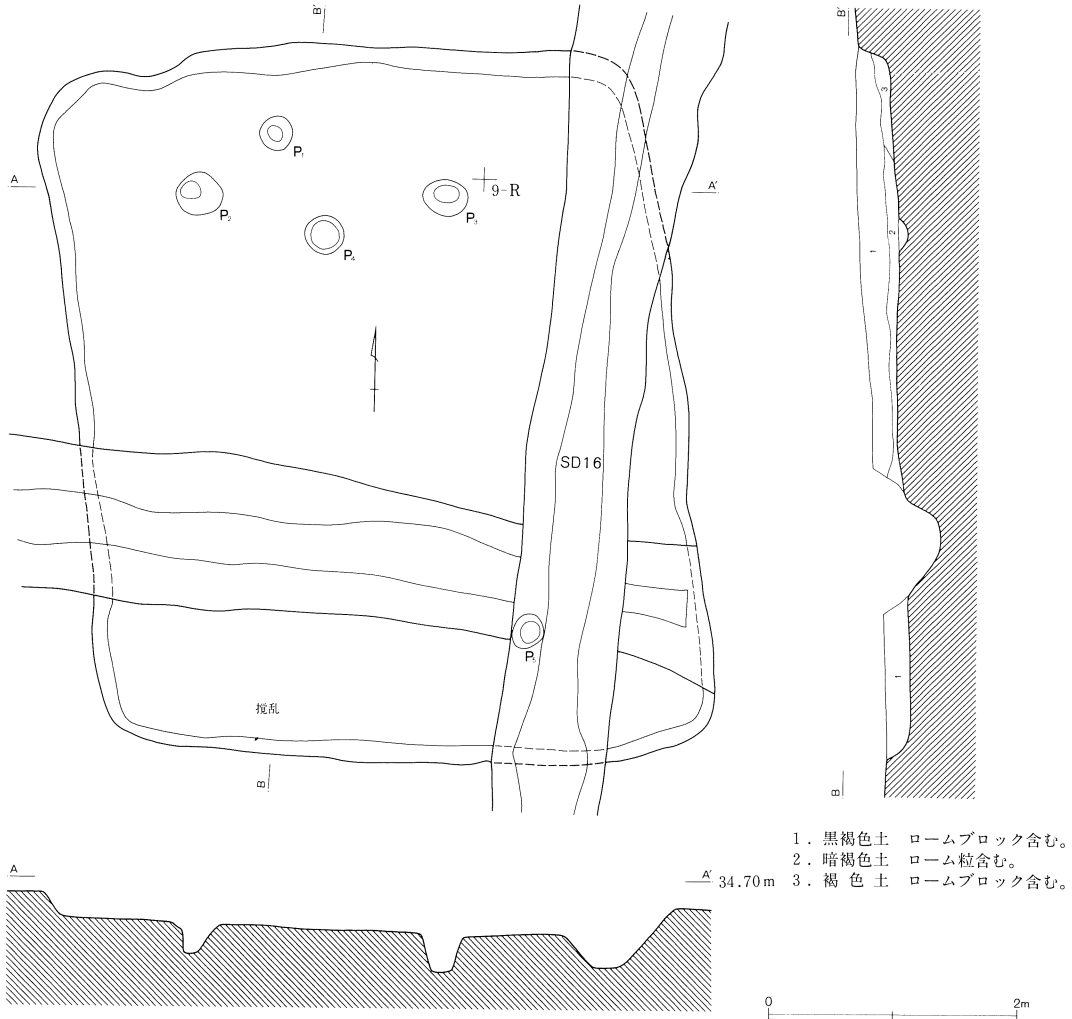
第149図 S J 69出土遺物

S J 70（第70号住居跡・第150図）

9-QGrid 他に位置し、S D 16及びS D 18に東側から南側にかけて壊される。規模は4 m×4.5 mの南北方向に長い方形を呈し、深さは約30cmを測る。床面は平坦で、貼り床は認められなかった。床面は住居が谷地形に面している為か南側に向かって緩やかに傾斜している。床面には5基の Pit が検出されたが、検出位置は一般的な住居に見られるような位置ではなく、不規則である。覆土は黒褐色～暗褐色で、ロームブロック、ローム粒子、焼土粒子などが少量含まれる。また、床面には焼土がブロック状に付着している箇所も検出されたが、炉跡の検出までには至らなかった。本住居は遺物こそ出土していないが、覆土や床面の状態などからS J 43と同時期とみられる。なお、壁溝や貯蔵穴などは検出されなかった。



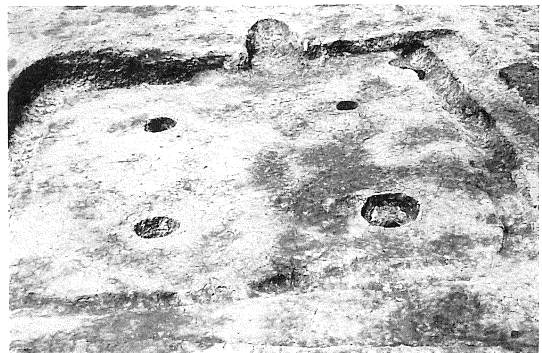
S J 70



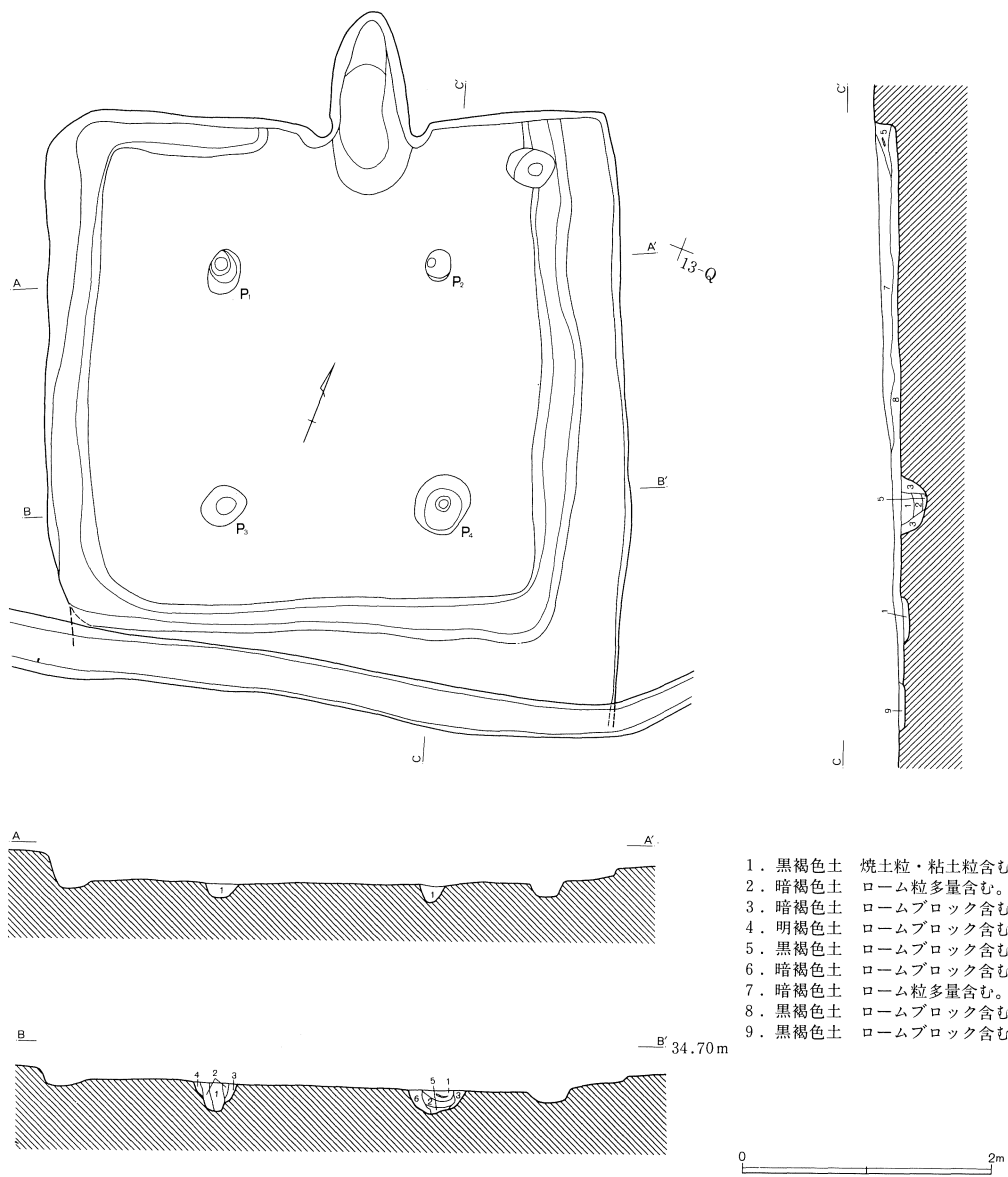
第150図 S J 70

S J 71 (第71号住居跡・第151図)

13-PGrid 他に位置している。S D 18に南
 辺を壊されるため、南北の規模は確定できない
 が、東西辺よりも1m余り長くなるものと考え
 られる。竈は北辺中央に付設され、約1mの煙
 道部を持ち、掘形の浅い燃焼部からは緩やかに
 立ち上がる。袖は僅かに残存し、構築材として
 ロームブロックと黒褐色土が用いられている。
 Pit は5基検出され、規則的に並ぶ4基は支柱
 とみられるが、北東隅の Pit は壁溝を壊して
 おり、貯蔵穴かどうかは断定できない。壁溝は



S J 71

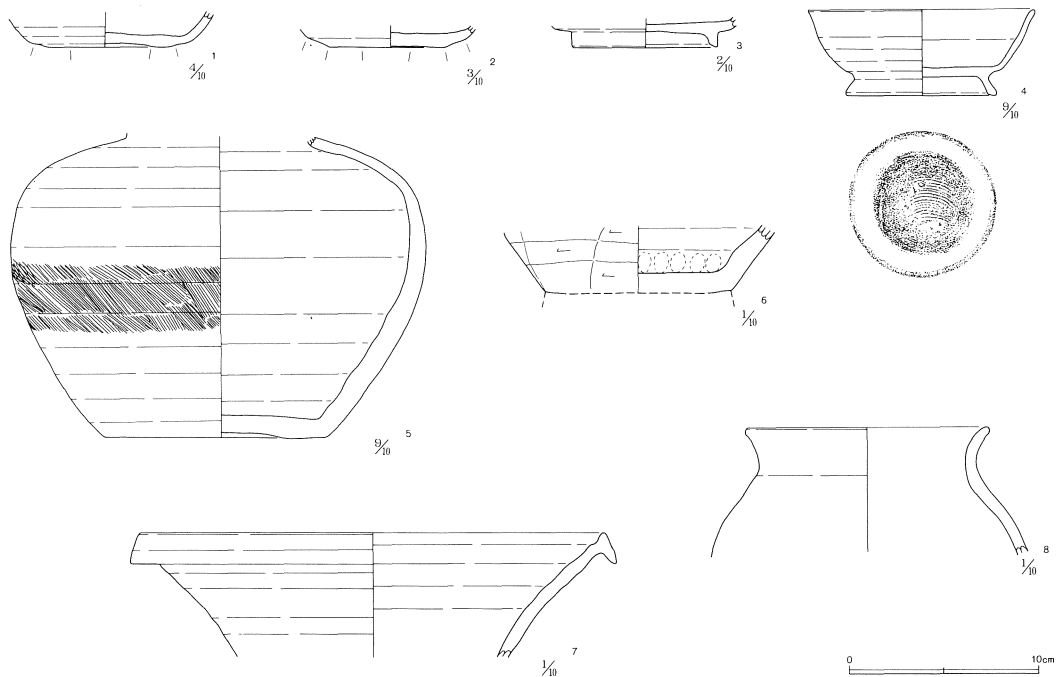


第151図 S J 71

壁からやや離れるが、ほぼ全周する。床面はやや凹凸が目立つ。

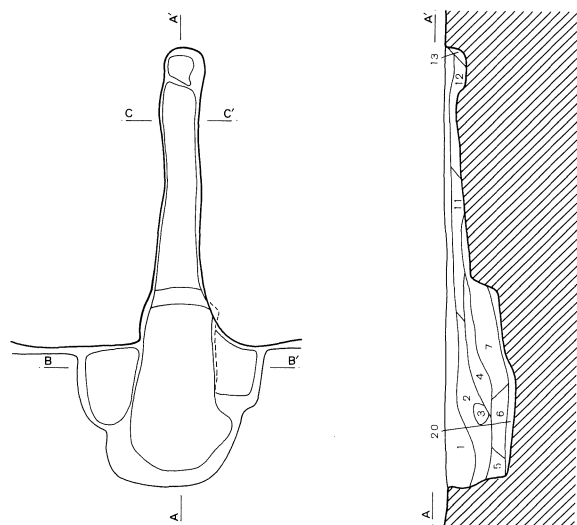
S J 71出土遺物 (第152図)

1・2は須恵器坏の底部破片。ともに底部は回転ヘラケズリ後、周辺回転ヘラケズリ。3・4は須恵器高台付坏。4は口径13cm、器高5.5cm。5・6は須恵器長頸壺の破片。5は胴部中央に平行叩き、6は底部付近はヘラケズリが施される。7は須恵器甕の口縁部破片。推定口径22.5cm。8は土師器小形甕の破片で、口径は13.5cmを測る。胎土には須恵器は砂粒、白色針状物を含む。色調は青灰色。土師器は砂粒を含む。色調は淡橙褐色。

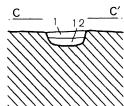
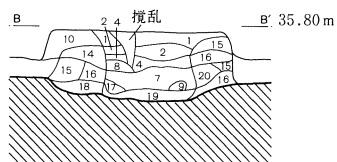


第152図 S J 71出土遺物

S J 73 (第73号住居跡・第153・154図)



1. 暗褐色土 ローム粒多量含む。
2. 明褐色土 ローム粒・焼土粒含む。
3. 暗褐色土 ロームブロック含む。
4. 明褐色土 ローム粒極多量含む。
5. 暗褐色土 焼土粒、炭化物含む。
6. 褐色土 ローム粒多量含む。
7. 褐色土 ローム粒少量含む。
8. 褐色土 焼土粒多量含む。
9. 褐色土 焼土ブロック含む。
10. 暗褐色土 ローム粒多量含む。
11. 褐色粘土 焼土ブロック多量含む。
12. 暗褐色土 焼土ブロック少量含む。
13. 明褐色土 ローム粒多量含む。
14. 暗褐色土 ローム粒多量含む。
15. 粘質褐色土 ローム粒・焼土粒土粒含む。
16. 黄褐色土 焼土粒少量含む。
17. 暗褐色土 焼土ブロック含む。
18. 粘質褐色土 ローム粒多量含む。
19. 褐色土 焼土粒多量含む。
20. 褐色土 焼土粒・ローム粒含む。

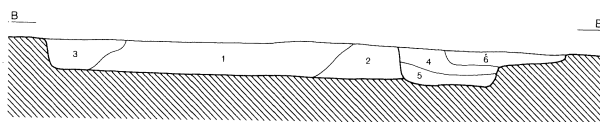
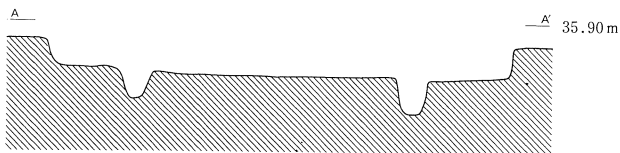
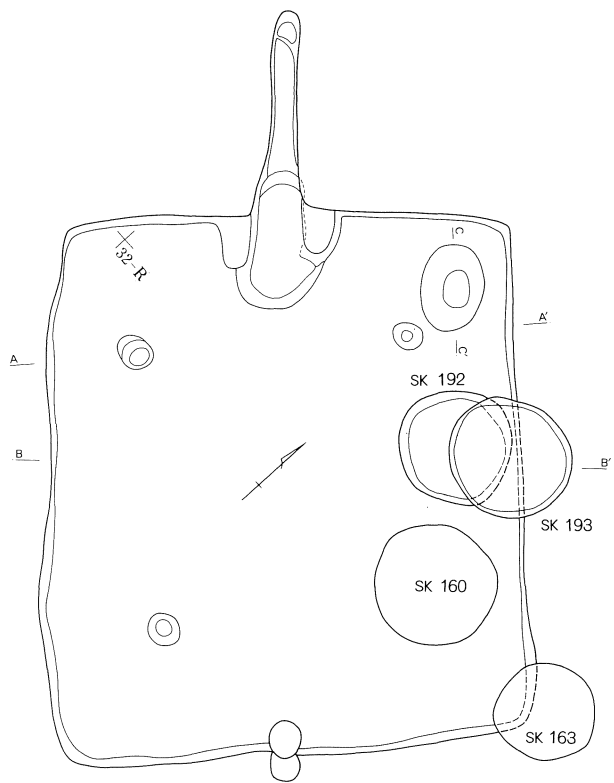


第153図 S J 73竈

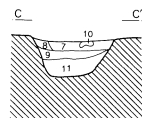
31-R Grid に位置している。規模は4 m×4.5 mの長方形を呈し、竈は北西辺中央に付設される。確認面から床面までの深さは約25cmを測り、床面は平坦であるが、北東方向に緩やかに傾斜している。竈は約1.5 mの煙道部を持ち、先端には煙突を固定したためか Pit 状に穴が設けられている。燃焼部は煙道部と約15cmの段差があり、底面には厚さ2～3 cm程の焼土が堆積している。袖は僅かに先端が削られているものの遺存状態は良好である。内壁はしっかりしており、灰白色粘土を含む粘性の強い土が用いられている。貯蔵穴は北側隅に位置し、楕円形を呈し、覆土には炭化物が含まれる。Pit は3基検出されたが、この住居は4本柱穴とみられることから残る1基はSK 160に壊されたものと考えられる。なお、壁溝や貼り床は検出されなかった。

S J 73出土遺物 (第155図)

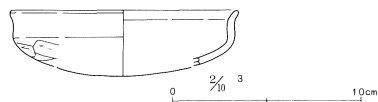
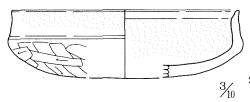
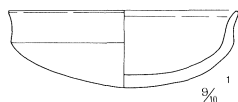
1～3は床面または覆土下層より出土した土師器坏である。口径は1は12.5cm、2は12.3cm、3は12.8cm、器高は1は4.2cm、2は3.8cm、3は3.7cmを測る。いずれも本来は内面か



1. 褐色土 ローム粒多量含む。
2. 褐色土 ローム粒多量含む。
3. 暗褐色土 ローム粒少量含む。
4. 暗褐色土 ローム粒含む。
5. 淡褐色土 ローム粒・焼土粒多量含む。
6. 暗褐色土 ローム小ブロック少量含む。
7. 明褐色土 ローム粒多量含む。
8. 明褐色土 ローム粒含む。
9. 黄褐色土 ローム粒多量含む。
10. 黒色土 ロームブロック含む。
11. 黄褐色土 ロームブロック多量含む。

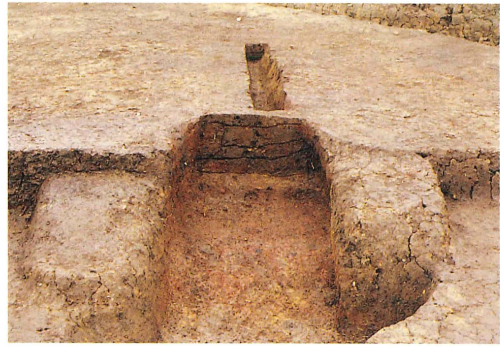


第154図 S J 73



第155図 S J 73出土遺物

ら口縁部は赤彩されるとみられるが、風化のためにやや剥げ落ちている。内面及び口縁部は横方向のナデ、体部～底部にかけてはヘラズリされる。2の口縁部内側には浅い沈線が入る。胎土には砂粒、白色粒子などが含まれる。色調は淡赤褐色～淡褐色。



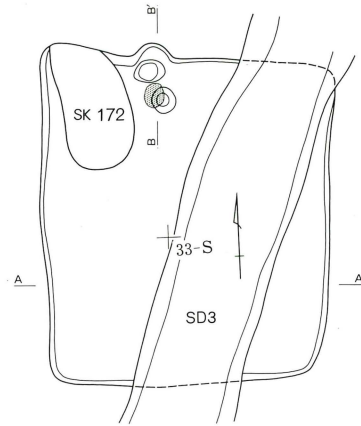
S J 73 竈

S J 74 (第74号住居跡・第156図)

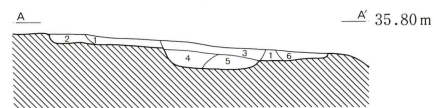
32-RGrid に位置し、東側の斜面部に立地している。SD 3 に及びSK 172と重複し、南北辺の一部を壊されている。規模は2.1m×2.3mの長方形を呈し、竈は北辺やや西寄りに付設される。確認面から床面までの深さは約10cmであるが、床面は東側に向かって緩やかに傾斜している。床面は凹凸が目立ち、貼り床は検出されなかった。竈は煙道部が短く、燃焼部から煙道部にかけての焼土や炭化物も殆ど検出されなかった。全体に小規模であるため、住居としてどの程度機能したか疑問の残るところである。なお、SD 3 などと重複するため、確認できない部分も多く、土器類等の遺物や壁溝、Pit 等は検出されなかった。

S J 75 (第75号住居跡・第157・158図)

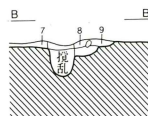
34-RGrid に位置し、住居の西辺をSD 3に壊され、南辺は住居が斜面に立地しているため、確認時には壁を検出することはできなかった。規模は2.5m×3mの長方形を呈し、竈は北東辺やや南寄りに付設される。竈は住居の規模の割には大きく、燃焼部から煙道部へは緩やかに立ち上がる。燃焼部は浅い掘形をもち、底面に僅かに焼土が検出され



S J 74



1. 褐色土 ローム粒少量含む。
2. 明褐色土 ローム粒多量含む。
3. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量含む。
4. 明褐色土 ローム粒多量含む。
5. 暗褐色土 焼土粒微量含む。
6. 暗褐色土 ローム粒含む。
7. 明褐色土 ローム多量含む。
8. 褐色土 焼土粒多量含む。
9. 褐色土 ローム粒・焼土



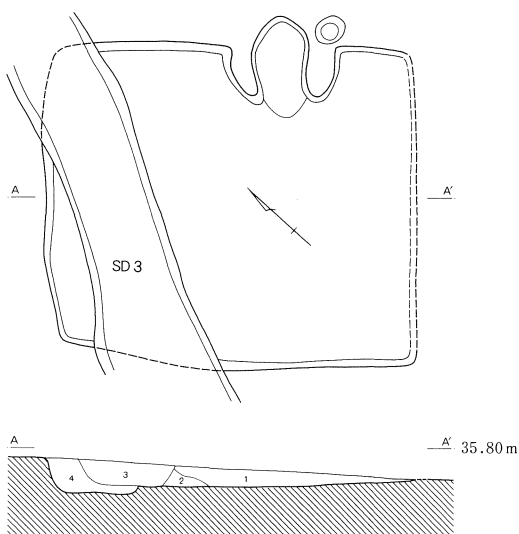
0 2m

第156図 S J 74

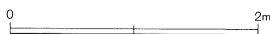
た。袖は残存しているが、崩落が著しい。ロームブロックと黒褐色土の互層によって構築されている。竈右上の Pit は本住居に伴うかどうかは確認できなかった。また、住居内の Pit、壁溝等は検出されなかった。

S J 75出土遺物 (第159図)

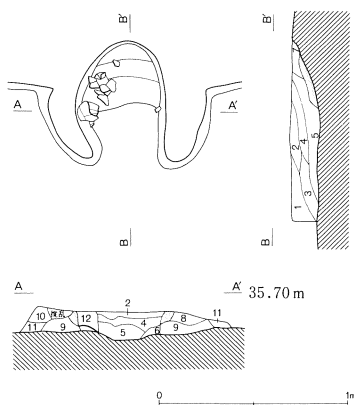
いずれも竈周辺の覆土下層より出土したものである。1～4は土師器坏で、口径と器高は1は11.2cm、3.5cm、2は9.9cm、3.3cm、3は10.8cm、4cm、4は11.1cm、3.9cmを測る。2・4はやや風化が著しいが、内面及び口縁部はナデの後赤彩され、体部～底部はヘラケズリされる。胎土には砂粒を含み、色調は淡赤褐色～淡褐色。5は土師器甕の口縁部破片。口縁部は横ナデ、口径は20cm。6は土師器鉢の口縁部破片。口径23.8cm。5・6は胎土に砂粒、小礫を含み、色調は淡褐色。



- 1. 暗褐色土 焼土粒・炭化粒多量含む。
- 2. 褐色土 ローム粒多量含む。
- 3. 暗褐色土 ローム粒少量含む。
- 4. 淡褐色土 ローム粒少量含む。

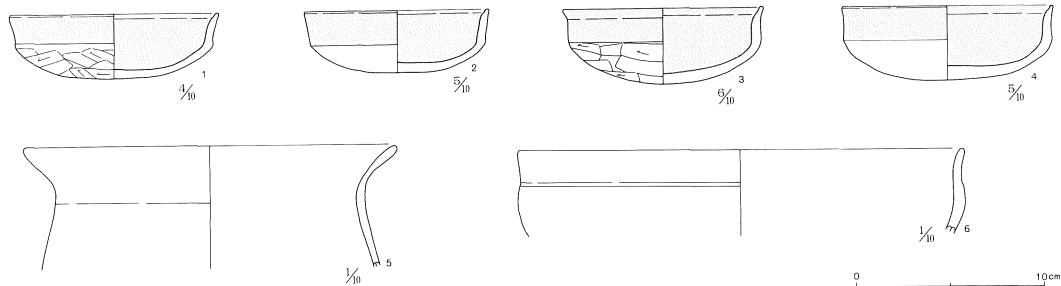


第157図 S J 75



- 1. 暗褐色土 焼土粒・炭化粒多量含む。
- 2. 褐色土 ローム粒・炭化粒含む。
- 3. 褐色土 ローム粒・炭化粒含む。
- 4. 赤褐色土 焼土ブロック多量含む。
- 5. 赤褐色土 焼土粒・炭化粒多量含む。
- 6. 褐色土 焼土粒少量含む。
- 7. 赤褐色土 焼土粒多量含む。
- 8. 暗褐色土 ロームブロック含む。
- 9. 暗褐色土 ローム粒含む。
- 10. 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
- 11. 暗褐色土 ローム粒少量含む。
- 12. 赤褐色土 焼土ブロック含む。

第158図 S J 75竈



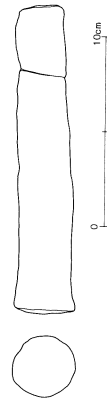
第159図 S J 75出土遺物

S J 76 (第76号住居跡 (第160・161図))

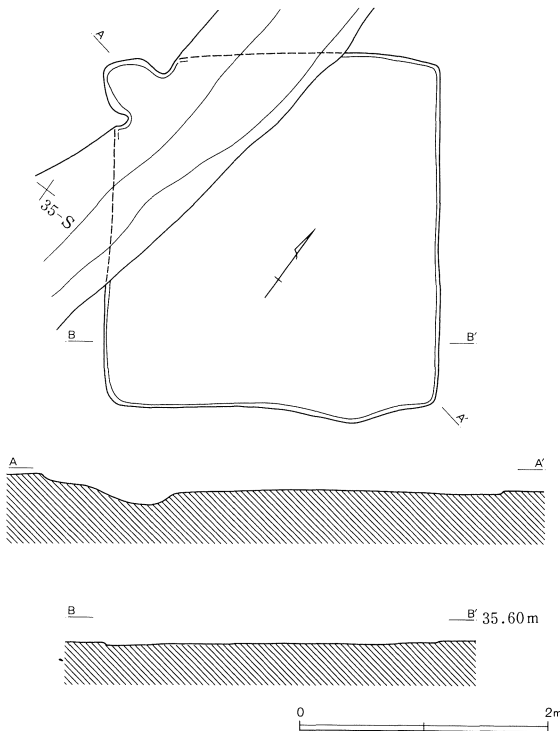
34-S Grid 他に位置し、北西部をS D43に壊されている。形態は一辺3 m弱の正方形を呈し、竈は北西隅に付設される。斜面に立地しているため、確認面からの深さは約5 cmと浅い。覆度は暗褐色を呈し、ローム粒子が少量含まれる。竈はS D43に壊されているため、煙道部と袖の一部が残存する。煙道部内に焼土等は少なく、袖付近で土師器の破片が出土している。

S J 76出土遺物 (第162図)

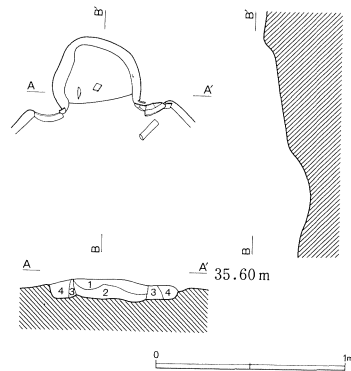
土製の支脚で、円柱状を呈する。ほぼ完形で、全面ナデによって調整される。色調は橙褐色。



第162図 S J 76出土遺物



第160図 S J 76

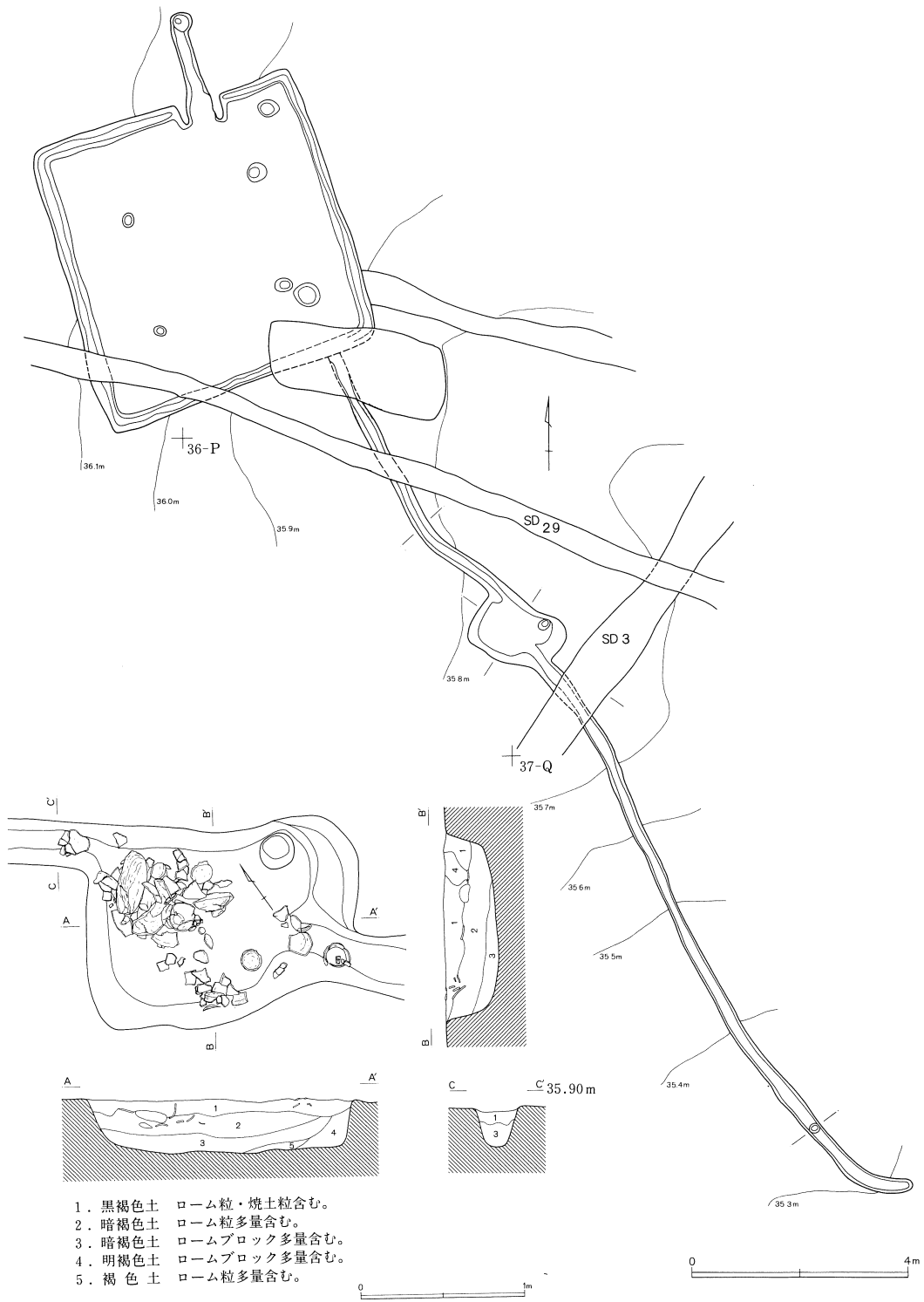


1. 褐色土 焼土粒・カーボン含む。
2. 赤褐色土 焼土ブロック・カーボン粒多量含む。
3. 暗褐色土 焼土粒少量含む。
4. 褐色粘質土

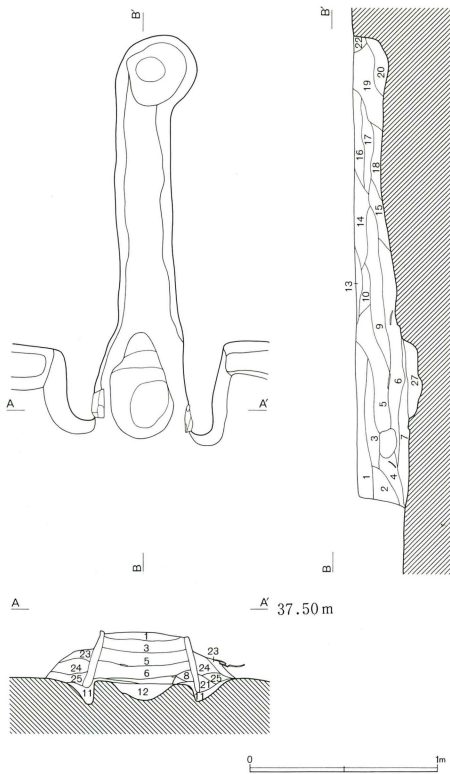
第161図 S J 76竈

S J 77 (第77号住居跡・第163～165図)

35-P Grid 他に位置している。S D28・29と重複し、S D29及び攪乱に西側から南側にかけて一部を壊されている。S J41などと同様排水溝が附属しており、溝は南東方向に構築されている。規模は一辺5.5m程の正方形に近い状態を示し、深さは約20cmを測る。竈は北辺中央やや東寄りに、貯蔵穴は竈の右1mに付設される。竈は燃焼部が僅かに掘り込まれ、緩やかに全長約1.5cmの煙道部へと立ち上がる。煙道部には僅かに炭化物が認められ、先端部はPit 状の掘り込みを有する。袖は灰白色粘土、ロームブロック、暗褐色土の互層で構築される。内壁は石材で補強され、焚き口部の天井石は手前に落下した状態で検出された。Pit は壁より1 m程内側に5箇所 (P 5は建



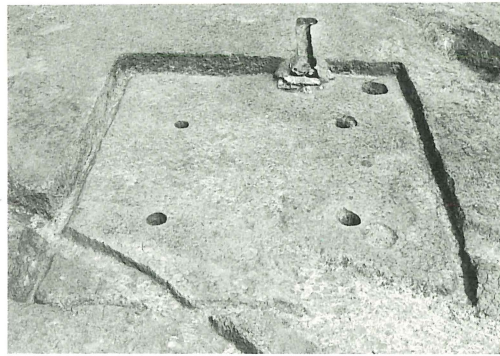
第163図 S J 77全体図及び付属土壌（左下）



1. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒含む。
2. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量含む。
3. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒含む。
4. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒・焼土粒含む。
5. 暗褐色土 焼土粒・炭化物多量含む。
6. 赤褐色土 焼土粒多量含む。
7. 赤褐色土 焼土層
8. 暗褐色土 焼土粒少量含む。
9. 暗褐色土 焼土粒・炭化物少量含む。
10. 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
11. 暗褐色土 ロームブロック含む。
12. 赤褐色土 焼土層・粘土質
13. 黒褐色土 ローム粒少量含む。
14. 暗褐色土 焼土粒・ローム粒少量含む。
15. 暗褐色土 焼土粒・炭化物多量含む。
16. 黄褐色土 焼土粒少量含む。
17. 黄褐色土 焼土粒多量含む。
18. 黄褐色土 ローム粒・炭化物含む。
19. 暗赤褐色土 焼土粒・炭化物含む。
20. 黄褐色土 焼土粒含む。
21. 暗褐色土 焼土粒含む。粘土質
22. 暗褐色土 ローム粒多量含む。
23. 褐色粘土 焼土粒少量含む。
24. 黄褐色土 焼土粒・ローム粒含む。
25. 暗褐色土 ローム粒含む。粘土質。

第164図 S J 77竈

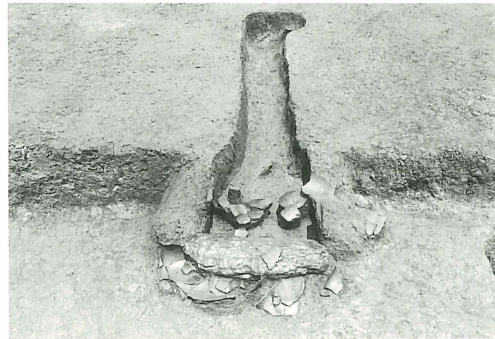
て替えか) 検出され壁溝は、全周する。床面は南東方向に僅かに傾斜していることから、排水は南東隅に集められ、排水溝を通して谷に流されるものとみられる。排水溝は約20m



S J 77



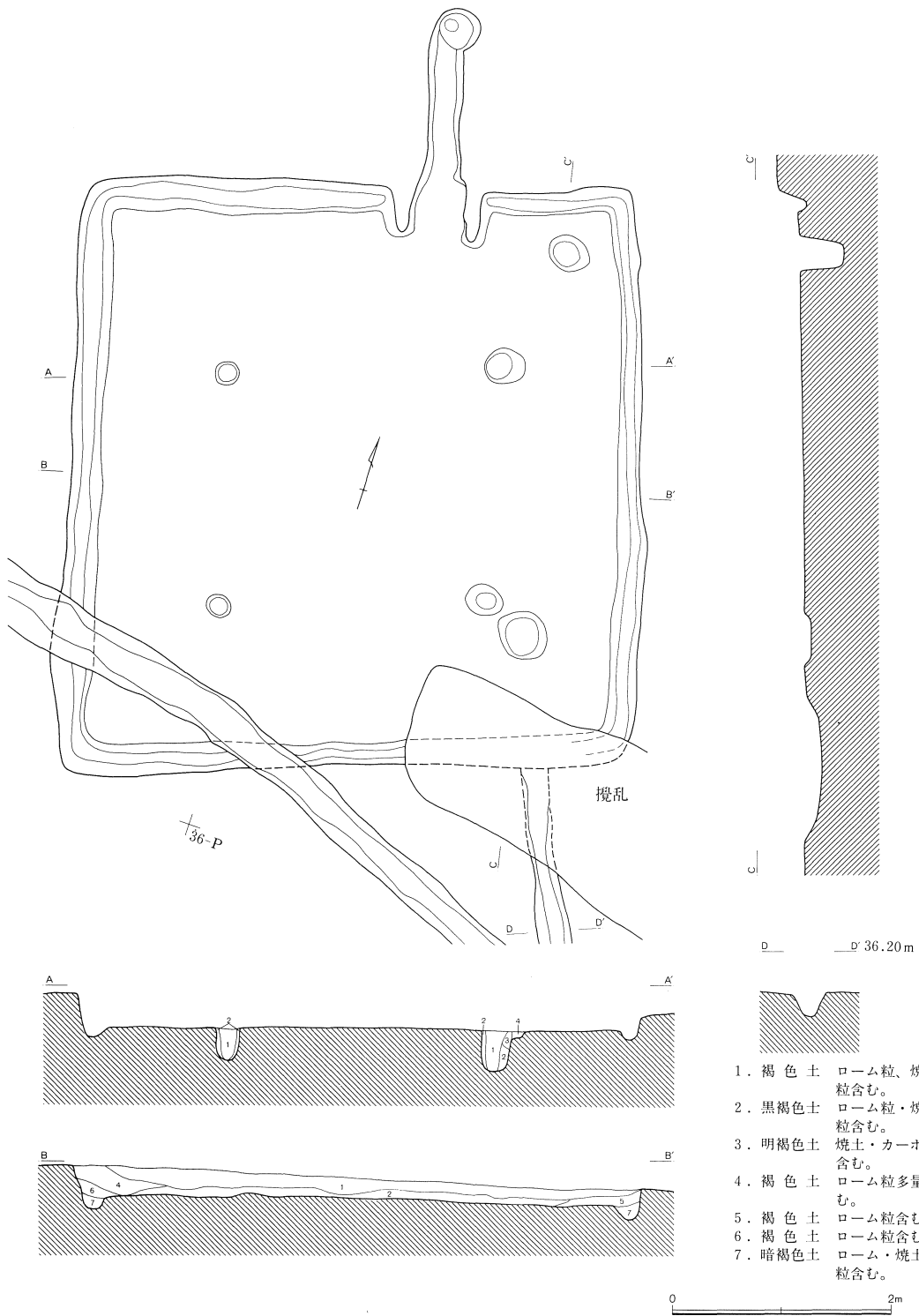
S J 77竈



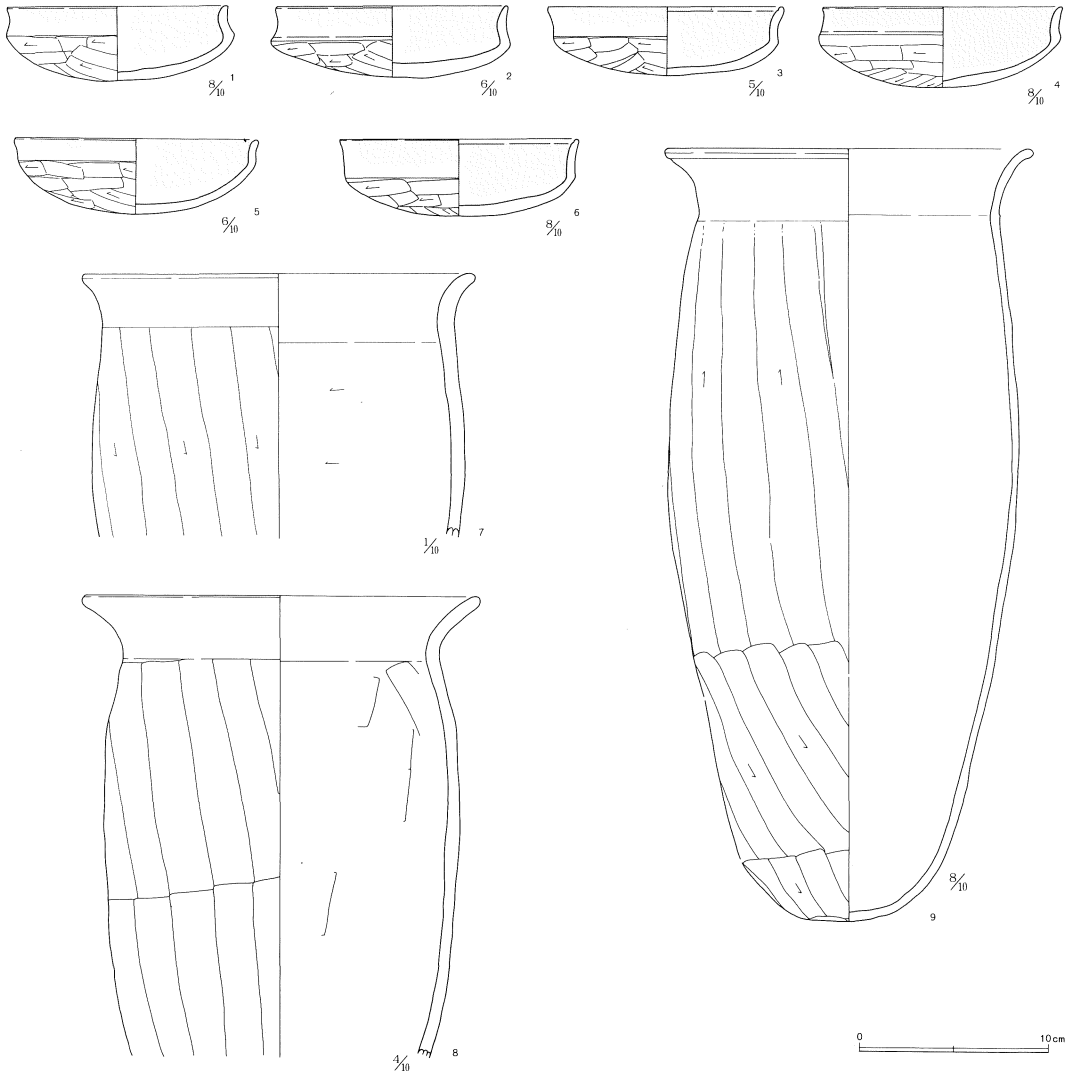
S J 77竈



S J 77付属土境内遺物出土状況



第165図 S J 77



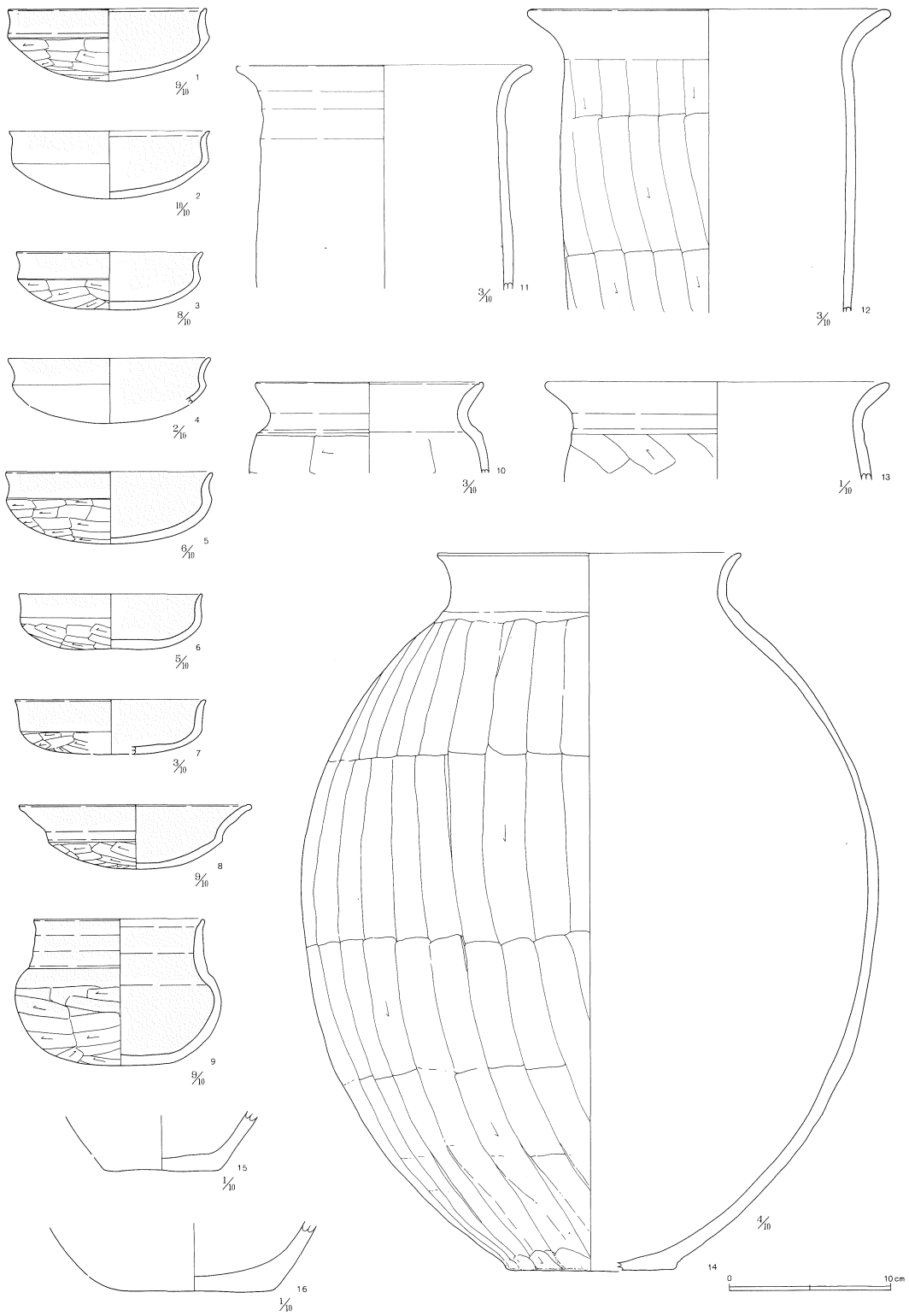
第166図 S J 77出土遺物

の長さがあり、幅は30~40cmを測り、住居の南辺より6m程の地点には1.6m×1.2mの方形の土壇を伴う。この土壇内からは住居とほぼ同時期の土器類が出土している。(第167図)

S J 77出土遺物 (第166図)

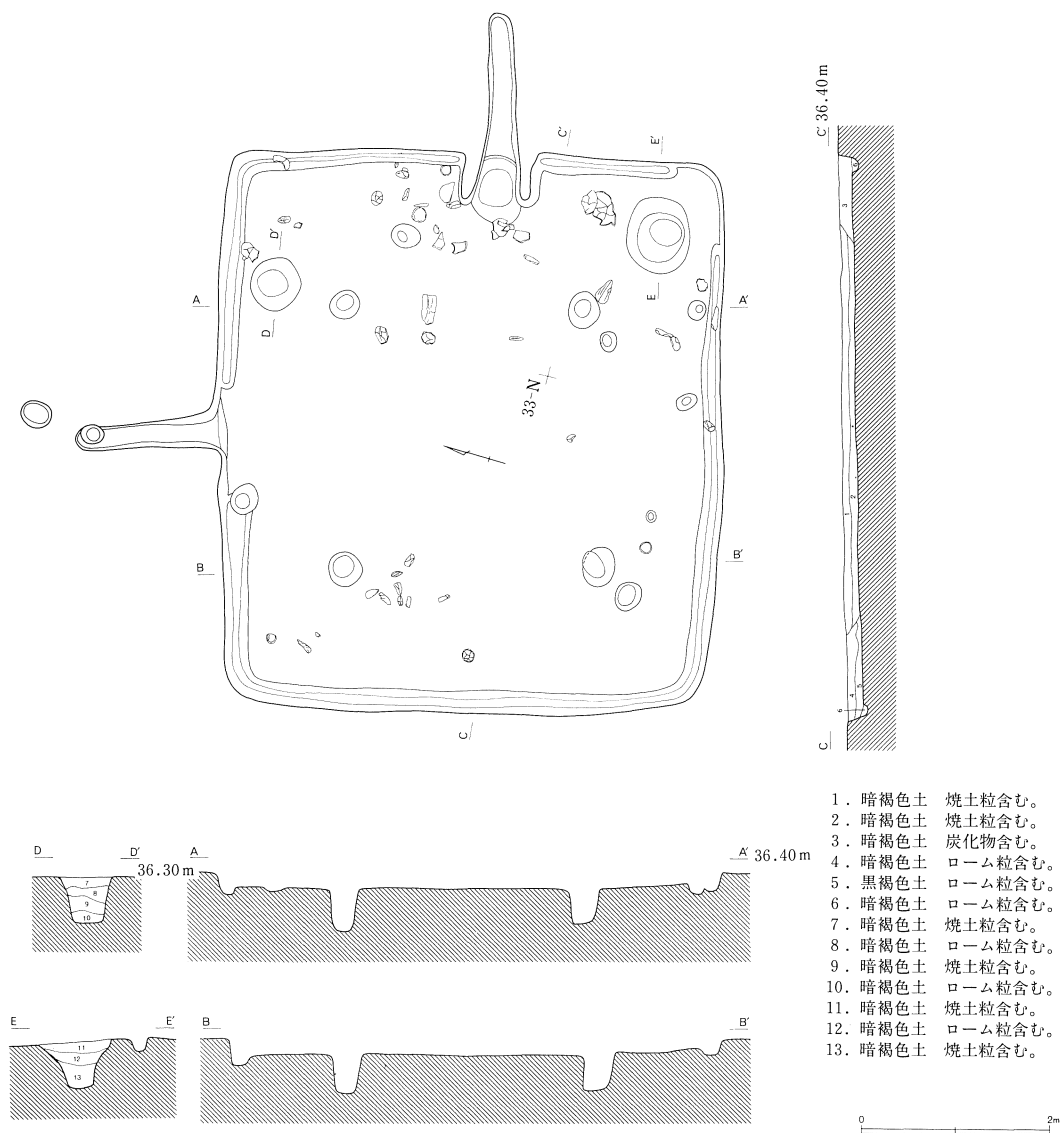
1~6は土師器坏で、内面及び口縁部はナデの後赤彩され、体部~底部はヘラケズリされる。3・4・6は口縁部内側に浅い沈線が入る。口径と器高は1は11.8cm、4cm、2は12.3cm、3.9cm、3は12.6cm、3.8cm、4は12.8cm、4.3cm、5は13cm、4.1cm、6は12.8cm、4.1cmを測る。胎土には砂粒を含み、色調は赤褐色~淡赤褐色。7~9は土師器甕で、口縁部は横ナデ、胴部は縦及び斜め方向のヘラケズリが施される。8の胴部内面は縦と横方向のヘラナデ。7・8の口径は21.2cm、21.4cm、9は19.7cm、器高は41.3cmを測る。胎土には砂粒、小礫を含む。色調は暗赤褐色~淡褐色。

排水溝内土壇出土遺物 (第167図)



第167图 S J 77排水溝内土壙出土遺物

1～8は土師器坏で、内面及び口縁部はナデの後赤彩される。体部～底部はヘラケズリ。1・2は口縁部内側に浅い沈線が入る。口径と器高は1・2は12.4cm、4.3cm、3は11.6cm、3.7cm、4は12.5cm、4.1cm、5は13cm、4.4cm、6は11.5cm、3.4cm、7は12cm、3.4cm、8は14.5cm、4cmを測る。胎土には砂粒を含む。色調は赤褐色～淡赤褐色。9は土師器小形壺。口縁部は横ナデ、胴部～底部はヘラケズリ。口縁部内側には浅い沈線が入る。口径は10.6cm、器高は9.2cm。色調は淡赤褐色。10は土師器小形甕の破片で、口径14.4cm。11～13は土師器甕の破片。口縁部は横ナデ、胴部は縦方向のヘラケズリ。口径は11が18.9cm、12が22.8cm、13が21.8cm。14～16は土師器壺。15・16は底部付近の破片。14は口縁部は横ナデ、胴部～底部にかけては上から下へのヘラケズリ。9～16は胎土に粗い砂粒、小礫、白色粒子などを含む。色調は淡赤褐色～淡橙褐色。

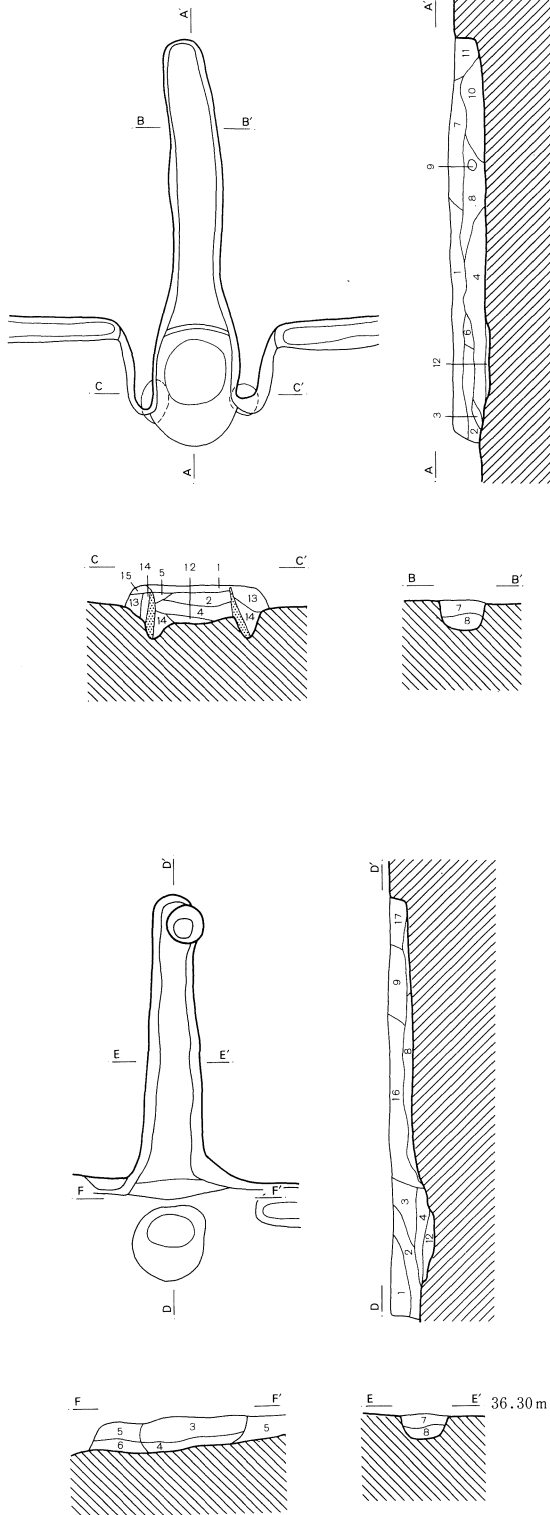


1. 暗褐色土 焼土粒含む。
2. 暗褐色土 焼土粒含む。
3. 暗褐色土 炭化物含む。
4. 暗褐色土 ローム粒含む。
5. 黒褐色土 ローム粒含む。
6. 暗褐色土 ローム粒含む。
7. 暗褐色土 焼土粒含む。
8. 暗褐色土 ローム粒含む。
9. 暗褐色土 焼土粒含む。
10. 暗褐色土 ローム粒含む。
11. 暗褐色土 焼土粒含む。
12. 暗褐色土 ローム粒含む。
13. 暗褐色土 焼土粒含む。

第168図 S J 78

図)

33・34-NGrid 他に位置している。形態は5.5m×6mの長方形を呈し、確認面から床面までの深さは約15cmを測る。竈は北辺中央(北竈)及び東辺中央(東竈)に付設され、覆土の状況から北竈が古く、東竈が新しいことが確認できた。北竈は煙道部が約1.5cmあり、燃焼部からは緩やかに立ち上がる。第163図中の先端の Pit は後出のものである。燃焼部は東竈構築時に付属する貯蔵穴とともに埋め戻されており、その時点で袖も壊されたものと考えられる。断面には焼土ブロックや粘土ブロックは見られるものの、痕跡は不明瞭である。東竈は北竈と同様、燃焼部は浅く、底面に2cm程の焼土を残す。煙道部は約1.6mの長さがあり、北竈程の傾斜は見られず、床面とほぼ同位置で平坦である。袖は焚き口の内壁に石材を用い、その周りにロームブロックや黒褐色土を積んで構築している。壁溝は北竈と同様竈の袖

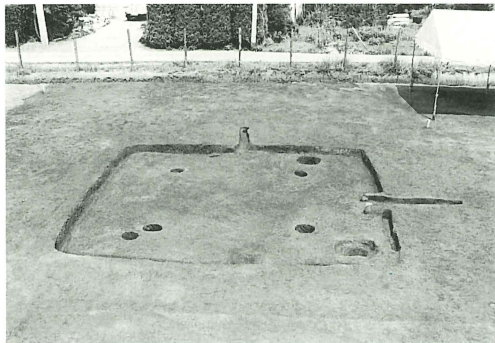


1. 暗褐色土 焼土粒・炭化物含む。
2. 暗褐色土 焼土粒多量含む。
3. 明褐色土 焼土粒多量含む。
4. 暗褐色土 焼土粒多量含む。
5. 明褐色土 焼土ブロック多量含む。
6. 暗褐色土 焼土粒多量含む。
7. 暗褐色土 焼土粒・ローム粒含む。
8. 暗褐色土 焼土粒多量含む。
9. 明褐色土 焼土ブロック含む。
10. 明褐色土 土焼ブロック多量含む。
11. 暗褐色土 焼土粒・ローム粒含む。
12. 暗褐色土 焼土粒含む。
13. 黄褐色粘土
14. 明褐色粘土
15. 暗褐色土 焼土粒少量含む。
16. 明褐色土 炭化物多量含む。
17. 黒褐色土 焼土粒・ローム粒含む。

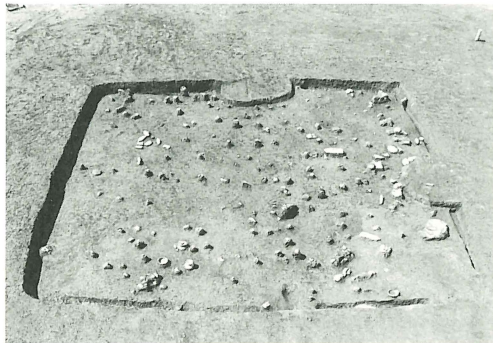
0 2m

第169図 S J 78竈A(上)・B(下)

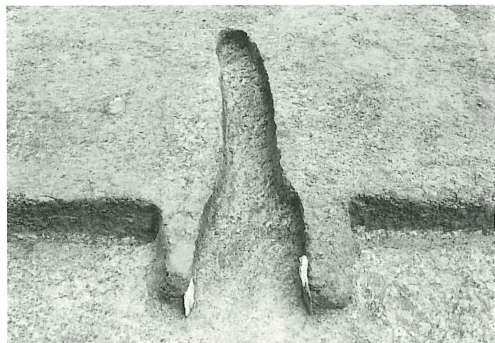
の手前で止まり、S J 57のように壁溝を全周させた後に竈を構築するのとは異なっている。貯蔵穴は北竈と同様竈の右約1mの地点に大形のものが付設されている。なお、東竈構築にともなって廃棄された北竈に燃焼部付近には新たな壁溝は検出されなかった。Pit は6基検出されたが、基本的にP 1～P 4の4本柱穴の住居とみられる。また、床面は平坦で、ほぼ全面にわたって、貼り床が認められた。貼り床の覆土中には焼土ブロックが所々にみられるが、これは東竈構築にあたって、廃棄した北竈周辺の土を用いたためと考えられる。



S J 78



S J 78遺物出土状況



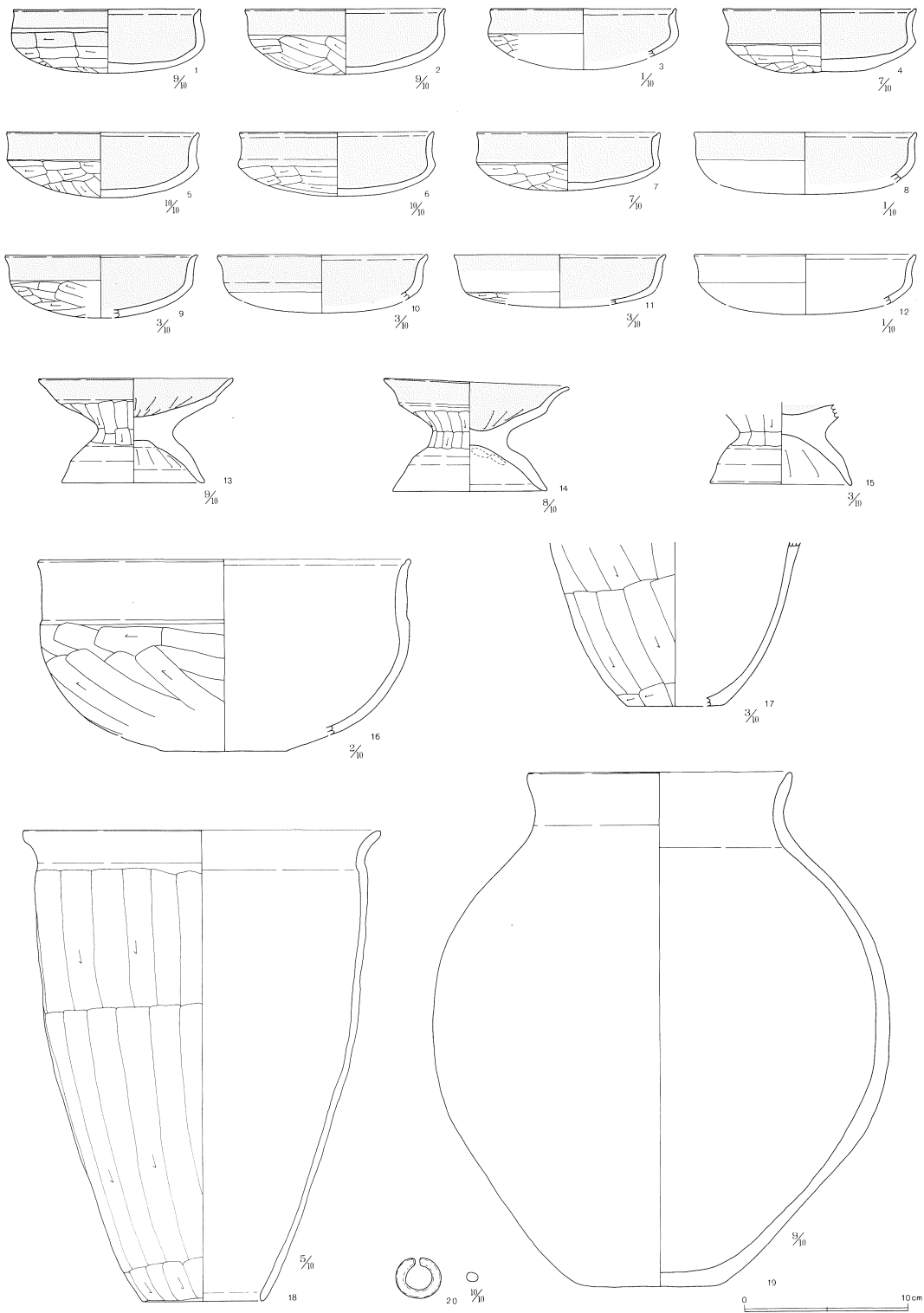
S J 78竈



S J 78遺物出土状況

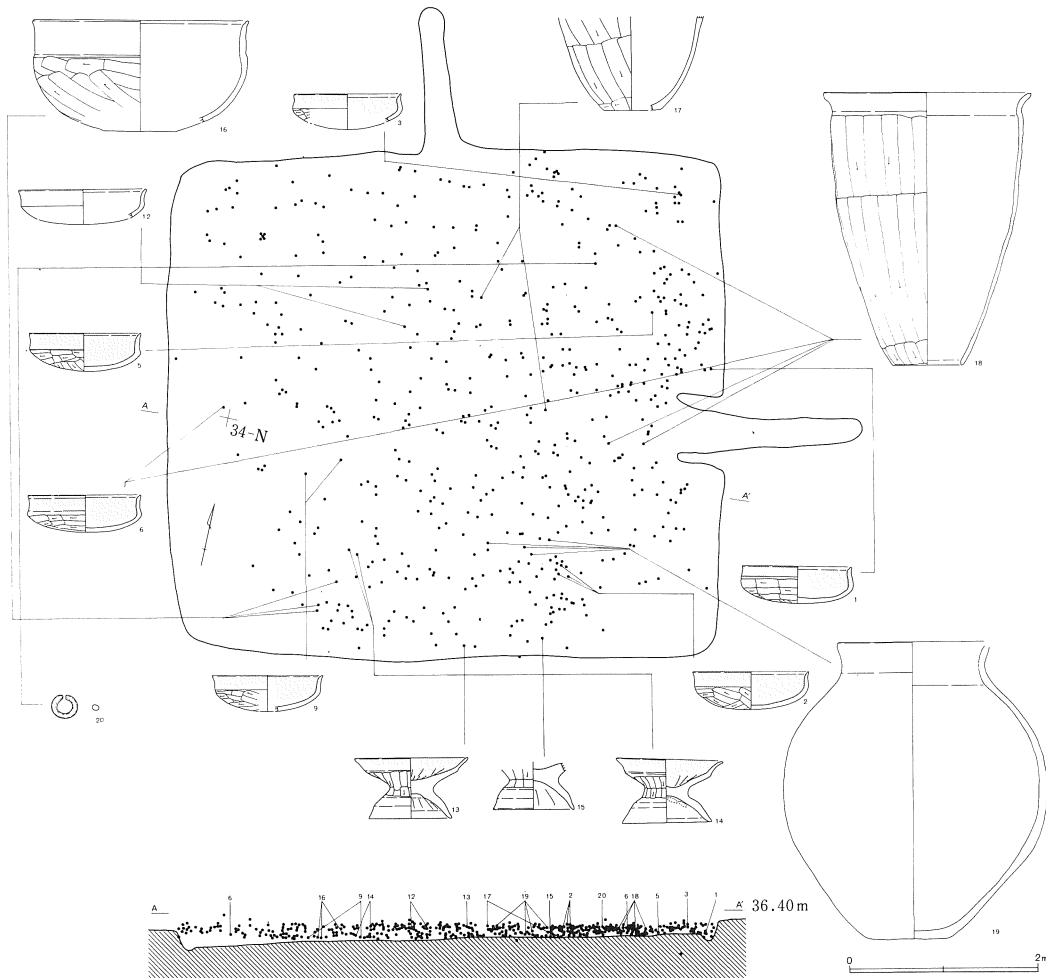
S J 78出土遺物 第170図

図示した遺物の多くは、覆土下層または床面直上から出土している。1～12は土師器坏で、11・12を除き、内面及び口縁部はナデの後赤彩が施される。体部～底部はヘラケズリが施される。いずれも口唇部が外反し、1・3～8・10は内側に浅い沈線が入る。口縁部の形態は内湾するもの、直立するもの、外傾するものに分類でき、底部の形態も7のように平底に近いものも存在するが、基本的には丸底になるものが多い。口縁部と体部との境の段は直立するものにはほぼ限られる。口径と器高は1は11.5cm、4cm、2は12.5cm、4cm、3は11.5cm、3.8cm、4は11.8cm、4cm、5は12cm、4cm、6は12.1cm、4cm、7は11.4cm、3.8cm、8は13.3cm、3.9cm、9は11.8cm、3.8cm、10は13cm、3.6cm、11は13cm、3.4cm、12は13.3cm、3.6cmを測る（推定値含む）。胎土には砂粒、白色粒子などが含まれる。色調は淡赤褐色～淡褐色。13～15は土師器高坏で、器面の風化が著しい。口



第170图 S J 78出土遺物

縁部及び脚部下半は横ナデ、体部～脚部上半にかけては縦方向のヘラケズリ、内面は坏部・脚部とも横方向のヘラナデが施される。14の脚部内面は指圧痕を残している。また、坏部内面から脚部にかけて赤彩が施される。口径と器高は13は12cm、6.5cm、14は11.5cm、6.8cmを測る。胎土には砂粒、白色粒子、黒色粒子が含まれる。色調は淡赤褐色～淡褐色。16は土師器鉢の口縁部から胴部にかけての破片。口縁部は横ナデ、胴部は横方向のヘラケズリの後、斜方向のヘラケズリ。胎土には粗い砂粒、白色粒子などが含まれる。色調は淡橙褐色～淡褐色。17は土師器甕の胴部下半の破片。外面は上から下へのヘラケズリ。胎土に小礫を含む。色調は淡橙褐色。18は土師器甕で、口縁部は横ナデ、胴部は上から下へのヘラケズリ、端部もヘラによって面取りされる。口径は23cm、器高は29.7cm、孔径は7.4cmを測る。胎土には粗い砂粒、小礫を含む。色調は淡橙褐色。19は土師器壺。口縁部は横ナデ、胴部は風化が著しい。口径は16.2cm器高は32.5cmを測る。胎土に粗い砂粒を含む。色調は淡褐色。20は金環で、鍍金が風化で剥がれ、地金の青銅が一部露出する。

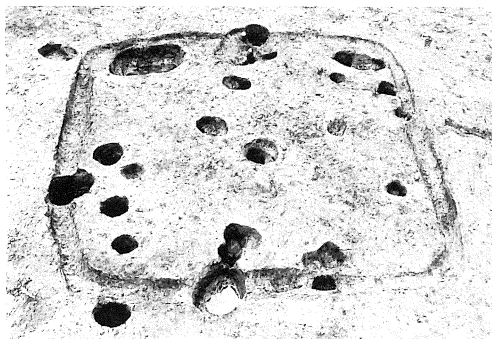


第171図 S J 78遺物分布図

S J 79 (第79号住居跡・第172図)

42・43-L Grid 他に位置している。規模は一辺約4mの正方形を呈し、竈は北辺中央に付設される。確認時において床面は露出しており、

覆土は殆ど残っていない状態であった。一部残っている地点は黒褐色を呈し、ロームブロックが含まれ、基本的に壁溝や貯蔵穴の覆土と同質である。住居内には10数基の Pit が検出され、一部には重複がみられるが、覆土の状態や色調が類似しており、実際に住居に伴う Pit の判断基準が曖昧である。竈の場合は Pit が明らかに後出で、

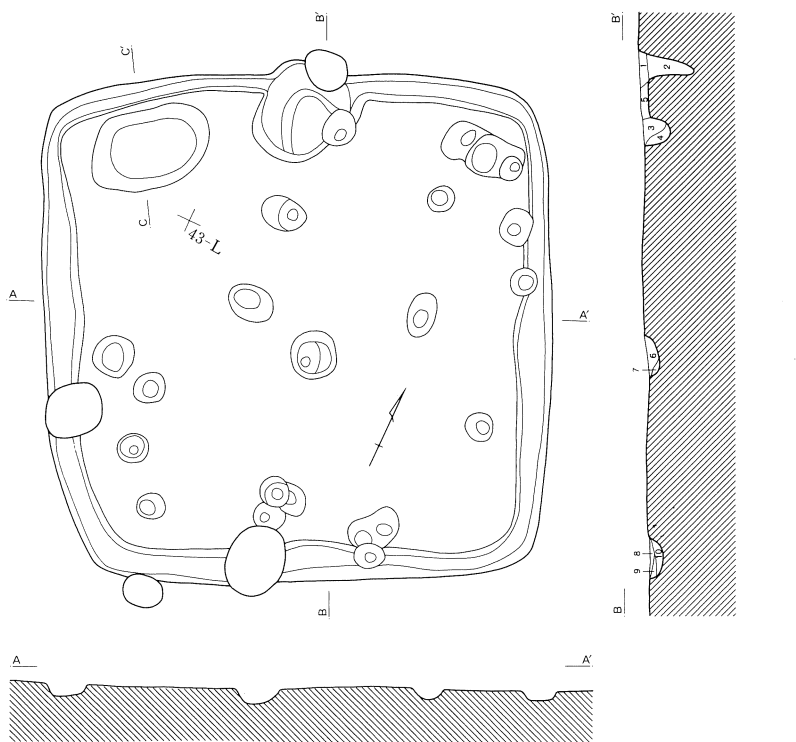


S J 79

にも攪乱を受けているとみられ、

燃焼部や煙道部内の焼土や炭化物はやや浮いた状態で検出されており、天井部や側壁等の崩落ではないと考えられる。貯蔵穴は竈の西隅に付設され、楕円形を呈する。深さは30cm程で、覆土は黒褐色を呈し、ロームブロックが平均的に含まれる。壁溝は全周し、竈は攪乱等によって形状が変わってしまったために

不明瞭な点が残るが、袖の外側まで及ぶものと考えられる。なお、土器類等の遺物は検出されなかった。

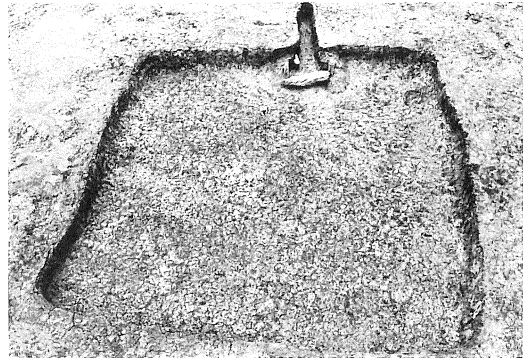


1. 褐色土 焼土粒少量含む。
2. 褐色土 粘土粒少量含む。
3. 褐色土 焼土粒・粘土粒含む。
4. 暗褐色土 ローム粒少量含む。
5. 褐色土 焼土ブロック含む。
6. 黒褐色土 焼土粒含む。
7. 褐色土 粘土
8. 暗褐色土 ローム粒微量含む。
9. 明褐色土 ローム粒多量含む。
10. 暗褐色土 ローム粒少量含む。
11. 明褐色土 ローム粒含む。
12. 褐色土 ローム粒含む。
13. 暗褐色土 ローム粒含む。
14. 褐色土 ローム粒含む。

第172図 S J 79

S J 80 (第80号住居跡・第173・174図)

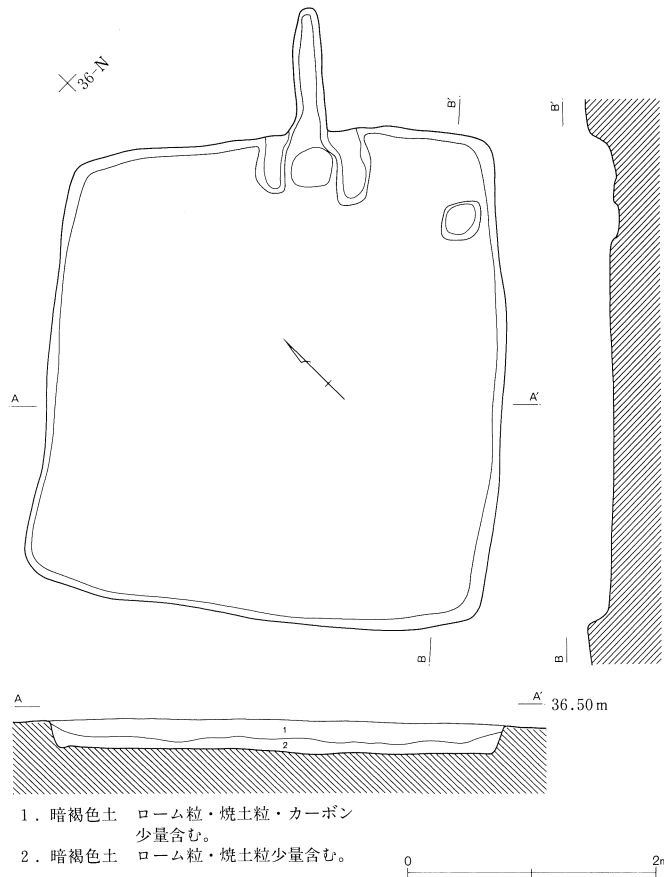
36-M・NGrid に位置している。形態は一辺3.5m×4 mの不整形を呈し、確認面から床面までの深さは、約30cmを測る。床面はやや凹凸が目立つものの北東部には貼り床が検出された。竈は北東辺中央東寄りに、貯蔵穴は北東隅に付設される。竈は約1 mの煙道部をもち、掘り込みの浅い燃焼部からは緩やかに立ち上がる。焼土や炭化物は覆土上層に多い。焼土は燃焼部及び袖の周辺に集中しており、比較的掘り込みのある部分には2 cmほどの堆積が認められる。袖は一部の竈ではみられるが、焚き口に石材を据え、その外側にロームブロックや粘土を積んで構築されている。天井石は粘板岩製で、落下した状態で出土している。焚き口の石材に天井石がのせてあったことを想定すると、間口は約45cm、高さ約20 cmの規模であったとみられる。貯蔵穴は約30cm四方の方形を呈し、深さは15cm程である。遺物は竈及び貯蔵穴周辺で出土している。なお、壁溝、Pit 等は検出されなかった。



S J 80

S J 80出土遺物 (第175図)

1・2は土師器坏で、1は内面及び口縁部はナデの後、赤彩される。ともに体部～底部はヘラケズリ。口径と器高は1は14.2cm、4.6cm、2は13 cm、3.6cmを測る。胎土には



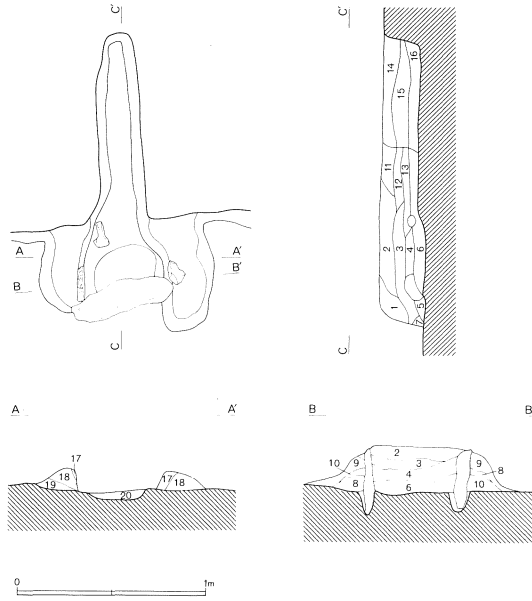
1. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒・カーボン少量含む。
2. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量含む。

0 2m



S J 80
貯蔵穴付近遺物出土状況

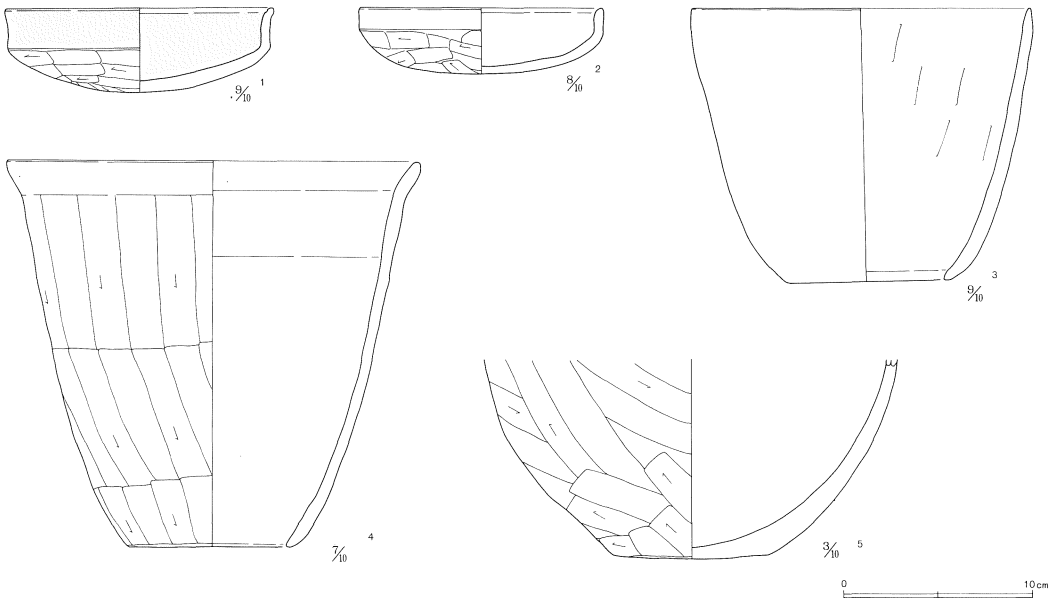
第173図 S J 80



- | | |
|----------|---------------|
| 1. 暗褐色土 | ローム粒少量含む。 |
| 2. 黒褐色土 | ローム粒少量含む。 |
| 3. 褐色土 | ローム粒・焼土粒少量含む。 |
| 4. 黄褐色土 | ローム粒多量含む。 |
| 5. 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒少量含む。 |
| 6. 明褐色土 | 焼土ブロック多量含む。 |
| 7. 明褐色土 | ロームブロック含む。 |
| 8. 明褐色土 | 焼土ブロック含む。 |
| 9. 褐色土 | 焼土粒・カーボン少量含む。 |
| 10. 褐色土 | 焼土粒・ローム粒少量含む。 |
| 11. 暗褐色土 | 焼土粒・カーボン少量含む。 |
| 12. 褐色土 | 焼土ブロック少量含む。 |
| 13. 褐色土 | 焼土ブロック多量含む。 |
| 14. 暗褐色土 | ローム粒少量含む。 |
| 15. 暗褐色土 | ローム粒多量含む。 |
| 16. 暗褐色土 | 焼土ブロック少量含む。 |
| 17. 黒褐色土 | 焼土粒多量含む。 |
| 18. 黄褐色土 | 焼土粒少量含む。 |
| 19. 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒少量含む。 |
| 20. 赤褐色土 | 焼土層・炭化物含む。 |

第174図 S J 80竈

砂粒、白色粒子を含む。色調は赤褐色～淡褐色。3・4は土師器甑で、3はやや風化が著しい。4は口縁部は横ナデ（内面にナデは胴部上半まで及ぶ）、胴部は縦方向のヘラケズリ。内面は横方向のヘラナデ。口径と器高は3は19cm、14.4cm、4は22cm、20.5cmを測る。胎土には砂粒、小礫を含む。色調は3は橙褐色、4は淡褐色。5は土師器壺の底部周辺の破片。胴部外面及び底部はヘラケズリ。胎土に小礫を含む。色調は淡褐色。



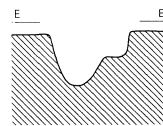
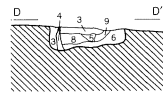
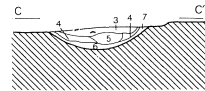
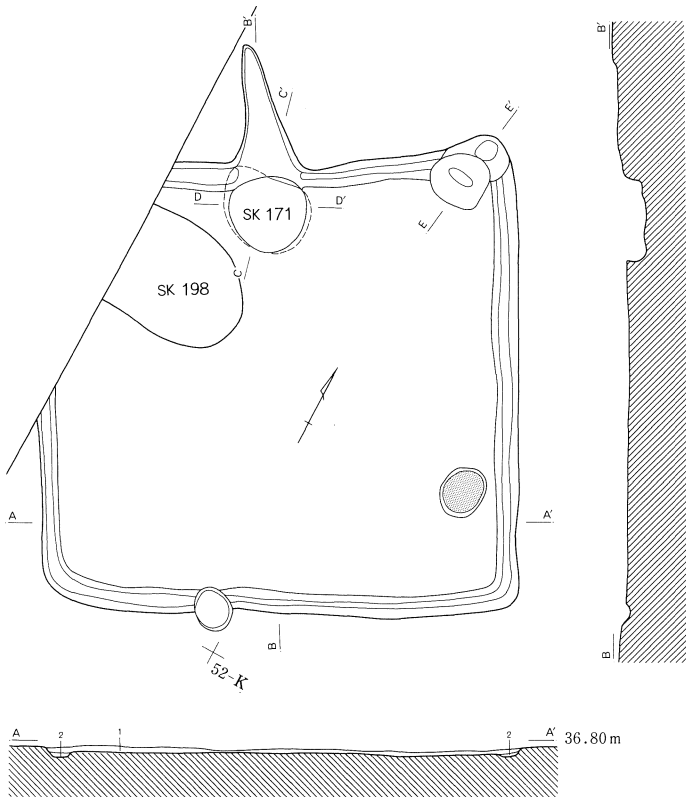
第175図 S J 80出土遺物

S J 81 (第81号住居跡・第176図)

51-J・KGrid に位置し、北西隅は調査区外に含まれる。規模は一辺3.8m程の正方形を呈し、確認面から床面までの深さは、約5cmである。床面は凹凸が目立ち、所々で確認時に露出している箇所がみられた。竈は北辺中央に付設され、燃焼部には焼土は認められるが、覆土の状態や掘形の形状が不自然であることから、攪乱を受けているものと考えられる。煙道部は約1mの長さを持ち、燃焼部からは緩やかに立ち上がる。壁溝は全周し、北隅と南辺を Pit との重複によって壊されている。この Pit は壁溝を壊しているものの、床面から掘り込んでいることから、住居に伴うものと考えられる。また、床面には焼土は殆ど検出されなかったが、東辺には床面直上に投棄されたとみられる焼土が直径約30cm、厚さ1.5cmにわたって検出された。なお、土器類等の遺物や柱穴に該当する Pit は検出されていない。



S J 81



1. 黒褐色土 ローム粒多量含む。
2. 暗褐色土 ロームブロック含む。
3. 暗褐色土 焼土粒多量含む。
4. 暗褐色土 炭化粒含む。
5. 赤褐色土 焼土粒多量含む。
6. 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
7. 明褐色土 ロームブロック少量含む。
8. 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
9. 黒褐色土 焼土粒含む。

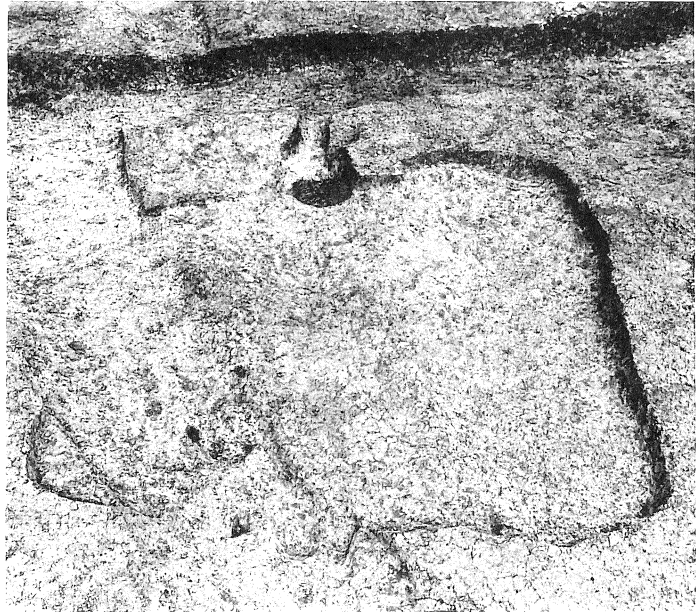
第176図 S J 81

S J 82 (第82号住居跡・第177・178図)

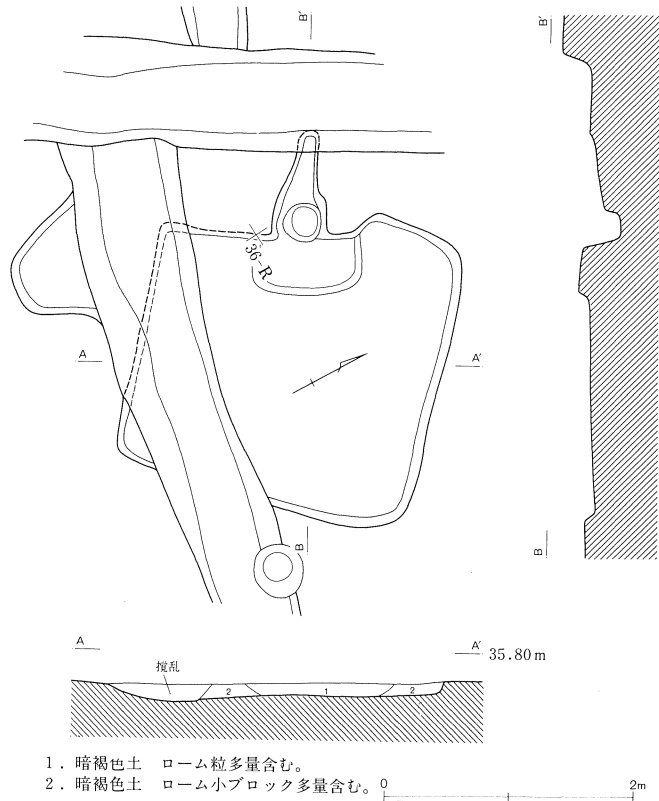
35・36—RGrid 他に位置している。S D 27に南西辺を壊されるが、残存する北側の竈付近の形状は認められず、一部床面からの立ち上がりが確認できるため、第177図のような一辺2 m余りの変則的な形状になると考えられる。竈は北西辺中央に付設され、先端部をS D 3に壊されている。袖は既に確認時において残存しておらず、焚き口から燃焼部付近も明確な重複関係は確認できなかったが、煙道部内には直径25cm、深さ20cmの円形の Pit が掘られ、覆土中にはロームブロック、焼土粒子が含まれる。しかし、覆土の色調は住居内と同じ黒褐色を呈するものの、全体に軟質であるため、後出の Pit である可能性が高い。Pit の南側には方形の高まりがあり、床面からは7~8cmの高低差がある。床面は平坦であるが、谷方向に緩やかに傾斜している。貼り床は確認できなかった。また、壁溝や Pit 等は検出されなかった。

S J 82出土遺物 (第179図)

1 は床面より出土した土師器坏で、風化が著しい。口縁部は横ナデ。口径は13.3cm、器高は3.7cmを測る。胎土には粗い砂粒、白色粒子、黒色

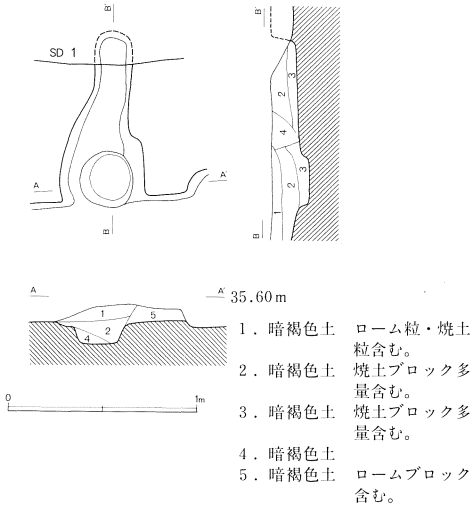


S J 82

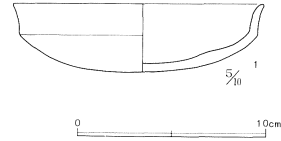


第177図 S J 82

粒子などが含まれる。色調は淡橙褐色。



第178図 S J 82竈



第179図 S J 82出土遺物

a 小結—排水溝をもつ住居について—

塚の越遺跡では古墳時代後期の住居群において、一般的な竪穴住居とともに「排水溝」とみられる溝状遺構を伴う住居群の存在が確認された。塚の越遺跡における古墳時代後期の住居跡は約43軒検出され、そのうちの8軒が排水溝をもつ住居で占められる。いずれも立地的には台地の斜面部に近い位置に構築され、住居の隅に集められた排水を斜面の傾斜を利用して谷に流す仕組みになっている。これらの住居は台地の先端または斜面に近い位置に立地していることから、選地に関しては台地の中央より斜面に近い方が自然環境や配置上好ましい条件を備えていたものと考えられる。

既に前項の中で塚の越遺跡における自然環境が、どのように遺構に反映していたかは触れたところであるが、各時代を通して言えることは調査された竪穴遺構が比較的浅いことである。当時の生活面が明らかになっていないため、検出された遺構だけを取り上げて「浅い」「深い」を論じることは大変な危険を伴っており、遺構についての誤認にも結びつき兼ねない。しかしながら、過去に調査された周辺の遺跡を見ても掘り込みの深い遺構は少なく、当時の生活面からの掘り込みを考える場合、現地表面を考慮しても古代や中世の生活面から遺構の検出面までの「差」は20~30cmであろう。特に、高台に立地する塚の越遺跡の井戸については深さ2m弱のものが多く、20cm余りを足しても2m強の深さにしかならない。その深さで井戸としての機能が果たされていたかどうかは疑問の残るところであるが、現在でも湧水点は高く、1m余りの掘り込みでも水が湧き出ることが多いことを考慮すると井戸としての機能は十分保っていた可能性が高いとみることができる。一段低い(5m~8m)台地に位置する稲荷前遺跡や金井遺跡においては深さ4m~5mの規模をもつ井戸が存在することは大きく矛盾する点である。このような条件下に問題の排水溝をもつ住居は構築された訳であるが、竪穴の深さは確認面から20cm余りと他の竪穴住居と何等変化は認められないが、S J 50・S J 63を除いては他の住居に比べて大形である。また、S J 41とS J 42、S J 56とS J 57、S J 50とS J 67は対になるような位置関係に配置されており、一定の距離を保って配されて

いることは注目できる事実である。これに対してS J 63とS J 77についてはそうした対になるような住居が検出することができなかった。一方では2軒の住居による組み合わせでは成立しえない集落内の構造も垣間見ることができる。対になるとみられる6軒による組み合わせは大形の住居と大形住居、小形住居と小形住居という同規模の住居によって構成され、現状で判断する限りは排水溝や他の付属する施設において共用するものをもたない。排水溝は構築された住居の立地に左右されるが、概ね10m～15mの長さもち、基本的に住居の隅付近から1m～2mのトンネル部分を設け、他は露出した状態（実際には蓋がされていた可能性もある）で谷地形の途中まで掘られている。溝は初めは緩やかな傾斜がつけられるが、途中から等高線に直角に掘られ、次第に角度が急になっている。溝の途中にはS J 57やS J 77のように土壌状の掘り込みをもつものがあり、住居内と同時期の土器群を伴っている。共伴遺物には大形の礫があるが、その性格は単なる溜まりの部分以外のものかどうかは不明である。一方、住居内においてはS J 50・S J 63を除く6軒について床面及び壁溝には緩やかな傾斜が排水溝の入り口に向かってつけられている。また、S J 41・S J 42・S J 56・S J 57の壁溝は外側に3cm前後の幅で抉り込まれており、特にS J 57の排水溝には土層断面において矢板状の痕跡が壁に沿って認められ、抉られた部分を排水路とした可能性が高い。こうした根拠を基に住居構造を考えてみると、堅穴を掘り込んだ際に出た排土は周堤として利用され、矢板状の壁材の外側の支えとなった壁立式の建物と考えられる。屋内は主柱と組み合わせられ、屋根形態は寄せ棟造とみられ、従って渋川市中筋遺跡のような垂木が周堤に突き刺さるような状況は生まれない。壁立式の建物の存在については、従来伏せ屋としてきた堅穴住居の復元の在り方を全面的に否定するものではないが、このような発掘調査によって得られた情報の有効な活用が、少なからず建物構造上の問題の解決に向けて寄与するものと考えられる。

引用・参考文献

大塚 昌彦（1987）『中筋遺跡』渋川市発掘調査報告書 第13集 渋川市教育委員会

屋間 孝志（1990）「古墳時代後期の住まいと工夫」まがたま通信 第3号 埼玉県埋蔵文化財調査事業

団



S J 41北西隅排水溝

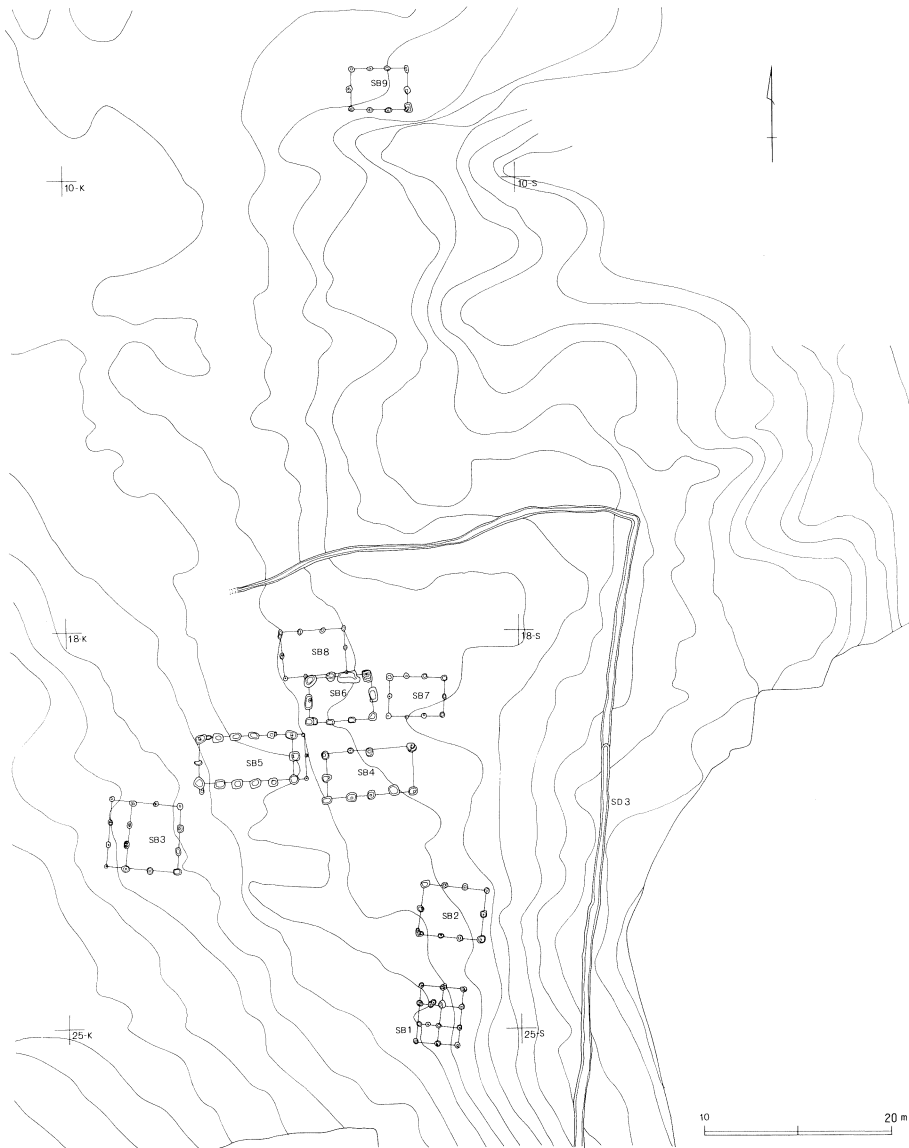


S J 50北東隅排水溝

(2) 掘立柱建物跡

塚の越遺跡では北側の調査区（B区）において、9棟の掘立柱建物跡が検出された。その内8棟は東側に集中して立地している。また、重複関係から少なくとも二時期以上の変遷が想定可能である。柱掘形からは8世紀後半から9世紀初頭にかけての遺物が出土している。

図中におけるスクリーントーンは遺構の確認時において柱痕の確認できた位置を示す。



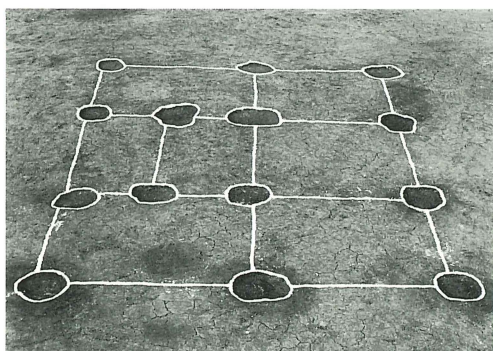
第180図 掘立柱建物跡概略図

S B 1 (第1号掘立柱建物跡・第181図)

24・25-QGrid に位置している。規模は桁行3間(6.15m)×梁行2間(4.4m)の総柱建物である。柱掘形は直径50cm程の円形または楕円形を呈し、深さは60cm前後を測る。覆土は黒褐色をベースとし、埋め戻された土の中にはロームブロックが多く含まれる。柱痕は直径15cm程で、すべての柱掘形において柱の抜き取り痕は認められなかった。また、断面で見る限り、柱の埋設に関しては黒褐色土とロームブロックを多く含む黒褐色土との互層にして5回前後の突き堅めが行われているものと考えられる。柱掘形はP2、P5、P6において重複関係がみられるが、いずれも新しい柱掘形が柱間の軸線上にのってくる。先に掘られた柱掘形はこの建物を建てる上でどのような意味を持っていたかは不明であるが、新しく掘られた柱掘形は少なくとも他の柱掘形と同規模であり、建物の構造上同程度の柱が必要であったのは事実であろう。また、この建物は他の建物に比べて深く掘られており、構造上は倉庫的な構造物としての性格を持っていたものと考えられる。一方、この建物は主軸がS B 2、S B 3、S B 7などと共通した方位を示しており、同時期の一群の可能性が高い。なお、確認時において焼土や遺物については検出されなかった。

S B 2 (第2号掘立柱建物跡・第182図)

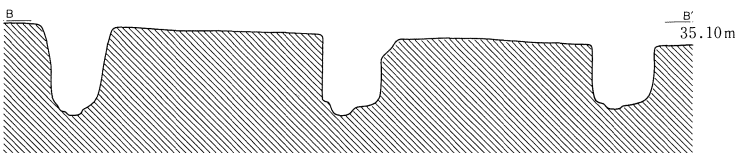
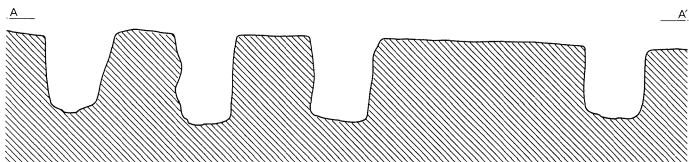
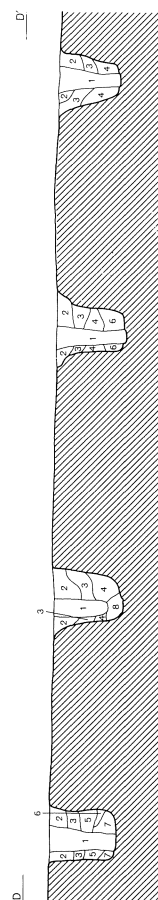
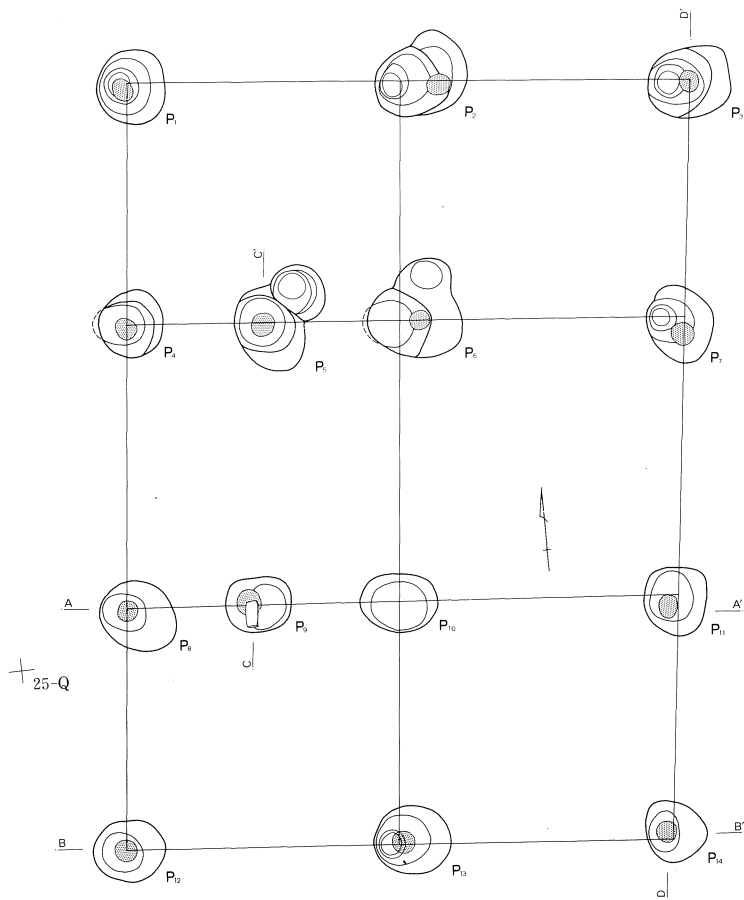
22・23-QGrid 他に位置している。S B 1からは柱間でS B 2の桁行寸法の3間(5.5m)北側にあたる。S J 24、S E 31と重複し、S J 24を切り込み、S E 31にP1の一部を壊されている。規模は桁行3間(6.5m)×梁行2間(5.3m)の長さをもっている。確認面はやや東側に傾斜しており、東に位置している柱掘形は実際にはもう少し深くなると見られる。柱掘形は基本的に方形(P7はL字)を呈し、大きさの平均値は60cm×50cm×45cmで、S B 1に比べると建物の構造上の相違点が認められる。柱痕は断面で見る限り、直径10~12cm程の材が使用されたものと考えられる。柱の埋設に関しては、柱が置かれていた位置は2cm前後のくぼみが存在し、埋設する際に柱を通して柱間の位置を確認し、固定した状態で三回程の突き堅めを行って埋め戻したのと考えられる。柱間は桁と梁が各々均等に配置されている。また、P6の柱掘形下層(柱埋設時の最下層)からは、「鬼」とみられる墨書土器(須恵器坏)が出土している。なお、焼土や他のPitについては検出されなかった。



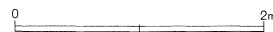
S B 1



S B 1 柱痕

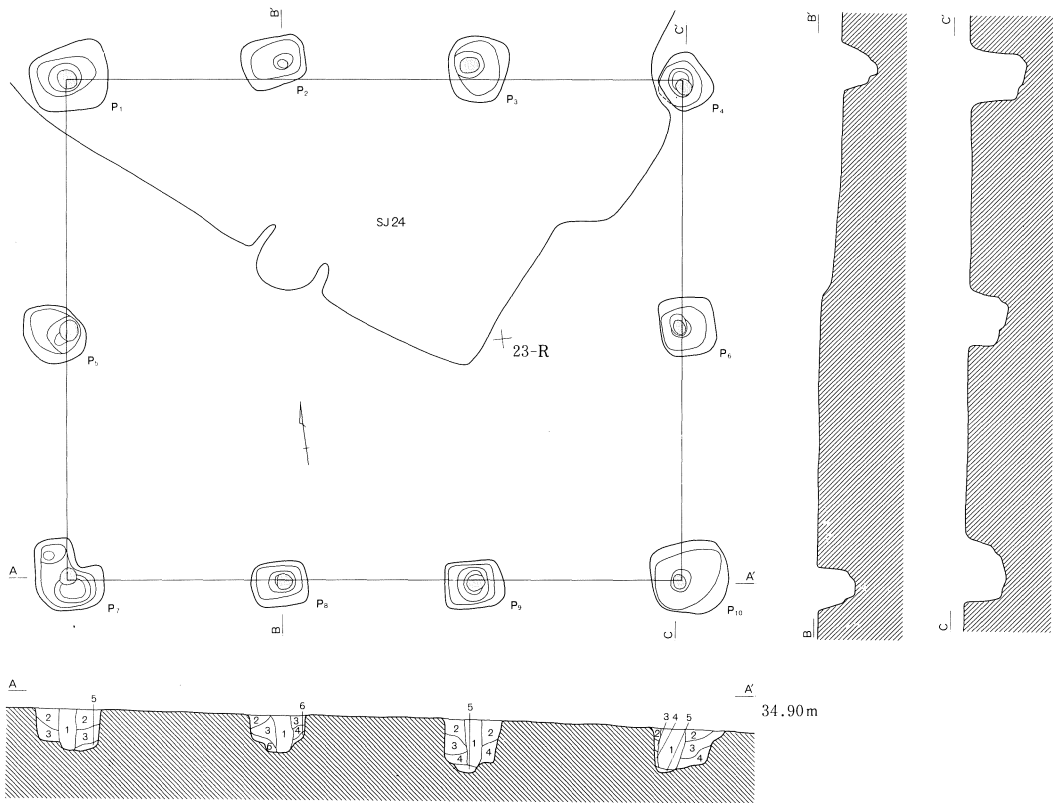


- | | | | |
|---------|-------------------|---------|-------------------|
| 1. 黒褐色土 | ローム粒含む。 | 5. 暗褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量含む。 |
| 2. 暗褐色土 | ローム粒含む。 | 6. 黒褐色土 | ローム粒含む。 |
| 3. 暗褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量含む。 | 7. 黒褐色土 | ローム粒・ロームブロック少量含む。 |
| 4. 黒褐色土 | ローム粒少量含む。 | 8. 暗褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量含む。 |



第181図 SB 1

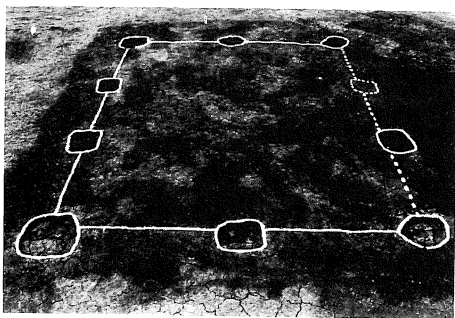
1/m = 1.65



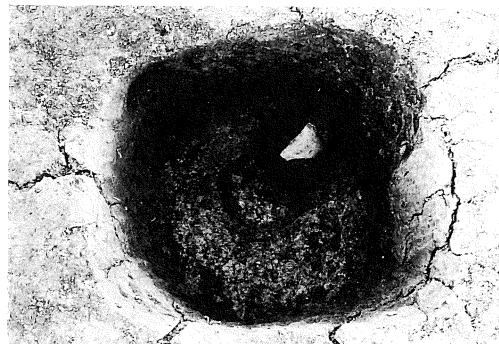
- | | | | |
|---------|-----------------------|---------|-------------------|
| 1. 黒褐色土 | 焼土粒含む。 | 4. 暗褐色土 | ローム粒・ロームブロック含む。 |
| 2. 黒褐色土 | ローム粒多量含む。 | 5. 明褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量含む。 |
| 3. 黒褐色土 | ローム粒・ロームブロック・焼土粒少量含む。 | 6. 暗褐色土 | ローム粒多量含む。 |

0 2m

第182図 S B 2



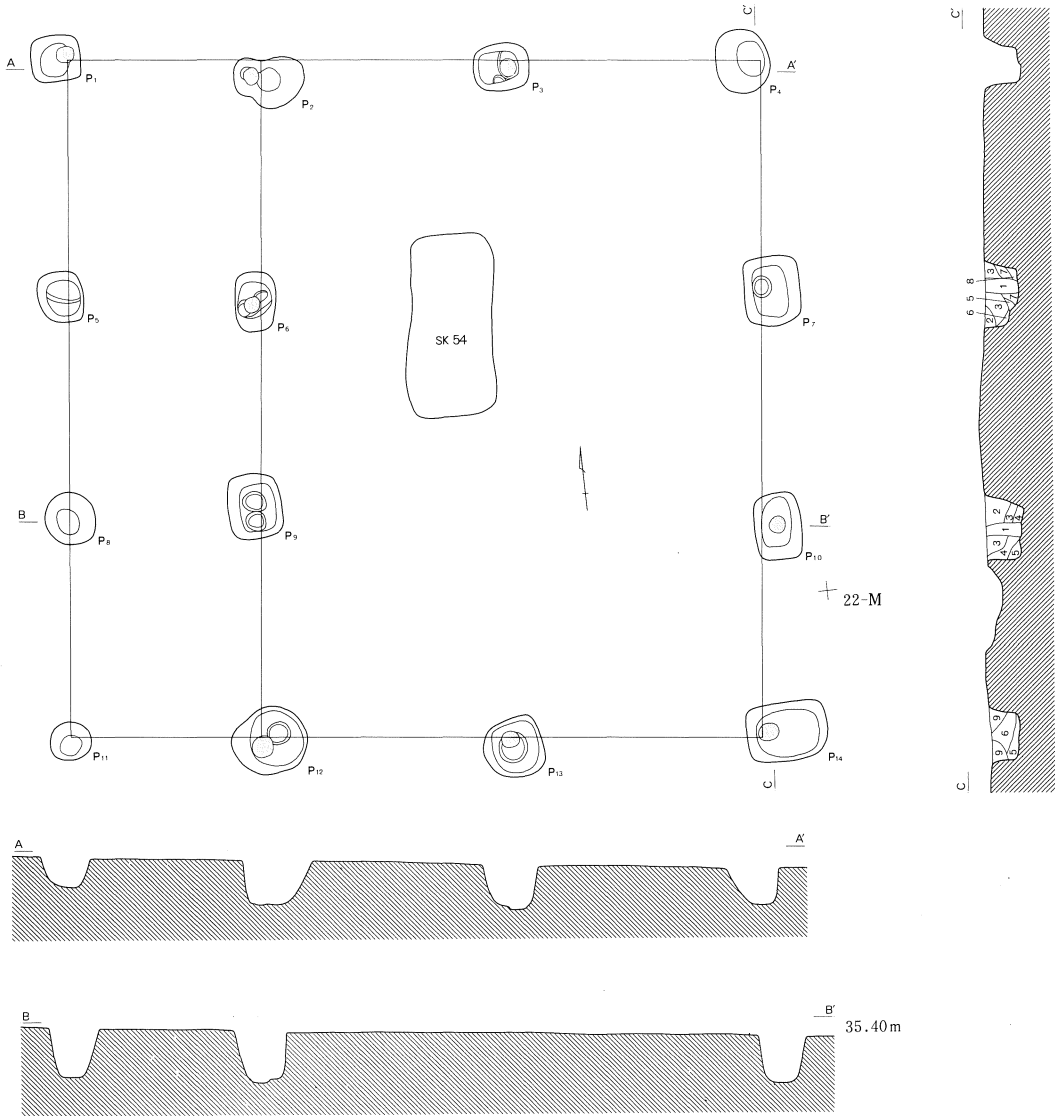
S B 2



S B 2 - P 6 内遺物出土状況

S B 3 (第3号掘立柱建物跡・第183図)

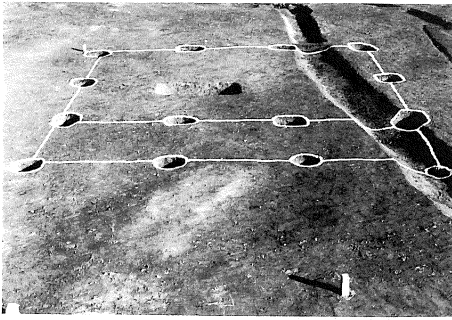
21-LGrid 他に位置している。規模は桁行3間(7.15m)×梁行2間(4.84m)の南北棟に西側に1間(2m)の廂部分が付属する。母屋部分の柱掘形は基本的に方形を呈し、規模は平均60cm×45cm×45cmを測る。廂の柱掘形はひとまわり小形で、浅くなる。柱間寸法はS B 2と同様桁と梁の中で均等に配分されている。遺物等は検出されなかった。



- | | | | |
|---------|-------------------|---------|-------------------|
| 1. 黒褐色土 | ローム粒微量含む。 | 6. 暗褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量含む。 |
| 2. 暗褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量含む。 | 7. 黒褐色土 | ローム粒少量含む。 |
| 3. 黒褐色土 | ローム粒含む。 | 8. 黒褐色土 | ローム粒・ロームブロック粒含む。 |
| 4. 黒褐色土 | ローム粒・ロームブロック含む。 | 9. 暗褐色土 | 柱痕はセクション大量含む。 |
| 5. 黒褐色土 | ローム粒含む。 | | |

0 2m

第183図 S B 3



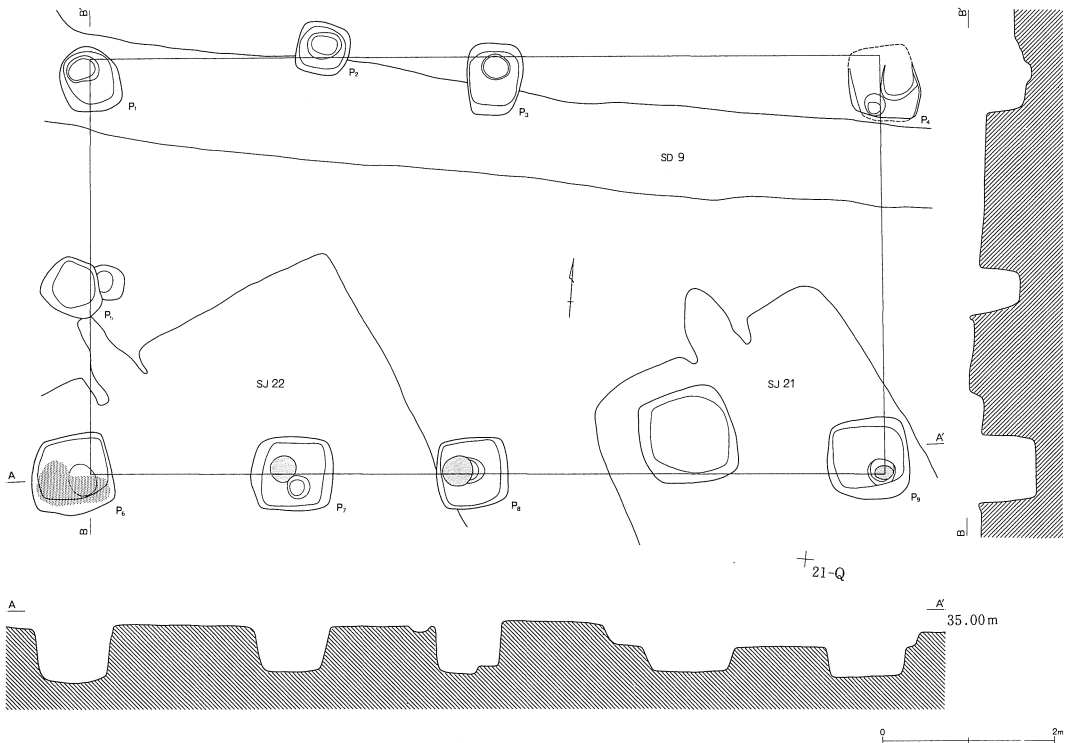
S B 3 (西から)



S B 4

S B 4 (第4号掘立柱建物跡・第184図)

20-O・P・QGrid に位置している。規模は桁行5間(9.3m)×梁行2間(4.8m)の東西棟の建物で規模的にはS B 5に匹敵する規模をもつ。北側の柱列はS D 9によって壊されているため、柱掘形は小振りとなっているが、実際には南側の柱列と同規模の一边約1m、深さ60cm程のものが想定できる。柱掘形は10箇所検出されたが、P 3とP 4の間及びP 4とP 9の間の形は検出されなかった。前者は掘形が浅ければ、深い掘り込みをもつS D 9によってすべてを削られてしまうことも後者の場合は他の遺構との重複関係はなく、当時の生活面が確認面より高い位置に存在したことを考慮してもこの部分の柱掘形の存在は考えにくく、伏せ木等を用いて棟を支えていたので

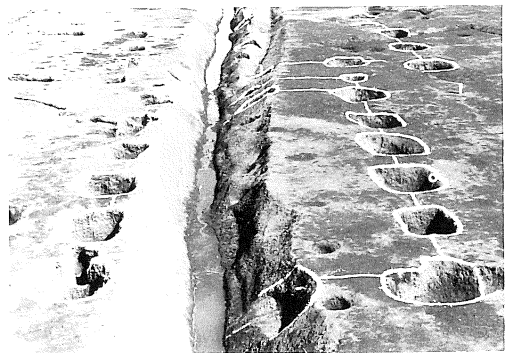


第184図 S B 4

はないだろうか。また、S B 4の北側の柱列P 4の2間(4m)東側には同規模の柱掘形が存在するが、対応する掘形は南側では検出されなかった。遺物は出土していないが、P 6の覆土中より多量の焼土が検出された。

S B 5 (第5号掘立柱建物跡・第185図)

20-M・NGrid 他に位置している。本遺跡の中で最大規模を誇る東西棟の建物で、規模は桁行5間(10m)×梁行2間(4.9m)の母屋に、1間(1.3m)の庇(か)部を付属する。S B 4と同様S D 9と重複する部分は、柱掘形の形状が変形しているが、母屋は110cm×85cm×60cm程の方形の柱掘形、廂(か)は50cm×45cm×30cm程の方形の柱掘形であったとみられる。柱間は桁・梁とも各々等間隔で、P11のように柱痕は直径30cm前後を示しており、建物の大きさを窺い知ることができる。柱の埋設については他の掘立柱建物と同様数回にわたって周囲から突き固められている。また、母屋内には小形の Pit は7基検出されたが、この建物に伴うかどうかは不明である。



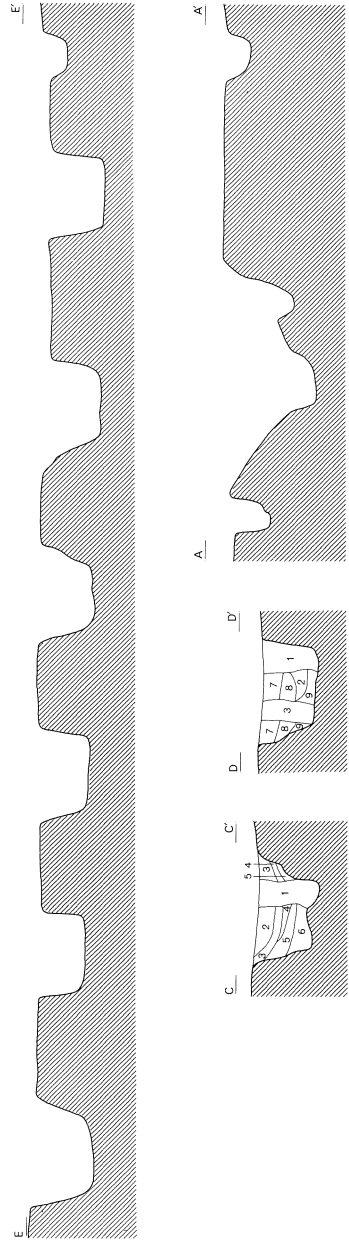
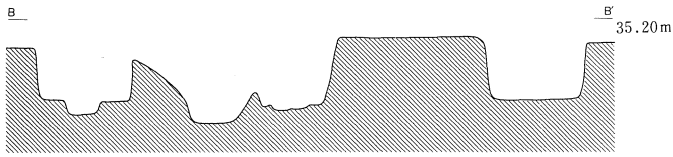
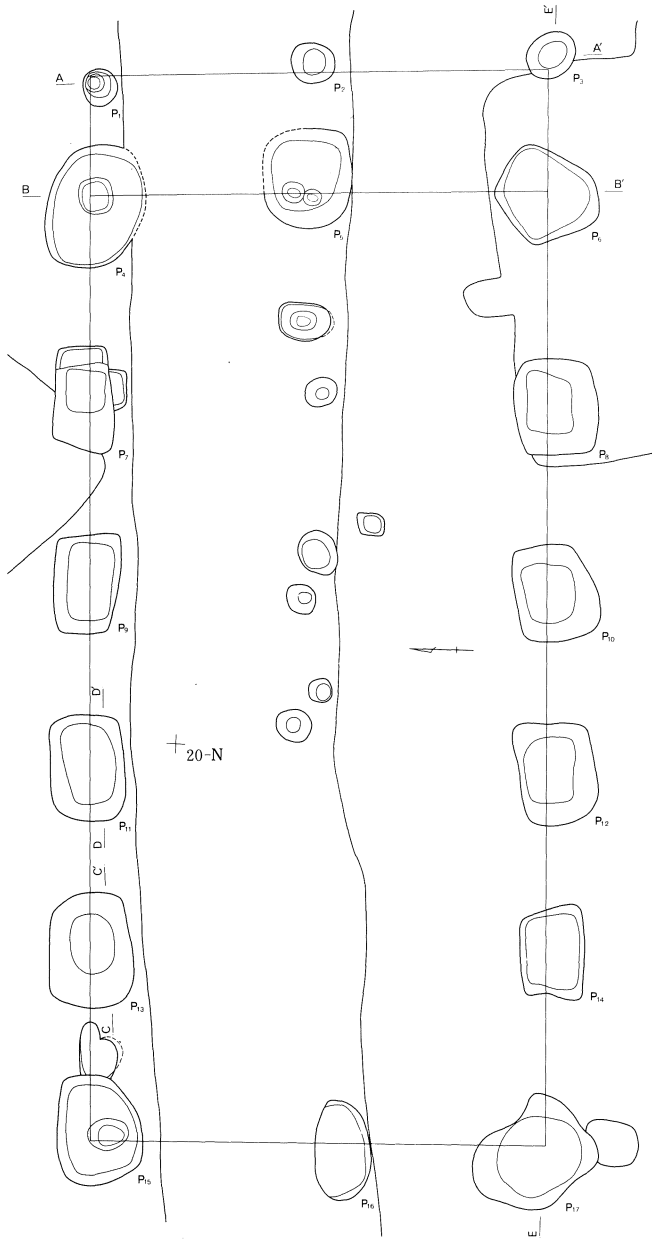
S B 5

S B 6 (第6号掘立柱建物跡・第186図)

18・19-O・PGrid に位置し、S J 52・S J 53・S B 8を壊している。規模は桁行3間(6.55m)×梁行2間(4.95m)の東西棟で、P 3は北側を風倒木痕に壊され、P 8は風倒木痕を切り込んで構築されている。柱掘形は方形及び長方形を呈し、大きさの平均値は100cm×80cm×45cmを測る。一つの掘形としてはS B 5に匹敵するほどの規模をもっており、他の建物に比べると掘形と掘形の間が狭く、布掘り的な様相を示している。柱は断面では20cm程の柱痕が確認でき、周囲は数回にわたって突き固められている。また、柱掘形の中には二度にわたって掘り込んでいる Pit もあり、構造上は比較的強固な建物とみられる。遺物は須恵器坏の破片が出土している。



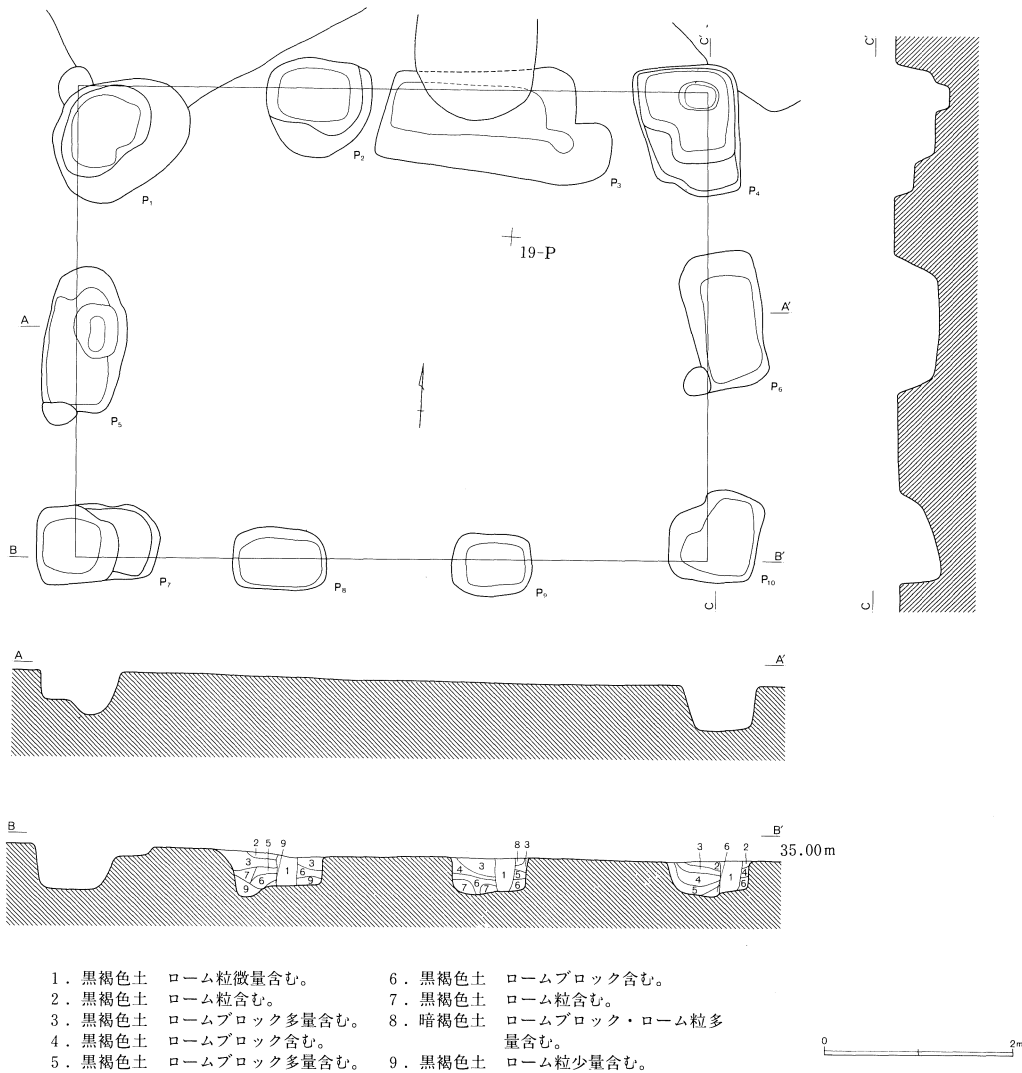
S B 6



- | | |
|---------|------------|
| 1. 黒褐色土 | ローム粒含む。 |
| 2. 明褐色土 | ロームブロック含む。 |
| 3. 暗褐色土 | ロームブロック含む。 |
| 4. 黒褐色土 | ローム粒多量含む。 |
| 5. 黒褐色土 | ローム粒含む。 |
| 6. 明褐色土 | ロームブロック含む。 |
| 7. 黄褐色土 | 地山崩落。 |
| 8. 黄褐色土 | 地山崩落。 |
| 9. 黄褐色土 | 地山崩落。 |



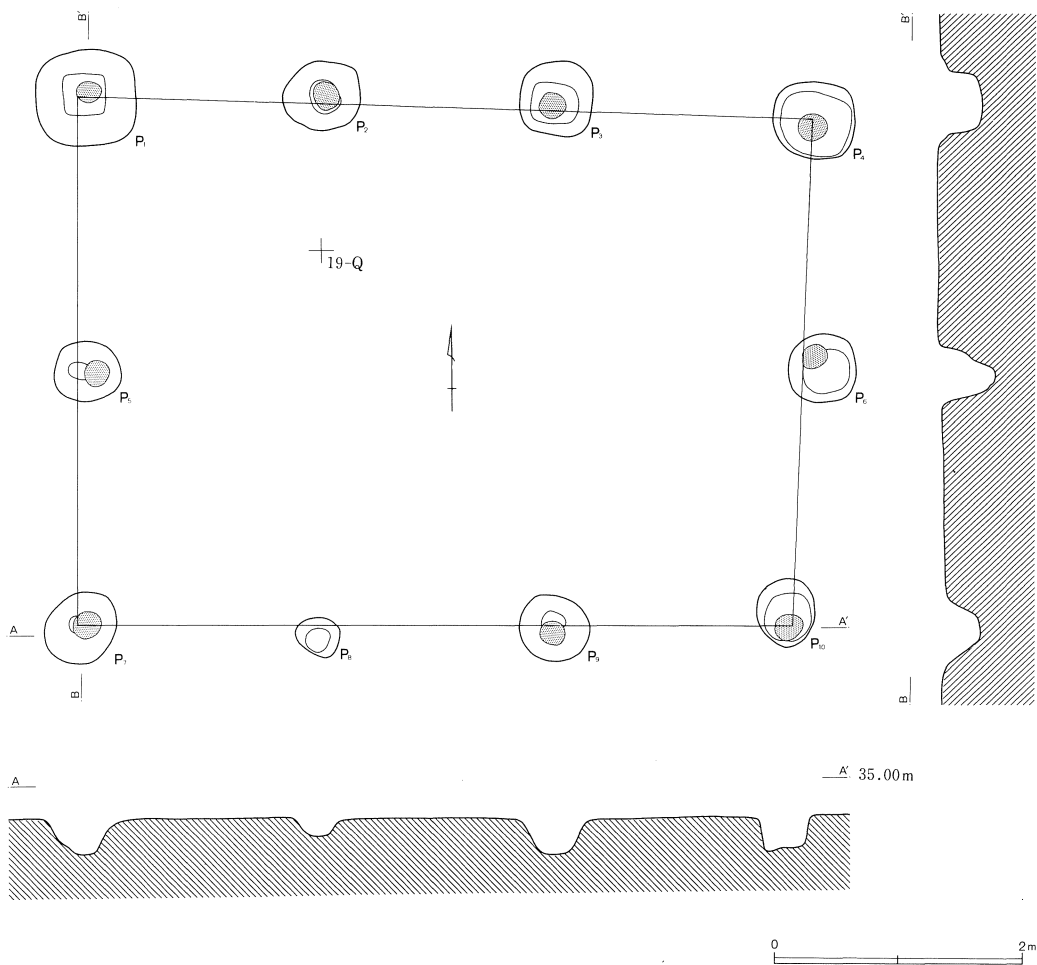
第185図 S B 5



第186図 S B 6

S B 7 (第7号掘立柱建物跡・第187図)

19-P・QGrid 他に位置している。S B 6の1.5m(心々距離)東側に位置し、この建物群はすべて切妻造りであることを考慮しても、この2棟の並立は考えられない。規模は桁行3間(5・75m)×梁行2間(4.2m)を測り、柱掘形も小形である。柱掘形は方形のものもみられるが、円形に近く、大きさにも北側と南側では異なっている。即ち北側は大きく、南側は小さな掘形を示している。また、柱掘形の深さにおいても北側が深く、南側は浅い。柱痕は断面において図示こそできなかったが、平面図中に示したスクリーン・トーン部分は確認時に捉えた柱痕の大きさを示しており、同規模の柱材が掘形の大きさに拘らず、使用されていたものと考えられる。柱痕の太さは直径15cm前後あり、確認時の柱掘形の深さでは強固な建物の場合は構造上問題がある。14世紀前後とみられるSD9-Aの廃絶後に構築された石敷は掘立柱建物の確認面とさほど高低差がないことから、確認面より、10cm前後の高さが当時の地表面の範疇と考えられる。このことを加味しても簡易



第187図 SB 7



SB 7

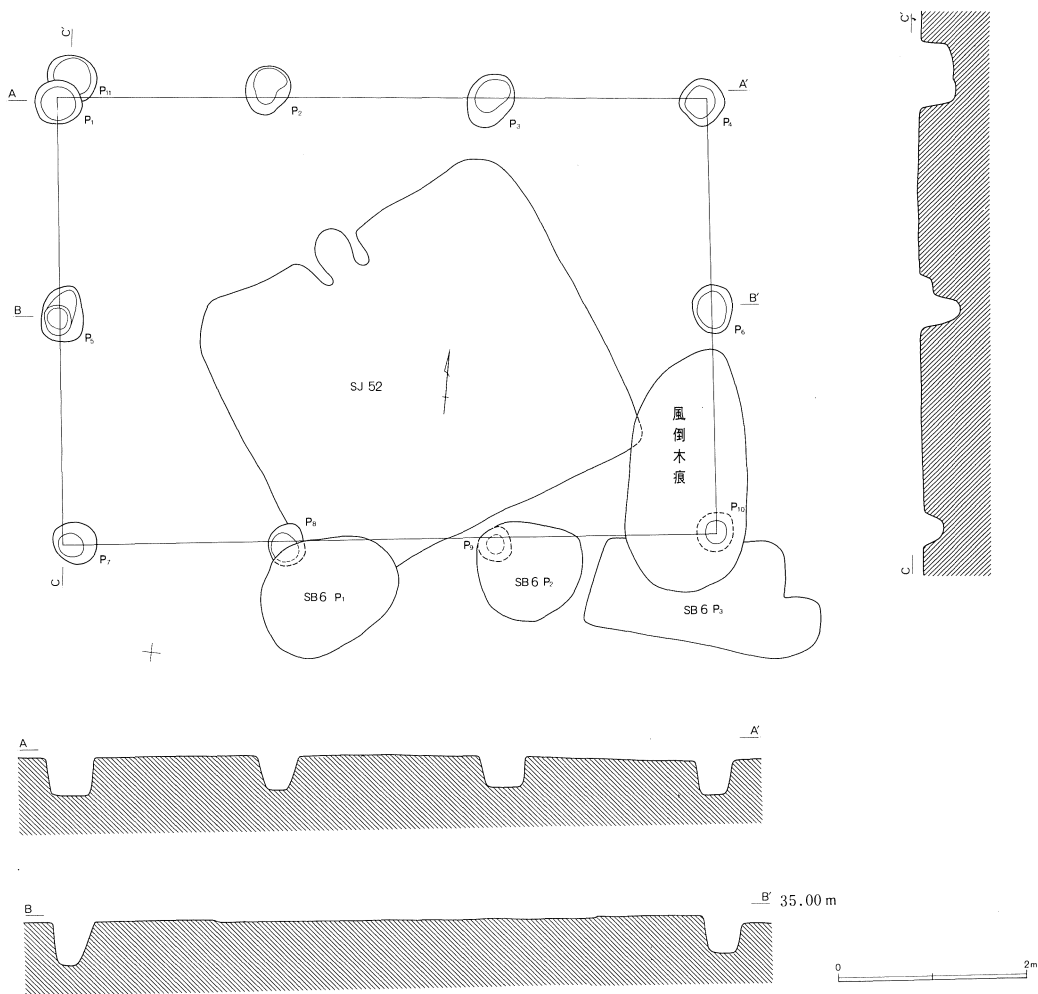


SB 8

的な建物ではないかとみられる。覆土は黒褐色で、ロームブロック、ローム粒子が含まれる。遺物はP 3より須恵器杯の破片が出土している。

S B 8 (第 8 号掘立柱建物跡・第188図)

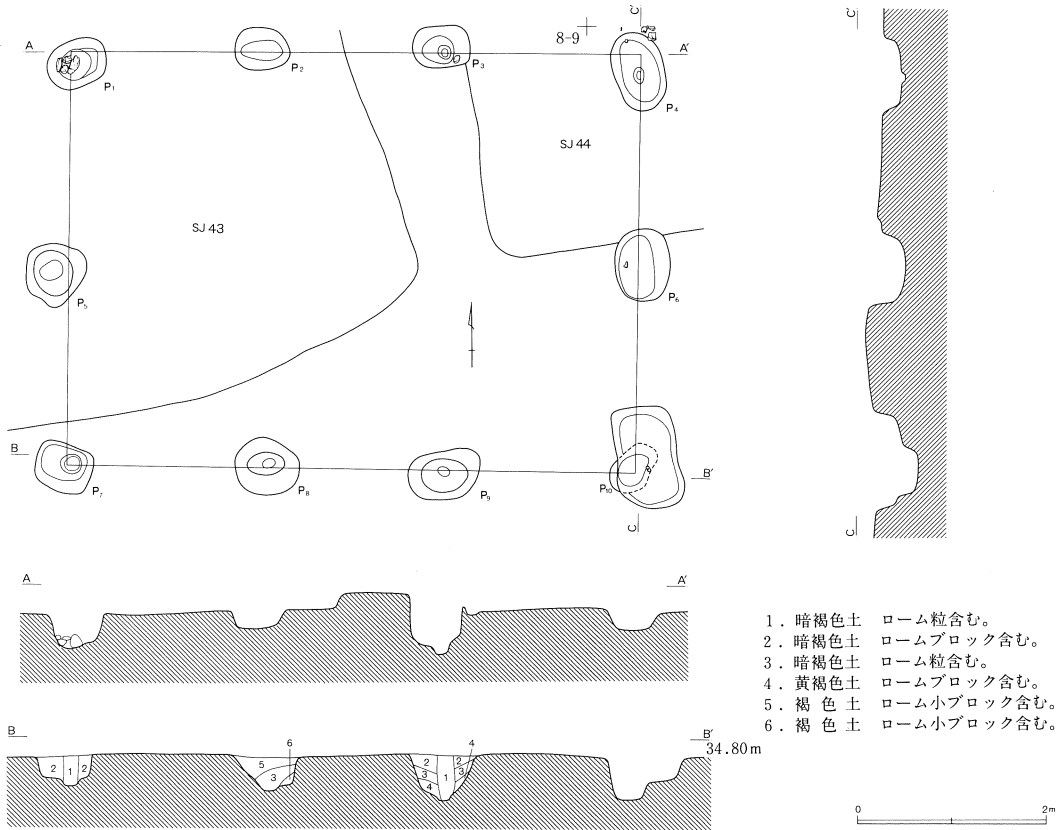
18-N・OGrid に位置している。S J 52 を切り込み、P 8～P 10 は S B 6 と風倒木痕によって壊されている。S B 6 との重複関係から建物群の中では古い段階に位置づけられる。規模は桁行 3 間 (5.95m) × 梁行 2 間 (4.7m) の東西棟である。柱掘形はおよそ直径 40cm、深さ 40cm 程を測る。断面では P 7 だけしか確認できないが、この建物の場合も総じて南側の柱掘形は浅いのではないかと考えられる。確認面は確認時において、東側をやや削りすぎており、実際は数 cm ほど高い位置において確認可能である。柱間寸法は桁と梁で各々等分されており、一部を欠くものの整然とした配列を採っている。掘形の覆土は黒褐色で、ロームブロック、ローム粒子が含まれ、一部の掘形内には焼土ブロックも含まれる。この建物の柱掘形では柱痕や埋め戻しの状況も断面からは確認することはできなかった。遺物は P 2 の覆土下層より須恵器片が出土している。



第188図 S B 8

S B 9 (第9号掘立柱建物跡・第189図)

8-P・QGrid に位置し、S J 43、S J 44を壊して構築されている。規模は桁行3間(6.1m)×梁行2間(4.35m)の東西棟である。平面の掘形はやや崩れているが、基本的には方形を呈すると考えられ、大きさは70cm×55cm×50cm余りを測る。柱の埋設についてはP 9のように柱を固定させた後に数回の突き堅めが確認できるものもあり、他の建物群と同様な構築工程が採られている。また、P 1の基底部分には卵程の小石が敷かれているのが検出された。遺物は出土していない。



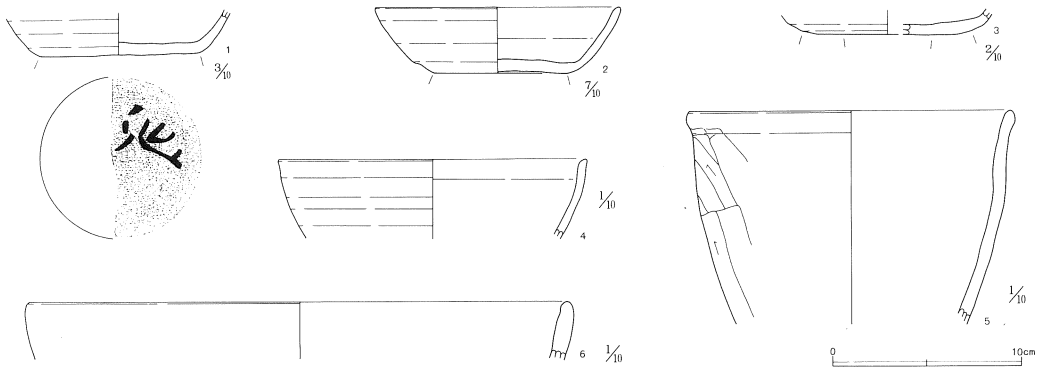
第189図 S B 9



S B 9



掘立柱建物群全景(北東より)



第190図 掘立柱建物跡出土遺物

掘立柱建物跡出土遺物（第190図）

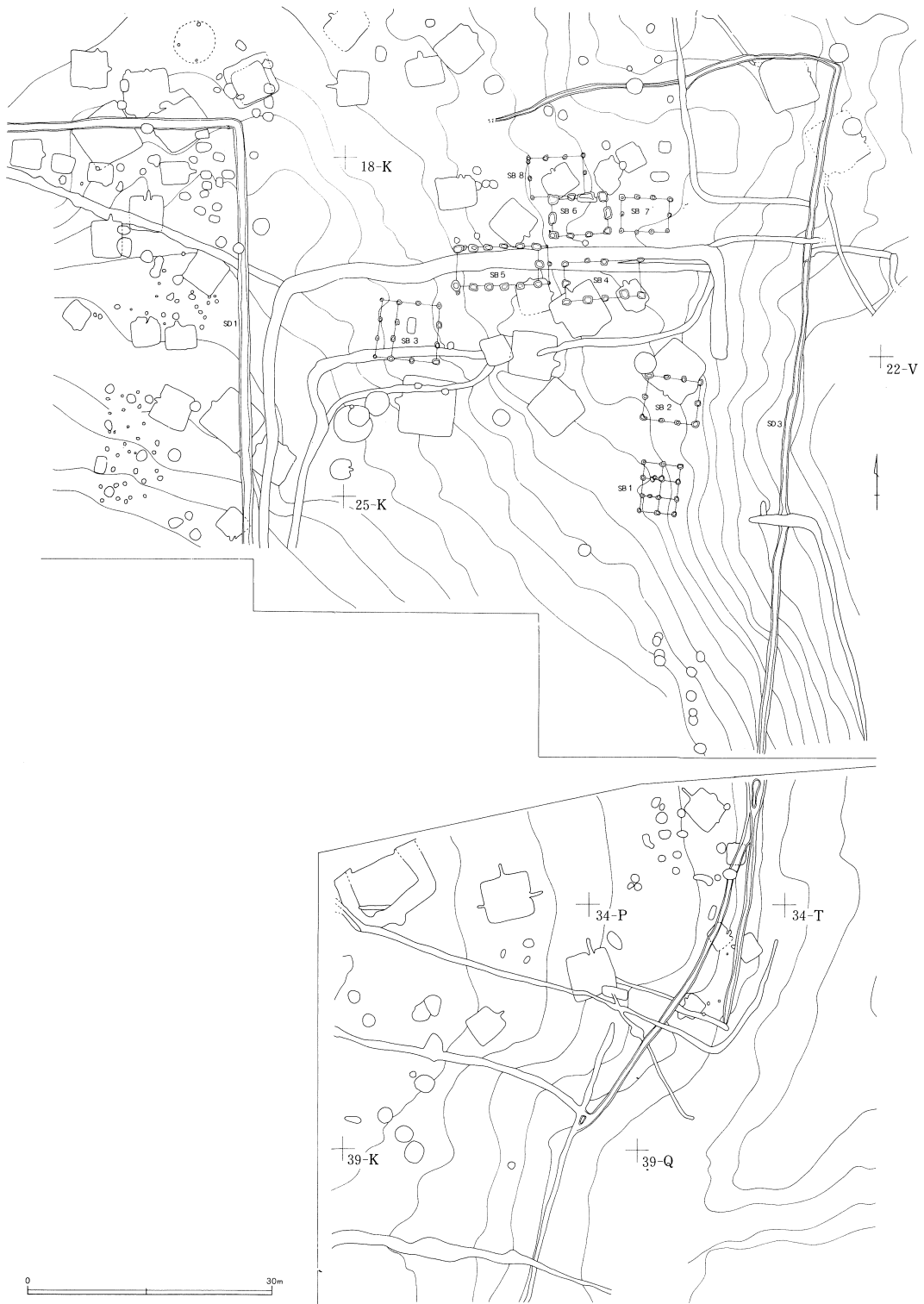
1は須恵器坏の底部破片。底部調整は回転ヘラケズリ。墨書は「鬼」か。SB2-P6出土。2は須恵器坏、口縁部及び体部はロクロナデ、底部は回転ヘラケズリ。口径13cm、器高3.4cm。SB8-P2出土。3は須恵器坏の底部破片。底部調整は回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ。SB4-P7出土。4は須恵器碗の口縁部破片。口径16.3cm。6は土師器甑の破片。胴部のヘラケズリは口縁部まで及ぶ。口径17.8cm。SB5-P6出土。6は鉢の口縁部破片。SD9からの混入か。口径29.2cm。

b 小結—掘立柱建物について—

B区において検出された掘立柱建物跡はSB9がやや北側に位置するが、残る8棟は比較的まとまった位置に配置されている。掘立柱建物間の重複関係から少なくとも2時期以上の建物群の変遷が想定できるが、中世の遺構も複雑に絡んでおり、特に中心部の建物群については細部において不確定要素を含んでいる。

a 建物の構造について

検出された9棟の建物跡は3間×2間が7棟、4間×2間が1棟、5間×2間が1棟によって構成されている。しかし、SB9はやや離れた位置に構築されるため、実際にSB1からSB8までの建物群とはその時期や性格を異にする可能性がある。このうち、SB1は総柱建物、SB3・SB5は廂持ち建物である。3間×2間の建物は間口の間隔において、一定したものがみられないが、概ねSB1・SB7の比較的小規模な柱間寸法を採る建物とSB2・SB3・SB6・SB8・SB9のやや広い柱間寸法を採る建物に二分することができる。前者は柱掘形が円形をベースとしたもので、SB6とSB8との重複関係から建物の構成上からは初期の段階の建物であることが指摘でき、後者は方形の柱掘形をベースとし、後出の建物形態とすることができる。3間×2間の建物は掘立柱建物としては最も一般的な規模であり、全国の遺跡で検出される掘立柱建物の中でも数



第191図 掘立柱建物跡・溝の位置関係図

量的最も普及率の高い建物である。この遺跡でも例外ではなく、9棟のうちの7棟が3間×2間の建物で占められ、掘立柱建物のベースになっている。SB1は倉庫的建物のため柱掘形が深く、建物のバランスも等間に整えられているが、他の6棟はやや浅く掘られ、桁行と梁行の柱間寸法において等間になることはなく「住まい」あるいは「雑舎」としての機能を有していた可能性が高いと考えられる。周知のように掘立柱建物の場合は、残存状態がきわめて良好でない限り、当時生活していた「床」に遭遇することはない。また、堅穴住居のように遺物や竈・焼土等が残ることもきわめて希である。事実、柱掘形で区画される範囲からは何も検出することはできなかったが、SB2のP6からは「鬼」と読める墨書土器が出土している。出土した遺物はいずれも主に北東方向に寄ったPitに集中する傾向があり、地鎮等の「祭祠」を窺わせる。こうした事例を根拠にしてこの3間×2間の掘立柱建物を考えると、「雑舎」より「住まい」に近い建物とすることができ、SB4・SB5という大形の建物の補助的な役割を担っていたものが考えられる。

SB1は配置から考えると西面する南北棟、総柱の高床倉庫的な性格をもつ建物であることは前記したが、この建物の注目すべき点は柱間中央に付設されたP5・P9の存在である。他の側柱や中柱と同規模の大きさや深さをもっていることから、機能的には同様の役目を担っていたものと考えられる。また、P4～6、P8～10で囲まれる2m四方の空間は、P5・P9の存在によって他の空間よりも強固な状況を作り出している。この建物の柱は、柱掘形の深さや突き固め方から側柱の場合はすべて通し柱の可能性が高いと考えられるが、P5・P6・P8・P9の場合は側柱と同規模であるが通し柱であるか束柱であるかは発掘調査による所見では解明することができなかった。また、基本的な構造や規模、造営された背景の異なる建物であるが、奈良時代の代表的な倉庫である奈良・東大寺正倉院は北倉・中倉・南倉の3倉からなる校倉造りの建物であるが、中倉は主に北倉・南倉の宝物の出し入れに使用されたと考えられている。仮にSB1の2m四方の空間を中倉的な役割に当ててみると、調査で得られた情報から想定される柱にかかる重量配分を考慮すると、数人による作業場としては十分可能であると考えられる。しかし、そうした作業は恒常的に行われるわけではなく穀物等の荷物の収納・搬出の場合が主であり、普段は荷物が奥に納まっている間は頻繁に使用されないということになる。また、収納される場所への人の出入りも当然考えられるため、加重によって機能を論じ得ない部分があり、高床倉庫の床部分が地上からどの程度の高さに位置していたかについても大きな問題を含んでいることから、ここでは「作業場的な機能を持たせた部分」ととどめ置くことにしたい。

SB4は4間×2間、SB5は5間×2間の大形の柱掘形をもつ建物で、一部の柱掘形はSD9に壊されているとみられ、検出されなかった。SB4は北側の柱掘形の大半がSD9にかかり、遺存状態は良くないため、不確定要素が多い。最大規模を誇るSB5では柱掘形にはSB1と同様入念な版築が認められ、他の建物とは一線を画す建物と考えられる。また、東側に半間分の廂が付設され、中央にもP5—P16の棟持ち柱筋に小PitがSD9中より7基検出されている。側柱とは対応しないが、Pit内の覆土は側柱のものに類似しており、床束等に用いられた柱掘形の可能性が残されており、SB5については高床の建物の可能性を指摘できる。

b 建物群の年代について

建物群からは土師器、須恵器が小破片を含め10点余りが出土している。このうちSB2・P6、SB4・P7、SB8・P2出土の須恵器坏は Pit 最下層より検出されているため、一つの年代の根拠として有力とみられる。須恵器坏からは8世紀後半から9世紀初頭の年代が考えられる。



第192図 掘立柱建物跡変遷図（復元図）

(3) Pit 群

Pit 群 (第194図)

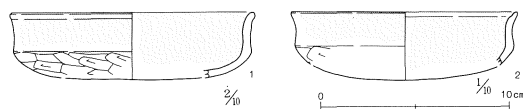
塚の越遺跡からは大小100基余りに及ぶ Pit (小穴) が検出されている。遺跡の年代は縄文中期から中世まで及んでおり、遺物を殆ど包含しない Pit から年代を限定するのは、掘立柱建物と同様難しい。Pit の規模はおよそ直径20~40cm、深さ15~40cmを測る。覆土は大きく、1一黒褐色土 (ロームブロック、ローム粒子を含む軟質土)、2一黒褐色土 (ローム粒子を多く含む)、3一黒褐色土 (ローム粒子、焼土粒子を少量含む密度の細かい土)、4一暗褐色土 (ロームブロック、ローム粒子を多量含む)、5一暗褐色土 (ローム粒子、灰色粘土粒子を含む粘質土) の5種類に分類できる。このうち、1~4 はほぼ全域において確認でき、5についてはSD9やSD16の周辺に集中している。図示できなかったが、断面は柱痕がはっきり確認できるものは少なく、多くの場合は中層~下層にかけて大形のロームブロックの量が増加する。以下、Pit の集中する地点について説明を加える。

SD1の内側(西側)には Pit 全体の半数以上が集中している。便宜上南側のP1~P31を第一群、北側のP32~P52を第二群とする。第一群には比較的大型の Pit が集中しており、柱が埋め込まれていたと見られる痕跡も多い。しかし、柱間寸法や並びの方向を考慮すると建物や柵列等の構造物には成りえないと考えられる。P1~P31についても同様に、無理に柱間を合わせていけば建物としての可能性は残るが、人が生活したり、かかわったりするには形態的に疑問が生じてくる。遺物は Pit 内から出土しているが、出土状況も不自然であり、規模も小形で、浅く、建物の可能性は低いと見られる。第二群は住居跡の周辺に散在しており、柱間寸法や覆土の色調・状況も様々で、明らかに建物としての可能性は低い。

柱掘形については、確認面に対して直角に掘られている場合が多いが、一部については斜め方向に掘られている。断面を見る限りは斜めに柱を入れ埋め込んだとするより、材を打ち込んでいる可能性が高いと考えられる。このような Pit は比較的小形で、単層のものが多い。

Pit 群出土遺物 (第193図)

1・2は土師器杯の口縁部~体部にかけての破片で、Pit 27・28から出土したものである。ともに風化が著しいが、基本的には内面及び口縁部には横方向のナデの後、赤彩が施され、体部~底部にかけてはヘラケズリされる。2は口縁部内側に浅い沈線が入る。口径と器高は、1は13cm、3.6cm、2は12.1cm、3.8cmを測る。胎土には粗い砂粒、白色粒子、黒色粒子が含まれる。色調は淡茶褐色~淡褐色。



第193図 Pit 群出土遺物



第194図 Pit 群

(4) 井戸跡

塚の越遺跡からは35基の井戸跡が検出された。この井戸跡の年代観は奈良時代から室町時代にまで及ぶが、大部分は鎌倉から室町時代にかけて構築されたものと考えられる。

SE 1(第1号井戸・第195図)

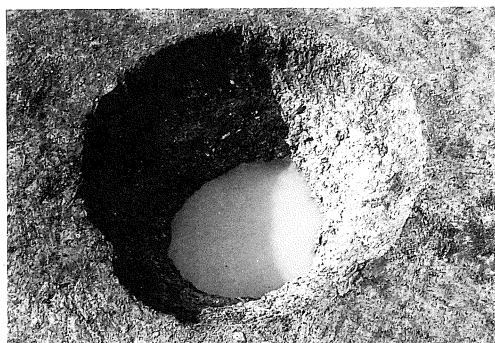
17-UGrid に位置する。S J 57を壊して構築され、平面形態は2.2m×2.4mの楕円形を呈する。断面はロート状で、確認面からの深さは1.55m+ α を測る。遺物は出土していない。

SE 2(第2号井戸・第195図)

13-WGrid に位置する。台地の先端に立地し、平面形態は2.2m×2.4mの楕円形を呈する。断面はロート状で、確認面からの深さは1.5m+ α を測る。覆土には礫が多く含まれる。

SE 3(第3号井戸・第195図)

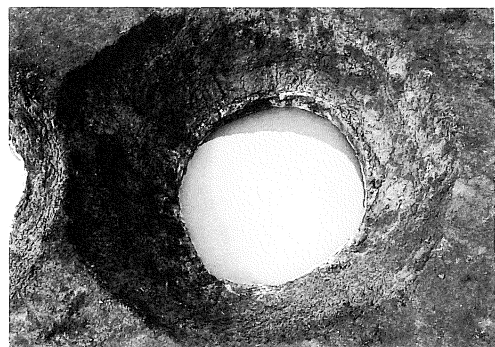
9-KGrid に位置する。台地のやや北側に立地し、平面形態は3.8m×4mの楕円形を呈する。断面はロート状で、確認面からの深さは1.8m+ α を測る。覆土中には砂粒が多く含まれ、下層ほど粘性が強い。遺物は瓦や土鍋の小破片が出土している。



SE 2



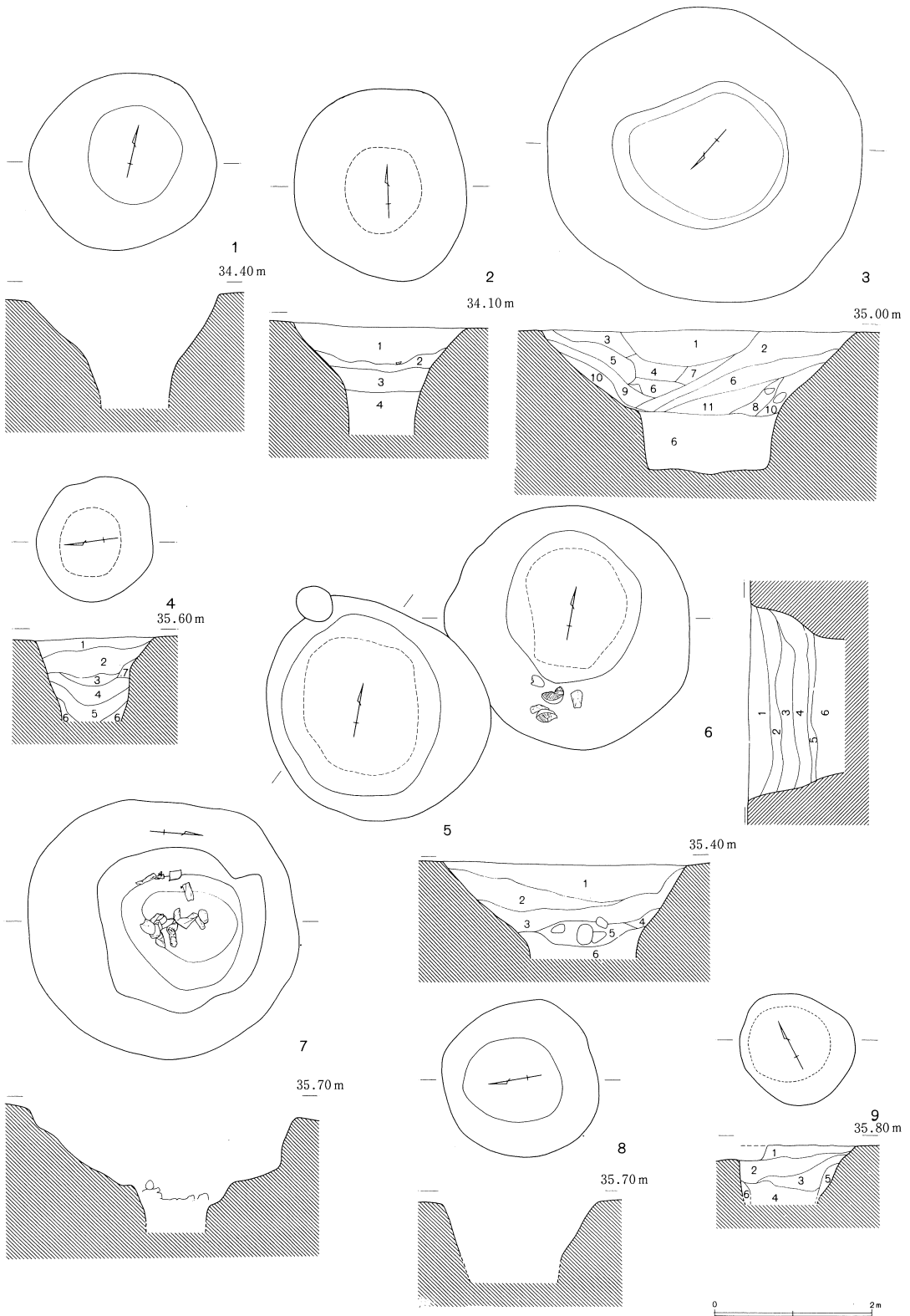
SE 3



SE 6



SE 6 石臼出土状況



第195図 SE 1 ~ 9

S E 4 (第4号井戸・第195図)

20-F Grid 他に位置する。台地中央に立地する。平面形態は0.75m×0.8mの楕円形を呈する。断面は北側が崩落し、ロート状にはならない。確認面からの深さは1.2m + α を測る。覆土中には崩落したローム土が多く含まれる。

S E 5 (第5号井戸・第195図)

23-K Grid に位置する。台地中央に立地し、S J 27を壊して構築されている。平面形態は2.6m×2.85mの楕円形を呈する。断面はロート状で、確認面からの深さは1.2m + α を測る。遺物は土師器環の破片が出土しているが、混入とみられる。

S E 6 (第6号井戸・第195図)

23-K Grid 他に位置する。台地中央に立地し、同時期とみられるS D 8を切り込み、S E 5に壊されている。平面形態は3.05m×3mのほぼ円形を呈する。断面はやや崩れたロート状で、確認面からの深さは1.2m + α を測る。遺物は石臼が出土している。

S E 7 (第7号井戸・第195図)

21-C Grid 他に位置する。台地のやや斜面部に立地し、平面形態は3.3m×3.2mのほぼ円形を呈する。断面は攪乱によって崩れたロート状である。確認面からの深さは1.7m + α を測る。この井戸の括れ部には投棄された多量の礫や土器の破片が検出された。

S E 8 (第8号井戸・第195図)

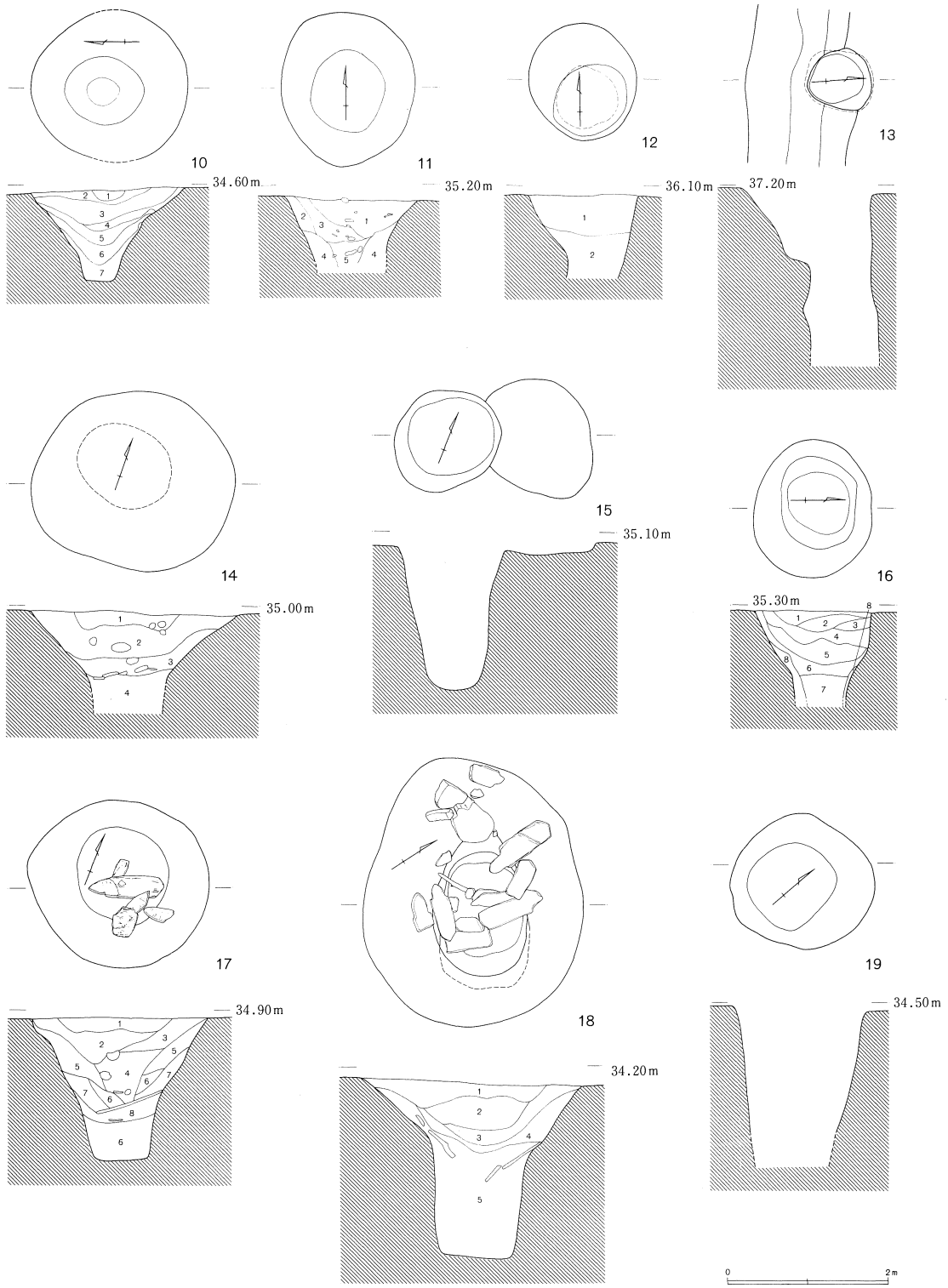
22-B Grid 他に位置する。台地の斜面部に立地する。平面形態は2m×2.1mのほぼ円形を呈する。断面は北側が崩れているが、ロート状であったとみられる。確認面からの深さは1.05m + α を測る。覆土は黒褐色～暗褐色で、ロームブロックが多く含まれる。遺物は出土していない。

S E 9 (第9号井戸・第195図)

23-G Grid に位置する。S J 1の東辺を壊している。平面形態は0.75m×0.7mの小規模な円形を呈する。断面はやや変則的なV字状で、確認面からの深さは0.6m + α を測る。覆土は軟質で、ローム粒子が少量含まれる。遺物は出土していない。

S E 10 (第10号井戸・第196図)

16-P Grid 他に位置する。S D 3を壊している。平面形態は2m×1.95mのほぼ円形を呈する。断面は箱葉研状で、確認面からの深さは1.2mを測る。ロームブロックが下層に多く含まれることから、一部に崩落があったものと考えられる。底面の幅は約40cmで、井戸として機能したかどうかは疑問が残る。或は一部の井戸でみられるが、掘削を中止した可能性も考えられる。遺物は出土していない。



第196图 S E 10~19

S E 11 (第11号井戸・第196図)

12-JGrid に位置する。S J 35及びS K 146を壊して構築されている。平面形態は1.65m×1.9mの楕円形を呈する。確認面からの深さは1m + α を測る。断面は崩落によって崩れたロート状で、覆土中には礫や土鍋などの小破片が含まれる。

S E 12 (第12号井戸・第196図)

25-GGrid 他に位置する。平面形態は1.3m×1.4mの楕円形を呈する。確認面からの深さは1.1m + α を測る。覆土は軟質で、礫の他、木製品や杭とみられる製品の断片などが含まれる。遺物は出土していない。

S E 13 (第13号井戸・第196図)

5-VGrid に位置する。S D 14と重複するが、覆土が類似しており、断面観察からは先後関係は判断できなかった。平面形態は直径約0.8mの円形を呈するとみられ、確認面からの深さは2.2m + α を測る。遺物は内耳土器の破片が出土している。

S E 14 (第14号井戸・第196図)

16-NGrid 他に位置する。平面形態は2.2m×2.5mの楕円形を呈する。断面はロート状で、確認面からの深さは1.3m + α を測る。覆土中には崩落とみられる大型のロームブロックの他に多量の礫が含まれる。土器等の遺物は出土していない。

S E 15 (第15号井戸・第196図)

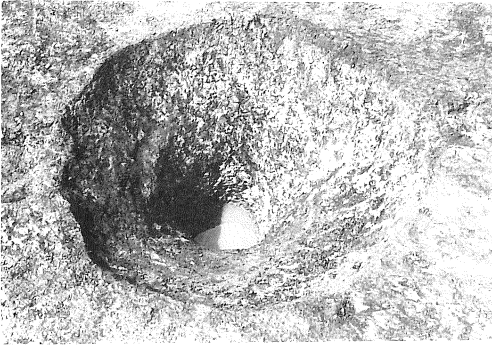
13-JGrid に位置する。S J 35及びS K 147を壊して構築されている。平面形態は1.3m×1.2mの楕円形を呈する。確認面からの深さは1.8mを測る。覆土はやや軟質の黒褐色で、ローム粒子が含まれる。遺物は瀬戸・美濃系の椀、曲げ物の底板が出土している。

S E 16 (第16号井戸・第196図)

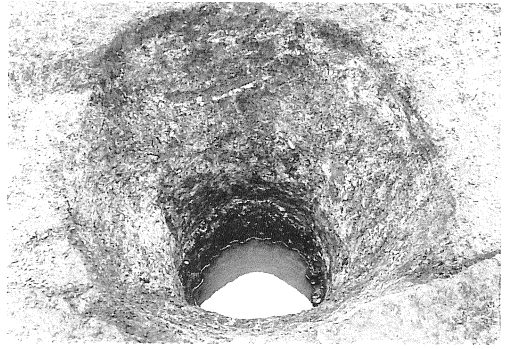
26-OGrid 他に位置する。平面形態は1.4m×1.8mの楕円形を呈する。確認面からの深さは1.2m + α を測る。断面はロート状であるが、確認面は一面黒褐色土が覆っており、実際には括れ部までの深さは1m程になるとみられる。遺物は出土していない。

S E 17 (第17号井戸・第196図)

7-KGrid に位置する。平面形態は2.2m×2.1mの楕円形を呈する。断面はロート状であるが、崩落によって一部形状が変化している。確認面からの深さは1.8mを測る。覆土中層付近からは板石塔婆や礫などが出土している。覆土は上層は砂質で、下層程粘性が強くなる。



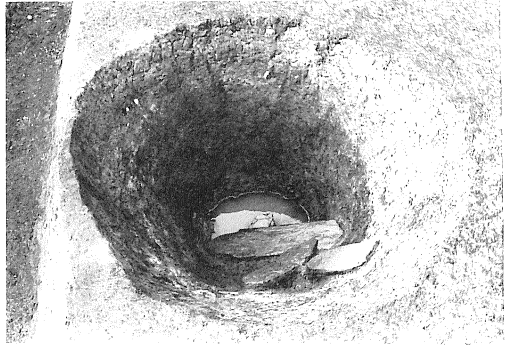
S E 10



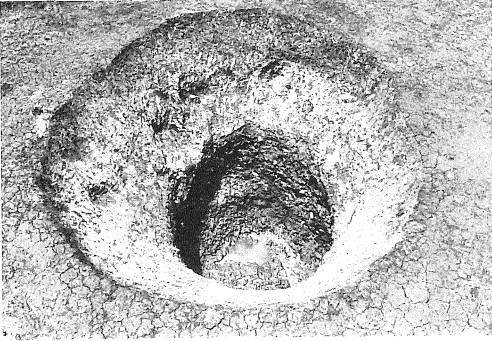
S E 11



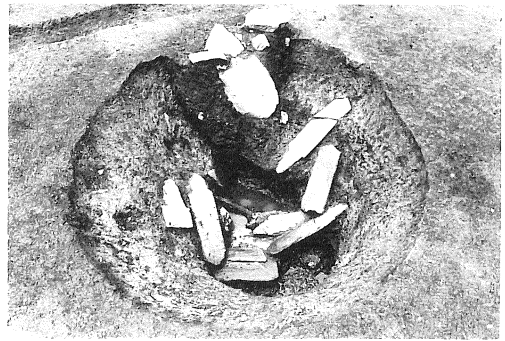
S E 15



S E 17遺物出土状況



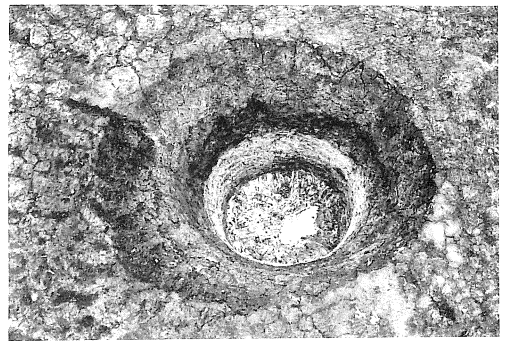
S E 18



S E 18遺物出土状況



S E 28



S E 30

S E 18 (第18号井戸・第196図)

11-RGrid 他に位置する。平面形態は2.7m×3.4mの楕円形を呈する。断面はロート状で、確認面からの深さは2.3mを測る。覆土は中層以下は水分を多く含み、粘性が強い。遺物は上層から中層は板石塔婆(約20点)、下層からは漆椀の細片や木製品などが出土している。

S E 19 (第19号井戸・第196図)

8-TGrid に位置する。SD16を壊して構築されている。台地の南側斜面に面し、SD16との重複によって形態が歪んでいるが、1.7m四方の方形を呈するとみられる。確認面からの深さは2m+ α を測る。覆土は黒褐色で、ロームブロックや炭化物が含まれる。

S E 20 (第20号井戸・第197図)

34-LGrid に位置する。ST1の周溝を壊して構築される。平面形態は本来は1.85m四方の方形を呈するものとみられる。確認面からの深さは2m+ α を測る。覆土は暗褐色で、ロームブロック、焼土ブロックなどが含まれる。また、覆土中層には多量の礫が投棄され、礫とともに常滑の播鉢の破片が出土している。

S E 21 (第21号井戸・第197図)

46-RGrid に位置している。SD42を壊して台地の斜面に構築されている。平面形態は1.3m×1mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.7m+ α を測る。確認時において覆土は水分を含んでおり、中世の自然環境は不明な点が多いが、井戸として機能したか疑問が残る。遺物は覆土中より、かわらけの破片が出土している。

S E 22 (第22号井戸・第197図)

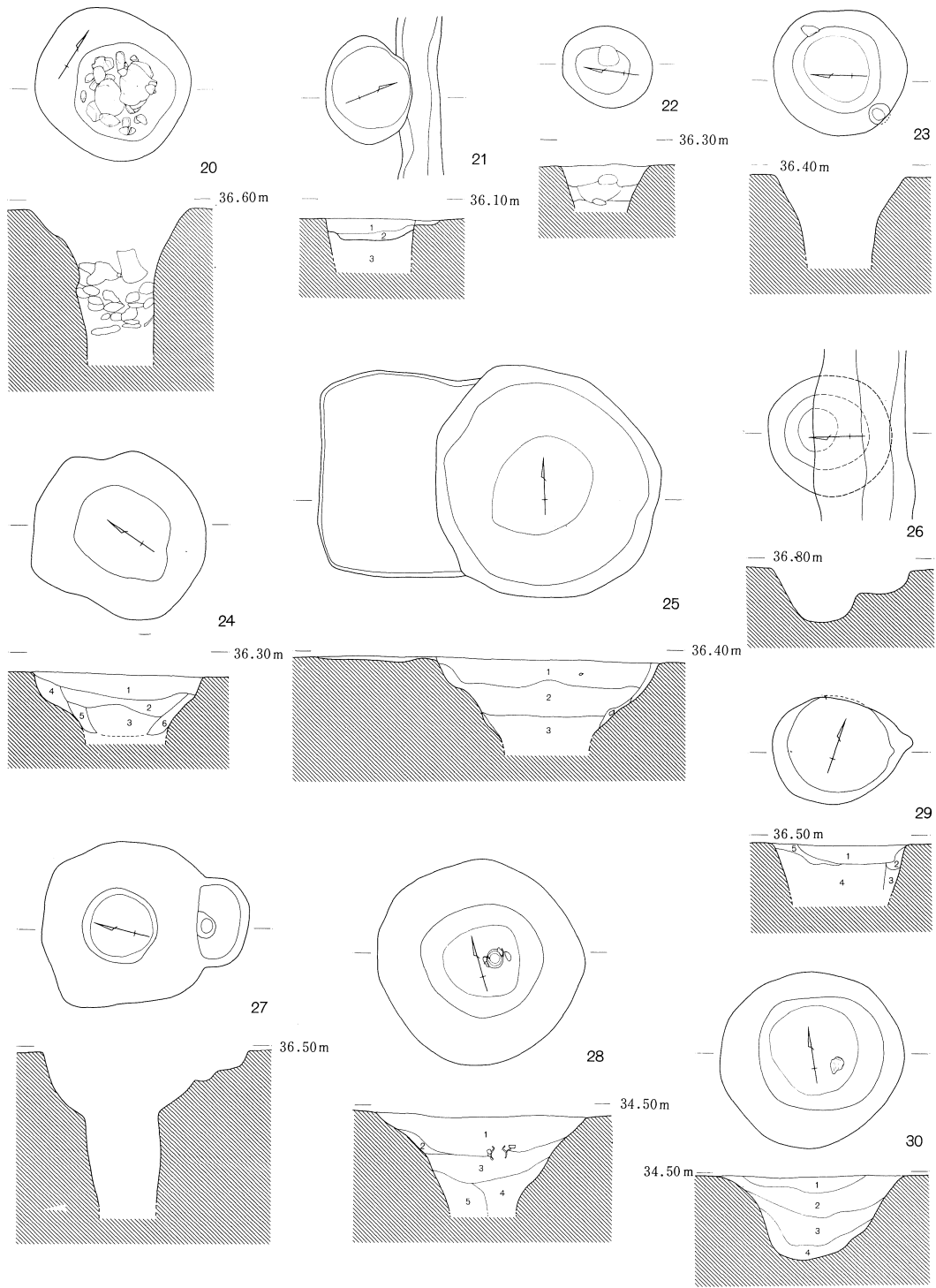
46-OGrid に位置する。SD34を壊して構築されている。平面形態は1.1m×1mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.6mを測る。SE21と同様台地の斜面から谷部に構築されているため、通常の井戸の機能は果たしていなかったものと考えられる。

S E 23 (第23号井戸・第197図)

43-KGrid に位置する。平面形態は1.65m×1.6mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは1.1m+ α を測る。覆土は黒褐色～暗褐色で、ロームブロック、ローム粒子、灰色粘土粒子、小礫などが含まれる。遺物は周辺の住居跡からの混入とみられる紡錘車が出土している。

S E 24 (第24号井戸・第197図)

46-OGrid に位置する。谷部に立地し、SD36等を壊して構築されている。平面形態は2m×2mの不整形方形を呈する。確認面からの深さは0.9mを測り、断面はロート状である。覆土中には、ロームブロックなどに混じって粘土のブロックも含まれる。



第197图 S E 20~30

S E 25 (第25号井戸・第197図)

53-KGrid に位置する。台地の中央部に構築されている。平面形態は2.7m×2.8mの楕円形を呈する。断面はロート状で、確認面からの深さは $1.2\text{m} + \alpha$ を測る。覆土は括れ部付近からは乳白色粘土層となり、以下50cm程で次第に青灰色粘土層となる。

S E 26 (第26号井戸・第197図)

41-NGrid に位置する。台地の斜面部に立地し、S D33に南側半分を壊されている。平面形態は直径約1.5mの円形を呈するとみられる。確認面からの深さは0.65cmを測り、覆土は黒褐色で、周辺の土壌の規模と大差ない。当初は井戸としての機能をもたせるために構築されたものと考えられる。

S E 27 (第27号井戸・第197図)

36-LGrid 他に位置する。台地の斜面部に構築される。平面形態は本来は2m四方の方形とみられるが、土壌状の攪乱に南側を壊される。断面はロート状で、確認面からの深さは $2\text{m} + \alpha$ を測る。覆土は黒褐色で、ロームブロックが少量含まれる。

S E 28 (第28号井戸・第197図)

15-UGrid に位置する。S D 3 の北東隅の外側と接する位置に構築されている。平面形態は直径2.5mの円形を呈する。確認面からの深さは、 $1.2\text{m} + \alpha$ を測る。覆土は中層以下は粘性が強くなる。遺物は覆土中層より須恵器が出土している。

S E 29 (第29号井戸・第197図)

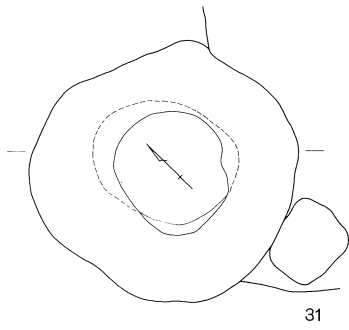
53-MGrid に位置する。平面形態は1.7m×1.3mの楕円形を呈する。確認面からの深さは、 $0.7\text{m} + \alpha$ を測る。覆土は軟質で、下層程粘性が強くなる。遺物は出土していない。

S E 30 (第30号井戸・第197図)

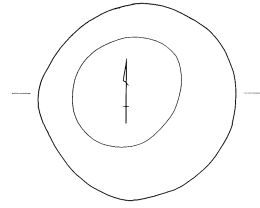
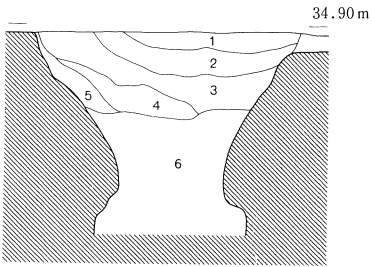
23-NGrid に位置する。台地の中央部に立地し、周辺の同規模の井戸が1m余りで水が湧き出るのに対してこの井戸は確認面より1mの深さで完掘してしまい、構築途中で中止した可能性がある。平面形態は2.2m×2.3mの楕円形を呈する。覆土中には大形の礫が含まれる。

S E 31 (第31号井戸・第198図)

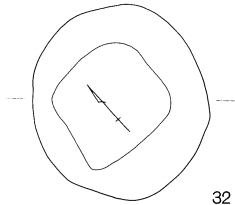
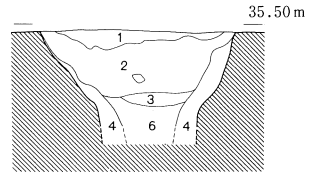
22-QGrid に位置する。台地の先端付近に立地し、S J 24及びS B 2のP 1の一部を壊して構築されている。平面形態は2.8m×2.6mの楕円形を呈する。確認面からの深さは $2.2\text{m} + \alpha$ を測る。断面はロート状であるが、下層は次第に外側に開く。覆土は黒褐色～暗褐色で、下層程色調は薄く、粘性が強くなる。遺物は出土していない。



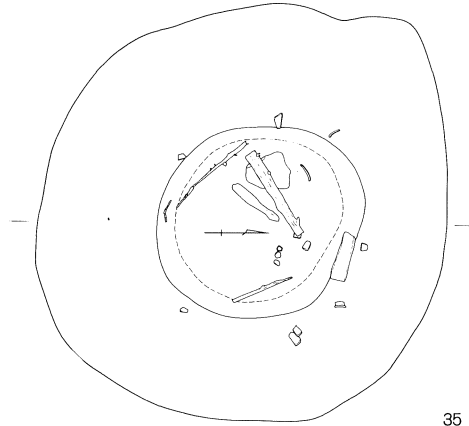
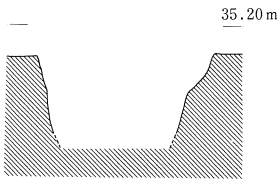
31



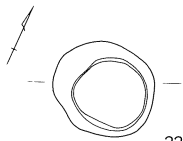
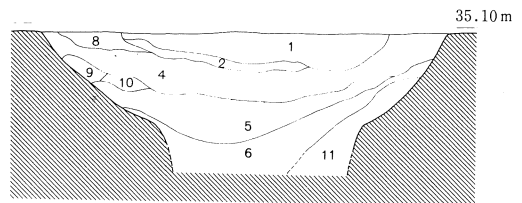
34



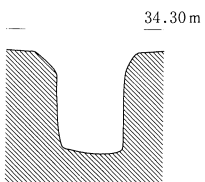
32



35



33



第198図 S E 31~35

S E 32 (第32号井戸・第198図)

23—OGrid 他に位置する。台地の中央部に立地し、S J 25の竈付近を壊して構築している。平面形態は1.85m×2.1mの楕円形を呈するが、次第に下がるにつれて方形になる。確認面からの深さは1.1m + α を測る。覆土は黒褐色～暗褐色で、ロームブロック、ローム粒子、焼土粒子が含まれる。覆土下層からは土師器甕や坏の小破片が出土しているが、S J 25出土の土器よりも年代的に新しいものであり、混入したものとは考えにくい。

S E 33 (第33号井戸・第198図)

8—TGrid に位置する。台地の南斜面に立地し、S D 16と重複する。覆土はS E 19の場合と同様S D 16の覆土が似通っており、先後関係は断定できなかった。また、斜面に立地しているため、確認段階で遺構を削っている可能性が高く、1.1mという深さに50cm余りは深いものと考えられる。平面形態は1.1m×1mの楕円形を呈する。覆土は黒褐色で、ロームブロックが含まれ、軟質である。遺物は出土していない。

S E 34 (第34号井戸・第198図)

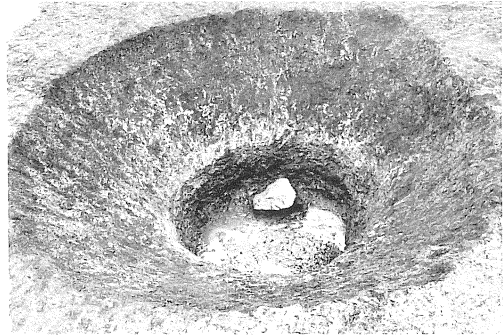
19—I Grid 他に位置している。平面形態は2.05m×2mの楕円形を呈する。確認面からの深さは1.4mを測る。断面はロート状で、括れ部より下層は粘性が強くなる。覆土は黒褐色～暗褐色。また、覆土の上層ではロームブロックに混じって、砂粒も含まれる。遺物は瓦を中心に土鍋、鉢などの破片が出土している。

S E 35 (第35号井戸・第198図)

11—I Grid に位置する。平面形態は4.4m×4.5mの楕円形を呈する。確認面からの深さは、1.55m + α を測る。断面はロート状で、北側及び北西方向からの崩落が著しく、大形のロームブロックが流れ込むように堆積している。確認面より1.5m付近では直径3～8cm、長さ60～70cm程の無加工の木材が、大形の礫とともに3点出土している。他には瓦や鉢の破片が出土している。



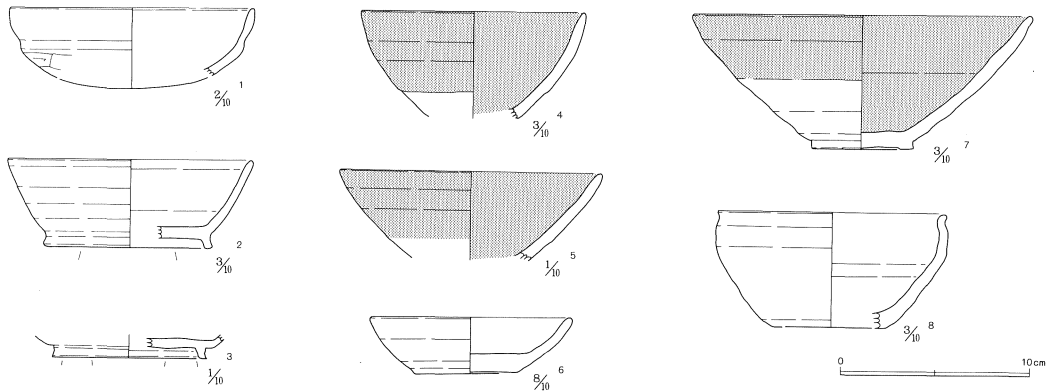
S E 32遺物出土状況



S E 35

出土遺物（第199図）

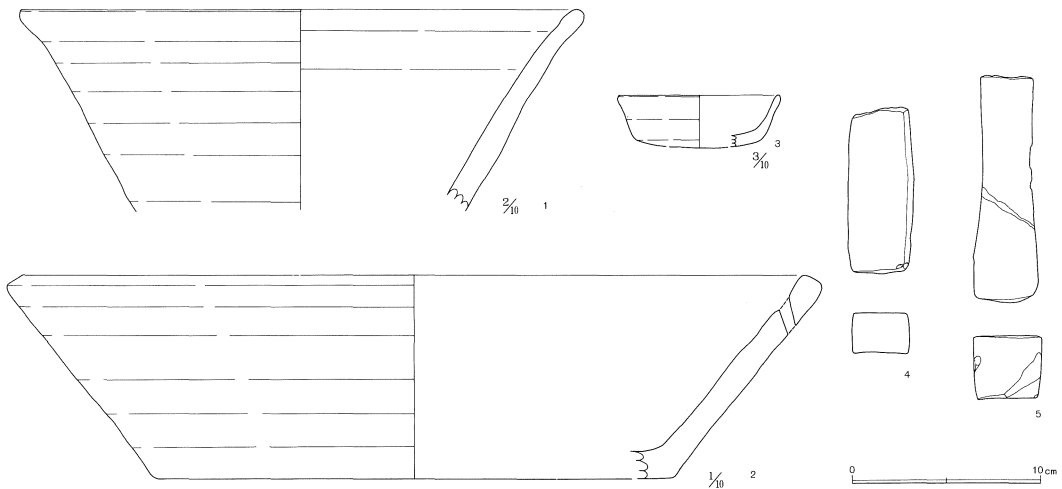
1は土師器坏破片、推定口径13.2cm、胎土に砂粒を含む。SE 5出土。2・3は須恵器高台付坏、2は口径13cm、器高4.6cm、胎土に砂粒、白色針状物を含む。SE 7出土。3はSE 32出土。4は鉛釉天目茶碗で、口縁部から体部にかけて暗褐色の釉薬がかかる。推定口径12.1cm。SE 15出土。5は鉛釉碗、6は鉛釉小皿。5は推定口径14.1cm、6は口径10.8cm、器高3cm、底部は回転糸切り未調整。SE 19出土。7は鉛釉碗、淡黄褐色、8は鉛釉天目茶碗。口径と器高は7が18.8cm、7.1cm、8が12cm、7cm。SE 31出土。（スクリーントーン部分は鉄釉）



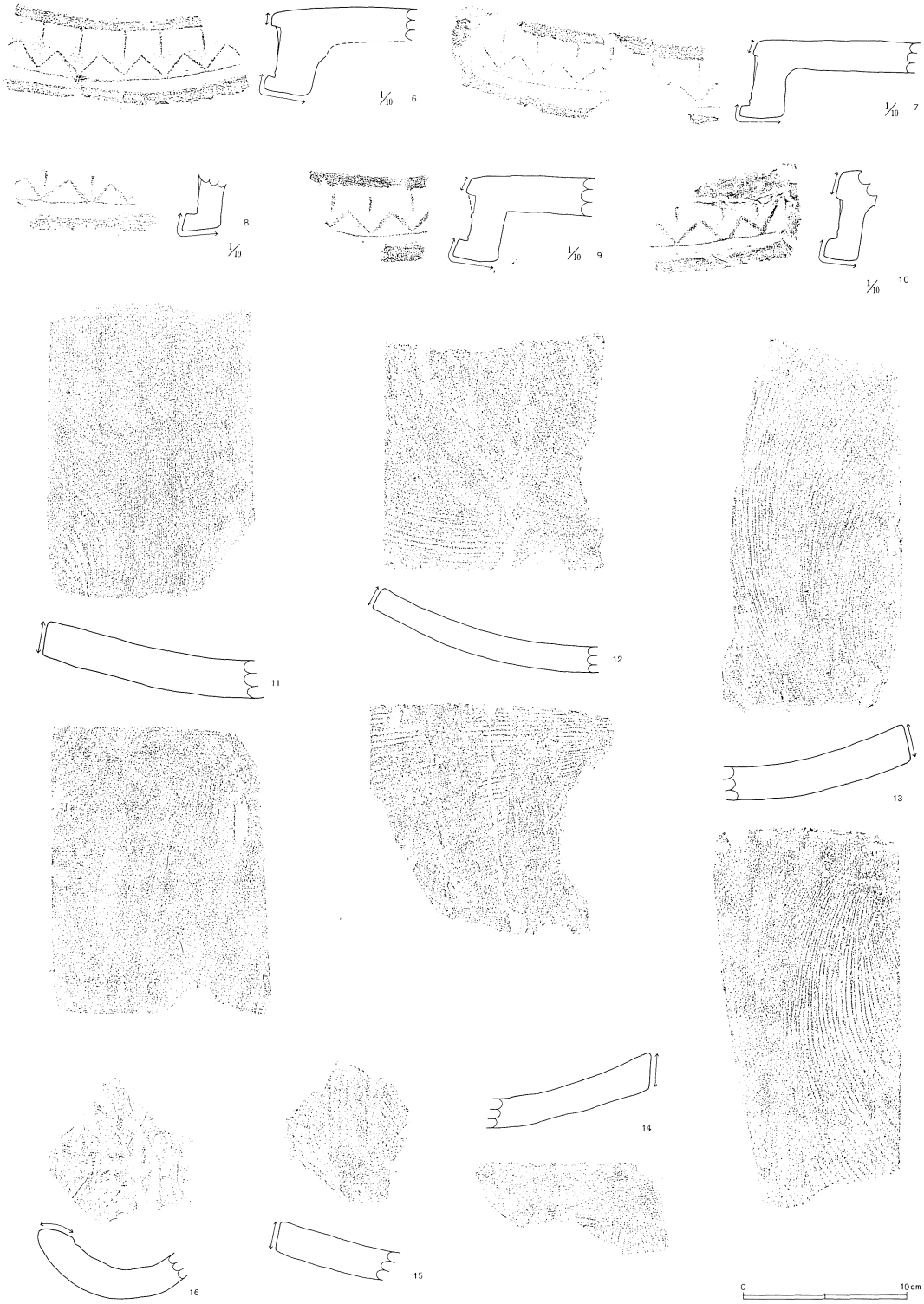
第199図 SE 5・7・15・19・31・32出土遺物

SE 3 出土遺物（第200～202図）

第200図は土鍋、推定口径は30.1cm。2は浅鉢、口径は43.2cm、器高10.8cm、口縁部に補修の為の孔を持つ。胎土に粗い砂粒を含む。暗灰褐色。3はかわらけの破片。口径8.6cm、器高2.8cm。4・5は砥石の破片。5は完形に近い。いずれも使用痕明瞭。第201図1～5は剣頭文の軒平瓦の破片で、瓦当面は范型によって製作されている。剣先の間隔は中心ほど広く、両側はやや狭く構成され



第200図 SE 3 出土遺物(1)



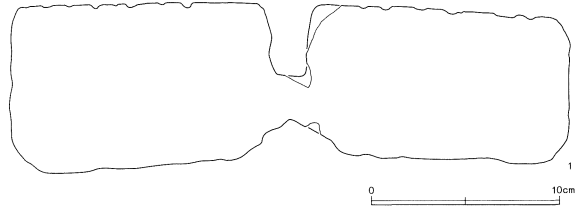
第201図 SE 3 出土遺物(2)

る。瓦当裏面はナデが顕著である。瓦当面には砂粒が多く付着している。灰褐色～淡褐色。6～10は平瓦。11は丸瓦の側端部破片。凹面・凸面とも明瞭に糸切り痕を残す。端部はヘラケズリによって調整されている。また、糸切り痕とは別に斜方向に平行の圧痕が認められる。11の凹面には布目痕を残す。胎土に砂粒を多く含む。色調は淡青灰色。第203図1は石製の播鉢。器面は凹凸が目立つが、内面には明瞭な使用痕を残す。



SE 6 出土遺物 (第203図)

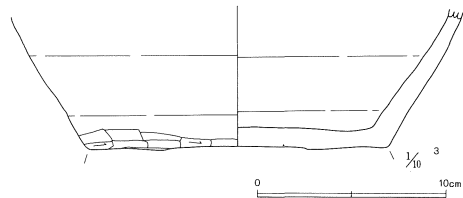
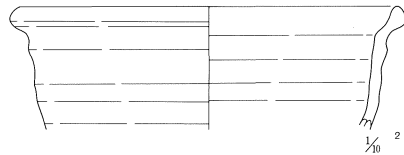
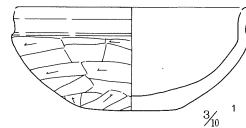
6分割された面を持つ石臼で、覆土上層より出土した。相対的に外側の面が磨り減っており、溝が浅くなる。直径は約30cm、厚さ9cmを測る。色調は暗褐色。



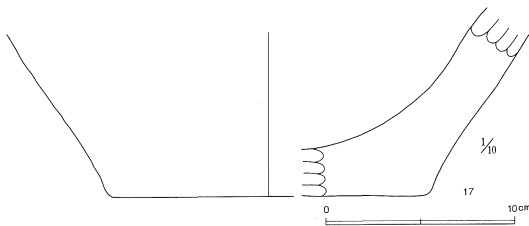
第203図 SE 6 出土遺物

SE 11 出土遺物 (第204図)

1は土師器碗で、口径12.4cm、器高10.6cmを測る。内面及び口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラケズリ、底部は平底気味。色調は淡褐色。2は須恵器鉢、3は須恵器壺の破片。2は推定口径21cm、ロクロナデ明瞭。3は底部周辺はヘラケズリされる。胎土に白色針状物を含み、色調は淡青灰色。



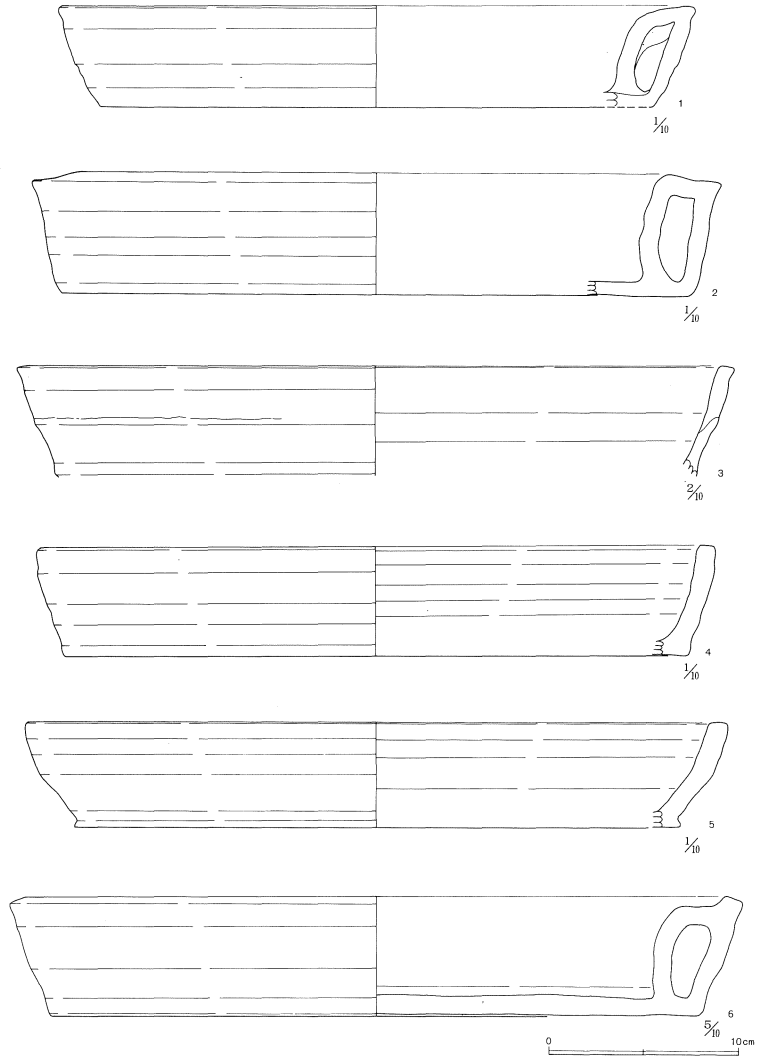
第204図 SE 11 出土遺物



第202図 SE 3 出土遺物(3)

S E 13出土遺物（第205図）

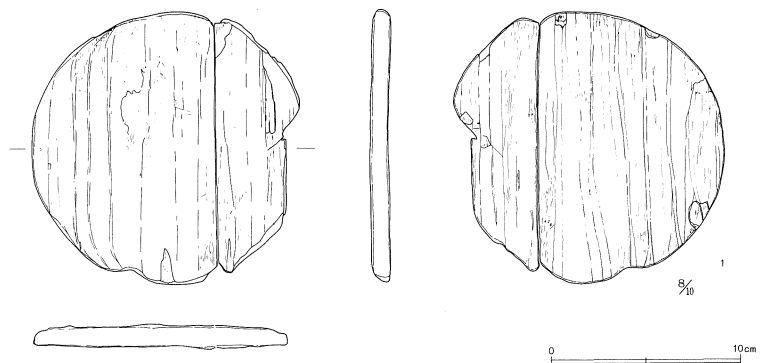
いずれも内耳型土器の破片である。1は口径33.6cm、器高5.6cmで、やや外傾する。2は口径36.4cm、器高6.5cm。耳の部分が高口縁部よりも高い位置に取り付けられ、口唇部は外反する。3～5は口縁部がやや内湾し、端部がやや平坦に調整される。口径は3は37.8cm、4は35.8cm、5は37.2cm、器高は4は5.8cm、5は5.6cmを測る。4・5の底部周辺のナデによる調整は施されない。胎土には砂粒、雲母などの粗い粒子を含む。色調は暗灰褐色～灰色。



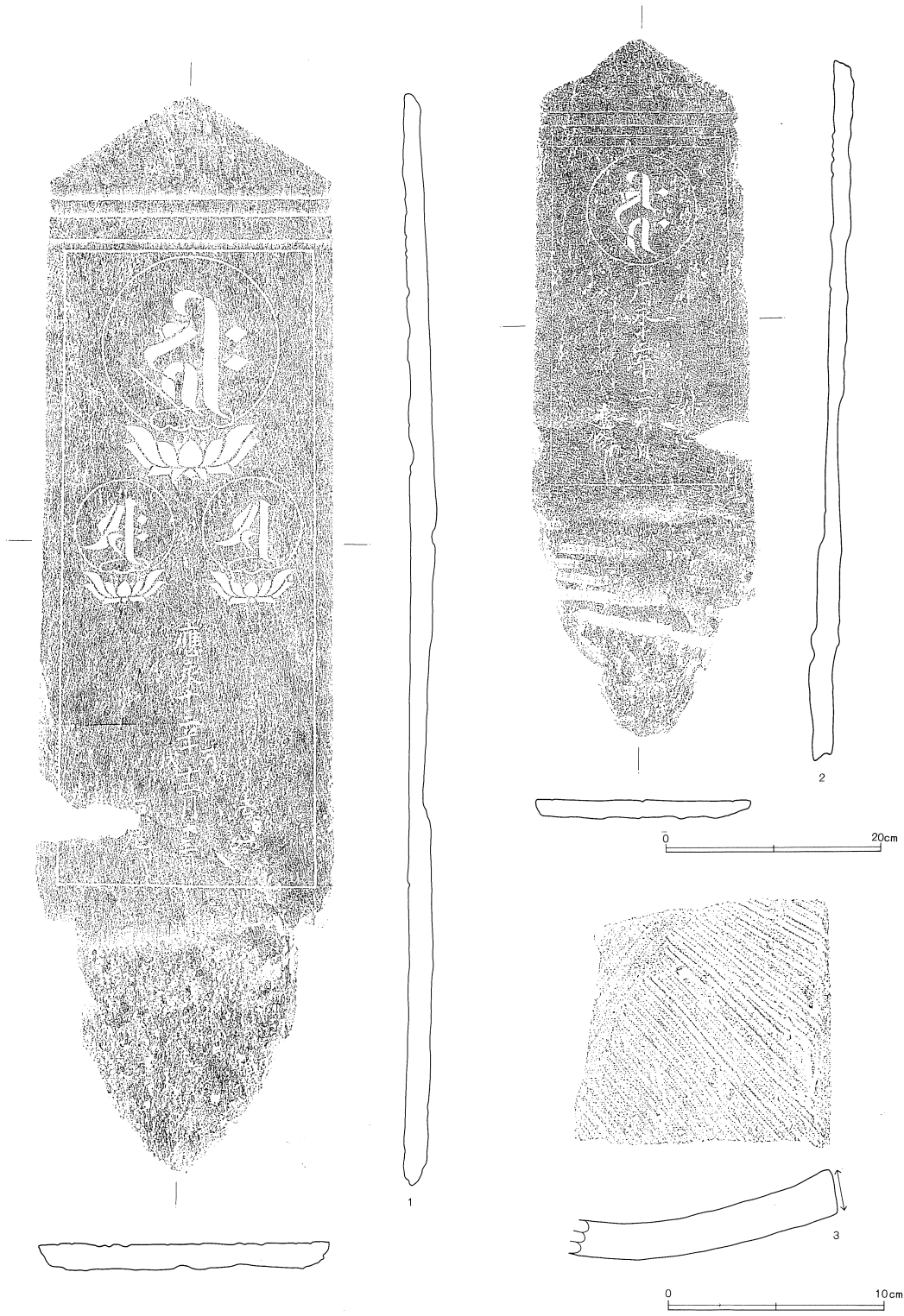
第205図 S E 13出土遺物

S E 15出土遺物（第206図）

曲げ物の底板の破片で、直径14.3cm、厚さ1.1cmを測る。表面は丁寧成形される。周辺には削痕が明瞭に残る。



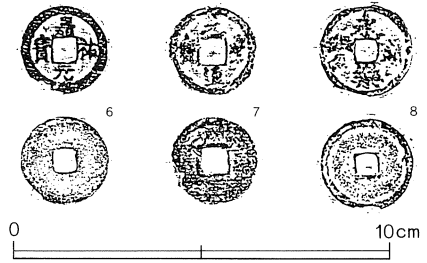
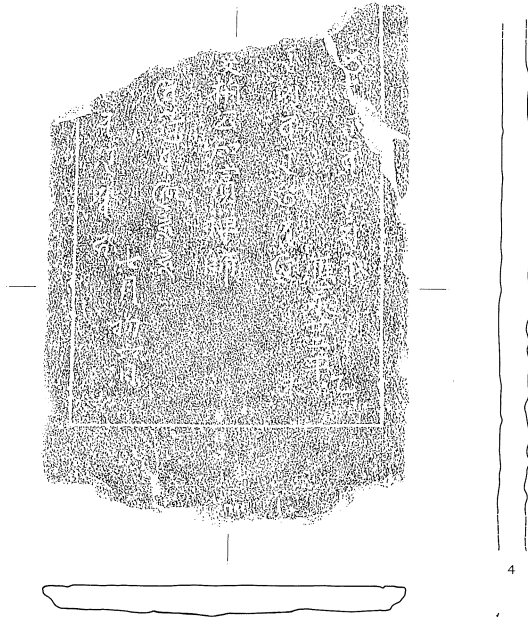
第206図 S E 15出土遺物



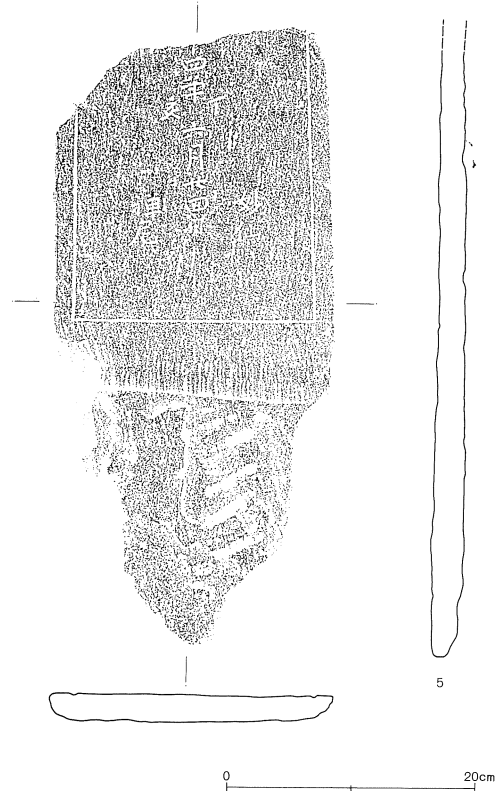
第207图 S E 17出土遺物(1)

S E 17出土遺物（第207～209図）

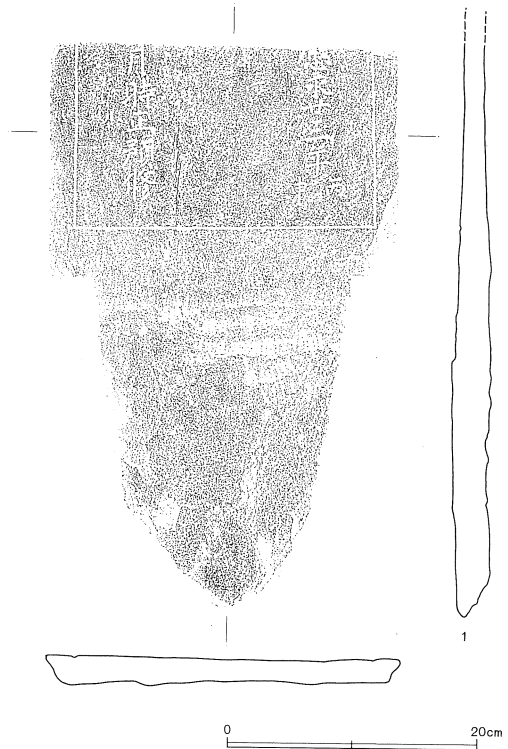
1～4は板石塔婆の破片である。3は全長101.2cm、全幅27.5cm、4は全長65cm、全幅20.3cmと完形に近い。いずれも緑泥片岩製で、応永12～22年の年号を読みとることができる。2は「逆修」である。5は平瓦の端部破片で、凹面には斜方向の平行圧痕を残す。胎土には砂粒を多く含む。第209図6は「壽佑通宝」、7は「元宝通宝」、8は「永楽通宝」である。色調は青銅色。



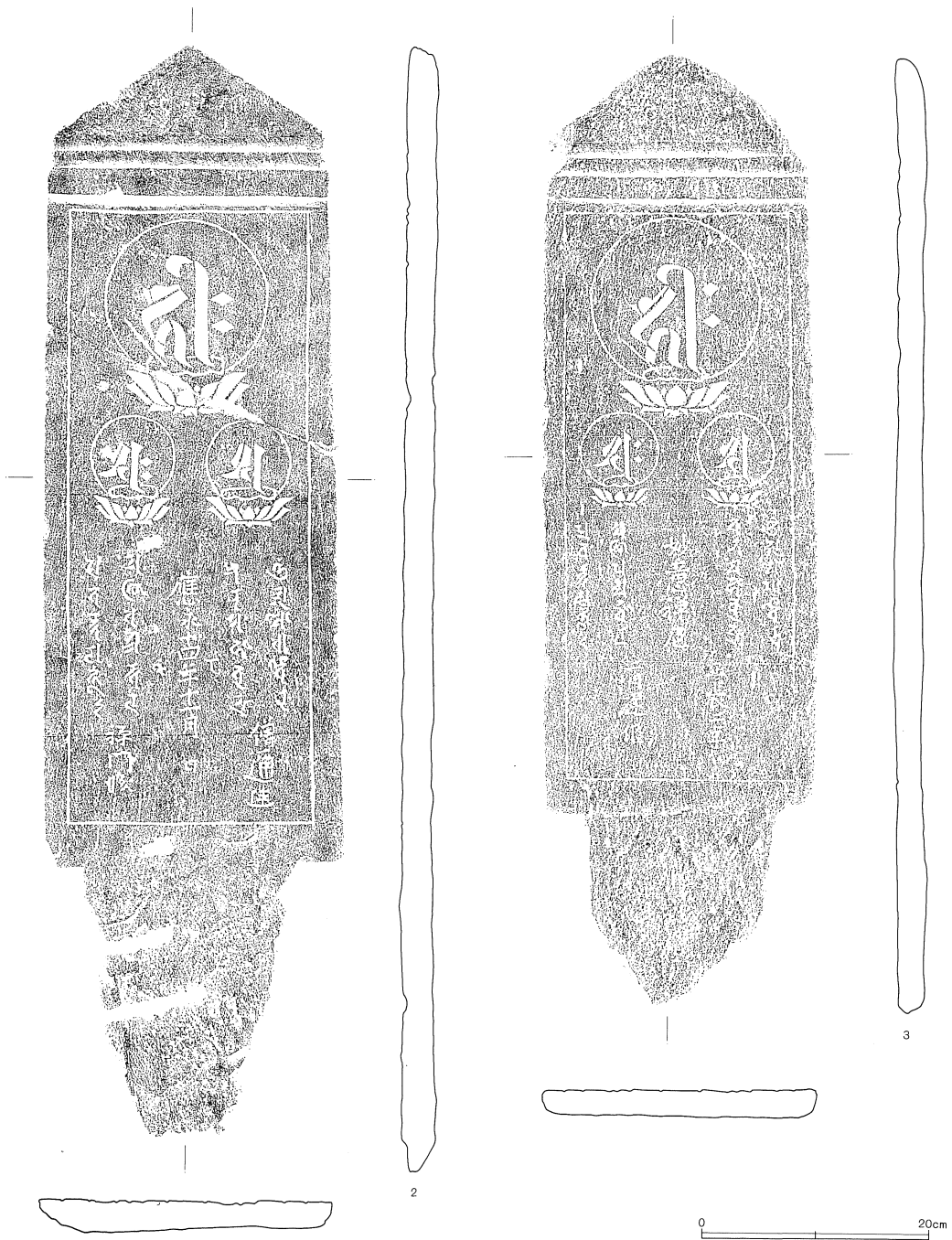
第209図 S E 17出土遺物(3)



第208図 S E 17出土遺物(2)



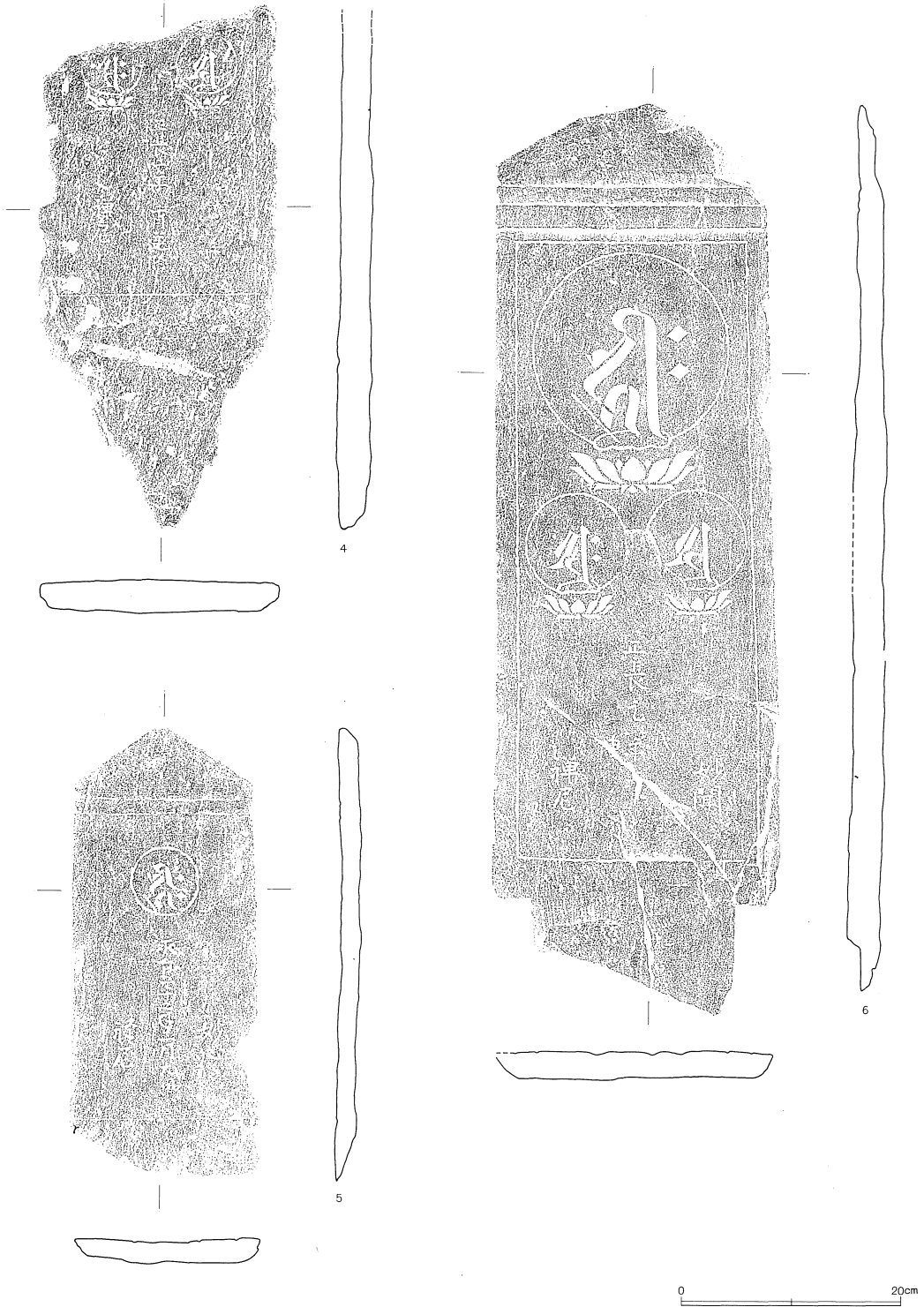
第210図 S E 18出土遺物(1)



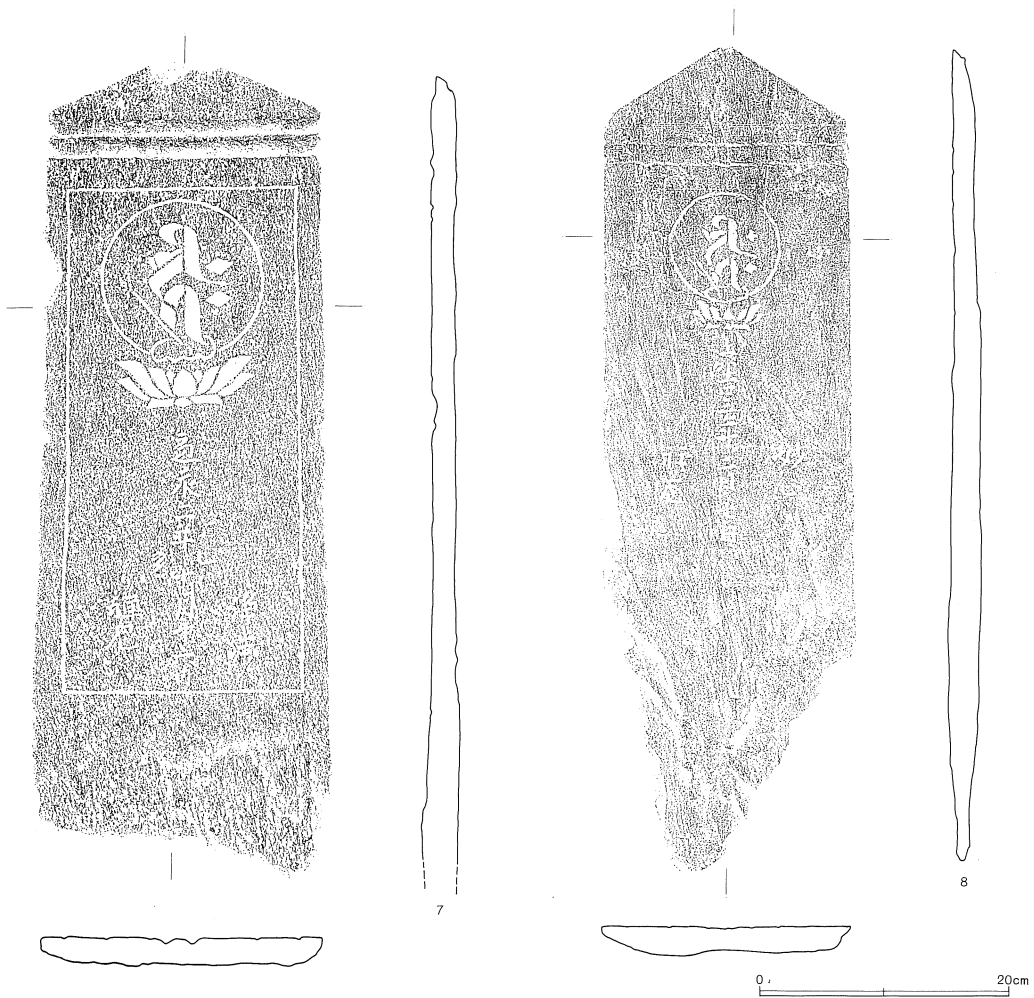
第211図 SE 18出土遺物(2)

SE 18出土遺物 (第210～216図)

第210～213図は板石塔婆で、覆土の上層～下層にかけて出土している。表面がやや風化しているために年号の読み取れないものもあるが、2・5は正長年間、他は応永年間とみられ、15世紀前半に集中する傾向がある。完形品あるいはそれに近いものは二条線や区画、梵字、蓮弁などが明瞭なつくり

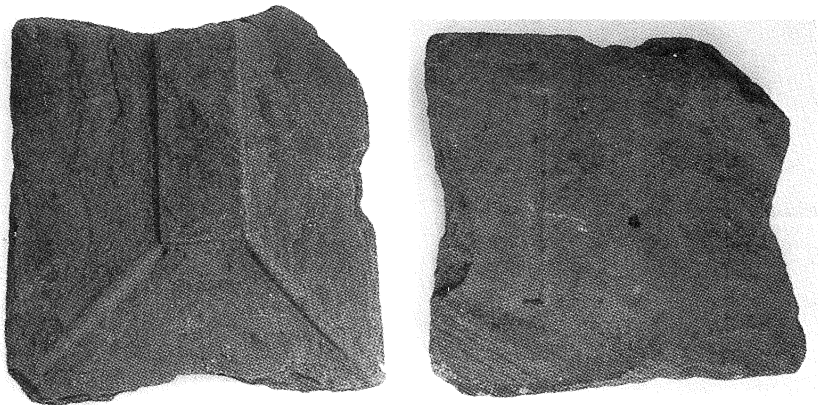


第212図 S E 18出土遺物(3)



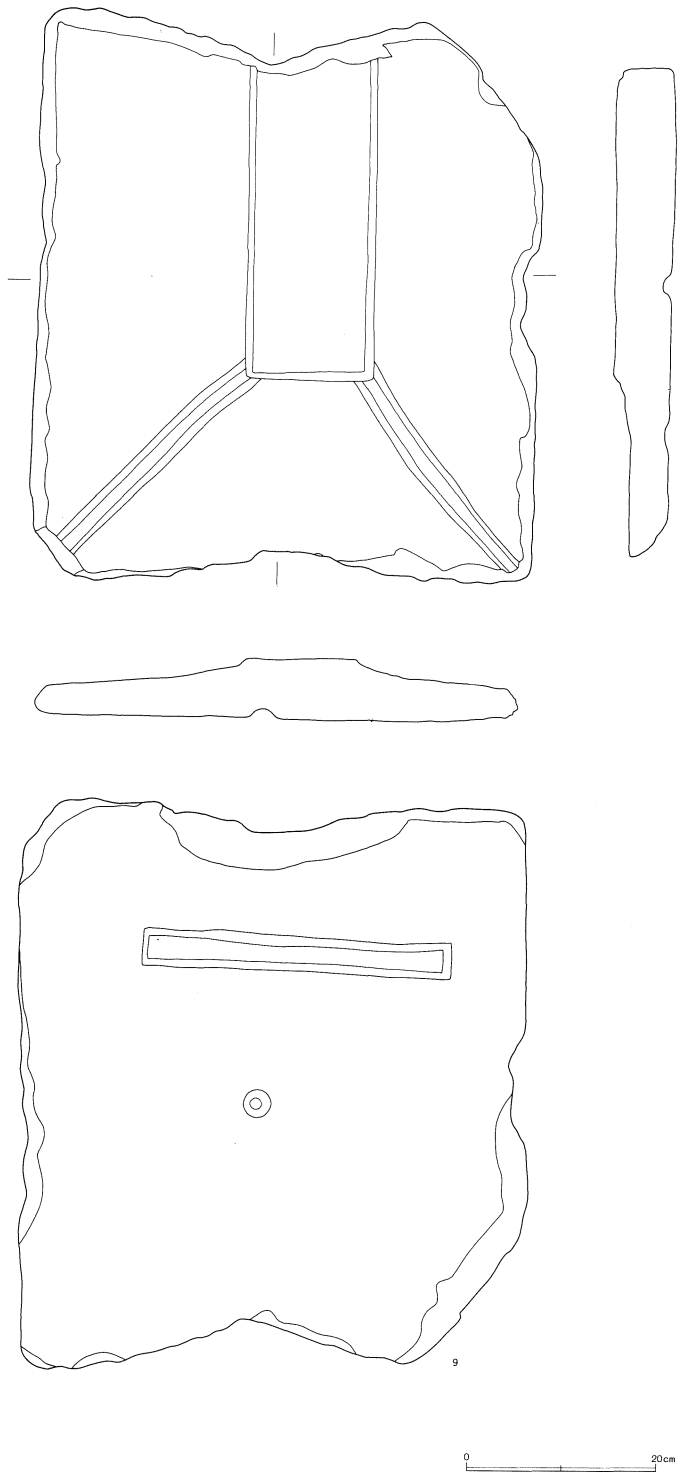
第213図 S E 18出土遺物(4)

で、比較的板石塔婆の盛期の様相を保っている感がある。しかし、ほぼ完形品とみられる1なども1 m程の大きさであり、大きな流れの中では衰退期に入っているものと考えられる。1は全長99.2 cm、全幅26 cm、厚

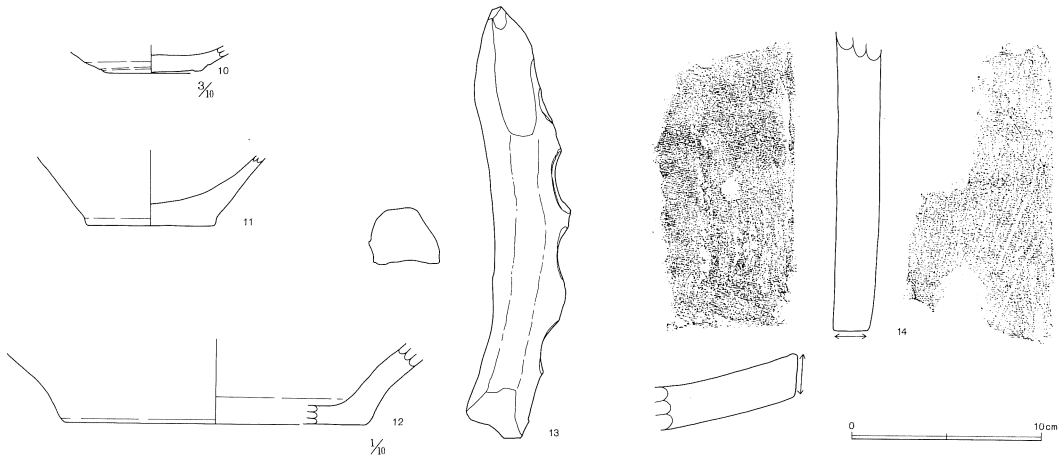


S E 18屋根形石製品

さ2.8cm。2は全長83.5cm、全幅24.2cm、厚さ2.3cm。3は残長45.5cm、全幅22cm、厚さ3cm。4は残長41.7cm、全幅17cm、厚さ2cm。5は残長80.5cm、全幅25.7cm、厚さ2.5cm。6は残長63cm、全幅22.6cm、厚さ2cm。7は残長65.2cm、全幅20cm、厚さ2.2cm。8は残長46.5cm、全幅29cm、厚さ2.5cm。この他にも別個体とみられる小破片が10点余り出土している。第214図は覆土下層より出土した屋根形石製品で、方形に組み合わされる供養塔とみられる。出土したのは緑泥片岩製の屋根をあしらったものの破片である。屋根の形状は寄せ棟造で、いずれも削り出して造られる。残長は52.1cm、全幅は51.8cm、棟部分までの厚さは6.2cmを測る。裏面には側端より14cm内側に幅4cm、長さ33.5cm、深さ0.6cmの長方形の掘り込みとさらに13cm内側中央に直径3.6cm、深さ1.2cmの孔が設けられている。孔については欠損している部分に対応する孔の存在は確定できないが、長方形の掘り込みについては対の部分が存在するものと考えられる。重量は計測はできなかったが、20kg以上はあると思われ、掘り込み部分には同質の緑泥片岩を用いて支え（壁）にしたものと思われる。また、平側には特に掘り込んだ痕跡が認められず、前後あるいは前面（扉）には木製の材を壁にしたのではないかと類例とし



第214図 SE 18出土遺物(5) (屋根形石製品)



第215図 SE 18出土遺物(6)

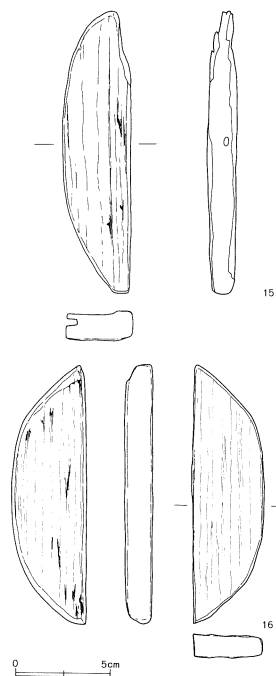
ては児玉郡横瀬町の石造四面塔（文安2年）がある。
 第215図1はかわらけ、2は同坑、3は土鍋あるいは鉢（播鉢含む）の底部周辺の破片。4は鍋などの鏝の破片とみられる。くぼみは指による圧痕、他の部分はナデによって調整される。色調は淡褐色。5は平瓦の破片。端部はヘラケズリ、凸面には糸切り痕を明瞭に残す。胎土に砂粒を多く含む。色調は淡青灰色。第216図1・2は曲げ物の底面の破片。1は繋ぎの孔を中央に残す。直径は1は15.2cm、2は14cmを測る。

SE 20出土遺物（第217図）

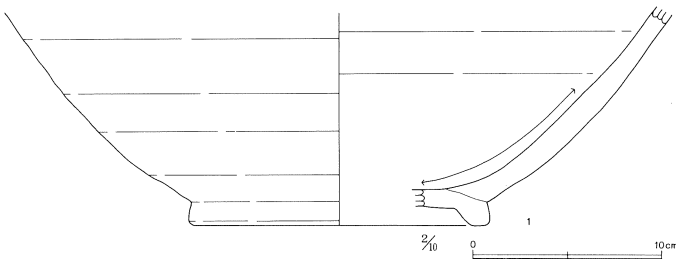
1は東海産（常滑産か）の播鉢破片。内面の使用痕は明瞭。胎土に白色粒子及び砂粒を含む。色調は灰褐色。

SE 23出土遺物（第218図）

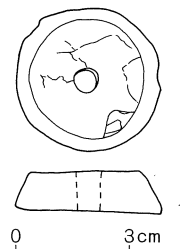
1は石製の紡錘車。剥落が目立ち、上辺は未調整部分を多く残す。



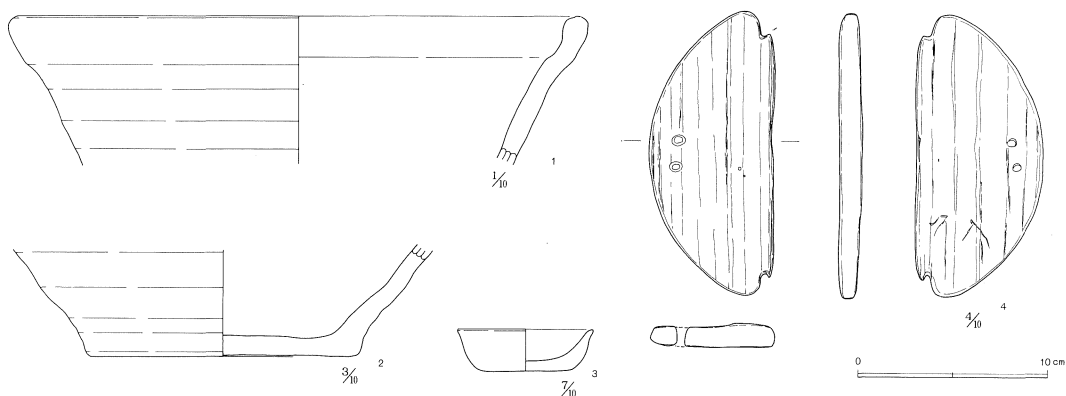
第216図 SE 18出土遺物(7)



第217図 SE 20出土遺物



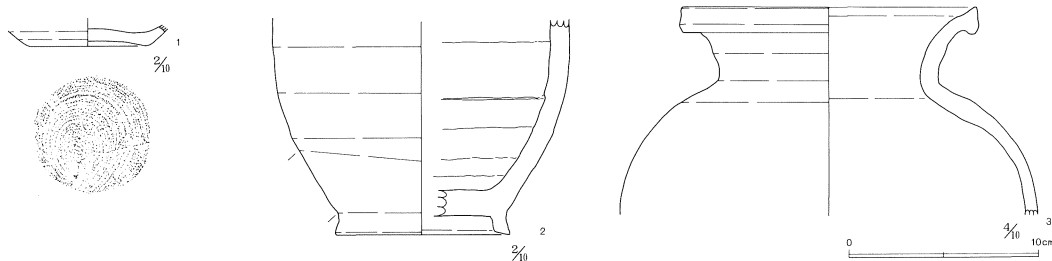
第218図 SE 23出土遺物



第219図 S E 27出土遺物

S E 27出土遺物（第219図）

1・2は内耳土器の口縁部及び胴部下半～底部にかけての破片。輪積痕は明瞭。部分的に断面に研磨痕を有する。3は曲げ物の底破片。直径約15.2cm、厚さ1.3cm、繋ぎ用の孔を2ヶ所もつ。



第220図 S E 28出土遺物

S E 28出土遺物（第220図）

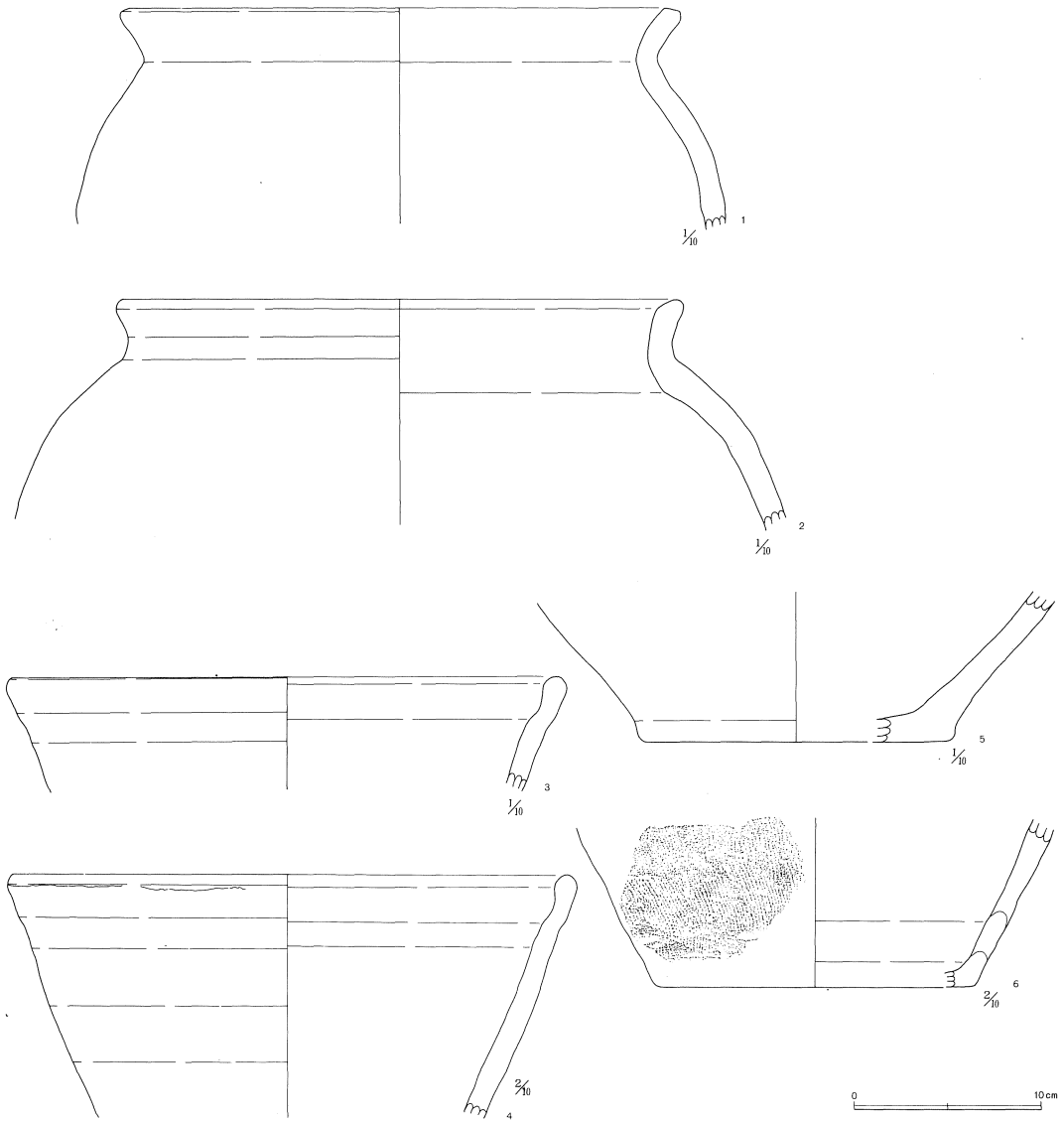
1は須恵器坯の底部破片。底部は回転糸切り未調整。2は長頸壺の胴部下半破片。底部付近は部分的にヘラケズリされる。3は須恵器壺口縁部～胴部の破片。口径は15.8cm。

S E 34出土遺物（第221図）

1・2は甕形土器の口縁部～胴部にかけての破片。口径は1は30.1cm、2は30.4cm。口縁部は横ナデ、胴部はナデ。3・4・6は土鍋の口縁部～胴部、胴部～底部にかけての破片である。内外面とも横ナデ。6は刷毛目痕を残す。口径は3は30.1cm、4は30.4cm。5は播鉢の破片。内面には使用痕明瞭。

S E 35出土遺物（第222図）

1は須恵器蓋の破片。口径は18.1cm。胎土に白色針状物含む。2・3は片口鉢で、2は口径30.8cm、器高12.1cm。内外面とも横ナデ、内面に使用痕を明瞭に残す。胎土に砂粒、雲母を含む。4はかわらけ、口径8.1cm、器高2.2cm、底部は回転糸切り。5は鉢で、口縁部は黄褐色の釉薬がかかる。6・7は火鉢の口縁部破片。6の文様はスタンプ。8・9は壺形土器破片。口径は8は27.8

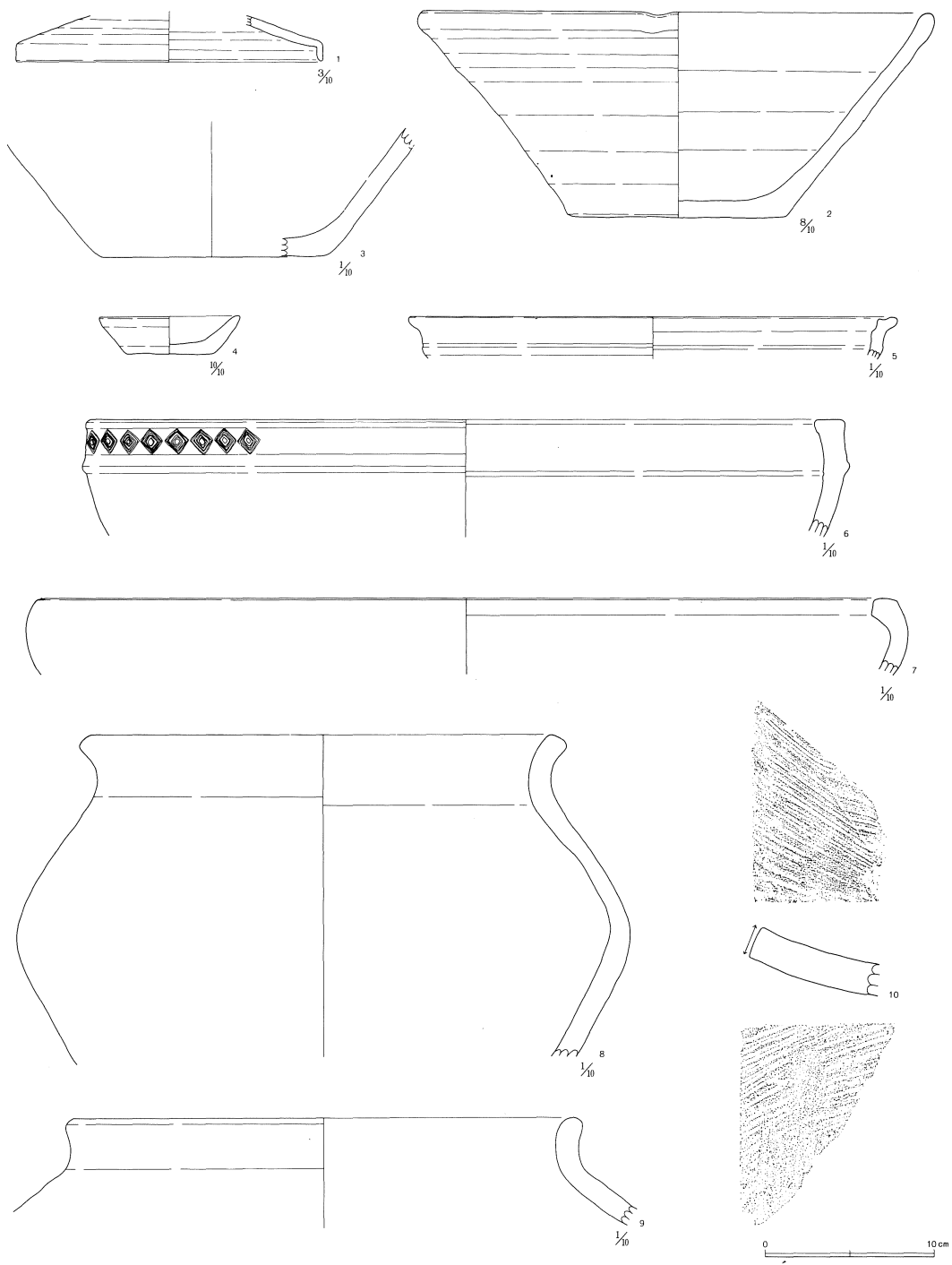


第221図 SE 34出土遺物

cm、9は30.3cm。口縁部は横ナデ。10は平瓦側端部破片。内外面とも平行の圧痕を残す。胎土に砂粒を多く含む。

C 小結—井戸跡について—

塚の越遺跡において検出された35基の井戸跡は一部奈良時代から平安時代にかけてのものも含まれるが、多くは出土遺物から、中世に構築されたものと考えられる。遺跡は高台に立地しながらも、地下水位は以外に高く、1m程で水が湧き出る地点もある。当時、この集落がこのような状況下にあったかどうかは計り知れないが、井戸として十分機能していたとみられるものは約2m程の掘削が行われている。いずれも素掘りの井戸で、断面形態としては概ねロート状、短冊状、挿鉢状



第222図 S E 35出土遺物

に分類できる。平面形態は円形及び楕円形で、底面も同様な形態を示すものが多い。調査された井戸はすべてとっていいほど開口部が崩落しており、図示した一部の井戸については基本的には平面形態が方形のものも含まれる。断面がロート状になる井戸は35基中23基を数え（片側のものは含まない）、この遺跡に占める普及率がいかに高いかを物語っている。規模は様々であるが、概ね2 m前後と3 mを超えるものの2種類に分類することができる。相対的には2 m前後のものが約7割以上を占め、一般的に普及した大きさであることを裏付けている。断面が短冊状になる井戸は、いずれも深く、底まで確認できたものは数少ない。少なくとも2 m以上の掘り込みは行われており、直径が1 m余りの井戸は開口部付近は2段掘りまたは階段状の掘形が認められる。ロート状の掘形に比べると、開口部が狭く明らかに井桁等の組物を施すには無理があり、素掘りの状態のままで使用された可能性が高い。断面が挿鉢状になる井戸は、S E 30のように深さが確認面から1 m余りと浅く、井戸として機能しなかったとみられるものである。これは断面の形態において、ロート状の井戸と類似しており、掘削途中で中断し、そのまま放置された可能性が考えられる。

井戸の覆土については、中世に構築された井戸は確認時において色調は黒褐色を基調とするものが比較的多い。奈良・平安時代と考えられるS E 32などには色調が暗褐色を基調とし、中世の井戸に比べ埋まった状態も自然堆積に近い。中世の井戸の場合は、大きく分けて3種類の埋井の形が考えられる。1つめは自然堆積による場合で、廃棄された後、自然に埋まり、整地等を行うために人為的に最後に手を加えられたものも含まれる。2つめは人為的に埋められたもので、何らかの理由（疫病等の発生、井戸自体の崩壊）によって廃棄せざるを得なくなった場合。3つめは集落そのものが戦争等によって廃絶し、2次的な投棄等によって埋井される場合である。従って、埋井の仕方に投げ込み的な様相が読み取れる。また、この他に地下水位の移動や湧き水が止まる等の原因によって埋井してしまうことが考えられる。なお、覆土は以下に示すとおりである。

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量含む。(S E 3・35は砂混入)
- 2 黒褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。緻密。(S E 3・35は砂混入)
- 3 暗褐色土 大形のロームブロック少量含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
- 5 黒褐色土 ロームブロック多量含む。S E 17・18は黒褐色に近く、粘性が強い。灰色粘土含む。
- 6 黒褐色土 灰色粘土ブロック、ローム粒子少量含む。水気を含み、粘性がある。軟質。
- 7 暗褐色土 ロームブロック含む。水気を含む。軟質。
- 8 黒褐色土 灰色粘土粒子、ローム粒子を含む。粘性がある。軟質。
- 9 明褐色土 ロームブロック（小粒）多量含む。
- 10 明褐色土 大形のロームブロック多量含む。
- 11 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒子多量含む。

引用・参考文献

鈴木 孝之（1990）「古代～中近世の井戸跡について」研究紀要 第7号（岡崎玉泉埋蔵文化財調査事業団）

(5) 溝跡

SD1 (第1号溝・第223図)

調査区の西側に「┌」字状の溝状遺構が検出された。本来は調査区外に延び、方形の区画溝になる可能性がある。古墳時代後期の住居跡であるSJ8やSJ15を壊して構築されている。検出された部分は溝全体の何割かは断定できないが、総延長は約88mに及ぶ。17-BGrid～17-HGrid、17-HGrid～25-I Grid に位置し、南北はほぼ座標北を示す。溝の幅は約1.5m、確認面からの深さは50～60cmである。断面の形状は箱葉研で、底面は比較的平坦である。特に意識して傾斜がつけられているわけではないようにみられるが、溝は南側がやや高く、北側とりわけ調査区の北西部にかけて低くなっている。これは北東方向から入る谷地形を意識したためと考えられる。また、断面観察では特に水の流れたような痕跡は認められなかった。遺物は4500点余りの土師器、須恵器の破片が、覆土上層から中層にかけて出土している。下層には遺物量は少なく、南北の軸に沿った地点に集中している。

SD2 (第2号溝・第232図)

17-BGrid～20-JGrid にかけて検出された。SD1を切り込み、SD9に壊される直線溝である。総延長は45m余り、幅は約1.2m、深さは30cmを測る。SJ14を壊して構築されている。遺物は土師器・須恵器を中心に200点余りの破片が出土している。

SD3 (第3号溝・第244図)

16-NGrid～15-TGrid、16-UGrid～38-PGrid にかけて位置している。台地の縁辺をとりまくように構築され、総延長は約180mに及ぶ。幅は50～80cm、深さは30～50cmを測る。古墳時代後期の住居跡、中世の溝と重複する。覆土は暗褐色で、ロームブロック、ローム粒子などが含まれる。遺物は須恵器坏を中心に出土している。

SD4 (第4号溝・第244図)

6-I Grid～9-KGrid にかけて位置している。SD5と重複する。総延長は12m、幅は約50cm、深さ30cmを測る。溝中央部には10ヶ所余りの Pit の痕跡も検出された。

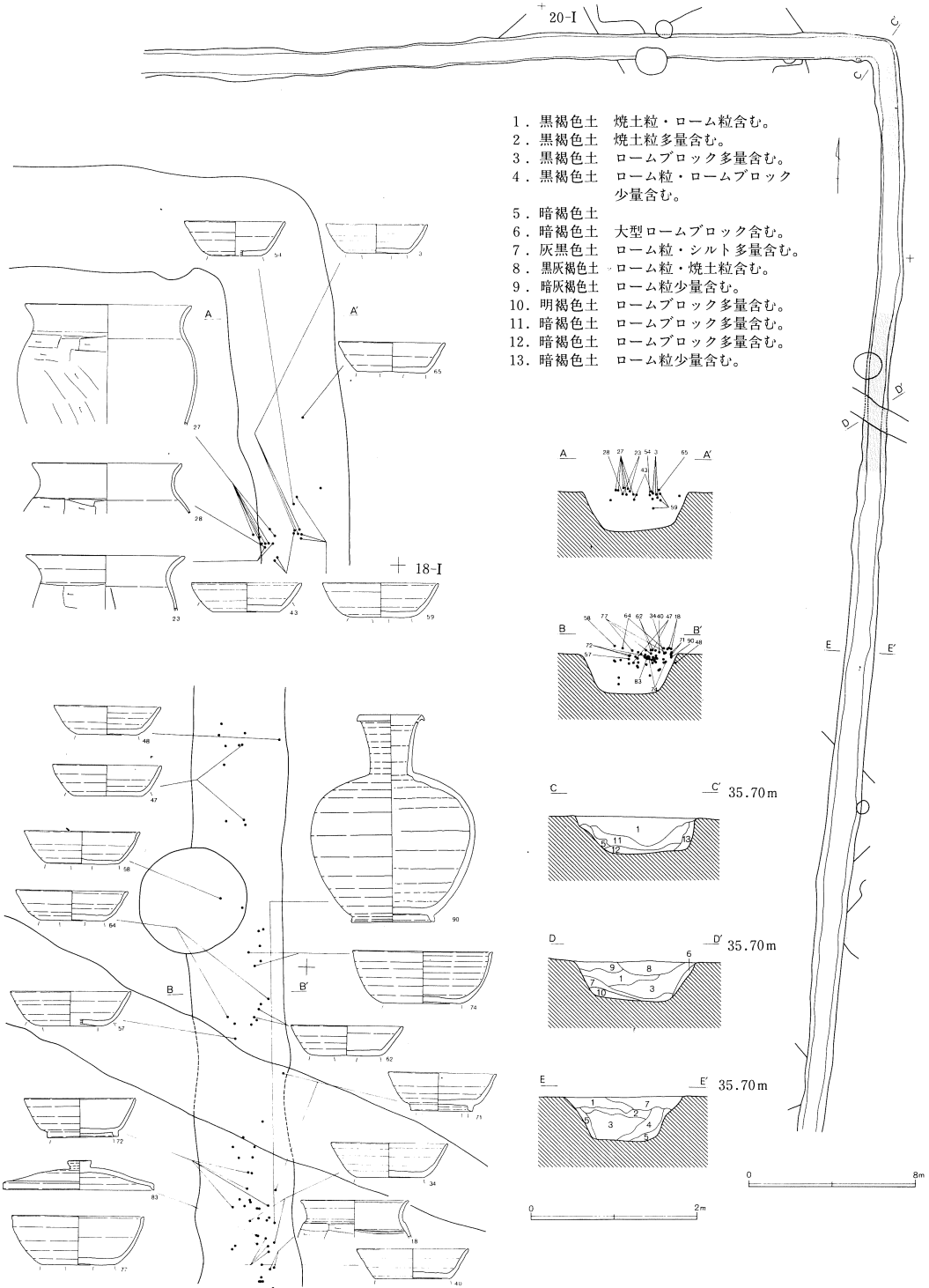
SD5 (第5号溝・第235図)

7-JGrid～8-KGrid に位置している。SD4・SD16と重複し、SD16に北側を壊される。幅は約50cm、深さ50cmを測る。覆土は黒褐色で、ロームブロックが少量含まれる。遺物は出土していない。

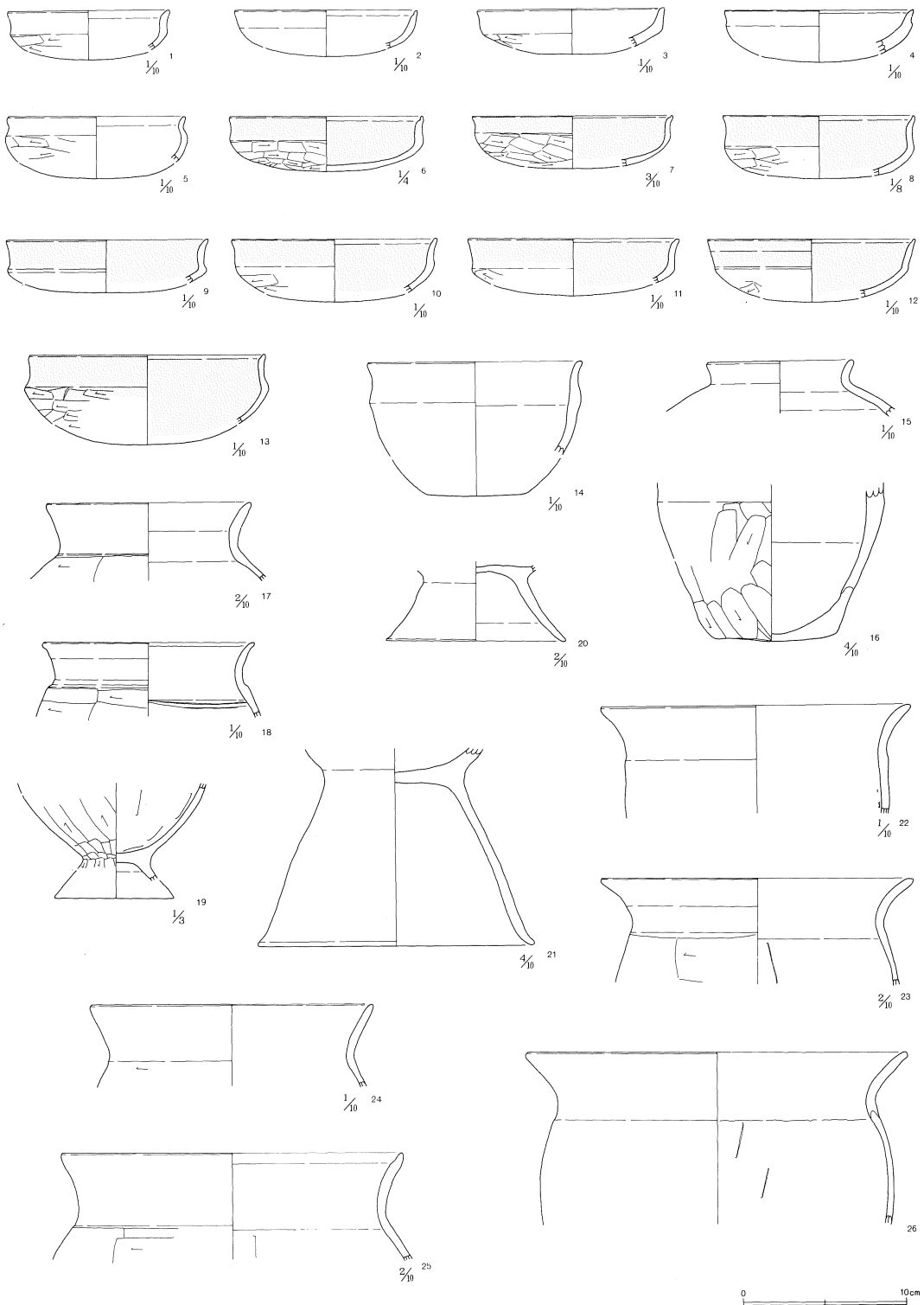
SD6 (第6号溝・全体図参照)

5-KGrid～7-JGrid にかけて位置する。SJ41及びSD16と重複する。幅は50～65cmで、

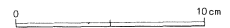
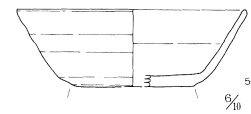
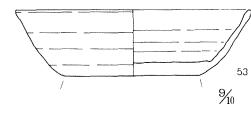
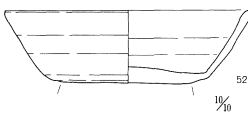
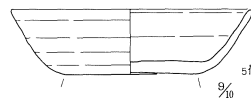
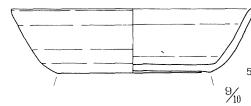
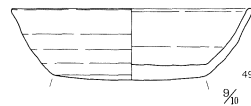
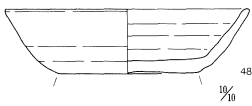
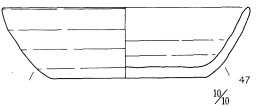
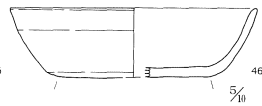
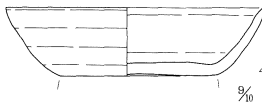
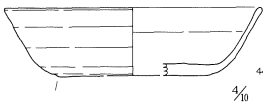
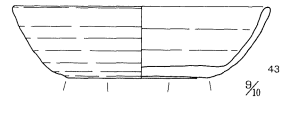
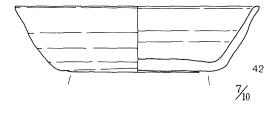
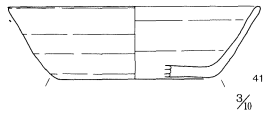
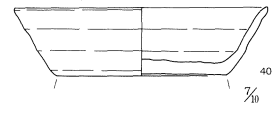
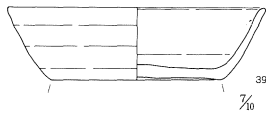
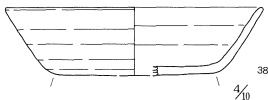
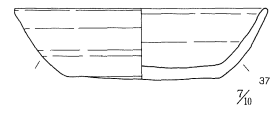
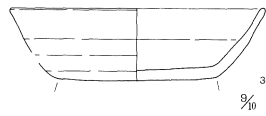
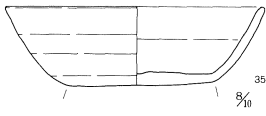
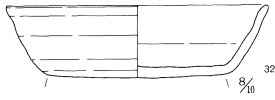
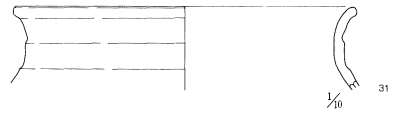
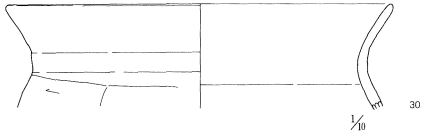
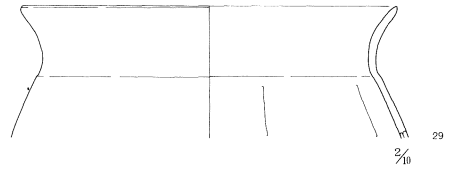
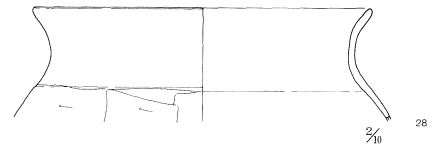
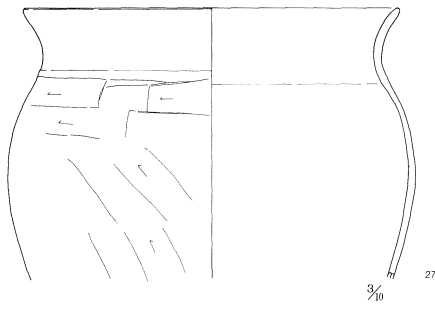
北側がやや広い。深さは25~30cmを測る。覆土は黒褐色~暗褐色で、ロームブロック、灰褐色土が含まれる。遺物等は出土していない。



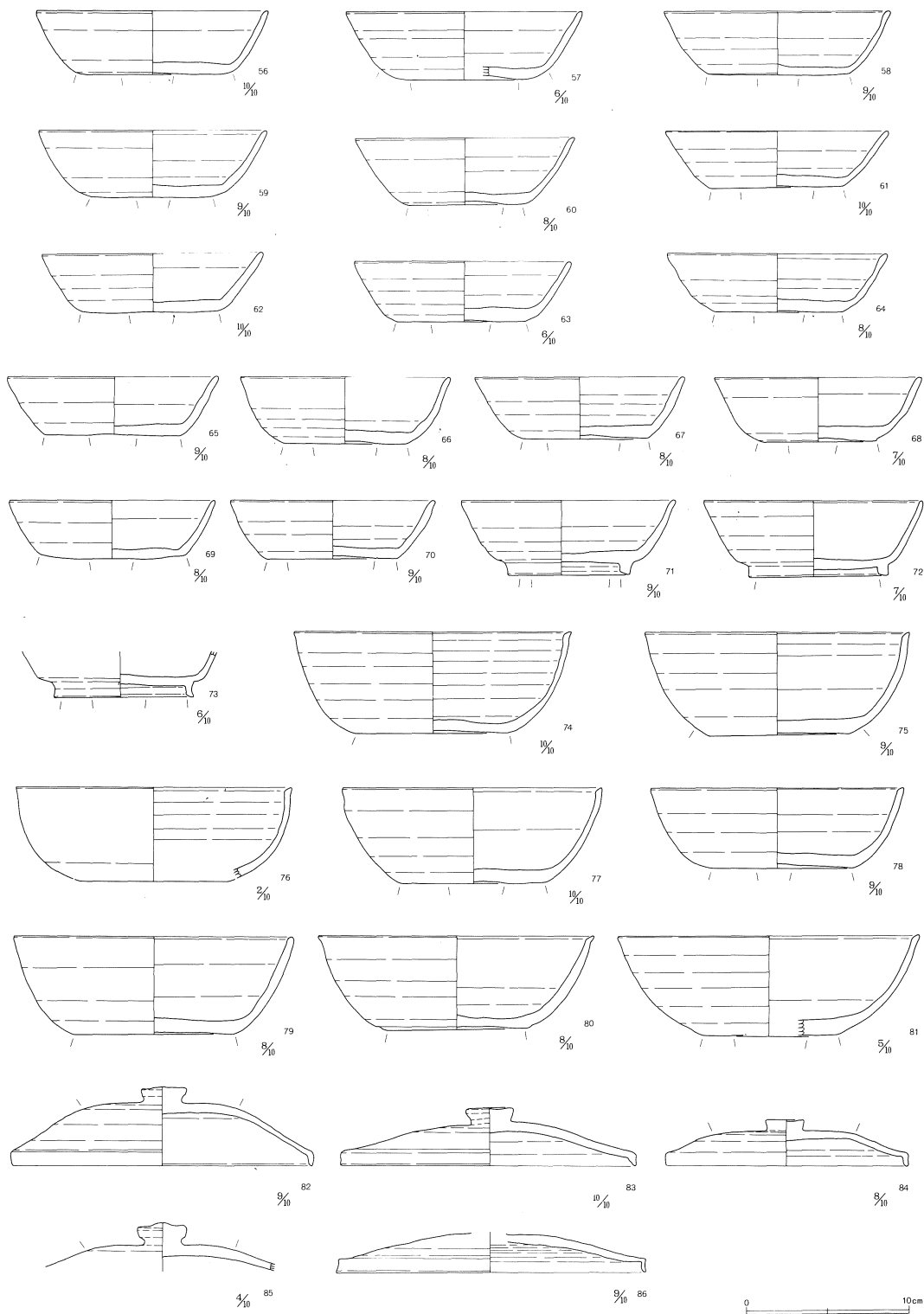
第223図 S D 1 遺物分布図



第224図 SD 1 出土遺物(1)



第225図 S D 1 出土遺物(2)

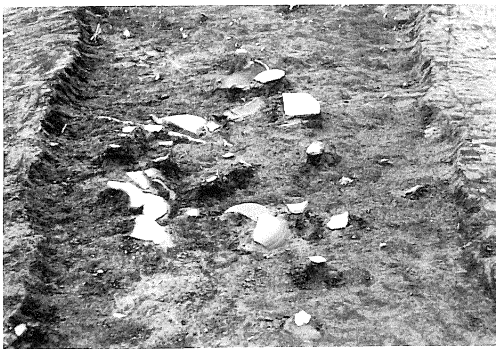


第226図 S D 1 出土遺物(3)

S D 1 出土遺物 (第224~229図)

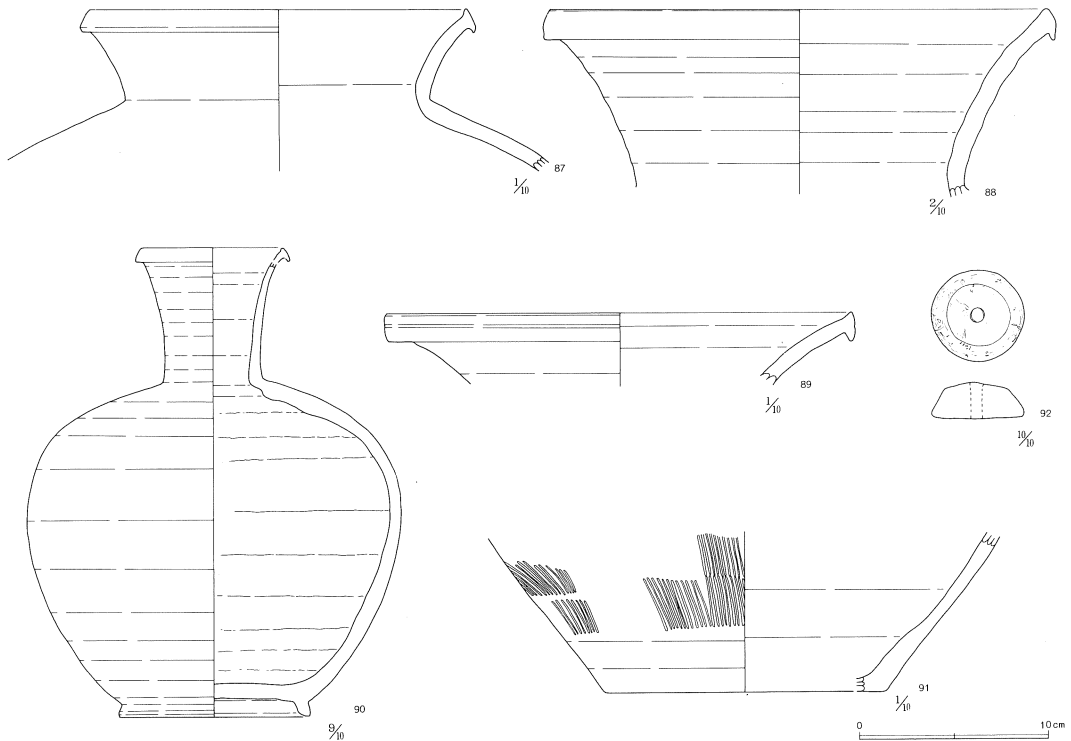
1~13は土師器坏の口縁部から体部にかけての破片である。一部には風化が目立つ。1~5は口縁部が短く、大きく外反する。6~11は口縁部が直立気味に立ち上がり、端部は外反する。12の口縁部は外傾する。13は大振りの坏で、内湾気味に立ち上がって、端部が外反する。内面及び口縁部は横ナデ、体部はヘラケズリされる。底部はいずれも欠損しているが、7・8は平底に近いものになると考えられる。6~8、9・13は内面及び口縁部は横方向のナデの後、赤彩が施される。口径及び器高は1は9.8cm、3.2cm、2は11.2cm、2.8cm、3は11.5cm、2.8cm、4は11.6cm、3.2cm、5は10.8cm、3.8cm、6は11.9cm、3.4cm、7は12.3cm、3.2cm、8は11.9cm、3.8cm、9は12.2cm、3.2cm、10は12.6cm、3.8cm、11は13.1cm、3.5cm、12は12.8cm、3.9cm、13は14.4cm、5.6cm(いずれも推定値)を測る。胎土には砂粒、白色粒子、黒色粒子などを含む。色調は淡赤褐色~淡褐色。14は小形の土師器鉢で、内外面とも風化が著しい。口径13.4cm。胎土には砂粒、小礫を含む。色調は淡褐色。15は土師器小型壺の口縁部破片。口縁部は横ナデ。口径9cm。胎土に細かい砂粒を含む。色調は淡褐色。16は土師器小形甕の胴部下半。断面に輪積みの痕跡を明瞭に残す。外面は縦方向のヘラケズリ、内面はナデ。胎土に砂粒、小礫を含む。色調は淡橙褐色。17・18は台付甕の口縁部、19・20は胴部から脚部の破片。口縁部及び脚部は横ナデ、胴部はヘラケズリ。口径は17は12.2cm、18は12.8cm。胎土には砂粒、黒色粒子を含む。色調は淡橙褐色。21は台付鍋(甕)の脚部。内外面とも横ナデ。胎土に砂粒を含む。色調は淡赤褐色。22~31は土師器甕の口縁部から胴部にかけての破片。風化が著しく、口縁部は横ナデ、胴部外面は横及び縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデが施される。胴部は22を除いて大きく張り出す器種が多い。口径は22・23は20cm、24は17.2cm、25は21cm、26は23.6cm、27は20.2cm、28は18cm、29は20.1cm、30は20.6cm、31は18.1cm(推定値含む)を測る。胎土には粗い砂粒、小礫、白色粒子、黒色粒子が含まれる。色調は淡橙褐色~淡茶褐色。32~70は須恵器坏である。32~55については底部の調整が全面にわたって回転ヘラケズリされるもので、法量によって4種に分類した。第1類は32~35で、口径は14cm前後、器高は4cm前後の坏(32は14cm、3.8cm、33は13.8cm、4.2cm、34は14.2cm、4.1cm、35は13.8cm、4.1cm)、第2類は36~41、44・45で、口径は13.5cm前後、器高は3.6~3.7cm前後の坏(36は13.4cm、3.9cm、37は13.4cm、3.8cm、38は13.7cm、3.7cm、39は13.6cm、3.8cm、40は13.5cm、3.7cm、41は13.4cm、3.8

cm、44は13.6cm、3.5cm、45は13.8cm、3.6cm)、第3類は42・43、46~53で、口径は13cm前後、器高は3.5~3.8cm前後の坏(42は12.8cm、3.4cm、43は13.2cm、3.4cm、46は13.2cm、3.7cm、47は13cm、3.8cm、48は13.1cm、3.3cm、49は12.7cm、3.7cm、50は12.9cm、3.3cm、51は12.8cm、3.4cm、52は13cm、3.8cm、53は12.4cm、3.4cm)、第4類は54・55で、口径12cm前後、器高は4cm前後の坏(54は12.2cm、3.9cm、55は12.2cm、3.8cm)であ

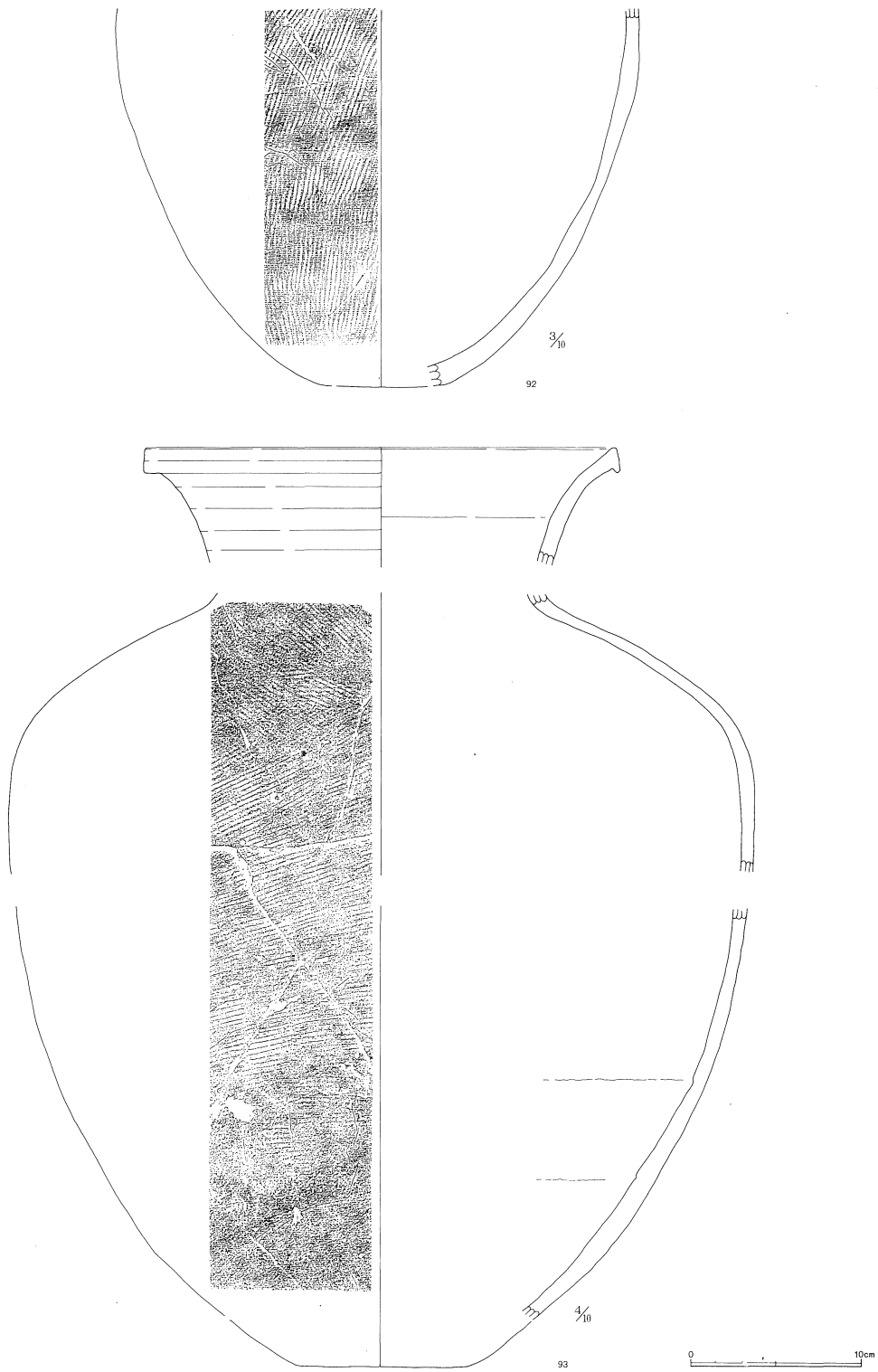


S D 1 遺物出土状況

る。ヘラケズリは体部の下端まで及び器種は体部下端から底部にかけての断面は肉厚に成形されている。胎土には細かい砂粒、白色針状物を含むものが多いが、砂粒と白色粒子だけのものもある。色調は青灰色～灰色。56～70は底部の調整において、回転糸切り後、周辺を回転ヘラケズりする坏で、法量によって4種類に分類した。第1類は56～59で、口径は14cm前後、器高は4cm前後の坏（56は14.1cm、3.9cm、57は14.6cm、4.2cm、58は14cm、3.9cm、59は13.9cm、4.1cm）、第2類は60～64で、口径は13.5～13.8cm、器高は3.6cm前後の坏（60は13.5cm、4.1cm、61は13.8cm、3.6cm、62は13.4cm、3.6cm、63は13.4cm、3.6cm、64は13.8cm、3.6cm）、第3類は65～68で、口径が13cm前後の坏（65は12.9cm、3.5cm、66は13cm、4.1cm、67は13cm、3.8cm、68は13cm、3.9cm）、第4類は69・70で、口径は12.5cm前後、器高は3.5cm前後の坏（69は12.4cm、3.6cm、70は12.6cm、3.5cm）である。相対的に底部は厚く、上げ底状で、口縁部は内湾気味に立ち上がるものが多い。胎土には砂粒、白色針状物、白色粒子などが含まれる。色調は青灰色～灰色。71～73は須恵器高台付坏で、脚部は坏部に張り付け、ナデによって調整される。底部調整は71と73は回転糸切り後、周辺ヘラケズリ、72は全面回転ヘラケズリである。口径と器高は71は13cm、4.6cm、72は13.6cm、4.6cmを測る。胎土には砂粒、白色針状物を含む。色調は青灰色。74～81は須恵器碗である。底部の調整は74・75・79・80は全面回転ヘラケズリ。他は回転糸切り後、周辺ヘラケズリされる。口縁部端部は内面に向かって平坦に調整され、口縁部から体部にかけて内湾する。口径と器高は74は17cm、6.2

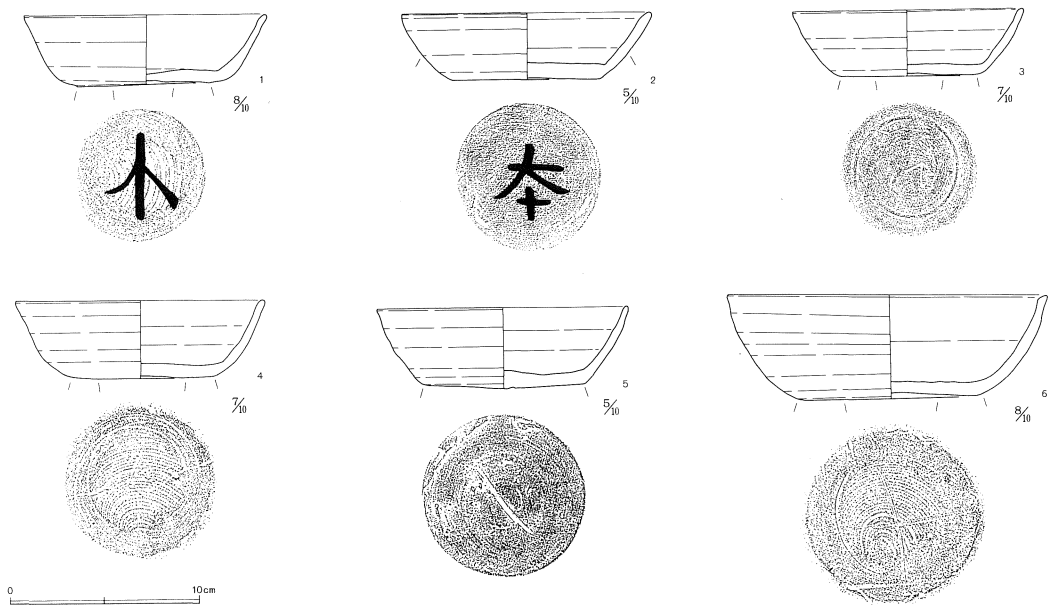


第227図 S D 1 出土遺物(4)



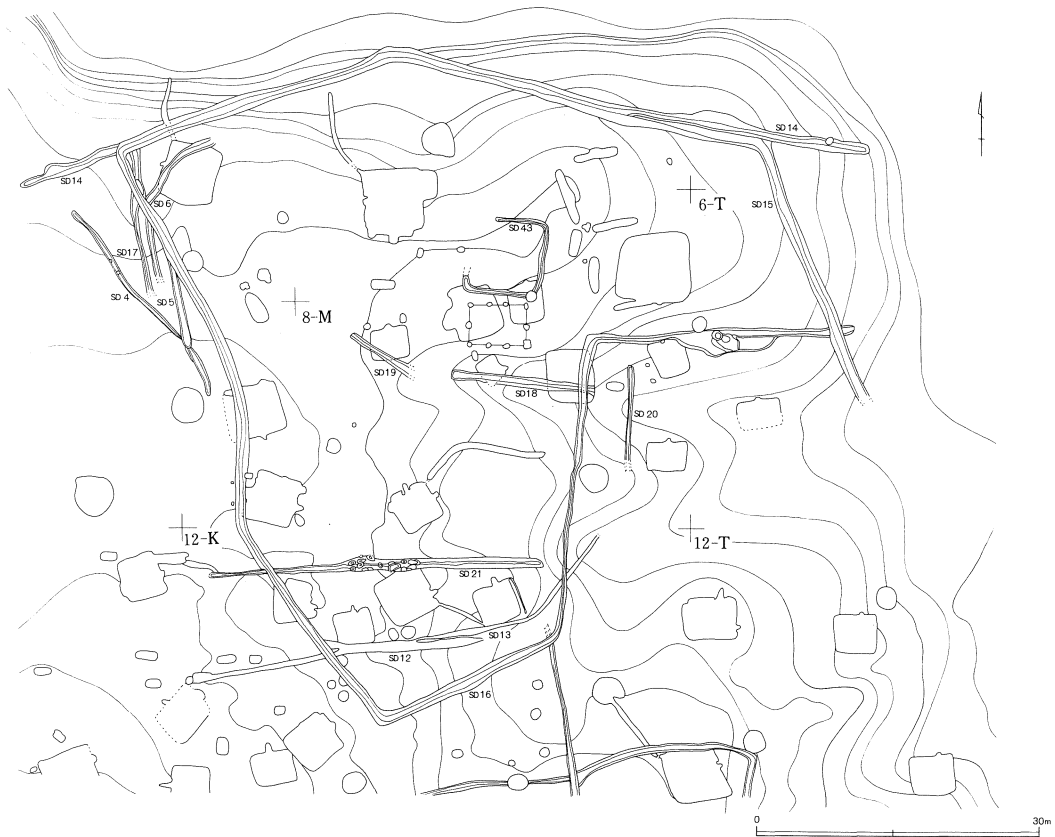
第228図 S D 1 出土遺物(5)

cm、75は16.4cm、6.2cm、76は16.8cm、77は16cm、5.8cm、78は15.6cm、4.8cm、79は17cm、5.9cm、80は17cm、5.6cm、81は18.6cm、6.1cmを測る。胎土には砂粒、白色針状物、白色粒子、黒色粒子を含む。色調は淡青灰色～灰褐色。82～86は須恵器蓋である。82はやや大振りで、口径18.4cm、器高は4.9cmを測る。轆轤の痕跡を明瞭に残し、天井部は回転ヘラケズリされる。83は口径は18.2cm、器高は3.6cmを測る。天井部には回転ヘラケズリは見られない。84は小振りで、口径は15cm、器高は2.9cmを測る。天井部は回転ヘラケズリされ、肩部が広い。つまみはやや扁平になる。85・86は破片で、86は口径18.8cmを測る。胎土には砂粒、白色針状物が含まれる。色調は淡青灰色～灰色。87～89は須恵器甕の口縁部の破片である。88は轆轤の痕跡を明瞭にとどめている。口径は87は20.4cm、88は27.1cm、89は25.2cmを測る。胎土には粗い砂粒、小礫、白色粒子、黒色粒子などが含まれる。色調は淡緑褐色～淡青灰色。90は長頸壺で、口唇部を欠く。推定口径は7.8cm、器高は25.4cm、胴部最大径は20cmを測る。頸部の輪積痕及び轆轤痕は明瞭に残る。底部は高台を後付けし、ナデによって調整される。口縁部から胴部下半にかけては自然釉がかかる。胎土には砂粒、黒色粒子、小礫が含まれる。色調は淡緑黄色～淡灰褐色。91は須恵器鉢の胴部下半から底部にかけての破片。外面は部分的に、浅く平行叩きが施される。内面は横ナデ。胎土には砂粒、白色針状物、小礫が含まれる。色調は灰色～灰褐色。92は石製の紡錘車。直径は5.1cm、高さは1.9cm、孔径は7mmを測る。全面にわたって磨き込まれている。色調は暗緑褐色。93・94は須恵器甕である。93は胴部下半の破片。外面は底部付近まで細かい平行叩き、内面は横ナデが施される。輪積痕は4～5cm置きに明瞭に残る。94は同一個体と考えられる。口縁部は横ナデ、胴部は平行叩き、内面は横ナデが施される。胴部の平行叩きは横方向に叩かれ、口縁部付近では交差して菱形形状になる。口径は28.3cmを測る。胎土には砂粒、小礫が含まれる。色調は淡緑褐色。第229図1～6は墨書土器または土器



第229図 S D 1 出土墨書土器及びヘラ記号をもつ土器

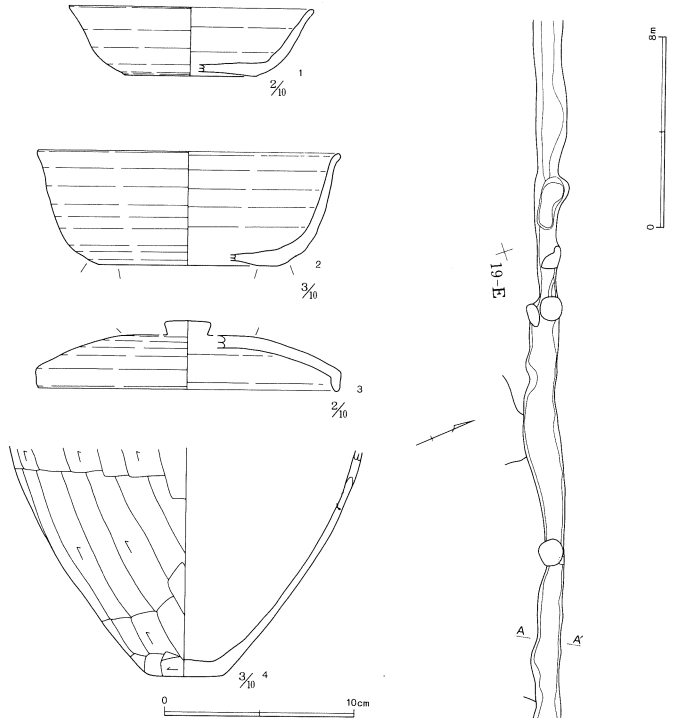
に記号をもつものである。1・2は須恵器坏で、底部中央に1は「↑」、2は「本」の墨書を有する。口径と器高は1は13cm、3.7cm、2は13.6cm、3.4cmを測る。底部調整は1は周辺ヘラケズリ、2は全面回転ヘラケズリ。胎土には砂粒、白色針状物を含む。色調は淡青灰色。3～6は底部にヘラ記号を有するもので、3～5は須恵器坏、6は須恵器碗で、内外面には漆の付着が顕著である。記号は3は「↑」、4・6は「×」、5は「、」である。1と3の矢印は類似しており、同意か。口径と器高は3は12.6cm、3.4cm、4は13.3cm、4.2cm、5は13.5cm、4.4cm、6は17.2cm、5.6cmを測る。胎土には細砂粒、白色針状物を含む。色調は灰色～灰褐色。



第230図 溝跡概略図(1)

SD 2 出土遺物 (第231図)

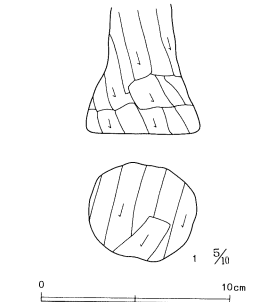
1は須恵器坏、2は須恵器碗、3は須恵器蓋で、口径と器高は1は13.2cm、3.7cm、2は16.3cm、6.6cm、3は16.3cm。胎土に砂粒、白色針状物を含む。色調は淡青灰色。1の底部調整は回転糸切り未調整。4は土師器甕の胴部下半。外面はヘラケズリ、内面は横ナデ。胎土に砂粒を含む。色調は橙褐色。



第231図 SD 2 出土遺物

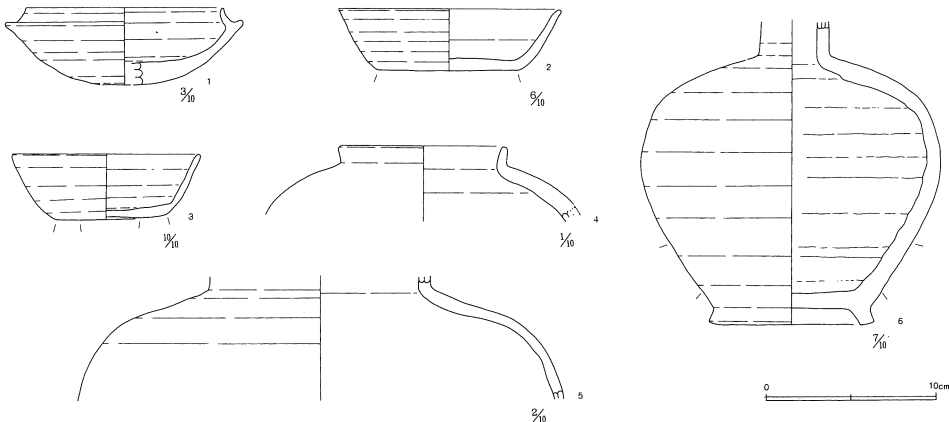
SD 3 出土遺物 (第234図)

1は須恵器坏身で、周辺の住居からの混入とみられる。口径は11.8cm、器高は4.6cm。胎土には粗い砂粒、白色針状物を含む。色調は青灰色。2・3は須恵器坏。口径と器高は2は13.4cm、3.7cm、3は11.2cm、4.9cm。胎土には砂粒、白色針状物を含む。色調は淡青灰色。4・5は須恵器短頸壺の口縁部。口縁部及び肩部にかけては轆轤の痕跡明瞭。4は口径10cm。胎土には砂粒、小礫を含む。色調は灰色。6は須恵器長頸壺で、口縁部及び頸部を欠く。胴部下半は幅5cmにわたってヘラケズリされる。胎土には砂粒、小礫を含む。色調は淡緑黄色～灰色。肩部付近には自然釉附着。

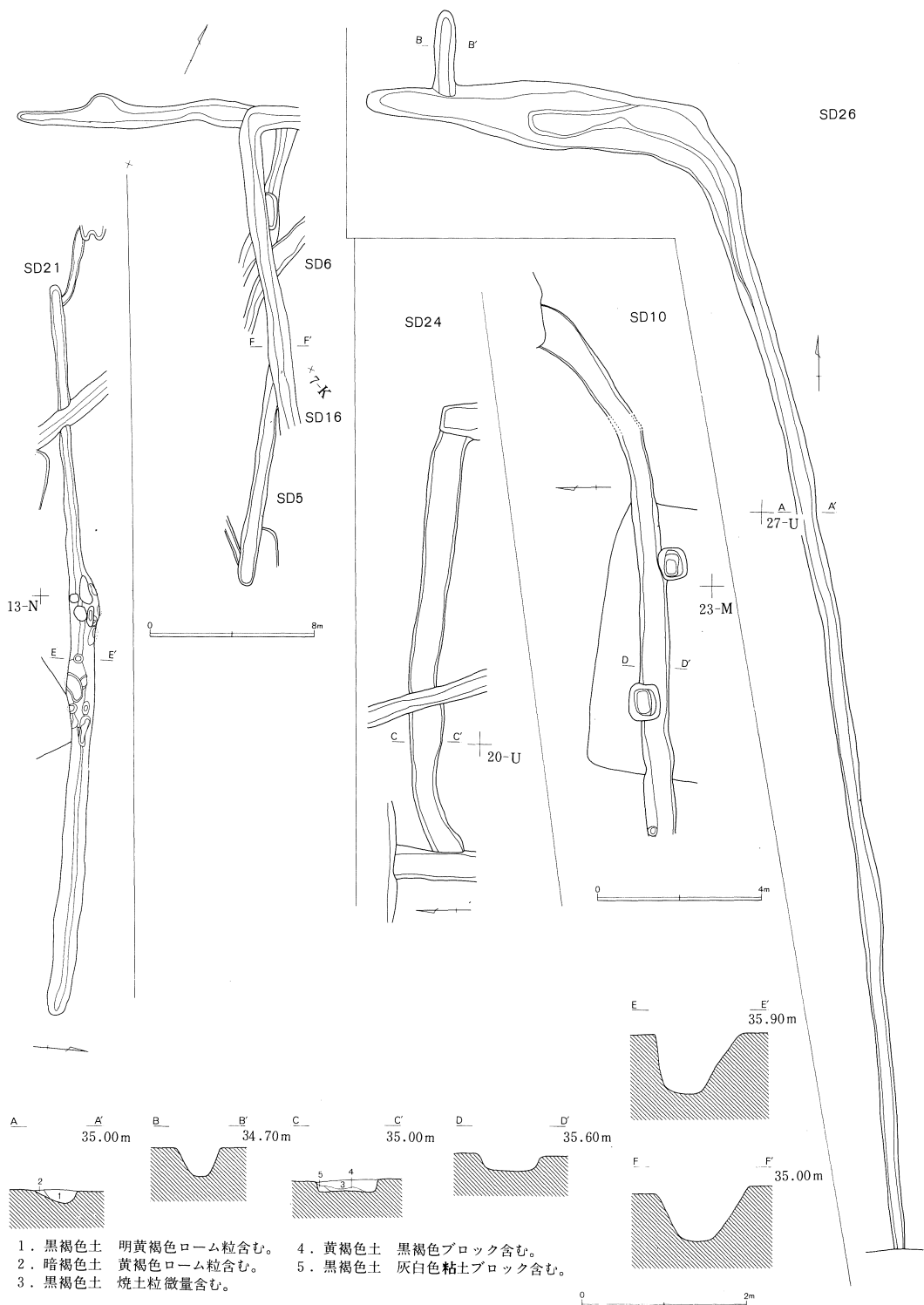


第233図 SD 4 出土遺物

第232図 SD 2



第234図 SD 3 出土遺物



- 1. 黒褐色土 明黄褐色ローム粒含む。
- 2. 暗褐色土 黄褐色ローム粒含む。
- 3. 黒褐色土 焼土粒微量含む。
- 4. 黄褐色土 黒褐色ブロック含む。
- 5. 黒褐色土 灰白色粘土ブロック含む。

第235図 SD21・5・6・16・24・10・26

SD 4 出土遺物（第233図）

1は土製の支脚の破片。全面がヘラケズリ調整される。胎土には砂粒を含む。色調は橙褐色。

SD 7（第7号溝—第242図）

19-R～TGridにかけて位置する。全長は約15mを測り、谷地形となる19-TGrid付近で確認は不可能となる。幅は45～60cm、深さは約30cmである。覆土は黒褐色で、ロームブロック、ローム粒子、焼土粒子などが含まれる。遺物は出土していない。

SD 8（第8号溝—全体図参照）

25-I～22-M、22-O～20-RGridに位置している。確認時において溝床が露出している箇所があり、S J 28・29付近では住居の面よりも浅い為、検出されなかった。幅は50～80cm、深さは最深で20cmを測る。覆土は黒褐色で、ロームブロックが含まれる。

SD 9（第9号溝—第236・237図）

溝は3条から成っており、SD 9-aは最も深く掘られ、25-I～20-I、20-I～19-R、19-R～22-RGridにかけて「コ」の字状の平面形態を示す。SD 9-bは20-OGrid付近でSD 9-aより分離し、再び20-RGridでSD 9-aに壊される。SD 9-cはSD 9-aが完全に



SD 3

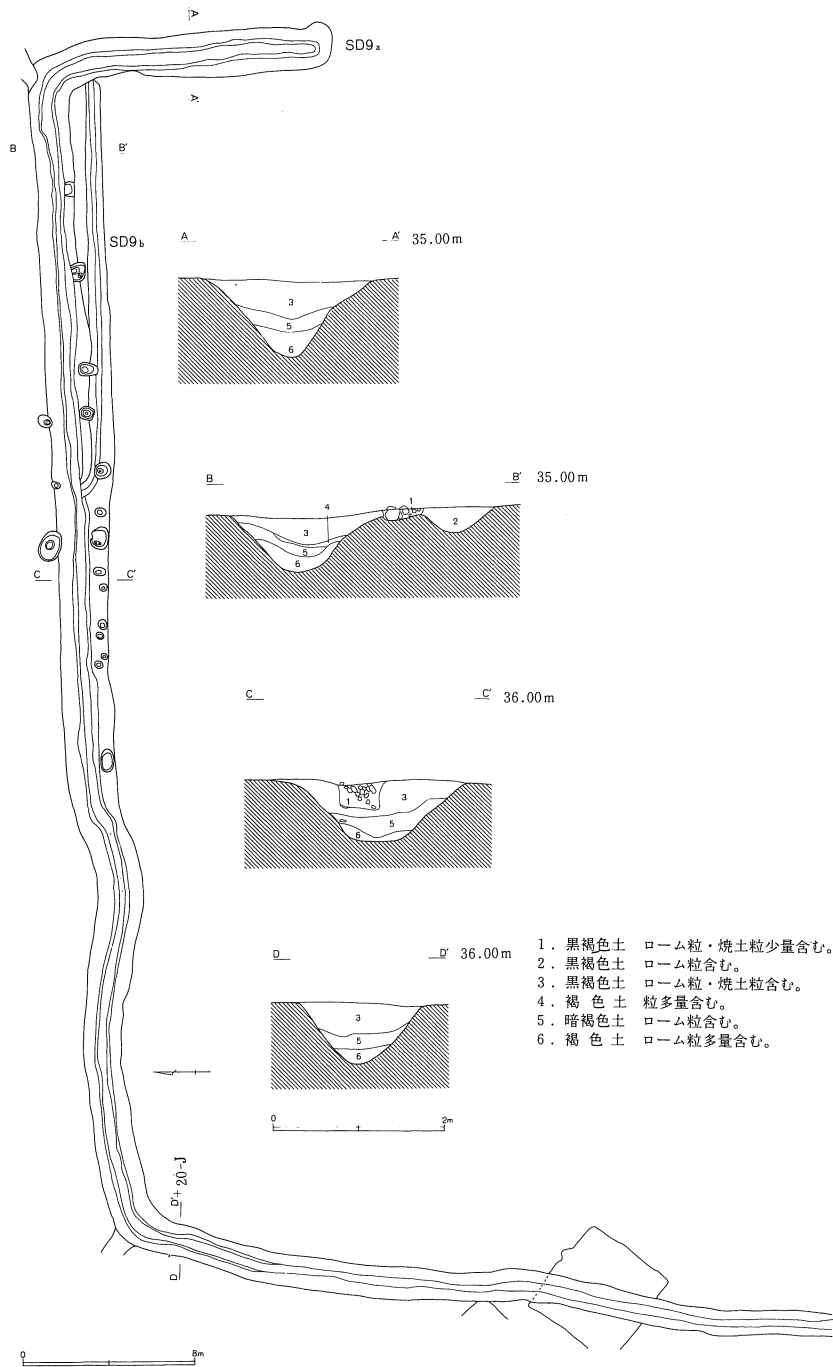


SD 9 c

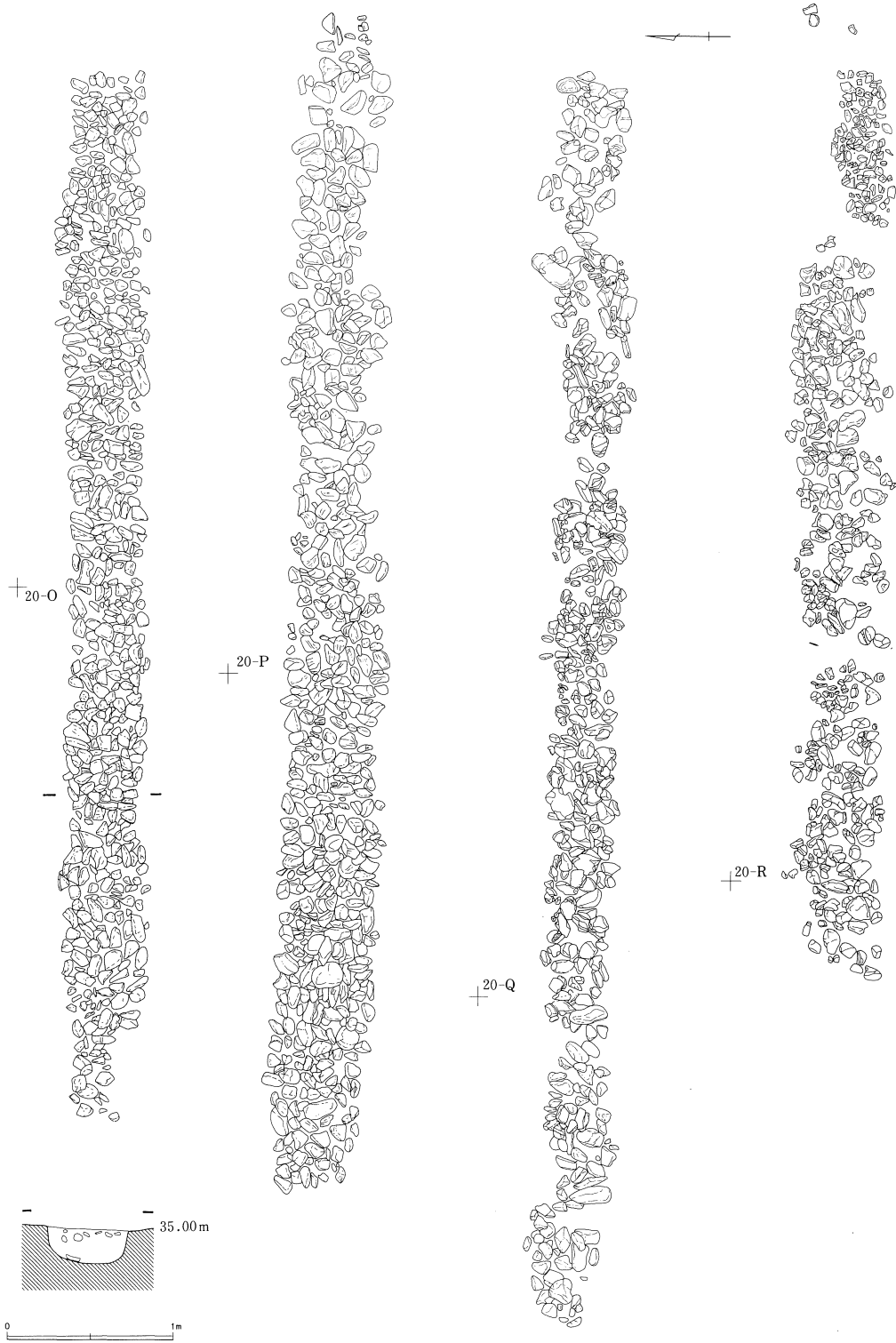


SD 9 a

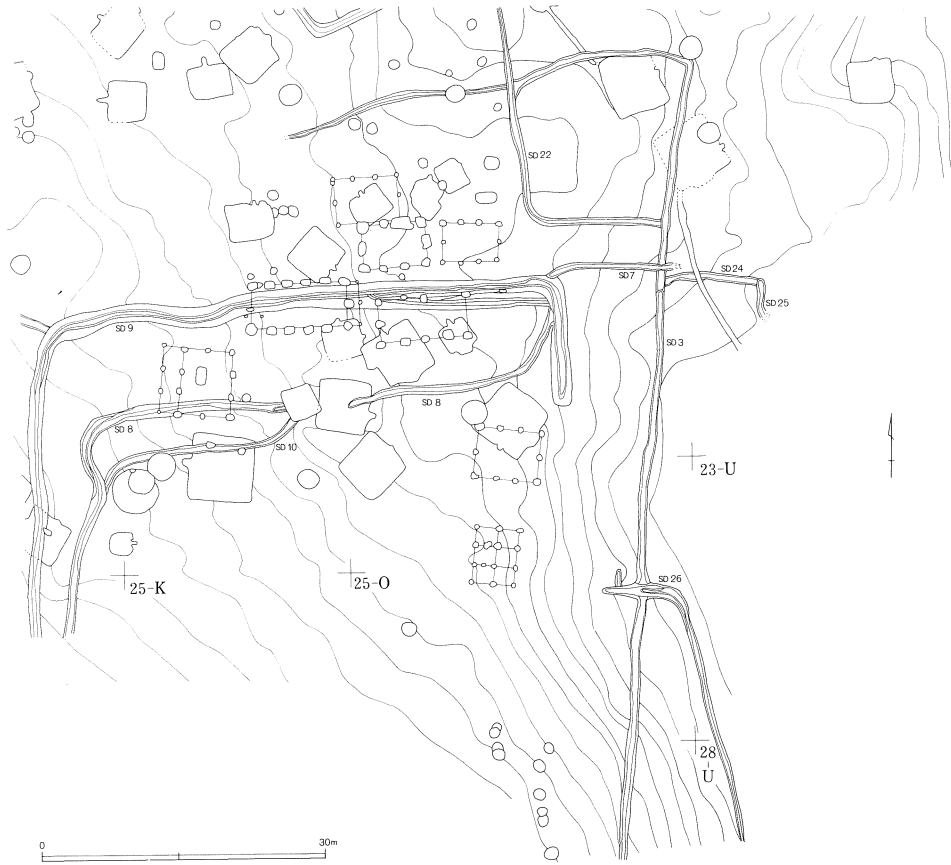
埋没した後に長さ25m、幅約50cmにわたって直径5cm前後の河原石を敷き、構築されている。aは幅約1.3m、深さ1.2mの断面は緩やかなV字状で、覆土中より内耳土器、常滑鉢などが出土している。bは幅約60cm、深さ40cmの浅いV字形、cは方形の掘形をもち、周辺の土である程度埋め戻した後、石を敷いている。cからはかわらけの破片等が出土している。



第236図 SD9 a・b



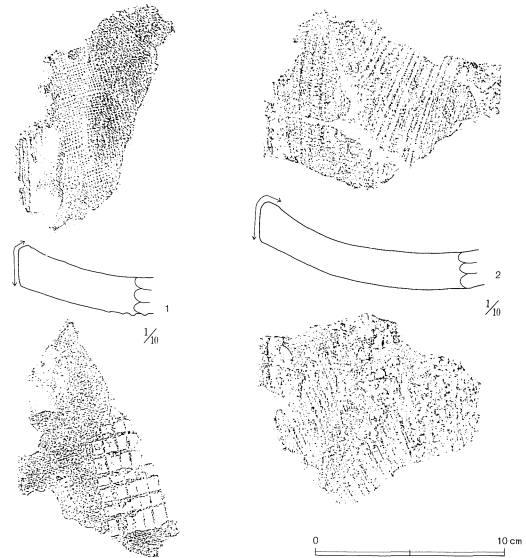
第237图 S D 9 c



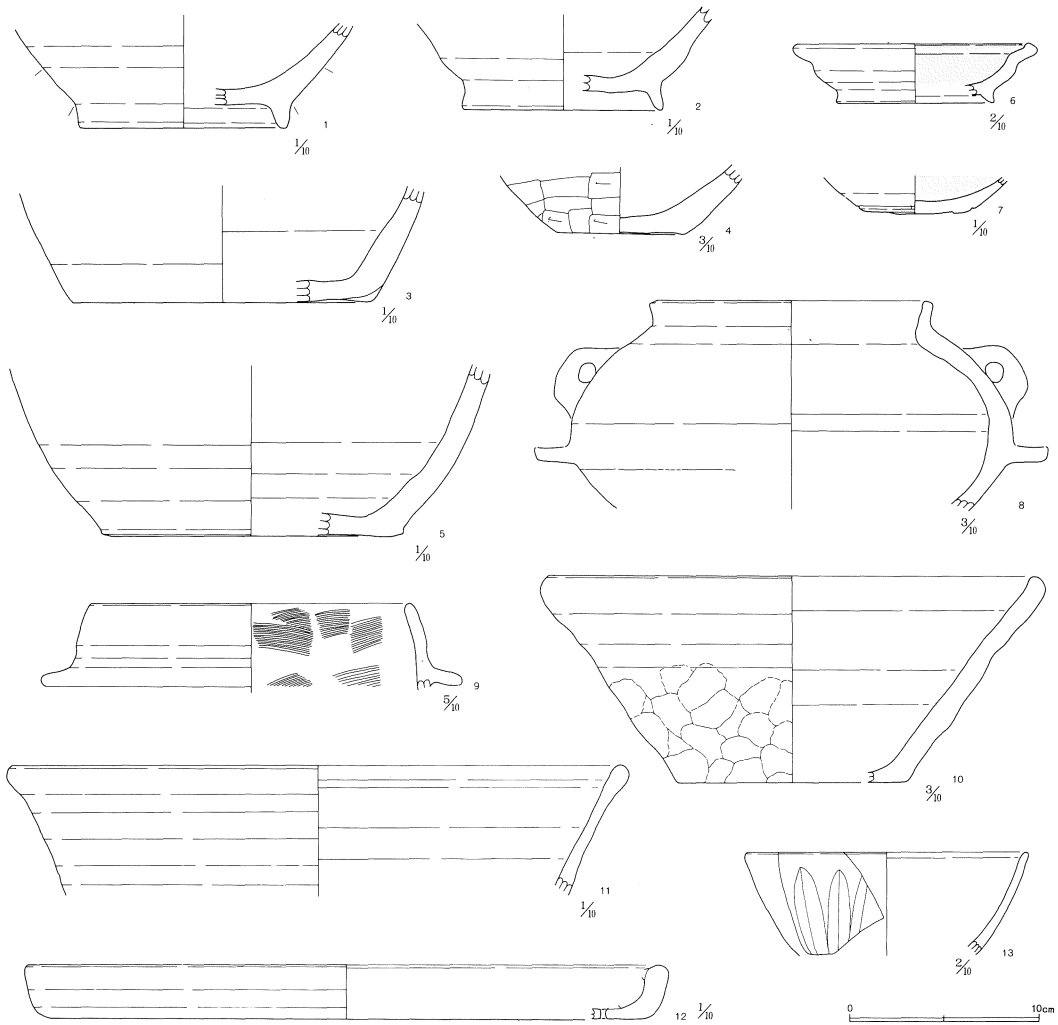
第238図 溝跡概略図(2)

SD 9 出土遺物 (第239・240図)

6はSD 9-c、他はSD 9-aより出土したものである。1・2は常滑産の片口鉢で、体部下半は幅3cmのヘラケズリ。胎土に白色粒子を含む。色調は灰色。3~5は鉢の体部下半。胎土に砂粒を含む。色調は淡橙褐色。6・7は瀬戸系の皿。6は内面から口縁部にかけて黄褐色の釉がかかる。8は茶釜風の外耳土器。内外面とも横ナデ。口径は15cm。9は羽釜の破片。口径は17.1cm。内面には刷毛目状の調整痕あり。10は在地産の播鉢。口径は26.2cm、器高は10.7cm。胎土に雲母、砂粒を含む。色調は灰色。11は瀬戸系の鉢。胎土に黒色粒子を含む。口径は32.8cm。12は内耳浅鉢。底部に直径5mmの孔が穿た

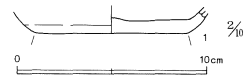


第239図 SD 9・16出土遺物



第240図 SD 9 出土遺物

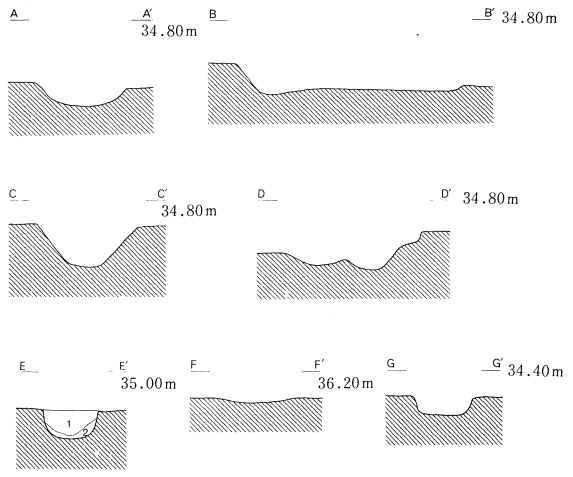
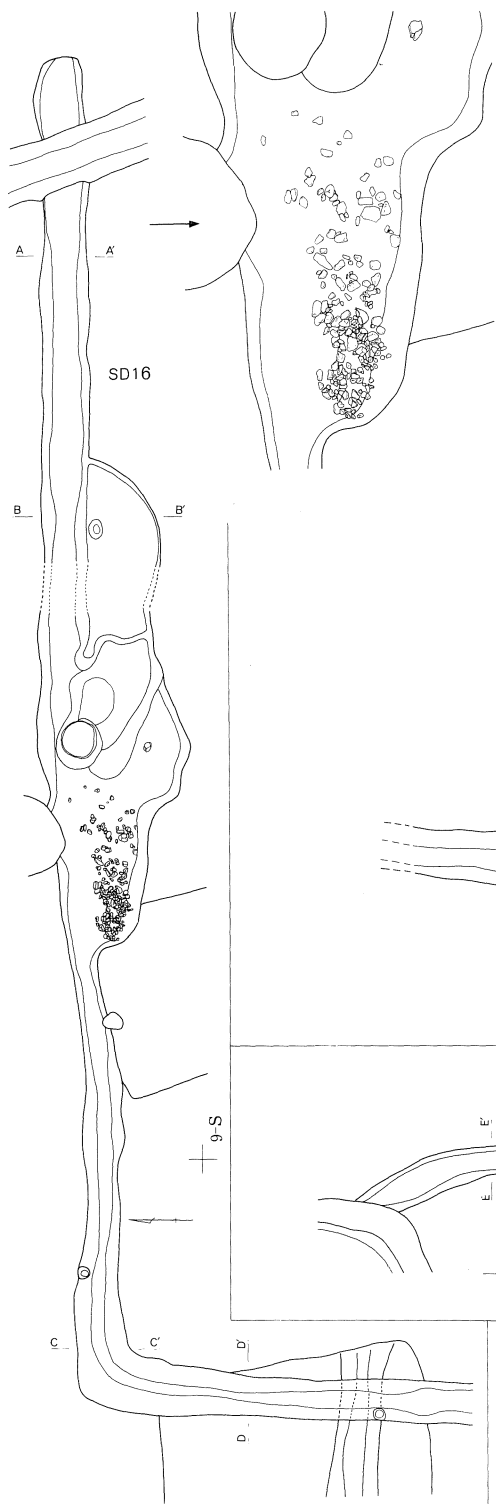
れ、炭化物が付着する。色調は黒褐色～暗灰褐色。口径は33.8cm。13は青磁碗。口径は14.8cm。第236図1は8世紀前半の平瓦。厚さ2.3cm。



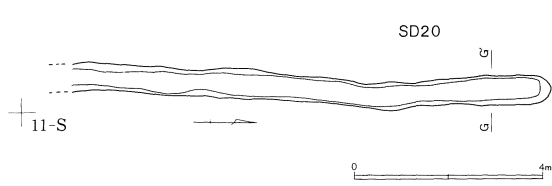
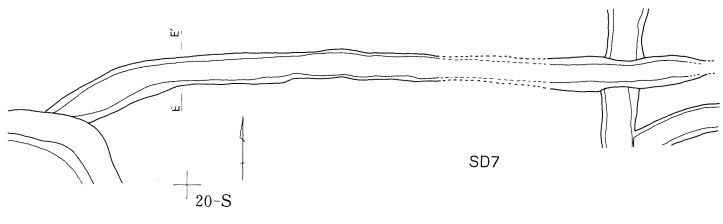
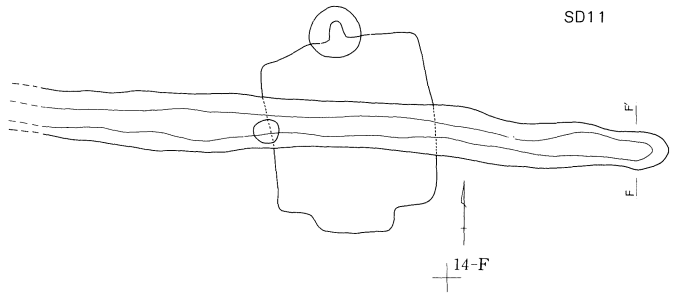
第241図 SD 10出土遺物

SD 10 (第10号溝・第235図)

23-J～NGrid に位置する。SD 8 に壊され、22-NGrid 付近では確認不可能となる。第241図1は覆土中より出土した須恵器坏の破片で、底部は全面回転ヘラケズリ、胎土に砂粒、白色針状物を含む。色調は青灰色。



- 1. 黒褐色土 ローム粒・焼土粒微量含む。
- 2. 黒褐色土 ローム粒多量含む。



第242図 S D 7 ・ 11 ・ 16 ・ 20

S D 11 (第11号溝・第242図)

13-D~13-F Grid にかけて位置する。幅は約1.5m、深さは20cmを測る。13-D Grid 付近からは北東から谷地形が入り込むため、確認はできなかった。遺物は出土していない。

S D 12 (第12号溝・全体図参照)

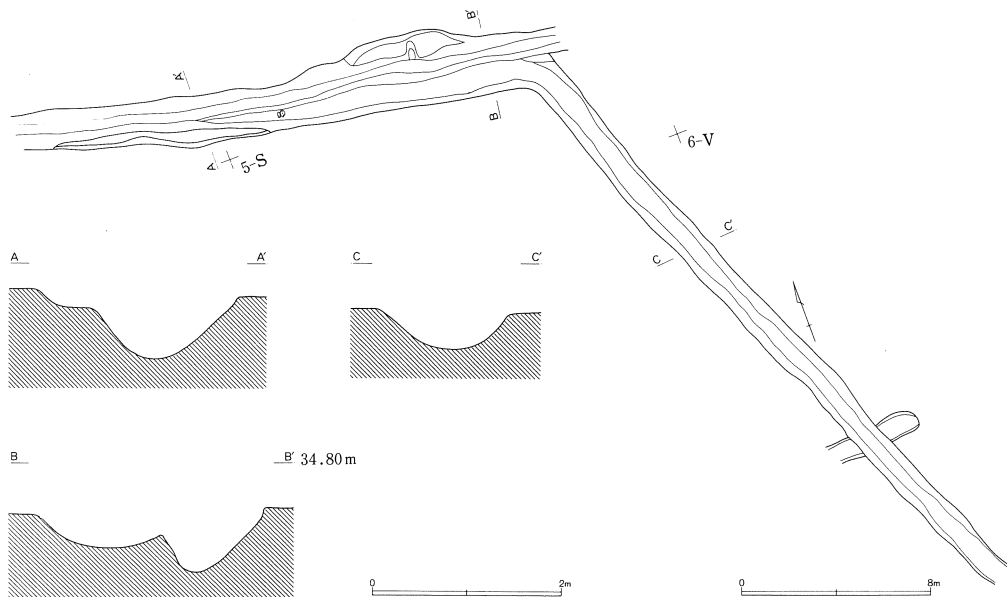
14-M~P Grid に位置する。S D 16・S J 63の排水溝などと重複するが、S D 16との先後関係はやや不明瞭である。幅は60~100cm、深さは30~50cm。所々に攪乱が認められる。

S D 13 (第13号溝・全体図参照)

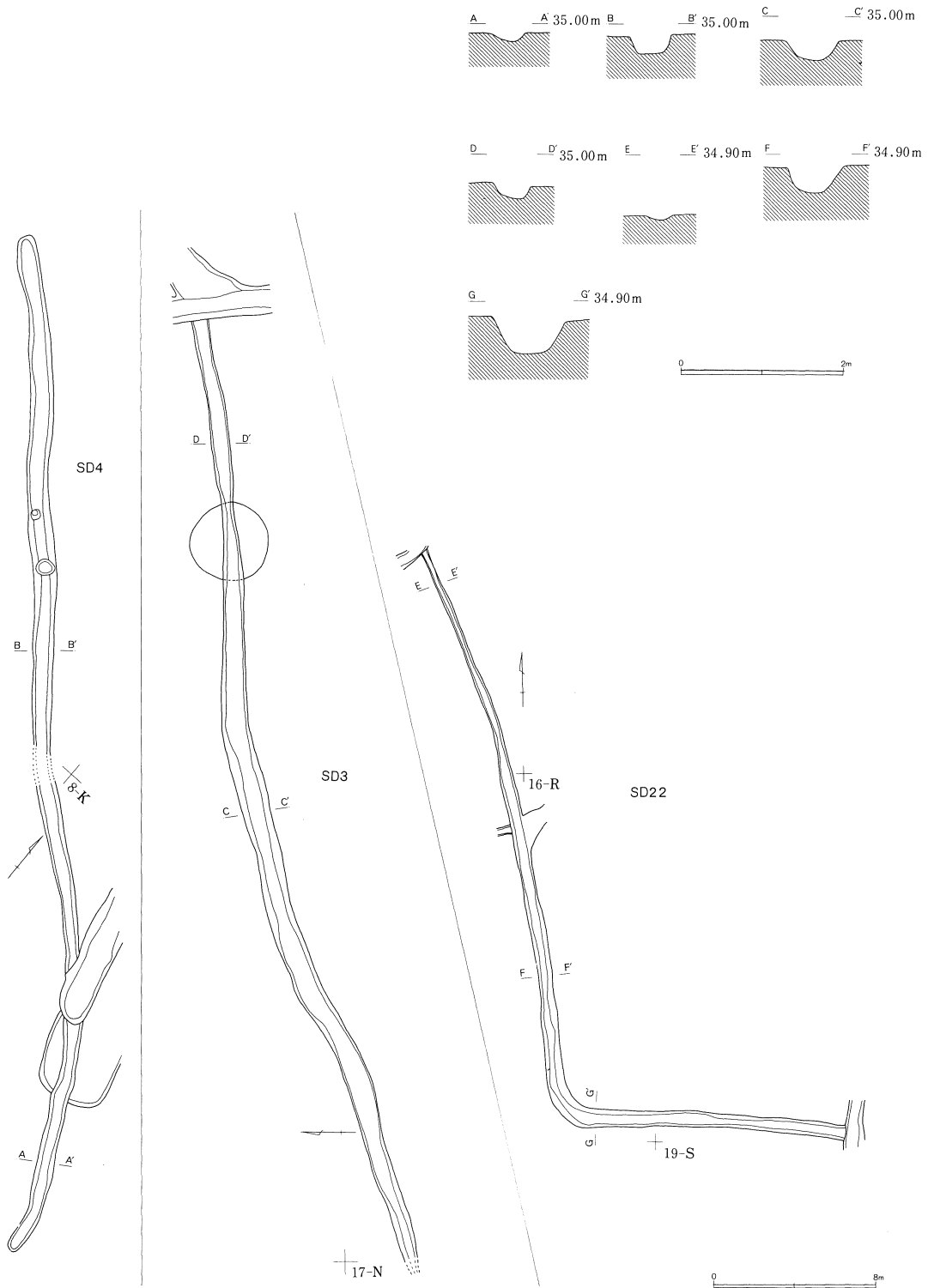
13-O~12-R Grid に位置する。S D 12、S D 16と重複するがいずれも壊れる。幅は30~60cmで、次第に細くなり、谷地形に入り込む。遺物は出土していない。

S D 14 (第14号溝・全体図参照)

5-T~W Grid にかけて位置する。北側の崖線に沿って構築され、S D 16と重複する。S D 16は後出であるが、覆土はともに黒褐色で、ロームブロック等の混入も類似しており、時間的な差は余りないものと考えられる。全長は約90m、幅は1.5~2m、深さは約50cmを測る。



第243図 S D 15



第244图 SD 4 · 3 · 22

S D 15 (第15号溝・第243図)

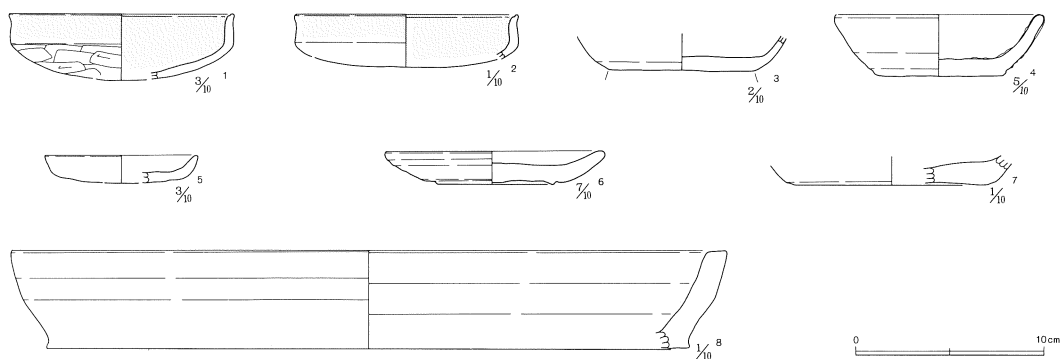
5-T~9-WGrid に位置する。S D 16と重複するが、南側の重複によって後出であることが確認された。幅は最大で約1.8m、深さは約1.2mを測る。断面は緩やかなV字状を呈し、谷地形に入り込むにつれて弧状になる。4-TGrid 付近では覆土中より火葬骨が出土している。

S D 16 (第16号溝・全体図参照)

最大で東西約72m、南北72mの規模をもつ変則的な方形を形成する溝である。溝の構築されている位置は台地の崖線や斜面に落ちかけるような面であり、明らかに谷地形を意識した配置である。断面はV字状を呈し、最大幅は約2m、深さは1.2mを測る。遺物は土器類、瓦などの破片が出土している。

S D 16出土遺物 (第239・245図)

1・2は土師器杯の口縁部~体部の破片。ともに内面及び口縁部は横ナデ後、赤彩される。体部はヘラケズリ。口径は1は12cm、2は11.8cm(推定値)。胎土に砂粒、白色粒子を含む。色調は淡赤褐色~淡橙褐色。3は須恵器杯の底部破片。底部調整は全面ヘラケズリ。胎土は砂粒、白色針状物を含む。色調は灰色。4・5はかわらけで、口径と器高は4は11cm、3.3cm、5は8.2cm、1.5cmを測る。胎土に砂粒、雲母を含む。色調は淡橙褐色。6は瀬戸系の皿。口径11.6cm、器高は1.8cm。7は鉢の底部破片。9は内耳土器で、底部を欠く。口径37.7cm、器高5.1cm。胎土に砂粒を含む。色調は暗灰色。



第245図 S D 16出土遺物

S D 17 (第17号溝・全体図参照)

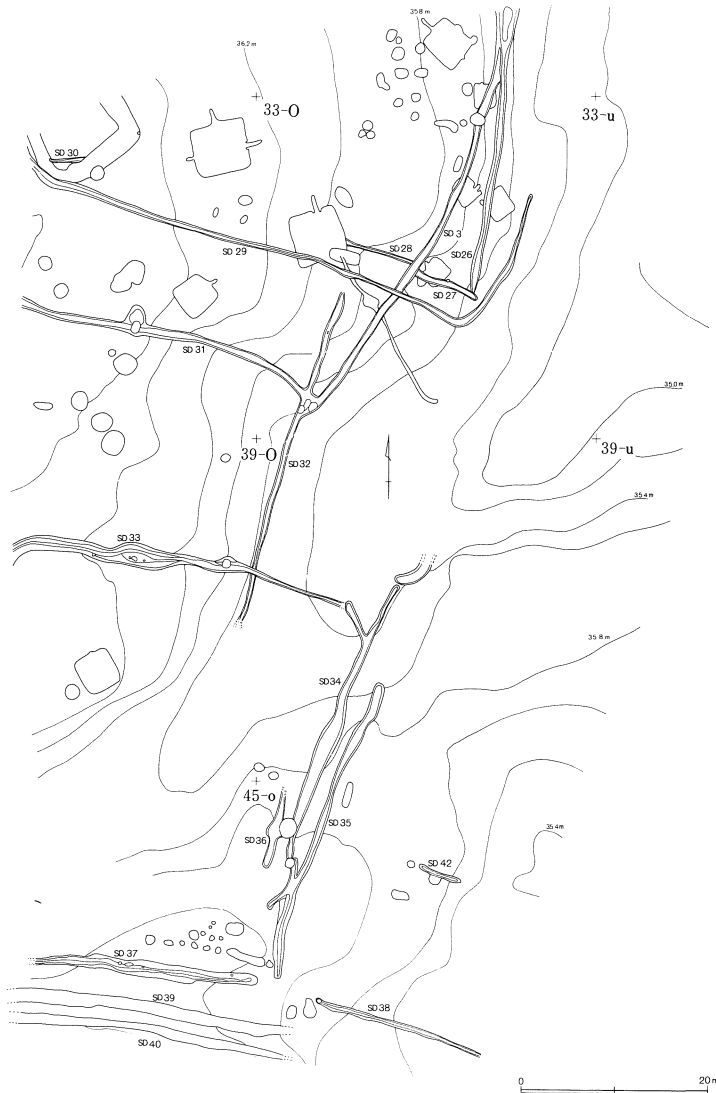
12-KGrid に位置する。S D 21及びS K 146に壊されているため、全長は不明瞭であるが、約10m余りとみられる。幅は約50cm、深さは30cmを測る。覆土は暗褐色で、ロームブロックが含まれる。遺物は出土していない。

S D 18 (第18号溝・全体図参照)

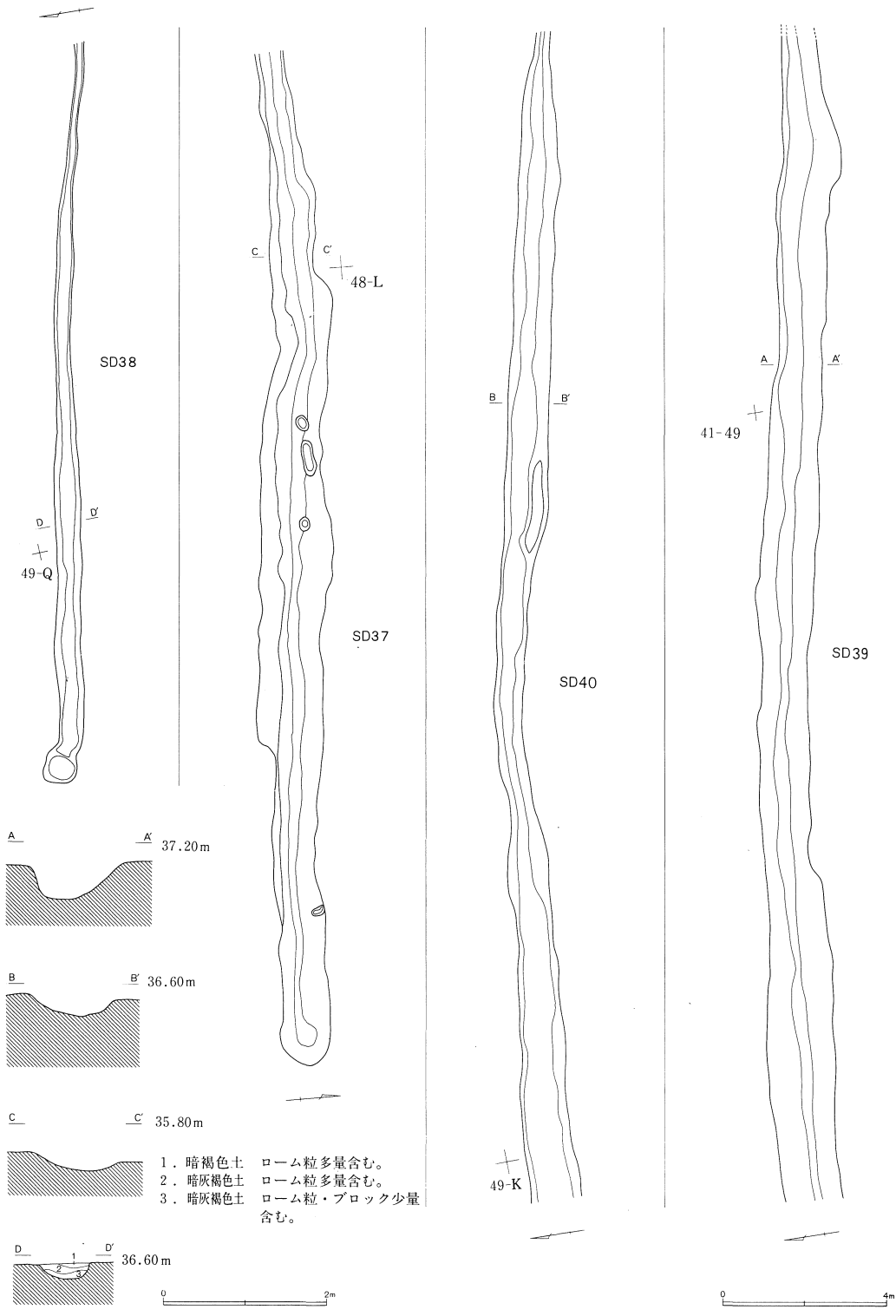
9-O~RGrid に位置する。S J 49・70、S D 16と重複する。S D 16との重複は覆土が黒褐色で類似しているが、残っている状況からS D 18を壊して構築されているとみられる。幅は約1.3m、深さは90cmを測る。遺物は出土していない。

S D 19 (第19号溝・全体図参照)

8-N~9-NGrid に位置する。S J 70を壊して構築され、9-NGrid 付近で止まる。S D 18と同様構築途中で中断したまま廃棄されたものとみられる。幅は約90cm、深さは約30cmを測る。



第246図 溝跡概略図(3)



第247図 S D 37~40

S D 20 (第20号溝・第242図)

9-R~10-RGrid に位置する。S D 16の外側に平行に構築されるが、谷地形に入り込む為、規模は不明。幅は約70cm、深さは20~40cmを測る。覆土は黒褐色。

S D 21 (第21号溝・全体図参照)

12-K~QGrid に位置する。S D 16とS D 17と重複し、S D 16に壊される。西側は幅が約40cm、深さ60cm、東側は幅が約1m、深さは30cmと変化する。覆土は暗褐色で、ロームブロックを多く含む。

S D 22 (第22号溝・第244図)

14-Q~18-TGrid に位置する。「L」字型を呈し、S D 3と重複する。北側は一部谷地形に入り込むが、S D 20などのように遺構の検出不可能な地点ではなく、溝の深さは北側が浅くなっているとはいえ、平面図に記したほどの長さが加わる程度とみられる。覆土は暗褐色で、ロームブロックを多く含む。

S D 23 (第23号溝・全体図参照)

7-P・QGrid 他に位置する。北西部は検出されなかったが、一辺8m余りの方形に巡る溝である。S J 43・44を壊して構築され、幅は40~50cm、深さは30cmを測る。覆土は黒褐色~暗褐色、ロームブロックが多く含まれる。

S D 24 (第23号溝・全体図参照)

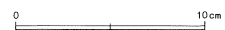
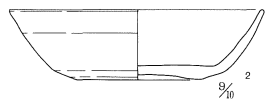
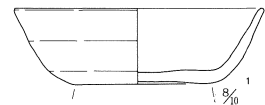
19-T~VGrid に位置する。S D 3及びS D 25と重複する。S D 24には壊されるが、S D 3との前後の関係は明瞭ではない。全長は約10m、幅は約60cm、深さは30cmを測る。覆土は暗褐色。

S D 25 (第25号溝・全体図参照)

19-V~20-VGrid に位置する。S D 24を切り込む南北方向の溝で、南側は谷地形の中に埋没するため、規模は不明。幅は約60cm、深さは40cmを測る。覆土は黒褐色で、ロームブロックを含む。

S D 26 (第26号溝・全体図参照)

31-S~36-RGrid に位置する。S D 3を一部壊して構築される。規模は調査区外も含めて30m余りとみられる。幅は50~140cm、深さは30~40cmである。覆土は黒褐色。



S D 26出土遺物 (第248図)

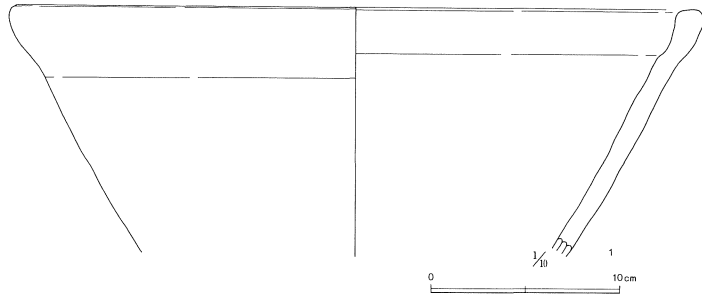
1・2は須恵器杯。口径と器高は1は13.4cm、4cm、2は13.5cm、3.8cm。色調はともに灰色。胎土に砂粒、白色針状物を含む。

第248図 S D 26出土遺物

底部は1は全面ヘラケズリ、2は回転糸切り未調整。

SD27（第27号溝・全体図参照）

36-Q～RGrid に位置する。SD3に西側を壊されるが、規模は全長6m余りと見られる。幅は約70cm、深さ20cmを測る。覆土は暗褐色、ロームブロックが含まれる。



第249図 SD27出土遺物

SD27出土遺物（第249図）

1は内耳土器の破片。口径は36.8cm（推定値）。炭化物の付着顕著。胎土に粗い砂粒を含む。

SD28（第28号溝・全体図参照）

35-P・QGrid に位置する。SJ77の排水溝の可能性も考えられたが、SJ77の壁が溝を壊して構築されており、住居が後出である。覆土は暗褐色で、ロームブロックが少量含まれる。

SD29（第29号溝・全体図参照）

34-K～36-R～34-SGrid に位置する。「L」字状を呈し、谷地形の斜面部にまで先端は及んでいる。幅は40～70cm、深さは30～40cmを測る。断面は緩やかな「U」字型を呈し、覆土は黒褐色で、ロームブロックが含まれる。

SD30（第30号溝・全体図参照）

34-KGrid に位置する。ST1に東西を壊されるため、規模は不明。幅は約30cm、深さは20cmを測る。覆土は黒褐色で、ローム粒子を少量含む。

SD31（第31号溝・全体図参照）

36-J～38-OGrid に位置する。SD32、SD3と重複するが、谷地形にかかるため、先後関係は不明瞭である。覆土は黒褐色で、ロームブロック、礫などが含まれる。

SD32（第32号溝・全体図参照）

36-P～42-NGrid に位置する。南側は谷地形に入り込むため、全長は不明。幅は約50cm、深さは30cmである。覆土は黒褐色で、ローム粒子、小礫が含まれる。

S D 33 (第33号溝・全体図参照)

40-J~41-P Grid に位置する。S D 32を壊して構築される。41-M Grid 付近は溝の外郭線が乱れており、攪乱を受けている可能性がある。覆土は黒褐色で、礫が多く含まれる。

S D 34 (第34号溝・全体図参照)

41-Q~O Grid に位置する。北側は二股になるが、西寄りの溝は浅く、自然に形成されたものとみられ、本来は1条と考えられる。全長は約30m、幅は50~100cm、深さは30cmである。覆土は黒褐色で、ロームブロックを含む。

S D 35 (第35号溝・全体図参照)

43-Q~48-O Grid に位置する。S D 34と同様二股状になる部分は本来は1条とみられる。全長約31m、幅は40~100cm、深さは約30cmである。黒褐色の覆土中にはロームブロックを含む。

S D 36 (第36号溝・全体図参照)

45・46-O Grid に位置する。検出されたのは約10mで、外郭線に乱れがあり、溝として機能したか疑わしい。覆土は黒褐色で、ロームブロックを含む。

S D 37 (第37号溝・第247図)

48-K~N Grid に位置する。検出されたのは約24mで、溝は台地の斜面で止まる。幅は80~120cm、深さは20~35cmで、所々に Pit を有する。覆土は黒褐色で、ロームブロックが含まれる。

S D 38 (第38号溝・第247図)

48-P~49-R Grid に位置する。台地の斜面より始まり、谷地形に向かって約20mにわたって構築される。比高差は約50cmである。覆土は黒褐色、ローム粒子が含まれる。

S D 39 (第39号溝・第247図)

48-J~49-O Grid に位置する。一部は複数の溝によって構成されるが、重複関係は不明。東側の斜面付近は確認不可能。覆土は黒褐色、ロームブロック、小礫を多量含む。

S D 40 (第40号溝・第247図)

49-J~O Grid に位置する。S D 39と同様斜面部で溝は確認不可能となる。幅は40~80cm、深さは30cmである。覆土は黒褐色、ロームブロック、小礫を含む。

S D 41 (第41号溝・全体図参照)

61-J~L Grid に位置する。東西が調査区外に伸びるため、規模は不明。幅は約50cm、深さは20cmである。覆土は黒褐色で、ロームブロックを少量含む。

S D 42 (第42号溝・全体図参照)

46-Q・R Grid に位置する。谷地形の中に構築され、北西方向に傾斜する。全長は約5m、幅は約50cm、深さは20~30cmである。覆土は暗褐色で、ローム粒子が含まれる。

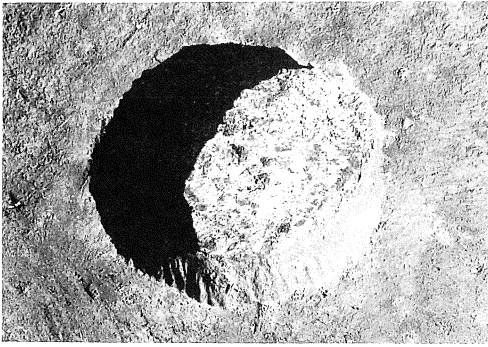
S D 43 (第43号溝・全体図参照)

5-J~7-J Grid に位置する。7-J 付近で確認ができなくなるが、周辺は確認不可能な地点ではないため、構築途中で中断したものとみられる。全長は約15m、幅は50~70cm、深さは40cmを測る。

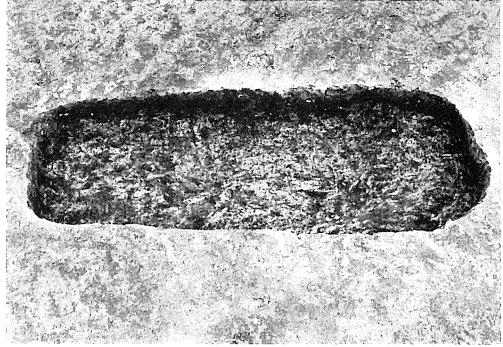
(6) 土壌

土壌（第250～262図）

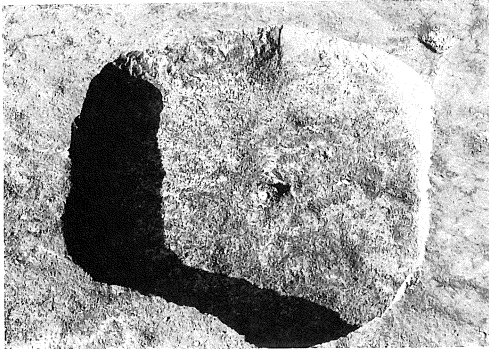
塚の越遺跡では約250基の土壌が検出された。SD1周辺、A区・B区の接する周辺、SD36の北側周辺に比較的集中する地点が認められるが、ほぼ全域に分布しているといえる。分布の示す立地は北東方向に延びる台地上に大部分が構築されており、旧谷地形付近には殆どその形跡は認められなかった。谷地形の埋没後に構築されているのは、15-QGrid及び46-RGrid周辺の台地の縁辺に立地した数基に過ぎず、各時代を通じて谷地形おける遺構の構築は敬遠されてきたものと考えられる。形態は円形、楕円形、方形、長方形、不整形に大きく分類される。このうち、円形、楕円形の占める割合は全体の約4割である。規模は直径1.2m～1.5mのものが最も多く、2mを超えるものはSK150・151・154・155の4基に過ぎない。確認面からの深さは20～30cmのものが最も多く、断面は「U」字型を呈する。覆土は大きく、黒褐色をベースとするものと暗褐色をベースとするものに分類することができる。黒褐色をベースとするものについては、黒褐色の単層であったり、上層が黒褐色、下層が暗褐色というように層位が多層にはならないものが多くみられる。一方、暗褐色をベースとするものについては、単層のものもみられるが、4～5層に分層できるものが多くなる。いずれもロームブロック、ローム粒子を含む例が大部分を占め、場合によって、焼土粒子、灰色粒子、小礫、粘土ブロックなどが含まれる。SK1・4・234・235からは焼土が検出された。SK1・4の場合は土壌の底面に厚さ5mm程が堆積している（スクリーントーン部分）。SK234・235の場合は覆土の上層で、厚さ1cm前後の幅で検出されており、出土状態から二次的に投棄されたものとみられる。SK199は覆土中に多量の小礫を含んでおり、一部の小礫には表面に焼けた痕跡が認められる。なお、他に焼土等の混入は認められなかった。また、小規模な円形の土壌としたものの中には、掘立柱建物跡の柱掘形と同規模のものがあつたが、柱痕跡が検出されなかったことや覆土中の層位に類似性が認められなかったため、土壌として取り扱った。方形の土壌は全体の約3割を占める。規模は長軸約2m、短軸1～1.2m前後、深さは10～40cmと円形、楕円形の土壌に比べて、規模において変化に富んでいる。覆土は上層は黒褐色、下層は暗褐色を基本とし、大形のロームブロック、ローム粒子、焼土粒子、砂粒、灰褐色ブロックなどが含まれ。比較的軟質である。SK5・70・73・74・79・83・81（不整形）・105・109・110には覆土中に大形の礫が含まれる。このうち一部には「永楽銭」等の渡来銭やかわらけを伴っており、墓壇の可能性が高い。特に、SK70・74などでは北側に土器や20cm程の礫が集中する傾向を示しており、興味深い。また、円形及び楕円形の土壌に比べると底面の凹凸が目立ち、中心部が最も深くなるものが多い。長方形の土壌は調査区の北側に集中している。長軸3m前後、短軸1～1.2m前後、深さは20cm前後のものが多い。覆土は方形の土壌と同様黒褐色がベースで、礫の他にはロームブロック、ローム粒子、砂粒などが含まれる。隅丸方形または不整形の土壌は全体の約2割強を占める。規模は全体に大形で、長軸は4～5m、短軸は1.2m前後（第259図参照）、深さは20～30cmである。これらの中には単一の土壌ではあるが、いくつかの土壌と組合わさる場合も考えられることから、〔その他の遺構〕の中で取り上げた。また、A区に位置する不整形の土壌群の多くはローム層を掘り抜



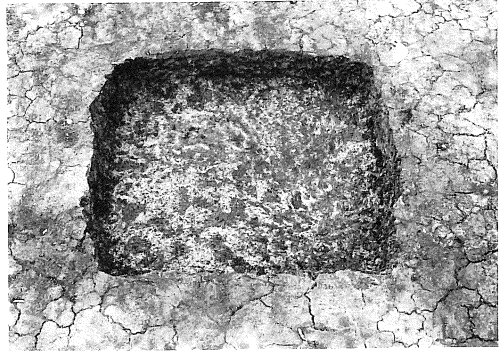
S K11



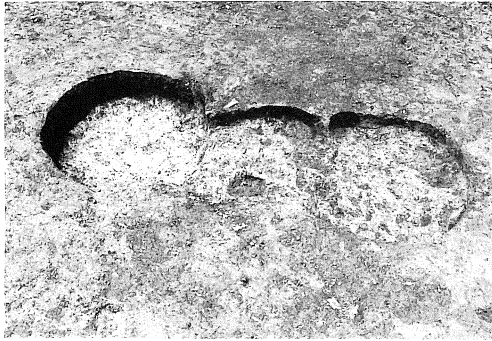
S K73



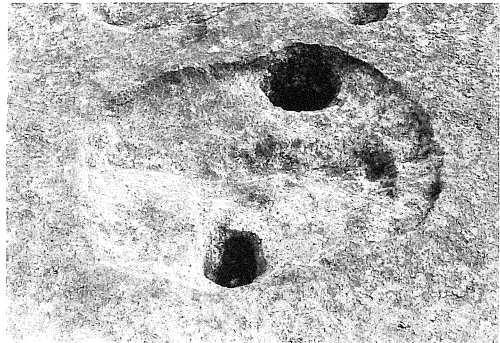
S K244



S K165



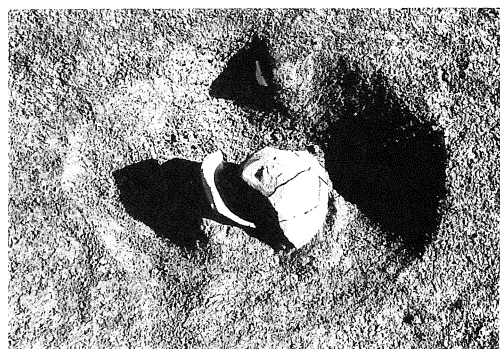
S K 8 · 9 · 10



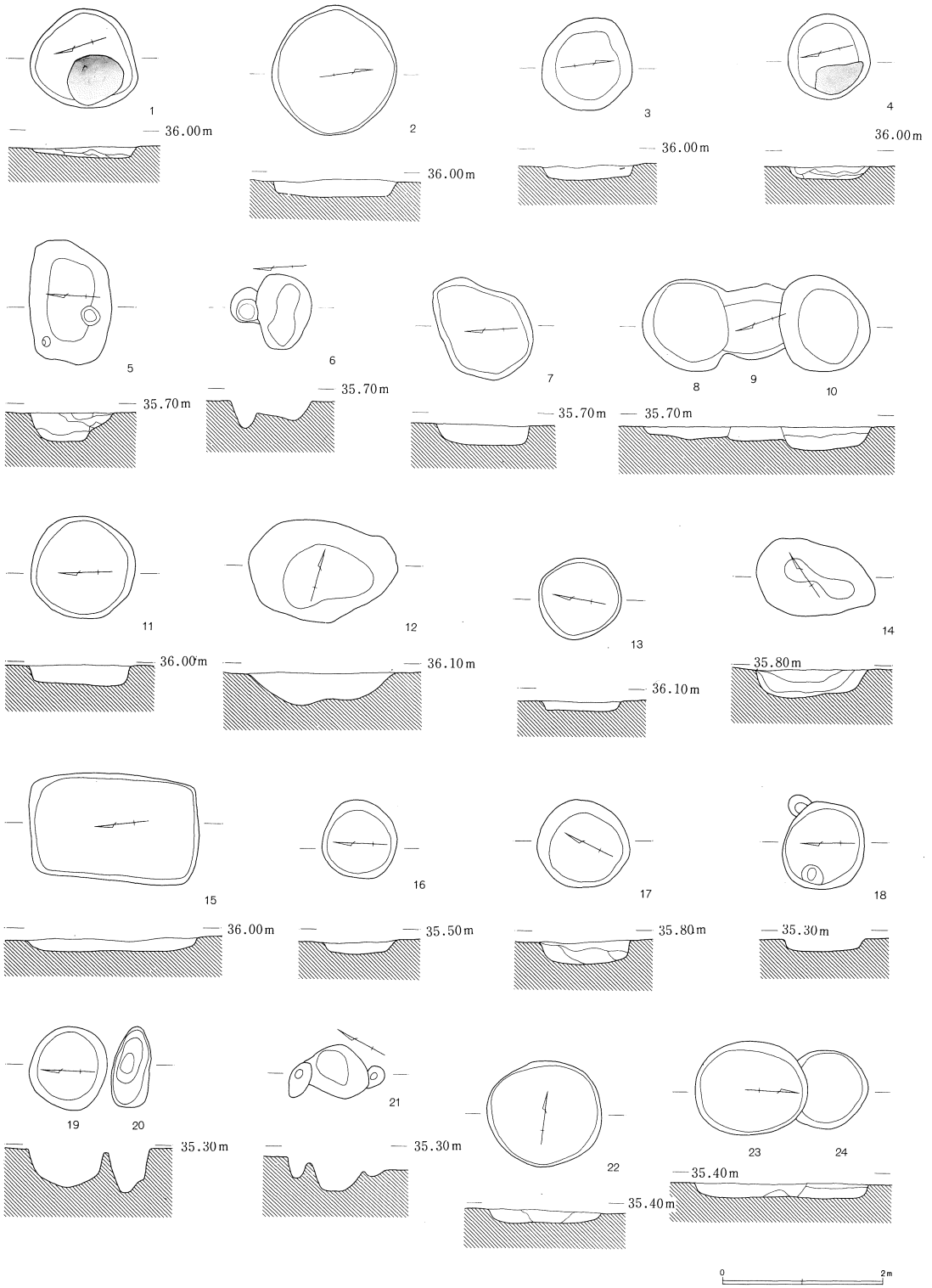
S K174



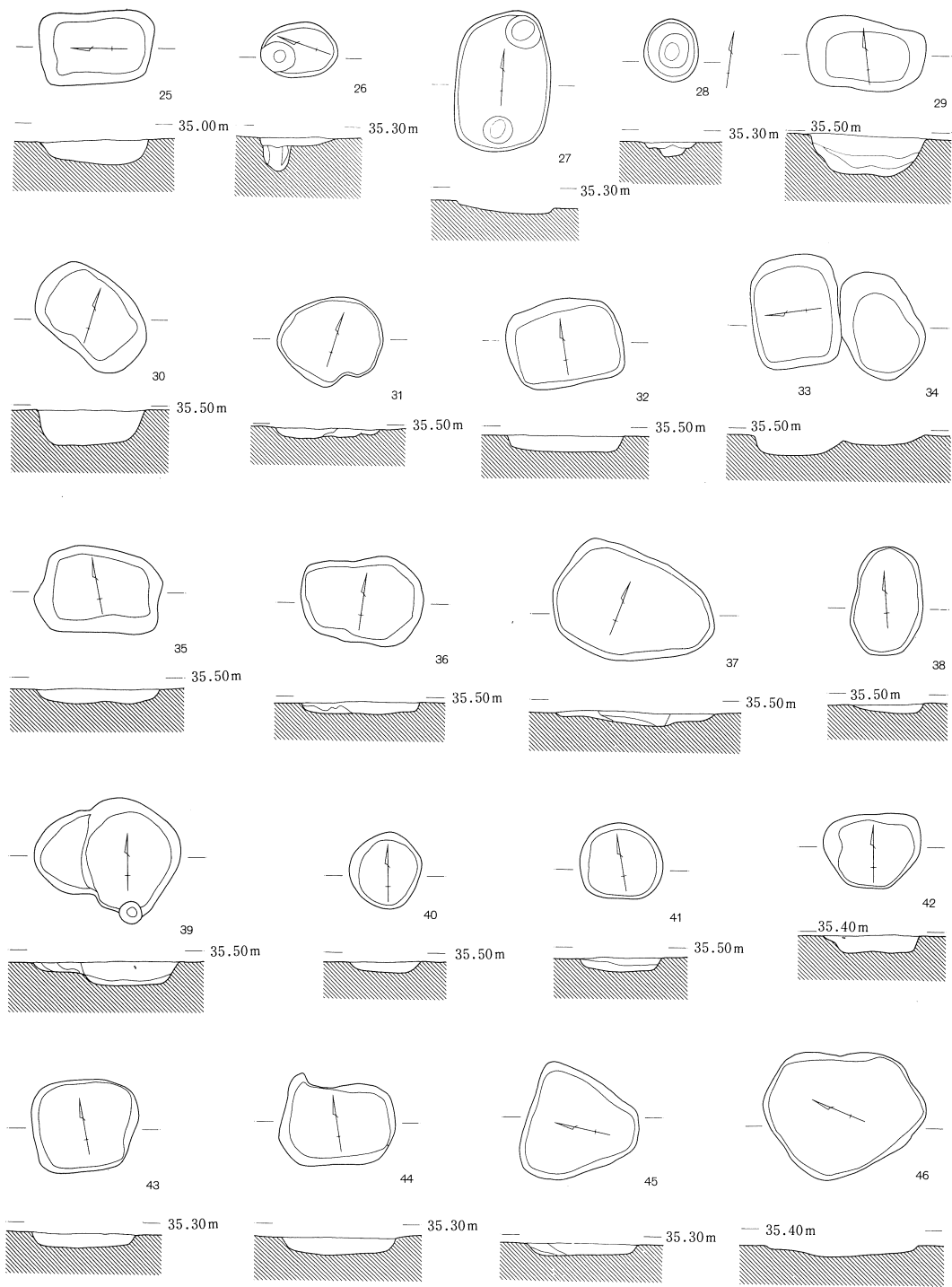
S K95



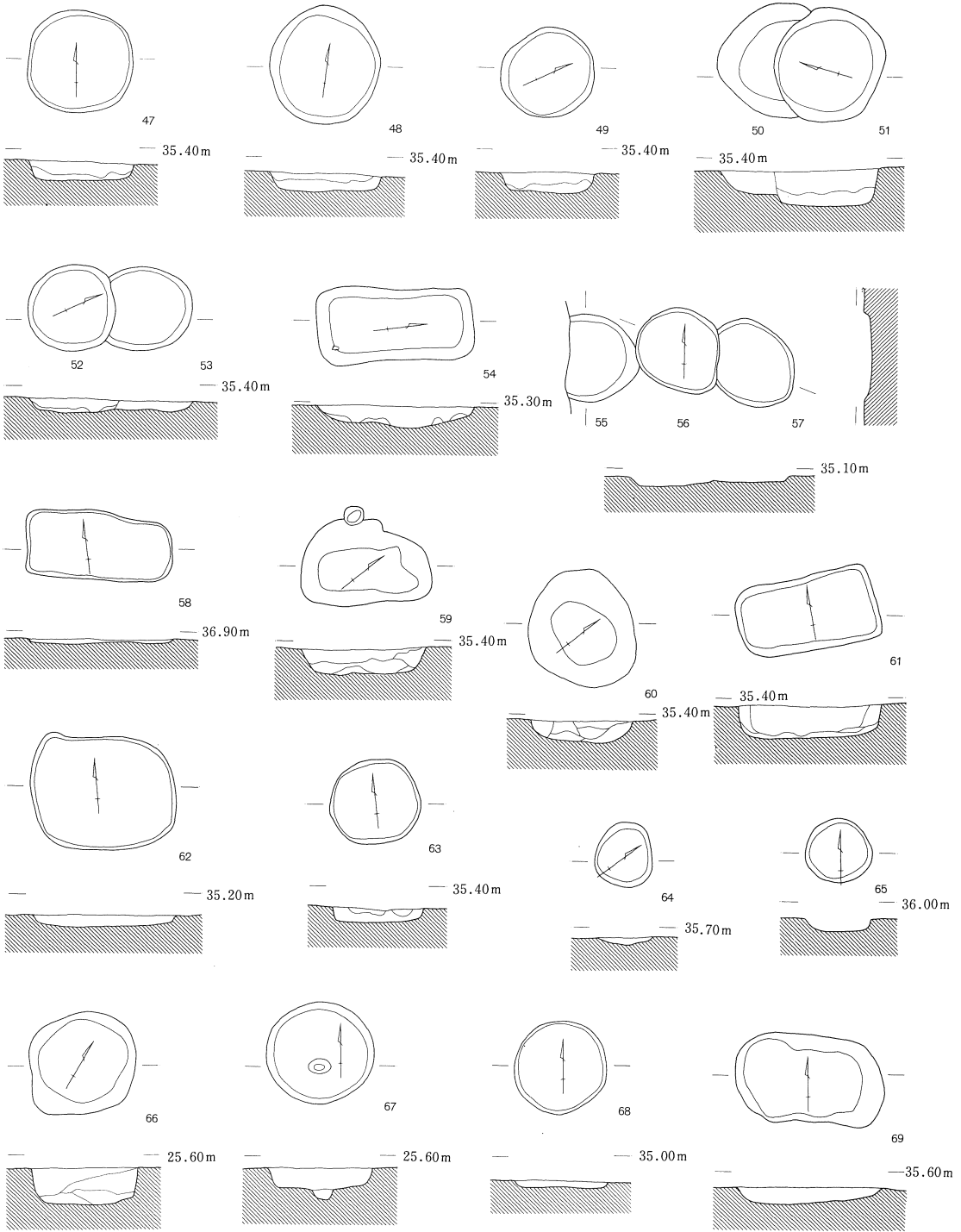
S K65



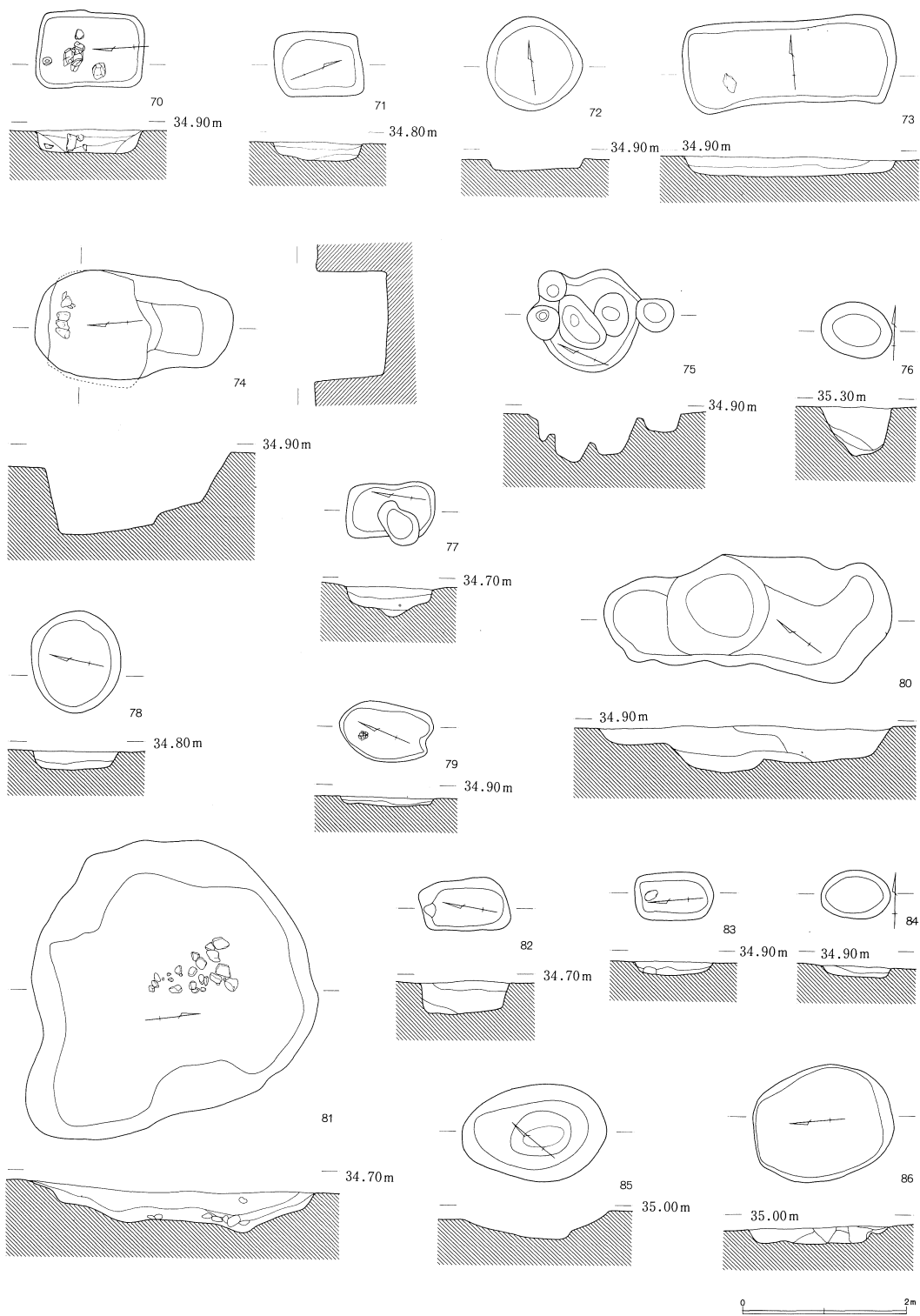
第250图 SK 1~24



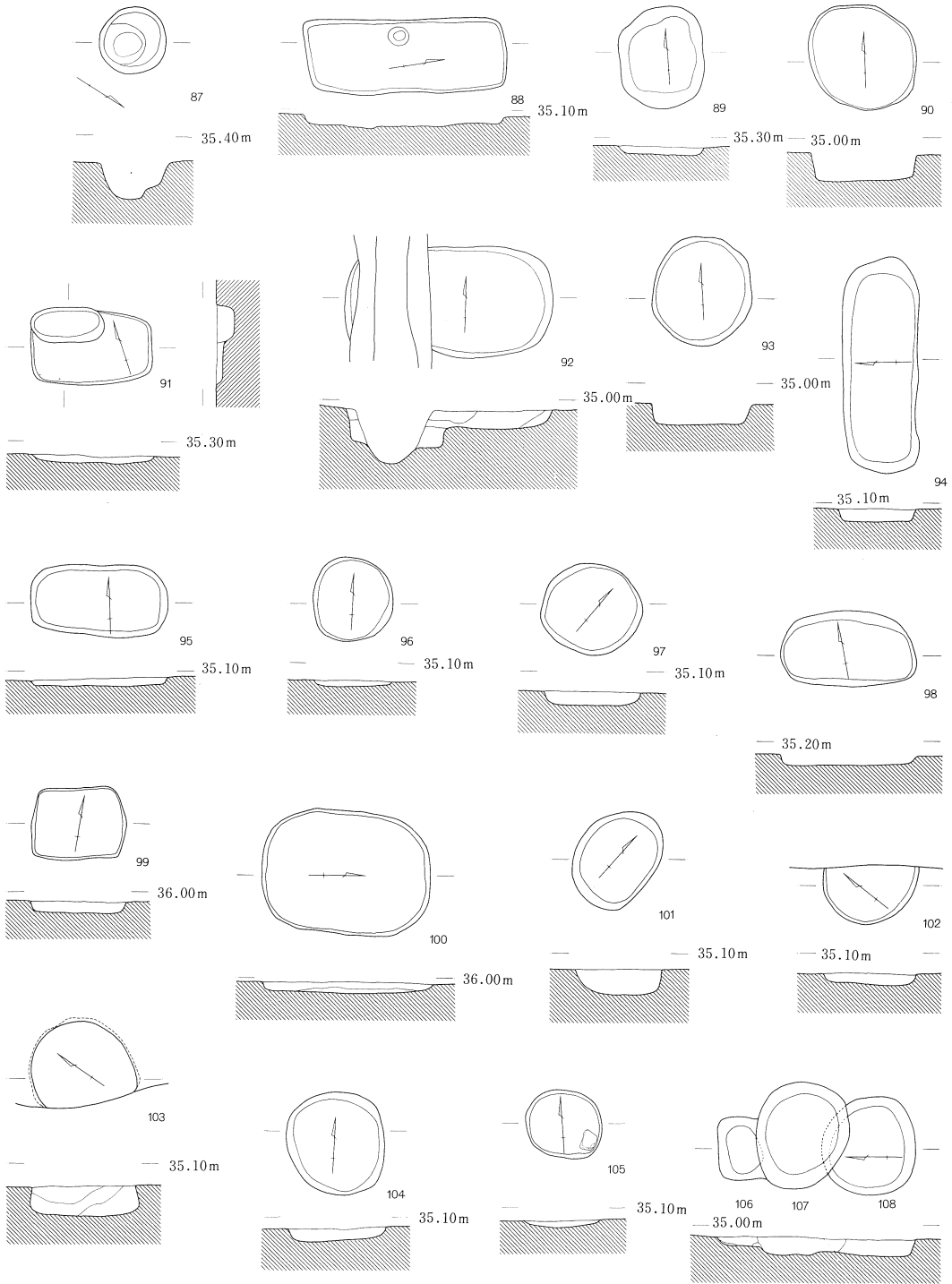
第251図 SK25~46



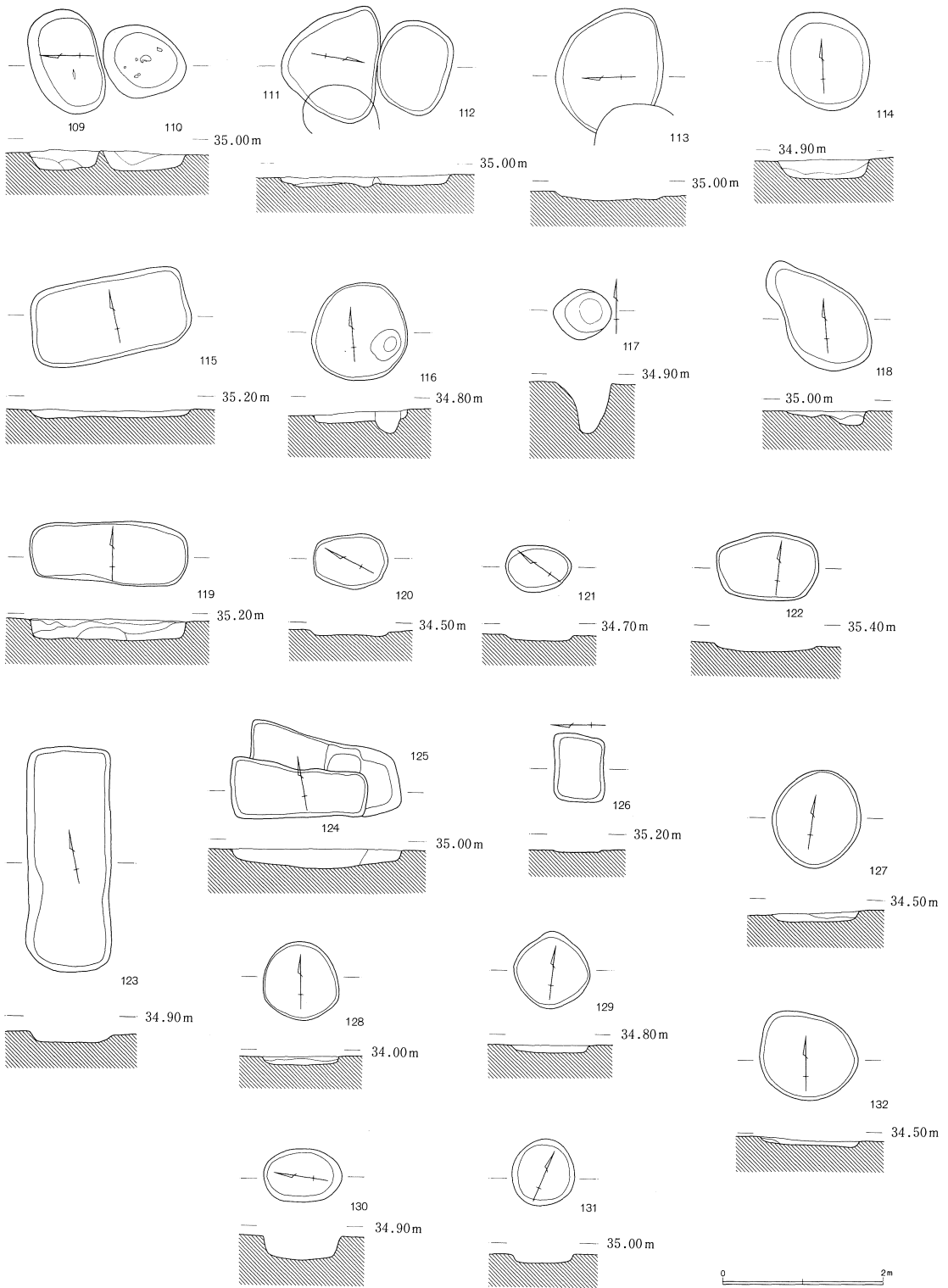
第252图 S K 47~69



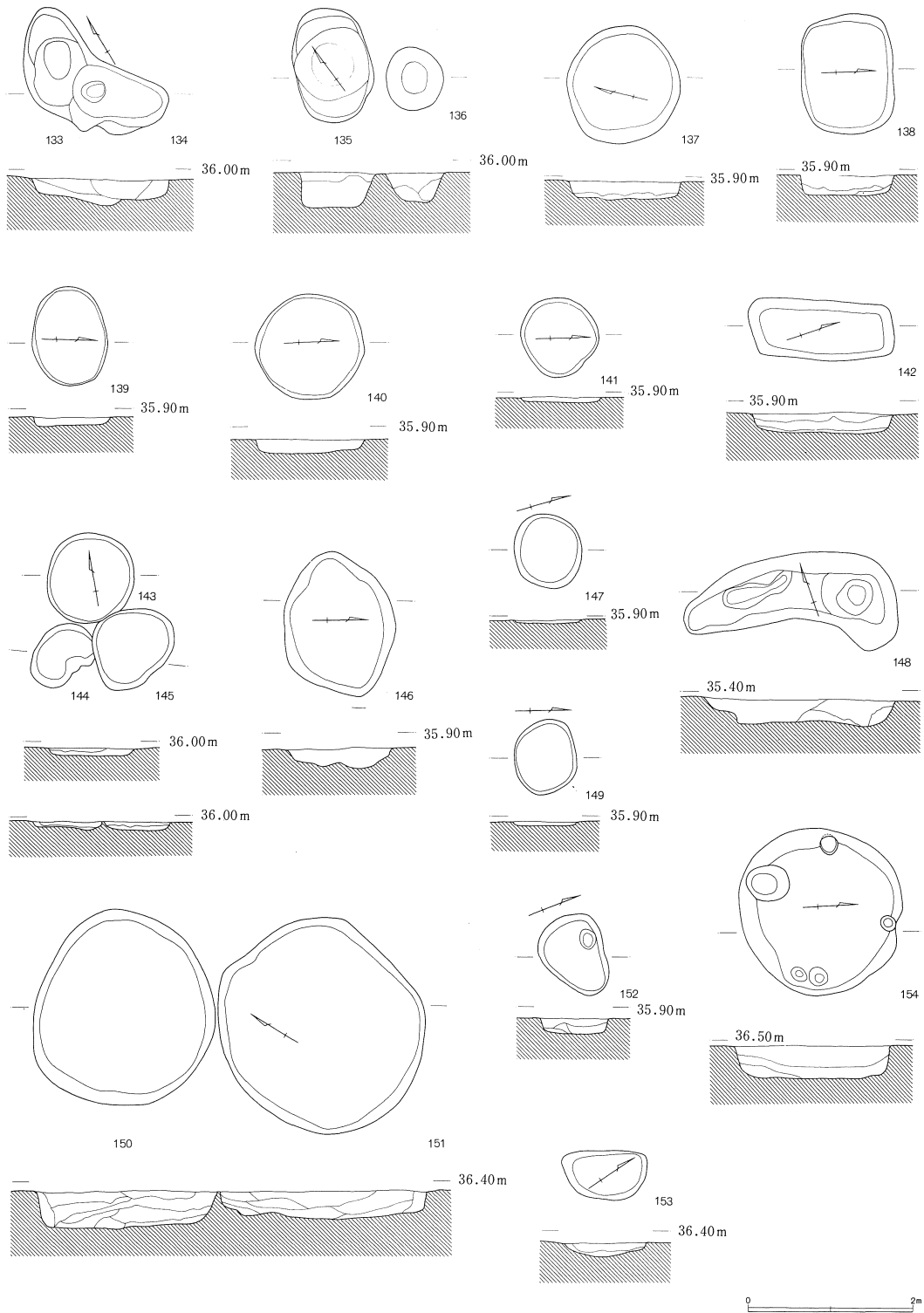
第253图 SK 70~86



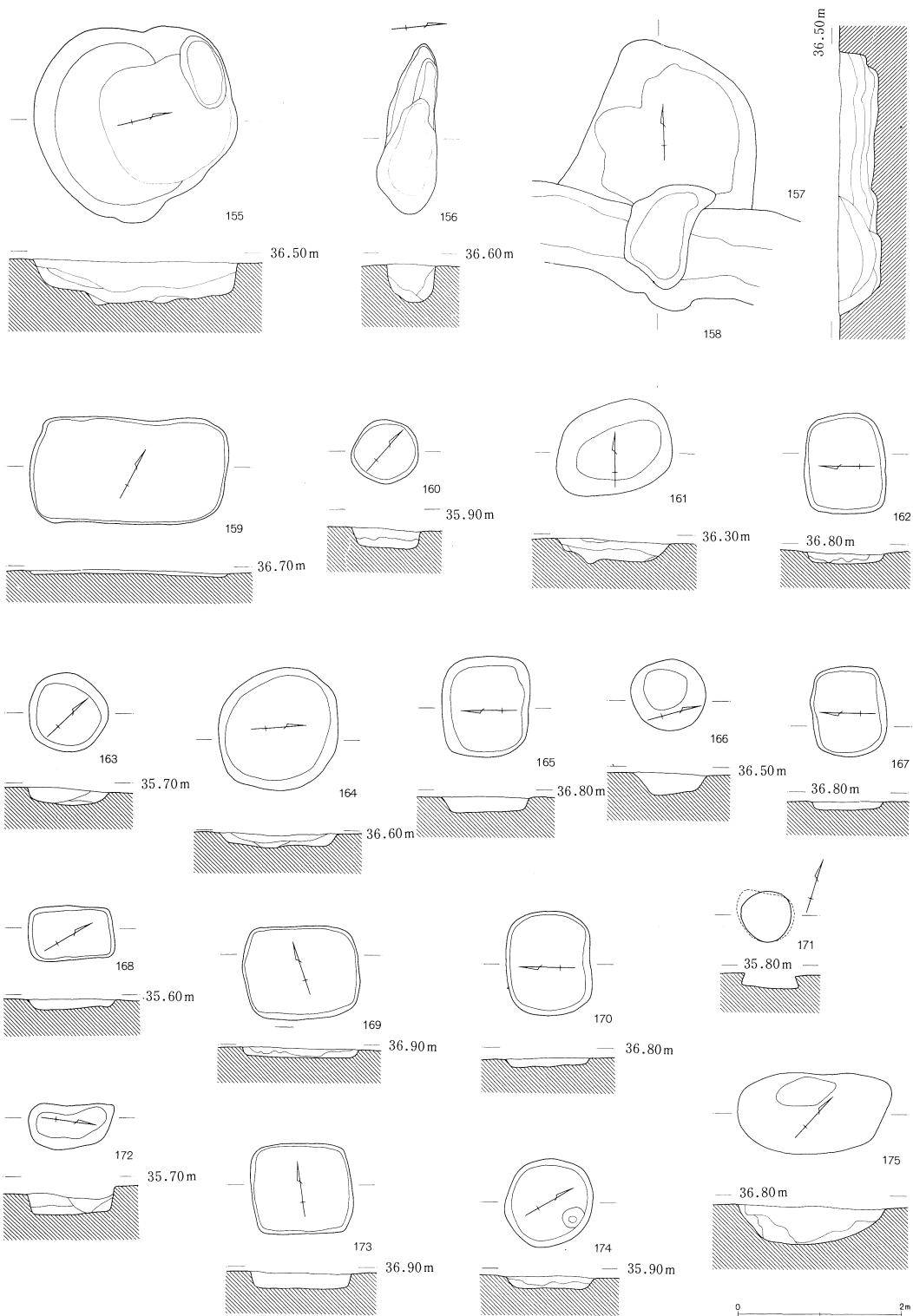
第254图 S K 87~108



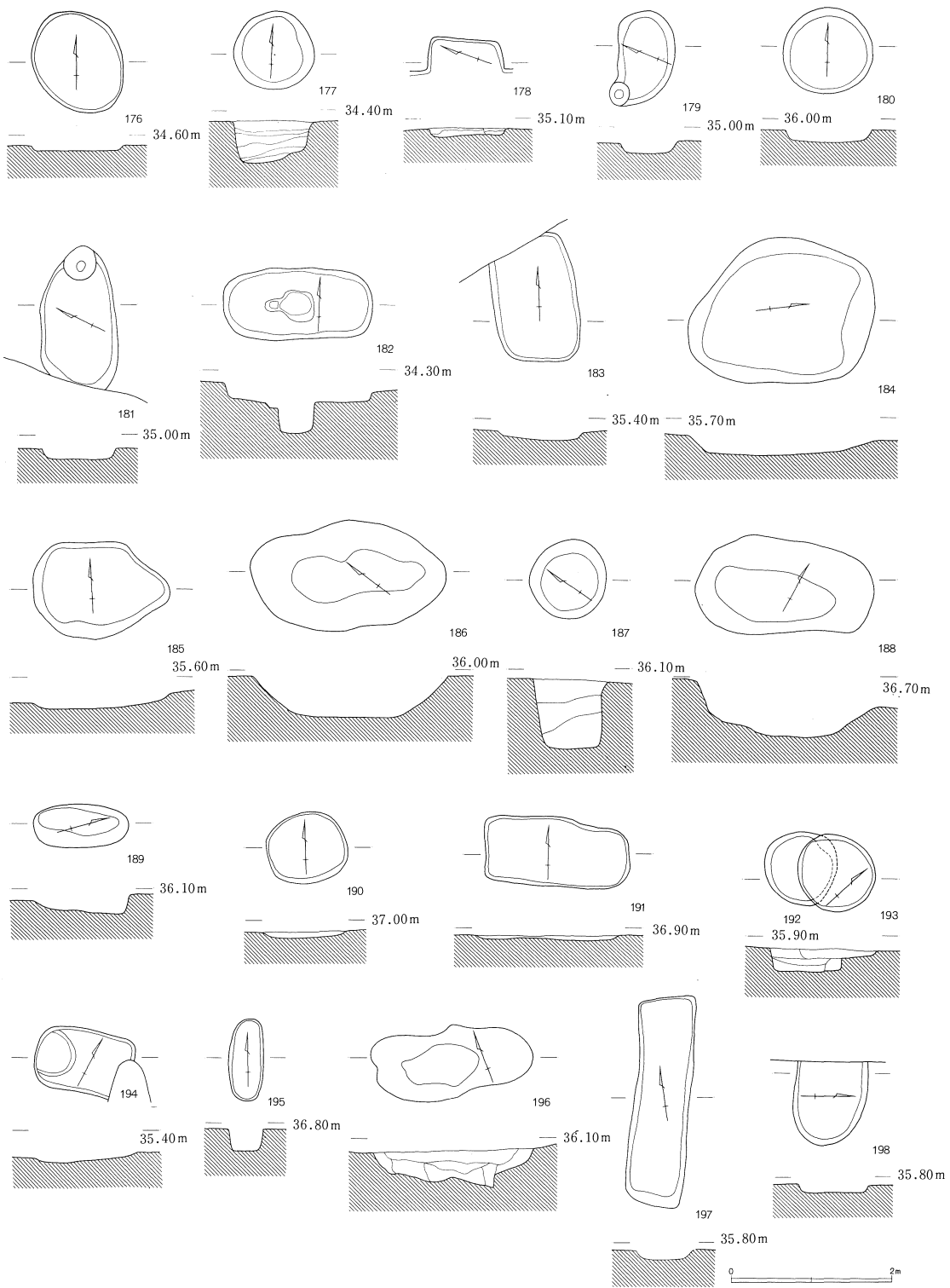
第255图 S K109~132



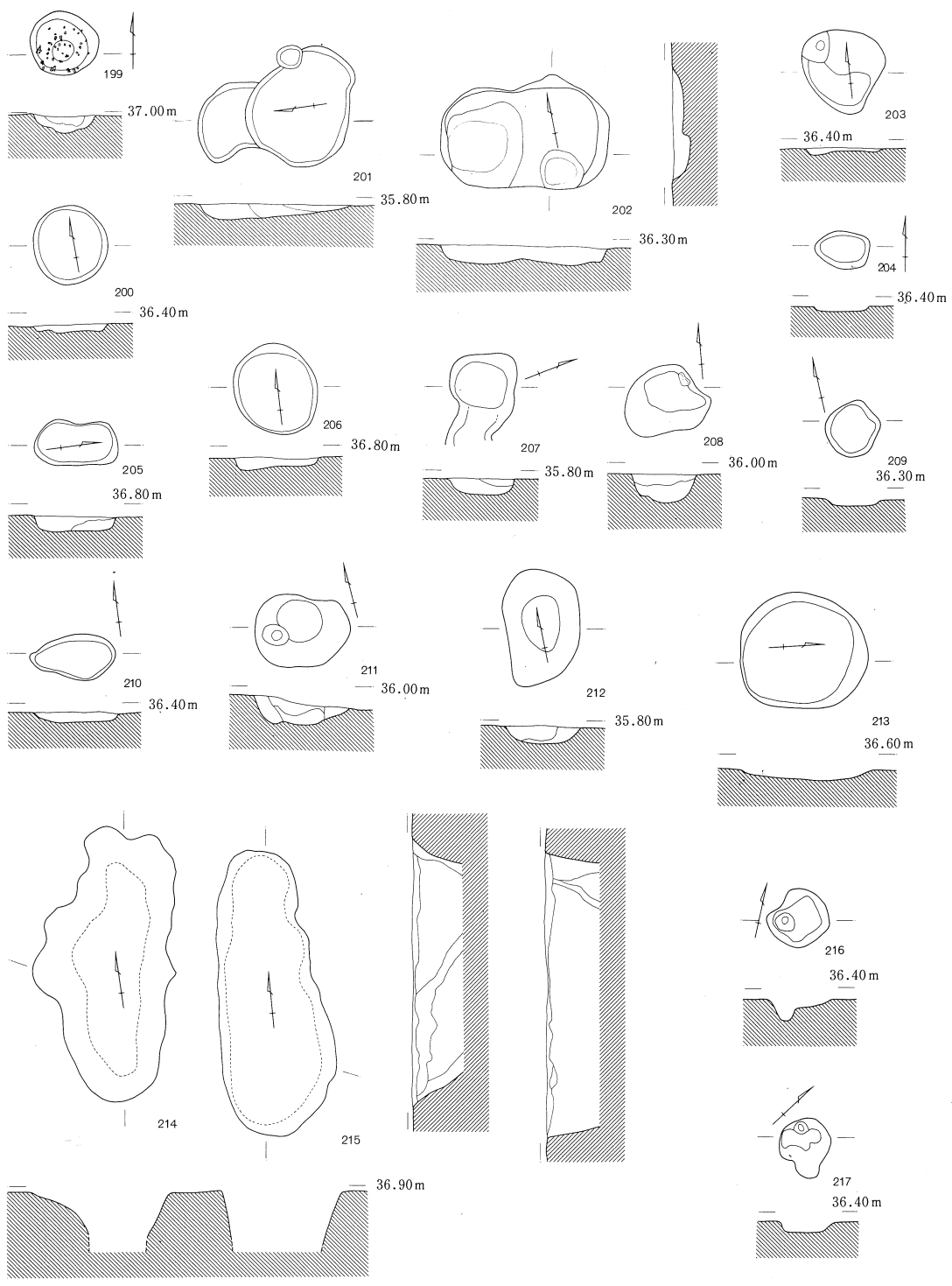
第256図 S K133~154



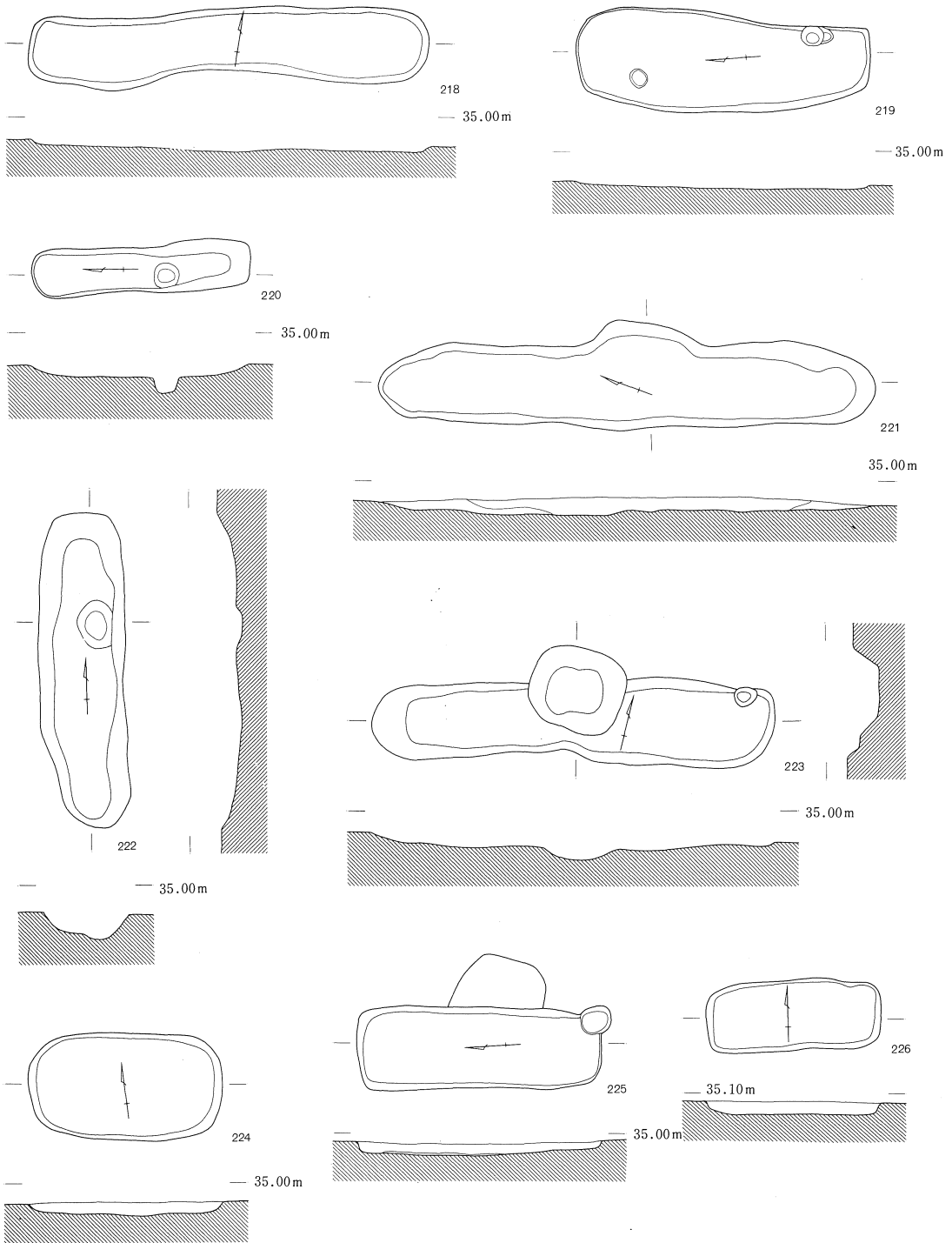
第257图 SK 155~175



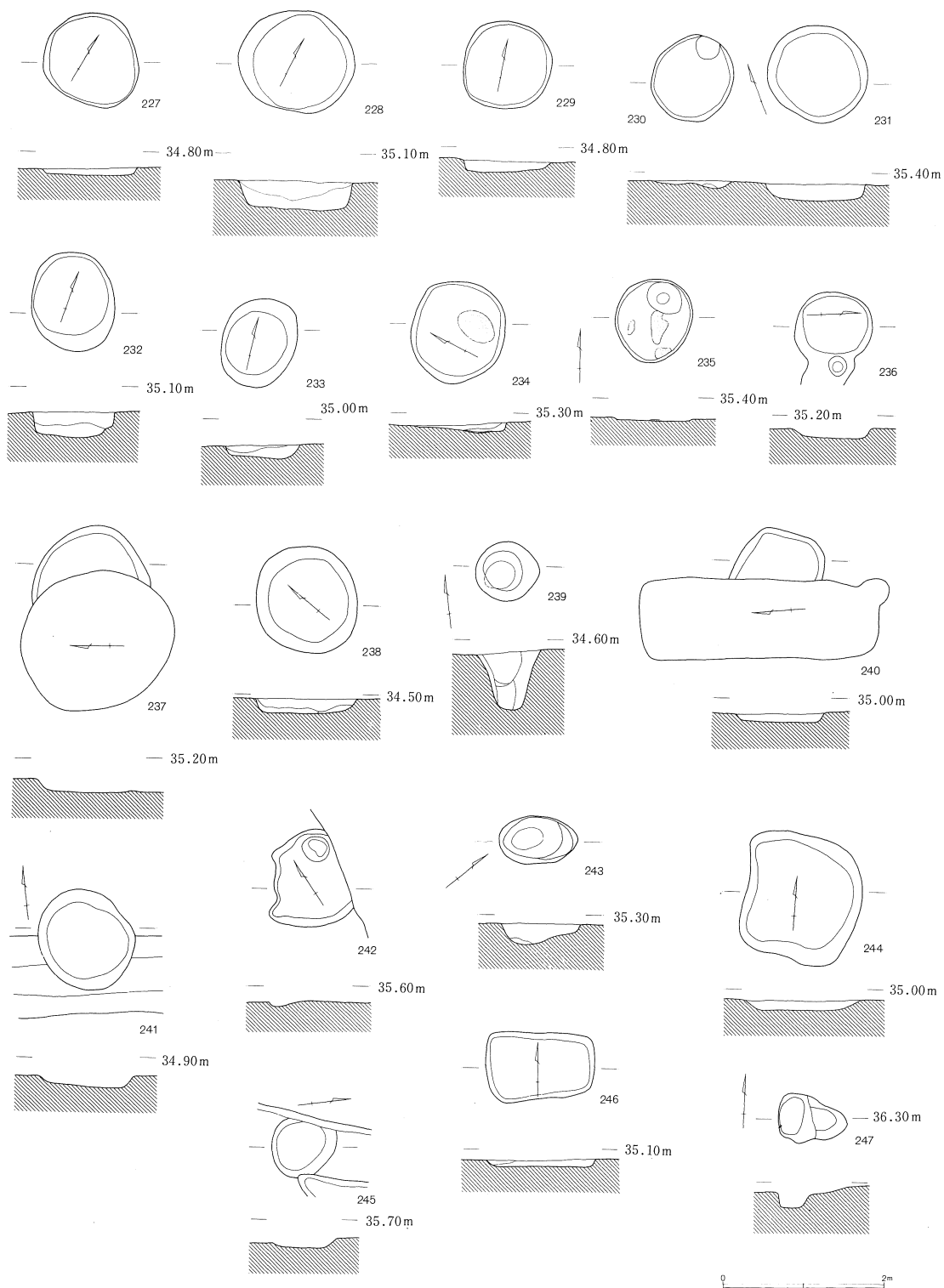
第258图 S K 176~198



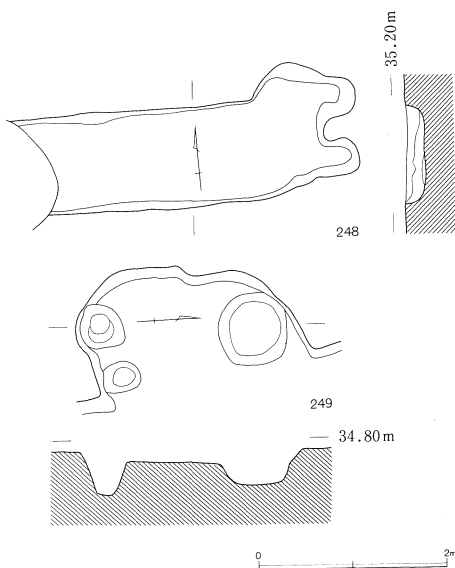
第259图 S K 199~217



第260図 S K 218~226



第261图 SK 227~247



第262図 S K 248・249

き、青灰色の粘土層まで掘り込んでいる。覆土は黒褐色をベースとし、下層は暗褐色または明褐色で、ロームブロックが含まれる。

土壇の多くは遺物を包含していないため、その構築年代は不明瞭である。第263図に示した遺物からは7～8世紀代の住居からの混入品もみられるが、図示できなかったかわらけ類の小破片の存在や8～9世紀の住居跡との重複関係などから多くは中世以降に帰属するものと考えられる。また、土壇間の重複関係は主に円形及び楕円形の土壇においてみられ、他の形態の土壇においては殆どみられない。A区とB区との境に位置する30基余りの土壇群を例にとると、いずれも直径1.1～1.3m、深さ10～20cmの規模の土壇で、単独のものも多いが、2～3基余りの重複も何例かみられる。

いずれも覆土は暗褐色を呈し、ロームブロックを多く含む点が共通している。また、断面観察による重複の先後関係はやや不明瞭であるが、識別可能な範囲である。これらは規則性こそ認められないが、同一規模を一定の範囲で保っており、比較的近い時期に構築されたものと考えられる。なお、出土遺物の多くは覆土中層付近より検出されている。

土壇出土遺物(1) (第263図)

1は土師器杯の口縁部破片。内面及び口縁部は横ナデ、体部はヘラケズリ。口径12.6cm、器高3.2cmを測る。色調は淡褐色。2～5・6～8は須恵器杯で、8は高台付杯。2～4の底部調整は回転糸切り後、周辺回転ヘラケズリ。他は回転糸切り未調整。口径と器高は2は12.6cm、3.2cm、3は11.7cm、3.4cm、4は11.4cm、3.2cm、6は12cm、4.2cmを測る。いずれも胎土に砂粒、白色針状物を含む。色調は青灰色～灰色。5・11・12はかわらけ。5の底部調整は回転糸切り未調整、11・12はヘラ状のケズリ。胎土に雲母、砂粒を含む。色調は5は淡褐色、S K 65出土。11・12は淡橙褐

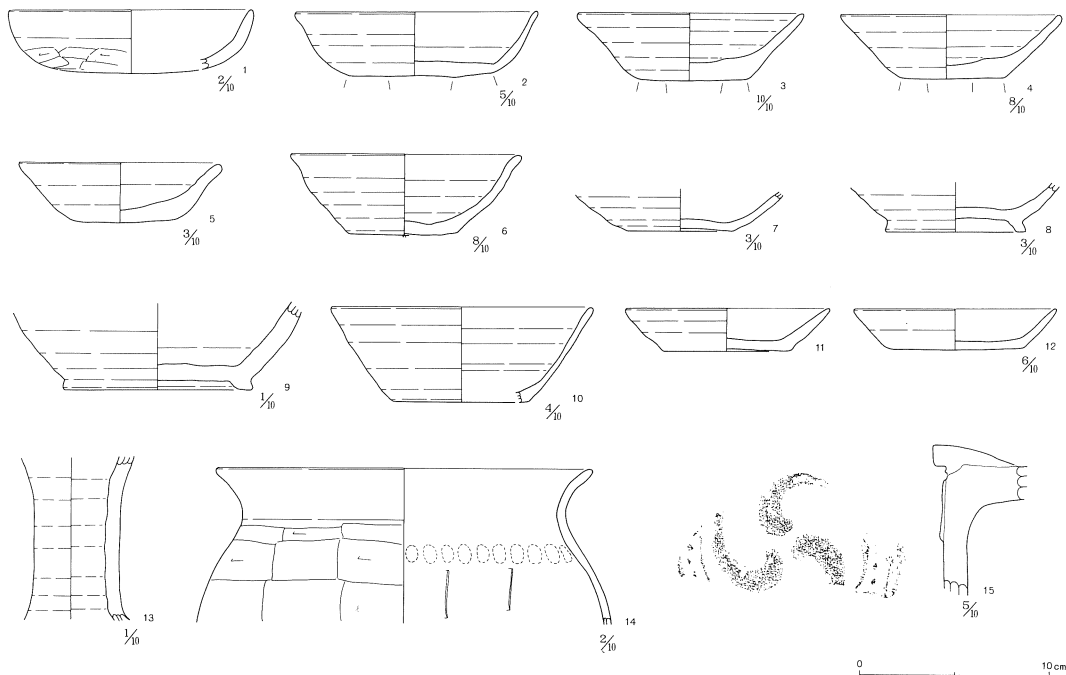


S K 70



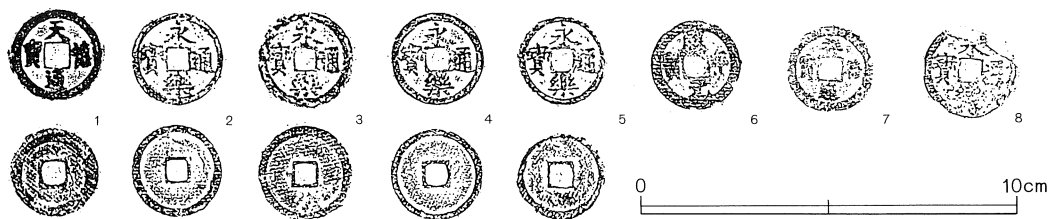
S K 74

色。SK95出土。9は須恵器長頸壺の破片。10は須恵器碗、口径は13.5cm、器高は5cmを測る。胎土に白色針状物を含む。色調は青灰色。13は須恵器長頸壺の頸部破片。轆轤痕明瞭。胎土に砂粒を含む。色調は淡黄緑色。14・15は土師器甕の口縁部から胴部の破片。口縁部は横ナデ、胴部は横ヘラケズリ、14の頸部付近には指圧痕を残す。口径は14は19.4cm、15は20.6cmを測る。胎土に粗い砂粒を含む。色調は淡橙褐色。



第263図 土壙出土遺物(1)

1は「天禧通宝」2～5・8は「永楽通宝」、6は「咸平元宝」、7は「祥符通宝」である。いずれも錆が著しく、青緑色を呈する。直径は2.2～2.5cm。1はSK71、2～5はSK74、6はSK44、7・8はSK40から出土したものである。



第264図 土壙出土遺物(2)

(7) 火葬墓

火葬墓は3基検出された。

1号火葬墓は長辺0.95m、短辺0.5mの楕円形を呈し、一側辺に長さ0.5m、幅0.35mの焚口状の施設が設けられている。燃烧部の掘り込みは鍋底状を呈し、深さは中心部で最も深く0.25mを測る。覆土は4層に分かれ、第1層は暗褐色土、第2・3層は褐色土、第4層は黒褐色土を呈する。1・2層は焼土の含有が多く炭化物と骨片が混じる。3・4層には骨片や骨粉が多量に含まれるとともに炭化物の含有量が非常に多い。また、側壁の上部は高熱のために焼土化した部分が見られた。

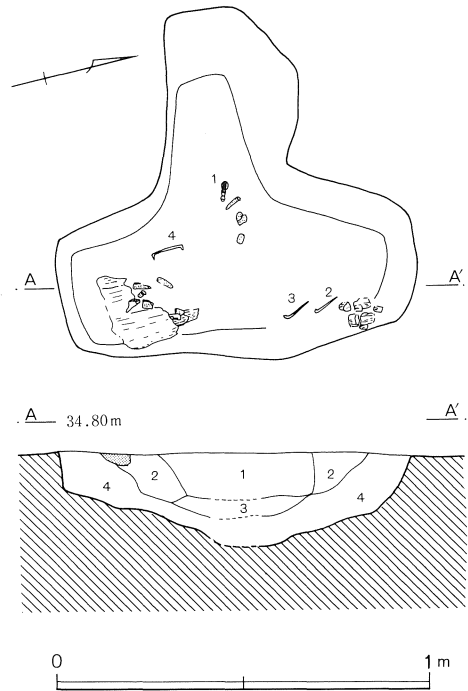
本遺構からは青銅製五鈎杵(1)、鉄釘(2~4)が検出された。何れもほぼ3層に対応する位置から出土し、本遺構に伴うと考えてよい。五鈎杵の性格が問題であるが、副葬品とすると1号火葬墓は単なる荼毘跡ではなく、木棺に遺骸と五鈎杵を納めて火葬した本埋葬跡の可能性も考慮されよう。

青銅製五鈎杵(第267図)

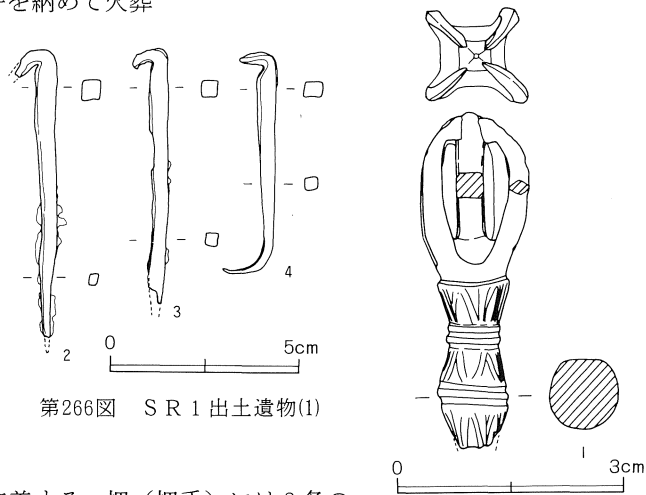
把下半を欠失する。残存長4.45cm、重量15g。通常五鈎杵に比して極めて小形でミニチュアとした方が良いかも知れない。また五鈎鈴の可能性もあるがそれにしても小型の部類に属する。中鈎は脇鈎に比して

太く方柱状を呈する。4本の脇鈎は断面菱形を呈し先端は尖らず中鈎に鑄着する。把(把手)には2条の紐(三線と呼ばれる)に締められた蓮弁が描出される。欠失した下半部も同様の構造であったものと推定される。蓮弁は判然としない部分もあるが全体で6単位で構成されるものと考えられる。細密な沈線で表現されるところから、鑄造後に鑿状の工具を用いて毛彫りされたものであろう。把中央の膨らみを「鬼目」と称するように、鬼の目状の円形突起または鬼面が表現される場合が多いが、本例は二条の沈線に置き換えられている。

鉄釘(第266図) 3本とも折頭釘である。何れも燃烧部でも側壁に寄った位置から検出され、4



第265図 SR 1

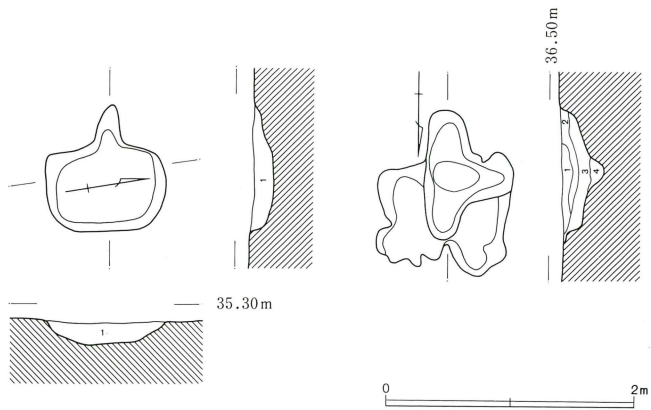


第266図 SR 1 出土遺物(1)

第267図 SR 1 出土遺物(2)

のみ完存する。2は残長6.7cm、3は残長7.6cm、4は曲がった状態で全長5.9cmを測る。

2号火葬墓は長軸0.96m、短軸0.68m、燃焼部西辺に長さ0.30mの焚口が取付く。深さ0.20m。多量の炭化材と共に骨片が散布していた。南壁付近に人頭大の礫が検出されたが遺物はない。3号墓は土壌と切り合い火葬墓が新しい。焚口部を西に向け、燃焼部は1.04×0.36×0.36m。出土遺物はない。



第268図 SR 2 (左)・3 (右)

(富田和夫)



SR 1 遺物出土状況



SR 2

新番号	Grid	大きさ(長×短×深さ)	長軸方位	重複構	旧番号	新番号	Grid	大きさ(長×短×深さ)	長軸方位	重複構	旧番号
1	24-F	130×127×8	N-2°-W		1	21	18-E	80×63×35	N-4°-E		24
2	24-G	155×151×22	N-28°-E		2	22	29-R	143×128×17	N-85°-W		31
3	23-F	115×112×15	N-16°-E		3	23	29-R	141×115×18	N-0°-W	24	32
4	23-F	107×101×15	N-83°-E		4	24	29-R	101×97×19	N-55°-E	23	33
5	21-F	147×104×35	N-89°-E		6	25	17-H	137×85×27	N-7°-W		56
6	20-G	92×67×25	N-69°-E		7	26	16-F	85×65×10	N-4°-E		57
7	20-G	142×100×25	N-53°-W		8	27	16-F	165×107×10	N-3°-E		58
8	20-G	(106+α)×111×111	N-2°-W	9	11	28	16-F	74×58×17.5	N-5°-W		59
9	20-G	(64+α)×90×18	N-13°-W	8.10	10	29	19-H	139×82×46	N-80°-W		60
10	20-G	123×108×28	N-86°-W	9	9	30	19-H	140×89×40	N-62°-W		61
11	24-F	128×126×25	N-21°-W		12	31	19-H	120×93×13	N-55°-E		62
12	25-G	178×120×40	N-19°-E		13	32	17-H	135×100×18	N-84°-E		65
13	25-G	103×97×12	N-36°-E		14	33	17-H	132×103×23	N-85°-W		64
14	23-F	150×133×35	N-41°-E		15	34	17-H	129×88×7	N-72°-E		63
15	24-F	210×132×16	N-7°-W		16	35	17-H	141×96×18	N-74°-W		66
16	23-G	96×82×13	N-87°-E		17	36	17-G	145×90×15	N-87°-E		67
17	22-F	111×104×25	N-2°-E		18	37	17-H	195×124×15	N-85°-E		68
18	19-G	113×101×15	N-68°-E		19	38	17-F	128×77×10	N-13°-E		69
19	17-E	102×93×48	N-77°-E		21	39	17-F	168×102×28	N-80°-W		70
20	17-E	102×47×25	N-85°-E		22	40	17-F	85×90×13	N-90°-E		71

土壌計測表(1)

41	17-F	98×89×6	N-79°-W		72	98	14-K	158×84×7	N-78°-W		130
42	17-G	115×87×21	N-90°-W		74	99	15-L	113×84×9	N-10°-E		127
43	16-I	125×109×17	N-82°-W		76	100	15-K	200×142×14	N-5°-E		131
44	16-I	136×92×21	N-82°-W		77	101	15-M	124×84×30	N-4°-W		132
45	17-G	132×119×15	N-5°-E		78	102	14-M	60×65×13	N-83°-W		133
46	16-H	192×138×13	N-25°-W		79	103	14-M	105×103×35	N-20°-W		134
47	29-R	128×118×23	N-84°-W		34	104	24-J	122×112×15	N-14°-W		139
48	28-R	145×134×23	N-5°-W		35	105	11-F	90×78×7	N-83°-W		140
49	28-R	116×103×25	N-16°-E		36	106	11-L	75×(46+α)×11	N-83°-W	107	159
50	28-Q	140×(60+α)×26	N-81°-W	51	38	107	11-L	128×96×22	N-78°-W	106.108	143
51	28-Q	140×60×44	N-84°-E	50	37	108	11-L	117×95×19	N-83°-E	107	113
52	27-Q	107×100×18	N-11°-E	53	39	109	11-L	133×83×26	N-63°-E		144
53	27-Q	(95+α)×87×13	N-30°-E	52	40	110	11-L	109×80×24	N-63°-E		168
54	21-L	192×85×26	N-3°-E		41	111	11-L	134×88×8	N-71°-W		158
55	17-M	(82+α)×78×10	N-89°-E	56	42	112	11-L	114×88×7	N-87°-W		145
56	17-M	105×95×7	N-70°-W	55.57	43	113	12-J	(123+α)×124×8	N-78°-W		147
57	17-N	(103+α)×93×7	N-63°-W	56	44	114	13-E	127×112×25	N-39°-W		149
58	31-Q	128×78×6	N-78°-W		50	115	12-I	198×102×12	N-89°-E		148
59	20-H	160×85×30	N-38°-E		27	116	9-E	122×116×13	N-18°-W		150
60	20-H	148×110×27	N-81°-W		25	117	8-N	69×58×63	N-69°-E		160
61	17-H	172×89×38	N-86°-E		29	118	11-M	163×65×16	N-83°-W		164
62	17-Q	177×139×16	N-84°-W		47	119	14-H	198×73×26	N-89°-W		163
63	17-M	113×100×28	N-85°-E		45	120	8-N	93×61×7	N-27°-W		161
64	20-G	80×63×9	N-53°-W		51	121	5-S	82×5×6	N-36°-W		162
65	21-G	77×70×16	N-0°-W		20	122	16-G	122×101×93	N-80°-W		166
66	19-H	145×110×45	N-14°-E		52	123	6-Q	258×100×13	N-9°-E		154
67	19-H	133×114×38	N-90°-E		53	124	11-L	171×61×24	N-77°-W	125	169
68	17-P	114×110×9	N-2°-E		46	125	11-L	(48+α)×76×18	N-76°-W	124	170
69	17-H	185×103×21	N-79°-W		54	126	11-L	89×61×3	N-90°-E		172
70	6-N	129×90×28	N-88°-W		81	127	15-Q	124×108×11	N-12°-E		178
71	8-P	105×78×22	N-32°-E		82	128	15-Q	97×95×10	N-0°-E		177
72	6-L	117×100×14	N-78°-W		84	129	16-Q	97×87×9	N-7°-W		176
73	7-N	259×98×22	N-85°-W		83	130	11-N	98×65×30	N-5°-W		174
74	6-N	238×114× $\begin{cases} A82 \\ B90 \end{cases}$	N-12°-E		88	131	12-J	84×73×10	N-0°-W		165
75	7-L	127×125×59	N-86°-E		85	132	16-O	125×97×8	N-56°-W		180
76	16-H	87×66×59	N-76°-W		80	133	32-Q	187×83×22	N-34°-W	134	190
77	8-Q	108×64×36	N-30°-W		91	134	32-Q	187×74×23	N-34°-W	133	191
78	7-Q	124×105×23	N-79°-E		90	135	31-Q	140×92×43	N-26°-E		192
79	8-N	107×67×10	N-11°-W		98	136	31-Q	76×62×34	N-21°-E		193
80	8-L	349×114×55	N-34°-E		87	137	32-Q	136×140×23	N-27°-E		194
81	5-O	333×321×48	N-81°-E		95	138	32-Q	145×110×24	N-90°-E		195
82	8-P	105×63×39	N-32°-W		92	139	32-Q	119×88×4	N-84°-E		196
83	7-M	97×58×17	N-4°-E		96	140	32-R	134×125×7	N-2°-E		197
84	7-M	84×57×8	N-88°-E		97	141	33-Q	92×88×7	N-54°-E		203
85	14-E	178×115×30	N-47°-W		104	142	34-R	89×70×5	N-90°-E		207
86	14-E	170×135×20	N-4°-W		105	143	33-P	109×109×10	N-7°-E		198
87	16-H	94×36×25	N-85°-W		94	144	33-P	86×56×10	N-54°-E	145	199
88	14-F	238×85×16	N-11°-E		106	145	33-Q	105×81×10	N-68°-E	144	200
89	17-I	116×97×10	N-0°-W		108	146	33-R	178×120×25	N-77°-E		206
90	17-M	140×117×32	N-49°-W		121	147	33-Q	93×82×4	N-77°-E		201
91	15-H	142×84×10	N-72°-W		110	148	33-R	255×76×32	N-83°-W		204
92	11-L	246×120×44	N-90°-W		117	149	33-Q	89×70×5	N-90°-E		202
93	17-N	129×112×25	N-0°-W		122	150	38-N	233×215×45	N-84°-E		227
94	14-J	254×84×15	N-88°-E		124	151	39-N	256×233×34	N-26°-E		228
95	14-J	162×81×9	N-85°-W		123	152	33-R	102×68×18	N-83°-E		205
96	14-M	100×91×7	N-2°-W		128	153	35-N	100×58×16	N-36°-E		221
97	15-M	115×107×16	N-80°-E		129	154	38-K	200×188×40	N-60°-E		213
						155	37-N	236×198×54	N-4°-W		211

土壤計測表(2)

156	38-K	207×60×46	N-74°-W		214	203	47-M	96×86×9	N-51°-W		256
157	36-L	(160+ α)×187×48	N-13°-E	158	209	204	47-M	66×44×6	N-90°-E		252
158	37-L	150×70×53	N-31°-E	157	210	205	50-K	99×50×19	N-8°-E		246
159	51-M	237×125×6	N-63°-E		234	206	50-K	112×97×15	N-12°-W		243
160	31-R	83×73×24	N-27°-E		217	207	48-P	80×75×(19+ α)	N-25°-E		250
161	34-N	148×103×31	N-70°-E		224	208	44-O	94×76×34	N-63°-E		258
162	51-K	122×96×12	N-89°-E		231	209	47-N	63×56×8	N-61°-E		255
163	31-R	95×86×10	N-80°-E		218	210	47-M	104×46×7	N-84°-E		251
164	35-K	160×125×16	N-35°-W		229	211	44-O	116×81×32	N-75°-W		257
165	51-K	123×104×19	N-90°-W		230	212	48-P	135×88×22	N-10°-E		233
166	37-L	87×83×27	N-78°-E		212	213	36-K	154×135×7	N-16°-E		233
167	51-K	110×87×10	N-86°-E		232	214	55-K	314×120×(71+ α)	N-12°-E		237
168	38-O	105×52×8	N-30°-E		222	215	55-K	342×110×(73+ α)	N-0°-E		238
169	53-K	144×113×12	N-72°-W		241	216	47-L	70×58×25	N-36°-E		254
170	50-K	122×101×10	N-90°-W		233	217	47-L	72×41×14	N-53°-W		253
171	51-J	61×54×16	N-78°-W		245	218	6-R	488×72×11	N-79°-E		153
172	32-R	102×49×27	N-10°-W		(A31) 220	219	7-S	306×106×7	N-5°-E		156
173	53-K	124×111×20	N-83°-W		242	220	7-S	266×52×35	N-5°-W		157
174	32-Q	108×80×15	N-3°-E		215	221	5-Q	604×91×22	N-19°-W		152
175	50-J	185×90×47	N-44°-E		244	222	7-R	380×101×32	N-2°-W		155
176	11-O	135×110×7	N-36°-W		173	223	5-R	490×83×34	N-76°-E		151
177	14-Q	98×96×52	N-71°-E		181	224	17-P	226×129×16	N-83°-W		48
178	12-J	92×(38+ α)×12	N-20°-W		189	225	13-J	298×96×15	N-3°-E		141
179	10-L	119×70×13	N-80°-E			226	12-J	212×83×16	N-88°-E		125
180	13-E	109×107×15	N-59°-W		112	227	13-N	123×103×9	N-66°-W		138
181	10-L	172×95×13	N-65°-E			228	13-N	142×122×35	N-85°-E		136
182	9-R	185-87×57	N-88°-E		93	229	13-N	104×103×15	N-4°-E		137
183	16-I	146×104×10	N-4°-W			230	17-I	109×97×10	N-47°-E		102
184	19-F	234×153×22	N-0°-E			231	17-I	123×111×21	N-11°-W		103
185	19-F	170×118×13	N-86°-W			232	13-N	232×123×102	N-23°-W		135
186	34-P	240×120×50	N-36°-W		226	233	17-Q	113×89×17	N-6°-E		49
187	35-N	99×92×85	N-75°-E	SE6		234	16-F	128×112×11	N-75°-E		75
188	57-M	215×112×54	N-70°-E		248	235	17-F	106×92×3	N-26°-E		28
189	16-H	120×54×22	N-16°-E		225	236	17-D	95×(88+ α)×13	N-4°-W		175
190	54-K	99×87×8	N-76°-E		236	237	11-L	(56+ α)×129×12	N-85°-E		
191	54-K	179×86×6	N-88°-W		239	238	11-O	132×122×17	N-46°-E		171
192	31-R	90×85×27	N-45°-E	193	219	239	16-P	80×68×72	N-84°-W		179
193	31-R	97×90×27	N-80°-E	192	216	240	12-J	(62+ α)×93×10	N-61°-W		142
194	16-G	106×104×34	N-2°-W		235	241	13-E	118×(5+ α)×14	N-84°-W		117
195	51-J	100×43×27	N-3°-E		247	242	24-I	119×(87+ α)×7	N-22°-E		119
196	47-Q	193×81×46	N-77°-W		247	243	16-H	58×70×26	N-2°-E		101
197	45-P	259×67×12	N-15°-E		208	244	10-M	152×142×12	N-13°-E		99
198	51-J	104×88×10	N-84°-W		240	245	38-O	(76+ α)×(63+ α)×11	N-32°-W		
199	59-K	80×77×19	N-47°-W		249	246	14-L	145×111×10	N-89°-E		126
200	47-M	94×90×9	N-90°-W		250	247	47-P	85×45×20	N-87°-E		262
201	48-P	185×79×19	N-0°-W		252	248	12-J	288×105×21	N-88°-W		146
202	47-N	202×115×24	N-77°-W		249	249	8-O	226×(110+ α)×15	N-6°-W		89

土壤計測表(3)

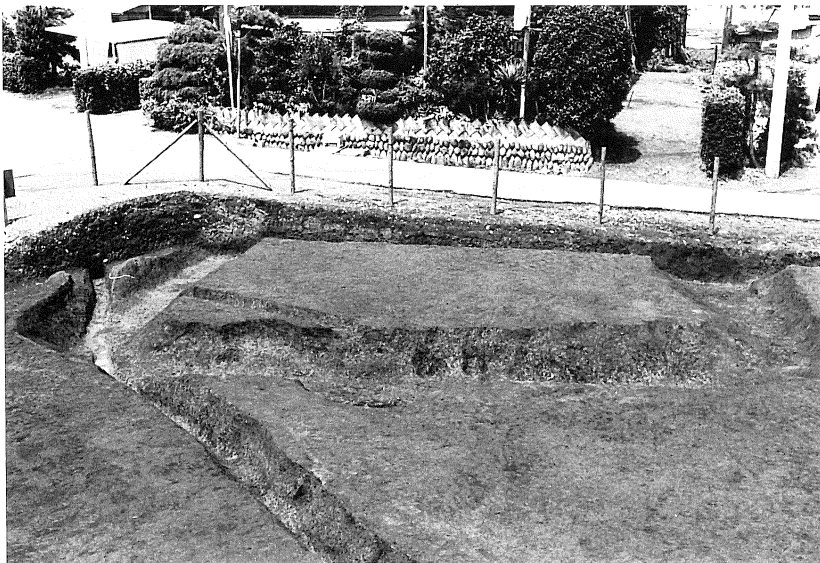
(8) 塚の越1号墳 (ST1)

塚の越1号墳は、A区北西隅の33-K・LGrid に位置する墳丘の削平されてしまった古墳跡である。古墳の所在する部分は、調査着手時には畑地として利用され、起伏のほとんどみられない平坦地であった。また分布調査時においても埴輪など古墳の存在をうかがわせる遺物は確認されていなかった。調査後の聞き取り調査でもこの古墳の所在はまったく知られておらず、かなり早い時期に墳丘が削平されてしまったようである。現状では周囲に古墳の所在はなく単独で占地するもので、東側の谷津を隔てた台地上に三福寺古墳群が所在しているにすぎない。

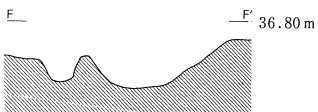
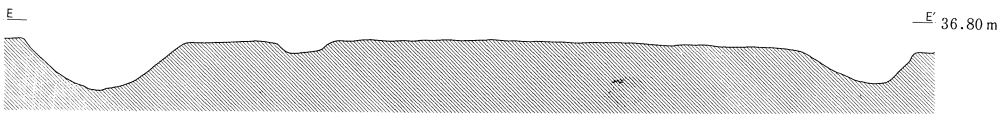
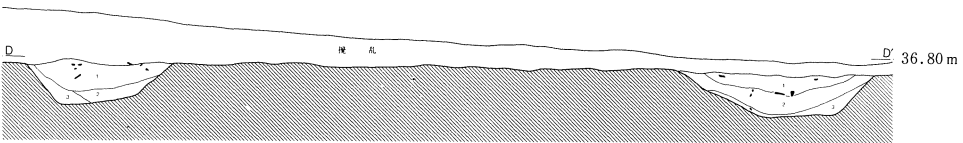
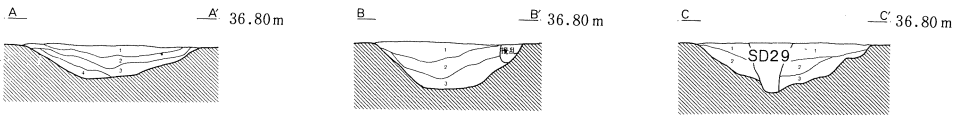
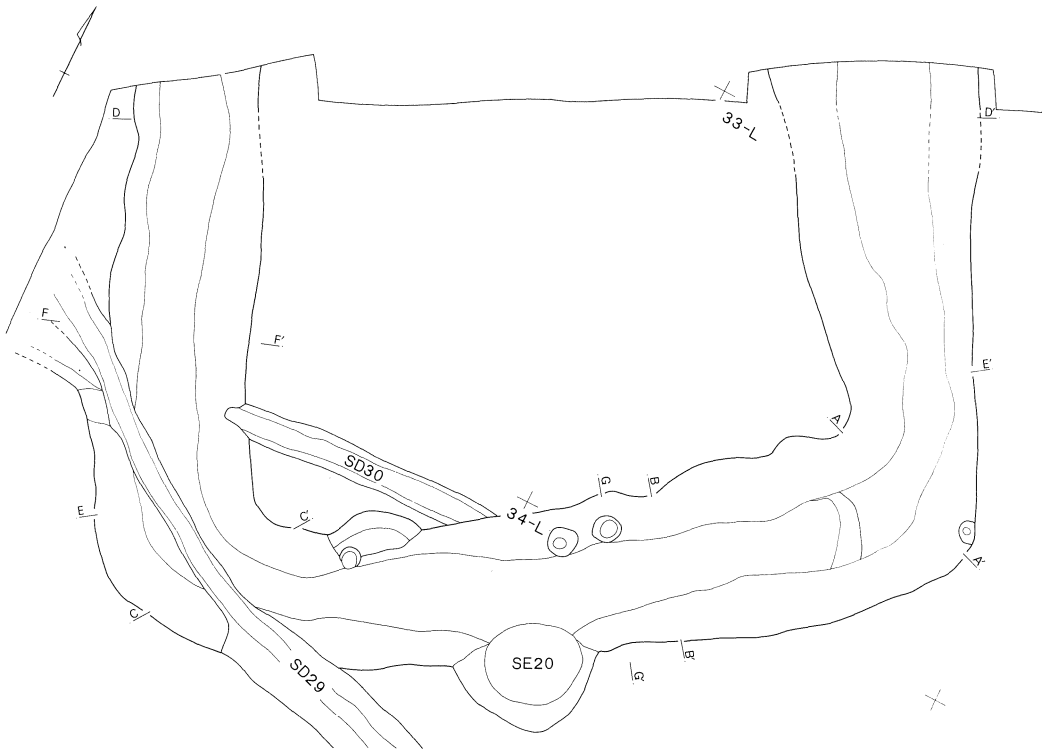
大部分が調査区域外にかかっているため墳丘形態、墳丘規模等を正確に把握することはできなかった。しかし、調査の結果、台形状に周溝を巡らしていることから考えて、小規模な前方後円墳の前方部の可能性が高いことが明らかとなった。以下、前方後円墳と仮定した上で、各部の概要について説明をおこなうことにする。

調査の結果、墳丘部分の前方部幅9.55m、周溝を含めた幅11.65mを測る前方部を南に向ける前方後円墳と推定される。調査区内における墳丘部分の長さは7m、周溝を含めた長さ8.2mを測る。後円部と推定される位置には、市道を挟んで個人住宅が建設されているため、旧状を復元することは困難である。おそらく30m前後の小規模なものと推定される。確認された墳丘部分の中軸線の方位はN-35°-Wを示している。

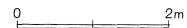
現地表面からの土層断面(D-D')の観察では、墳丘構築土や旧表土は確認されず、ローム面近くまで後世の攪乱を受けていた。周溝はほぼ墳丘と相似形を呈しているが、南東コーナー部は直角に近く、「片直型」の企画を意図している可能性も考えられる。周溝は確認面上端での幅1.85~2.25m、深さは確認面から45~65cmを測り、立ち上がり角度は25~45°と緩やかである。周溝の底



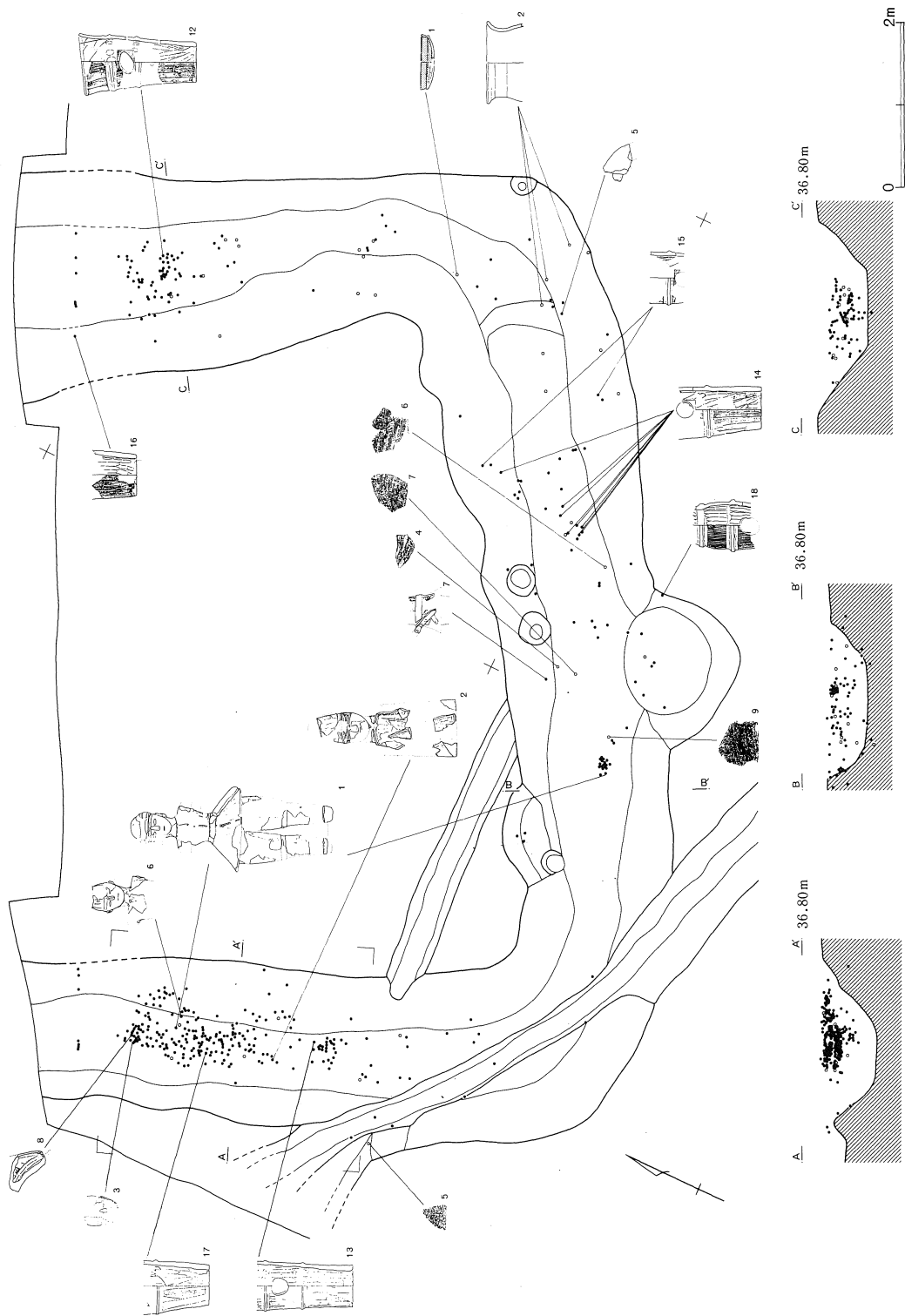
ST1 全景 (南から)



- 1. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒混入。
- 2. 暗褐色土 ローム粒混入。
- 3. 褐色土 ロームブロック、ローム粒混入。
- 4. 明褐色土 ローム粒混入。



第269図 ST 1 全体図



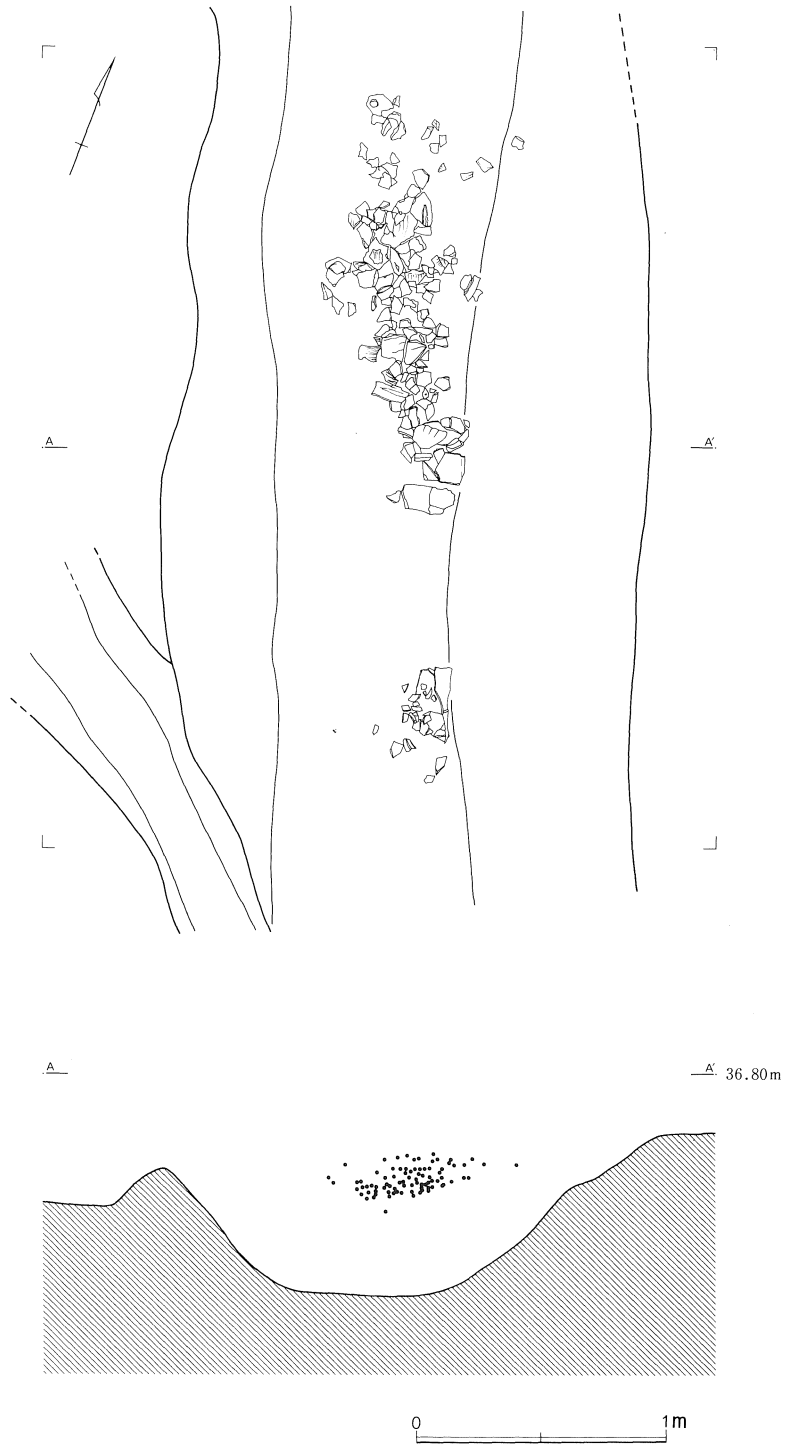
第270図 ST 1 遺物出土状況図

面はほぼ平坦であるが、南東コーナー部で約10cmの段差をもって一段低くなり、標高35.8mを測る。覆土は褐色土・暗褐色土・明褐色土が堆積していた。

墳丘部分の南端中央に並列して検出された2基のPitは時期不明のものであるが、覆土の状態から古墳に伴うものではないと考えられる。周溝の南西コーナー部は後世の溝・井戸・土壇等によって削平を受けていた。なお、東側へ約5mの間隔をおいて7世紀前半頃のS J78が位置している。

周溝からは人物埴輪や円筒埴輪などの遺物がコンテナ約3箱分出土している。特に西側周溝から人物埴輪を中心とした形象埴輪がまとまって検出された。このことから、この部分がくびれ部に近いことが想定される。

土器は、南東コーナー部から赤彩された土師器坏と甕が、南側周溝から須恵器甕の破片が出土している。



第271図 西側周溝埴輪出土状況図



S T 1 全景（東から）



西側周溝埴輪集中部分(1)



西側周溝埴輪集中部分(2)



円筒埴輪（No.13）



円筒埴輪（No.12）

埴輪（第272～277
図）

(1) 人物埴輪

1は大刀を佩用した
正装男子全身立像である。顔面の一部と両腕・
台部を欠損する。人物部分の高さは92cm前後と
復元され、腰部最大幅は38.3cmを測る。

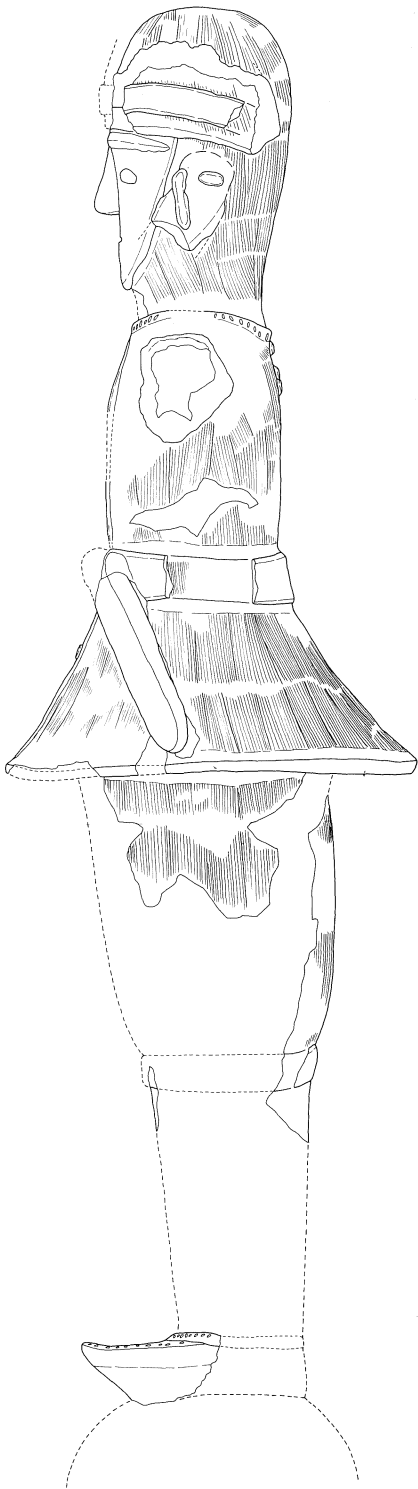
胎土は砂粒を多量に
含み、色調は橙色を呈
する。

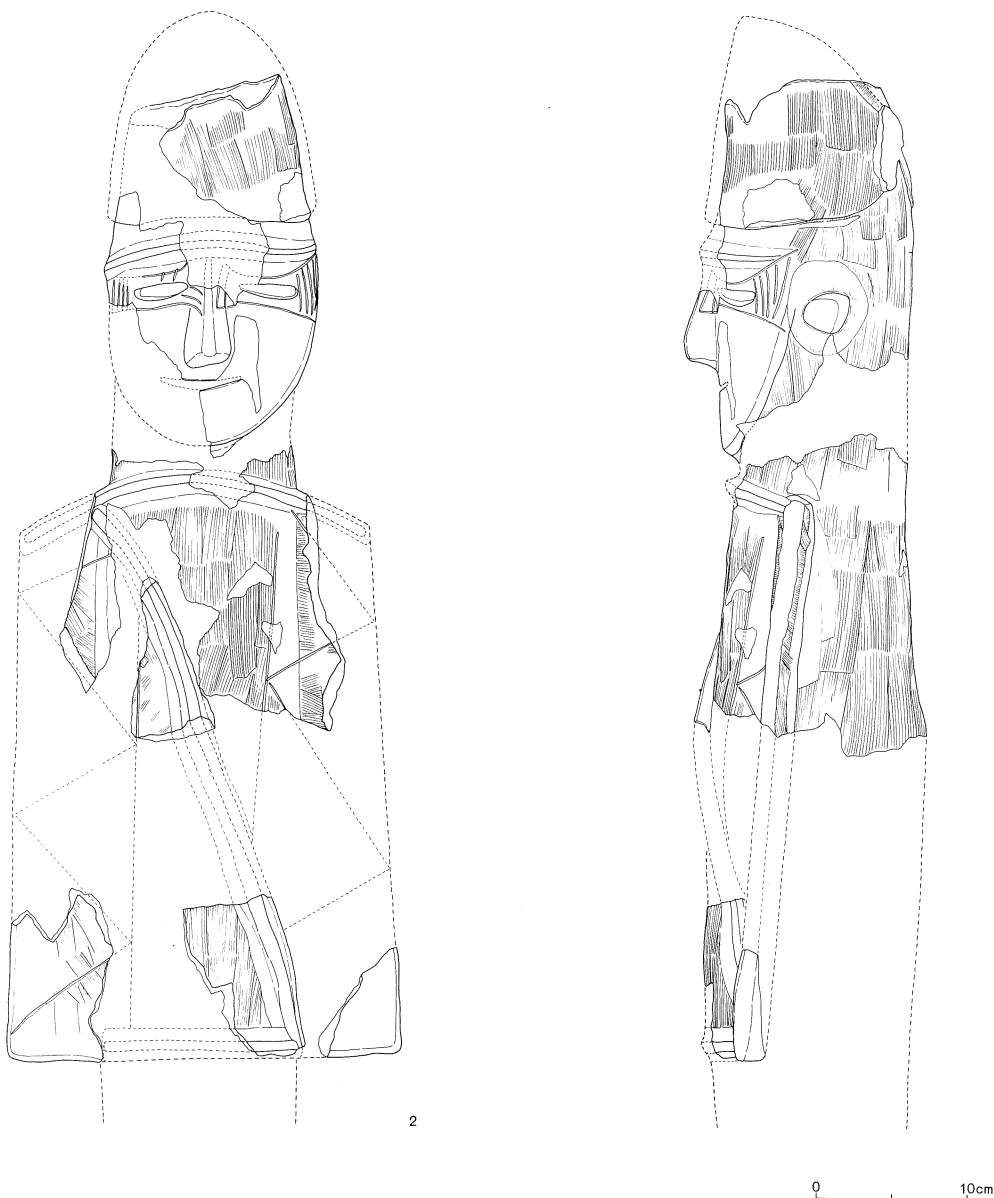
頭部には冠帽をつけ
ていたようであるが大部分が剥離し、帯の
一部を残すだけである。頭頂部には孔径2.5cm
の円孔を有する。下げ美豆良を結び、束ねた
髪を紐で縛る表現を粘土紐を貼り付けて表し
ている。顔面の作りはよく整い、鼻が高く、
目は木葉形にあけられ、口は小さく表現さ
れている。眉は細い粘土紐を弓なりに貼り付
けて表現する。

上部は逆三角形状
に細くすばまり、頸部
背面には粘土粒による
丸玉の表現が3個残
る。腰部には腰帯と思
われる幅3.0cmの粘土



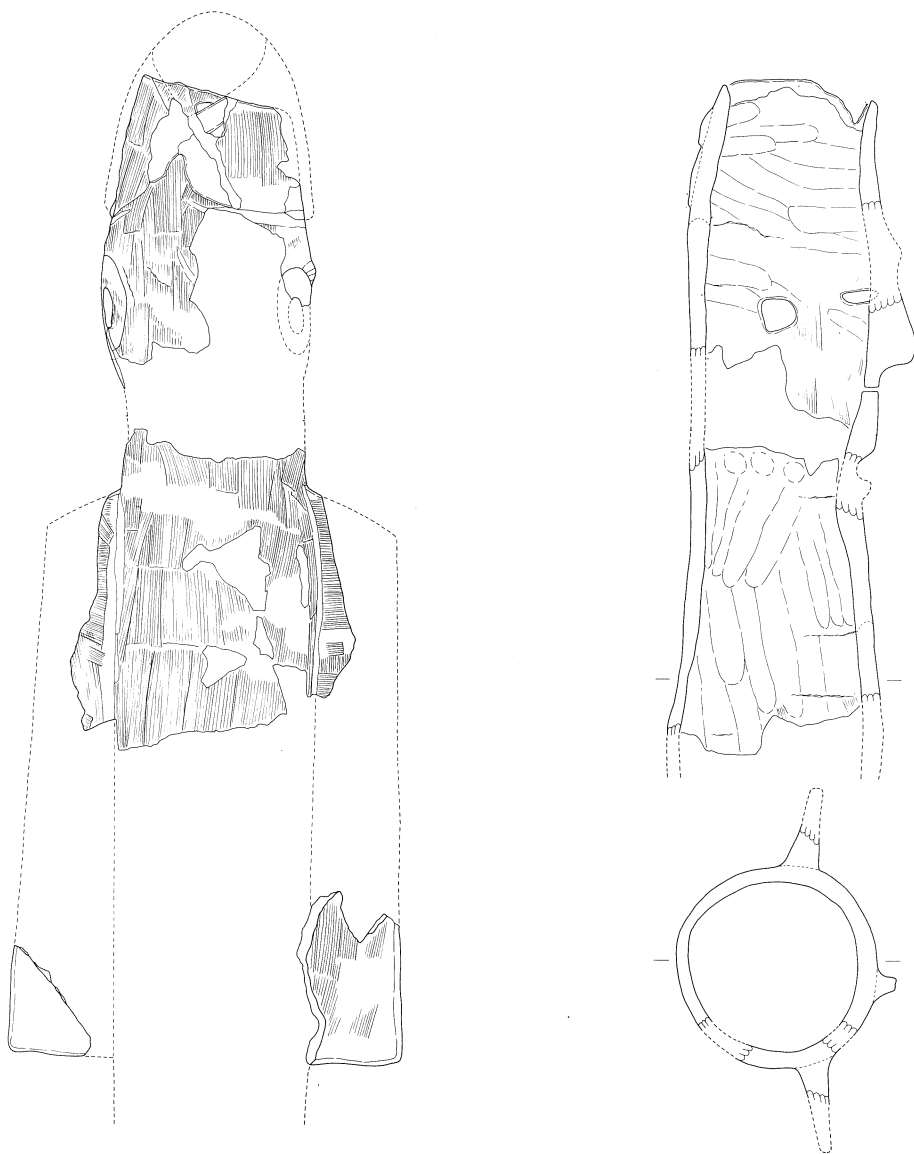
第272図 正装男子人物埴輪





第273図 盾持人埴輪

帯を有する。上衣は前を左衽に合わせ、縁には篋による小さな刺突で紐綴じを表現し、裾部の腰帯近くに矩形の貼り付けが1個みられる。裾部は大きく開き、大刀を佩用する。大刀は把頭部分を欠損し、刀装具の表現はみられない。大刀の現存長17.2cmを測る。脚部は袴を表したものと思われ、膝の部分には足結状の粘土帯を貼付しているが、結び目の表現はみられない。脚上部は緩やかな膨らみをもって表現する。脚下部は円柱状で下に向かい徐々に細める。沓は写実的に表現され、ややつま先上がりとなり、つま先は丸く尖る。沓の縁には上衣と同じく刺突による紐綴じの表現がみられる。おそらく革沓を表したものと考えられる。長さは付根からつま先まで7.3cm、幅8cm、厚さ



4.5cmを測る。体部の大部分は西側周溝から一括して出土しているが、頭部はやや離れた南側周溝から出土した。

2は円筒部の前面に盾を作りつけ、頭部だけを表現した盾持人である。顔面の一部と盾面及び円筒部を欠損する。人物部分の復元高65cmを測る。胎土は多量の砂粒を含み、色調はにぶい橙色を呈する。頭部は筒抜けとなり、表面に剝離痕がみられる。その痕跡から推定すると粘土板による冠帽か頭巾状のものを被っていたようである。顔面は大きな丸顔に作られ、目の周りには沈線による撥形の入れ墨を表現している。眉は粘土紐によって横一線に表し、目はタレ目でやや段違いにあけら

れている。鼻は高く、鷲鼻である。口は大きく、笑っている。耳は円孔があげられ、その周りには幅広の耳環状の剥離痕が残る。その顔貌は、黥面とし無気味に笑い、僻邪の性格を表しているものと考えられる。

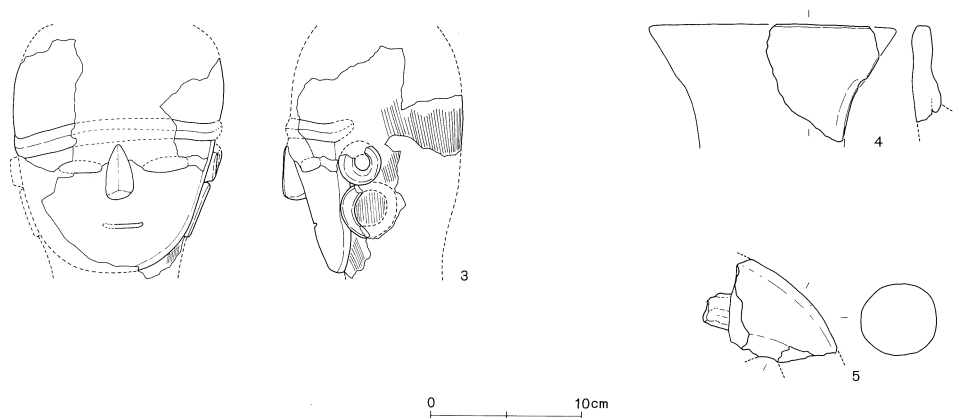
盾は円筒部の側面に粘土板を鱗状に貼り付けて作り出している。盾の形は欠損部分が多く明確でないが、上縁が弓なりの長台形を呈するものと考えられる。図上復元で長さ38.5cm、上幅23.0cm、下幅26.0cmを測る。盾の上端部及び下端部の円筒部には突帯が貼り付けられている。また盾面には斜めに突帯が貼付されている。この突帯がなにを表したのかは明確でないが、同様の造作は兎玉郡美里町出土例や群馬県井出二子山古墳隣接地出土例に類例が知られる。盾面は2本の垂線によって区画され、鱗部には鋸歯文が沈線で描かれている。西側周溝の埴輪集中区からまとも出土している。

3は人物埴輪の頭部破片である。髪形が分からないため男女の判別は明確でないが、冠帽や頭巾などの表現がないことから女子像と考えられる。現存高15.7cm、顔面幅約13.0cmを測る。丸顔に作られ、眉は細い粘土紐を横一線に貼付して作り出し、眉尻はやや上がり気味となる。目は木葉形に大きくあげられ、鼻は高く作られる。口は小さく表現され、微かにほほ笑む。耳は左耳だけを残し、径2.8cmほどの輪台状に作り、下端に接するように径約3.5cmの輪状の耳環を装着している。後頭部には調整時の刷毛目を残す。

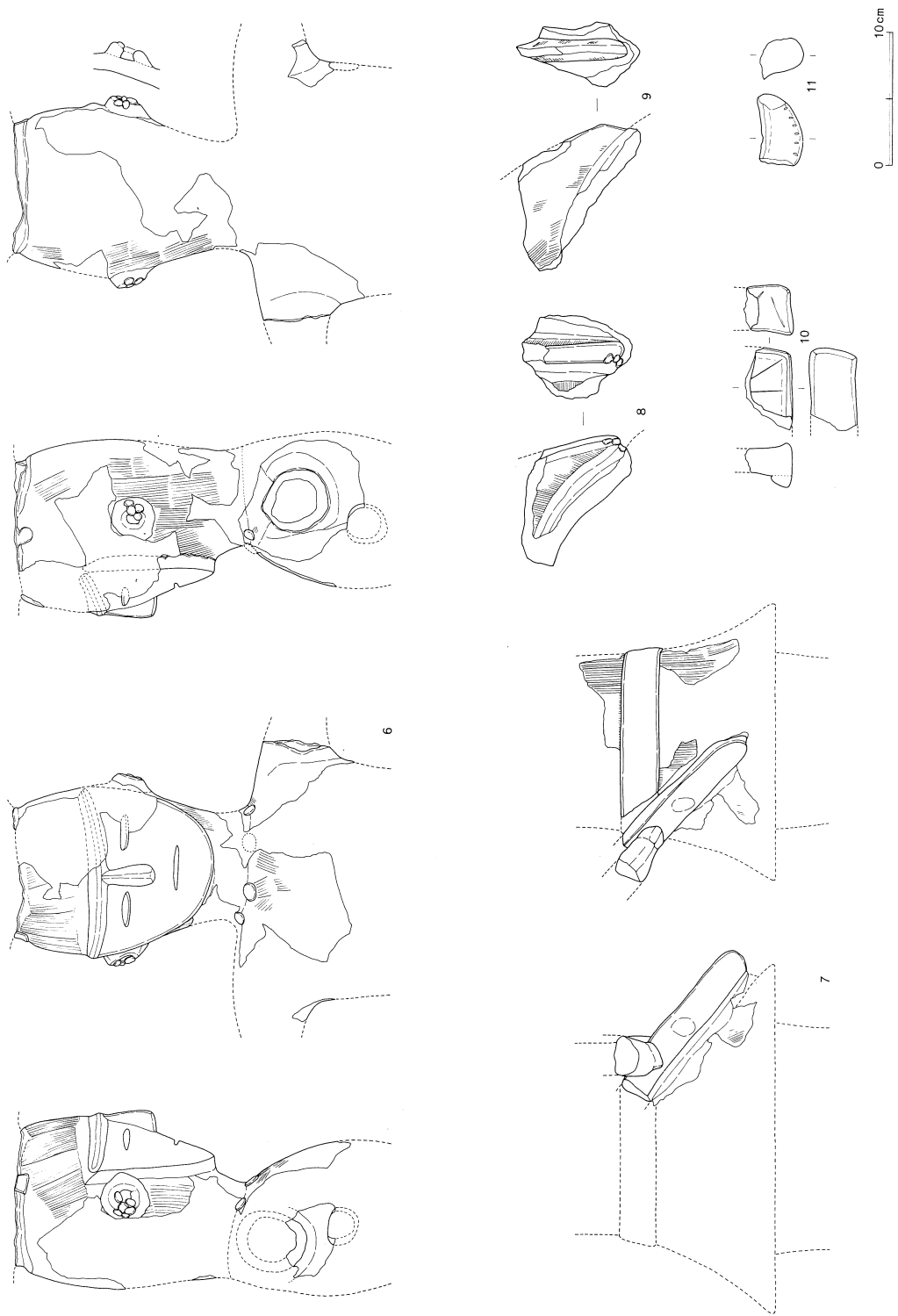
4は女子人物埴輪の髻の破片である。胎土は砂粒を多量に含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。現存長7.5cm、現存幅7.5cm、厚さ1.8cmを測る。表面は丁寧に撫でを施し、部分的に赤彩痕がみられる。髻の下面には頭部の剥離痕が残る。

5は中実に作られた腕の付け根部分の破片である。胎土は多量の砂粒を含み、橙色を呈する。肩部に柄を差し込み腕を作り出している。直径約5cm。残存する表面には丁寧に撫でを施す。南東コーナー部付近から出土している。

6は女子人物埴輪である。頭部から胸部にかけて遺存し、現存高26.5cmを測る。胎土は多量の砂粒を含み、橙色を呈する。



第274図 人物埴輪



第275图 女子人物埴輪・形象埴輪

鬘を欠損するが、板状の鬘が付くものと考えられる。剥離部分には鬘に結ばれた紐を表現したボタン状の貼り付けが残る。眉は粘土紐を横一線に貼付して表現し、眉尻はやや上がり気味である。目は切れ長に細くあけ、鼻は高く作られる。口は小さく表現される。耳は輪台状に作られ、粘土粒による耳玉を4～6個装着する。顔面幅約12.8cmを測る。頸飾りは粘土粒を押し付けて丸玉を表現している。丸玉は3個が遺存するのみで、体部には着衣の表現はみられない。左肩がやや上がり気味となることから、左手を上げるような所作を表現しているものと推定される。脇の下には円孔が穿たれている。

7は大刀を佩用する半身像の腰部の破片である。現存高13.5cm、腰部復元径15.7×14.7cmを測る。胎土は多量の砂粒を含む。色調は橙色を呈する。

腰部には幅3.0cmの粘土帯による腰帯の表現がある。腰帯にかかるように大刀を佩用し、一部分しか残っていないが、大刀に手をかけている姿勢を表している。手には指の表現はなく、手首でわずかにくびれる。また鞘部分にも剥離痕がみられることから、両手で抜刀する姿勢を表現しているものとも推定される。大刀は把頭部分を欠損するが、正装男子全身立像と同じ作りである。現存長15.0cmを測り、鞘尻は丸く仕上げられる。裾部は円筒部分に粘土紐を貼付して大きく開くように作り出されている。外面には調整時の刷毛目が残る。内面は縦方向に撫でを施す。南側周溝中央部から出土している。

(2) その他の形象埴輪

8・9は小片のため形象埴輪の種類は明確でないが、円筒部分の本体に面取りした板状の張り付けがみられることから馬形埴輪の鞍橋（前輪・後輪）と推定される破片である。8は暗褐色を呈し、焼成の良好なもので、胎土には赤色粒子・角閃石の混入が目立つ。9は橙色を呈し、焼成はやや不良で、胎土中には片岩粒がみられる。

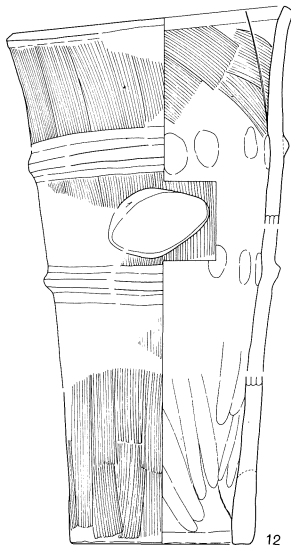
10・11は小片のため形象埴輪の種類は不明である。10は板状の破片で側縁部裏面に粘土紐を貼り付けている。表面と側面には沈線を施している。11は本体から剥離した側縁部が弧を描く破片である。周縁部には正装男子の上衣や沓にみられたものと同じ篋による刺突が施されている。

19～21は形象埴輪の破片であるが、小片のため種類は不明である。19は一部剥離しているが、表面には沈線をX字状に施している。20は端部の破片で、幅広の粘土帯を作り出している。表面には沈線による三角文がみられる。21は板状の破片で、内外面とも刷毛目調整が施され、表面に沈線を施す。40は他の円筒埴輪と異なり、低位置に断面台形の突帯を巡らしていることから形象埴輪の台部と考えられる。

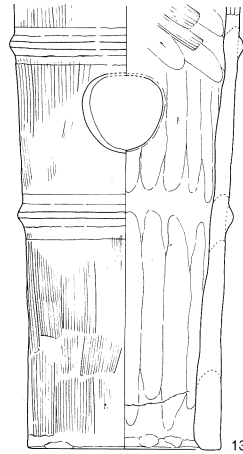
(3) 円筒埴輪

円筒埴輪は出土した埴輪の大部分を占めているが、ほとんどが破片で全体の器形がわかるものはわずかに12の一個体のみであった。

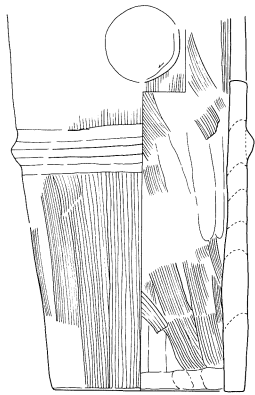
12は口径18cm、底径11.8cm、器高35.3cmを測る2条突帯3段構成の比較的小型の円筒埴輪である。第1段が全体の約2分の1を占める発達した器形である。透孔は第2段に対向して一対あけら



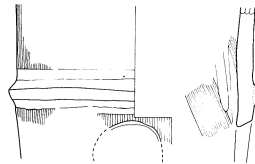
12



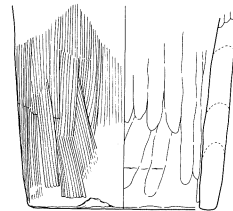
13



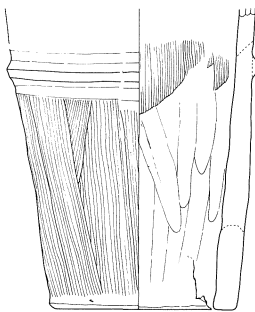
14



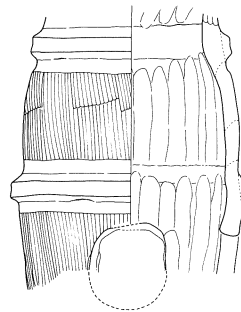
15



16



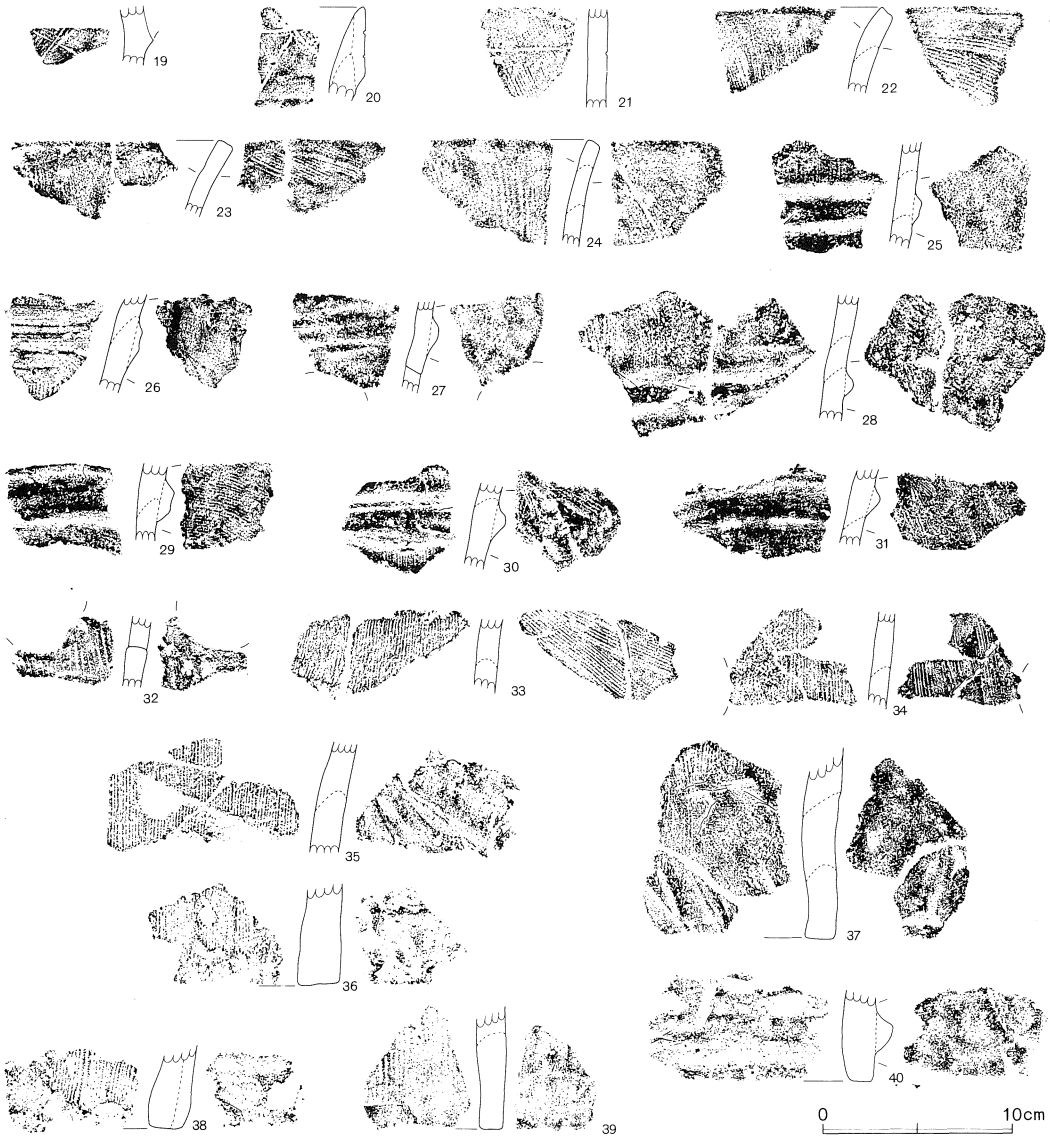
17



18

0 10cm

第276図 円筒埴輪・朝顔形埴輪



第277図 埴輪拓影図

れ、ややつぶれた円形を呈する。突帯は低い断面M字形を呈し、部分的に三角形となる。口縁部内面には篋記号がみられる。外面調整は縦刷毛目を施し、刷毛目は2 cmあたり12~13本である。内面調整は上半部は斜め刷毛目、下半部は縦方向の指撫でを施し、突帯内面には指頭圧痕を残す。底部調整はみられない。色調は橙色を呈し、胎土は多量の砂粒を含む。焼成はやや不良である。

この他に、ある程度器形の特徴が判明する13~17についても各段構成・法量・内外面調整などの特徴は、12に概ね一致している。ただし、13については底径と胴径の差の少ないズン胴形の器形から形象埴輪の台部になる可能性も十分考えられる。

次に、破片資料も含めた胎土・焼成・色調・調整などの特徴についてみることにする。胎土は、

白色粒子、赤色粒子、角閃石、雲母、石英、片岩等の砂粒を多量に混入する。焼成は、全体に柔らかい焼き上がりが多い。26・35・36・38は他に比べ硬質な焼き上りを示している。色調は、淡褐色から暗褐色までの幅がみられるが主体は橙色によって占められている。外面調整は、一次調整のみの縦刷毛目調整で、刷毛工具は2cm単位で12~14本である。内面調整は、口縁部内面から上半部にかけて斜め、または縦位の刷毛目調整、下半部は縦位の指撫でを施すものが多い。口縁部は内外面に横撫でが施される。底部調整は、底部外面に板叩きを施した37の1点だけが認められ、客体的な存在と考えられる。口縁部は緩やかに外反して開き、端部を浅く窪ませるものや面取りを施すものみられる。突帯は低M字形、低台形、三角形などばらつきがみられるが、全体に幅の狭い低いものである。透孔は、直径5cm前後の円形透孔に統一されている。

(4) 朝顔形埴輪

18は朝顔形埴輪の頸部から肩部にかけての破片である。現存高18.7cm、胴部復元径14.7cmを測る。胎土は多量の砂粒を含み、にぶい橙色を呈する。南側周溝から出土している。

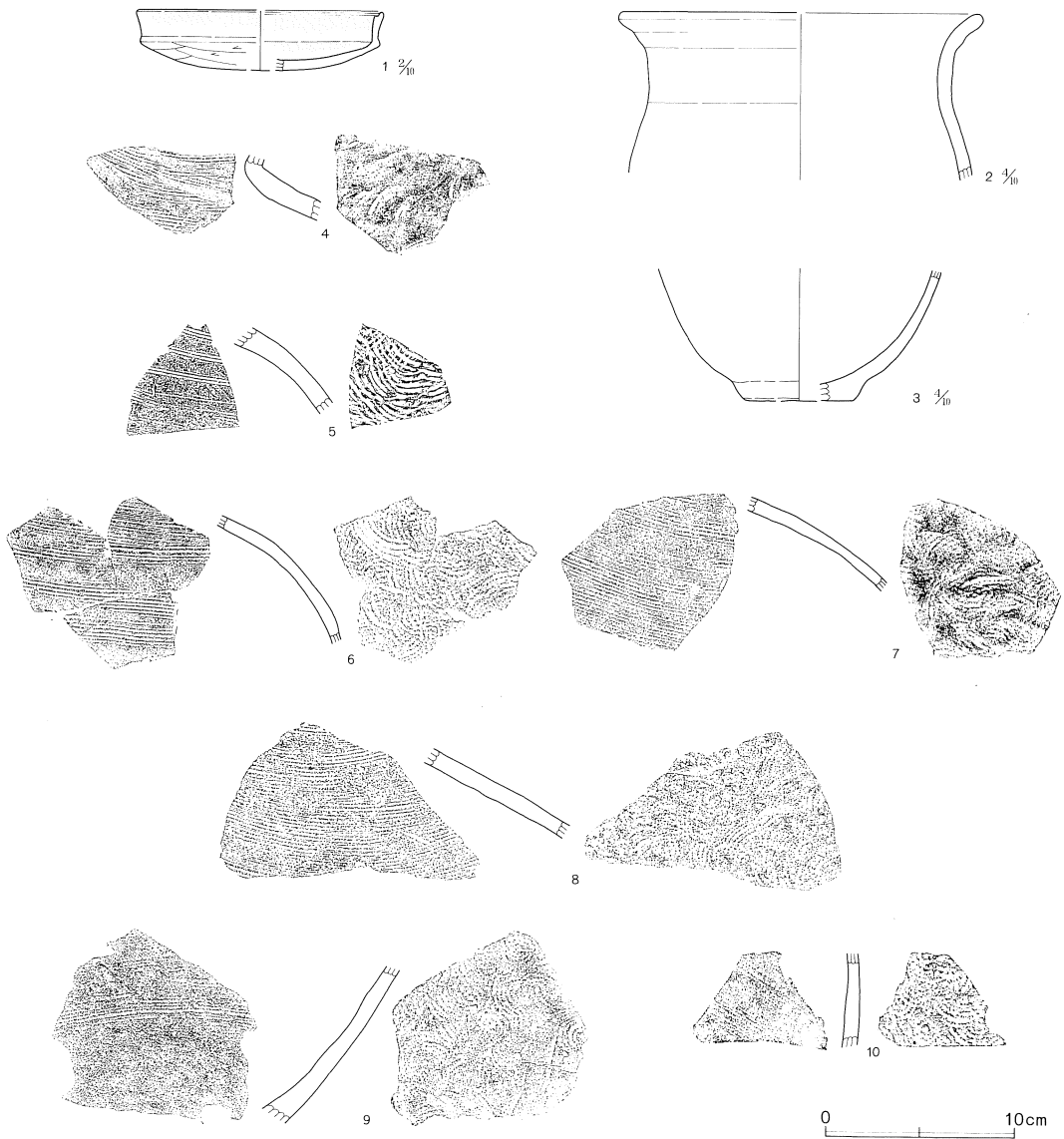
口縁部の形状は明確でないが、肩部の丸みは弱く、頸部の括れは小さい。突帯は低い断面M字形を呈する。胴部には径約5cmの円形の透孔を有する。外面は縦刷毛目を施す。刷毛目は2cmあたり7~8本の目の粗い工具を用いている。内面は縦方向の指撫でを施し、突帯部分の内面には指頭圧痕が残る。朝顔形埴輪の全体に占める割合は低いものと考えられる。

ST I 出土遺物 (第278図)

1はいわゆる「比企型」坏の破片で、復元口径13.0cm、器高3.2cmを測る。口縁部は直立し、端部でわずかに外反し、口唇部内面に浅い沈線を巡らし段を作り出す。体部外面は篋削りを施す。口縁部外面及び内面は赤彩される。胎土は精選されている。南東コーナー部から出土している。

2・3は土師器甕の破片である。2は復元口径18.8cmを測り、口縁部は緩やかに外反して開く。胎土は赤色粒子・白色針状物・粗砂粒を含む。色調は明黄褐色を呈する。南東コーナー部出土。3は底部の突出する長胴甕と考えられ、内外面とも丁寧に撫でを施す。胎土は長石・白色針状物質・粗砂粒を含む。色調は褐色を呈する。

4~10は須恵器甕の破片である。4・6~9は調整、胎土などの特徴から同一個体と考えられるものである。4は頸部の破片で、外面にはカキ目を粗く施し、内面は当て具痕を撫で消している。6~9は外面にカキ目を施し、内面に同心円文の当て具痕を残すもので、胎土中に細砂粒を多量に含み、少量の白色針状物を混入する南比企産の須恵器である。これらは南側周溝の覆土中から出土していることから、前方部における何らかの土器供献行為を示唆するものである。5は、甕ないし瓶類の肩部の破片で、外面には平行叩き目の後、等間隔にカキ目を施し、内面には同心円文の当て具痕を残す。他に比べ焼きが堅く、色調は暗灰褐色を呈し、胎土には白色針状物の混入はみられない。10は外面に目の細かい平行叩き目を施し、内面には同心円文の当て具痕が残る。色調は灰褐色を呈し、焼成は良好で、胎土は多量の細砂粒を含み白色針状物の混入がみられる。



第278図 ST 1 出土遺物

d 小 結

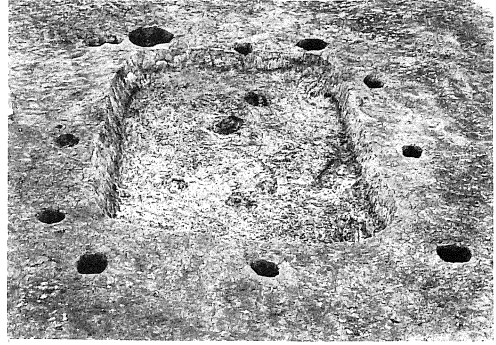
今回の調査によって人物埴輪を中心とする形象埴輪群が検出され、小規模前方後円墳における埴輪祭式の一端を提示することができた。特に、忠実に杵を表現した正装男子全身立像や類例の少ない入れ墨をした盾持人の出土は注目され、部分的な調査ではあったが予想以上の成果をあげることができたと言えよう。

調査に制約があり、墳形や墳丘規模、埋葬施設などその全容は明確にし得なかったが、出土した円筒埴輪の特徴から6世紀後半の中でも古い段階に位置づけることができる。今後は、周辺に位置する三福寺古墳群や苦林古墳群との関連性の究明が大きな課題である。 (大谷 徹)

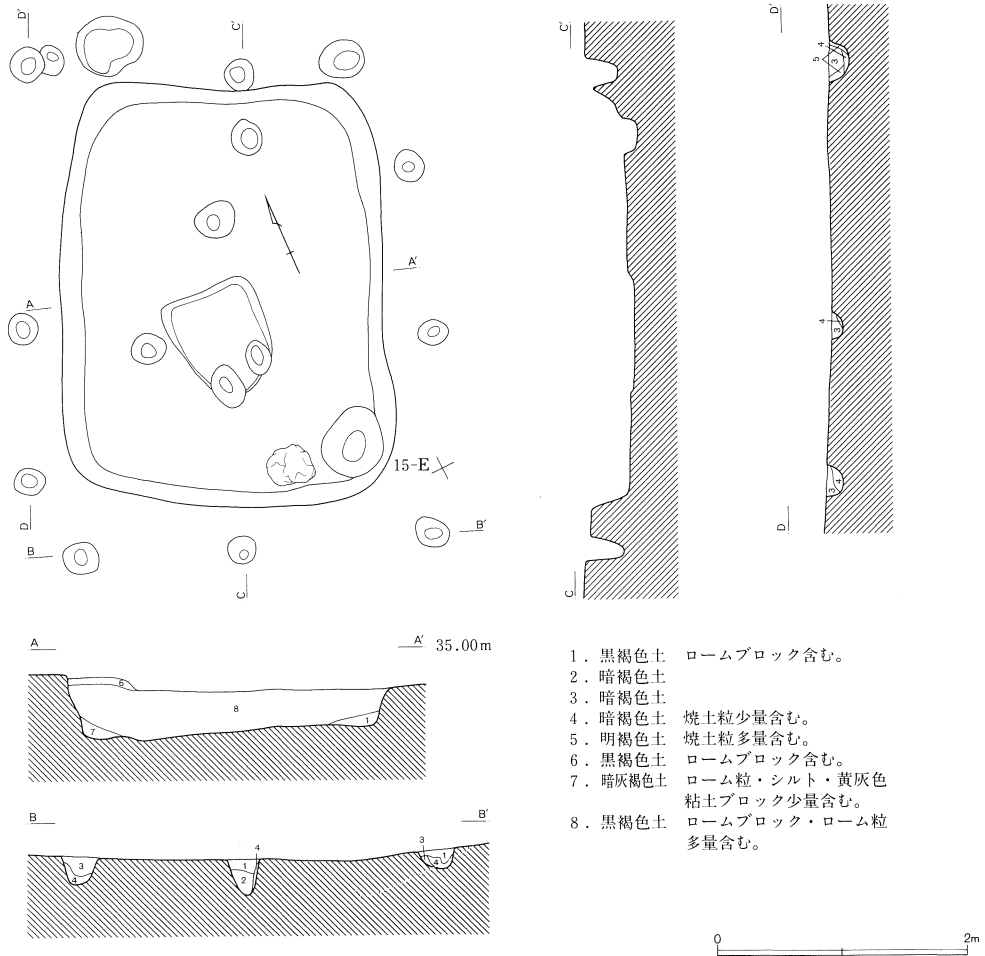
(9) その他の遺構

S X 1 (第279図)

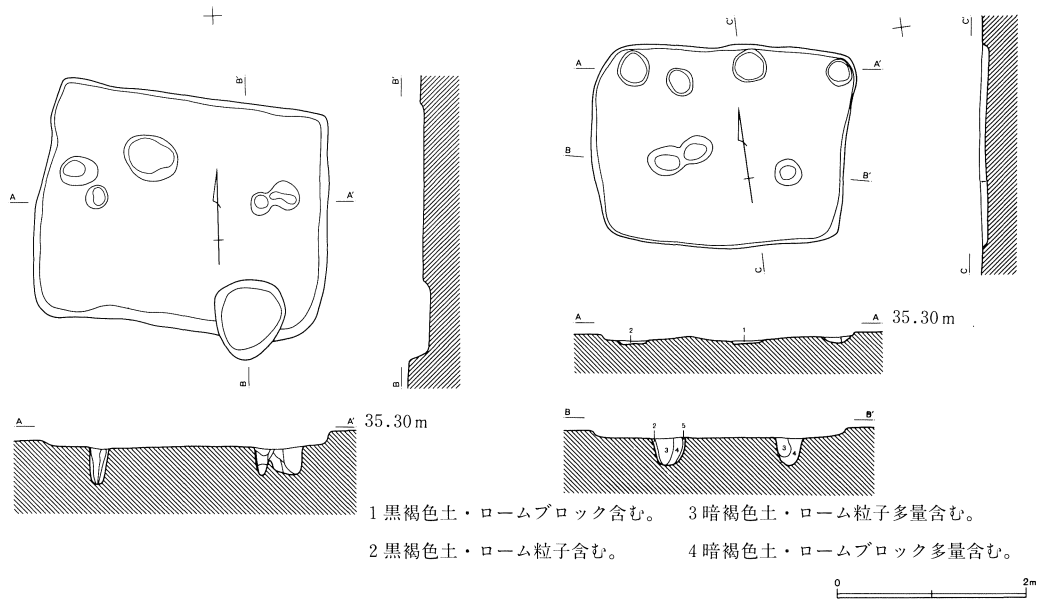
14・15-E Grid に位置する。平面形態は3.3m×2.5mの長方形を呈し、確認面から床面までの深さは約40cmを測る。床面は凹凸が顕著で、竪穴内に6基、外側に12基の Pit が存在する。規模は直径20~30cm、深さは15~30cmである。大形2基については後出の可能性が高い。床面はやや粘性があり、不整形の土壌内からも灰白色の粘土ブロックが検出された。また、南壁際には直径35cm程の火を受けた礫が出土している。



S X 1



第279図 S X 1



第280図 SX 2 (左)・3 (右)

S X 2 (第258図)

18-E Grid に位置する。平面形態は 3 m × 2.2 m の長方形を呈し、確認面から床面までの深さは 20 cm である。覆土は黒褐色で、ロームブロック、炭化物、焼土粒子などが含まれる。床面は平坦で、北側の壁際を中心に 4 基の Pit を有する。中央の大形の Pit は後出のものである。炉や遺物などについては検出されなかった。

S X 3 (第258図)

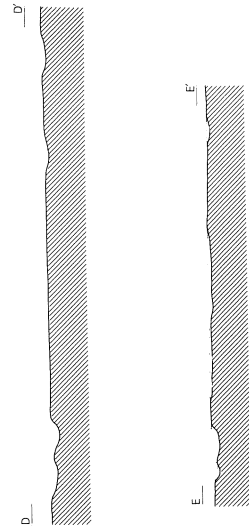
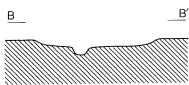
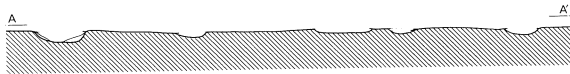
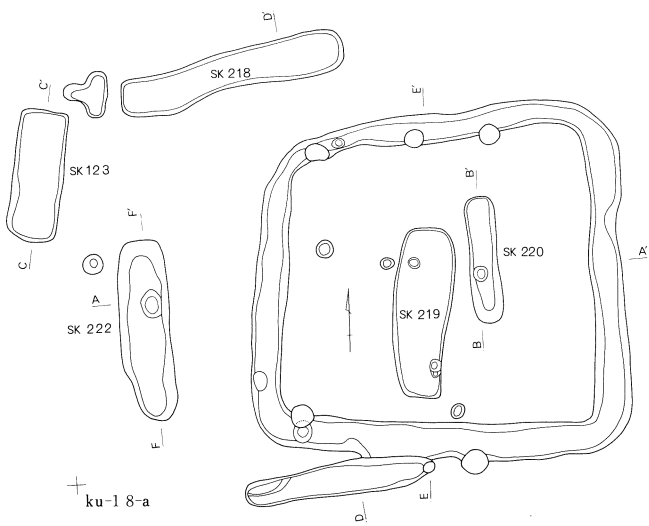
18-E・F Grid に位置する。S J 16 の南辺を切り、構築される。平面形態は 3 m × 2 m の長方形を呈し、確認面からの深さは約 20 cm と S X 2 と同規模である。床面はやや凹凸が目立ち、焼土ブロックが部分的に残る。Pit は 4 基検出され、直径約 30 cm、深さ 25 cm を測る。覆土は黒褐色で、ロームブロックが含まれる。遺物等は検出されなかった。

S X 4 (第259図)

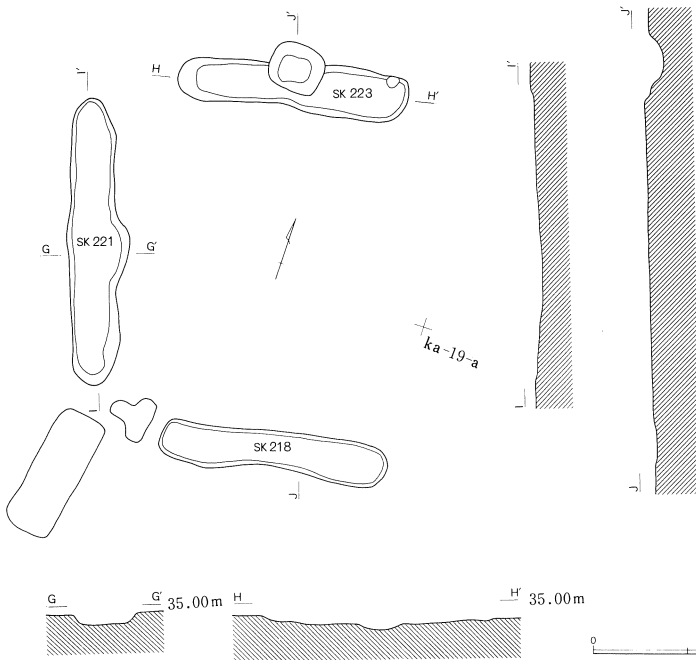
7-S Grid 他に位置する。東西約 8 m、南北 7.6 m、幅 1.2 m、深さ 30 cm の長方形に巡る溝である。周辺の土壌との先後関係は明瞭である。溝内には 8 基の Pit が検出されたが、2 基を除いて S X 4 には伴わない。覆土は黒褐色～暗褐色で、ローム粒子、灰色粘土ブロックなどが含まれる。本遺跡の北側に位置する稲荷前遺跡の台地北側縁辺では多くの方形周溝墓が検出されている為、形状などから本遺構もその可能性を残しているが、時期を決定しうる材料を欠くため、除外とした。



S X 4



- 1 黒褐色土 ローム粒含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロック含む。



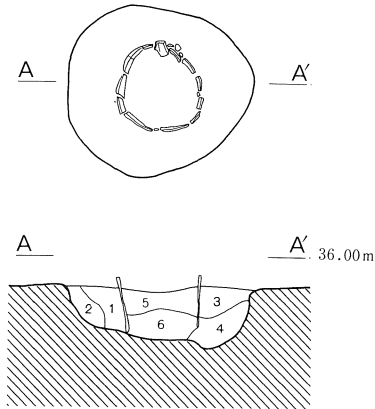
S X 5 (第259図)

7-RGrid に位置する。S K 218・221・223 によって組み合わされる場合を想定した。S X 4 と同様方形周溝墓の可能性を残す。各土壌は長軸 5～6 m、短軸1.3m前後、深さは30cm前後の規模を有する。覆土は黒褐色で、ロームブロックが少量含まれる。遺物はS X 4 と同様出土していない。

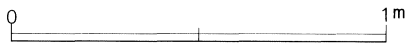
第281図 S X 4 (上)・5 (下)

埋設土器（第260・261図）

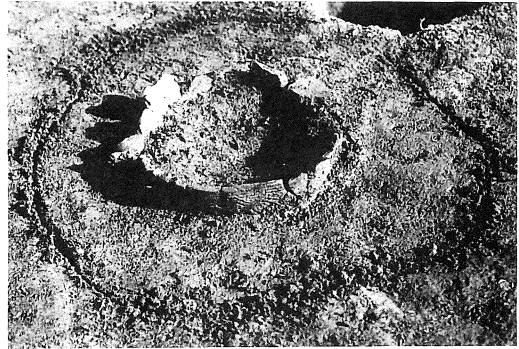
46-VGrid に位置する、焼土を含む直径45cm程の円形の掘形内に検出された。覆土は暗褐色土で、掘形内にはロームブロック、土器内にはローム粒子、焼土粒子が含まれる。1は関山Ⅱ式注口土器の上半部で、深鉢形である。口唇部には角状の突起を有する。文様帯は組紐を地文として口縁部下に副狭の文様帯を設定する。鋸歯状文を基調として余白に「V」字状文を加え、さらに注口下に変化を求めているようだが判然としない。胎土には砂粒、繊維質含む。風化目立つ。（黒坂禎二）



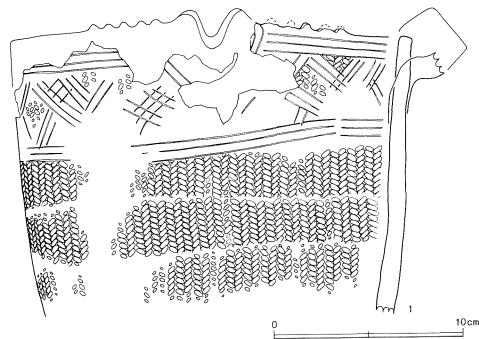
- 1. 明褐色土 ローム粒子含む
- 2. 暗褐色土 粘質。
- 3. 暗黄褐色土 ブロック粒子・ローム粒含む。
- 4. 暗褐色土
- 5. 暗褐色土 焼土粒子少量含む。
- 6. 暗黄褐色土 ローム粒子含む。



第282図 埋設土器



埋設土器



第283図 出土遺物



調査風景



調査風景

(10) Grid

塚の越遺跡の Grid からは、集落に伴う土器群を中心に200点余りの遺物が出土している。特に、A区の東側谷部分からは破片にして300点に及ぶ量の土師器を中心とした土器群（第262～264図）が出土している。遺物の中心は住居群の大半を占める古墳時代後期の土器群で、完形品も比較的多く含まれる。出土範囲は全体図に示したおよそ南25m、東西20mで、谷の低い部分に集中する傾向が認められる。年代的に後出の土器群については集中区より外れている。出土状況は投棄されたものとみられ、意識的に正位置に置かれたような痕跡は認められなかった。土器の堆積する幅は約15cm余りで、中心部程その密度は濃い。土器は比較的残存状態の良い場所にあったにもかかわらず、遺存状態は良好とは言い難い。赤彩されているものは多いが、住居跡出土のものに比べると赤彩が落ちているものが大半を占める。遺物の中心を成すものは土師器壺と壺である。壺については完形品が比較的多いが、壺は破片が多く、しかも口縁部と底部周辺が大部分を占めている。今回の調査で集落内より出土した土師器で壺の次に多いのは甕であるにもかかわらず、この遺物集中区では壺が二番目に多く、甕の占める割合は以外に少ない。このことは明らかに住居内における遺物の廃棄の組み合わせとは異なっている。ここで想定されるのは祭祠等の儀式の場である。他に祭祠を裏付ける遺物は検出されなかったため、根拠としては薄いですが、一つの可能性として指摘しておきたい。遺物の集中する地点の覆土は黒褐色～暗褐色で、底に灰白色の粘土ブロックを含むことから、往時は湿地あるいはある程度水で覆われていた可能性が高い。遺構や木製品等は検出されなかった。

谷地形内出土遺物（第284～286図）

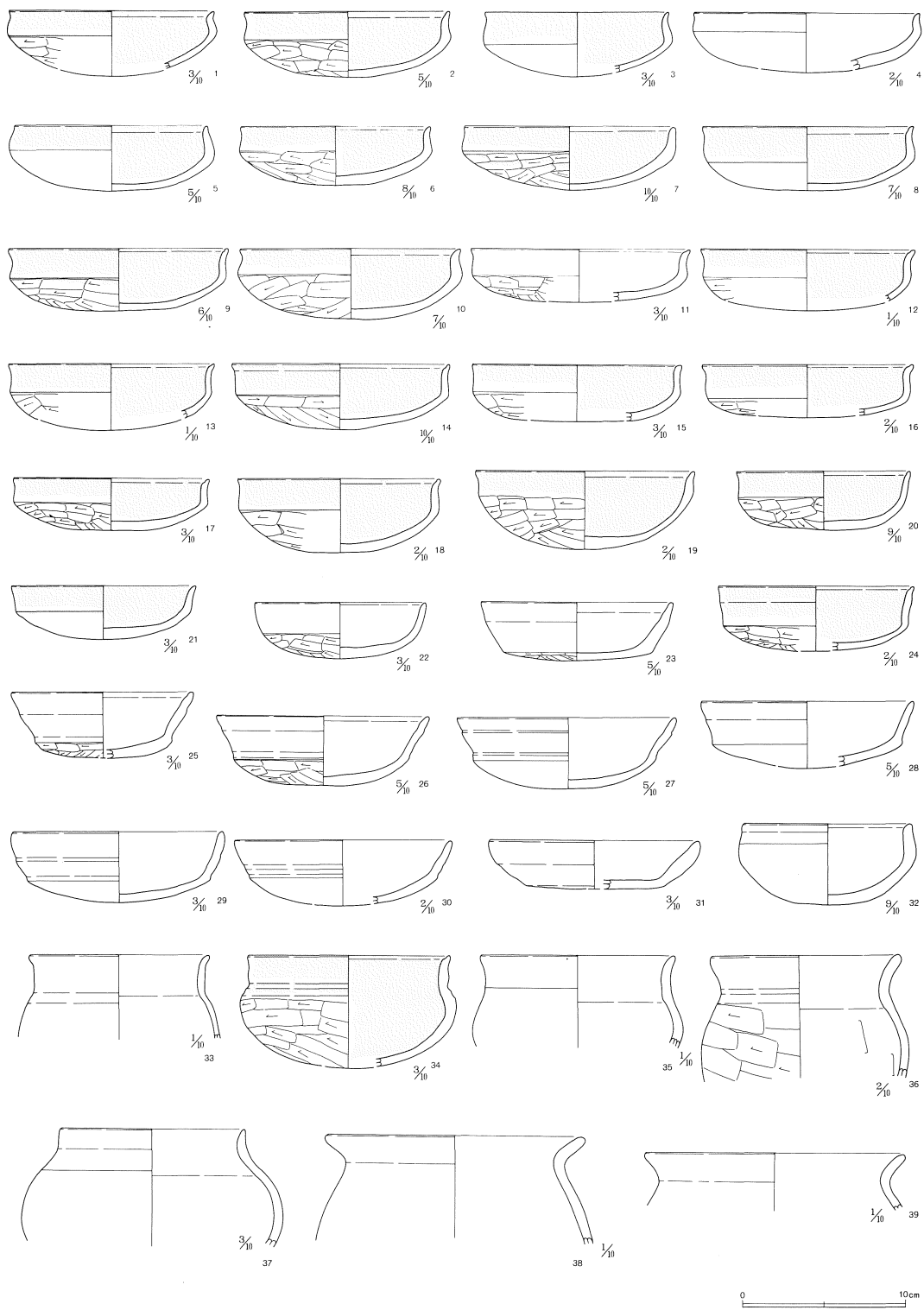
1～30は土師器壺で、約半数は器面が傷んでおり、調整痕は確認できない。また、図中に示したように大半の土器には、内面及び口縁部にはナデの後赤彩が施される。しかし、住居内出土土器に比べると、全体的に剥がれている部分が多くみられる。体部～底部にかけてはヘラケズリが施される。口縁部は内湾するもの（1～6・8）、直立するもの（7・9～18）外反あるいは外傾するもの（19～30）の3種類に分類することができる。口唇部は基本的に大きく外反するものが多く、内側には浅い沈線が入る。胎土には砂粒、白色粒子、黒色粒子、小礫などが含まれる。色調は赤褐色



谷地形内遺物出土状況



谷地形内遺物出土状況

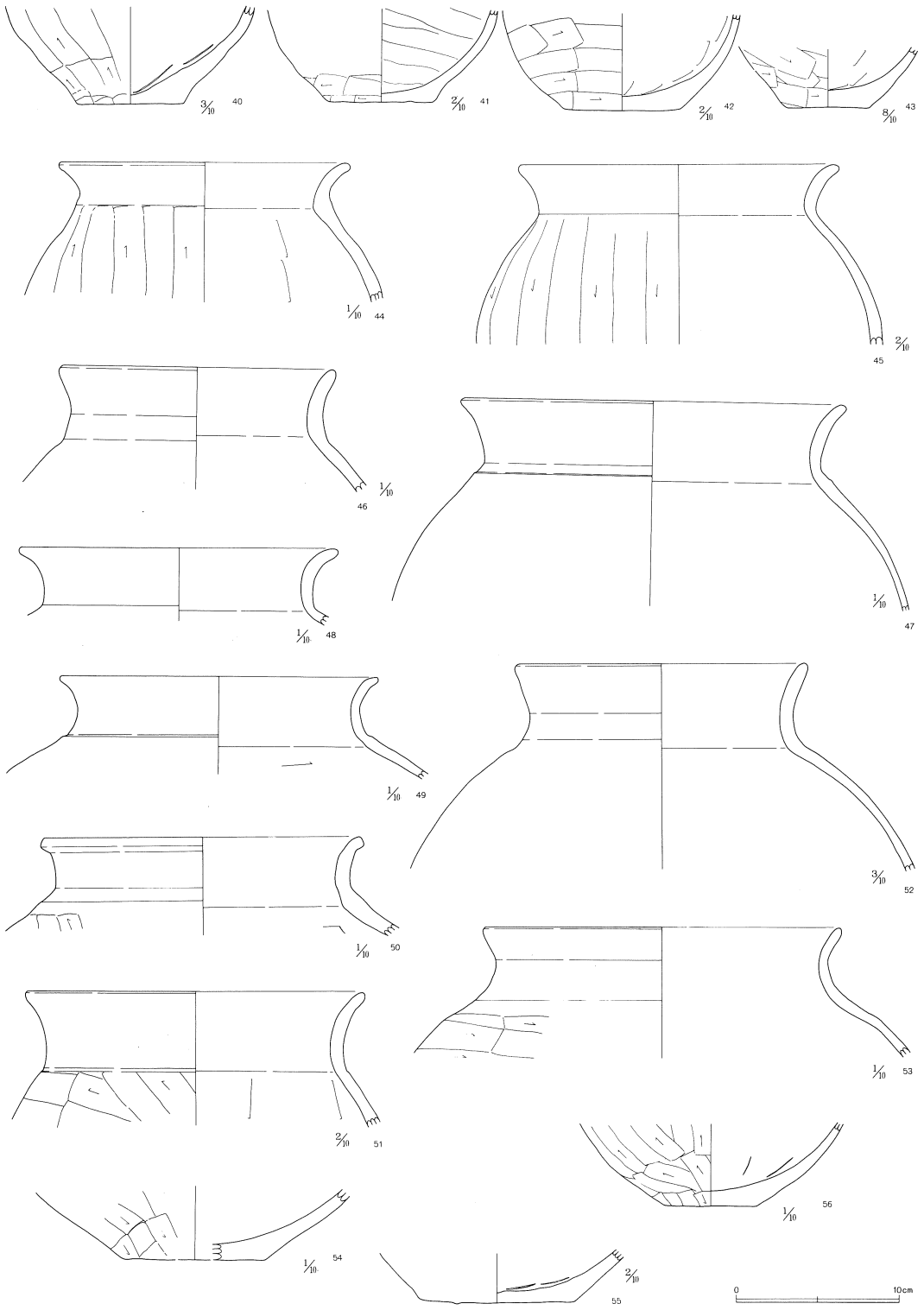


第284图 谷地形内出土遺物(1)

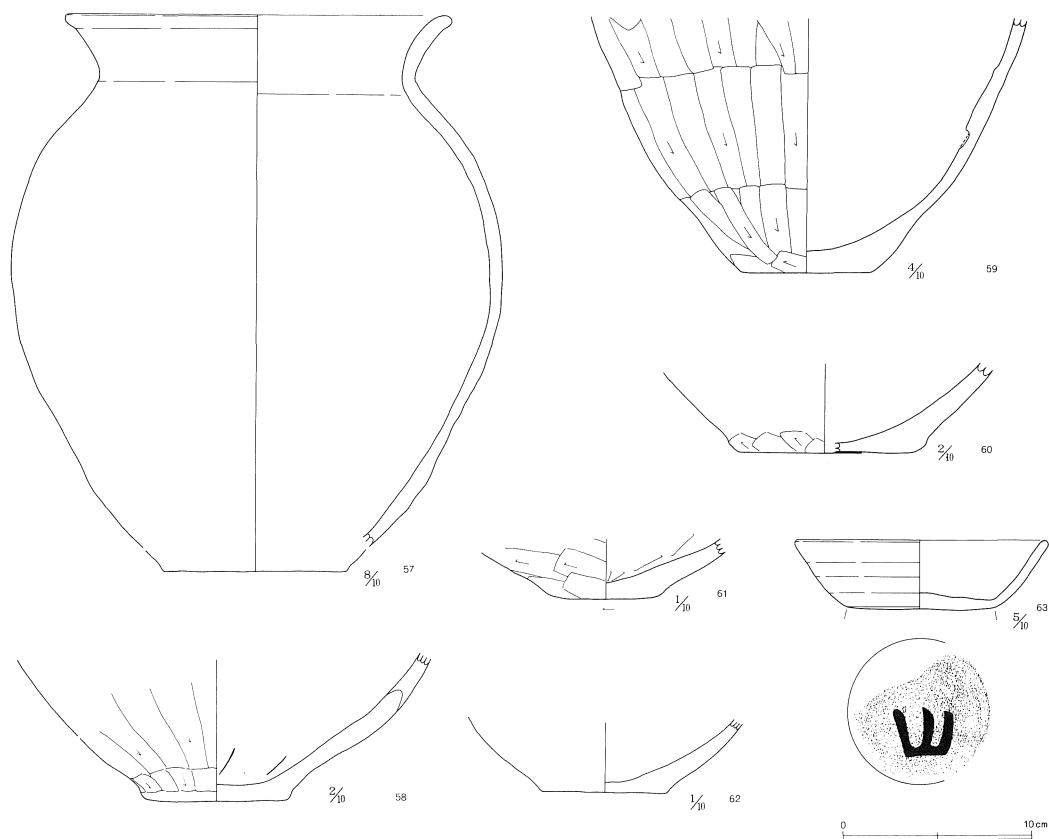
～淡赤褐色、淡橙褐色～淡褐色。口径と器高は以下に示すとおりである。1は12.5cm、4cm、2は12.1cm、4cm、3は11.3cm、4cm、4は14cm、3.6cm、5は11.8cm、4cm、6は11.6cm、3.6cm、7は12.8cm、3.9cm、8は13cm、3.8cm、9は13.4cm、3.8cm、10は13.4cm、4.4cm、11は13.3cm、3.3cm、12は13.1cm、3.8cm、13は12.5cm、4cm、14は13.2cm、3.9cm、15は12.3cm、3.3cm、16は13cm、3.2cm、17は12cm、3.2cm、18は13.2cm、3.6cm、19は13.3cm、4.8cm、20は10.7cm、3.6cm、21は11.2cm、3.2cm、22は10.5cm、3.4cm、23は11.8cm、3.6cm、24は12cm、4cm、25は11.1cm、4cm、26は13cm、4.2cm、27は13.3cm、4.3cm、28は13.2cm、4cm、29は13cm、4.3cm、30は13.2cm、4cm。(いずれも推定値を含む)31はかわらけの破片。口径は12.8cm、器高は3cm。胎土に細かい砂粒、雲母を含む。色調は淡茶褐色。32～35は土師器壺。32の口縁部は内湾気味、口唇部は大きく外反する。他は直立気味で、次第に外反する。内外面とも横ナデ、体部～底部はヘラケズリされる。32の口径は10.4cm、器高は4.9cm、33は口径11cm、34は口径12.2cm、器高は7cm、35は口径11.8cm。胎土に砂粒、白色粒子、小礫を含む。色調は淡赤褐色～淡橙褐色。33は小形甕の可能性がある。36は土師器小形甕の胴部上半。口縁部は横ナデ、胴部は斜方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデが施される。口径は11.7cm。胎土に粗い砂粒を含む。色調は淡橙褐色。37は土師器小形甕の胴部上半。口縁部は端部が薄く、短く外反し、胴部は大きく張る。口径は11.3cm。胎土に砂粒、小礫を含む。色調は淡橙褐色。38・39・57・59は土師器甕の破片。口縁部は横ナデ。胴部は縦方向のヘラケズリが施される。57は口縁部から胴部まで横方向のナデが施される。59は内面の輪積痕が明瞭に残る。口径は38は15.7cm、39は16cm、57は20.6cm。胎土には砂粒、小礫を含む。色調は淡橙褐色。40～43は土師器甕または小形甕の底部周辺の破片。いずれも縦または横ヘラケズリ、内面は横ヘラナデが施される。41の底部は木葉痕を残し、他はヘラケズリが施される。胎土には粗い砂粒、小礫を含む。色調は淡赤褐色～淡褐色。44～53は土師器壺の口縁部～胴部にかけての破片。口縁部は横ナデ、胴部は縦及び横方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデが施される。口径は44は17.8cm、45は19.8cm、46は16.8cm、47は19.4cm、48は19.4cm、49は19.6cm、50は20.8cm、51は23.7cm、52は17.8cm、53は21.8cmである。(いずれも推定値を含む)胎土には粗い砂粒、白色粒子、小礫を含む。色調は淡橙褐色～淡褐色。54～56、58、60～62は土師器壺の底部周辺の破片。外面は縦及び斜め方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデが施される。55・62の底部には木葉痕が残る。胎土には粗い砂粒、小礫が多く含まれる。色調は淡赤褐色～淡橙褐色。63は須恵器坏で、口縁部～体部はロクロナデ、底部は全面が回転ヘラケズリされる。底部には「山」の墨書。口径は13.6cm、器高は3.6cm。胎土には砂粒、白色針状物を含む。色調は淡青灰色。

Grid 出土遺物(1) (第287図)

1～7は土師器坏である。いずれも内面及び口縁部は横または斜方向のナデ、体部～底部はヘラケズリが施される。2・5・7は焼成は良好で、2・7は端部が鋭角に面取りされる。他は風化が目立つ。胎土には砂粒(とりわけ2・7は細かい)、白色粒子、黒色粒子が含まれる。色調は2・7が淡赤褐色、他は淡赤褐色～淡橙褐色。口径と器高は1は12.7cm、3.5cm、2は11.3cm、3.9cm、3は11.3cm、3cm、4は11.4cm、3.4cm、5は12.4cm、4.1cm、6は11.8cm、4.4cm、7は15.6cm、3.4cmを測る。8・9は須恵器高台付坏の体部～底部にかけての破片である。体部はロクロナデ、



第285図 谷地形内出土遺物(2)

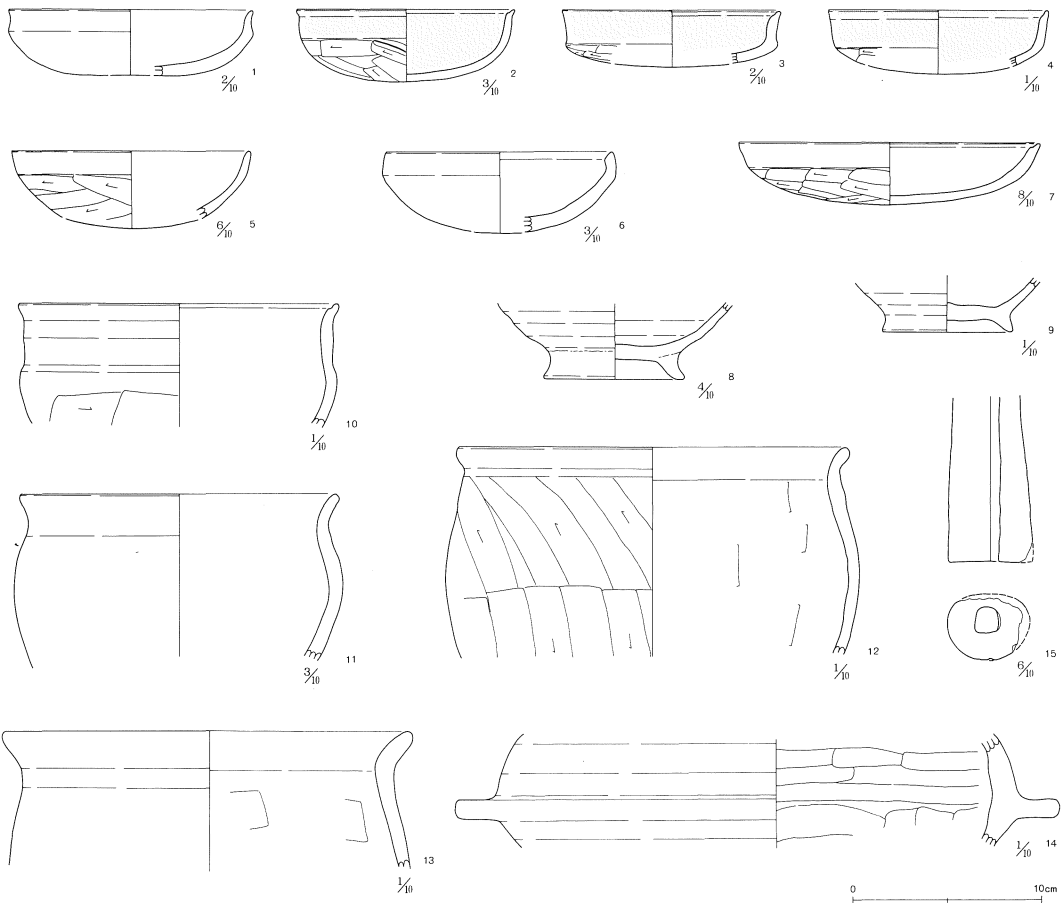


第286図 谷地形内出土遺物(3)

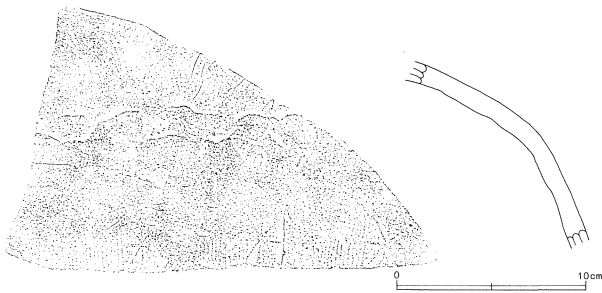
高台部は取付後周辺を横ナデする。胎土には砂粒、白色針状物を含む。色調は青灰色～淡灰色。10は土師器鉢の口縁部～体部にかけての破片である。口縁部は直立気味に立ち上がって端部は大きく外反する。体部は僅かに張る。口縁部は横ナデ、体部は粗いヘラケズリが施される。胎土には砂粒を含む。色調は淡橙褐色。口径は16.6cmを測る。11は土師器の小形甕の口縁部～胴部の破片である。器面の風化が著しい。胎土には粗い砂粒を含む。口径は16.6cmを測る。12・13は土師器甕の口縁部～胴部にかけての破片である。12は口縁部が短く外反し、胴部に最大径をもつ。口縁部は横ナデ、胴部は斜方向～縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデが施される。13はやや器面の風化が進んでいるが、口縁部は横ナデ、胴部内面は横方向のヘラナデが施される。胎土には粗い砂粒、黒色粒子、小礫を含む。色調は12は淡赤褐色、13は橙褐色。口径は12は20.3cm、13は21.4cmを測る。14は羽釜の鏝部分の破片である。鏝は胴部から約2cmの広がりをもち、胴部との接合する付近は指によるナデの痕跡が明瞭である。胴部内面は細かい横方向のヘラナデが施される。胎土には粗い砂粒、小礫を含む。色調は淡橙褐色～灰褐色。鏝の直径は31cmを測る。

Grid 出土遺物(2) (第288図)

1はSD-9付近より出土した常滑産大甕の肩部の破片である。頸部に近い部分及び内面は横ナデ、胴部にかかる部分は3cm四方の「米」印と平行の叩きの組み合わせが施される。胎土に砂粒、白色粒子が含まれる。色調は濃茶褐色～淡茶褐色。



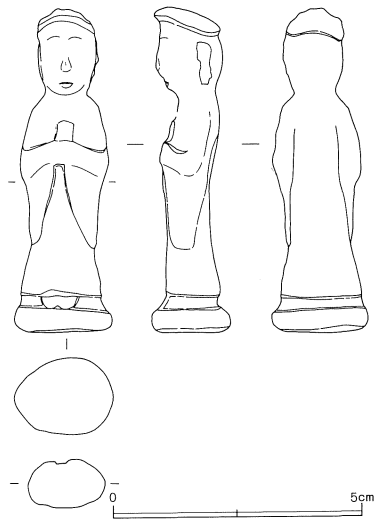
第287図 Grid 出土遺物(1)



第288図 Grid 出土遺物(2)

Grid 出土遺物(3)青銅製神像 (第289図)

全長6.4cm、重量55g。ほぼ完存する鋳銅製小立像である。表土除去作業中に偶然発見されたもので、出土位置や遺構に帰属するか否かについては全く不明である。表面は風化し剥落部位が目立つ。表面の残存部分を観察すると黒色を呈し、或いは漆が塗布されていた可能性もあろう。細部の表現にシャープさが見られないのは風化の影響もあろうが製作時の鋳型に規

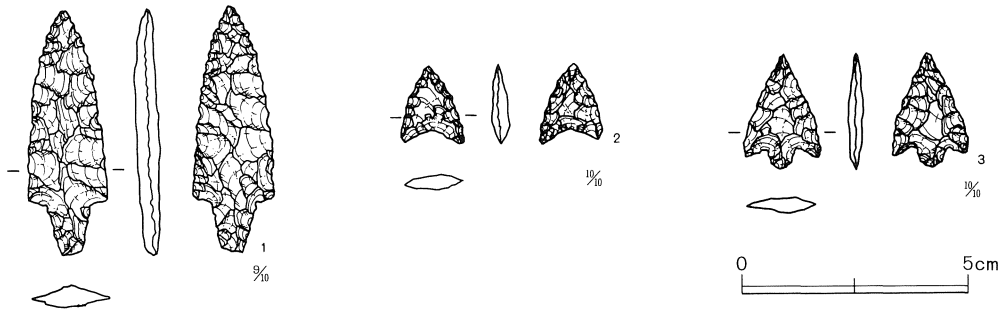


第289図 Grid 出土遺物(3)

定されたものと推定される。

頭部には被りものを戴く。おそらく冠と推定されるが、巾子は当初より存在しなかったものと考えられる。顔には眉、鼻、口が表現される。眉は見方によっては目とも考えられるが、鼻との位置関係から一応眉としておきたい。眉下部はやや凹み、この部分に目が表現されたものであろうが遺存状態も悪く現状では確認できない。鼻は緩やかな隆起で表現される。中央部が剥落し、元来もう少し高かったものと推定される。口は僅かな凹みで表わされる。また、頭側部には長さ0.75cm、幅0.3cm程の縦長の剥落部が左右2ヶ所認められ、耳が欠落したものと推定される（図上では剥落部の範囲を表わした）。両腕は胸部正面で合わされ、笏と推定される板状のものを抱えもっている。また両脇には長く垂れた袖が表現され、袍を着用した様子が判る。台座と像は一条の沈線で区画されるが、正面中央のみ沈線が途切れる。靴を表現したものと考えてよかろう。台座は長径2.0cm、短径1.5cmの楕円形を呈するが、厚さも0.5cmほどで像を据えてもバランスが悪く安定性に欠ける。何れにせよ、本像は笏の表現からも仏像ではなく、朝廷貴人を模した、いわゆる束帯形の男神立像と考えられる。

（富田和夫）



第290図 Grid 出土遺物(4)

Grid出土遺物(4) (第290図)

1は有舌尖頭器。表裏にわたって全面平坦剥離で覆われており、素材剥片の状態を伺い知ることはできない。両側縁は鋸歯状を呈するが、基部側より先端側の方がより顕著な鋸歯縁となる。舌部は僅かに欠損する。現存長4.3cm、幅1.4、厚さ0.5cmを測る。チャート製。縄文時代草創期の有舌尖頭器であろう。2は石鏃。小形の凹基無茎石鏃でほぼ全面が平坦剥離で覆われるが、表面中央に素材剥片剥離以前の剥離面が、裏面中央に素材剥片の主要剥離面が残る。両側縁は緩い弧状を呈し、正三角形に近い形状となるが、脚部はバランスを欠く。長さ1.4、幅1.1、厚さ0.3cmを測る。チャート製。3は石鏃。凹基有茎石鏃でほぼ全面が平坦剥離で覆われるが、表面中央付近に素材剥片の剥離に先行する剥離面が、裏面中央付近に素材剥片の主要剥離面が残る。ほぼ左右対称の二等辺三角形に近い形状を呈するが、先端から2/3程のところに緩い屈曲を有する。長さ2.0、幅1.3、厚さ0.3cmを測る。チャート製。

（川口潤）

遺構新旧対照表

住居跡

新番号	主な重複遺構	旧番号	新番号	主な重複遺構	旧番号	新番号	主な重複遺構	旧番号	新番号	主な重複遺構	旧番号
1	S J 5	B-1	22	S B 4	B-22	43	S D 23	B-43	64	S J 65	B-64
2	無	B-2	23	S J 22	B-23	44	〃	B-44	65	S J 64	B-65
3	〃	B-3	24	S B 2	B-24	45	S D 16	B-45	66	S D 12	B-66
4	〃	B-4	25	S E 32	B-25	46	〃	B-46	67	S D 21	B-67
5	S J 1	B-5	26	S D 10	B-26	47	無	B-47	68	S J 69	B-68
6	S J 10	B-6	27	S E 5	B-27	48	〃	B-48	69	S J 68	B-69
7	S D 1	B-7	28	S J 29	B-28	49	S D 18	B-49	70	S D 16	B-70
8	〃	B-8	29	S J 28	B-29	50	S K 176	B-50	71	S D 13	B-71
9	S D 2	B-9	30	S K 102	B-30	51	S B 5	B-51	72	S J 60	B-60
10	S J 6	B-10	31	S K 45	B-31	52	S B 6	B-52	73	S K 163	A-1
11	S D 9 a	B-11	32	S K 88	B-32	53	S J 54	B-53	74	S K 172	A-2
12	S D 2	B-12	33	S J 18	B-33	54	S J 53	B-54	75	S D 3	A-3
13	無	B-13	34	S K 236	B-34	55	S K 233	B-55	76	S D 43	A-4
14	S D 2	B-14	35	S E 11	B-35	56	S D 3	B-56	77	S D 29	A-5
15	S J 20	B-15	36	S J 37	B-36	57	〃	B-57	78	無	A-6
16	S D 1	B-16	37	S J 36	B-37	58	無	B-58	79	〃	A-7
17	無	B-17	38	S D 11	B-38	59	〃	B-59	80	〃	A-8
18	S J 33	B-18	39	無	B-39	60	S J 72	B-60	81	S K 171	A-9
19	S J 20	B-19	40	S D 19	B-40	61	S K 104	B-61	82	S D 27	A-10
20	S J 15・19	B-20	41	S D 6	B-41	62	無	B-62			
21	S B 4	B-21	42	S K 74	B-42	63	S K 98	B-63			

掘立柱建物跡

新番号	主な重複遺構	旧番号
1	無	B-3
2	S E 31	B-4
3	S D 8	B-5
4	S D 9	B-6
5	〃	B-7
6	S B 8	B-8
7	無	B-9
8	S B 6	B-10
9	S J 43	B-11

井戸跡

新番号	主な重複遺構	旧番号
1	S J 57	B-21
2	無	B-22
3	〃	B-12
4	〃	B-4
5	S J 27	B-9
6	S E 5	B-23
7	S J 6・10	B-3
8	無	B-14
9	S J 1	B-S K 5
10	S D 3	B-24
11	S J 35	B-27
12	無	B-1

新番号	主な重複遺構	旧番号
13	S D 14	B-18
14	無	B-24
15	S J 35	B-11
16	無	B-5
17	S D 16	B-19
18	無	B-28
19	S D 16	B-16
20	S T 1	A-1
21	S D 42	A-10
22	S D 34	A-3
23	無	A-7
24	S D 34	A-2

新番号	主な重複遺構	旧番号
25	S K 246	A-4
26	S D 33	A-9
27	S K 245	A-8
28	無	B-10
29	〃	A-5
30	〃	B-8
31	S E 2	B-7
32	S J 25	B-6
33	S D 16	B-17
34	無	B-26
35	〃	B-25

溝跡

新番号	主な重複遺構	旧番号
1	S J 8	B-1
2	S D 1	B-2
3	S E 10	B-3
4	S D 5	—
5	S D 16	B-18
6	S J 41	—
7	S D 9	B-7
8	S J 28	B-8
9	S B 5	B-9
10	S J 26	B-10
11	S J 17	B-11

新番号	主な重複遺構	旧番号
12	S D 16	S J 63排水溝
13	S D 12	—
14	S D 16	B-14
15	S D 16	B-15
16	S D 14	B-16
17	S D 21	—
18	S J 70	—
19	S J 40	—
20	無	B-20
21	S D 16	B-21
22	S D 3	B-22

新番号	主な重複遺構	旧番号
23	S J 43	B-23
24	S D 3	B-24
25	S D 24	B-20
26	S D 3	B-4
27	S D 3	—
28	S J 77	—
29	S T 1	A-6
30	S T 1	A-11
31	S D 32	—
32	S D 3	A-1
33	S E 26	A-2

新番号	主な重複遺構	旧番号
34	S E 24	—
35	S D 34	—
36	S E 24	—
37	無	A-14
38	S K 236	A-13
39	無	A-12
40	〃	—
41	〃	—
42	S E 21	—
43	S D 3	A-1

Summary

This is a report of the excavation of the Tsukanokoshi site, which is situated about 40km northwest of Tokyo, Japan.

The excavation was performed from April 1, 1986 to March 31, 1987 by Saitama Archaeological Research Institute.

The Institute discovered many ruins from the middle Jomon period to the Middle Ages. The number of features in each period is as follows.

The middle Jomon period (C. 3,500-2,000B.C.)	Pit dwellings	2
The late Yayoi period (C. 200-300A.D.)	Pit dwellings	2
The late Kofun period (C. 500-710A.D.)	Pit dwellings over	43
The Nara-Heian period (C. 710-1192A.D.)	Pit dwellings	25
	Gutters	3
	Wells	2
Middle Ages (C. 1192-1573A.D.)	Gutters	40
	Wells	33

The above list shows that out of at least 82 pit dwellings over 43 belong to the late Kofun period.

8 pit dwellings of this period have drain ditches because there was a spring above there.

In Nara-Heian period, Sue ware was made in 'Hatoyama Kilms' in the north area of the Tsukanokoshi site.

A square area bounded by gutters in the Middle Ages was excavated at the north side of this site. From these gutters a large number of pottery made in Tokoname in Aichi Prefecture and even in China were unearthed.

So it is assumed that people in this area were trading with people in other places.

V 結 語

(1) 出土土器について

塚の越遺跡では住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土壇などからある程度年代の限定できる土器群が出土している。集落は、縄文中期、弥生後期、特に古墳地代後期～平安時代初期にかけて大きな広がりを見せ、周辺の遺跡群を含めた大規模集落が展開したことを窺わせている。特に古墳時代後期になると、周辺の古墳群の造営の活発化とともに集落も大きな広がりを見せている。特に7世紀前後の住居には、須恵器を伴っていることが多く、しかも大部分は在地産で賄われている。7世紀後半頃になると、湖西産などの東海産須恵器が搬入されていることが多く、周辺の集落でも出土量は比較的多い。在地産と搬入品の比率が時期によって相前後して出現するのは、通例であるが、東海産の生産供給体制が整う以前に一般集落への供給がなされていたことは興味深い事実である。中世では建物跡こそ検出されなかったが、方形や「コ」の字状に巡る溝で区画される部分や多数の井戸が検出され、それに伴って瀬戸産甕、常滑産片口鉢、同甕、かわらけ、土鍋、曲げ物などの日用品や板石塔婆が出土し、集落の繁栄ぶりとともに交易の広がりを窺わせる。ここでは集落内の大半を占める7世紀～8世紀の土器群を対象に比較的資料の揃っている住居跡及び谷地形内から出土した土器を中心に検討を行っていきたいと思う。

a 編年

第I期（6世紀第4四半期末～7世紀第1四半期）

本遺跡において集落の経営が開始される段階と考えられる。A区にはST1が存在し、周辺にはSJ77などの7世紀初頭の住居跡が近接して構築されている。ST1は出土遺物から6世紀中頃から後半の造営が考えられ、集落は古墳造営後、50年前後に出現するものとみられる。該期の代表的な住居には、SJ41・42・50・56・57・63・67・77という排水溝をもつ住居群とSJ7・21などのやや小形で、異形の竈や張り出しをもつ住居跡が該当するものと考えられる。該期における土器型式による年代差は排水溝をもつ住居とそれ以外の堅穴住居の各々でみられるが、土器群の形式的な流れは過渡期的な様相を示しており、比較的短いスパンの中で推移しているものと考えられる。強いて新旧を分類すると、古い段階はSJ21・50・69などに代表される6世紀代の型式や法量をもつもの、新しい段階はSJ22・77などにみられる法量の縮小化と形態の形骸化がみられるものになる。後者は、7世紀第2四半期にかかる可能性がある。土師器杯はいわゆる「比企型杯」で、内面から口縁部ないしは体部付近にかけて赤彩される。口唇部の屈曲、特に口唇部は著しい「S字」を呈し、内側には浅い沈線が巡る。体部から底部にかけてはやや丸みをもち、口径は13cm前後のものが主体を占め、一部12cm前後のものが含まれる。また、口縁部の形態は内湾するものに加えて、外傾または直立気味に立ち上がるタイプが増加する傾向が認められる。鉢はSJ21・50などにみられるように、「逆ハの字」状を呈し、体部の形状や大きさに相違がみられる。甕は長胴化が進み、口縁部に最大径をもつが、胴部は依然として張っており、古い様相をとどめている。甕は把手付きの

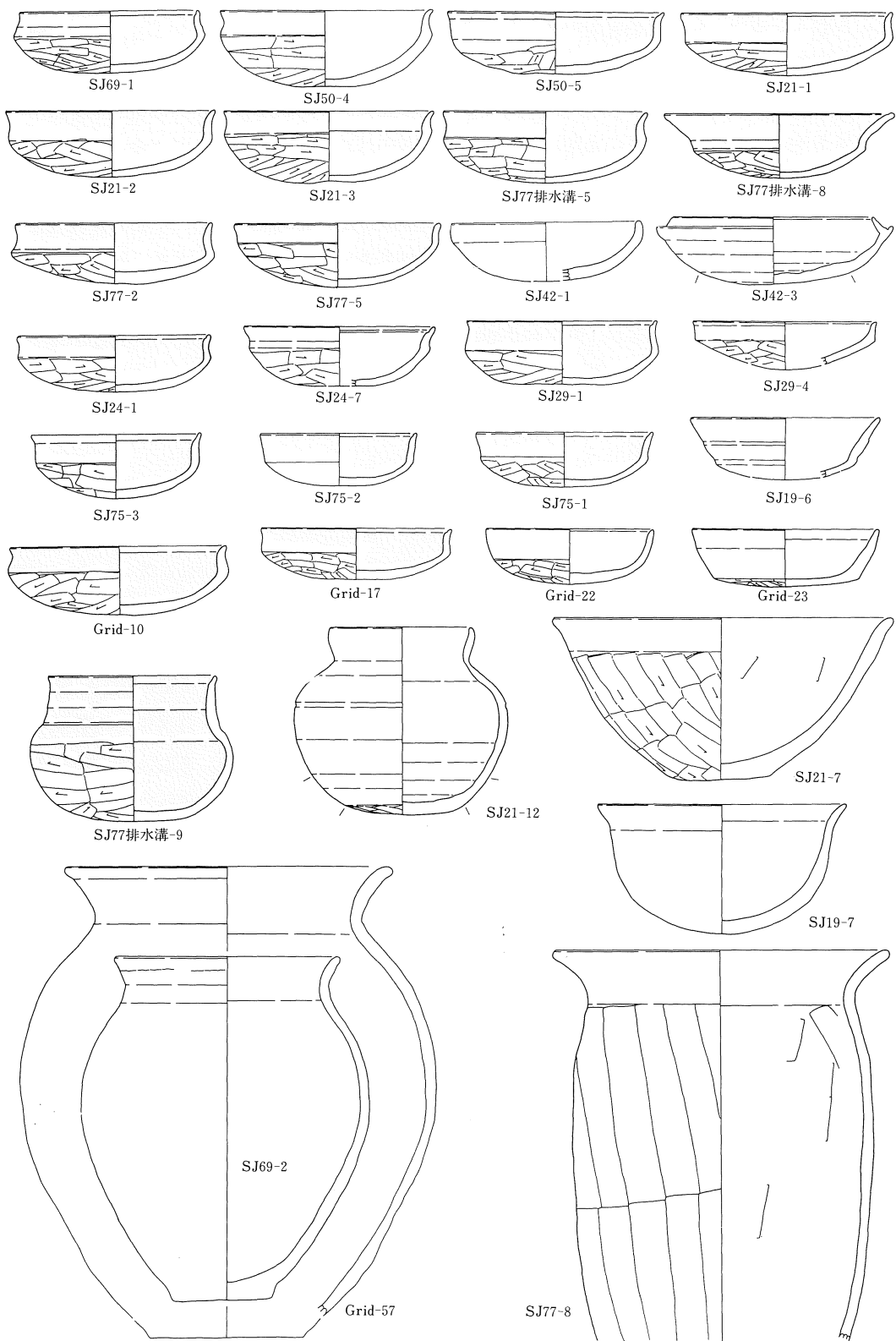
ものが残る一方で、口縁部の屈曲の緩いS J 7—9のようなタイプが登場してくる。壺は谷地形内で検出されたタイプに代表されるように胴部の張りが強い。須恵器は量的に少ないが、在地産の製品が比較的多く含まれる。坏はS J 42—1のように6世紀代の様相を止めている場合もあるが、蓋はS J 7—8・21—6のように天井部が厚く、手持ちのヘラケズリを施すタイプやS J 50例のように天井部にリング状の鈕を中心を外して取り付けするタイプに在地産の特徴を見いだすことができる。いずれも胎土に白色針状物を含む在地産（南比企窯跡群）と考えられる。小形壺は肩部に一条の浅い沈線が巡り、胴部下半は幅3cmにわたって手持ちのヘラケズリが施される。高坏は長脚二段透かしのタイプで、胎土や調整技法から搬入品の可能性が高い。須恵器は土師器に比べると相対的にやや古い様相を示しているが、多くが在地産で占められることを考慮すると年代的なギャップはある程度埋まるものと考えられる。

第Ⅱ期（7世紀第2四半期）

集落内における住居の数は、第Ⅰ期に比べほぼ同規模ないしはやや増加する形で推移するとみられる。該期の住居跡はS J 1・8・22・25・29・58・75などが該当すると考えられる。土師器坏は第Ⅰ期に比べて、主体は口縁部はやや短く、開き気味になり、「S字」の曲線も弱くなる。口縁部の形態は直立気味に立ち上がり、口唇部のみが屈曲するものが多く出現する。これは「口縁部の屈曲が退化したのではなく、その形態的な系譜は基本的には須恵器の坏蓋模倣坏にある」（水口1989）とみられ、「比企型坏」衰退後もある程度継続して生産されるのは、その系譜の出自が異なっていたためと思われる。口径も縮小化が図られ、12cm前後のものが多くなる。器高は4cm前後で、底部が平底状のものと丸底の半球状になるものとの区別が次第に明確になる。また、S J 29—4のような偏平な坏の存在も認められる。赤彩は第Ⅰ期同様、殆どの坏や小形壺にみられ、塗彩される箇所に変化はない。小形甕は第Ⅰ期S J 50—11に比べ縮小し、体部の調整はヘラケズリよりもナデが多用される傾向がある。甕はS J 50などでもみられるように、既に胴部上半が張るタイプが登場しており、この段階では胴部上半が張り、次第に細くなるタイプが主体を占める。甕は口縁部の屈曲がやや強くなり、小形の甕も増加する。

第Ⅲ期（7世紀第3四半期）

集落が衰退から廃絶へと進む段階である。S J 19・32・40・75などが該期の住居跡として考えられる。土師器坏は縮小化が進み、口径は10～11cmのものが多くなる。口縁部は器としての比率が第Ⅰ期に近く、第Ⅱ期より偏平さが減少している。形態は内湾するタイプがほぼ消滅し、直立または外傾するタイプが主流を占める。口唇部は第Ⅱ期に比べ、屈曲がやや緩やかになる。口縁部内側の沈線は継続して残るが、形態が類似していても沈線の巡らないものもある。また、この地域周辺でも、S J 19—5・6のような口縁部中央に段をもつ坏は第Ⅱ期頃より次第に出現する傾向にあるが、一般的に県北部に広い分布圏をもっている土器で、赤彩は施されない。鉢はS J 19—7のような小振りのタイプがみられるが、基本的には第Ⅰ期のS J 50などの系譜が同時に継続されているものと考えられる。甕は長胴化したままで、胴部の張りは次第に減少する。壺は胴部に最大径を有し、甕に比べ口縁部の屈曲は緩やかである。



第291図 I～III期の土器群

第Ⅳ期（8世紀第1四半期後半～第2四半期）

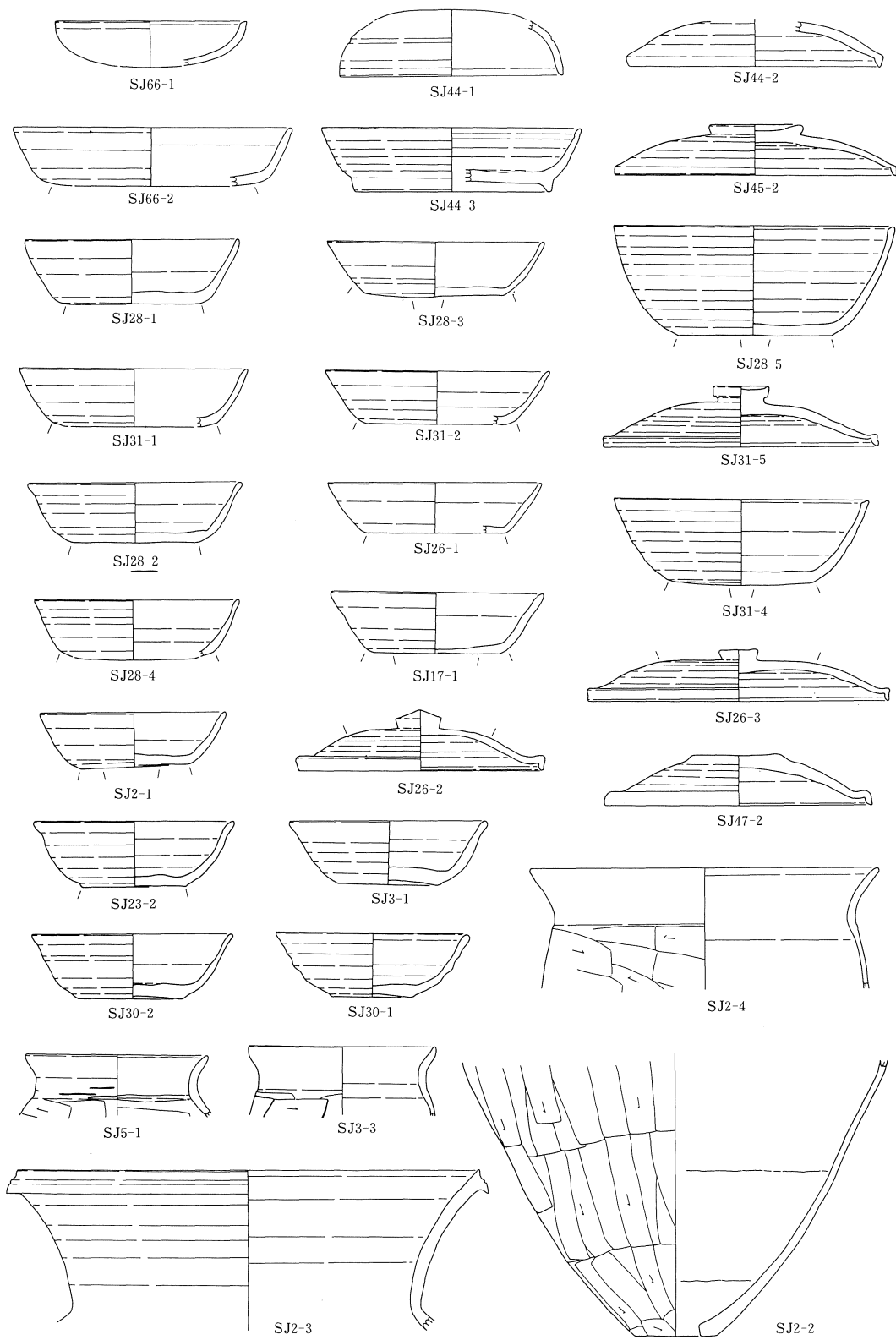
再び台地上に集落経営が開始される。住居北辺に竈を有するS J 44・45・66が該期の住居跡として考えられる。土師器坏は1点出土しているが、器高の低い半球状を呈するもので、第Ⅲ期でみられた口縁部の直立または外傾するようなタイプの坏は共伴していない。須恵器坏は高台坏も含めて完形品がなく疑問も残るが、推定口径が16～17cmと大振りである。底部の調整は全面が回転ヘラケズリされる。蓋は半球状と環状鈕を有する2種類が共伴している。口径は16～17cmと坏の大きさに近い。S J 66-3の壺は口縁部が短く、肩部の張りも明瞭であることから8世紀第2四半期になる可能性がある。

第Ⅴ期（8世紀第2四半期後半～第3四半期）

S J 14・17・23・26・28・31が該期の住居跡として考えられる。須恵器坏は口径が13～14cm、器高は3・7cm前後が主流を占める。底部の調整には回転糸切り後、全面を回転ヘラケズリするものと周辺をヘラケズリする2種類が存在する。相対量は全面がヘラケズリされる土器の方が多く、口縁部も内湾気味のものが大部分を占める。全面にヘラケズリされる坏（とりわけ深身）の中にはヘラケズリが体部下端に及ぶものもあるが、量的には少ない。椀は口径16～18cm、器高は5～7cm前後の中に位置する。口縁部は直線的に表現されるものではなく、内湾気味に立ち上がる。底部の調整は図示した周辺ヘラケズリの他に全面ヘラケズリされるものが共伴する。周辺ヘラケズリされる部分は器種によって相違がみられるが、相対的には坏に比べて、椀の場合はより中心部まで削り込まれる。蓋は口径17～18cm、S J 26の蓋は肩部にアクセントがあり、坏に比べやや後出の感がある。また、S J 14ではコップ形の須恵器を伴い、これ以降第Ⅵ期でもみられる。土師器甕は緩やかな「くの字」口縁で、器壁は薄くなる。

第Ⅵ期（9世紀以降）

S J 2・3・5・6・10・23・30・47・59・60などが該期の住居跡として考えられる。これらの住居から出土した土器群は概ね9世紀前半～中頃を中心とする時期とそれ以降を中心とする時期に分類される。前者はS J 2・23、後者はS J 6・10・68などである。須恵器坏は底部調整において全面をヘラケズリ、周辺をヘラケズリ、回転台から切り離れたまま未調整のもの3種類が並存する。比率の傾向はヘラケズリから未調整へと推移するが、完全に未調整となるのは、後者の段階まで待たなければならない。また、口径に比べ底径は次第に比率が下がるため、口縁部は「逆ハの字」に開く角度が小さくなる。高台付き坏は坏と同様、口径に対して次第に底径が小さくなり、底部調整もヘラケズリから糸切り未調整へと移行する。高台部はいずれも付け高台で、周辺はナデが施される。蓋は小形化し、肩部の張りが明瞭に残る。後者はS J 47のように肩部のヘラケズリが消滅し、鈕をもたずに糸切り底の部分を天井部とするものが出現する。土師器甕は「くの字」口縁に加えて「コの字」口縁をもつものが次第に増加する。台付き甕は「コの字」口縁に近いものが出現する。さらに、口縁部が短く、胴部に最大径をもつものも共伴する。



第292図 IV～VI期の土器群

b まとめ

以上、本遺跡における住居内出土土器から集落の変遷を6期に概略して記してきたが、出土遺物には限りがあり、不十分な点は否定できない。ここでは本項で図示できなかった遺物や遺構との関連性について補足していきたい。

集落は（縄文時代中期、弥生時代後期を除く）7世紀前後に形成され、7世紀の後半には断絶してしまう。その後8世紀になって再び形成され、以後断続して10世紀頃まで営まれる。集落の形成に関しては周辺の遺跡も含め、7世紀代に活発な動きが認められる。本遺跡の南から西側にかけては6世紀後半～7世紀中葉に造営されたと考えられている三福寺古墳群、善能寺古墳群などが点在しており、従来より集落との関連性が注目されてきた。本遺跡より検出された塚の越1号墳は6世紀後半頃の築造と考えられ、周辺の住居群とはおよそ50年の時間差が考えられる。この古墳は本遺跡の遺構の検出状況や地形などから当時は古墳群の中でも最も台地の先端に位置していた中の1基と考えられる。また、最近の発掘調査では、台地の中心部で7世紀代の古墳が確認され、台地の縁辺に苦林古墳群などの6世紀後半頃の前方後円墳が造営されていることを考慮すると、古墳群は台地の縁辺から中心部へと広がり、その後に集落が縁辺周辺を中心に展開していったものと考えられる。

古墳時代後期の遺物で注目されるのは、鉄製品が多いことと須恵器の保有率が約3割に及んでいることである（破片も含む）。鉄製品は図化できたものは少ないが、須恵器と同じくらいの割合で検出された。特に集落の初期段階の住居跡に多くみられる。製品の多くは鉄鏃で、周辺の古墳の出土遺物との関連性が興味深い。また、須恵器は大半が在産で占められ、胎土には白色針状物を含む場合が多い。現在のところ、遺跡の北側の丘陵に位置する鳩山窯跡群ではこの時期に須恵器生産は開始されていないことから、舞台遺跡、立野遺跡、桜山窯跡という6世紀中頃～7世紀中葉にかけての須恵器生産が行われた南比企丘陵の東斜面の窯からの供給が考えられる。一方、遺跡の北側には越辺川の沖積地が広がっており、桑原遺跡の北側では7世紀代とみられる水田遺構が検出されている。規模等は確認できないが、低台地周辺には水田経営に適した低地が広がっている。これらのことをもとにすると、水田経営や須恵器、武具等の需給関係に集落の経済基盤が相当強固なものであったことを想定させる。

また、A区の谷地形内からは第Ⅰ期から第Ⅲ期までの遺物が多く出土しており、長期にわたって集落内の重要な場であったことを窺わせる。

奈良・平安時代の遺構ではSD1の出土遺物が興味深い。遺物は土師器と須恵器が出土しているが、土師器の多くは古墳時代後期の住居跡からの混入とみられる。須恵器は8世紀中葉の坏類が多く、すべて鳩山窯跡群産とみられ、須恵器生産の中心が赤沼周辺にあった頃の製品と考えられる。鳩山窯跡群の窯跡に符号させると、小谷B6号窯一広町B12号窯一広町B11号窯頃の製品が多い。口径は14cm、13.5cm、13cm、12.5cmの4種類に分類は可能である。図化できなかったものを含め土器破片量は約4500点と多く、周辺の該期の住居跡数では使用不可能である。同時期の遺物が確認できた掘立柱建物との関連性も十分考えられるが、掘立柱建物はやや後出の遺物も出土しており、不確定要素を多分に含んでいる。いずれにしても覆土の上層に集中する出土状況からは、編年にみら

れるほどの時間は想定しにくく、短期間に一括廃棄されたものと考えられる。

引用・参考文献

- 井上 肇 (1978)『舞台(資料編)』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第17集 埼玉県教育委員会
- 井上 肇 (1978)『舞台(本文編)』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第18集 埼玉県教育委員会
- 井上 尚明(1987)「7世紀における古代集落の変遷」埼玉県史研究 第20号 埼玉県史編纂室
- 今井 宏 (1980)『児沢・立野・大塚原』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第28集 埼玉県教育委員会
- 今井 宏 (1987)『埼玉の古代窯業調査報告書』「集落出土の須恵器と窯跡群」埼玉県立歴史資料館
- 金子 真土(1982)「北武蔵の須恵器—7・8世紀の様相について」研究紀要 第4号 埼玉県立歴史資料館
- 木津 博明(1989)『国分寺中間地域』群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書 第90集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 黒坂 禎二(1989)『上組Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第80集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 小淵 良樹他(1982)『宮ノ越遺跡』埼玉県遺跡調査会報告 第44集 埼玉県遺跡調査会
- 酒井 清治(1982)『緑山』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第19集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 酒井 清治(1987)「埼玉県の須恵器の変遷について」『埼玉の古代窯業調査報告書』埼玉県立歴史資料館
- 酒井 清治(1991)「関東の須恵器」『古墳時代の研究』雄山閣
- 谷井 彪他(1985)「赤沼地区第14支群の発掘」研究紀要 第7号 埼玉県立歴史資料館
- 中村 倉司(1988)『小山ノ上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第70集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 昼間 孝志(1989)『金井遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第86集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 水口由紀子(1989)「いわゆる比企型坏の再検討」東京考古 第7号 東京考古談話会
- 渡辺 一 (1988)「成果と問題点」『鳩山窯跡群Ⅰ』鳩山窯跡群遺跡調査会 鳩山町教育委員会
- 渡辺 一 (1989)「小谷B窯跡Ⅱ期と前内出窯跡の年代—天平5年銘木簡を手がかりに—」『討論「奈良時代前半の須恵器編年とその背景—前内出窯跡その後—」記録集』埼玉考古第26号 埼玉考古学会

(2) 塚の越遺跡出土の青銅製品について

塚の越遺跡からは五鈷杵と神像が各1点出土した。両例とも通常の遺跡から出土する考古学上の遺物としては極めて稀なものである。ここではその特徴を明らかにし派生する若干の問題について触れておきたい。

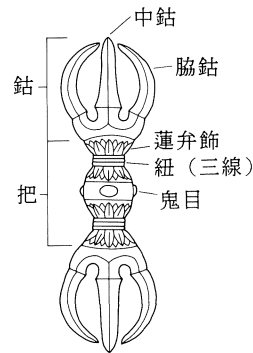
a 五鈷杵

五鈷杵は残長4.45cm、重量15gで把の下半を欠く。鑄銅製。一応五鈷杵としたが、欠失部に鈴身が付けば五鈷鈴となり何れか判断しかねる。中鈷先端から鬼目に相当する把中央部突帯までの長さを倍したものを仮に全長とすると7.5cmとなり、通常の鈷杵または鈷鈴の $\frac{1}{2}$ から $\frac{1}{3}$ 程度の大きさしかなく、果たして実用に供されたものか疑問を抱かざるを得ない。

この五鈷杵の特徴を列挙すれば、①鈷部の長さよりも把部の復元長の方が長い。②中鈷先端は剣先状の鋭さはなく、断面は正方形を呈し匙面取りはみられない。③脇鈷先端は独立せず、中鈷に鑄着する。④中鈷及び脇鈷基部に通常見られる嘴形や突起は省略されている。⑤把中央の鬼目に相当する位置（仮に鬼目部とする）には鬼目と称される円形突起或いは鬼面が鑄出されるのを通例とするが、本例にはそれがなく平行線に置き換えられている。⑥把部の蓮弁は細密な沈線で表現されている。これは鑄出されたものではなく、鑄造後毛彫り手法により鑄刻されたものと考えられる。

さて、鈷杵は金剛杵と呼ばれ元来インドの武器が密教法具として取入れられたものといわれている。日本においては、真言・天台を始めとする密教の隆盛をみる平安時代以降に一般化する。したがって時期的に古いものには武器としての性格を備えたものが多く、逆に時代が降るにつれて形式化するという。独鈷杵について各時代の特徴を挙げれば、平安時代後期のものは鬼目が大きく、鈷の断面を匙面取りとするものが多い。また鈷部長が把長よりも長い傾向にある、即ち武器としての本来の性格を失っていない段階といえる。鎌倉～南北朝期にあつては鬼目の小形化と、鈷の匙面の消失、把部長よりも鈷部長が縮少する傾向を示す。さらに室町時代に至ると、蓮弁の表現が脆弱化し、鈷先も鈍重なものが多くなるという。三鈷杵では南北朝期に把の断面が楕円形になり、室町時代には扁平度を強める。また該期以降脇鈷の先端が鑄着いて三鈷の機能が忘れ去られるようになるという（岡崎1982）。

本例は五鈷杵であるが、基本的な変化の方向性は独鈷杵や三鈷杵と同一であると考えられる。先に挙げた①から⑥までの特徴を当てはめてみると把部断面こそ扁平化していないものの鬼目の消失、脇鈷の鑄着、また鈷基部の突起省略、蓮弁の退化等、本例には古い要素は全く見当たらない。寧ろ退化形式の諸特徴が凝縮されているといっても良い。勿論、ミニチュア製品故に細部がデフォルメされた可能性も考慮する必要はあろうが、遺物の特徴から見る限り南北朝期以前に遡るもので



第293図 鈷杵の部分名称
(仏具大事典より)

はなかろう。

次いで出土状態から若干の検討を加えたい。五鈷杵は1号火葬墓の中層から出土した。欠損した残余の部分が発見されていないことや底面よりも高い位置から出土したことを考えると混入の疑いも否定しきれないが、骨片や焼土に混じって出土し、対応層に攪乱が見られないとの調査時の所見と、把の一部が白っぽく変色し蓮弁を被膜状に覆っていることを火を受けたためだと解釈し、ここでは当初より遺構に伴ったものと考えておきたい。鉄釘が3本伴出することを積極的に評価すれば五鈷杵は遺骸と共に木棺に納められた、または副葬品として木箱に入れられたとする解釈も可能であろう。

さて、火葬墓は楕円形または長方形の平面形をもち一長辺に突出部を有する形態で最近類例が増えつつある。鶴ヶ島町お寺山遺跡、所沢市野竹遺跡、熊谷市樋の上遺跡、花園町小前田古墳群、川本町鹿島古墳群、浦和市北宿遺跡、児玉町ミカド遺跡、羽生市念仏堂遺跡等県下全域に広がっている。この種の火葬墓の性格としては、文字通り遺骸を直接火葬したまま埋葬する火葬墓とする（斉藤1985）ものと一度埋葬した遺骸の一部の骨を上げ再度火葬した改葬墓とする説（小川1986）、単なる荼毘跡（火葬跡）とする説（金井1984）に分かれ意見の一致を見ていない。また、このタイプの火葬墓は遺物をほとんど伴わないことが正確な年代比定をより困難にしている。遺物を伴った例としては鶴ヶ島町お寺山遺跡E地点No.21火葬墓から北宋銭1枚、浦和市北宿遺跡4B号火葬墓で瀬戸・美濃系折縁皿1枚と北宋銭4枚が出土、所沢市野竹遺跡2号土壇から北宋銭・明銭6枚、同13号土壇から唐・明銭5枚、同14号土壇から北宋銭4枚と針1本、熊谷市樋の上遺跡2号炉から青磁1点と北宋銭1枚が出土した例を挙げることができる。基本的に古代の遺物を伴わないこと、寛永通寶（初鑄1623年）を伴う例がなく宋銭・明銭等の渡来銭が主体を占めること、北宿遺跡の瀬戸・美濃系皿は大窩Ⅱ期に位置付けられることから、この種の火葬墓の存続時期としては従来からの指摘通り中世、おおよそ13世紀乃至14世紀から16世紀頃と考えられる。また少ないながら銭や陶磁器類を副葬する例があることは、全てが荼毘跡ではなく火葬墓としての機能していたものも存在したことを窺わせる。本例はこうした副葬品を伴う火葬墓として貴重な一例を追加したことになる。五鈷杵の年代もそれ自体の形式的特徴に加え、上記火葬墓の存続時期から推して室町時代、即ち15～16世紀とするのが妥当と考える。

鈷杵の発掘資料として、管見に触れたものとしては青森県浪岡城出土例がある（青森県埋蔵文化財調査センター1990）。鑄銅製の五鈷杵で、細部は不明であるが写真図版で判断する限り脇鈷が中鈷に鑄着しているように見える。また蓮弁飾りと鬼目は鑄刻されているように見受けられ、把部の長さよりも鈷部の長さの方が短く全体的に退化的な様相が現れている。大きさも10cm程度の小形品であることなど塚の越例と共通する要素が多い。遺構に伴っていないために時期は限定できないが、凡そ15世紀中葉から16世紀代という時間幅の中で納まるとされ（註1）、塚の越遺跡出土五鈷杵の年代比定の傍証資料となりうるものである。

b 神像

青銅製神像も鑄造製品である（第289図）。像高6.4cm、重量55gを測る小立像でほぼ完存する。

出土状況等の詳細は不明。頭頂から台座まで一鑄に造り、外型はおそらく体側線で合わせた前後の合わせ型で製作されたものと推定されるが、バリはきれいに浚われている。像内は全て鑄銅で埋められ台座裏にも中空部は存在しない。小形品であるがために内型は使用されず、込型技法によって製作された可能性が高いものと考えられる。細部の表現にシャープさが見られないのは鑄造技術というよりも鑄型の原形に規定されたものかも知れない。表面に遺存する部位では黒色を呈し漆が塗布されていた可能性も想定する必要があるが今回鑑定は行なっていない。

像は朝廷の貴族の礼装を示すもので束帯形と呼ばれる形式である。頭部には冠を戴くが、通常見られる巾子は当初より表現されていない。両手は袖口を合わせて拱手し笏をもつ。衣服は両脇に長く袖を垂れた大袖の袍を着けている。像身と台座は沈線で区画され、正面中央には鈍いながら沓と思われる表現がなされている。顔の表現は全体に凹凸に乏しく特に目は現状では確認できず耳も剥落している。

神道ではもともと人間的な像は必要とされなかったが、平安時代以降神仏習合が進んだ結果仏像と同様神像の製作が盛行することとなった（大場1974）。神像には座像・立像・半跏像等がありほとんどは座像である。また形態は僧の形を模した僧形、朝廷貴族の礼装を示す束帯形に分かれ男神・女神像の区別がある。技法的には木彫り製品がほとんどを占め、大きさとしては等身大を原則とし11世紀以降次第に小形化する傾向を示すという（井上1974）。これらの一般的な特徴から本例を見ると、鑄造製のしかも立像である点に際立った特色がある。また非常に小型であり仏像でいえば胎内仏あるいは持仏程度の大きさしかないことも異色である。何れにせよ一般的な神像の特徴からは大きく逸脱しており、寡聞にして類例を知らない。出土状況が不明なこともあり製作時期を限定することも難しいが、古代に遡る要素はない。中世後期から近世に掛かる時期の所産と推定しておきたい。ミニチュアともいえるこの神像をどのような施設で如何に使用されたかといった問題は不明のままである。類例の収集を進める中で合わせて検討していきたい。

以上青銅製五鈷杵並びに神像についてその概略を記してきた。両例とも鑄銅製の超小形品であることに特徴があり、その製作時期は中世後期を中心とするものと推定された。最近塚の越遺跡の東方約1kmに所在する金井遺跡（B区）が当事業団により調査された。そこでは鉄鍋等の日常雑器の他梵鐘・火舎・飾り金具・小仏像等の鑄型が出土し鉄・銅兼業の鑄造遺跡であること、また宗教用具の製作も行なっていたことが明らかとなった。未だ整理を実施していないために詳細は不明であるが時期的には凡そ13世紀後半から15世紀頃にかけて営まれたものと推定される。また塚の越遺跡の上流約2kmの鳩山町小用にも鑄造遺跡が存在することも知られている（清水1978）。近世鑄物師と考えられているが上限については必ずしも明らかではない。金井遺跡とは越辺川流域の至近距離に存在しておりなんらかの繋がりがあった可能性も考慮される。全ては今後の研究に待つ他はないが塚の越遺跡から出土した五鈷杵と神像の推定製作年代もこうした鑄造遺跡の活動年代と重なる可能性が高く、その関係には十分注意を払う必要がある。（富田和夫）

註1 浪岡町教育委員会木村浩一氏の御教示による。

引用・参考文献

- 青木義脩 (1983)『北宿、馬場北、馬場東、馬場・小室山遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書
第24集 浦和市遺跡調査会
- 青森県教育委員会 1990『図説ふるさと青森の歴史』
- 石岡憲雄 (1980)『一ノ入遺跡』埼玉県遺跡発掘調査報告書第32集 埼玉県教育委員会
- 井上 正 (1974)「神像と狛犬」『神道考古学講座』第四巻 歴史神道期 雄山閣
- 大場磐雄 (1974)「総説」『神道考古学講座』第四巻 歴史神道期 雄山閣
- 岡崎譲二 (1982)「七 密教法具」『仏具大事典』鎌倉新書
- 小川良祐 (1986)『樋の上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第59集 埼玉県埋蔵文化財調査事業
団
- 景山春樹 (1967)「神道美術」『日本の美術』第18号 至文堂
- 香取秀真 (1976)『金工史談』正篇・続篇 国書刊行会
- 金井浩雄 (1984)『椿峰遺跡群』所沢市文化財調査報告書棍12集 所沢市教育委員会
- 埼玉県 (1989)『新編埼玉県史 資料編9』中世5 埼玉県
- 齊藤 稔 (1985)『お寺山遺跡』鶴ヶ島町教育委員会
- 佐々木保俊 (1979)『針ヶ谷遺跡郡Ⅱ』富士見市遺跡調査会調査報告第7集 富士見市遺跡調査会
- 清水与四次 (1978)『小用村上小用村鋳物師の研究』
- 瀧瀬芳之 (1986)『小前田古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第58集 埼玉県埋蔵文化財調査事
業団
- 横川好富 (1973)『念仏堂遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査報告第17集 埼玉県遺跡調査会

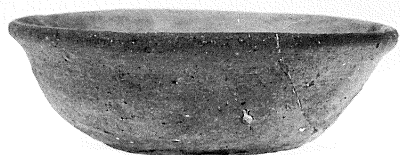
写真図版



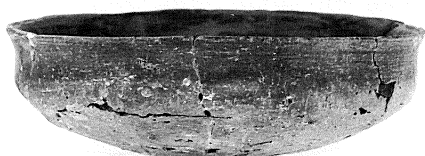
SJ 1-3



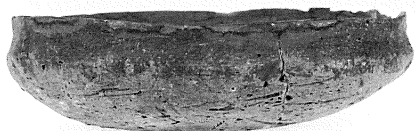
SJ 2-1



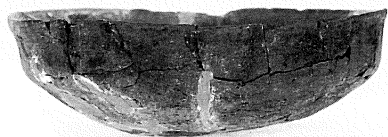
SJ 3-1



SJ 7-5



SJ 7-1



SJ 7-6



SJ 1-8



SJ 1-9



SJ 7-7



S J 7-8



S J 13-1



S J 14-6



S J 14-1



S J 14-5



S J 14-8



S J 15-1



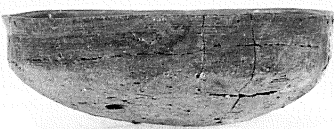
S J 16-2



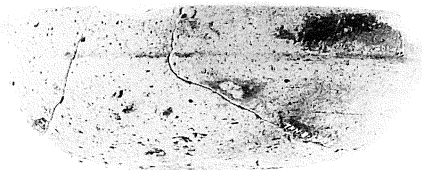
S J 21-3



S J 21-2



S J 21-4



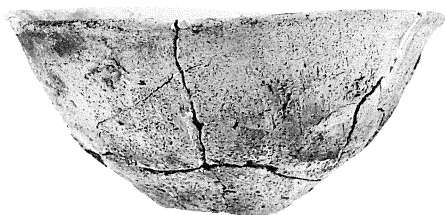
S J 21-6



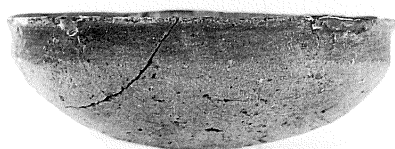
S J 21-12



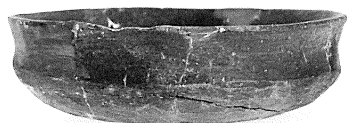
S J 21-11



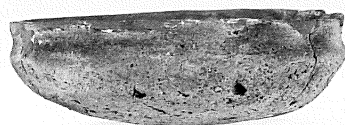
S J 21-7



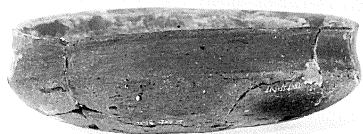
S J 24-6



S J 22-1



S J 24-2



S J 25-1



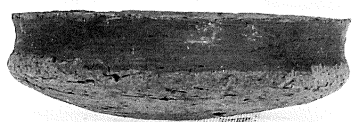
S J 24-1



S J 29-2



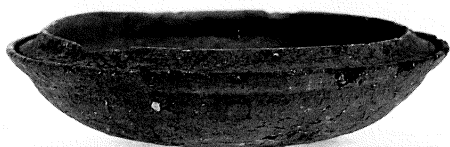
S J 24-5



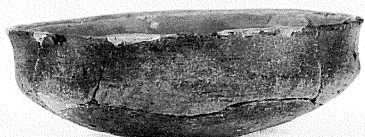
S J 32-1



S J 32-3



S J 42-1



S J 50-1



S J 50-4



S J 50-5



S J 50-2



S J 43-2



S J 50-13



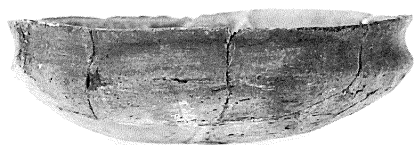
S J 50-10



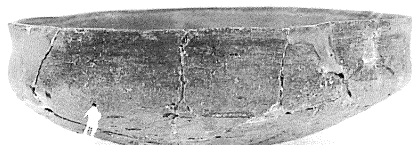
S J 50-18



S J 50-11



S J 51-1



S J 51-2



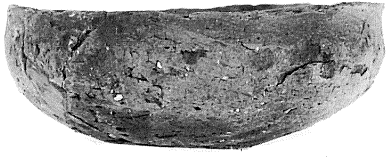
S J 57-10



S J 57-11



S J 57-12



S J 57—4



S J 57—1



S J 57—5



S J 58—3



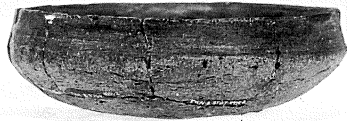
287—5



S J 67—1



S J 68—1



S J 69—1



S J 66—3



S J 69—2



S J 71-5



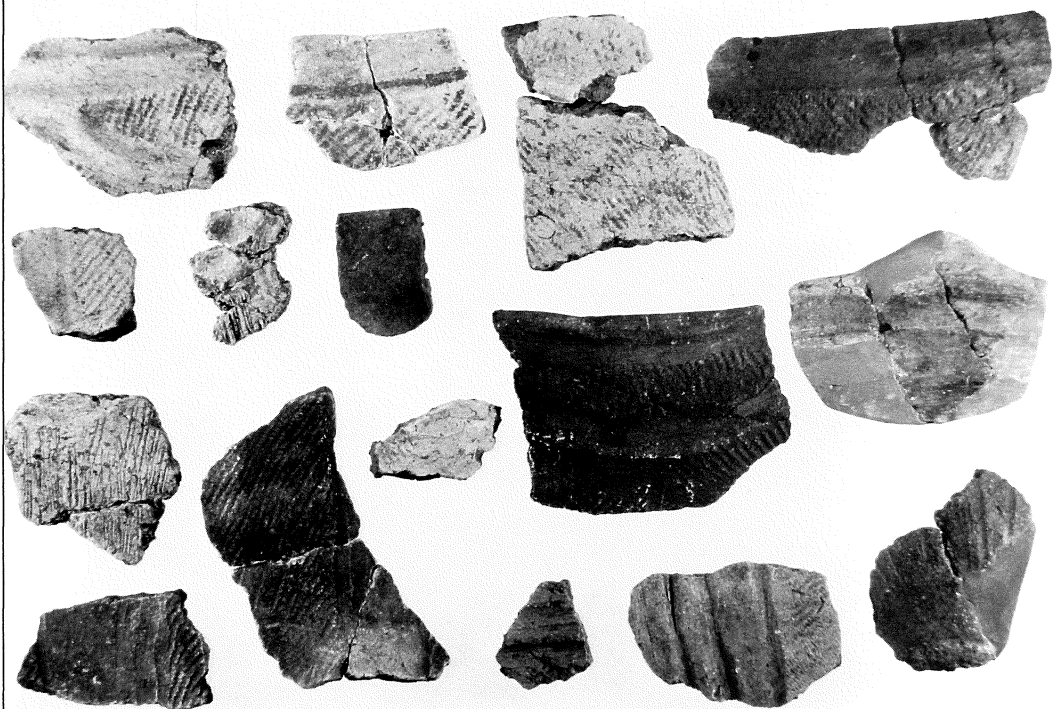
S J 71-4



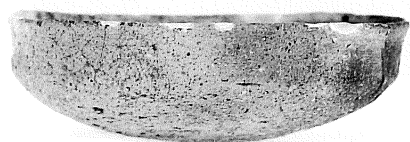
S J 39-2



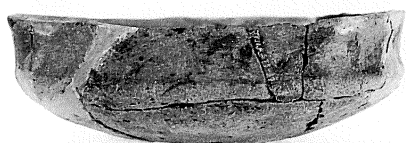
S J 27-4



S J 27



S J 73-1



S J 77-4



S J 77-3



S J 77排水構内土壙-2



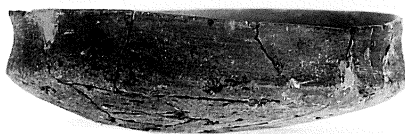
S J 77排水構内土壙-7



S J 77排水構内土壙-3



S J 77-6



S J 77-2



S J 77排水構内土壙-8



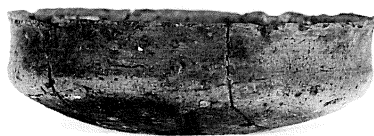
S J 77排水構内土壙-9



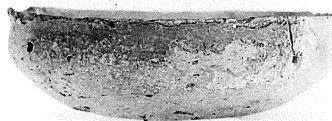
S J 77-9



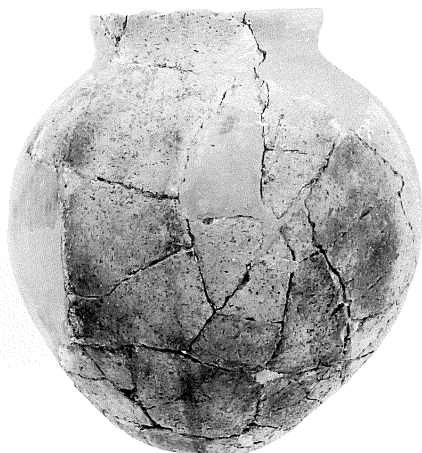
S J 77排水構内土壙—14



S J 78—1



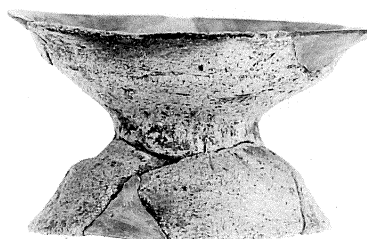
S J 78—2



S J 78—19



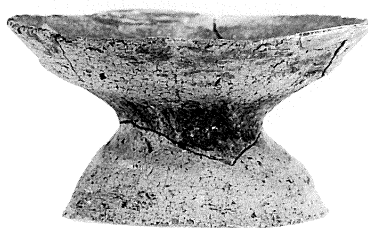
S J 78—7



S J 78—13



S J 80—3



S J 78—14



263—15



SE 3—9



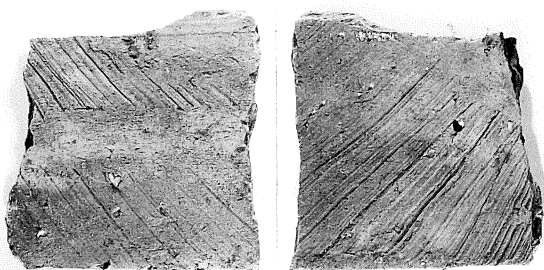
SE 3—6



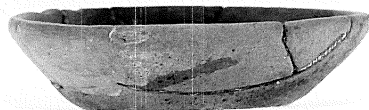
SE 3—4



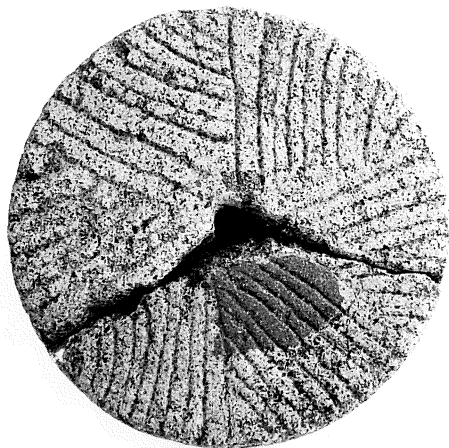
SE 3—5



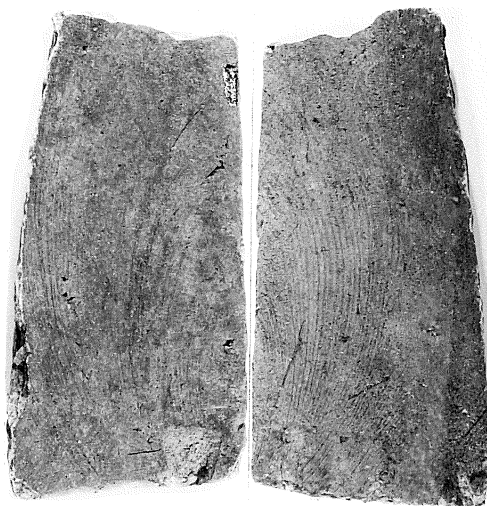
SE 17—3



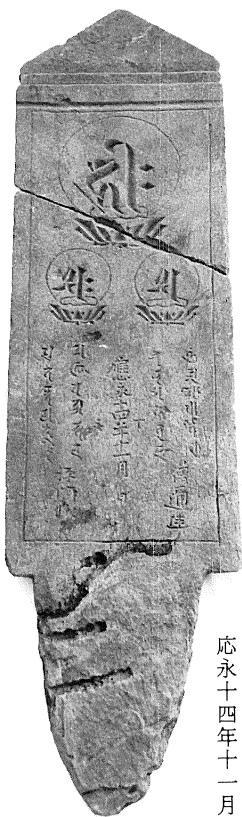
263—12



SE 6—1



SE 3—13



応永十四年十一月 日

SE18-2



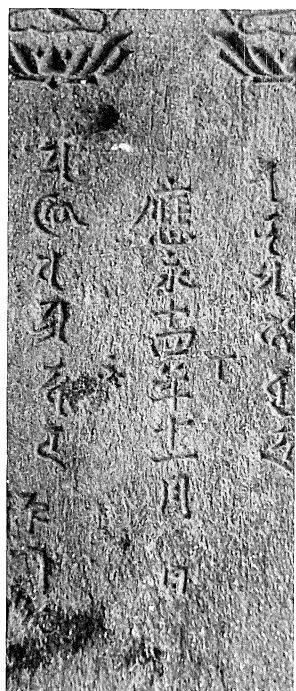
正長二年
妙意禪尼

SE18-3



淨惠
應永二年十月十三日
禪尼

SE18-7





SE17-1

法心
 禪尼
 応永十三年十二月十三日



SE17-2

妙心
 道修
 日
 応永十二年二月



SE18-4

禪尼
 正長二年二月道修

妙心
 禪尼
 正長二年一月九日



SE18-5

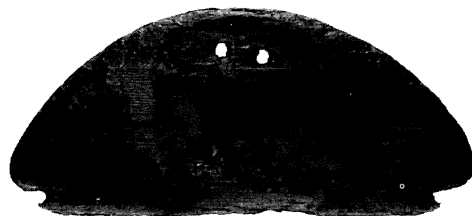


SE18-8

妙心
 禪尼
 応永十四年十二月七日



S E 35—2



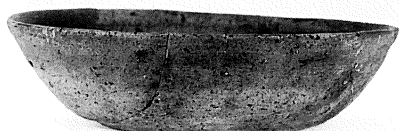
S E 27—4



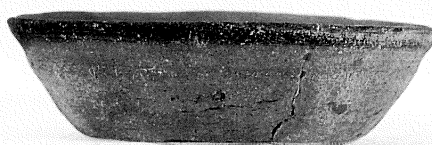
S D 1—42



S D 1—40



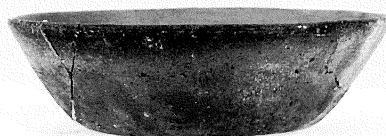
S D 1—45



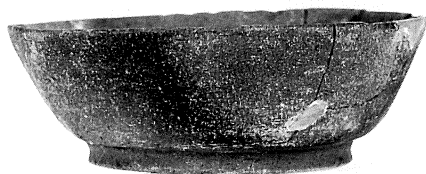
S D 1—32



S D 1—49



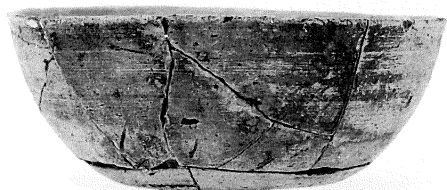
S D 1—58



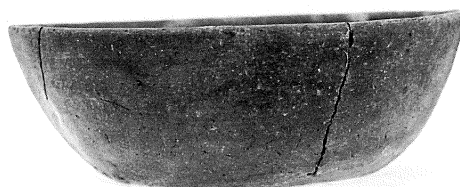
S D 1—71



S D 1—84



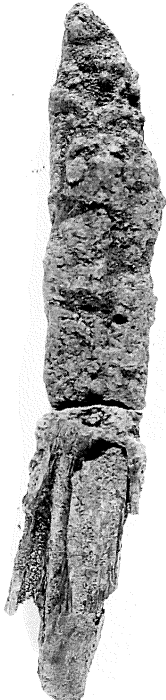
S D 1—77



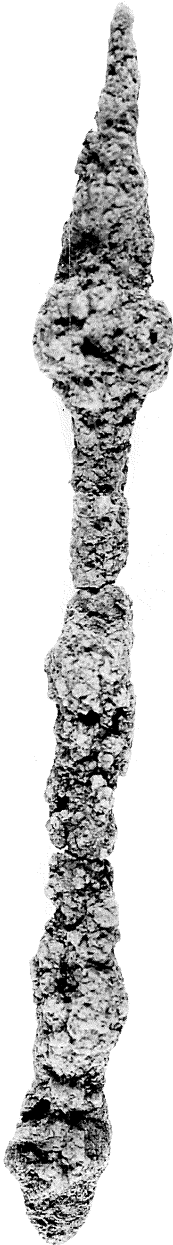
S D 1—78



SD 1—90



S J 41



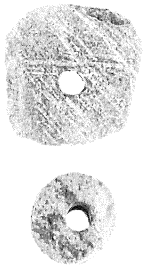
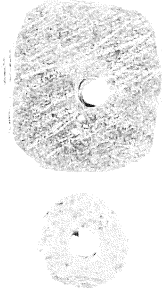
S J 40



SD 3—6



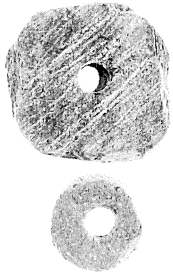
S J 56

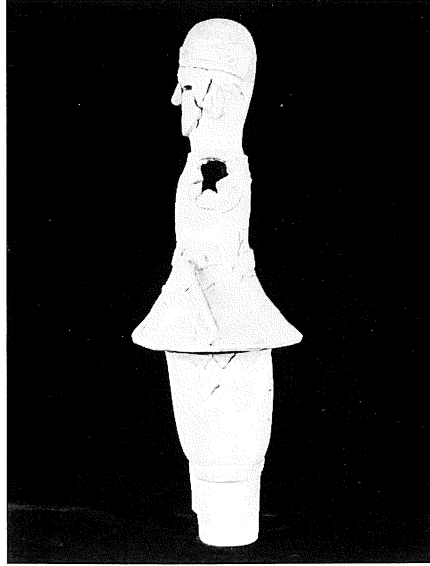


S J 56

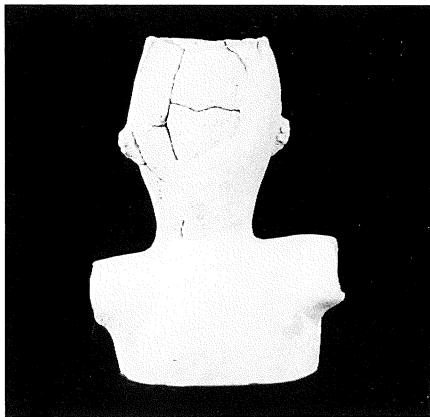
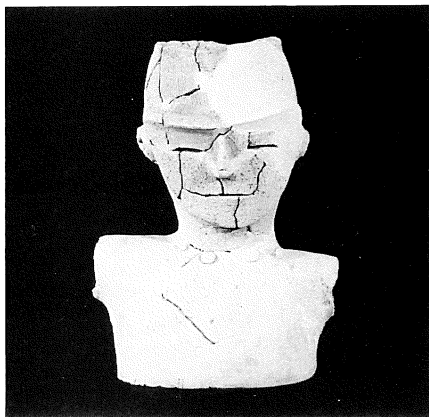
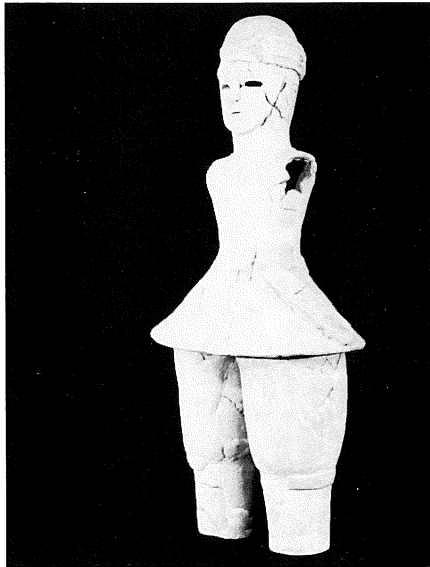


S J 41

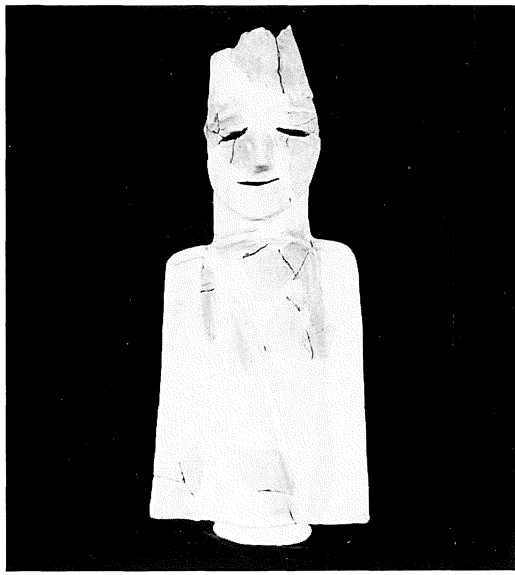




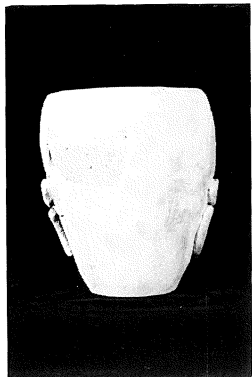
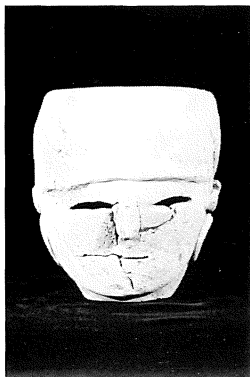
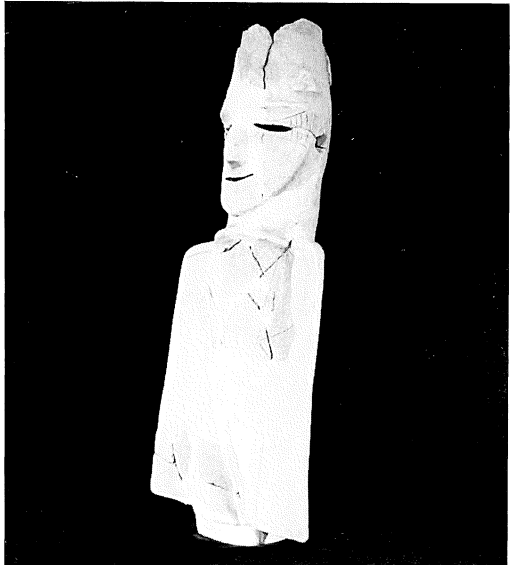
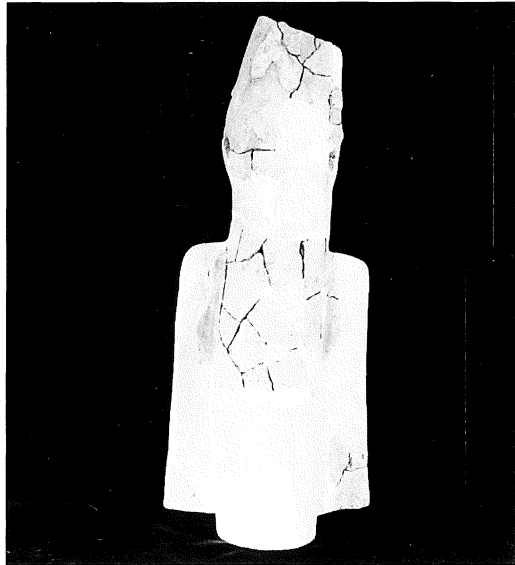
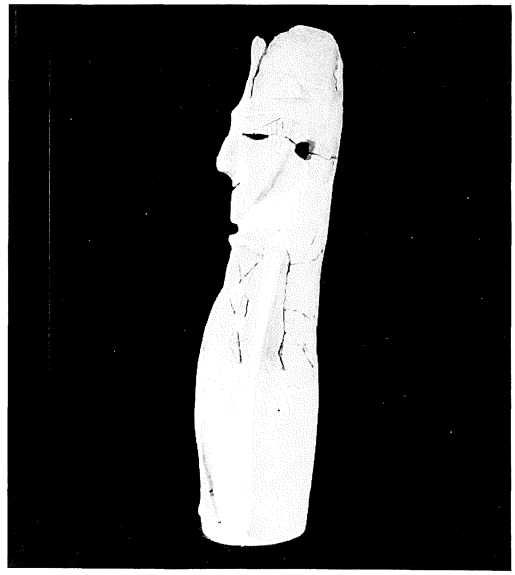
ST1
正装男子
人物埴輪



ST1
女子
人物埴輪



ST 1 盾持人埴輪



ST 人物埴輪



ST 1 円筒埴輪



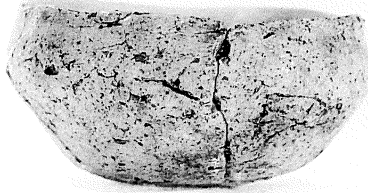
284—6



284—10



284—20



284—32



290—1



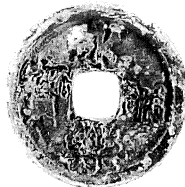
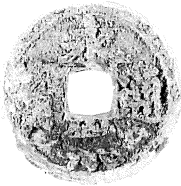
286—57



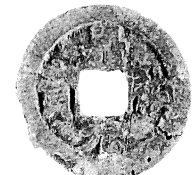
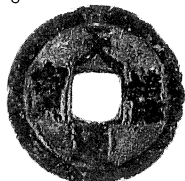
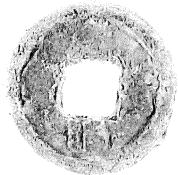
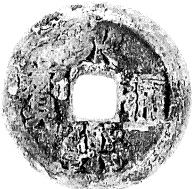
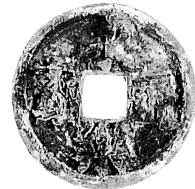
290—2



290—3



209—6 ~ 8



264—1 ~ 5

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第101集

塚の越遺跡

住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

— III —

平成3年3月25日 印刷

平成3年3月30日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 埼玉県大里郡大里村大字箕輪字船木884

電話 (0493) 39-3955

FAX (0493) 39-3579

印刷 (株) きょうせい

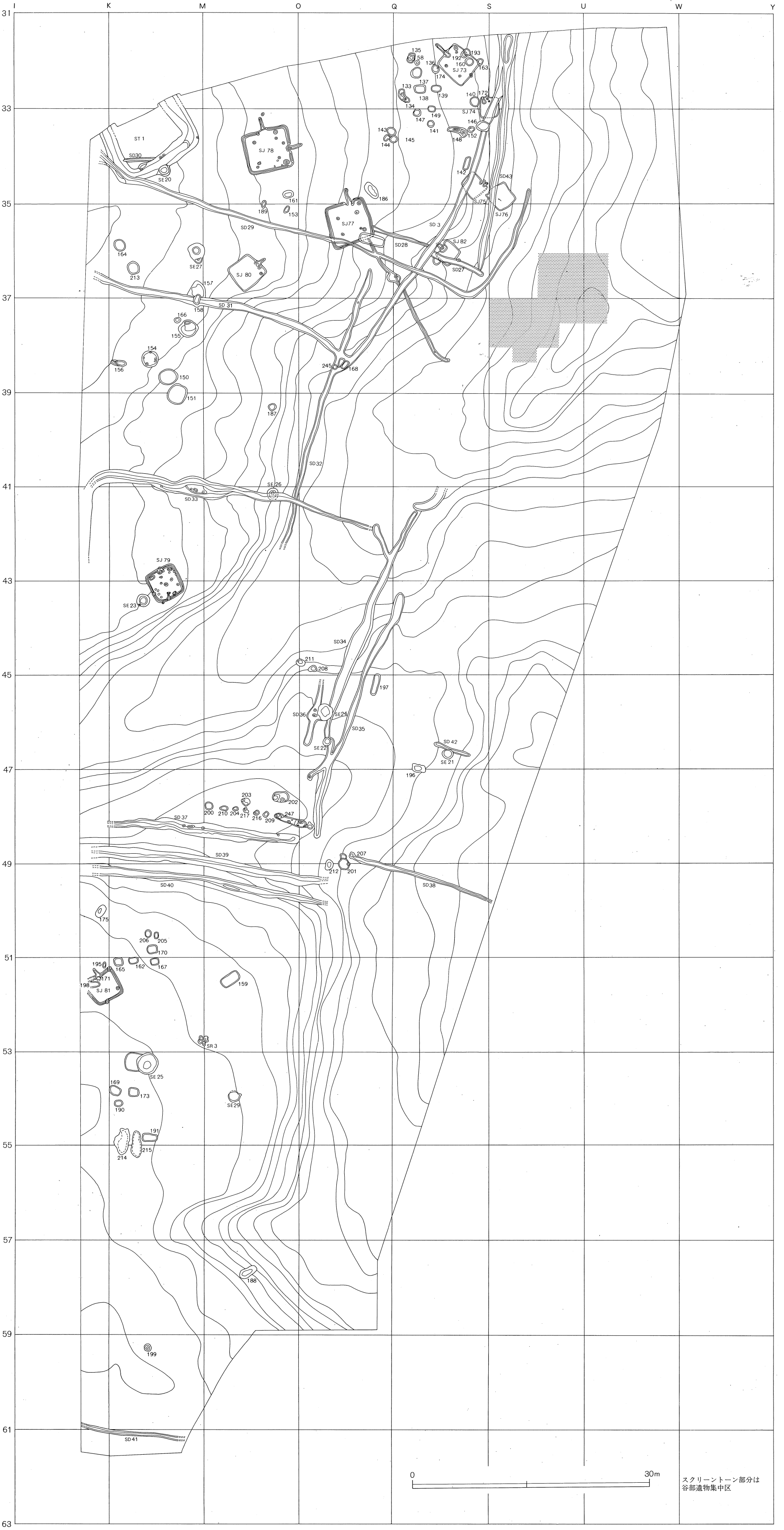
〒162 新宿区西五軒町4-2

電話 (03) 3268-2141



付図(1) 塚の越遺跡全測図 (400分の1)

Y=42.3



付図(2) 塚の越遺跡全測図(400分の1)